

あら お みなみ

荒尾南遺跡 B 地区 I

(第1分冊)

2 0 1 2

岐阜県文化財保護センター

序

岐阜県大垣市とその周辺を含む西濃地域は、東海地方の中でも、弥生・古墳時代の遺跡が集中する地域として知られます。肥沃な平野と大小の河川を有する西濃地域は、古来、北陸・近畿と東海を結ぶ交通の要衝でもあり、奈良時代以降も国分寺や国分尼寺、国衙、不破関など、国家の重要な機関が置かれたため、古代を通じ、美濃国の中心地であり続けました。

荒尾南遺跡は、大垣市中心部の西方にある遺跡で、弥生・古墳時代の遺跡としては、県下でも最大級の規模を有します。過去の調査では、3艘の船が表現された土器や、人面が描かれた土器が出土し、全国的にも大きな話題を呼びました。

このたび、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所による東海環状自動車道（養老JCT～大垣西IC）に伴う埋蔵文化財発掘調査業務に伴い、工事予定地内の埋蔵文化財の記録保存を図るため、再び荒尾南遺跡の発掘調査を実施しました。

今回の発掘調査では、弧帶文とよばれる幾何学的な文様を表現した土器が出土しました。他にも、縄文時代晚期から中世までの多種多様な遺構とともに大量の土器や石器などの遺物が出土し、県内有数の大規模な遺跡であることが明らかになってきています。このうち本書は平成18年度から平成21年度に実施した「荒尾南遺跡B地区」の発掘調査の成果をまとめたものです。

当遺跡の調査成果によって、黎明期の古代美濃を探る上で重要な知見を得られたことは真に喜ばしい限りのことあります。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、多大な御理解・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、大垣市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成24年2月

岐阜県文化財保護センター
所長 高橋 照美

例言

- 1 本書は大垣市荒尾町・桧町に所在する荒尾南遺跡（岐阜県遺跡番号21202-08568）B地区の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、東海環状自動車道（養老JCT～大垣西IC）建設に伴うもので、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、平成20年度までは（財）岐阜県教育文化財団文化財保護センター、平成21年度からは岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘調査及び整理作業は、八賀晋三重大学名誉教授及び山田昌久首都大学東京教授の指導のもとに実施した。荒尾南遺跡は南北に長く、規模も大きな遺跡であるため、便宜的に北からA地区、B地区、C地区に大別して整理作業を実施している。本書では、平成18年度から21年度に行ったB地区（遺跡中央部）の発掘調査（面積15,396m²）について、平成19年度から21年度に整理作業を実施してまとめた。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当は、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は林直樹、藤田英博、宮宮隆司、三島誠が行った。また、編集は三島が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、測量などの業務と、出土遺物の洗浄・注記は、株式会社イビソク（平成18年度）、国際航業株式会社（平成19年度）、株式会社アーキジオ（平成20年度）、株式会社イビソク（平成21年度）に委託して行った。
- 7 整理作業における土器実測図デジタルトレースの一部は、株式会社イビソク（平成20年度）、株式会社アルカ（平成21年度）に、金属製品・木製品・石製品の実測及びデジタルトレースの一部は、株式会社フジヤマ（平成19年度）、株式会社イビソク（平成20年度）、株式会社太陽測地社（平成21年度）、ナカシャクリエイティブ株式会社（平成22年度）に委託して行った。
- 8 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 9 自然化学的分析は、株式会社パレオ・ラボ、吉田生物研究所に委託して行い、その結果は第5章に掲載した。
- 10 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。（敬称略・五十音順）
青木哲哉、赤澤徳明、赤塚次郎、石井智大、石川ゆずは、石黒立人、石野博信、伊丹徹、伊藤正人、伊庭功、肩崎由、大塚初重、大野薫、恩田知美、河合章行、川崎志乃、鬼頭剛、黒坂貴裕、黒沢浩、黒須恵希子、下濱貴子、鈴木元、鈴木とよ江、鈴木正貴、高木宏和、高野陽子、永井宏幸、中井正幸、中野晴久、長瀬治義、原田幹、林大智、早野浩二、樋上昇、久田正弘、深澤芳樹、福永伸哉、藤川智之、藤澤良祐、藤田慎一、穂積裕昌、堀木真美子、豆谷和之、宮腰健司、森下章司、矢野健一、渡邊博人、大垣市教育委員会
- 11 本文中の方位は、世界測地系の座標北を示し、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系で表している。
- 12 土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄2005・2007『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 13 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目次（第1分冊）

序	
例言	
目次	
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
第2章 遺跡の環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	9
第3節 過去の調査	11
第3章 調査の成果	14
第1節 現地形の状況	14
第2節 基本層序	14
第3節 遺構の概要	16
第4節 遺物の概要	19
第5節 西部	46

報告書抄録

第2分冊 目次	
第3章 調査の成果	
第6節 東部	
第3分冊 目次	
遺物観察表	
第4章 案遺跡	
第1節 調査に至る経緯	
第2節 遺跡の環境	
第3節 基本層序	
第4節 遺構と遺物	
第5節 まとめ	
第5章 自然科学分析	
第1節 分析の概要	
第2節 放射性炭素年代測定	
第3節 荒尾南遺跡方形周溝墓埋土及び、大溝埋土、水田の花粉分析	
第4節 荒尾南遺跡B地区東部のプラント・オバール分析	
第5節 荒尾南遺跡B地区出土木製品の樹種同定	
第6章 総括	
第1節 遺構・遺物の検討	
第2節 遺構及び遺物包含層出土石器の分布について	
参考文献	
遺構全体図分割図	
第4分冊 目次	
写真図版	

挿図目次

図 1 遺跡位置図	1	図 55 SB103遺物実測図（3）	81
図 2 荒尾南遺跡の調査地区位置図	3	図 56 SB103遺物実測図（4）	82
図 3 B地区調査地点位置図	4	図 57 SB103遺物実測図（5）	83
図 4 囲辺遺跡位置図	10	図 58 SB103遺物実測図（6）	84
図 5 過去の調査位置図	12	図 59 SB104遺構図	85
図 6 08_2地点-06_3地点-06_10地点北壁土層図	15	図 60 SB104遺物実測図	86
図 7 遺構断面の形状模式図	18	図 61 SB105遺構図	87
図 8 I～VII期土器分類図①	22	図 62 SB105遺物実測図	88
図 9 I～VII期土器分類図②	23	図 63 SB106遺構図	89
図 10 I～VII期土器分類図③	24	図 64 SB106遺物実測図	89
図 11 I～VII期土器分類図④	25	図 65 SB107遺構図	91
図 12 I～VII基土器分類図⑤	28	図 66 SB107遺物実測図	91
図 13 I～VII期土器分類図⑥	30	図 67 SB108遺構図	92
図 14 I～VII期土器分類図⑦	31	図 68 SB108遺物実測図	93
図 15 I～VII期土器分類図⑧	33	図 69 SB109遺構図（1）	94
図 16 I～VII期土器分類図⑨	35	図 70 SB109遺構図（2）	95
図 17 I～VII期土器分類図⑩	38	図 71 SB109遺物実測図	95
図 18 I～VII期土器分類図⑪	40	図 72 SB110遺構図	96
図 19 I～VII期土器分類図⑫	42	図 73 SB110遺物実測図	96
図 20 I～VII期土器分類図⑬	43	図 74 SH004遺構図	100
図 21 方形周溝墓位置図	46	図 75 SH005遺構図（1）	101
図 22 SZ050遺構図（1）	47	図 76 SH005遺構図（2）	102
図 23 SZ050遺構図（2）	48	図 77 SA003遺構図	103
図 24 SZ050遺物実測図（1）	49	図 78 SH005～SA003遺物実測図	104
図 25 SZ050遺物実測図（2）	50	図 79 B地区西部主な溝跡位置図	105
図 26 SZ051遺構図（1）	52	図 80 SD0421遺構図	106
図 27 SZ051遺構図（2）	53	図 81 SD0421遺物実測図	107
図 28 SZ051遺物実測図（1）	54	図 82 SD0433～SD0436遺構図	108
図 29 SZ051遺物実測図（2）	55	図 83 SD0433遺構図（1）	109
図 30 SZ051遺物実測図（3）	56	図 84 SD0433遺構図（2）	110
図 31 SZ052遺構図	57	図 85 SD0433遺構図（3）	111
図 32 SZ052遺物実測図	58	図 86 SD0433遺構図（4）	112
図 33 SZ053遺構図	59	図 87 SD0433遺物実測図（1）	113
図 34 SZ053遺物実測図（1）	60	図 88 SD0433遺物実測図（2）	114
図 35 SZ053遺物実測図（2）	61	図 89 SD0433遺物実測図（3）	115
図 36 SZ054遺構図	62	図 90 SD0433遺物実測図（4）	116
図 37 SZ054遺物実測図	63	図 91 SD0433遺構図（5）	118
図 38 壁穴住居跡位置図	64	図 92 SD0433遺構図（6）	119
図 39 SB098遺構図	65	図 93 SD0433遺物実測図（5）	120
図 40 SB098遺物実測図	66	図 94 SD0433遺物実測図（6）	121
図 41 SB099遺構図	67	図 95 SD0433遺物実測図（7）	122
図 42 SB099遺物実測図	68	図 96 SD0433遺物実測図（8）	123
図 43 SB100遺構図	69	図 97 SD0433遺物実測図（9）	124
図 44 SB100遺物実測図	70	図 98 SD0433遺構図（7）	125
図 45 SB101遺物実測図	70	図 99 SD0433遺構図（8）	126
図 46 SB101遺構図	71	図 100 SD0433遺構図（9）	127
図 47 SB102遺構図（1）	73	図 101 SD0433遺構図（10）	128
図 48 SB102遺構図（2）	74	図 102 SD0433遺物実測図（10）	129
図 49 SB102遺物実測図（1）	75	図 103 SD0433遺物実測図（11）	130
図 50 SB102遺物実測図（2）	76	図 104 SD0433遺物実測図（12）	131
図 51 SB103遺構図（1）	77	図 105 SD0433遺物実測図（13）	132
図 52 SB103遺構図（2）	78	図 106 SD0433遺物実測図（14）	133
図 53 SB103遺物実測図（1）	79	図 107 SD0433遺物実測図（15）	134
図 54 SB103遺物実測図（2）	80	図 108 SD0433遺構図（11）	135
		図 109 SD0433遺構図（12）	136

图110 SD0433遺構図 (13)	137
图111 SD0433遺物実測図 (16)	138
图112 SD0433遺物実測図 (17)	139
图113 SD0433・SD0434・SD0436遺物実測図 (18)	140
图114 SD0427遺構図	141
图115 SD0427遺物実測図	142
图116 SD0431遺構図	143
图117 SD0431遺物実測図	143
图118 SD0420・SD0430遺構図	145
图119 SD0430遺物実測図	145
图120 SD0423遺構図	146
图121 SD0423遺物実測図	147
图122 SD0440遺構図	148
图123 SD0440遺物実測図	149
图124 SD0419・SD0424・SD0425遺構図	150
图125 SD0419・SD0424・SD0425遺物実測図	151
图126 SD0413・SD0416遺構図	152
图127 SD0413・SD0416遺物実測図	153
图128 SD0428遺構図	154
图129 SD0428遺物実測図	154
图130 SD0415遺構図	155
图131 SD0415遺物実測図	155
图132 SD0414遺構図	156
图133 SD0414遺物実測図 (1)	157
图134 SD0414遺物実測図 (2)	158
图135 SD0050・SD0422遺構図	159
图136 SD0050遺構図	160
图137 SD0050遺物実測図 (1)	161
图138 SD0050遺物実測図 (2)	162
图139 SD0050遺物実測図 (3)	163
图140 SD0422遺構図	164
图141 SD0422遺物出土状況図	165
图142 SD0422土器集中区出土状況図 (1)	167
图143 SD0422土器集中区出土状況図 (2)	172
图144 SD0422土器集中区出土状況図 (3)	173
图145 SD0422土器集中区出土状況図 (4)	174
图146 SD0422土器集中区出土状況図 (5)	175
图147 SD0422土器集中区出土状況図 (6)	176
图148 SD0422遺物実測図 (1)	177
图149 SD0422遺物実測図 (2)	178
图150 SD0422遺物実測図 (3)	179
图151 SD0422遺物実測図 (4)	180
图152 SD0422遺物実測図 (5)	181
图153 SD0422遺物実測図 (6)	182
图154 SD0422遺物実測図 (7)	183
图155 SD0422遺物実測図 (8)	184
图156 SD0422遺物実測図 (9)	185
图157 SD0422遺物実測図 (10)	186
图158 SD0422遺物実測図 (11)	187
图159 SD0422遺物実測図 (12)	188
图160 SD0422遺物実測図 (13)	189
图161 SD0422遺物実測図 (14)	190
图162 SD0422遺物出土位置図 (1)	191
图163 SD0422遺物出土位置図 (2)	192
图164 SD0422遺物実測図 (15)	193
图165 SD0422遺物実測図 (16)	194
图166 SD0422遺物実測図 (17)	195
图167 SD0422遺物実測図 (18)	196
图168 SD0422遺物実測図 (19)	197
图169 SD0422遺物実測図 (20)	198
图170 SD0422遺物実測図 (21)	199
图171 SD0422遺物実測図 (22)	200
图172 SD0422遺物実測図 (23)	201
图173 SD0422遺物実測図 (24)	202
图174 SD0422遺物実測図 (25)	203
图175 SD0422遺物実測図 (26)	205
图176 SD0422遺物実測図 (27)	206
图177 SD0422遺物実測図 (28)	207
图178 SD0422遺物実測図 (29)	208
图179 SD0422遺物実測図 (30)	209
图180 SD0422遺物実測図 (31)	210
图181 SD0422遺物実測図 (32)	211
图182 SD0422遺物実測図 (33)	212
图183 SD0422遺物実測図 (34)	214
图184 SD0422遺物実測図 (35)	215
图185 SD0422遺物実測図 (36)	216
图186 SD0422遺物実測図 (37)	217
图187 SD0422遺物実測図 (38)	218
图188 SD0422遺物実測図 (39)	219
图189 SD0422遺物実測図 (40)	221
图190 SD0422遺物実測図 (41)	222
图191 SD0422遺物実測図 (42)	223
图192 SD0422遺物実測図 (43)	224
图193 SD0422遺物実測図 (44)	225
图194 SD0422遺物実測図 (45)	227
图195 SD0422遺物実測図 (46)	228
图196 SD0422遺物実測図 (47)	229
图197 SD0422遺物実測図 (48)	230
图198 SD0422遺物実測図 (49)	231
图199 SD0422遺物実測図 (50)	232
图200 SD0422遺物実測図 (51)	235
图201 SD0422遺物実測図 (52)	236
图202 SD0422遺物実測図 (53)	237
图203 SD0422遺物実測図 (54)	238
图204 SD0422遺物実測図 (55)	239
图205 SD0422遺物実測図 (56)	240
图206 土坑位置図	242
图207 土坑群遺構図 (1)	243
图208 土坑群遺構図 (2)	244
图209 SK01617・SK01679遺構図	245
图210 SK01617・SK01679遺物実測図	245
图211 SK01668・SK01669・SK01695遺構図	246
图212 SK01668・SK01669・SK01695遺物実測図	247
图213 SK01775遺構図	248
图214 SK01775遺物実測図	248
图215 SK01794遺構図	249
图216 SK01794遺物実測図	249
图217 SK01798遺構図	250
图218 SK01798遺物実測図	250
图219 SK01802・SK01807・SK01809遺構図	251
图220 SK01802・SK01807・SK01809遺物実測図	253
图221 SK01810遺構図	253
图222 SK01810遺物実測図	254

図223 SK01830-SK01831-SK01835遺構図	256	図262 SK01894遺構図（1）	288
図224 SK01830-SK01831-SK01835遺物実測図	256	図263 SK01894遺構図（2）	289
図225 SK01832遺構図	257	図264 SK01894遺構図（3）	290
図226 SK01832遺物実測図	257	図265 SK01894遺構図（4）	290
図227 SK01855遺構図	258	図266 SK01894遺物実測図（1）	291
図228 SK01855遺物実測図	258	図267 SK01894遺物実測図（2）	292
図229 SK01860-SK01878遺構図	260	図268 SK01894遺物実測図（3）	293
図230 SK01878遺物実測図（1）	261	図269 SK01894遺物実測図（4）	294
図231 SK01860遺物実測図（2）	262	図270 SK01894遺物実測図（5）	295
図232 SK01886-SK01563-SK01566遺構図	263	図271 SK01894遺物実測図（6）	296
図233 SK01886-SK01563-SK01566遺物実測図	263	図272 SK01894遺物実測図（7）	297
図234 SK01587-SK01589遺構図	264	図273 SK01894遺物実測図（8）	298
図235 SK01589遺物実測図（1）	264	図274 SK01894遺物実測図（9）	299
図236 SK01589遺物実測図（2）	265	図275 SP0085遺構図	305
図237 SK01589遺物実測図（3）	266	図276 SP0085遺物実測図	305
図238 SK01663遺構図	267	図277 NR001遺構図（1）	307
図239 SK01663遺物実測図	267	図278 NR001遺構図（2）	308
図240 SK01771-SK01764遺構図	268	図279 NR001遺物実測図（1）	309
図241 SK01771-SK01764遺物実測図	268	図280 NR001遺物実測図（2）	310
図242 SK01792-SK01814-SK01871遺構図	270	図281 NR001遺物実測図（3）	311
図243 SK01792-SK01814-SK01871遺物実測図	270	図282 NR001遺物実測図（4）	312
図244 SK01872遺構図	271	図283 NR001遺物実測図（5）	313
図245 SK01872遺物実測図	271	図284 NR001遺物実測図（6）	314
図246 SK01881遺構図（1）	272	図285 NR002遺構図	315
図247 SK01881遺構図（2）	273	図286 NR002遺物実測図	316
図248 SK01881遺構図（3）	274	図287 IV層上面（第1面）遺構図（1）	317
図249 SK01881遺構図（4）	275	図288 IV層上面（第1面）遺構図（2）	318
図250 SK01881遺構図（5）	276	図289 IV層上面（第1面）遺構遺物実測図（1）	
図251 SK01881遺構図（6）	277		319
図252 SK01881遺構図（7）	278		
図253 SK01881遺物実測図（1）	279		
図254 SK01881遺物実測図（2）	280		
図255 SK01881遺物実測図（3）	281		
図256 SK01881遺物実測図（4）	282		
図257 SK01881遺物実測図（5）	283		
図258 SK01881遺物実測図（6）	284		
図259 SK01881遺物実測図（7）	285		
図260 SK01881遺物実測図（8）	286		
図261 SK01881遺物実測図（9）	287		

表目次

表 1 調査体制表	7	表13 標跡柱穴一覧表	104
表 2 荒尾南遺跡調査一覧	12	表14 構造遺構一覧表	234
表 3 B地区遺構数量表	17	表15 土坑一覧表（1）	300
表 4 出土遺物点数	19	表16 土坑一覧表（2）	301
表 5 弥生土器・土師器分類別個体数集計表	20	表17 土坑一覧表（3）	302
表 6 石器種別出土点数一覧表	44	表18 土坑一覧表（4）	303
表 7 方形周溝墓一覧表	63	表19 土坑一覧表（5）	304
表 8 壁穴住居跡一覧表	97	表20 柱穴状小穴一覧表	305
表 9 壁穴住居跡内小穴一覧表	98	表21 自然流路一覧表	316
表10 振立柱建物跡一覧表	99	表22 1b 基底面検出構造遺構一覧表	327
表11 振立柱建物跡柱穴一覧表	99	表23 1b 基底面検出土坑一覧表	328
表12 標跡一覧表	104	表24 水田区画一覧表	328

插入写真目次

写真 1 平成19年度作業風景	5	写真 4 平成20年度現場見学風景	6
写真 2 平成19年度作業風景	5	写真 5 荒尾南遺跡とその周辺	8
写真 3 平成20年度作業風景	6		

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所（以下「岐阜国道事務所」という。）による東海環状自動車道（養老JCT～大垣西IC）建設に伴い、荒尾南遺跡発掘調査を実施した。東海環状自動車道は、東名・名神高速道路、中央自動車道、東海北陸自動車道などを、環状にネットワーク化することを目的とし、銳意建設が進められている高速自動車道である。荒尾南遺跡は、大垣市荒尾町・桧町に所在する（図1）。

大垣市教育委員会は、平成元年度～5年度に市内遺跡詳細分布調査を実施したが、荒尾南遺跡はこの際に確認された、弥生時代～中世に至る遺跡である（大垣市教委1994）。この分布調査では、JR東海道線と国道21号の間で濃密な遺物散布が認められている（大垣市教委1993）。分布調査結果に基づく大垣市遺跡地図の刊行後、平成6年度に県道50号（大垣環状線）建設に伴い、財団法人岐阜県文化財保護センターが発掘調査を実施し、弥生時代前期～古墳時代初頭を中心とした遺構・遺物が確認された。その後も市道建設に伴う試掘調査や発掘調査が大垣市教育委員会によって実施され、弥生時代中期の方形周溝墓や弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡が確認された。

東海環状自動車道大垣西インターチェンジが当該地に建設されることになり、平成17年度に岐阜国道事務所と岐阜県教育委員会の間で、過去の調査成果に基づき、事業予定地の発掘調査が必要である

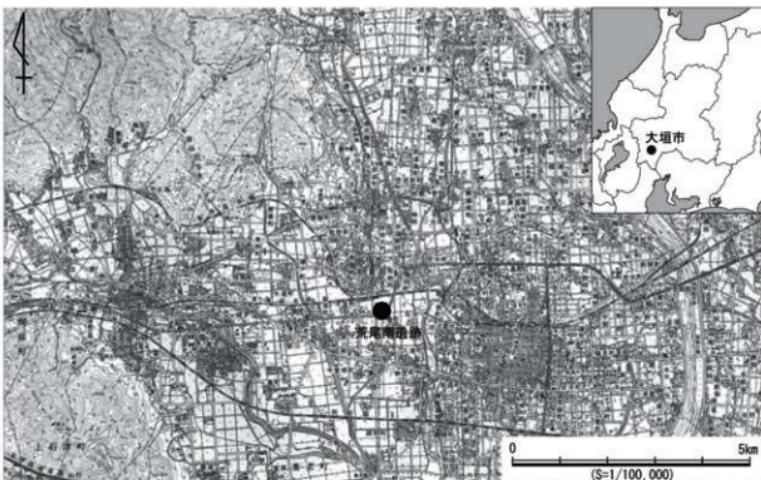


図1 遺跡位置図（国土地理院発行の5万分の1地形図（大垣）を使用した。）

ことを確認し、工事計画による道路敷、調整池堰堤部分など工事により埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲の発掘調査を実施することになった。平成18年度に岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会において、調査成果に基づき調査対象範囲を一部変更することを結論づけた。

荒尾南遺跡は、東西250m、南北750mに広がる細長い遺跡であるため、JR東海道線から国道21号までの範囲のうち、北部をA地区、南部をB地区、国道21号より南側をC地区と区分した。発掘作業は平成18年度から、二次整理作業は平成19年度から実施した。なお、平成18年度から平成20年度の発掘調査は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが調査主体となり、文化財保護法第92条に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出について（平成18年4月6日付け財文保第8号、平成19年3月19日付け財文保第8号の4、平成20年3月21日付け財文保第83号）を岐阜県教育委員会に提出し、岐阜県教育委員会から埋蔵文化財の発掘調査についての通知（平成18年4月19日付け社文第45号の2、平成19年3月23日付け社文第45号の11、平成20年4月3日付け社文第3号の4）を受けて実施した。平成21年度の発掘調査は、岐阜県文化財保護センターが調査主体となり、平成21年5月14日に文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告（文財セ第17号の2）を岐阜県教育委員会に提出し、平成21年6月12日に岐阜県教育委員会から埋蔵文化財の発掘調査についての通知（社文第17号の2）を受けて実施した。

本書は、平成18年度から平成21年度に実施した荒尾南遺跡B地区15,396m²分（図2）についての発掘調査成果の記録である。

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

発掘調査においては、用地買収状況及び工事計画の優先度に応じて調査地点を協議し、平成18年度から開始したが、遺跡範囲が東西約250m、南北約750mと広大であるため、遺跡範囲を取り囲むように、世界測地系座標のX=69,400、Y=53,000を原点に1辺100mで区画し（大区画）、北西から南東へアルファベット、A～ACを付した。さらにその内部を5m四方に区画して杭を設置し、調査区画の最小単位（グリッドと呼称）とした。杭には、東西列を西から1～20、南北列を北からA～Tと番号を付し、グリッドの呼称は北西隅の杭番号を用いた。このため、グリッドの名称は、大区画名と杭番号によって「A A 1」のように表示した。また、調査地点の番号は、各年度毎に便宜的に使用した番号であり、調査年度を明示するため、必要に応じて西層の下二桁を前に付けて、06_1地点のように表示した。

基本層序は、過去の調査成果を基に、I層からVI層まで設定し、I層が表土層、II層が耕地整理等に伴う盛土層、III層及びIV層を遺物包含層、V層を遺構基盤層と設定した（第3章第1節参照）。このうちII層～IV層は、微地形の自然堤防上にあたる場所では、土地利用による形状の改変のため確認できない場所があった。なお、08_2地点としたB地区西部では、A地区的07_14・15地点の土層堆積状況が続くと判断したため、IV層上面で中世以降、V層上面で弥生時代以降の遺構を確認した。

発掘調査では、先ず重機により調査区全体の表土を掘削した後に、IV層を人力で掘削し、V層上面で遺構検出、遺構掘削作業を行った。ただし、08_2地点では人力でIV層上面の遺構検出、遺構掘削作



図2 荒尾南遺跡の調査地区位置図（平成22年度時点）

業を行い、IV層上面を第1調査面とした。遺構の調査記録は、写真撮影及び手測り実測、デジタル測量を行った。検出した遺構は、検出順を原則として、暫定的に調査担当職員ごとの通番を付し、整理作業時に遺構種別番号を設けた。遺物包含層から出土した遺物は、層位・グリッド単位、遺構から出土した遺物は、遺構内を概ね5cm単位の人工層位（a層、b層…として取り上げ）もしくは、分層した層位毎に取り上げたが、原位置性が高い遺物や、遺構との関係性が検討できる出土状況のものについては、実測あるいは出土位置を測定して取り上げた。遺物には、取り上げ単位ごとに遺物ラベルを添付した。遺物ラベルには「西層下二桁とAM(遺跡名略号)」「出土場所(遺構番号又はグリッド番号)」「出土層位」「取上日」「備考」を記入し、この記録をもとに一次遺物台帳を作成した。遺構番号は、調査担当職員を区別するアルファベット(A、B、C…）と、4桁の数字により表記した（例、A0001）。このため、二次整理作業時には、遺構種別番号を新たに付けた。

なお、出土遺物の洗浄及び注記作業、遺物台帳作成（一次整理作業）は、発掘調査支援業務の一部として現地で行った。

2 調査の経過

現地での調査経過は、以下のとおり各年度ごとに述べる。

平成18年度 発掘調査面積3,547.4m²（このうち2,020m²を整理）

5月19日から30日にかけて、部分的な発掘調査を行った。その結果、弥生時代から古墳時代に至る遺構や遺物を確認し、V層上面に調査面を設定する必要があることが判明した。調査地点は、既設用 水路や農道によって大きく3分割され、さらに道路敷と調整池堰堤部分に分かれたため、06_7地点～06_11地点・06_14地点～06_19地点として調査を行った。このうち、06_7地点～06_11地点、06_14地点を本書で報告する。

B地区の重機による表土掘削は、6月20日から06_17地点で開始したが、06_14地点は8月18日から、

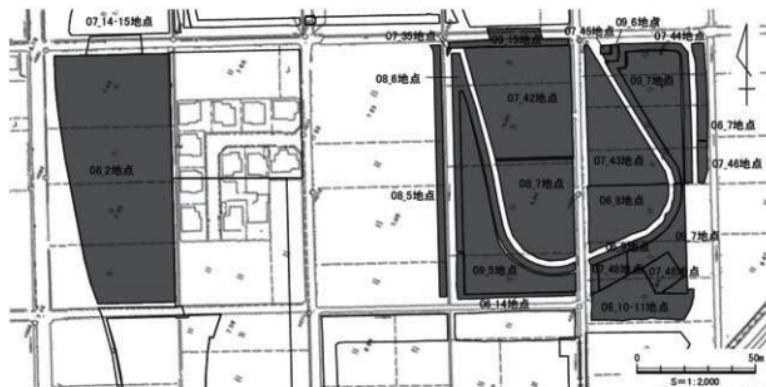


図3 B地区調査地点位置図（本書報告分）

06_8地点は9月5日から、06_7地点は11月2日から、06_10・11地点は11月6日から、06_9地点は12月14日から行った。いずれの地点でも、IV層上面まで重機により掘削し、IV層を遺物包含層として人力で掘削した。V層上面では遺構検出作業を行った。06_14地点では、弥生時代から古墳時代の構状遺構や方形周溝墓、掘立柱建物跡を確認したが、06_8地点では水田遺構を検出した。06_7地点では水利施設を作う構状遺構、06_10・11地点では、方形周溝墓や堅穴住居跡を確認した。10月23日に三重大学名誉教授八賀晋氏に、10月30日に愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏に現地で指導を受けた。11月18日にはA地区およびB地区の一部を公開して現地説明会を開催し、403名の参加があった。その後、06_15・16地点において検出した、幅10mほどの大溝埋土中から銅鏡が出土した。1月11日に大手前大学森下章司准教授に、1月15日に愛知県埋蔵文化財センター石黒立人氏に、1月17日に愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏に、1月19日に三重大学名誉教授八賀晋氏に現地で指導を受けた。その間の1月16日に県教育委員会社会教育文化課による発掘調査実施状況の確認が行われ、1月23日の調査区全体撮影をもって現地調査を終了した。一次整理作業は3月10日まで実施した。

平成19年度 発掘調査面積3,837m²

前年度調査地点の北側にあたる07_35・42地点、07_43～46地点、07_48・49地点の調査を行った。前年度の調査地点の隣接地であり、調査面はV層上面として実施した。

重機掘削は、07_42地点を4月24日から開始し、5月8日から07_45・46地点を行い、以後順次作業進捗状況に合わせて作業を進めた。07_42地点では、南北方向に並んだ方形周溝墓を確認し、溝や柵に囲まれた堅穴住居跡も検出した。また、南北に流れる幅10m程の大溝を検出した。07_43～46地点は、06_8地点の北側に位置し、水田遺構の広がりを確認した。07_48・49地点では、06_8地点と06_10・11地点の間に位置するが、水田遺構は確認できず、溝状遺構や土坑を確認した。6月12日に07_48地点の全体写真撮影を行った。8月1日には07_42地点で「タイムスリップ探検隊－親子で発掘体験－」を実施し、17組47名が参加した。07_49地点は8月20日に、07_43地点は9月26日に調査を終了し、全体写真撮影を行った。10月10日に三重大学名誉教授八賀晋氏に、10月23日に愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏に現地で指導を受けた。11月17日にはA地区およびB地区を公開して現地説明会を開催し、404名の参加があった。11月27日に三重大学名誉教授八賀晋氏に再度現地で指導を受けた。11月29日に07_35・42地点の調査区全体の写真撮影を行い、12月14日まで各地点において補足調査等を実施し、現地作業を終了した。1月31日まで現地における一次整理作業を行った。



写真1 平成19年度作業風景



写真2 平成19年度作業風景

平成20年度 発掘調査面積9,494m² (このうち6,720m²を整理)

調整池堰堤部分と道路敷にあたる08_2地点、08_3地点、08_5～7地点の調査を行った。08_2地点については、07_14～15地点の調査状況から、IV層上面の遺構が残存すると考えられたため、IV層上面及びV層上面を調査面として、他の地点では隣接する調査地点の状況からV層上面だけを調査面として調査を行った。なお、このうち08_3地点以外の調査地点について本書で報告する。

5月7日から08_2地点、5月16日から08_6・7地点の表土掘削作業を開始した。5月20日から08_2地点ではIV層上面で遺構検出作業を開始した。明確な畦畔状の遺構は確認できなかつたが、水田遺構に関係する可能性がある南北方向の溝状遺構を検出した。6月25日にはIV層上面の調査を終了し、全体写真撮影を行つた。その後順次IV層掘削作業を開始し、方形周溝墓や堅穴住居跡を確認した。ただし、こうした遺構は調査区内の東側に集中し、そこから中央部の窪地状堆積にかけては、多量の遺物が出士した。また、北西部及び南西部では自然流路を確認した。08_6・7地点では、北西部で堅穴住居跡、北東部から南部にかけて方形周溝墓を検出し、07_42地点と同様の状況を確認した。また、大溝も同様に検出されたが、内部に水の流れを制御するような杭列を確認した。08_5地点は用水路を挟んで08_6地点の西側に位置するが、08_6地点と同様に方形周溝墓や溝状遺構を検出した。10月14日に三重大学名誉教授八賀晋氏に、10月22日に明治大学名誉教授大塚初重氏に、10月23日に愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏に現地で指導を受けた。11月15日には現地を公開して説明会を開催し、675名の参加があった。11月19日に08_6・7地点、11月26日に08_5地点、12月12日に08_2地点の全体写真撮影を行つた。12月18日には、立命館大学非常勤講師の青木哲哉氏に現地で微地形に関する指導を受けた。一次整理作業は、A地区、C地区と合わせて1月31日まで現地で行つた。

平成21年度 発掘調査面積5,710m² (このうち2,819m²を整理)

調整池部分と道路敷にあたる09_4地点～09_7地点、09_18地点、09_19地点の調査を行つた。いずれの調査地点も、前年度までの隣接する調査地点の状況から、V層上面を調査面として調査を行つた。なお、このうち09_5地点～09_7地点、09_19地点について本書で報告する。

4月30日から09_5地点の表土掘削作業を開始した。IV層掘削後、V層上面で遺構を検出したが、方形周溝墓や溝状遺構、土坑を確認した。9月2日から09_6・7地点の表土掘削作業を開始した。9月8日には09_5地点の全体写真撮影を行つた。09_6・7地点では、北半部で水田遺構を検出したが、南まで



写真3 平成20年度作業風景

写真4 平成20年度現場見学風景

は水田遺構が広がらず、溝状遺構や土坑を検出した。10月29日から09_19地点の表土掘削作業を開始し、V層上面で遺構検出作業を行った。07_42地点の北側に隣接する地点であり、方形周溝墓や溝状遺構を確認した。10月5日に三重大学名誉教授八賀晋氏に、11月4日に愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏に現地で指導を受けた。11月14日にはA地区とB地区を対象として現地説明会を開催し、650名の参加があった。11月19日に09_6・7地点、11月30日に09_19地点の全体写真撮影を行った。11月27日にA地区で発見された不発弾の処理が完了したが、他にも不発弾が存在する可能性があるため、11月30日から安全確認がされるまで掘削作業を中断することとなった。12月17日には、立命館大学非常勤講師の青木哲哉氏に現地で微地形に関する指導を受けた。12月21日から25日及び翌年1月5日にかけて、磁気探査による不発弾の有無確認を行った。これにより安全性を確認したため、1月6日から調査を再開し、1月29日で現地調査を終了した。2月2日に再度、青木哲哉氏による現地指導を受けた。一次整理作業は、A地区、C地区と合わせて2月19日まで現地で行った。

二次整理作業は、平成19年4月から平成23年3月まで実施した。おおよそ現地調査が終わった翌年度に、二次整理作業を行うよう計画したが、発掘調査計画の変更に合わせて随時見直しを行った。このため、本書ではB地区北半部を中心に報告するが、西と東に大きく分かれている。

3 調査体制

発掘調査及び整理作業の体制は、表1のとおりである。平成20年度まで財団法人岐阜県教育文化財団岐阜県文化財保護センターとして業務を行っていたが、平成21年度から県教育機関として岐阜県文化財保護センターが設置された。

表1 調査体制表

職名	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
理事長(H20まで)	高木正弘	-	廣瀬利和		
副理事長(H20まで)	伊藤克己 高橋宏之 中島正和	伊藤克己 (兼理事長職務 代理者) 岩田重信	伊藤克己 吉田康雄		
センター所長(H20まで常務 理事兼センター所長)	田口久之	田口久之	梅村恒男	後藤満	高橋照美
総務課長(H20まで経営課長)	後藤智	加藤美好	加藤美好	長屋忠司	長屋忠司
調査課長(H20まで調査部長)	川部誠	北村厚史	北村厚史	小谷和彦	小谷和彦
調査第一担当チーフ(発掘担当, H20まで調査第一課長)	大熊厚志	成瀬正勝	成瀬正勝	早野壽人	早野壽人
調査第二担当チーフ(整理担 当,H20まで調査第二課長)		谷村和男	谷村和男	谷村和男	春日井恒
発掘調査担当職員 (A・C地区担当職員)	(成瀬正勝) 吉田 靖 (香田明彦) 春日井恒	(石井照久) (香田明彦) 野々田光則 (春日井恒) 北村昌弘	河瀬実浩 香田明彦 野々田光則 (春日井恒) 鷺見博史	河瀬実浩 北川真司 野々田光則 (春日井恒) (鷺見博史)	河瀬実浩 北川真司 山本厚美 鷺見博史 小野木学 河合亮
整理担当職員		林直樹	林直樹 藤田英博	藤田英博 三島誠	藤田英博 宗宮隆司 三島誠
整理作業員					
	家岡久美、石原美帆、今尾さち子、今津理、岩田のり子、大西悦子、小川洋子、小木曾美智、小澤真紀子、加藤里佳、龜田勇治、國井悦子、倉持和美、坂井田照子、酒衛成功、清水直美、高井道和、高里早苗、竹部泉、知本俊美、中島律子、丹羽香香、橋本法子、長谷川晶子、長谷保真理子、林浩美、原幸子、堀三恵、三輪久子、村瀬俊哉、森山智晴、戸下賀代子、山口久子、山下恭子、山田弘子				

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

荒尾南遺跡は、大垣市の西北部、揖斐川が形成した標高6m前後の沖積地に立地する。遺跡の北方には、金生山から南に向かって舌状に延びる牧野台地と通称される低位段丘、北西部には相川によって形成された緩扇状地が位置する。遺跡は、その扇端部から氾濫平野にかけて広がりを見せ、その範囲は東西約250m、南北約750mの範囲に及ぶ。東西方向に走行するJR東海道線と境を接する遺跡の北縁付近が段丘低位面の末端部に相当する。また、遺跡内には、中小の河川が幾筋も推定され、結果として網目状になっている。このことから、荒尾南遺跡は、扇状地の微高地部分の旧中州上から旧河道に形成された遺跡といえる。

荒尾南遺跡の東方に位置する桧遺跡も微高地部分の旧中州上に形成された遺跡である。また、遺跡の南縁に位置する桧集落は杭瀬川により形成した自然堤防帶に立地することから、微高地に囲まれた荒尾南遺跡と桧遺跡の間は、排水性の悪い低湿な環境であった可能性がある。



写真5 荒尾南遺跡とその周辺

第2節 歴史的環境

荒尾南遺跡周辺は、大垣市域内でも比較的の遺跡が集中する場所で、特に弥生時代から古代にかけての重要な遺跡が分布している（図4）。

縄文時代の遺跡は少なく、御首神社遺跡（35）などで縄文時代中期や晩期の土器が断片的に知られている程度である。また、平成6年度の荒尾南遺跡発掘調査では、自然流路内に堆積した砂礫層から縄文時代晩期の土器が出土した¹⁾。

弥生時代になると、この地域では遺跡数が増加し、主として揖斐川中下流域の標高15m以下の沖積地及びその中の微高地や周辺の扇状地に分布する。その遺跡数は大垣市だけでも30遺跡を越え、県内でも屈指の遺跡が集中する地域である。弥生時代前期の遺物は平成6年度荒尾南遺跡発掘調査で比較的まとまって出土している²⁾が、これまでに確認された遺構や遺物の多くは弥生時代中期～後期に属する。弥生時代中期以降の遺跡は、東町田遺跡（24）などが知られる。当遺跡の北端に連なる段丘上に立地する東町田遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓や環濠と考えられる溝、弥生時代後期の竪穴住居跡、弥生時代後期末～古墳時代初頭の前方後方形周溝墓が確認されている（大垣市教委2004）。弥生時代中期では、墓域は確認されているものの、居住域は明確でなく、東町田遺跡で検出した環濠内側に居住域の存在が想定されているだけである³⁾。弥生時代後期から終末期及び古墳時代初頭では、竪穴住居跡が東町田遺跡や荒尾南遺跡⁴⁾で確認され、集落が展開していたことがわかる。

古墳時代前期には、西方の扇状地や星飯町の台地部及びその周辺に、粉糠山古墳（11）、矢道大塚古墳、星飯大塚古墳（13）など、大型の前方後方墳や前方後円墳が集中し、この地域に一大勢力が存在していたことをうかがわせる。また、古墳時代後期を迎えると、金生山やその山麓に100基を越す群集墳が形成されている。この時期の集落跡では、東町田遺跡で竪穴住居跡と掘立柱建物跡が確認されている（大垣市教委2004）。

奈良時代以降、現在の不破郡垂井町に国衙が置かれたため、西濃地域は古代美濃国の政治的中枢となつた。8世紀には不破郡閼ヶ原町に不破関が、大垣市に国分僧寺、垂井町に国分尼寺が営まれた。しかし、前時代と比較して荒尾南遺跡周辺では、奈良時代から平安時代にかけて遺跡数の減少が見られる。そうした中でも、大垣市教育委員会が行った発掘調査では、この時代の遺構や遺物が発見されている。興福寺遺跡（37）で8世紀末と9世紀初頭の須恵器が出土⁵⁾、一本松遺跡で8世紀代の竪穴住居跡が検出され（大垣市教委1994・2001）、桧遺跡（47）で10世紀後半の掘立柱建物跡が検出され

1) 財團法人岐阜県文化財保護センター1998『荒尾南遺跡』によると、流路内の砂礫層からは、縄文時代晩期後半から弥生時代中期の遺物が混在した状態で出土したとしている。平成19年度のC地区発掘調査で確認した、同じ自然流路内の砂礫層においても、遺物の出土傾向は同様であった。

2) 前掲注1)と同じ。

3) 報告書を執筆した鈴木氏は、内側の環濠内部に明確な竪穴住居跡を検出していないが、土坑の存在や遺物量の多さから居住域の存在を想定している（大垣市教委2004）。

4) 大垣市教育委員会が調査した、市道桧高屋線建設に伴う発掘調査で、竪穴住居跡1軒を検出している（大垣市教委2008）。

5) 大垣市教育委員会1990「黒平遺跡」『大垣市埋蔵文化財調査概要 昭和63年度』によるが、現在黒平遺跡は興福寺遺跡の範囲に含まれている。この調査では奈良時代後半期の掘立柱建物跡が確認されている。



図4 周辺遺跡位置図（国土地理院発行の2万5千分の1地形図（大垣）を使用した。遺跡の位置や範囲は、大垣市教委1994をもとに転記した。なお、枝番号は古墳の号数を示す。）

- 1 八幡山古墳 2 社宮古墳群 3 塙ヶ谷古墳群 4 東山田古墳群 5 東山田古墳群 6 西山田古墳 7 村北古墳群 8 村北古墳群
- 9 花園山古墳群 10 金生山古墳群 11 粉糠山古墳 12 西町田遺跡 13 猿坂古墳 14 東堀遺跡 15 大塚古墳群 16 車塚古墳
- 17 鬼塚古墳 18 片原木遺跡 19 一本松遺跡 20 お茶屋屋敷跡 21 猿神塚古墳 22 岡山本陣跡 23 志坂畠田遺跡 24 東町田遺跡
- 25 朝町田古墳群 26 西牧野遺跡 27 荒尾古墳群 28 横戸B遺跡 29 矢道地藏堂遺跡 30 矢道B遺跡 31 西瀬古遺跡 32 八幡前遺跡
- 33 赤坂新田遺跡 34 猪野遺跡 35 御音神社遺跡 36 沖尻城跡 37 舞鶴遺跡 38 舞鶴村北遺跡 39 舞鶴向田遺跡 40 塚越遺跡
- 41 河間遺跡 42 河間村内遺跡 43 笠縫城跡 44 南一色遺跡 45 福田遺跡 46 福田城跡推定地 47 桧遺跡 48 木呂古墳跡 49 荒川遺跡
- 50 長佐城跡・城下町 51 荒川南遺跡 52 正円寺跡 53 十六遺跡 54 若森城跡

ると共に、300点以上の綠釉陶器片や、鍛冶関連遺物が出土している（大垣市教委1998a）。

中世になると、再び遺跡数は増加するが、鎌倉時代の遺構として興福寺跡、曾根八千町跡で12世紀後半～13世紀代の掘立柱建物跡（大垣市教委1990・1997）が、桧遺跡では断面V字形の溝や井戸跡、約40点の墨書きが施された山茶碗が出土している（大垣市教委1998a）。また、室町時代では、曾根城跡で城館に伴う石列や区画溝（大垣市教委1991）、桧遺跡でピット列と掘立柱建物跡を確認している（大垣市教委1998a）。

第3節 過去の調査

荒尾南遺跡は、大垣市教育委員会による平成2年度市内遺跡詳細分布調査によって遺物散布が確認されたが⁶⁾、その範囲が示されたのは『大垣市遺跡地図』刊行による。その間に、財團法人岐阜県文化財保護センターや大垣市教育委員会により発掘調査や試掘調査などが行われ（表2、図5）、遺跡範囲が徐々に明らかとなつた。これらの調査は部分的なものであったが、調査結果の集約によって、土地利用の変遷や遺跡の構造を、ある程度知ることが可能となり、時期ごとにその概要がまとめられている（大垣市教委2008）。ここでは、各発掘調査の内容について概述する。

①大垣理状線建設に伴う発掘調査（図5：B）

平成6年度に財團法人岐阜県文化財保護センターが遺跡の南西部2,560m²の調査を実施した。弥生時代後期の方形周溝墓を4基検出し、そのうちの1基の周溝から3艘の船を線刻で表現した壺が出土した。描かれた船のうち82本の櫂をもつ大型船の表現は、東海地域に類例が多く、全国的にも大きな注目を浴びた。また、方形周溝墓群の北側には、自然流路と思われる落ち込みを確認し、その埋土下部の砂礫層から縄文時代晩期から弥生時代中期の土器がまとまって出土した。また、石製品製作に関わると思われる擦り切り痕跡が残る石材（緑色凝灰岩）も2点出土した。自然流路上部の粘質土層や包含層からは、弥生時代後期から古墳時代前期の多量の土器や木製品が出土した。なお、自然流路内から出土した杭の折れや断裂した状態から、古代以降と弥生時代中期以前の2度の地震が発生したことが想定されている。昆虫遺体の分析からは、縄文時代晩期頃はヨシ等が繁茂する、人為的影響があまり見られない湿地草原的な環境、弥生時代中期中葉～後葉は近辺に大きな集落が存在する縁辺地帯で、多量の生活廃棄物が捨てられたこと、弥生時代後期から古墳時代前期は、近くに止水的環境が存在、古墳時代中期頃は乾燥化し乾田型水田が存在、古墳時代後期は再び湿地化してヨシが繁茂し、人為的影響が希薄化、古代は草原的環境で水田も存在していたことなど、周囲の環境変化を推定している（（財）岐阜県文化財保護センター1998）。

②交差点改良に伴う発掘調査（図5：D）

平成6年度に大垣市教育委員会により遺跡の中央部100m²の調査が実施された（大垣市教委2001）。明確な遺構は検出されていないが、砂礫層の存在やそこから出土した縄文時代晩期から弥生時代中期の土器により、自然流路の一部の可能性が考えられる。なお、市道建設に伴う試掘調査（図5：C）

6) 大垣市教育委員会1993「4 考古学的調査（2）平成2年度の調査概要」『岐阜県大垣市 遺跡詳細分布調査概要報告書（II）』では、荒尾南散布地として紹介され、遺物の出土量から弥生時代後期～古墳時代前期を中心とした遺跡とされた。

表2 荒尾南遺跡調査一覧（大垣市教委2008を参照して作成）

記号	調査主体	調査年度	調査面積	調査原因	文献	備考
A	大垣市教育委員会	平成2年度	—	市内遺跡詳細分布調査	大垣市教委1993	遺物散布の確認
B	(財)岐阜県文化財保護センター	平成6年度	2,560m ²	大垣環状線建設	(財)岐阜県文化財保護センター1998	
C	大垣市教育委員会	平成6年度	20m ²	市道建設	大垣市教委2001	試掘調査
D	大垣市教育委員会	平成6年度	100m ²	交差点改良	大垣市教委2001	
E	大垣市教育委員会	平成7年度	50m ²	下水継坑立会	大垣市教委1997	
F	大垣市教育委員会	平成7年度	80m ²	市道高屋松線建設	大垣市教委1998a	G・Hの試掘調査
G	大垣市教育委員会	平成8年度	3,000m ²	市道高屋松線建設	大垣市教委2008	
H	大垣市教育委員会	平成10年度	1,000m ²	市道高屋松線建設	大垣市教委2003	



においても砂礫層が調査坑下部で確認されている。しかし、砂礫層中から遺物が出土する調査坑と遺物が伴わない調査坑があり、砂礫層に堆積時期の違いが予想された。

③市道高屋桧線建設に伴う発掘調査（図5：G・H）

平成8年度に大垣市教育委員会により遺跡の南部3,000m²の調査が実施され、弥生時代中期から古墳時代の遺物を含み、南北方向に走る大溝が確認された。大溝は、幅約10m、深さ約2mを越え、運河的機能も想定されている。溝内からは、木製の杖の飾りや木製農具の未完成などが出土した。また、溝の東側では、弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる堅穴住居跡が1軒、多数の土坑や溝が確認されている（大垣市教委2008）。さらに、遺跡の南部1,000m²の調査が平成10年度に実施され、上層面では古墳時代後期以降の遺物を伴う遺構、下層面では弥生時代中期末の方形周溝墓5基、弥生時代末から古墳時代初頭の土坑が確認され、土坑内からは人面を線刻で表現した古墳時代前期の土器が出土した。以上の調査成果から、遺跡の西側には自然流路が南流し、そこには縄文時代晚期から弥生時代中期の遺物を多く包含する砂礫層が堆積している。遺跡北側の遺物散布状況と遺跡南側の周溝墓や堅穴住居跡を確認したことより、遺構の空白地帯をはさみながらも、弥生時代後期～古墳時代初頭に集落・墓地域が広範囲に及ぶことが想定できるようになった。また、遺跡周辺部の狭い範囲の調査であるものの、儀仗や線刻絵画土器など類例の少ない資料や県内有数の銅鏡出土数など、美濃地域の弥生時代の拠点集落として注目を集めるようになった。これらの調査場所は、便宜的に呼称するB地区及びC地区に該当する。

④東海環状自動車道建設に伴う発掘調査（A・B・C地区）

A地区では、弥生時代中期の方形周溝墓を確認し、B地区へ続く墓域として利用されていたと考えられる。弥生時代後期から古墳時代前期には集落域としての利用に変化しており、多くの堅穴住居跡を確認した。堅穴住居跡は4～5箇所のブロックにまとまる傾向にある。その後の土地利用は小規模で断続的であるが、中世末期以降には水田として利用された。

B地区では、A地区から続く弥生時代の中頃の墓域や、弥生時代末から古墳時代前期の集落域を確認した。遺跡内の西部で検出した旧河川跡は、大きく東に湾曲しており、岸辺からは多量の土器が出土した。また、旧河川跡からは伐採した木や割材が出土し、農具を中心とした木製品の製作を行っていた可能性があることがわかる。農具の未完成品は、遺跡東部を南北に貫く大溝内からも出土しており、今後の出土遺物整理や調査により農具の製作工程を明らかにすることが期待される。A地区と同様に自然堤防上には、弥生時代中期の方形周溝墓や弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居跡があり、A地区と同様の土地利用の変遷が認められる。

C地区では、自然堤防上には弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代前期の前方後方形周溝墓の前部を検出した。さらに、弥生時代中期の方形周溝墓は、自然堤防よりもやや低地にもまとまって造られていた。東部には幅10m程度、深さ2m程度の大溝が南北方向に流れ、その東側では堅穴住居跡や掘立柱建物跡を確認した。自然堤防の西側には自然流路跡があり、下層の砂礫層からは縄文時代晚期から弥生時代中期の遺物が出土した。自然流路の西側にはさらに自然堤防があり、方形周溝墓や木棺墓を検出した。南端部では、古墳時代前期の墳丘墓を検出した。当遺跡でこれまで検出してきた方形周溝墓は、すべて墳丘が削平された状態であったが、初めて墳丘盛土が残った状態で確認できた。主体部は不明であったが、盛土内には赤彩された壺が埋められていた。

第3章 調査の成果

第1節 現地形の状況

調査前は、昭和30年代に行われた耕地整理により、緩やかな起伏のある地形が、段切り造成によって長方形に整然と区画されていた。しかし、各水田の標高を比較すると、大きくは北西から南東に向かって徐々に標高が低くなっている、旧地形の状況を推測する際の参考とすることができた。

荒尾南遺跡北部のA地区内では、北西部の標高が8.31mと最も高く、南東部の標高が7.13mとなり、北西から南東に向かって緩やかに傾斜する地形であったと思われる。B地区でも、最も標高が高い場所は、北西部に位置する08_2地点の7.65mである。しかし、最も標高が低い場所は、南西部にあたる国道21号線に県道大垣環状線が接続する交差点北側の6.15mである。08_2地点東側では、標高7.62mと08_2地点とはほぼ同じ標高であるが、そこから東は徐々に低くなり、09_7地点では6.80m、06_10地点では6.69mとなっていた。こうしたことから、東西方向での傾斜は、A地区と同様に北西から南東にむかって緩やかな傾斜があるものと推定できた。しかし、B地区西部の南北方向については、東西方向以上の傾斜が推定され、字絵図（大垣市教委2001）における字名に深田とあることや、細かい不定形の筆があることなどから、旧河道が存在することが想定された。

こうした状況から、各調査地点によって土層堆積状況に差が認められ、08_2地点では部分的にIV層が削平されていたり、06_8地点や07_43地点など東部の調査地点では、III層の堆積を認めることができた。

第2節 基本層序

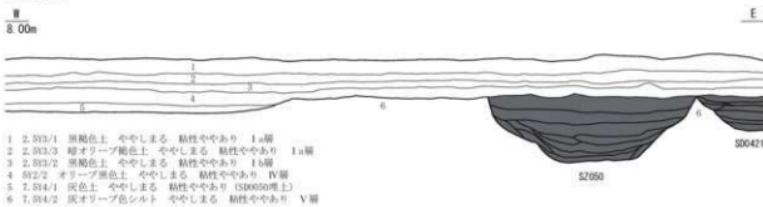
平成6年度から平成10年度にかけて、(財)岐阜県文化財保護センターや大垣市教育委員会が実施した発掘調査や試掘調査で確認された層序及び、各土層から出土した遺物、遺構の時期を検討し、今回調査を行うに当たって荒尾南遺跡全体の基本層序を検討した。遺跡全体で確認できるのは弥生時代から古墳時代の遺物包含層（IV層）と遺構基盤層（V層）で、この2層を鍵として遺跡全体の状況を検討し、以下のように基本層序を設定した。遺跡の中で標高が高いA地区では、II層及びIII層の堆積を確認していない。しかし、B地区及びC地区は、この層序と基本的に対応するものの、今回報告するB地区では、II層とIII層が確認できない地点が存在する。なお、この遺跡が立地する地形を形成する土層は、基本的に河川による水成堆積によるものと思われ、上部には耕地整理等の造成によるものが含まれる。

I層 耕地整理時に形成された現代の土層で、a層（水田等耕作土）、b層（水田床土）、c層（耕地整理に伴う盛土）に細別できる。

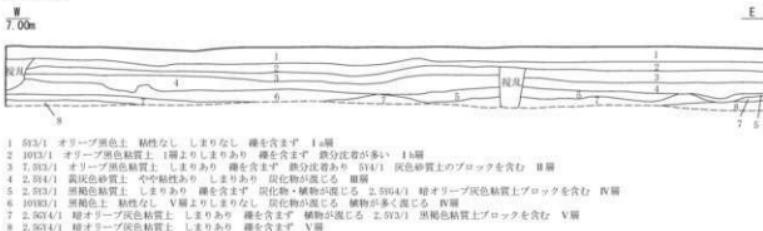
II層 鉄分沈着が見られる黒褐色ないしオリーブ黒色を呈する土層である。A地区及びB地区西部から中央部では確認していないが、C地区的調査ではブロック状の土塊を一部含むことから、窪地を平坦化するための客土の可能性がある。

- III層** 灰色シルト層で、A地区及びB地区西部から中央部では確認していない。C地区では、古代以降の遺物包含層となる。
- IV層** 黒色～黒褐色を呈する粘質～砂質土層である。主に弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物を包含し、この上面では、西部で水田遺構を確認した。なお、07_42地点の北部では、調査区壁面においてIV層をa層とb層に細分することができたが、平面的には分離できなかった。また、IV層とV層の層界は明瞭である。
- V層** 黄灰色～灰色を呈する粘質～砂質土層である。この土層の上面では、主に弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構を確認した。なお、V層中からは、遺物は出土していない。
- VI層** 旧河道に伴う砂礫層である。

08_2地点



06_8地点



06_10地点

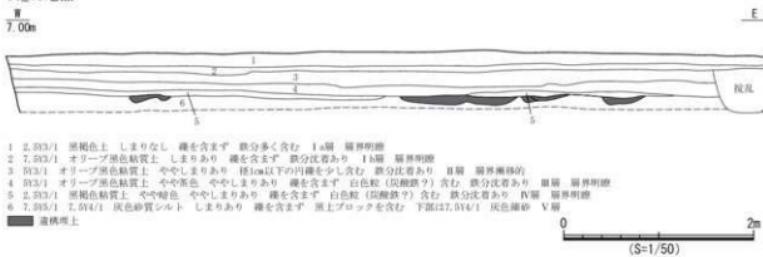


図6 08_2地点・06_8地点・06_10地点北壁土壌図

第3節 遺構の概要

今回報告するのは平成18~21年度B地区において発掘調査を行った地点を対象とする。図3のように東西に調査区が分かれているため、西部と東部に分けて報告する。

調査では、IV層の上面とV層上面を遺構検出面とし、弥生時代から中近世に及ぶ堅穴住居跡や方形周溝墓、土坑、溝跡、水田跡を検出した。IV層上面では中近世の水田跡を検出した。V層上面では、主に弥生時代から古墳時代前期の遺構を確認した。その多くは、弥生時代中期の方形周溝墓と弥生時代後期~古墳時代前期の堅穴住居跡である。東部では弥生時代から古墳時代前期の水田跡を検出した。掲載した遺構の基準はおよそ以下のとおりである。遺跡の中心となる堅穴住居跡、方形周溝墓、掘立柱建物跡、水田跡、柵跡はすべてを報告する。溝、土坑についてはその数が多いため、一括りの高い遺物が出土した場合、あまり出土例のない遺物が出土した場合、それほど多くの遺物が出土しなくても遺跡のなかで何らかの役割があると考えられるものを抽出して報告する。

遺構の内訳は、方形周溝墓35基（弥生時代中期）、土坑墓1基（弥生時代中期）、堅穴住居跡24軒（弥生時代後期~古墳時代前期）、掘立柱建物跡7棟、水田跡86区画である。そのほかに溝状遺構275条、土坑1080基を検出した（表3）。なお、各遺構の所見は、調査担当者の遺構所見をもとに記述した。

墓（略号SZ）

遺体を埋葬した穴であるが、この認定は人骨が遺存していない場合、非常に困難である。ただし、方形周溝墓のように、方形や長方形に土地を区画するように溝を配置した遺構は、その区画内部に住居跡が想定可能な柱穴配置や堅穴掘形がない限り、埋葬施設である墓坑を確認できていなくても、原則として方形周溝墓とした。

また、土坑墓の可能性を考えた遺構は、完形もしくはそれにちかい形状の土器が土坑内から出土したものや、木棺もしくはその痕跡を確認したもの、こうした土坑と類似した形態であるものや、これらと群をなす土坑については墓坑と判断した。他にも遺物出土状況から、墓坑の可能性が考えられるものがあるが、それらは土坑に含めた。

堅穴住居跡（略号SB）

遺構の重複や後世の削平により、堅穴住居跡との認定が困難な場合があるが、掘形、柱穴、壁溝、炉跡、貼り床、外周溝などの堅穴住居跡の構成要素のうち、一部の確認に留まつても堅穴住居跡の可能性があるものとして報告した。なお、床面で検出した柱穴や小穴、土坑は略号Pとしたが、小穴や土坑は必ずしも堅穴住居跡に伴わない可能性がある。

掘立柱建物跡（略号SH）

向かい合う2辺以上が確認できる、規則的に並んだ複数の柱穴によって構成される遺構を掘立柱建物跡とした。なお、確認した柱穴の略号はPとした。

柵跡（略号SA）

直線的あるいは、屈曲して並んだ複数の柱穴によって構成される遺構を柵とした。なお、確認した柱穴の略号はPとした。

溝状遺構（略号SD）

上端の短軸（幅）に対して長軸（長さ）が5倍以上の長さとなる遺構を溝状遺構とした。ただし、

表3 B地区遺構数量表

時代	荒尾南遺跡 大区分	小区分	SZ	SB	SH	SA	SD		SK		SP	ST	SE	SS	SW	NR
							1									
縄文時代	晩期	縄文														
	前期	I期								1						
		II期	9													
		III期	1 2 3	1 2 3	7				3 1							
		IV期	1 2 3	2 2 3	17	1			3			1				
	中期	V期	1 2 3	1 1 1	8	1			6 27							
		VI期 (遅間I)	1 2 3	6 3	3 3	3			2 30	1	152 10 5 2 3 9 1 5 19 2	1,002	132 83	1	8	1 2
		VII期 (遅間I ～II)	1 2 3	1 1 1	2 1	1			13 5							
	古墳時代	前期	VIII期 (遅間II～III)						2		1 1					
		IX期(松河戸)						1								
		中期	X期(宇田)													
		後期	古墳時代後期													
	奈良時代	古代														
	平安時代															
	鎌倉時代～室町時代	中世						27		1 18						
	安土桃山時代～江戸時代	近世												3		
	時期確定困難	時期確定困難					1	2					1			
	合計		36	24	7	9		275		1,080	149	86	1	8	1	2

5倍以上の長さがない場合でも、他の溝状遺構との関係から、溝状遺構の痕跡が土坑状の穴となって確認できたものと判断した場合は、溝状遺構に含めた。

井戸跡（略号SE）

水が得ることができる程度にまで掘り込まれていると判断できる場合や、内部の石組みや井戸枠が確認できるもの。

土坑（略号SK）

地面に掘りくぼめられた穴のうち、性格が想定できないものを土坑とした。遺物の出土状況や形状から墓坑、廐棄土坑といった可能性が考えられるものも含む。

水田跡（略号ST）

畦畔状の遺構により区画された範囲を水田跡とし、区画毎に番号を付した。

水製造構（SW）

溝状遺構や自然流路内で人為的に造られた土木構造材と判断できるもの。

杭列（SS）

杭または杭跡が複数続くと判断できるもの。

単独柱穴（略号SP）

建物に伴う柱穴と同様の形状、または柱痕跡や柱根が残存しているものの、規則的な配置が確認で

きないもの。

遺構種別により、各遺構の基礎的情報は、それぞれ種別ごとに作成した遺構一覧表に示した。遺構種別により、一覧表の項目はやや異なるが、共通する基本項目については次のとおりである。

遺構の検出層位 基本層序と検出面で表し、V層上面で検出した遺構の場合「V上」、V層上面で検出したが、その上に堆積していたのがII層だった場合「II基」(II層底面検出)などと表記した。

遺構埋土 分層した土層数と、堆積状況を次のように表示した。

A—埋土が単一層 B—ほぼ水平な堆積 C—中央がU字状に凹むような堆積 D—凹みが片寄つた堆積 E—ブロック状に土層が入り込む堆積 F—最上層が掘り込んだ状態となるもの G—柱痕跡状の土層があるもの H—その他

平面形 堅穴住居や土坑などは、短軸と長軸の長さの比から円形・正方形(1:1.2未満)、橢円形・長方形(1:1.2以上)、長楕円形(1:1.5以上)とし、形状があまり整っていない場合は不整円形、不整長方形などとした。他に調査区外に続く、あるいは他の遺構に削平され形状が明確でないものについては不明、不定形などとした。方形周溝墓については、次のようにアルファベットと数字を組み合わせて一覧表に掲載した。

A—方形に溝が巡る B—4条の溝状遺構で方形に区画する(四隅が途切れる) C—辺の一部が途切れる D—不明 1—正方形 2—長方形 3—不明 4—円形

断面形 堅穴住跡や土坑、溝など断面の形状(A~C)と、上面での短軸長と深さとの比(1~6)、底面(a~d)と壁面(1~5)の状況の4つの文字で表示した。

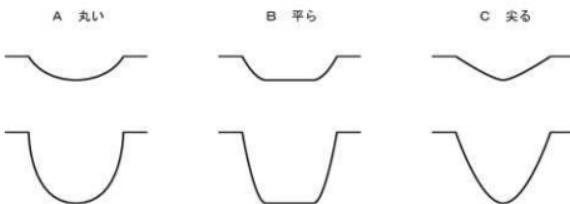


図7 遺構断面の形状模式図

深さ／上面での短軸長 1—0.3未満 2—0.3~0.7未満 3—0.7~1.1未満 4—1.1~1.5未満
5—1.5以上 6—不明

底面の状況 a—丸いか平ら b—底が2段になる(小穴含む) c—底面が凸凹 d—不明

壁面の状況 1—壁が開く 2—壁が直立に近い 3—壁面に段がある 4—袋状 5—不明

遺構の規模 単位はmであるが、()で示したものは、全形が確認できなかつたため、残存長を測つたものである。

遺構の切り合い 「新>古」の関係を示す。

出土遺物 縄文土器：J 弥生土器・土師器：H 須恵器：P 山茶碗・陶器類：T 石器類：S
木製品：W 金属製品：I

第4節 遺物の概要

1 種類と数量

平成18年度から平成21年度のB地区の調査で出土した遺物は、弥生時代から古墳時代のものを中心として、縄文時代や古代以降の土器類、石器類、木製品、金属製品などがある。土器類には縄文時代晚期後半の突帯文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、中近世陶器類がある。弥生土器は、美濃地域で最も古い段階の前期土器から、弥生時代末期の土器まで、出土量の増減がありながらも全時期にわたって出土した。弥生時代末期から古墳時代初頭の過渡期にあたる土器については、時代区分に諸説があるため、本報告では弥生土器か土師器かの明確な区分は行っていない。このため数量などは、弥生土器と土師器を合わせて表示している。石器類や木製品、金属製品など、それ自体で時期が確定できない遺物については、伴出した土器や出土層位などによって所属時期を判断した。これらの各種遺物の出土点数は、表4のとおりである。

表4 出土遺物点数

	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	金属 製品	木製品	合計
接合前 点数	95	471,372	1,268	320	4,189	21	305	260	355	478,185

2 時期区分

本報告における時期区分は、大きく縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世とし（表3）、出土遺物・検出遺構数の多い弥生時代から古墳時代にかけては、次項で既存の研究成果を参考にI期からX期に細別時期を設定し、この時期の弥生土器と土師器の器種分類を行った。また、石器類、木製品についての器種分類についても後述する。

なお、出土した遺物について、以下の方々から土器様式名、産地、器種、時期などの指導を得た。

弥生土器・土師器：赤塚次郎、石川日出志、伊庭 功、石黒立人、深澤芳樹

中近世陶磁器：藤澤良祐 木製品：山田昌久

3 弥生時代から古墳時代の土器

ここでは、新たに分類を設定した弥生土器・土師器について説明する。A地区発掘調査の報告書で記されていると同様の傾向が認められ、弥生時代～古墳時代前半にあたる資料が98.6%を占める。これら質、量ともに豊富な弥生時代～古墳時代前半の土器を当地域の特色を示すものと考え、以下のように器種分類を行った。表5に分類毎の口縁部残存率による個体数を集計した。弥生時代中期～古墳時代前期以外の時期に相当する土器、その出土数が少ないため、細分せず、通有の名称を用いた。

なお、本報告に掲載した土器は、方形周溝墓や堅穴住居跡の主要遺構、さらには溝状遺構や土坑のなかで荒尾南遺跡の特徴を反映していると考えられる遺構から出土したものを掲載した。そのなかで、一括性の高いものや遺構の時期や特徴がわかるものを抽出した。また、出土数の少ない土器や完形にちかく復元できた土器については、できるだけ掲載するようにした。

弥生時代～古墳時代前期に相当する土器はI～X期に区分し、さらには出土量・遺構数の多い、III期～VII期はそれぞれ3小期に細分した。その経緯はA地区報告書に記してあるので、ここでは省略する。器種分類を示した図8～図20のうち●印のあるものは、本報告以後に刊行する予定のB地区出土資料である。

表5 弥生土器・土師器分類別個体数集計表

時期区分	統計	器											小計
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	
I		11											1
		3											3
II		8	3										1
		13	5										2
III		9	5	1									2
		54	31	4									8
IV		166	32	1	5	3		3	1				18
		354	94	11	9	3		5	12				6
V～VII		5196	322	274	136	57	17	869	72	141	41	33	10
		11769	796	736	433	157	30	203	261	585	87	88	30
VIII・IX		45						3					9
		118						20					21
X		25											0
		42											0
合計		5450	362	276	141	60	20	83	73	141	41	33	10
		12352	926	751	442	160	50	268	273	585	87	88	30
													3692

時期区分	統計	器							小計	錫							小計
		A	B	C	D	E	F	他		A	B	C	D	E	F	G	他
I									0								0
									0								0
II		2	1						3								0
		2	1						2								0
III									0								0
									0								0
IV		53	51	1	1			1	167		2	2	1				5
		91	79	3	2			1	176		2	8	12				22
V～VII		1136	698	201	211	165	2	1	2414	458	34	8	5	5	5	5	823
		2114	1435	343	355	347	3	1	4598	932	128	12	28	17	42	10	3
VIII・IX									28	28							2
									56	56							16
X									18	18							0
									32	32							0
合計		1191	750	202	212	165	2	48	2570	458	36	10	6	5	5	5	530
		2207	1515	346	357	347	3	90	4965	932	130	20	40	17	42	10	3
																	1211

時期区分	手縫形	高环											小計	器台			小計	手捏	土製品	环	その他
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	他	A	B	C							
I												0			0						
												0			0						
II		2	1									0			0						1
		2	1									0			0						3
III												1	1		0						
												1	1		0						
IV		5		1								6			0						1
		9		5								14			0						2
V～VII		1	2	310	230	56	3	5	67	27	60	1	761	49	192	3	244	50	8	3	
		2	4	581	513	83	7	35	193	73	148	1	1638	159	511	24	694	203	8	5	
VIII・IX												2	2	1							
												3	3	2							
X												5	5		0					2	
												7	7		0					3	
合計		1	7	310	231	56	3	5	67	27	60	9	775	50	192	3	245	50	8	2	5
		2	13	581	518	83	7	35	193	73	148	12	1663	161	511	24	696	203	8	3	9

(上段：資料数、下段：口縁部生存率・口縁部生存率(23/12)の数据を示す。)

I期 弥生時代前期

分類するほどの出土量がないので細分しなかった。前期中葉以降の資料が認められる。壺は口縁部が短く開くものと大きく開き沈線が多条化するものがあり、時期差がある。甕はA地区ではまったく認められなかつたが、今回報告分では破片資料ながら少量出土した。壺と同じ時期幅をもつ資料と考

えられる。その他に同時期の沈線文系土器、縄文土器に系譜をもつ資料がわずかに出土した。条痕文系土器は図示するような明確な資料は認められなかった。

II期 弥生時代中期前葉

壺 口縁部の形状及び条痕の有無によってA～Cに分類した。

壺A 口縁部が大きく外反する太頸壺。器形的に差異を見出すほどの資料数は認められない。端部の押圧手法によって2分した。

1 端部に押圧やキザミが認められる。

- a 端部上下端にユビによる押圧が認められ、端部に貝殻による直線文・波状文が充填される。
- b 端部にキザミが認められるもの。上端のみ、下端のみ、上下端両方にキザミがあるものの3種の手法が存する。端部文様、内面文様の有無など資料差がある。

2 端部に押圧が認められないもの。

壺B 頸部が長く直立して口縁部が弱く外反する。頸部に直線文が認められる。

壺C 条痕のある壺などその他の壺。断片的資料ばかりであるが、深鉢形のものを含んでいる可能性がある。

その他 上記分類に含まれないもの。

甕 口縁部形状及び、調整手法によって3つに細分した。口縁部が強く外反する。

甕A 口縁部が短く外反し、ハケによる調整がみられるもの。

甕B A類と同様だが、口縁部がA類より長く外反する。外面はハケ調整。端部にキザミと押圧があり、内面には波状文が施文される。

甕C B類と器形的な特徴は同じだが、外面に二枚貝による条痕調整を残すもの。出土量はごく少量。

その他 上記分類に含まれないもの。

III期 弥生時代中期中葉

壺 口縁部形状及び文様構成によってABに分類した。

壺A 横描文を施文する細頸壺。口縁部形状から3分した。

- 1 口縁端部が外反したままで終わるもの。端部に波状文、胴部に直線文、縦位弧線文を施文する。
- 2 口縁端部がわずかに内湾するもの。端部に波状文やキザミ、胴部に直線文、縦位弧線文、貼付文がみられる。
- 3 口縁端部が強く屈曲して直立するもの。端部は櫛や貝殻による刺突もしくは無文、胴部は直線文を施文する。

壺B 壺A以外の壺。

甕 条痕文系の甕。数点の出土にとどまった。

IV期 弥生時代中期後葉

壺 器形の形状によりA～Hに分類した。

壺A 口縁端部に回線文を施文する細頸壺。

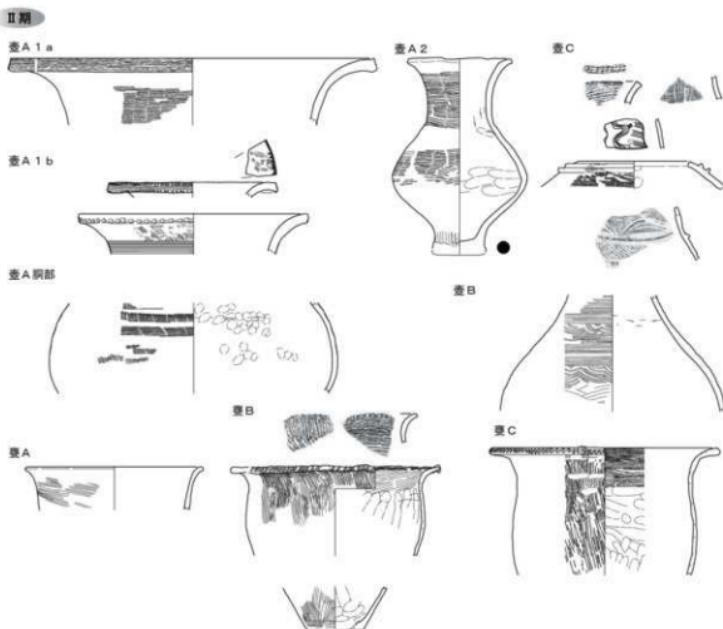


図8 I ~VII期土器分類図①

- 1 口縁端部が屈曲して直立し、数条の凹線をもつ。胸部以下は欠損する資料が多く、詳細は不明。
加飾されずハケ調整のみ粗製のものが大半を占める。
 - 2 口縁端部が袋状を呈し、3条～5条程度の凹線をもつ。頸部以下を加飾するのが通有で、頸部に斜位の刺突文、胸部に横描直線文・波状文の組み合わせとなる資料が多い。頸部に廉状文を施文する例が一部にみられる。胸部の施文は胸部最大径まで、直線文と波状文の交互配置2段と直線文3帯～5帯・最下段の波状文の2形態が認められる。脚台付の資料もわずかに認められる。
- 壺B 口縁部が短く開く広口壺。
- 1 口縁部が短く外反する太頸壺。現状では半完存資料1点のみの確認にとどまる。大きな破片が残存しないと、A類との分類が難しい。文様は端部下端にキザミ、頸部に刺突文。胸部は直線文・波状文の組み合わせで壺A2類と類似するが、波状文の振幅が短い。
 - 2 口縁部が短く外反し、端部が直立する太頸壺。胸部器形・文様構成とも壺B1類に酷似し確認例は壺D
 - 口縁部が袋状となる大型壺。頸部にユビによる押圧が認められる突帯がめぐる。現状では茶褐色を呈する良質な胎土のみの資料が破片となって、1～2個体程度の資料を確認するのみ。
搬入品である可能性が高い。胸部に竹管文や波状文をもつ可能性がある。
- 壺E 短頸壺。口縁が短くくの字状に立ち上がる。確認例は1例のみ。

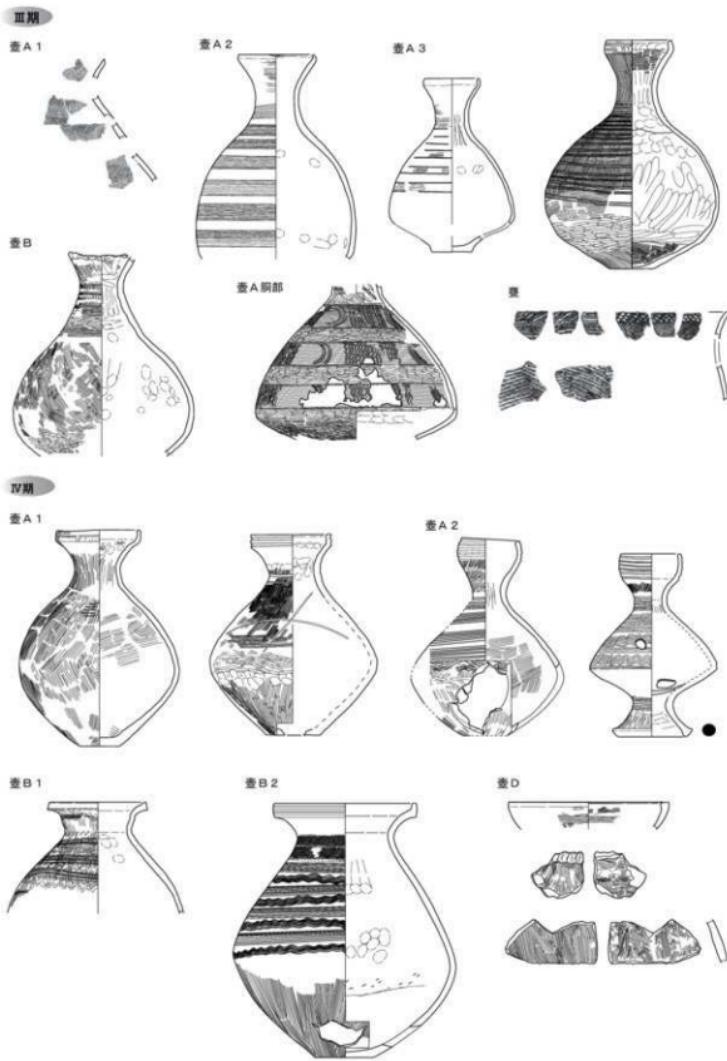


図9 I ~ VII期土器分類図②

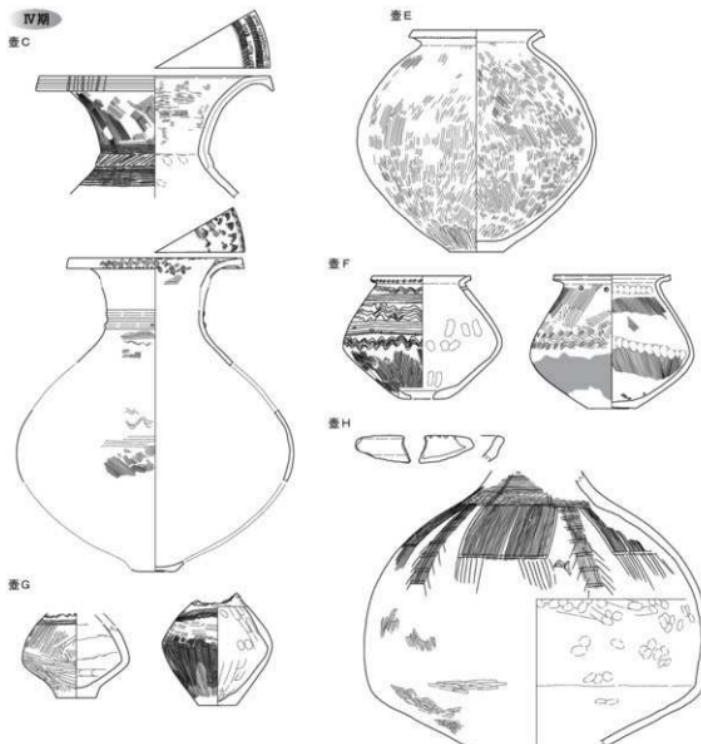


図10 I ~VII期土器分類図③

壺F いわゆる無頸壺。口縁部が短く外反し、胴部形状は壺Aに類似する。胴部文様は壺Aと共に通するものと壺Aと共通するものがみられる。

壺G 上記分類に相当しない小型の壺。口頸部を欠損する小型の壺を含み、全形が不明で細分可能な余地があるが、出土量が少ないので一括する。多くは胴部の器形・文様ともに壺A類と類似することから、壺A類の小型品の口頸部が欠損した資料と考えられる。

壺H 外来的もしくは折衷的な要素の濃い壺。主に三河の古井式が認められる。古井式については胎土が黒褐色を呈して砂礫をほとんど含まず、在地のものとは胎土が明らかに異なるので搬入品とみることができる。断片的な資料でも識別可能だが、A地区報告分及び今回報告分においてその個体数を識別すると5点前後であろう。

壺 器形の形状及び口縁部の形状によりA～Eに分類した。

壺A 口縁部が短くくの字状に屈曲する壺。

- 1 口縁部が外反し、胴部中位へやや上半の位置に最大径をもつ、外面はタタキの後、ハケ調整が認められる。胴部中位に刺突文が認められることが多い。内面は口縁～胴部中位までがハケ調整、胴部下半がケズリ調整を行う資料が多くを占める。
- 2 口縁部が外反し、端部にキザミもしくはタタキ痕を残す。胴部はA1類と同様である。
- 3 口縁端部が屈曲して直立する。胴部はA1類と同様である。
- 4 A2類と類似するが、タタキ痕が認められない。口縁端部には上下端に粘土がはみ出るような強いキザミが認められる。
- 5 A2類に類似し、脚台のつくもの。現状では確認例は1例にとどまる。脚台は低脚で器壁が厚い。口縁部形状による分類では本類を抽出するのは不可能なので、口縁部のみの資料はすべてA1～A4類に分類した。

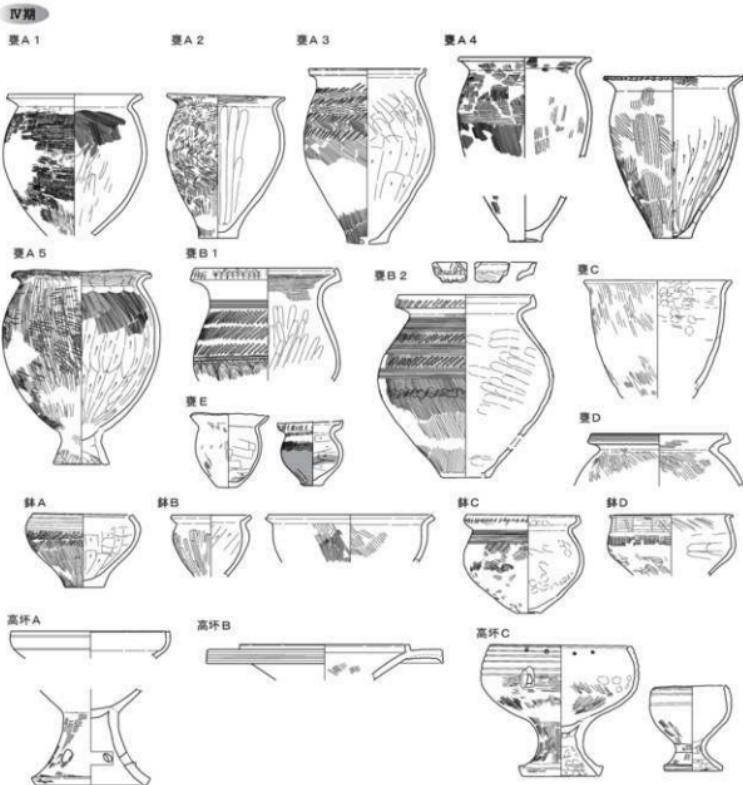


図11 I～VII期土器分類図④

甕B 受口状口縁の甕。その大半が近江湖南地域からの搬入品と考えられる。端部文様で2分した。

- 1 口縁部に波状文をもつもの。胴部文様は個体差が大きい。直線文帯の間を刺突文や波状文で充填する。
- 2 口縁部に刺突文をもつ。胴部文様は直線文・刺突文の組み合わせを中心。胴部最大径に波状文をもつ。刺突文のほかに山形文をもつ例が1点あり、この資料も本類とした。

甕C III期甕に類似し口縁部が短く外反する。条痕状のハケが外面に残るもの。

甕D 口縁が外反し、端部に擬回線が認められるもの。日本海側及び瀬戸内地方に主に分布するので、搬入品の可能性がある。

甕E 上記分類にあてはまらないもの。主に甕A B類の小型品。

鉢 器形の形状でA～Dに分類した。

鉢A 口縁部が袋状となるもの。文様構成は甕A2類と酷似する。

鉢B 口縁部がくの字に外反して端部に強い平坦面が認められる。出土量はわざがで、破片資料では甕との区別は難しい。

鉢C 口縁部が受口状口縁となる鉢。口縁部のみでは前述の甕B類との区別は困難。

鉢D 高坏の坏部に類似する形状をもつ。直線的な底部下半から口縁部はやや内傾しながら立ち上がり、端部に強い平坦面を残す。現状では1点のみの確認。

高坏 器形の形状でA～Cに分類した。

高坏A 口縁部が袋状を呈し、端部に凹線を有する。脚部は脚端部に面をもち、外傾する。

高坏B 口縁部が跨口状口縁を呈す。現状では1例のみの確認。端部には擬回線がみられる。

高坏C その他。壺同様、主に高坏Aの小型品や脚部の短い資料が認められる。

V・VI・VII期 弥生時代後期～古墳時代前期

今回報告分についてもA地区報告分と同様の課題を抱えている（※詳細はA地区報告書参照）。V-1・2期についてはVI・VII期と分離可能な資料が増えたが、V-3期とVI-1期及びVI-3期とVII-1期との連続性が以前高いこともあり、V・VI・VII期をとおして分類した。

壺 器形の形状や大きさによってA～Kに分類した。

壺A 口縁部が大きく聞く大型の広口壺。口縁端部を上下に拡張したり、口縁部・胴部を加飾する傾向が強い。胴部に最大径が中央より下がり気味にあり、やや下膨れとなる。

- 1 口縁部が外反し、端部を下方に拡張する。端部に擬回線をもち、内面にも文様をもつことが多い。内面の文様は羽状文であることが多い。胴部は倒卵形を呈し、上半1/2には複数の直線文とその他の文様によって施文される。その組み合わせは「直線文+波状文」、「直線文+刺突文」が基本である。頭部に宽带をもつ資料もわずかに認められる。赤彩は胴部の文様帶以下や口縁内面の文様部以下に施す例が多いが、赤彩する例の割合は低い。

a 口縁部が大きく外反して、端部を顎著に拡張する。

b 口縁部がAla類に比べてやや短くなり、端部下方の拡張が弱くなる。胴部文様は「直線文+刺突文」が多く、外面にも羽状文を施文する例がみられるようになる。

- 2 口縁部が強く外反し、端部を上方にわずかに拡張する。胴部は比較的扁平な形状を呈し、矮

小さな底部をもつ例が多い。

- 3 口縁部が外反し、端部を下方へ拡張する。口縁部内面は段をもつもしくはそれに類似してやや屈曲する。段は粘土を貼付して形成し、口縁部そのものはそれほど明確に屈曲しない。口縁部内面及び端部への加飾が顕著で、内面文様は施文範囲が広がり、文様の組み合わせが多様化する。「羽状文のみ」、「羽状文+円形刺突文」の組み合わせが多い。胴部文様も口縁部内面様と同様で多様な文様がみられる。羽状文・円形刺突文の施文例が多い。
- 4 頸部の立ち上がりがやや垂直気味で、口縁部が強く屈曲して外方に開く。端部は資料差があるが、端部を大きく下方に拡張する例を基本とする。口縁部・胴部とも加飾する傾向が強く、A3類と類似する。
- 5 やや資料差があるが、口縁部が短く外反して立ち上がり端部を上下に拡張する。現状では胴部まで復元できた資料は認められない。

壺B 口縁部が短く外反し、加飾のない大型の広口壺。

- 1 口縁部が大きく外反し、端部に顕著な平坦面をもつ。胴部は最大径が胴部中央より上位にあり、倒卵形を呈す。底部は矮小で壺A2に類似する。なかには脚台付の資料や胴部文様をもつ資料も認められる。これらは壺Aとの折衷的な内容をもつ資料と考えられる。
- 2 口縁部が壺B1より短く強く外反するもの。また、壺B1より器壁が厚く、粗いハケ目をそのまま残すものが多い。胴部は最大径が中央かやや下がり気味で、下膨れとなる。
 - a 口縁部が短く頸部から外反し、口縁端部に強い平坦面が認められるもの。
 - b 頸部がわずかに直立気味となり、口縁部が頸部から屈曲して立ち上がる。口縁端部に強い平坦面が認められるもの。
 - c B2a・b類より口縁部が短く立ち上がり、端部は強いヨコナデのため、端部下方が外方へ引き出され、端部が外傾するもの。
- 3 口縁部が強く外反し、端部をやや丸くおさめるもの。

壺C 口縁部が直線的に外傾しながら立ち上がる直口壺。胴部形状はそれほど肩部が強く張らない球形を呈す。胴部最大径の位置には資料差がある。

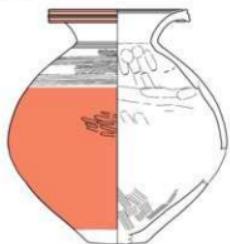
壺D 受口状の口縁をもつ壺。口縁部形状は資料差が大きく細分が可能だと考えられるが、資料数もそれほど多くないが、その形状で大きく3分する。

- 1 口縁部の屈曲が顕著で、弥生中期～後期初の近江湖南型の甕・壺に祖型がもとめられる。その時期に比べると屈曲や端部処理がやや退化し、胴部文様が上半に限られる。口縁部に刺突文がみられるが、資料差は大きい。
- 2 口縁部の屈曲が著しく、文様の消失傾向が強い。口縁刺突文の頻度が低下し、胴部文様も、無文もしくは刺突文のみとなる。
- 3 口縁部の屈曲が形骸化し、端部の平坦面もほとんど認められなくなる。端部の刺突文などにD1の残存的要素が認められる。胴部は球形にちかい。
 - a 端部を直立させるが、頸部が直立気味である。
 - b 口頸部の外反傾向が強く、端部が直立する以外はA類と共通する。

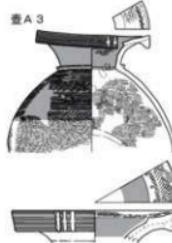
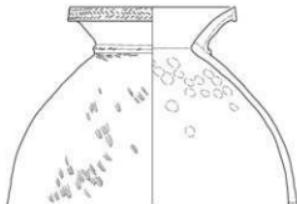
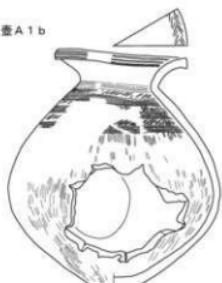
壺E 二重口縁壺。断片的な資料しか確認できていない。加飾傾向の強い資料が認められる。

V・VI・VII期

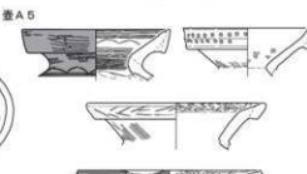
壺 A 1 a



壺 A 1 b



壺 A 2



壺 A 4

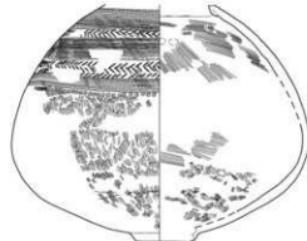
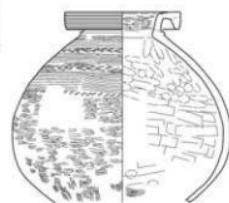
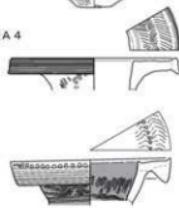


図12 I ~VII期土器分類図⑤

壺F 口縁部が短いもしくはわずかに直立する中型の壺。胴部形状は壺Cを上下に縮めた算盤玉状となる。丁寧なミガキ調整された精緻な資料が多いが、胴部中位に煤が付着する例が多い。

- 1 口縁部がわずかに立ち上がるものの。
- 2 口縁部がやや直立するもの。

壺G 中型で頸部径の大きい長頸壺。

1 後述する壺H類に類似するが、頸部の径が口径とそれほど差がないことが大きな特徴。口縁部のみ残存の場合、長頸壺との識別が難しいが、現状では口径15cmを越える大型品しか認められないもので、口径を分類指標とする。口縁形状に差異があるため、さらに細分可能な資料の可能性がある。

- a 口縁部が内湾しながら上方に立ち上がるものの。
- b 全形を知りうる資料が認められないが、口縁部が顕著に内湾するものをG1a類から分離した。加飾傾向が強い一群で出土資料のなかで特徴的な資料。直線文・連弧文で構成される。

2 口縁部が内湾して立ち上がり、やや扁平な胴部をもつ。

- a 口縁部に施文しないものの。
- b 口縁部に施文するもの。

3 口縁部が強く内湾し、端部に内傾面をもつ。口縁部の形状に個体差が大きく、さらに細分可能な資料も含むが、ここでは資料数も少ないので包括する。

- a 口縁部に施文しないものの。
- b 口縁部に施文するもの。

壺H 中・小型壺の長頸壺。

1 口縁部が直線的に開き、扁平な胴部をもつ中・小型の壺。最大径は胴部中央よりやや下がった位置にある。口径9cm、器高14cm程度が標準。

- a 口縁部に施文しないものの。
- b 口縁部に施文するもの。

2 口縁端部がわずかに内湾するもの。

- a 口縁部に施文しないものの。
- b 口縁部に施文するもの。

3 口縁部の外反傾向が強く、H1・2類より立ち上がりが短いものが多い。そのため、口径が小さくなり、器高も低いものが多い。

壺I 口縁部が短く外反する中・小型壺。

- 1 口縁部がくの字に外反するもの。少数ながら脚台付の資料も認められる。
- 2 H1類に類似するが、口縁部が内湾するもの。

壺J 小型壺を一括する。

1 小型の直口壺。口縁が短く直線的にハの字に開く。胴部は球形で中央に最大径をもつ。口径8cm前後、器高9cm前後の資料が多く、強く定型化された一群。

- 2 口縁部が内湾する小型の壺。加飾傾向が強い。
 - a 加飾のないものの。
 - b 加飾のあるもの。

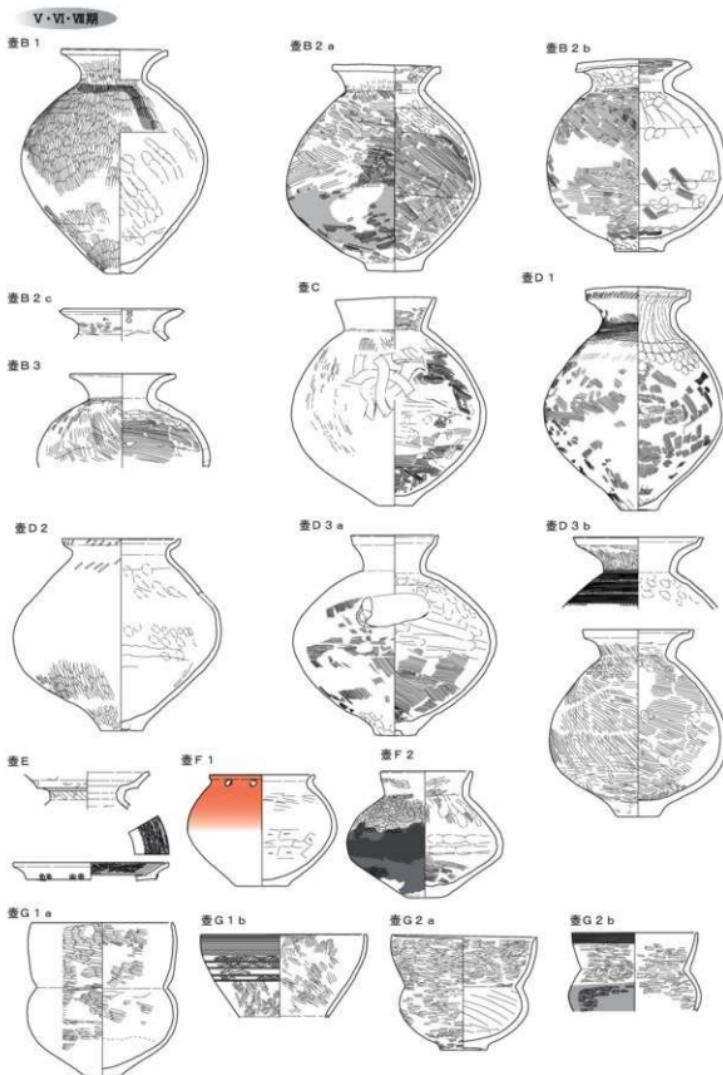


図13 I ~VII期土器分類図⑥

3 口縁部が短く直線的に開き、やや扁平な胴部をもつ小型の壺。G2類の小型品。最大径は胴部中央やや下がった位置にある。口径13cm前後、器高10cm前後が標準サイズ。口縁部に多条沈線で加飾することが多い。底部はやや突出気味となる。

4 G3類の小型品。口縁部に多条沈線などで加飾することが多い。底部はやや突出気味となる。口径13cm前後、器高10cm前後が標準サイズ。

壺K その他の壺。外来的もしくは折衷的要素が強く、出土資料のなかでは定型的な資料とは考えられないもの。

甕 器形の形状や大きさによってA～Fに分類した。

甕A 受口状口縁をもつ大型の甕。甕の主要器種で在地の甕の1つと考えられ、搬入品ではない。次第に口縁部の屈曲が形骸化するとともに口頭部が長頸化する。

1 屈曲部から口縁端部までやや長く内傾し、端部に強い平坦面をもつ。胴部の加飾が強く、IV期甕B類の要素が強く残る。底部は平底と脚台付の両方が認められる。

2 口縁部が強いヨコナデにとともに短く明瞭に屈曲する。

a 頭部に直立する部位が存する。端部に顕著な平坦面をもち、端部直下の内面にも強い凹面が認められる。口径15～17cmの大型品が多い。大半が口縁部外面に対して垂直方向から施文する。

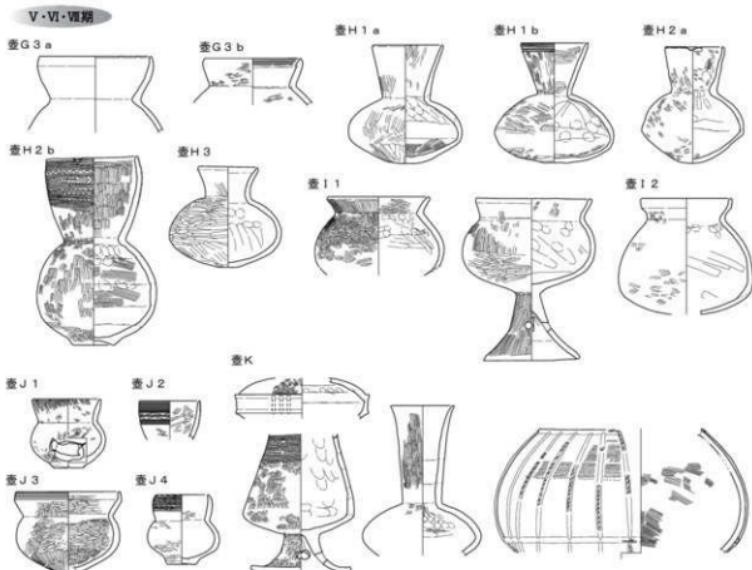


図14 I～VII期土器分類図⑦

刺突文をもつものが多い。胴部にも弥生時代中期から系譜をひく文様をもつが、胴部上半部1/2程度に限定される。直線文・刺突文の組み合せが通例で、次第に文様帶の減少、無文化へと加飾を消失する。

- b 口縁部の屈曲がやや弱まるが頭部の直立傾向が認められる。端部に平坦面をもつが、なかには幅狭の平坦面を形成するため、断面が三角形を呈す資料も認められる。甕A2aで認められた口縁部内面の凹面は形骸化する。端部への刺突文の比率はA1類と同様だが、端部下端に刺突を施す例が目立つ。胴部文様の傾向はA1類と同様。

3 頭部屈曲はくの字を呈し、口縁部の立ち上がりが長くなる傾向があり、そのため口縁部屈曲の度合いの見え方がやや弱くなる。また、端部内部調整のヨコナデもややあまくなり、屈曲が退化的となるが、端部の顯著な平坦面は堅持する。胴部文様は消失する例も多く、施文のある例は口縁部、胴部文様はA2類と類似するが、胴部文様は文様帶が狭小化する。

4 頭部・端部とも屈曲はやや弱く、口縁部の長頸化指向が顯著な一群。一見、くの字状の口縁にみえるが、端部平坦面は認められないもののつまり上げ状のヨコナデの痕跡が認められるもの。その形状は資料差が大きく、内面にわずかな凹面を残すもの、外面のみに屈曲部をもつものなど様々である。資料差があるが、形骸化した受口状口縁をもつ甕を一括した。

甕B くの字口縁台付甕。口縁部形状で細分した。

1 口縁部が短く外反するもの。

a B1b類より口縁部の外反が弱くなり、立ち上がりが長くなる。頭部の屈曲も弱く、胴部最大径は胴部中央付近である。端部は平坦面をもつが、刺突文はあまり顯著ではない。

b 口縁部が短く外反する。口径は20cmを越える大型品が目立つ。口径と胴部径の差が大きく、胴部径が大きく上回る。最大径は胴部中央より上位にある。端部は平坦面をもつが、刺突文の頻度は低い。胴部内面にはケズリ調整を行う。

2 口縁部が長頸化し、その立ち上がりが直線的となる。端部の平坦面はA類と比べると形骸化するが、依然として維持される。端部刺突文はほぼ消失する。口径は18cm前後の大型品。頭部以下に直線文と刺突文を例がみられる。胴部最大径の位置は胴部中央からやや下方へ移動する。胴部に直線文・刺突文をもつ例もある。

3 口縁部が短く立ち上がり、口縁部及び端部に強い指頭圧痕が認められる。器形の歪みが顯著で、端部平坦面も顯著だが、B1・2類と比べて静止的なナデによって整形されているため、粗雑なつくりが特徴的である。そのためか、端部下端の粘土がはみ出る例が多い。胴部はA1・2類に比べて最大径が胴部中央より下がり、やや下膨れ気味となる。文様はほぼ消失する。

4 胴部形状はB3類と同様だが、口縁部が比較的長く立ち上がり、端部を丸くおさめる。

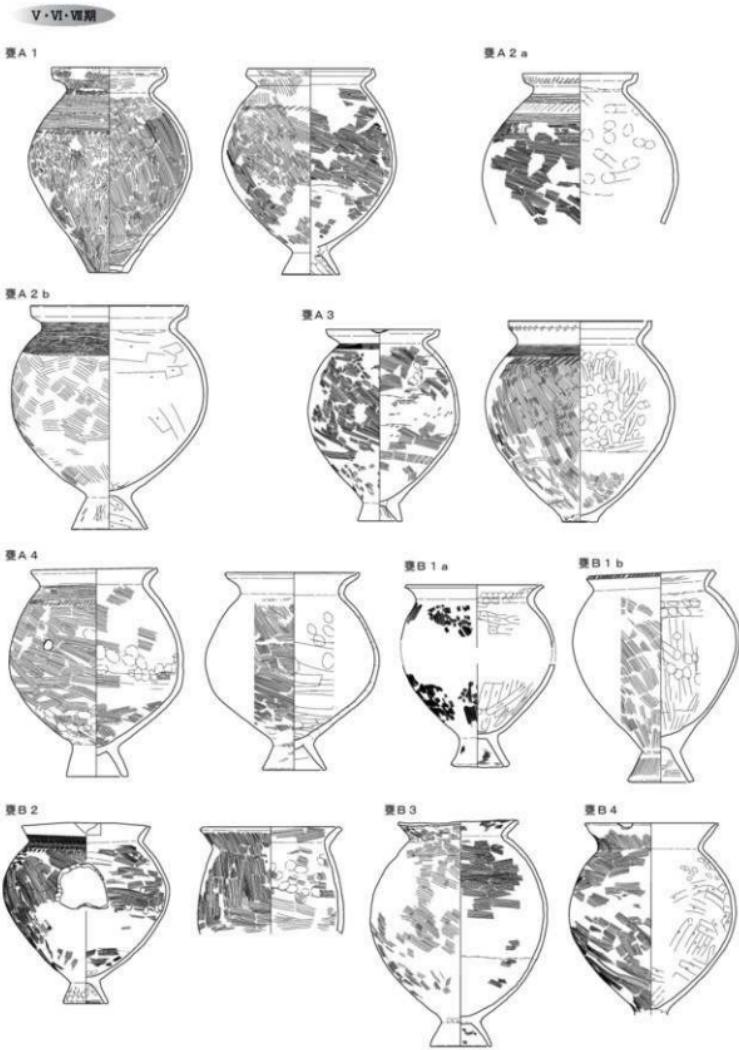
甕C B類とも類似するが、口縁部の形状がくの字を基本とするものやや内湾するもの。

1 端部を丸くおさめるもの。

2 端部が外傾するもの。甕A4との差別が難しい資料も認められる。胴部は下膨れ形状が著しい。

甕D S字甕を対象とするが、V～VII期は弥生時代後期～古墳時代前期初頭を対象とした分類であり赤塚分類D類はV～VII期に相当しないため、ここでは除外する。口縁部形状によって分類した。

1 口縁部の屈曲が明瞭で、押引きがあるもの。



- a 口縁部中段が垂直気味に立ち上がる。
- b 屈曲部から口縁部下段が外方へ強く外へ引き出されるもの。
- 2 口縁部の屈曲は堅持するが、押引きが認められないもの。
- a 口縁部形状は甕D1aに類似するが、外面に押引きをもたない。
- b 口縁部が短く明確に屈曲し、上段がわずかに外方へ引き出され、平坦面をもつ。
- 3 口縁部の屈曲が形骸化し、上段の平坦面を消失して肥厚が顕著。

甕E 中・小型品の甕を一括した。

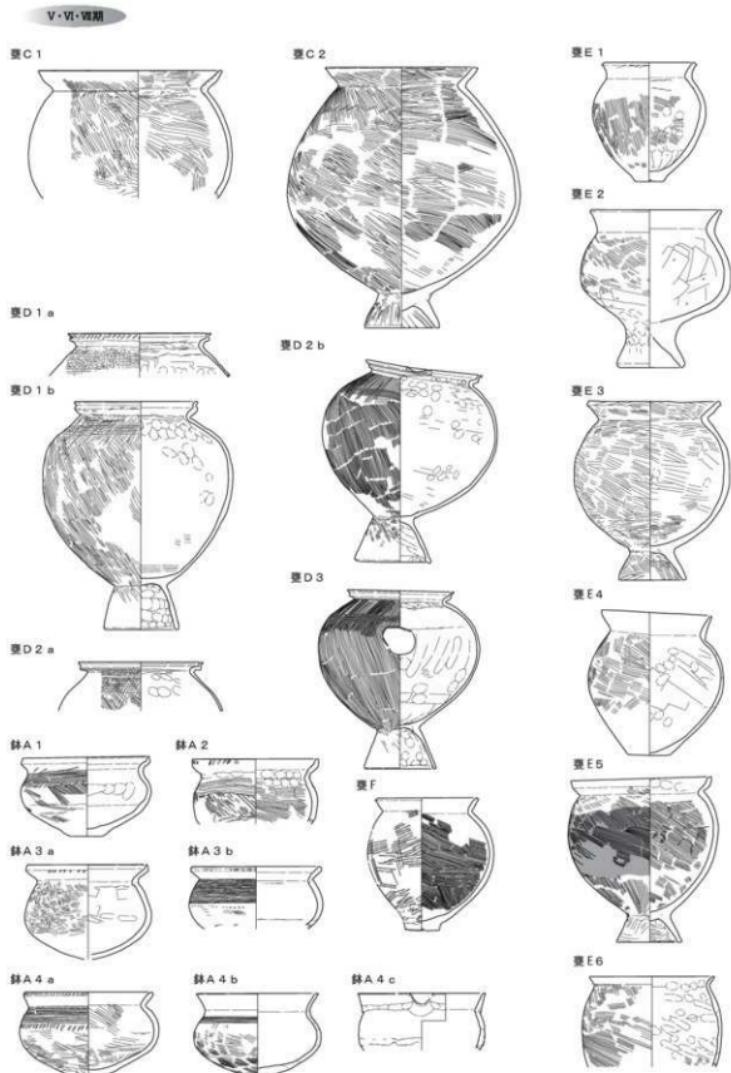
- 1 口縁部がくの字状となり、端部が比較的平坦な面をもつ。口径13cm前後の中型品。底部は平底となる。
- 2 口縁部が短く外反し、胴部下半がやや膨らむ。底部は脚台付である。その形状はB4類を上下に圧縮した形状をとる。
- 3 B3類と類似した口縁部形状をもつ中・小型の甕。
- 4 口縁部が外反して、端部をまるくおさめる平底の甕。口径13cm前後の中型品。
- 5 C類と類似して口縁部が内湾する小型の甕。
- 6 わずかながら組成する口縁部の立ち上がり著しく短く、器壁の薄い平底の甕。

甕F 外来的もしくは折衷的要素の濃いもの。畿内系のタタキ甕がわずかに認められる。

鉢 器形の形状によってA～Hに分類した。

鉢A 受口状口縁の鉢。底部が矮小化した平底、あるいはケズリ調整によって丸底化するものも認められる。口径は、16cm前後に集中する。

- 1 口縁部が明瞭に受口状口縁を呈し、甕A1～A3類に類似する。ただし、甕と比べると屈曲はやや弱い。外面への刺突と頸部直下の直線文・刺突文が顕著でその施文率は甕より高い。胴部で肩部が強く張り、口径を上回る。胴部が球形にちかくものや胴部最大径の位置が下がるものも認められる。
- 2 甕A類と類似して、口縁部の長頭化傾向が強く、端部の屈曲が形骸化する。端部内面のヨコナデ調整は意識されるが、平坦面作出をあまり意識されなくなり、断面形が三角形にちかくなる。文様は鉢A1と比べて、減少傾向にありハケ調整のみの資料もみられる。胴部最大径と口径の差は縮小し、口径が上回るものもみられる。最大径の位置は胴部中央からやや下方へ移行し、肩部の張りが弱くなり下半にかけてはやや屈曲して、直線的に底部にいたる。
- 3 口縁部の長頭化傾向がさらに顕著となり、端部の屈曲が痕跡的となるもの
 - a 口縁端部内面のヨコナデ調整への意識が希薄となり、その反面、外面への調整が意識され、端部外面に平坦面が形成されることが多く、端部が尖り気味となる。胴部径は口径を上回ることはほとんどみられなくなる。口縁部・胴部への加飾は堅持する。
 - b 端部の屈曲がさらに痕跡的となり、肥厚した端部のような形状を示す。
- 4 口縁部に屈曲部がなく、くの字状となる。その形状によって細分した。
 - a 口縁部が短く外反する。
 - b 口縁部が長く外反するようなる。器壁の薄い資料が目立ち、口縁部刺突文の施文率が減少し、胴部文様はやや乱雑となる。
 - c 口縁部の立ち上がりが直線的となり、端部に平坦面をもつ。甕B2と類似。ハケ調整・ナデ



調整のみの資料がみられ、文様を消失する傾向が強い。

鉢B 大型の有孔鉢を一括した。

- 1 口縁部が緩やかに立ち上がり、胴部が深い形状の鉢。
- 2 口縁部が大きく外傾しながら直線的に開く。端部は強いヨコナデによって平坦面をもち、やや直立気味となる。内外面ともに精緻なハケ調整がみられるが、一部、輪積み痕が残る粗いナデ調整のものも認められる。
- 3 B2類と類似するが、内湾傾向が強く、口縁部が内傾する。

鉢C 平底の底部から胴部がなだらかに立ち上がり、口縁部がわずかに内湾する。口径10cm、器高12cm前後に定型化されたものが多い。丁寧なケズリ・ハケ調整によって器壁を薄くする傾向が強い。丁寧なミガキ調整を施す精製品もみられる。

鉢D 半球状の胴部をもつ台付鉢。片口をもつ例も認められる。

鉢E 口縁部が直線的に外傾する小型の鉢。後述する手捏ね土器C類にも類似するが、ミガキ調整を施す精製品。片口をもつ例も認められる。

鉢F 半球形の胴部とやや突出した底部をもつ。小型のものには底部や底部側縁に穿孔をもつ例も認められる。

鉢G その他の鉢を一括する。

鉢H 外来的もしくは折衷的要素が強く、出土資料のなかでは定型的な資料とは考えられないもの。タタキをもつ資料が一部に認められる。

高坏 器形の形状や大きさによってA～Jに分類した。

高坏A 口縁部が短く直立するか内傾して立ち上がるるもの。

- 1 口縁部が屈曲して内傾しながら立ち上がる。脚部は付根から円錐状に開き、端部で外反する。
- 2 口縁部が短く直立する。

高坏B 口縁部が強く外反する外反高坏。口縁部形状による分類のため、脚部形状との関連に齟齬が生じる可能性がある。脚部形状の変化は口縁部形状とは別の変遷が想定される。口縁部の立ち上がりの長短、口縁端部形状の差異、口縁部の外反傾向から細分した。

- 1 口縁部が短く直立して端部は強いヨコナデによって端部が外方へ引き出された平坦面をもつ。脚部は付根から円錐状に開き、端部は屈曲して開き平坦面をもつ。
- 2 口縁部が短く外反するが、坏底部からの立ち上がりで直立指向が強いもの。

a 口縁部が短く立ち上がり、坏部口縁部高：坏部底部高=1：2ぐらいの関係にある。加飾傾向が強い。口縁部は坏部から直立する傾向が強く、その部位に擬回線を施文する例がある。端部のみを外方へ強く引き出し、その内面にも擬回線を施文する例がみられる。そのため、口径と坏部底径との差は小さい。口縁部には擬回線の他に波状文もみられる。脚部は完存する例に恵まれないが、やや柱状のやや長脚である。

b B2a類に比して、口縁部外反傾向が強まり、坏部口縁部高：坏部底部高=1：1へとやや坏部が浅くなる。また、口径と坏部底径の差が大きくなる。口縁部の立ち上がりは直立傾向を保持するものの、その位置が高坏B2aより下方へ移行して口縁部中位から外反して端部にいたる。なかには、坏底部からすぐに外反する資料もみられる。加飾傾向はやや弱まり、そ

の頻度は低い。端部は外方への突出がなくなり、平坦面のみとなる。脚部は付根から外方へわずかに開く円錐状を呈し、裾部で強く外反する。

- c 口縁部の外反傾向が一層強まり、直立部位が痕跡化する。なかには坏底部から極端に外反する資料もみられる。口縁部と坏底部との屈曲が内外面ともに形骸化し、底部高に減少傾向がみられる。なかには口縁部高が大きく上回る資料もみられる。端部平坦面の退化傾向はあるものの保持する。

3 口縁部が坏底部から強く外反するもの。

- a 口縁部は外反傾向が顕著だが、B2a類に類似する資料も多い。口縁部の外反傾向に連動して坏底部高が減少し、坏部との接合部位でみられた直立部位は痕跡的となる。端部はやや丸いか平坦である。脚部は付根から円錐状に開き、裾部でやや外反する。
- b B3類aより口縁部高が高く、口縁部と坏底部の屈曲がやや弱まる。端部は尖り気味である。脚部が付根からしばらくは柱状気味で裾部で外反する。透孔の位置がやや上位に移行する。
- 4 坏底部から口縁部がすぐにゆるやかに外反しながら立ち上がり、C1類の区別が困難で資料の差が大きい。端部は丸くおさめる。口径25cmを越える大型品が目立つ。口縁部と坏底部との屈曲がゆるやかで坏底部高より口縁部高が上回るようになり、口縁部が長く立ち上がる。脚部は完存する資料から判断すると、円錐状に開き、裾部はあまり外反しない。なかには2穿孔の資料もみられる。文様は消失する。

高坏C 有段（稜）高坏。

- 1 口縁部がやや外反するか直線的に外傾し、口径26cm前後の大型品。口径：坏底径 = 2 : 1 程度。脚部は付根から円錐状に開き、裾部でやや内湾する。
- a 口縁端部を尖り気味に丸くおさめるもの。
- b 口縁端部に内傾面をもつ。また内面の段が顕在化する。脚部は完存する資料から判断すると長脚となり、内湾傾向が強い。
- 2 C1類と類似するが、坏部底径がやや縮小し、口縁部の立ち上がりが開き気味となる。脚部は低脚化が進行し、透孔付近で強く内湾するか強く外反する。
- a 端部を尖り気味にまるくおさめるか外傾するわずかな平坦面をもつもの。
- b 口縁端部に内傾面をもつもの。
- c 口縁内面に多条沈線をもつもの。
- 3 C2類に基づく基本形状は類似するが、口径：坏底径 = 3 : 1 とさらに坏底径の縮小がさらに進み、口縁部の開きが顕著となる。脚部の低脚化が著しく、透孔付近の屈曲は痕跡化してわずかに内湾する。
- a 端部を尖り気味にまるくおさめるか外傾するわずかな平坦面をもつもの。
- b 口縁端部に多条沈線をもつもの。端部を肥厚して多条沈線をもつ例が多い。
- 4 C3類に酷似するが、坏底径が脚部と付根の径と大きな差がないほどさらに縮小化する。坏底部内面の段は堅持し、外面の坏底部の稜も比較的明瞭である。
- a 端部を尖り気味にまるくおさめるか外傾するわずかな平坦面をもつもの。
- b 口縁端部に内傾面をもつか、その部位にのみ多条沈線をもつもの。
- c 口縁部内面中位からやや下がった位置まで多重沈線のみを施文する。



図17 I ~VII期土器分類図⑩

- d 口縁部内面を多条沈線間に山形文、斜格子文を加えて、多様な文様を2帯～4帯施文する。
- e 連弧文で加飾される高坏。文様帶は多条沈線・連弧文の3帯構成が多い。

高坏D C4類の坏底径がさらに縮小して底部にあまり平坦な面がみられなくなり、口縁部はさらに外方へ開き、側面形状が皿形にちかくなる。内面の段は保持している。脚部は付根から円錐状に開き、坏部高が減少していくのに対しても、ややその高さが増すように見える。

- 1 端部を尖り気味にまるくおさめるか外傾するわずかな平坦面をもつもの。
- 2 口縁端部に内傾面をもつか、その部位にのみ多条沈線をもつもの。
- 3 口縁部内面中位からやや下がった位置まで多重沈線のみを施文。
- 4 口縁部内面を多条沈線の間に山形文、斜格子文を加えて、多様な文様を2帯～4帯施文する。
- 5 連弧文で加飾される高坏。文様帶は多条沈線・連弧文の3帯構成が多い。

高坏E C類と類似するが、坏部断面形が皿形を呈し、内面には直線文と連弧文が施文される。内面には段が認められる。

高坏F B類に類似する中・小型の高坏。

高坏G C類に類似する中・小型の高坏。

- 1 C1類に類似する中・小型品。口径15～16cm前後。
- 2 C1類と坏部形状が類似するが、脚部裾部が強く外反し、口径と底径のほぼ差がないものも認められる。脚部は付根から強く外反する。
- 3 C3・C4類に類似する中・小型品。
 - a 加飾のないもの
 - b 口縁部直下のみに多条沈線を施文。脚部にも施文する例もある。
 - c 口縁部中位より下がった位置まで、多条沈線に加えて山形文などを施文し、多様な文様をもつ。C3d・C4d類と同様の文様を脚部にも施文する例が多い。

高坏H 坏部が椀状となる高坏

- 1 無文の椀状高坏。出土量は少ない。
- 2 加飾のあるものを分離。文様傾向は加飾のある有段高坏と類似するが、加飾は外面のみ。小型品で精緻な資料が多い。今のところ多条沈線のみの資料は認められない。

高坏I ワイングラス形高坏。

- 1 口縁部が直立し、坏底部が強く屈曲するもの。
 - a 口縁部が内傾し、坏底部との境界で強く屈曲する。坏底部は直線的に開く、屈曲部直上には擬凹線と円形刺突文が施文されるなど加飾される。
 - b 坏部の形状は高坏1aに類似するが、屈曲部がやや鈍化する。
- 2 坏部は椀状を呈して屈曲部は形骸化し、口縁部が直立する。
- 3 口縁部が内傾し、全体の形状は1b類に類似する。

高坏J その他。外来的要素の影響の強い、もしくは搬入品と可能性のあるもの。

器台 器形の形状によってA～Cに分類した。

器台A 口縁部及び脚裾部の外反が強く、基部径が大きいもの。

- 1 いわゆる中空器台で基部径が大きい。

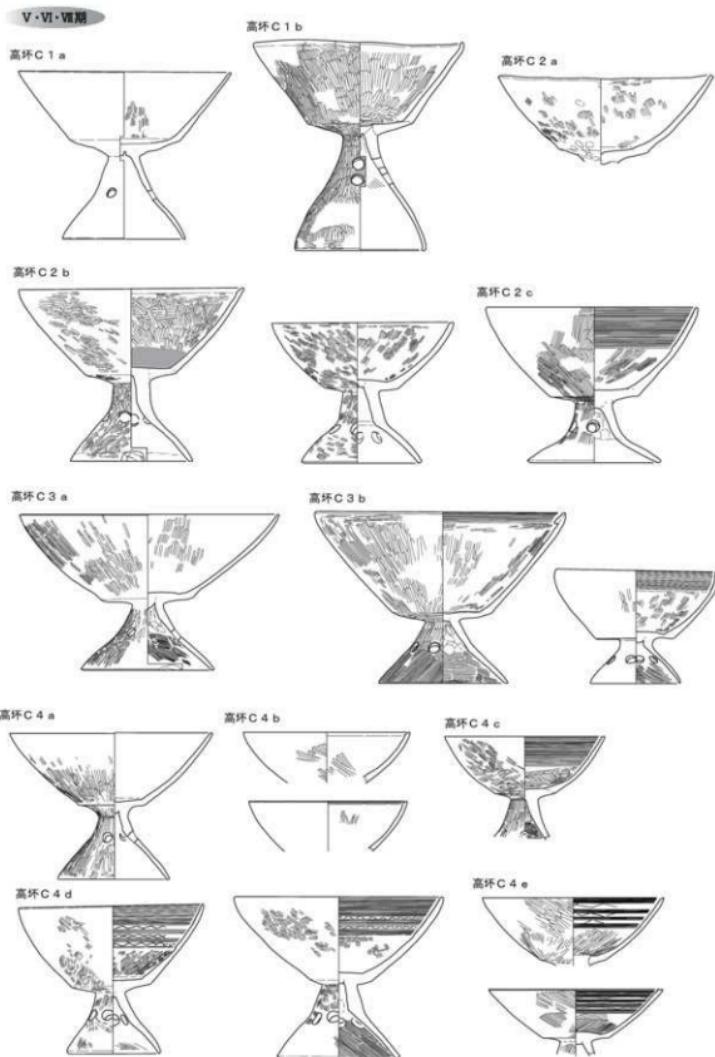


図18 I～VII期土器分類図⑪

a 柱状部が長いもの。口縁端部、内面、脚部への加飾傾向が顕著で、擬凹線、円形浮文、刺突文などさまざまな文様が認められる。透孔の位置は脚屈曲部。

b A1a類とB類の中間形状を示す。A1a類より口縁部・脚裾部の外反が弱くなり、柱状部が縮小して短脚化及び付根からすぐに外反する傾向がみとめられる。施文は減少する。

2 脚部が付根から円錐状に聞く。

器台B 器台のなかでは最も量が多い。口縁部が付根から外方へ大きく開き、直線的もしくはわずかに外反する。端部には擬凹線を施すものもみられる。脚部形状はさまざまなものがみられる。脚部形状も含めて細分する。

1 口縁部の形状が直線的なもの。

a 中空器台の要素が残り柱状部がわずかに直立するが、基部径は縮小する。根部は少し屈曲して円錐状に聞く。

b 付根直下から脚部が円錐状に聞く。長脚となるものが多く、透孔位置が上方に移動し、2孔となるものもみられる。

c 口縁部を下方へ拡張し、擬凹線・円形浮文を施文するなどを加飾する。加飾の強い器台を分離した。

2 口縁部が明瞭に内湾するもの。脚部形状で細分する。口縁部への加飾はほとんどみられない。

a 受部形状はわずかに内湾傾向をもつが、脚部はB1b類の形状を踏襲する。

b 長脚でB1b類に類似。付根からわずかに内湾傾向をもって円錐状に聞く。

3 受部は内湾が顕著で、脚部中位や上方の透孔位置で強く屈曲して、内湾して裾部にいたる。透孔位置が上昇する。内湾形状には資料差が大きい。

4 加飾の強い一群で、形状が上記の分類にあてはまらないもの。

器台C 口径10cmに満たない小型の器台。口径より脚径が上回り、脚部は内湾傾向をもつ。

1 口縁部が短く直線的に外傾する。

2 口縁部が短く円錐状に聞く。脚部も円錐状に聞き、口縁部・脚部ともに内湾傾向をもつ。

3 受部が浅い皿状となる。

手捏ね土器 ユビナデで成形された小型品。一部にハケ調整を残すものも認められる。

A 手捏ねで成形され、口縁部は内湾する。口径8cm・器高4cm前後。口縁端部をわずかに外方へつまみ出し、端部の凸が顕著。

B A類に類似するが、口縁端部の屈曲がないもの。

C 手捏ね成形で口縁部が直線的に外傾する。

D 手捏ねで成形され壺形土器に類似する形状をもつもの。なかには例外的なミガキ・ハケ調整のものを含む。

E 手捏ねで成形され、上記分類に相当しないもの。

手培り形土器 覆部まで完存する資料は1例のみ。覆部には斜格子文を施文し、胴部に突帯が貼付される。覆部には斜格子文のほかに波状文や山形文を加飾する例があり、加飾傾向が強い。

土製品 土製品を一括する。蓋形や合子形に類似するものや、紡錘車、土製円盤などを含む。

その他 上記分類に相当しない不明品。



図19 I ~VII期土器分類図②

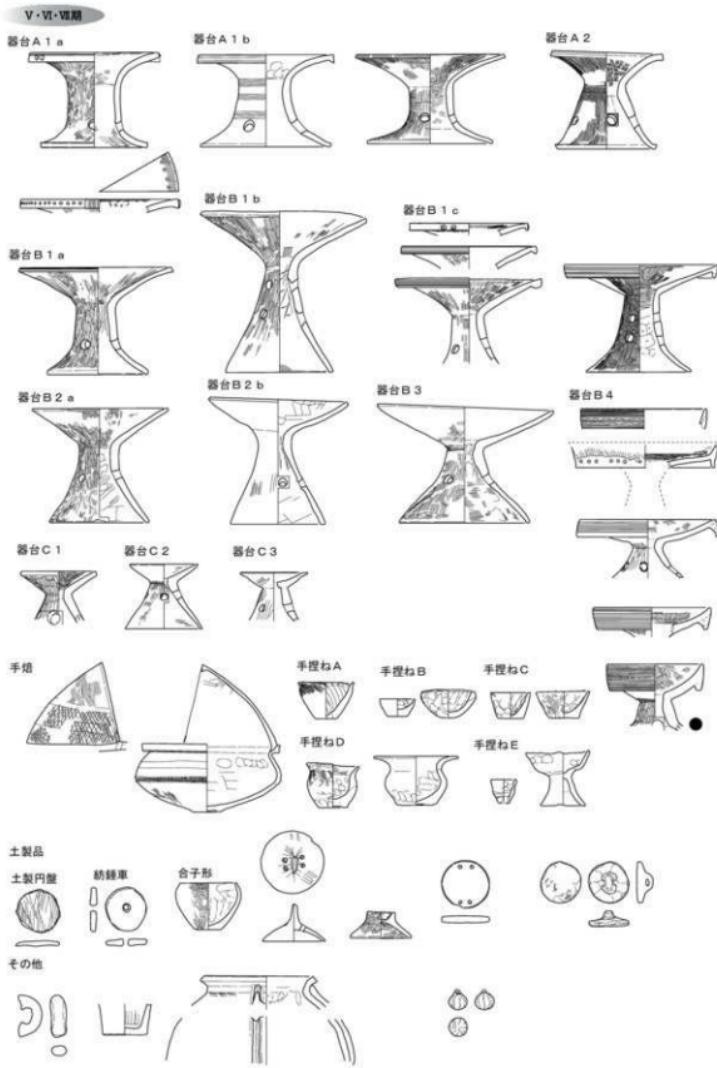


図20 I～VII期土器分類図⑪

4 石器類

B地区で出土した石器類のうち、今回報告するのは305点（表6）である。以下、各器種の分類、出土点数、石材について順に報告する。

打製石鏃 鋭利な先端部と基部をもつ打製のもの。10点出土した。平面先端角が50°以上の先端部をもつものをA類、50°未満のものをB類とし、さらに、基部の形状から圓状のわざかな抉りが入るものと丸みを帯びた深い抉りが入るものとを2類、「く」の字状の浅い抉りが入るものと3類、いわゆる有茎鐵で、基部に茎部をもつものを4類に細分し、この組み合わせで分類した。各類の出土点数は、A1類1点、A4類1点、B1類3点、B2類1点、B4類4点である。先端角は50°未満で浅い抉りのタイプと茎部をもつものが多い。石材は、下呂石2点、チャート7点、砂岩1点である。

磨製石鏃 鋭利な先端部と基部をもつ磨製のもの。2点出土した。石材は泥岩2点である。いずれも側面が弧状で基部に浅い抉りをもつタイプで基部中央に表裏両面から円錐状の穿孔が見られる。

石錐 鋭利で細い錐状の先端部をもつもの。錐部と基部との境が不明瞭な棒状のタイプが1点出土した。石材はチャートである。

刃器 剥片の縁辺に連続的な剥離によって構成される刀部をもつもの。1点出土した。石材は、砂岩である。刃部数と刃部調整により分類した。片面調整により刃部を1箇所作出了したものが1点出土した。

石包丁 楕円形を呈する扁平な磨製石器で長辺に刃部があるもの。直線刃半円形のものが1点出土した。石材は泥岩製である。

楔形石器 剥片の相対する二側辺に潰れ状の剥離痕が発達するものが1点出土した。石材は下呂石である。

R F 剥片の側縁に大小の剥離を施して刃部を形成するが、連続性・統一性に乏しく定形的な刃部をもたないもので、18点出土した。石材は、下呂石1点、凝灰岩2点、ホルンフェルス9点、チャート1点、泥岩5点である。

剥片 剥片剥離によって生産された素材で、19点出土した。石材の内訳は、下呂石1点、サヌカイト3点、安山岩1点、結晶片岩1点、ホルンフェルス2点、チャート4点、石英1点、砂岩2点、泥岩4点である。

磨製石斧 略長方形の形態で一端に刃部を研磨によって作り出しているもので、5点出土した。石材は、ハイアロクラスタイト3点、安山岩1点、泥岩1点である。ハイアロクラスタイト製と安山岩のものは蛤刃石斧、泥岩製のものは扁平片刃石斧である。

凹石 主に拳大の礫の平坦面に敲打による凹状の痕跡がみられるもので、1点出土した。石材は、砂岩1点である。

叩石 主に楕円状・棒状の礫の側面及び長軸端に、剥離を伴う敲打の痕跡がみられるもので、53点出土した。石材の内訳は、ハイアロクラスタイト1点、流紋岩3点、安山岩3点、花崗岩1点、花崗閃綠岩2点、閃綠岩1点、ホルンフェルス1点、凝灰質砂岩3点、チャート1点、砂岩40点である。

表6 石器器種別出土点数一覧表

器種	打製石鏃	磨製石鏃	石錐	刃器	石包丁	楔形石器	R F	剥片	磨製石斧	圓石	叩石	磨石	砥石	台石	石塊	絆合製品	玉類	石製品	合計
点数	10	2	1	1	1	1	18	19	5	1	53	4	163	1	1	12	6	6	305
割合(%)	3.3	0.7	0.3	0.3	0.3	0.3	6.0	6.2	1.6	0.3	17.4	1.3	53.5	0.3	0.3	3.9	2.0	2.0	100.0
質量(g)	23	6	6	130	16	13	1,383	285	1,424	294	36,458	2,055	111,940	5,385	6	62	6	1,883	161,375

磨石 主に拳大の川原礫の平坦面や側面に磨面がみられるもので、4点出土した。すべて梢円形のもので、石材の内訳は、安山岩3点、砂岩1点である。

砥石 磨の表面に構状や帶状・平面状に砥面が認められるもので、163点が出土した。石材の内訳は、流紋岩3点、安山岩1点、閃綠岩2点、ホルンフェルス5点、凝灰岩15点、砂質凝灰岩6点、砂岩97点、凝灰質砂岩18点、泥岩13点、凝灰質泥岩3点である。

台石 人頭大の礫の表面に敲打痕が認められるもので、砂岩製1点が出土した。

石鋸 扇平又は板状の石を利用し、擦り切りの機能を有する刃部を作り出したもので、1点出土した。石材は、紅簾石片岩である。

軽石製品 軽石製の製品をまとめた。12点出土した。5cm以下のものが多く、砥面のような平坦な面を形成するものもあるが、自然面と加工面の判断が難しい。

玉類 曲がった形状のものを勾玉、管状のものを管玉、直径と厚みがほぼ同じで直径2cm以下のものを小玉とした。管玉と小玉が出土した。管玉は瑪瑙製1点、小玉はガラス製4点、翡翠製1点である。

石製品 剥離・敲打・研磨によって長く棒状に成形されたもので、6点出土した。このうち石棒と判断できるものが5点出土した。石棒の石材は黒色片岩3点、結晶片岩1点、片麻岩1点である。用途不明の石製品はホルンフェルス製である。

5 金属製品

B地区では、金属製品が遺構から16点、包含層41点合計57点出土した。包含層からの出土が多い。出土した器種別点数は、銅鑑3点、鋤先1点、刀子1点、楔1点、釘2点、煙管9点、古錢19点、雁首錢2点、鉛玉4点、用途不明金属製品13点である。

6 木製品

B地区では、木製品が遺構から879点、包含層141点合計1020点が出土した。遺構では特に構造遺構や水制作構から出土量が多い。分類は、奈良国立文化財研究所編『木器集成図録 近畿原始編』及び、山田昌久編『考古資料大観8』『弥生・古墳時代 木・織維製品』をもとに分類を行った。

出土した用途別では土木部材・建築部材が多い。出土した器種別点数は、木材加工工具1点（縦斧1）、起耕・整地具58（アカガシ亜属製の製品が特定できないもの及び未成品41、直柄平鍬3、直柄又鍬3、曲柄鍬1点、泥除6、鋤2、横刃鋤2）、収穫具4点（木包丁1、摘み鎌2、鎌1）、水田作業具6点、敲打・潰碎具4点（横槌2、堅杵2）、編物・織機関連具7点（籠5、杼1、織機部材1）、運搬具1点（天秤棒1）、漁撈具（網端3）、武器・武具3点、容器15点（槽・盤15）、祭祀・儀礼関連具10点（形代2、竿の他7、衣笠1）、家具・生活雑具4点（椅子・腰掛2、台1、杓子1）、建築部材158点（柱根・柱材146、礎板3、台輪1、屋根材1、横架材1、梯子2、床板3、鐵放し1）、土木部材213点（矢板6点、杭・杭状棒材207）、器種認定できないものの器具部材45点、構造部材37点、加工材・残材・木屑443点した。この他に、曲物7点、下駄1点が出土した。

第5節 西部

1 周溝墓

B地区西部の発掘調査では、方形周溝墓5基を確認した。周溝墓は、周溝底面付近から出土した供献土器の時期や、群集した方形周溝墓の位置関係から、IV期・弥生時代中期中葉から後葉の方形周溝墓と考えられる。また、周溝墓の墳丘や埋葬主体部については、後世の土地利用によって削平を受けしており、確認できていない。ただし、位置的に埋葬主体部となる可能性が考えられる土坑が存在するが、周溝墓との関連性を示す出土遺物が認められなかったため、土坑に含めて報告した。

SZ050（遺構：図22・23、遺物：図24・25）

検出状況 西部の北東部に位置する。SB098・SB099・SB100・SB101・SB102の床面で平面形を検出した。西溝及び南溝を確認した。南溝はSZ051と接し、SZ051北溝を削平する。

方台部 残存する方台部の規模は、南北5.17m×東西7.3mである。西辺・南辺は直線的だが、南東隅はやや不整形である。墳丘及び主体部の痕跡は認められなかった。

周溝 西溝は外縁中央がわずかにふくらみ、深さ0.5mで断面形状が逆台形を呈す。10層は内縁側の底面付近にある灰色土で構築直後に墳丘から流入した土層と考えられる。南溝は調査区東壁面付近でやや軸線を変えており、この箇所が隅部であろう。全体に不整形で、断面形も皿状であるが、深さは0.8mとやや深い。内縁側から埋没が進行したとみられる。

遺物出土状況 土器はI～VII期の土器片が西溝中央、南西隅部、南溝中央で出土した。多くが中層から上層で破片点数900点あまりが出土した。IV期の良好な資料が出土したが、溝底面に設置された状

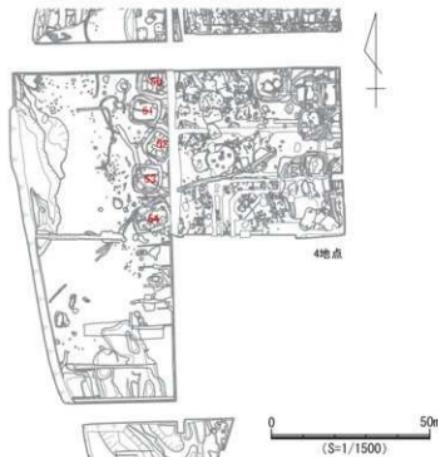


図21 方形周溝墓位置図（数字は遺構番号）

況は認められなかった。構築後しばらく時間が経過した後に周囲から転落したものしくは、重複するV～VII期の住居跡の構築に伴いIV期の資料が原位置から二次的に移動して堆積した可能性がある。

西溝からはIV期壺底部10が出土した。南西隅から出土したIV期壺A類8は南溝中央付近で出土した破片と接合したので、転落もしくは二次的移動があつたことを示す資料である。南溝中央からは壺(3～6・9)、高坏(1・2)、甕(14)が出土した。4・9とともにIV期壺A1類。14はIV期壺A類。その他、破片資料だがI期(15)、IV期(7・12・16)、V～VII期(13・17～19)が周溝内から出土し、複

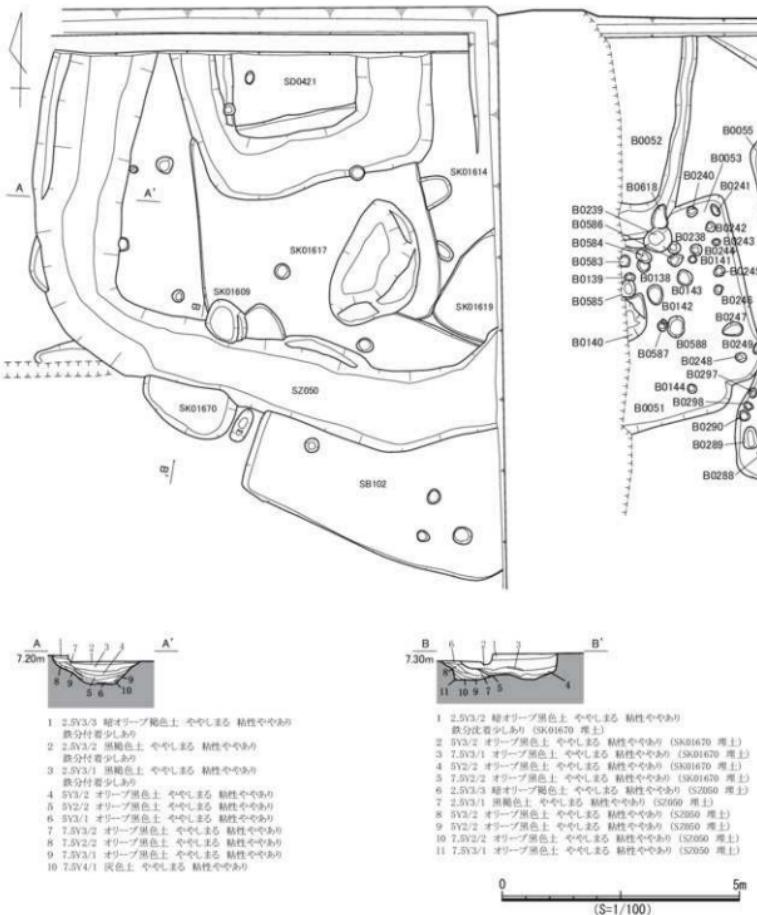


図22 SZ050遺構図(1)

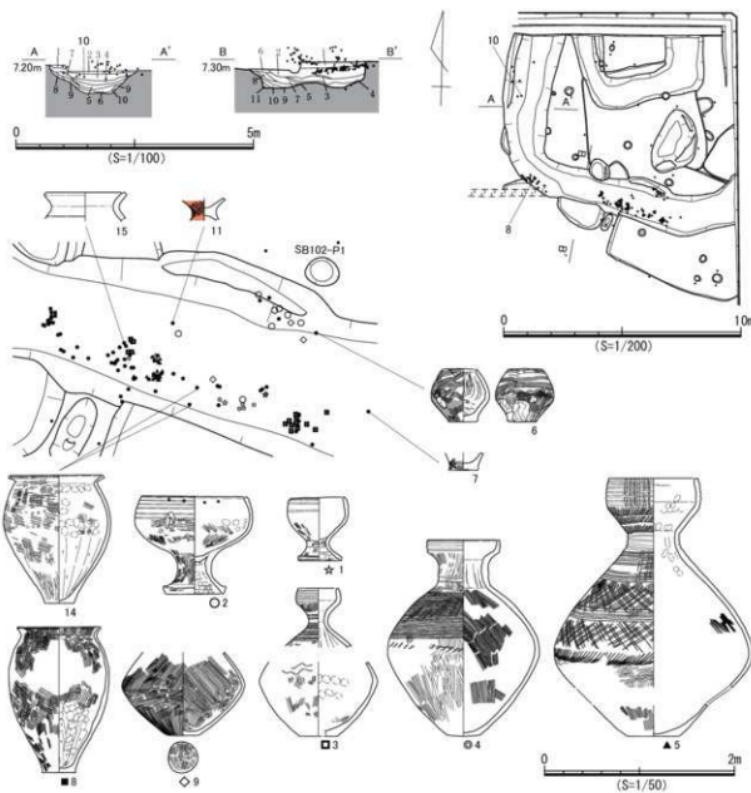


図23 SZ050遺構図（2）

数時期の資料が混在するがI～IV期までの土器片は主に中層、V～VII期の土器片は上層に多い傾向が認められた。

出土遺物 10は口縁部の外反が弱く、口縁部にもタタキが認められる。内面のケズリは胴部上半まで及ばない。4は頭部に2条の沈線があり、胴部中央に刺突文がみられる。また、胎土が茶褐色を呈し、在地のものとは異なる。9は口頭部を欠損する。3・5は壺A2類。3は破損が著しい。胴部の文様も摩耗が顕著で不明瞭である。5は器高43cmの大型壺。口縁部は完存するが、胴部は1/2程度の遺存である。袋状口縁に7条の凹線を施し、頭部には刺突文を3帯施文する。口縁部と胴部上半には複合クシによる縦位沈線と直線文、胴部上半～中央には扇形文・斜格子文を施文する。文様帶最下段にも刺突を加える。6は小型の壺で口頭部を人為的に欠損させている。底部付近は打ち欠きの痕跡が數か所で認められ、剥離した断面には被熱した状況が確認できる。1は小型の高杯。脚部が低脚で、本遺跡

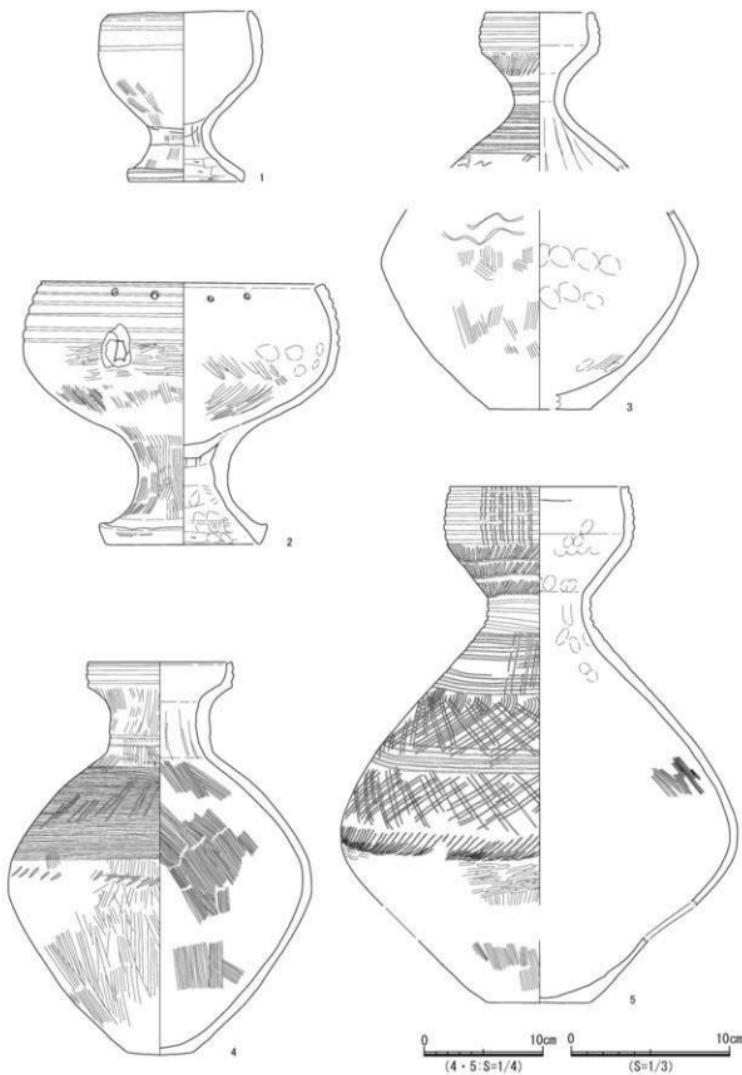


図24 SZ050遺物実測図（1）

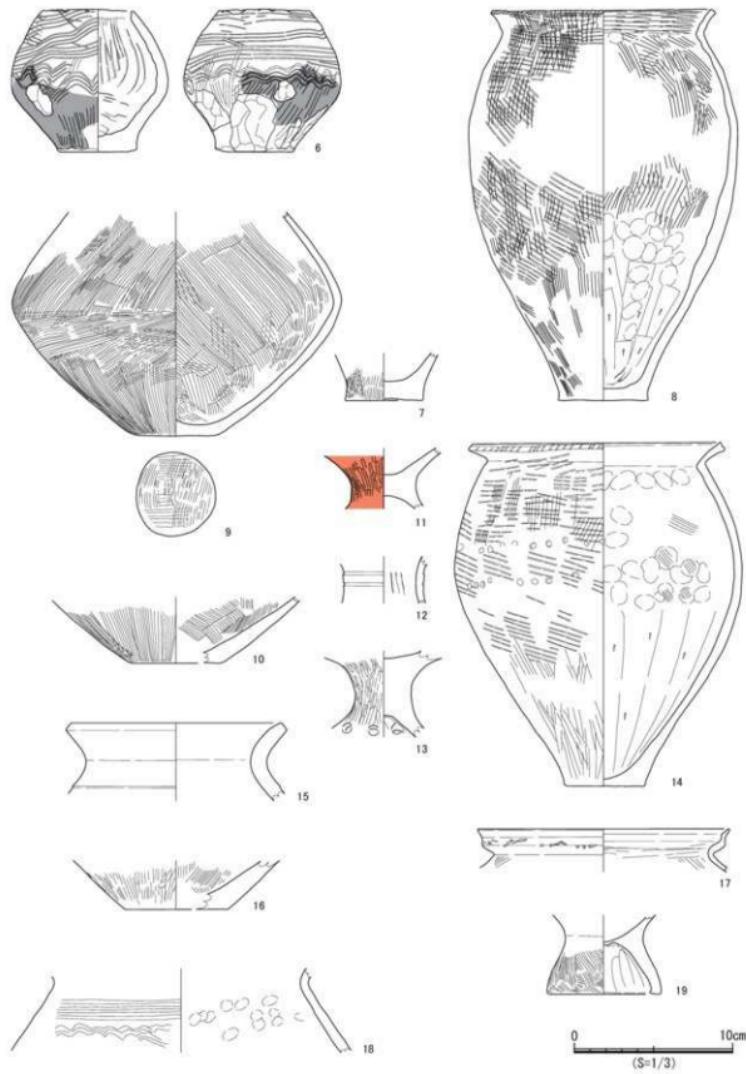


図25 S2050遺物実測図（2）

中では出土例の少ない資料。口縁部にやや間隔をおいて3条の凹線が認められる。2は口縁部に2対1組の穿孔が認められる。脚部は裾部で強く外反し、端部は平坦面をもつ。14は口縁部が強く外反し、胸部はやや肩が張る形状を示す。胸部中央には2列の刺突文が認められる。残る資料は破片資料を提示した。15はⅠ期壺の口縁部。1点のみの出土。南溝中央から出土した。7・12・16がⅣ期の資料。13・17～19がV～VII期の資料。18は甕A類胸部でV期に相当する。17はS字甕A類でVI期。

時期 構築時期は明確な供献土器は認められないものの、IV期の土器資料の遺存状況がよく大きな時期差も認められないので、遺存状況のよいIV期土器資料（1～6、8・9・14）からIV期～2期と考えられる。

SZ051（遺構：図26・27、遺物：図28～30）

検出状況 西部の北東部に位置する。SB102・SB103の床面で長方形の平面形を検出した。北溝はSZ050南溝によって外縁が切られ、SZ050より後出す。

万台部 万台部の規模は、南北6.1m×東西7.5mをはかり、やや東西に長い長方形である。北・東・西側の各辺は比較的直線的だが、南辺は弧状を呈す。墳丘及び主体部は確認できなかった。

周溝 上部を周辺造構によって削平されているが、溝幅1.5m・深さ0.6m程度が残存し、比較的残りが良いと考えられる。各断面とも逆台形を保持、壁面の崩落はそれほどない。また、各断面の堆積状況も類似する。B断面南側を例にあげる。大きく2分できる。5～7層までが第1段階の堆積であろう。構築直後からと想定できる周囲からの流入土とその中央を埋める堆積が相当する。1～4層は安定した水平堆積でゆっくりした堆積状況が考えられる。1層については周囲の後出造構との関係から人為堆積の可能性もある。北溝は直線的だが、残る溝はやや弧状を呈す。

遺物出土状況 出土土器は北西隅、南西隅、東溝～南東隅から多く出土した。周溝から出土した土器破片数は2500点を越えるが、中層～上層にかけて出土し、その時期は縄文時代晩期～VI期まで複数時期に及ぶ。V～VII期の資料はほぼ上層に限られることから、上層はこの時期まで埋没を完了していないかったと考えられる。周囲にはV～VII期の遺構が展開しているため、V～VII期の遺構から流入したとみられる。北西隅からは25・29・32・37が出土した。25・29は縄文時代晩期の資料。32・37とともにV期の資料。東溝～南東隅からはIV期の20～23、V～VII期の26～28・30・31・34・35・38～41が出土した。遺存状況から壺23が供献土器の可能性が最も高いと考えられる。壺22、甕20・21は破片資料だが、23と同時期とみてよい資料である。南溝出土の壺43、北溝出土の壺44・45も壺23とほぼ同時期の破片資料だが、中層でも下方から出土した。

出土遺物 23は摩耗が進み文様はやや不明瞭だがIV期の壺B類。口縁端部に凹線2条、胸部には直線文・波状文を交互に施文する。22・43・44は壺A類であろう。22・44には頭部に刺突文がある。残る資料の多くはV～VII期の資料にあたる。高壙I類の37、甕A類32・33・35、甕B類34がV期に相当する。37は裾部が強く外反し、端部に平坦面をもつ。32は平底の底部まで復元できた資料。口縁部が強く屈折して端部が直立する。胸部の肩部は胸部上半にある。33・35とともに口縁端部の平坦面が顕著である。34は胸部内面にケズリがみられる。26は内外面に山形文がみられるが、いずれも連弧状の表現である。VII期の資料であろう。36は口縁部の内湾が顕著で、内外面に粗いハケ目が認められる。38・55・56は甕D類でS字甕A類～C類に相当する。47～49は内面加飾のある高壙。49はC類で、47はD類であら

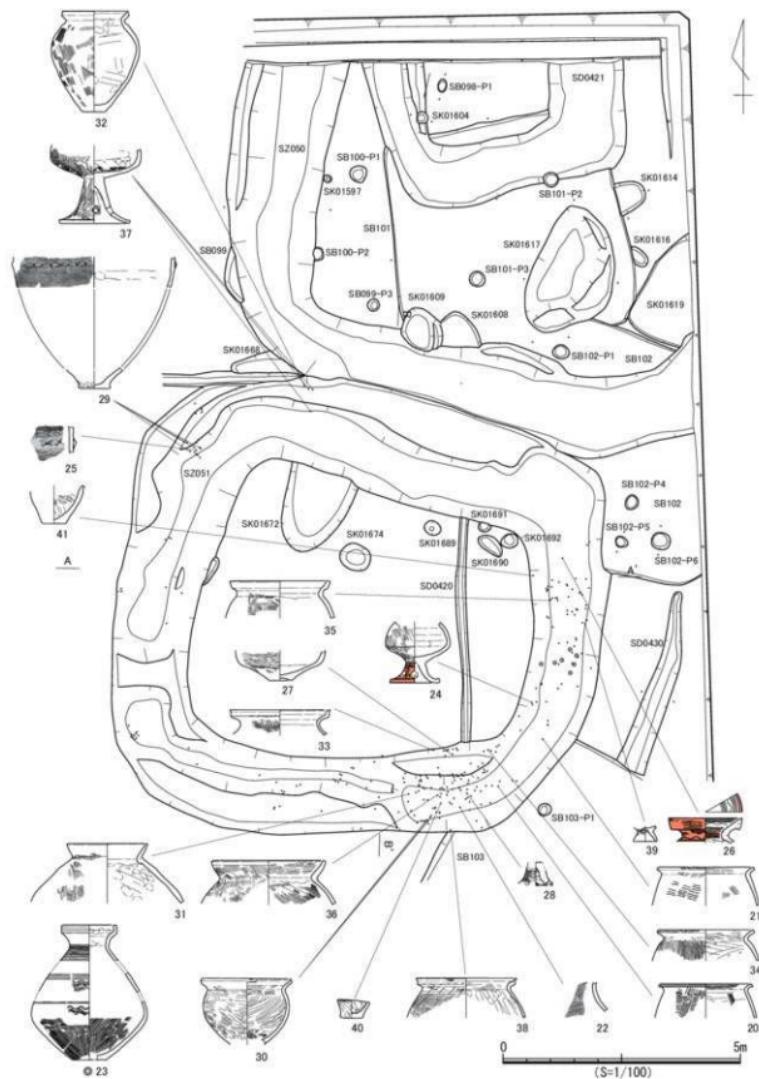


図26 S2051遺構図(1)

う。貝殻施文の連弧文と極細の多条沈線をもつⅧ期の資料である。48は高坏H類。外面に47と同様の文様が認められ、同様にⅦ期に相当する。51・52は内面に文様のある壺B類。51は円形刺突文、52は線刻にもみえる斜格子状の文様が認められる。以上が、VI～VII期の資料である。25・29・42は繩文時代晚期後半の資料。29は晩期末葉の変容壺であろう。25は胴部片で突窓のみが残る。42は深鉢の胴部片で、焼成後の穿孔がある。46はI期の壺で、口縁部の外反が弱く、頸部削り出しの段をもって沈線2条めぐる。

時期 明確な供歌土器の共伴は認められないが、その可能性の高い土器資料のまとまりある土器群としてIV期の土器資料があるので、構築時期はIV期と思われ、IV-2期としたSZ001より後出するが、SZ001出土のIV期土器と大きな時期差は認めないので、IV-2期と考えたい。

SZ052（遺構：図31、遺物：図32）

検出状況 西部の北東部から周溝茎が南北に連なる区域で確認した。平面形の大半はSB103・SB104・SB105の床面で検出した。北東隅部については調査区域外にある。

方台部 各辺とも直線的でほぼ方形を呈す。南西隅部がやや弧状となる。規模は方台部の規模は、南北7.2m×東西6.6mである。

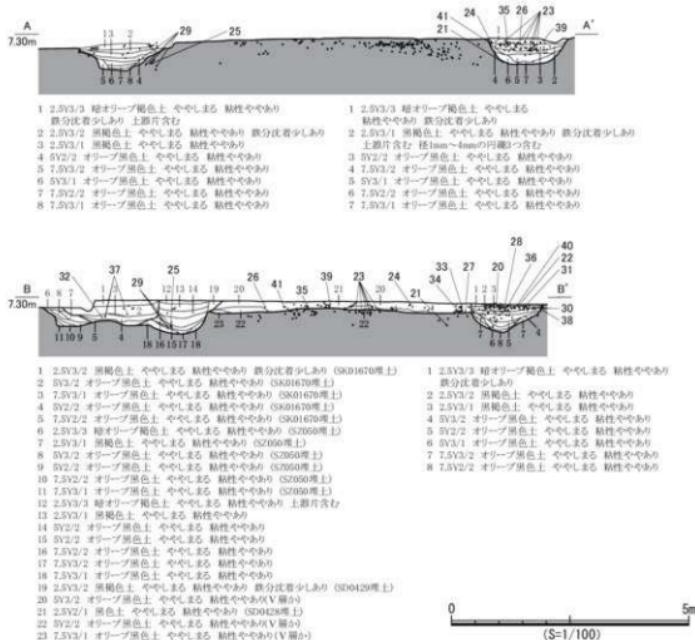


図27 S7051透構図(2)

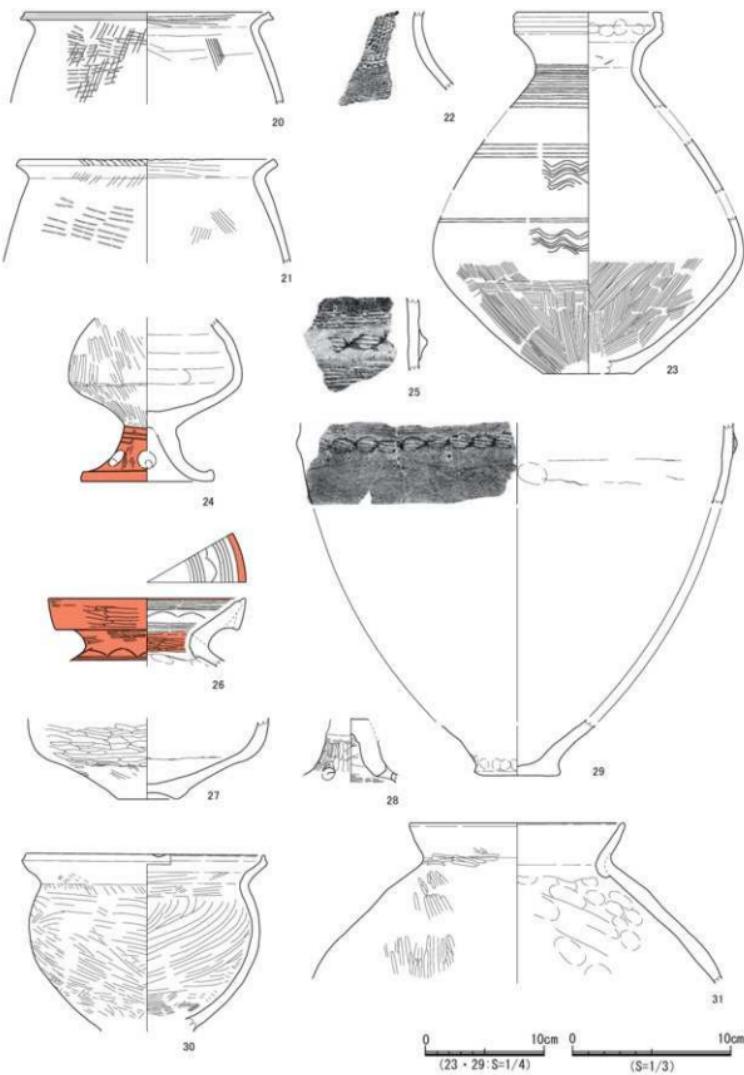


図28 S2051遺物実測図(1)

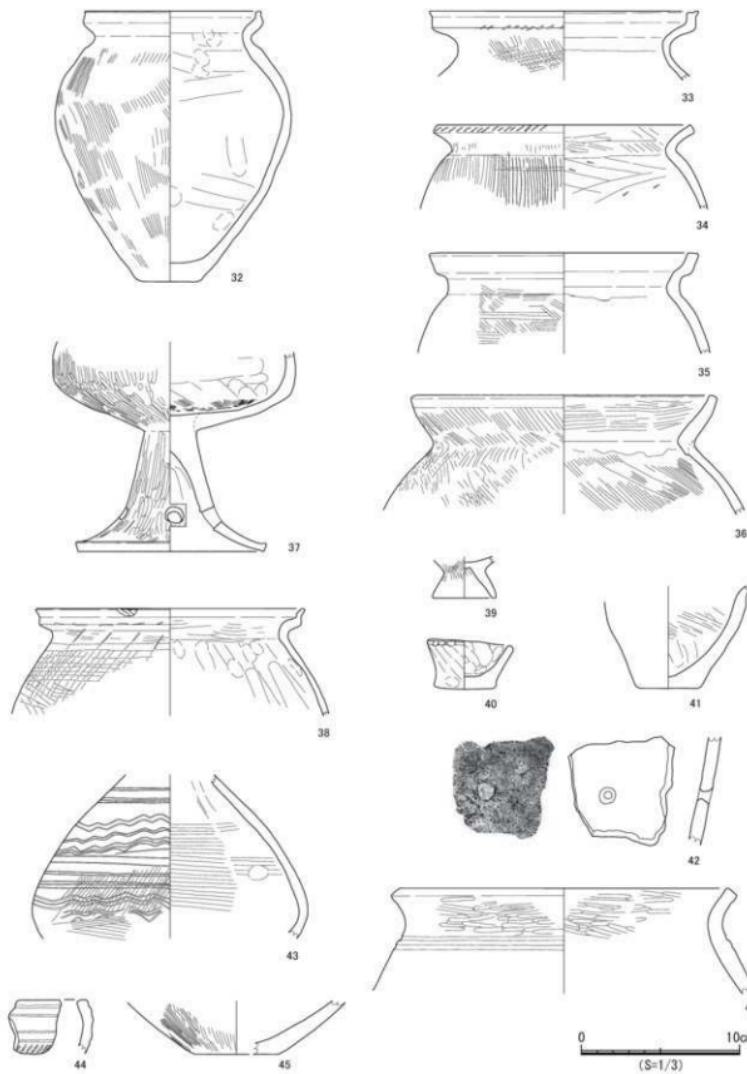


図29 SZ051遺物実測図（2）

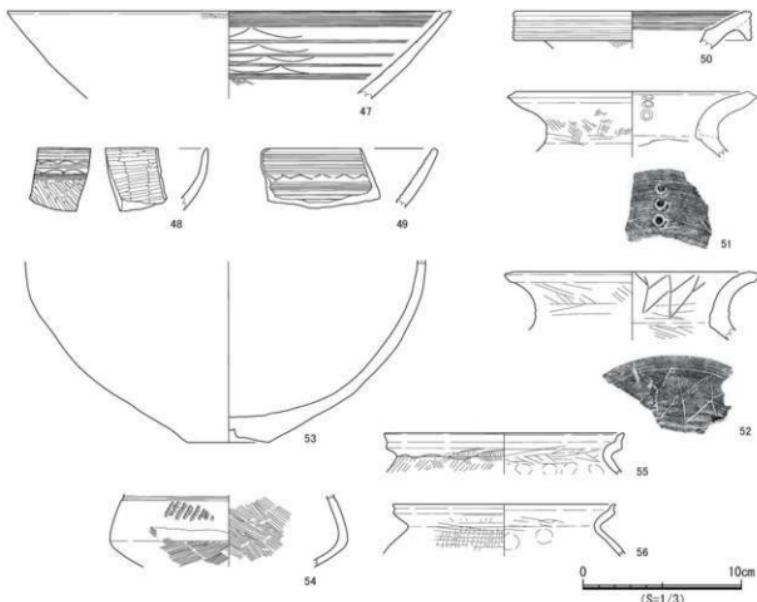


図30 SZ051遺物実測図（3）

周溝 幅は住居跡との重複から一様ではない。B断面北溝の残りが最もよく、幅1.50m・深さ0.5mをはかる。断面も逆台形を呈し、壁面角度も急傾斜である。6層は構築直後の堆積で、壁面崩落というより周囲から流入土と考えられる。3層以降は水平堆積であり、埋没の進行は緩やかであったと想定できる。北溝・西溝の外縁はやや弧状となる。墳丘は確認できなかった。主体部は方台部中央でその可能性がある土坑を2基検出した（SK01705・SK01706）。平面形は長方形を呈す。SK01706は長軸方向を東西方向にとり、その長さ4.1m程度の大きな土坑である。SK01705は長軸を南北方向にとり、南半分をSK01706によって掘削される。SK01706はVI-3期前後と思われるSB0105の床面除去後に検出されたので、SK01705・SK01706はVI-3期より先行する土坑と考えられる。その一方で、遺物を伴わず、棺痕跡も確認できなかったこともあり、ここでは主体部の可能性ありとしての報告にとどめたいた。

遺物出土状況 周溝から200点あまりのVI期後半～VII期の土器片が出土した。北溝からの出土が多い。上層出土資料が顕著で小片が多く認められた。構築時期を示す資料ではなく、周溝の埋没時期を示す資料と考えられる。方台部で出土した57・58はSK01705・SK01706検出以前の段階に方台部内から出土したのでSZ052に帰属する資料としたものである。

出土遺物 出土した土器片はそれほど多くはない、図示した資料は4点。VI期後半～VII期の資料。57・58は高坏C類、59は高坏D類にあたる。57はSK01706出土資料と接合関係がある。59は内面に連弧文を施す。60は甕E1類。57・58は方台部、59・60は周溝から出土した。

時期 構築時期は示す共伴資料が皆無だが、重複するSB103・SB104がVI～VII期のため、VI期以前であることは明らかで、SZ050から南北につらなる分布状況からみて、IV期を考えたい。

SZ053（遺構：図33、遺物：図34・35）

検出状況 西部の東側ほぼ中央、北東部から南北に周溝墓が連なる区域で確認した。V層上面で平面形をすべて検出した。北東隅はSB0105によって削平を受けているが、周溝が残存し、周溝が方形に全周する。

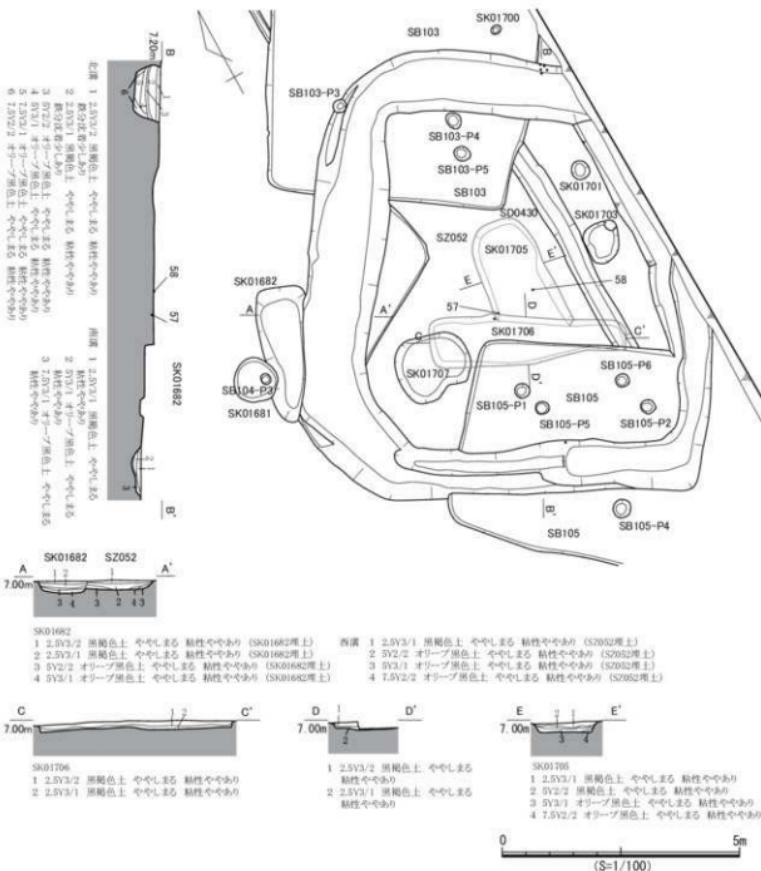


図31 SZ052遺構図

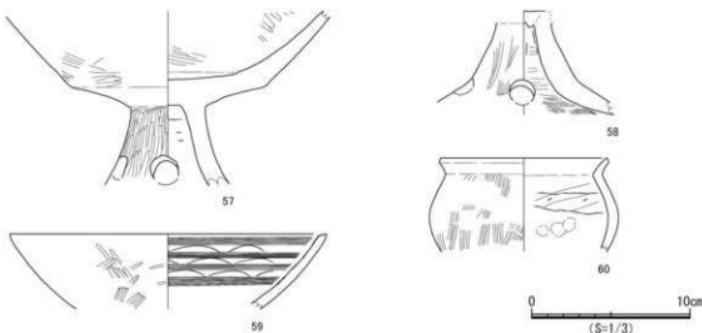


図32 S2052遺物実測図

方台部 方台部の規模は、南北7.2m×東西6.8mである。墳丘は認められなかった。北辺と西辺は直線的だが、南辺と東辺は中央がやや外側へふくらむ。なお、主体部は確認できなかった。

周溝 幅は約1.5m前後だが、南溝はやや1.2m程度と狭くなる。北溝・西溝は直線的な形状を示し、東溝・南溝はやや弧状となり、方台部の形状と一致する。各溝断面とも断面形が逆台形で、比較的遺存状況がよい。4層が周囲からの流入土と考えられるが、4層より以前に底面を覆う土層が認められる。構築直後から周溝埋没が早いベースで進行していたことがうかがえる。

遺物出土状況 土器片は西溝・南溝から散発的に出土し、集中箇所は認められなかった。総数は破片600点弱で、大半がV～VII期の土器小片で中層より上位に伴う。供獻土器は西溝中央から横位で出土したIV期壺の61である。その他に、復元状況からみて供獻土器と想定可能な資料がIV期甕62である。62は西南隅から出土した。

出土遺物 61はIV期壺A1類。粗いハケ目を残し、胸部中央に穿孔が認められる。62はIV期甕B2類。胸部が強く張り直線文と刺突文を交互に施し、最下段には波状文を加える。63もIV期で甕A類。70は内傾する口縁部に3重の連弧文をもつ。突帯が2条あり、その間を条底で埋める。II期の資料であろう。残る資料はV～VII期に相当する。64はV期前半の高壺と考えられる。脚据部に2対1組の穿孔が認められる。65はVI期後半の高壺。内面に多条沈線が認められ、外面に煤が付着する。68・69は甕B類。口縁部は強く屈折して、端部内面に刺突文をもつ例外的な資料である。71～73は砥石。71は砂岩製の不定形な手持砥石で原礫面を残す。砥面の一部に敲打痕を残す。73は方形の手持砥石である。73は流紋岩製、72は泥岩製である。

時期 構築時期は供獻土器からIV期と考えられる。

S2054（遺構：図36、遺物：図37）

検出状況 西部の東側のはば中央、北東から南北に連なる周溝墓の南端に位置する。SB106～SB108の床面において平面形の大半を確認した。西溝の外縁及び南東隅は調査区域外にある。東溝は外縁でVI

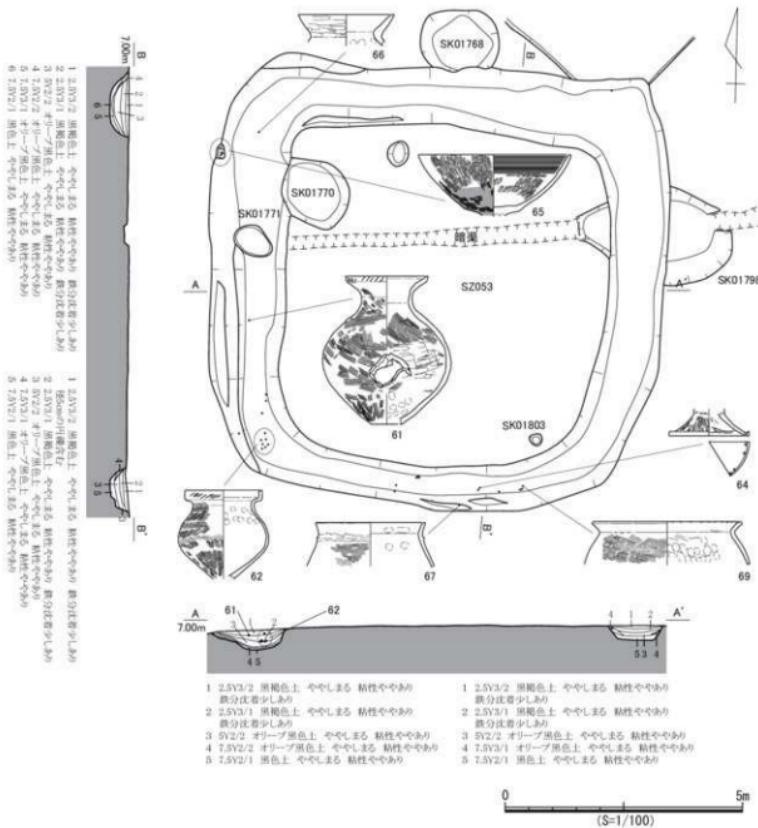


図33 SZ053遺構図

— 1期のSD0433と重複し、SD0433の削平を受けている。

方台部 方台部の規模は、南北5.7m×東西9.5mである。方台部は東西に長い長方形を呈し、北辺を除く各辺は直線的である。北辺は南辺と軸が揃わず不整形である。墳丘及び主体部は確認できなかった。

周溝 周溝は全周する。平面形は不整形の長方形で東溝と西溝の長さが大きく異なり、西溝がかなり短い。そのため、北溝のうち西半分が弧状となって北西隅に至り、その幅も狭い。外縁は全体的に丸みを帯びる。周溝幅は1.5m程度だが、深さは部位によって異なる。最も残りがよいのは北溝の0.5mで、東溝は0.2mとやや浅い。各断面とも断面形が逆台形を呈し、壁面の角度が急傾斜である。面標

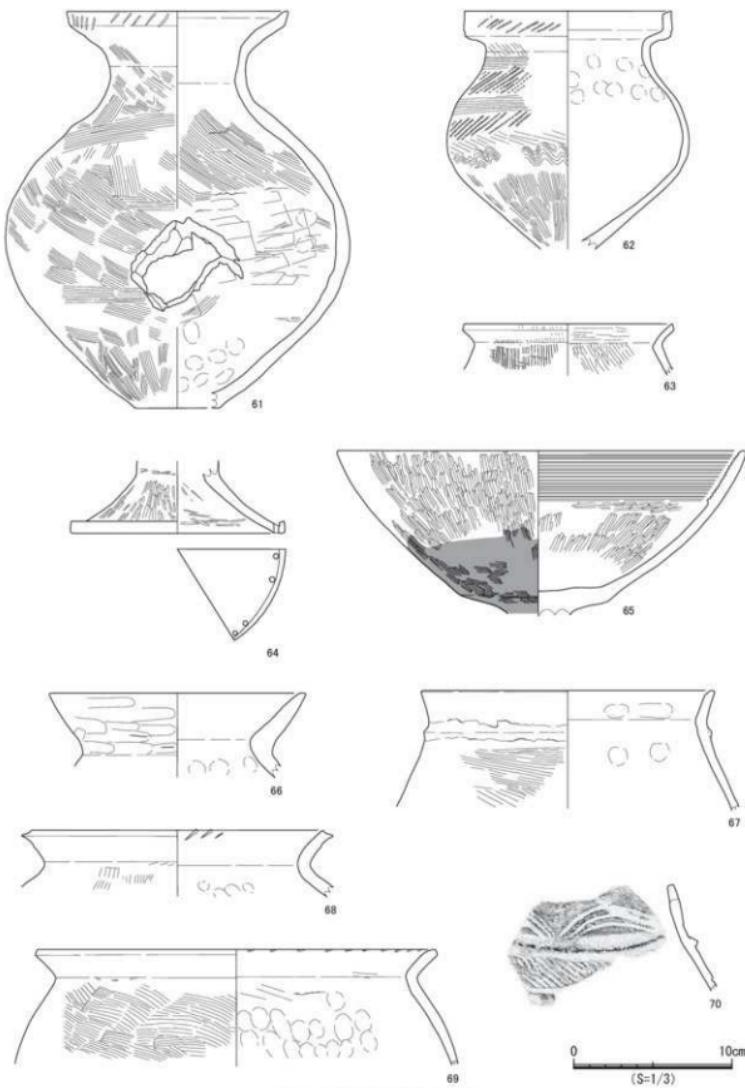


図34 SZ053遺物実測図（1）

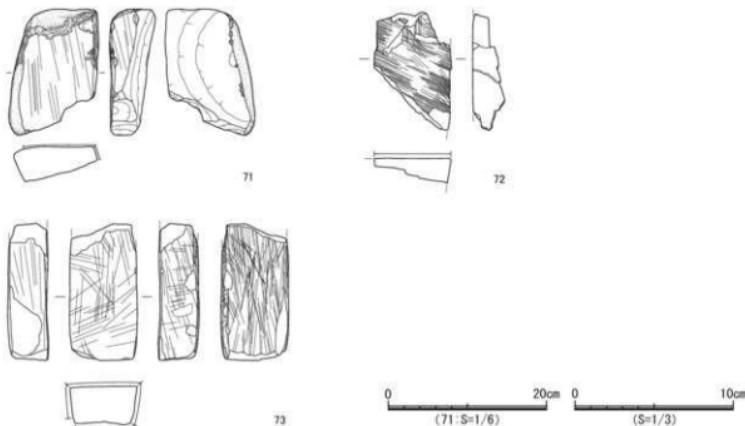


図35 SZ053遺物実測図（2）

面隅には周囲から流入土の堆積が認められ、構築直後からの堆積がうかがえる。その後は水平堆積が続く。

遺物出土状況 出土土器は破片数300点弱で東部の周溝墓出土数としては出土量が少ない。上層～中層にかけて縄文時代晩期後半・II期・V～VI期の資料が出土した。縄文時代晩期後半の資料の出土量が他の周溝墓よりも比較的多く、中層に顕著である。周辺に同時期に遺構があって、後続する遺構の掘削に伴い流入した可能性がある。供獻土器となるような資料は認められなかった。

出土遺物 74はVI期後半の高環C類の脚部。84も同様の時期の壺であろう。胸部上半に直線文と刺文がある。また、周囲の遺構と接合関係があり、後続する竪穴住居跡に伴う可能性がある。縄文時代晩期後半の資料に75～78・80～83がある。75・77は短く緩やかに外反する口縁に強くユビで押圧する突帯が認められる。類例は鳥帽子遺跡で認められる¹⁾。79はII期後半の内傾口縁土器であろう。82は砲弾形を呈する深鉢の口縁部片。

時期 構築時期の認定は共伴資料がないので認定が困難である。重複するSB106・SB107・SB108、SK01855がおよそV期後半段階を想定しているので、それより先行すると考えられる。

北溝が後出するVI-1段階に規制されているかのようにみえ、さらには平面形がそれによって不整形であることに課題があるが、V期後半以前にSZ054があって後続するSD0433が制約を受けたと考える。さらに、東部の北東部から連続する周溝墓であることから、IV期と考えたい。

1) 石黒氏、永井氏のご教示

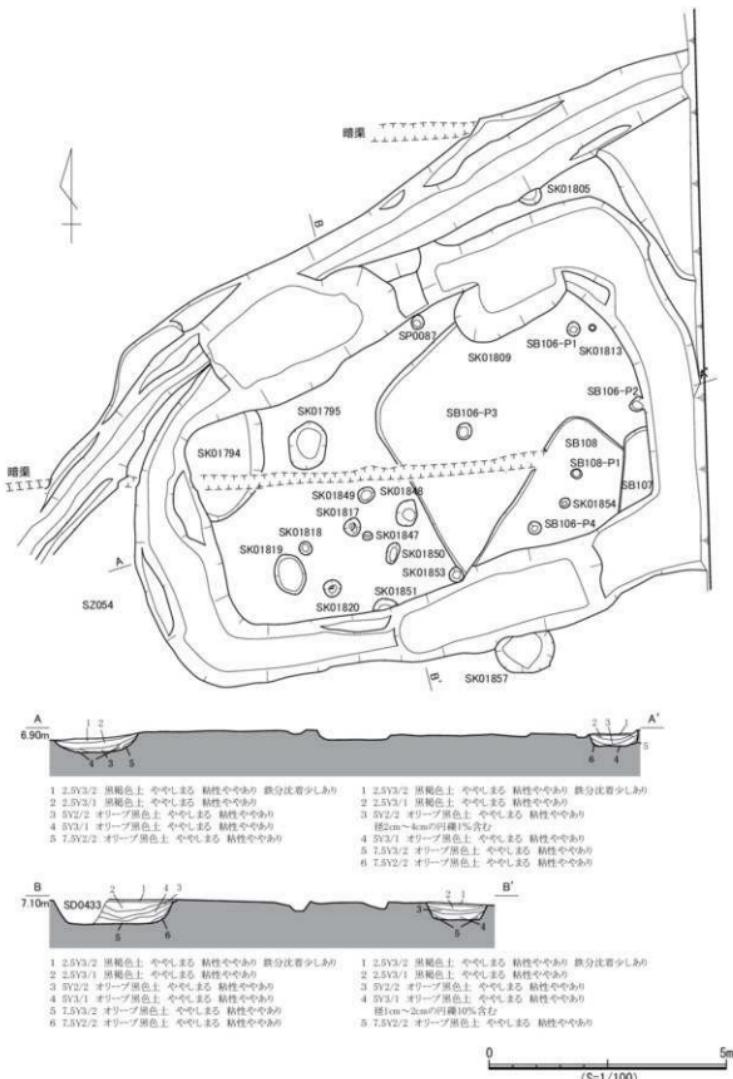


図36 S2054構造図

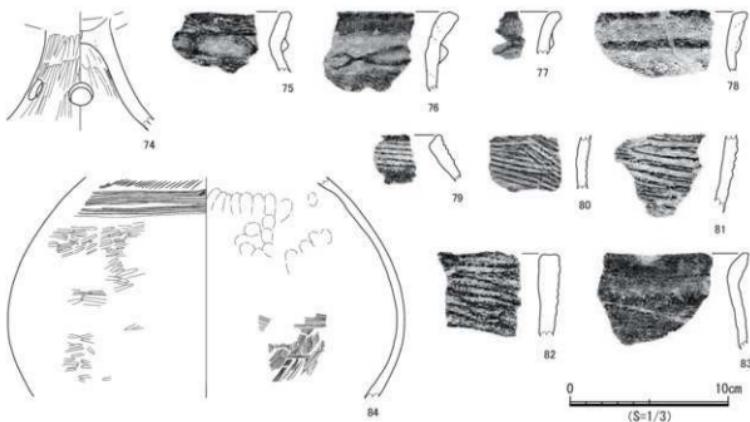


図37 SZ054遺物実測図

表7 方形周溝墓一覧表

遺構番号	現場遺構番号	調査区分	検出層位	理土	平面形状	主軸方位	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	新>●>旧	時期	出土遺物	種別	回数
SZ050	08_B0320	ET2	V上	10層 B		N13° E	(10.00)	(7.00)	(8.00)	(5.60)	0.50	SK01593, SD0420, SB09 9, SB106, SB098, SB102 , SB101, SK01670 >SB051	IV-2期	H, L, S	22 • 23	1 • 2
SZ051	08_B0340	IA2	V上	8層 B		N6° E	10.40	9.60	6.80	5.40	0.60	SK01672, SD0420, SB09 9, SB106, SB098, SB102 , SB103, SZ050, SK0167 0, SD0420>	IV-2期	H, J, L, S	26 • 27	2 • 3
SZ052	08_B0349	ID3	V上	6層 B		N30° E	9.50	(9.00)	(6.50)	5.50	0.56	SD0420, SD0430, SB103 4, SK01682, SB10 4, SK01702>	IV期	H, S	31	3
SZ053	08_B0288	IF2	V上	6層 B		N2° E	9.40	9.00	7.20	6.80	0.50	SK01768, SK01770, SK0 1769, SK01771, SK0179 8, SB105, SD0427, SK01 776, SK01803, SK01775 >SK01802>	IV期	H, S	33	3 • 4
SZ054	08_B0377	II3	V上	6層 B		N65° E	12.00	9.00	10.00	7.00	0.50	SD0433, SK01856, SB10 7, SB108, SB106, SK018 51, SK01855, SK01857, SK01794, SK01809, SK0 1810>	IV期	H, J, T	36	4

2 壺穴住居跡

B地区西部では、弥生時代後期から古墳時代前期の壺穴住居跡13軒（時期不明を含む）を検出した。弥生時代後期から古墳時代前期の壺穴住居跡は、巨視的にはA地区南西部から帶状に展開しているよう見える。

壺穴住居跡の時期決定を行う資料は、壺穴住居跡に残された土器によるが、良好な資料が残されたものと、土器小片しか出土していないものがある。このため、遺構の時期を検討する際には、他の遺構との重複関係も含めて検討した。

検出した壺穴住居跡の多くは、方形もしくは長方形を基調とする平面形であるが、壁面の残存状態はあまり良くなく、数cmから10cm程度のものが多い。また、床面に炉跡が残る壺穴住居跡はないが、SB101では被熱を受けた部分、SB109では焼土の散布を確認している。柱穴については、床面で検出した小穴の中から、壺穴内の位置関係や土層観察から検討した。

SB098（遺構：図39、遺物：図40）

検出状況 西部北東部の住居跡密集域、V層上面で検出した。確認した平面形は南東隅1/4程度で、残る部分は調査区域外にあるが、周壁溝と柱痕跡の伴うP1を確認したので壺穴住居跡と判断した。

形状 大半が調査区域外にあるが、平面形は方形もしくは長方形と考えられる。壁面の深さは0.2m程度である。

埋土 5層に分層した。5層は掘形を埋めて床面を形成した土層である。壁面から次第に自然堆積したと考えられる。

床面 炉跡は確認できなかった。壁溝は壁面にそって検出した。床面はほぼ平坦だが、南へ向かって

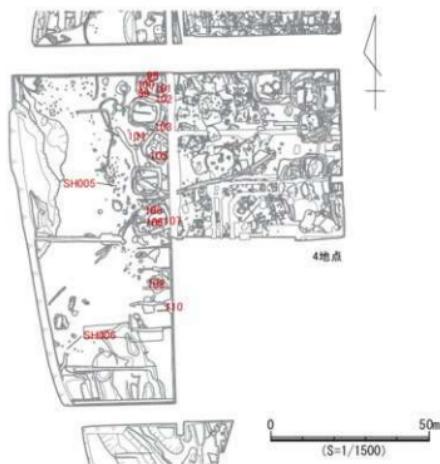


図38 壺穴住居跡位置図（数字は遺構番号）

わずかに下がる。床面では柱痕跡を伴う小穴1基(P1)を確認した。平面的な位置から主柱穴であろう。床面除去後に住居跡より先行するSK01604を確認した。内部から遺物の出土は確認できなかった。

遺物出土状況 VI期～VII期の土器片が掘形の中央付近から散漫と出土した。床面付近からの出土は細片が多かったなかでも、高坏脚部89と器形が復元できた90は遺存状況が良好のよい資料をえた。

出土遺物 図示した資料は91を除いてすべて高坏。内面加飾のある高坏C類に85がある。85は多条沈線間に山形文がみられる。86は外面加飾の小型高坏で多条沈線間に連弧文を施す。88はC4b類。口縁端部に内傾面があり、そこに多条沈線を加える。90は全形を復元できたやや小型の高坏C4類。口

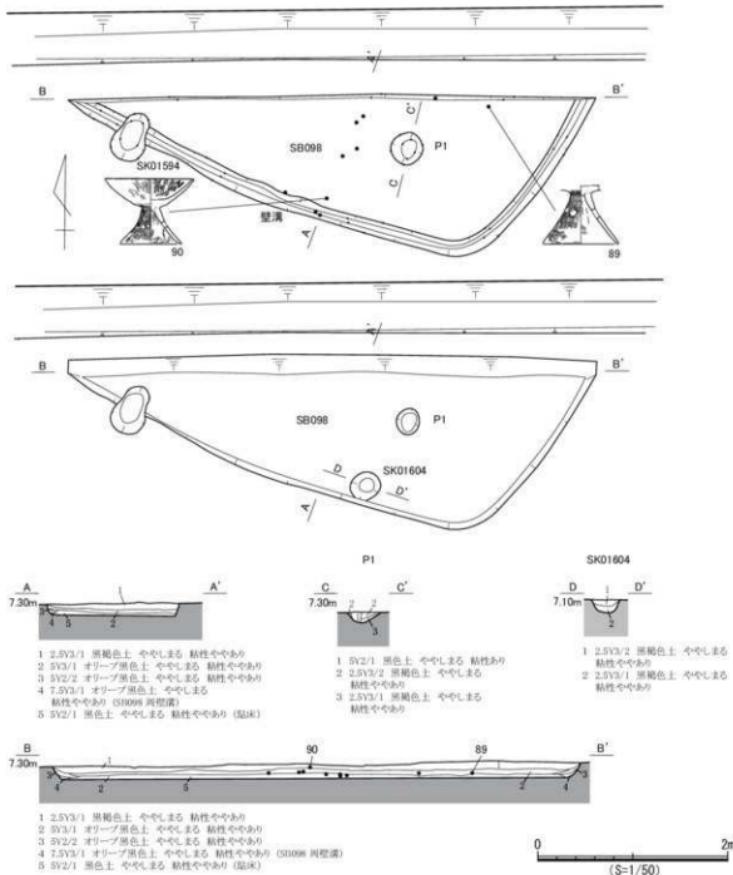


図39 SB098遺構図

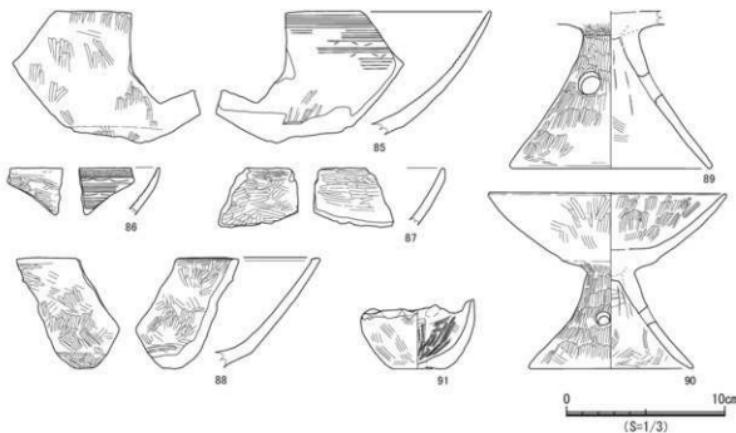


図40 SB098遺物実測図

縁部の開きがやや強く坏部底径が小さい。89も同類の高坏脚部と思われる。91は手捏ね土器。口縁端部を欠損するが、人為的な破損の可能性がある。

時期 床面出土の89・90から、VII-2期が考えられる。

SB099（遺構：図41、遺物：図42）

検出状況 西部の北東部住居跡密集域に位置する。V層上面で検出し、方形の掘形を確認した。SB100・SB101とほぼ同じ位置で重複関係があり、その前後関係はSB099>SB100>SB101である。

形状 東西幅4.8m、南北幅4.45mのほぼ方形の平面形を呈す。南壁がやや南東に向かってふくらむ。壁高は0.2m程度が残る。

埋土 埋土は4層に分層した。水平堆積で壁面から自然堆積したと考えられる。最下層は掘形を埋めて床面を形成したものである。

床面 幅約0.2m・深さ0.1mの壁溝が壁面沿いを全周する。床面はほぼ平坦たが、北側から南側に向かってやや下がる。床面ではP1～P4を検出した。いずれも埋土中に柱痕跡を確認できる。平面形の位置、柱痕跡から主柱穴であろう。炉跡などの遺構は確認できなかった。

遺物出土状況 出土土器は南壁際の中央付近からVI～VII期の土器片が多く出土したが、大半が検出面に属する。P4東側から少数の小片が出土した。また、北東隅部の壁溝埋土からも壺B類胴部片が出土した（93）。

出土遺物 ある程度、器形が復元できた資料がえられた。97・98を除いてVII期後半の資料である。92は高坏D2類。口縁部が大きく開く高坏、端部に内傾面があり、数条の多条沈線を施文する。内外面ともに精緻なミガキを施すが、内面に煤痕が残る。95は92と坏部形状が類似する。脚部は付根から円錐状に開くが、据部でわずかに内湾する。内面加飾は多条沈線と二枚貝による連弧文を施文する。内面の段はわずかに認められる。内外面ともに煤痕がある。高坏D5類の典型例である。94・96はS字窓。

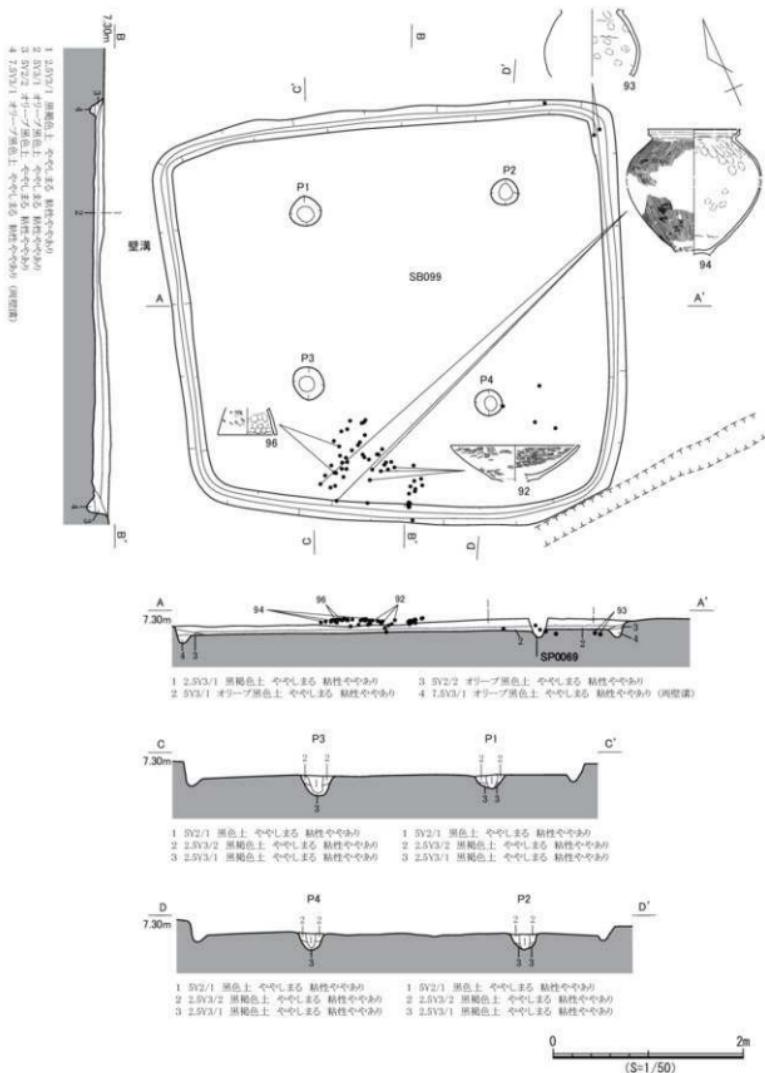


図41 SB099構造図

94はB類に相当し、96は甕D2b類。93は壺胸部。おそらく壺B2・3類と考えられるが、口縁部が欠損しているので器形の詳細は不明であるが、胴部下半が膨らみVII期に多い資料である。97は甕A4類の口縁部。VI期後半の資料である。98はIV期の壺A類。周辺のSZからの混入資料であろう。95はSZ2050出土資料と接合した。

時期 時期決定資料として壁溝埋土出土93があげられる。93はVII期後半その他の出土資料もVII期後半にまとまりがあり、93とも矛盾しない。高環95からVII-VIII期と考えられる。

SB100（遺構：図43、遺物：図44）

検出状況 SB099同様、西部の北東部住居跡密集域に位置する。V層上面で検出し、ほぼ同じ位置でSB099>SB100>SB101の重複関係があるため、平面形を確認したのは北壁・東壁のみで残る箇所は後出するSB099によって不明である。

形状 壺形の規模は確認範囲で東西幅4.5m、南北幅4.4mでわずかに東西に長い方形を呈す。南東隅部からやや南壁が南へふくらむ。

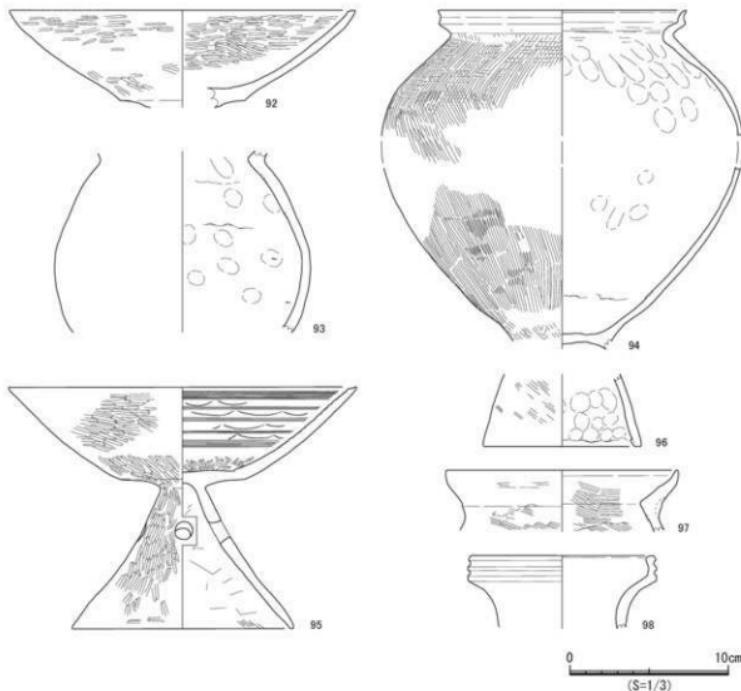


図42 SB099遺物実測図

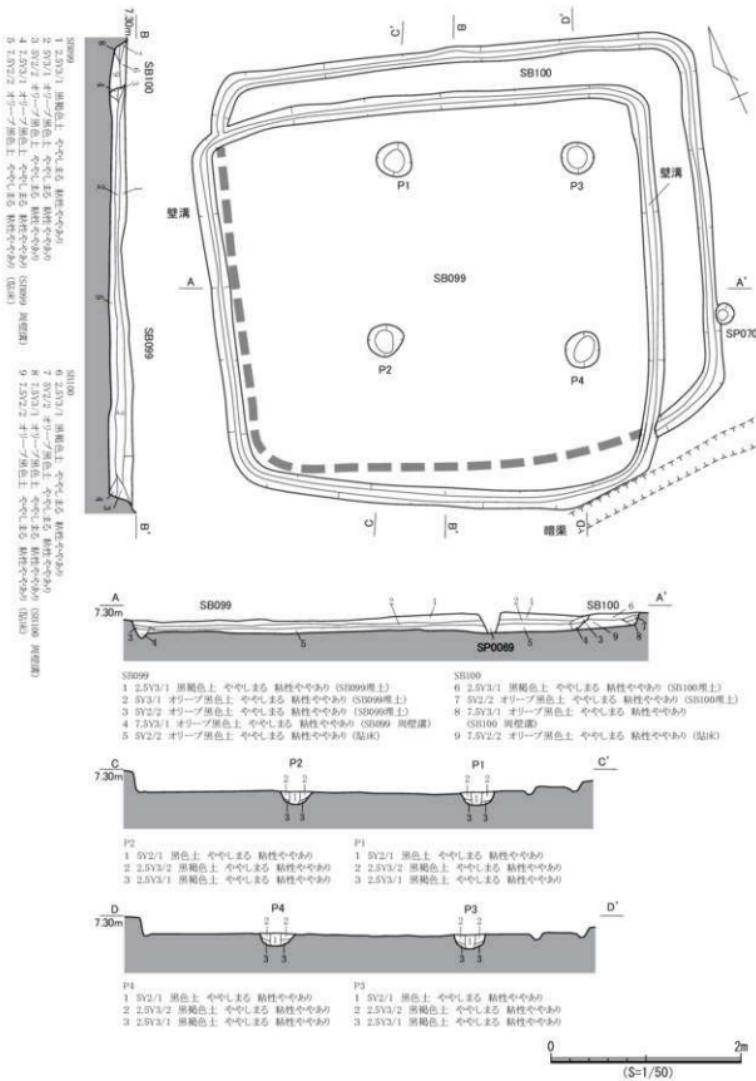


図43 SB100遺構図



図44 SB100遺物実測図

埋土 埋土は4層に分層した。最下層の9層は掘形を埋めて床面を形成した土層である。

床面 後出するSB099の床面上で主柱穴P1～P4を検出し、いずれも柱痕跡も確認した。P1～P4はSB099床面上で検出したが、SB099・SB100とも床面レベルは同一であり、先述べた通りSB100の壁面はすでに滅失しているので、想定される平面形とその位置関係からP1～P4をSB100の主柱穴と判断した。壁溝は幅約0.1m程度で残存する壁面に沿って全周する。炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土からVI～VII期の土器小片がわずかに出土した。

出土遺物 100は内面加飾の高杯D4類。多条沈線のほかに単位が小さく鉢齒文的な山形文がみられる。99はP4から出土した甕C2類。

時期 SB099との重複関係及び出土土器から判断すると、VII-1・2期と考えられる。

SB101（遺構：図46、遺物：図45）

検出状況 西部北東部の住居跡密集域に位置する。V層上面で検出した。堅穴住居跡が密集するため、その重複関係が複雑である。その主な重複関係はSB099>SB100>SB101、SB098>SB101、SB101>SB101、SB101>SD0421、SK01614>SB101(B0319)、SB101>SZ050である。南壁の一部をSB102によって失われている。

形状 平面形はほぼ方形で、その規模は東西方向4.9m、南北幅4.55mで東西方向が長い。

埋土 5層に分層したが、最下層の5層は掘形を埋めて床面を形成した土層である。壁面から自然堆積したと考えられる。

床面 幅約0.1m、深さ約0.08mの細い周壁溝が滅失した部分を除いて壁面際を全周する。床面上でP1～P4の4基の小穴を確認した。いずれも柱痕跡を確認し、さらに平面的な位置からみて主柱穴であろう。また、炉跡は明瞭な掘形は確認できなかったが、P1・P3間で床面が被熱を受けた部位を検出したのでこの範囲の可能性がある。

遺物出土状況 V～VII期の土器が小片で埋土上層から出土した。

出土遺物 101のみを図示した。101はV～VI期の外面に赤彩のある小型の壺底部。

時期 出土土器で判断することは困難である。重複する堅穴住居跡との関係で先行する位置を占めている。集落域のなかでは前半段階、すなわちVII-1期以前、周間にVI期相当のSBが多く分布することからみて、VI期の可能性がある。

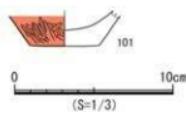


図45 SB101遺物実測図

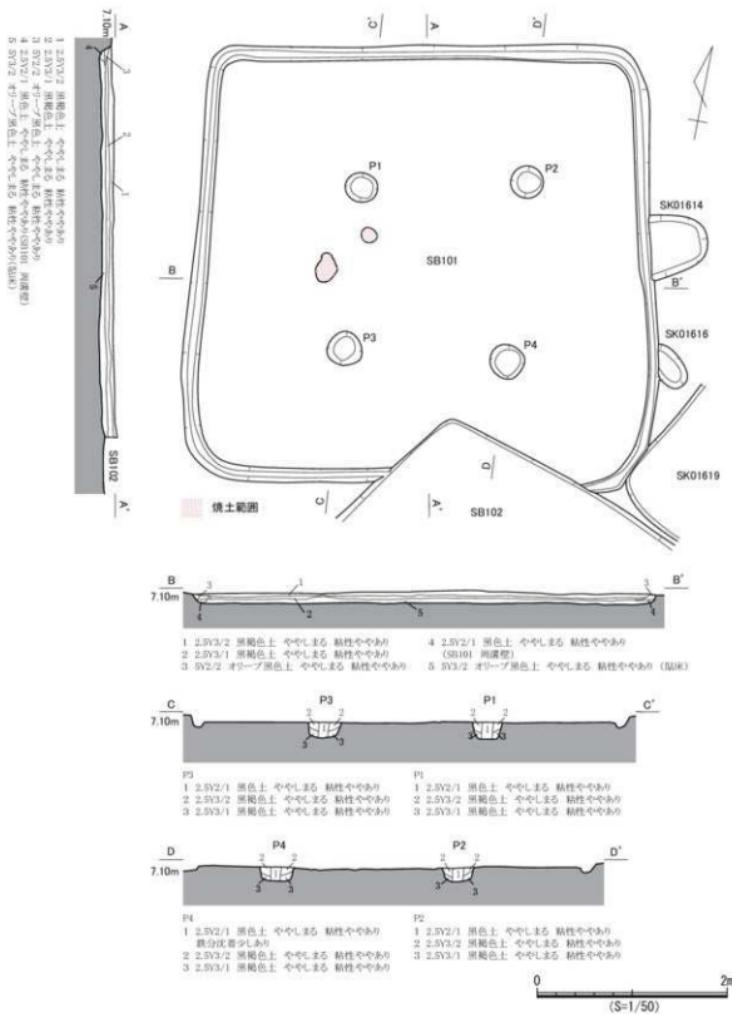


図46 SB101遺構図

SB102 (遺構: 図47・48、遺物: 図49・50)

検出状況 西部北東部の住居跡密集域に位置する。V層上面で確認し、東壁が調査区域外にある。壁面の高さは約0.2mが認められ、比較的の遺存状況がよい。

形状 平面形は一部が調査区域外にあるが、東西に長い長方形である。南壁がやや弧状を呈し、南東付近が不整形である。

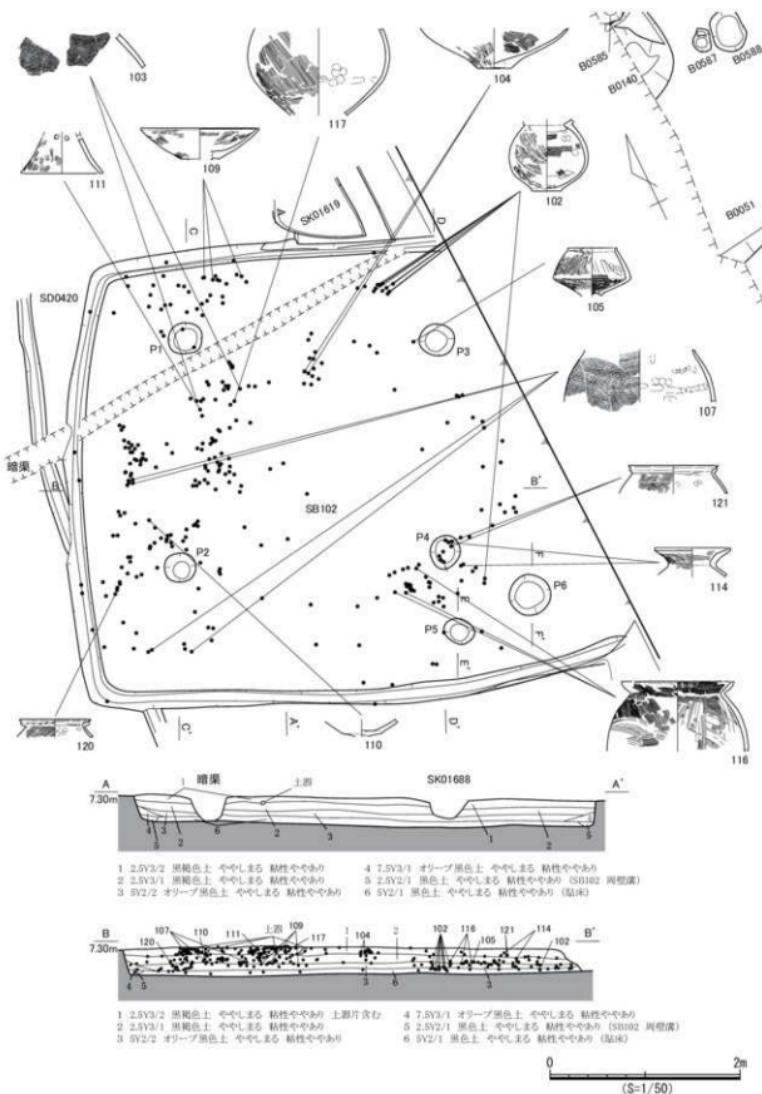
埋土 6層に分層した。埋土は水平堆積だが、3・4層が本住居跡廃絶直後の堆積と考えられ、壁面から堆積が進行したことがうかがえる。1・2層の堆積によって完全埋没するが1層上面から構築される遺構(SK01688)からみると、1・2層の埋没はかなり早く進行したと考えられる。6層は掘形を埋めて床面を形成した土層である。

床面 床面上からP1～P6の6基の小穴を確認した。P1～P4は柱痕跡を確認し、その平面的な位置からも主柱穴と考えられる。床面は平坦だが、炉跡は確認できなかった。幅0.15m・深さ0.06mの壁溝が確認した壁面沿いを全周する。床面除去後は、SZ051の周溝を検出した

遺物出土状況 出土土器は西壁沿いとP4周辺とに主な分布域が分かれる。西壁沿いの出土土器は1・2層に相当するものが大半を占める(103・104・107・109・110・117)。その多くはVII-2・3期であるが、103はV～VI期、107はV期である。本住居跡の埋没は廃棄直後から相当早かったことがうかがえる。なお、P4周辺出土資料は床面付近から出土したものが多い(114・116・121)。

出土遺物 102・103・113～115は壺。102は口頭部を欠損するが、胴部はほぼ完存する。B2・3類であろう。北壁付近、ほぼ床面上から出土し、残存状況からみて本住居跡共伴資料である。103は壺A類の胴部片。直線文と刺突文で加飾する。V～VI期にかけて多い資料である。104は赤彩のある壺A類底部。煤痕が外面に残る。114は壺B2b類。口頭部で加飾がなく、粗いハケが残る。113・115とともに小片だが、小型の壺。113は刺突文とクシによる直線文がある。115は直線文と貝による斜格子文がみられる。SB008出土資料との接合関係が認められた。壺は106・107・116・117・120・121がある。106・107は壺A類。106は底部で、107は胴部片。波状文と直線文の加飾がある。116はC2類。やや内湾した口縁部をもち、端部には不整形ながらも連続する押圧を加える。VI期後半に多い資料である。117は116と同一個体の可能性のある胴部片。120・121ともにS字壺。120は壺D1類、121は摩耗が著しいため、刺突がないがヨコハケの位置からみてA類の可能性があるのでD1類とした。高壺は105・108・109・110・111。105は11類で脚部を欠損する。壺部は完存し、口縁部での屈曲が著しい。V～VI期に多い資料である。108はH2類。外面を直線文と刺突文で加飾する。109は口縁部が聞く高壺でD2類。内傾面に極細の多条絹線を数条施文する。110は109と同じくD類だが、内面に段がわずかに残る。壺118・壺119・壺122はいずれもIV期の資料。周囲からの混入資料であろう。

時期 本住居跡出土資料はIV期を除いても、103・105・107がV～VI期、116・120・121はVI期後半～VII期、109・110はVII-3期と考えられ、V期～VII期までの時間幅のある資料が認められる。土器の出土状況からすると、西壁沿いの一群とP4～P6付近の一群とに大別できる。出土レベルは前者が検出面、後者が床面付近で差異が認められ、同列に扱うことはできない。前者にはV～VI期の資料を除ぐとVII-2・3期の資料が含まれる。後者は116がVI-3期に多い資料であり、121(壺D1)と共にても顕著がないのでVI-3期前後と考えられる。共伴資料の102もVI期後半～VII期の資料であることから、床面付近で出土したVI-3期にちかい時期と考えられるので、床面付近の出土資料と102を同時期と



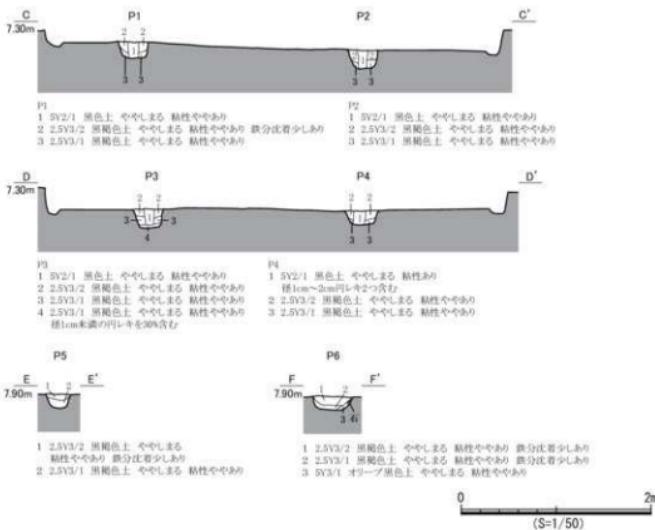


図48 SB102遺構図（2）

みて、本住居跡の時期はVI-3期の可能性が高いと考えられる。なお、西壁沿いの一群は住居跡廃棄後、一定の時間が経過した埋没段階に堆積したまとまりある資料と考えられる。

SB103（遺構：図51・52、遺物：図53～58）

検出状況 西部北東部やや南側の住居跡密集域、V層上面で検出した。北東隅部は調査区域外にある。南東部ではSB104とSB103・SB104の重複関係がある。

形状 平面形は東西幅5.7m、南北幅で5.8mとわずかに南北に長い長方形である。残存する壁面高は約0.1mでやや緩やかに立ち上がる。

埋土 5層に分層し、水平堆積が認められる。1層上に溝SD0430が掘りこまれている。SD0430もSB103と近い時期と考えられるため、SB103の埋没は早く進行したと想定できる。5層は掘形を埋めて床面を形成した土層である。

床面 床面は平坦で、硬化面が認められた。やや南へ向かってわずかに下がる。床面上からはP1～P6の6基の小穴を検出した。P1～P4はいずれも柱痕跡を確認した。平面的な位置からも主柱穴である。炉跡は確認できなかったが、南東隅には粘土を検出した。床面除去後は新たな床下構造は認められなかつたが、SZ052周構の平面形を検出した。

遺物出土状況 P6付近から多くの土器片が出土した。高壺（123・124・127・145）、器台（125・126）、壺（128・132・186）、鉢（129・130）、甕（131・133・142～144・146）があげられる。土器片は南西隅付近からも土器が密集して出土した。高壺（147・148・156）、壺（153）、甕（149・151・

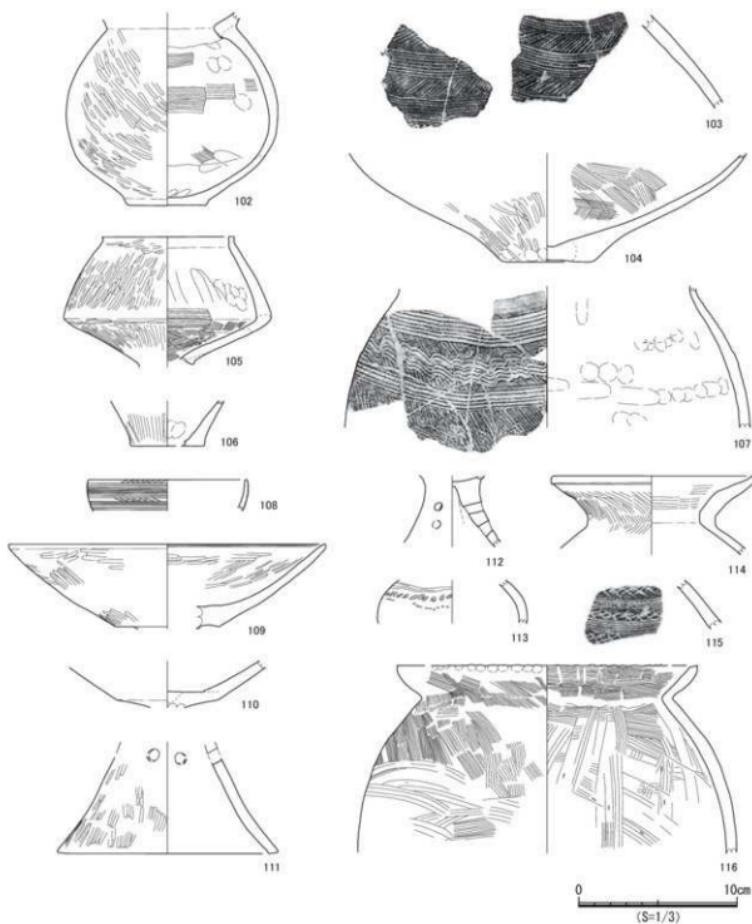


図49 SB102遺物実測図（1）

152・154・167)が相当する。いずれも床面より0.05m程度浮いた状態であった。P3付近から高壺(137)、壺(140)が出土した。187の鉢はP2から出土した。その他の資料では内面加飾のある高壺C類、壺D1類の出土が多い。

出土遺物 図示した土器資料は60点あまりである。P6付近から出土した資料について以下に述べる。高壺はC類で内面加飾がなく、内傾面が認められる。145は脚部まではほぼ完存し、2孔の穿孔がみられる。壺底部が内湾気味で本来の形状とやや異なる。そのため、内面の段もあまり目立ない。器台126はB1類。

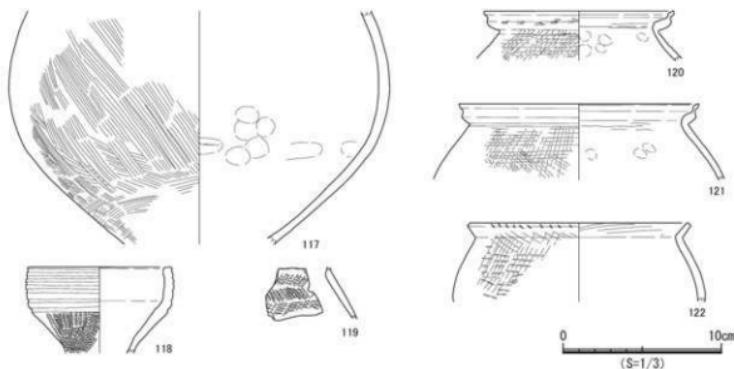


図50 SB102遺物実測図（2）

直線的な受部とやや長脚の脚部をもつ。145と同様、2穿孔である。壺には壺H類（128）、壺A類（132）がある。128は胴部が完存するもの、口頭部を欠損する。底部～胴部最大径まで煤が顯著に付着する。132は胴部で直線文・刺突文の文様が3帯施文される。186はSZ02出土資料との接合関係がある。摩耗が著しく、直線文と山形文がみられる。鉢はA3類。129は受口状口縁の形骸化が進行した資料。頭部に直線文と刺突文をもつ。130は胴部のみが遺存するが、129と類似する資料であろう。甕はB類（133・134・136）とA4類（146）がある。144も口縁部が長く伸びる。内外面ともにハケ調整が及ぶ。330は口縁端部が特徴的な資料。連続するナデ痕跡が認められ、一見つまみ上げられた感がある。外面のハケ調整は口縁部まで及ぶ。146は甕A4類でP6の取り上げ記録のある破片と接合したのでP6出土としてよいと考えられる。131は胴部がやや扁平で口縁部の外反が弱い。E2類に相当する。内面にケズリ痕跡が残り、V期の甕の要素が認められる。

南西隅付近の土器密集域から出土した土器について以下に述べる。高坏は内面加飾のあるC類のみが認められる。156は多条沈線のみC4c類。147・148は多条沈線と山形文の組み合わせのあるC4d類である。148は脚部の一部を欠損する以外、完存する。外面には顯著な煤痕が残る。壺153は頭部を欠損するがA3類であろう。口縁部内面は2帯の羽状文、胴部外面には直線文・山形文を施文する。文様最下段は刺突文で、最大径は胴部中央よりやや下がる。頭部・山形文・胴部下半に赤彩がある。甕はS字甕が目立つ（151・160・167）。口縁部が残る資料は160・167とともにA類にあたるD1b類。154は中型の甕でE5類。平底が脚台付かは不明。152も中型の台付甕のE3類。口縁部が短く強く屈折して、端部に粗雑な平坦面をもつ。内外面ともに粗いハケ目が認められる。P3付近出土の高坏137はわずかに残る山形文からC4d類、壺140はA1類である。137はV期、140はV期の資料であろう。P2出土の187鉢A2類。口縁部が鈍化するが端部の平坦面を堅持する資料。その他の資料には高坏（135・136・138・157～159・169～177）、壺（139・162～164・181～183）、甕（141・161・165・166・178・180・188）、鉢（179）がある。高坏174・175はC4d類でやや直線文の幅が狭い分、山形文の振幅が大きい。135は外面加飾のある高坏でH2類。157・158はともに小型の有段高坏でG3類であろう。157脚部には多条沈線と山形文が施文される。162・163は壺H類。163はほぼ完存する資料だが、口頭部を人為的に破損した

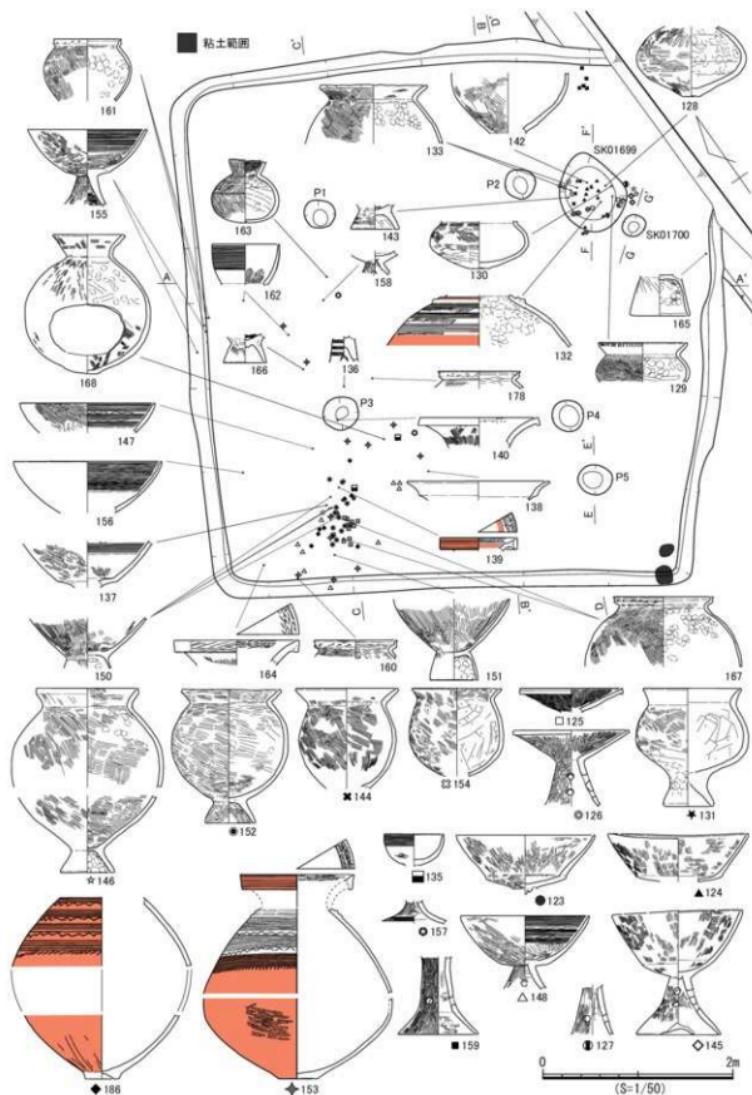


図51 SB103遺構図（1）

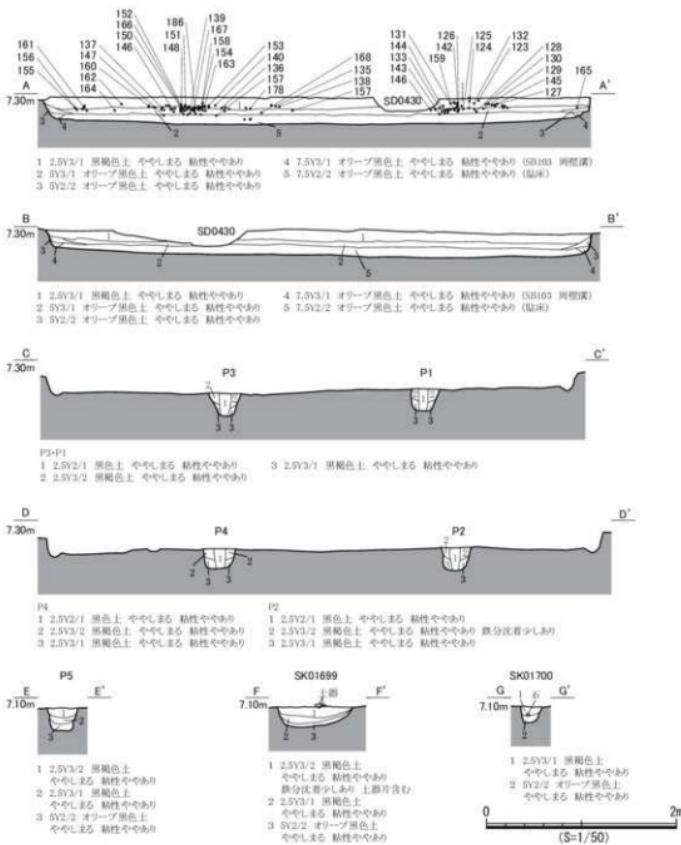


図52 SB103遺構図（2）

可能性がある。162は外面に多条沈線がめぐる。164・183はともに壺A類だが、164は外面にも羽状文を施すVII期の資料である。183は本住居跡南西付近に位置するSK01679出土資料と接合関係をもつ。V期の資料であろう。139はSZ052出土資料と接合した。内面に羽状文があり、文様帶以下を赤彩する壺A類。その他の出土資料のうち、高杯B2類136・138・171、壺A類181・183、甕B1b類180がV期に相当し、主体となるVII期の資料よりも遡る資料。168は壺C類。胸部に円形の打ち欠きが認められる。さらにわずかだが、IV期壺184、繩文時代晚期185が認められる。

時期 本住居跡出土資料から多く資料がえられたので、若干の検討を加える。縄文時代晚期・IV期の

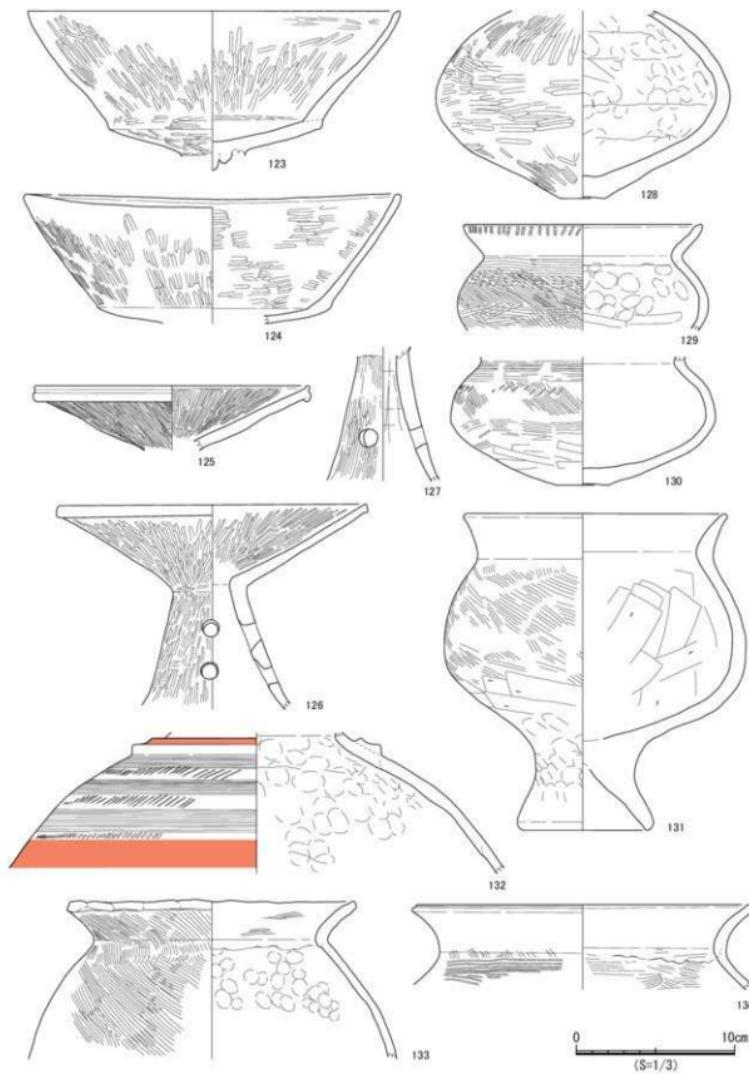


図53 SB103遺物実測図 (1)

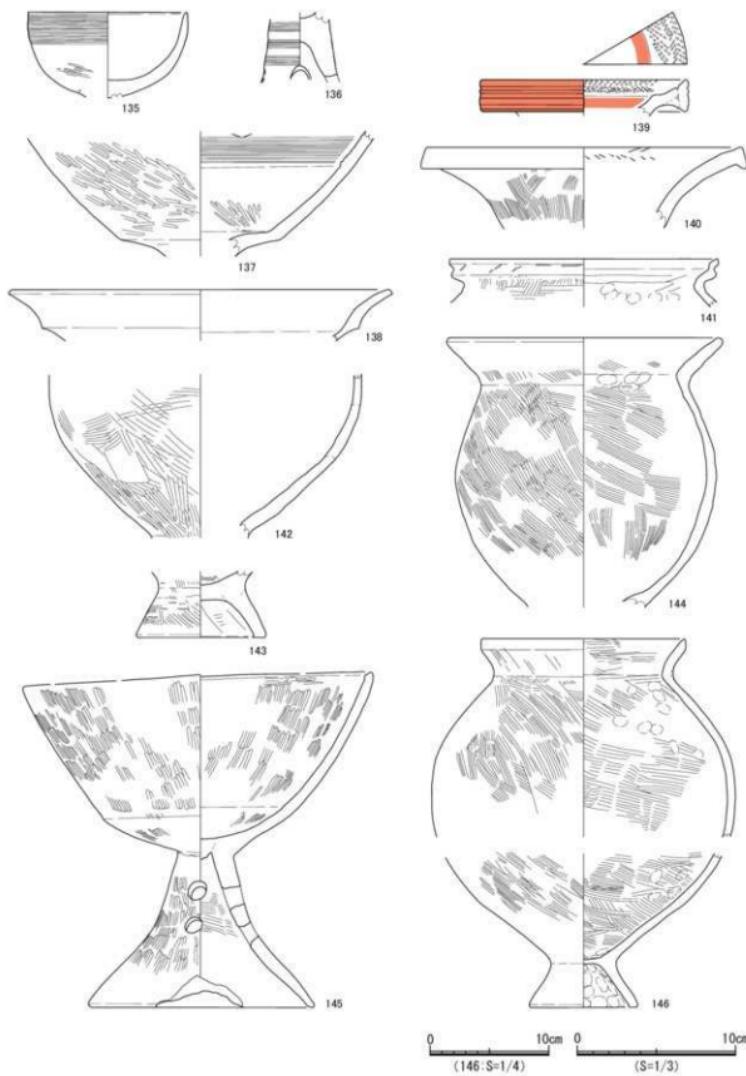


図54 SB103遺物実測図（2）

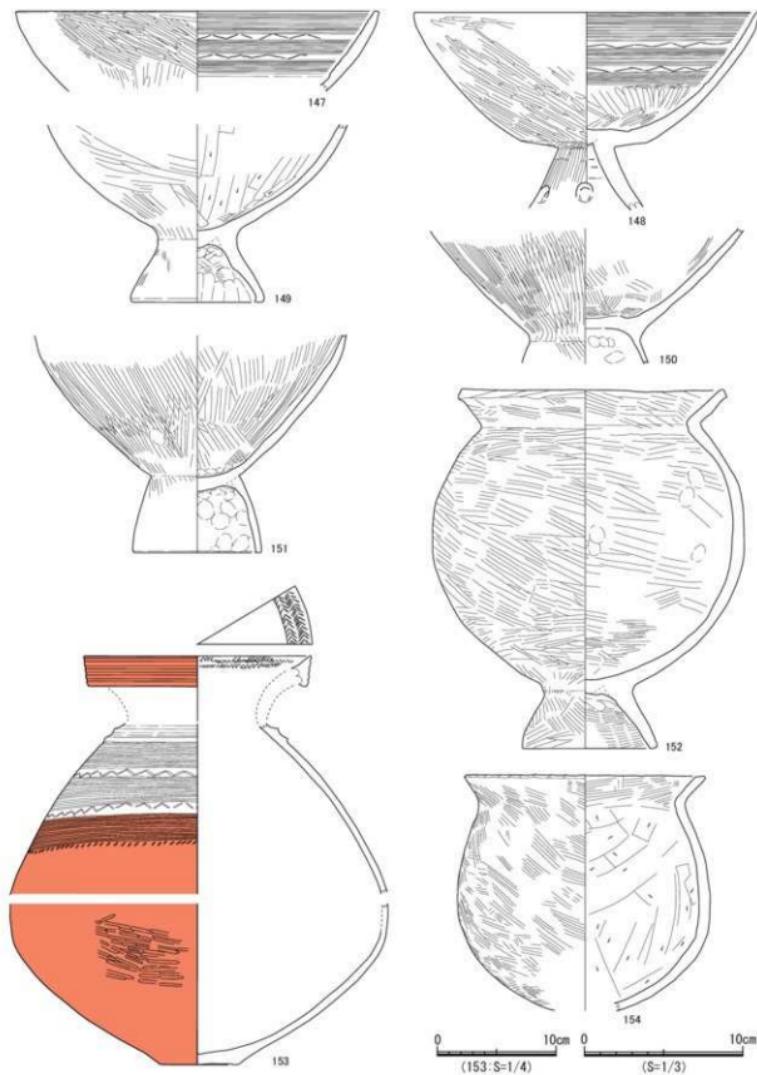


図55 SB103遺物実測図（3）

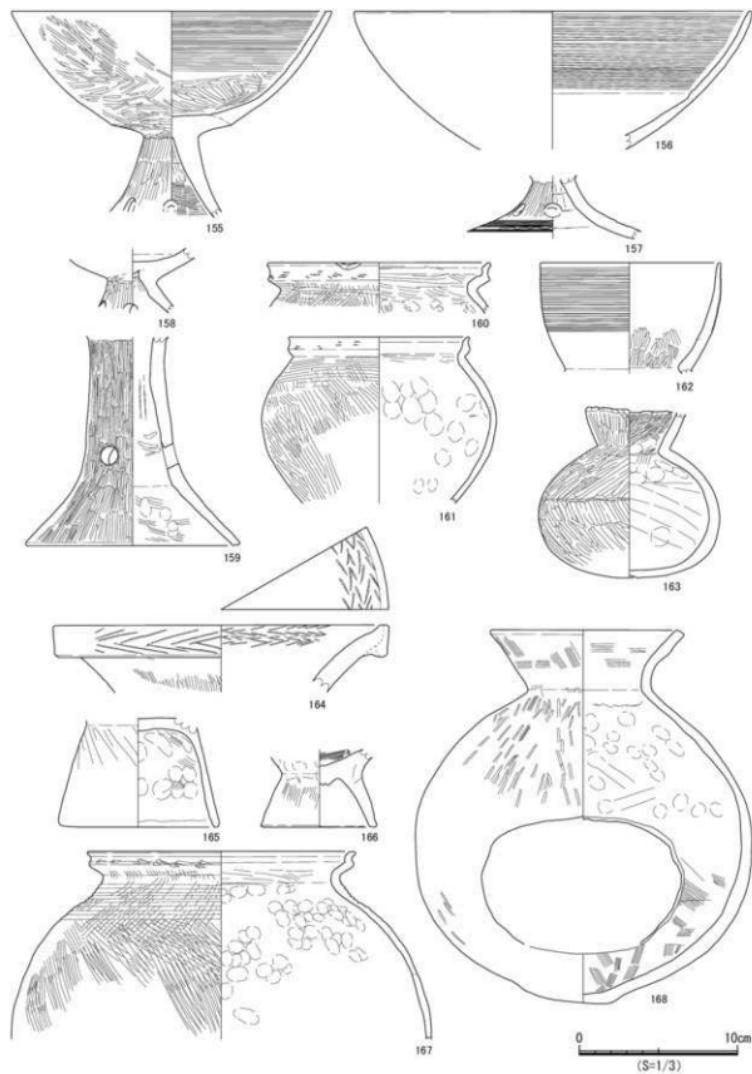


図56 SB103遺物実測図（4）

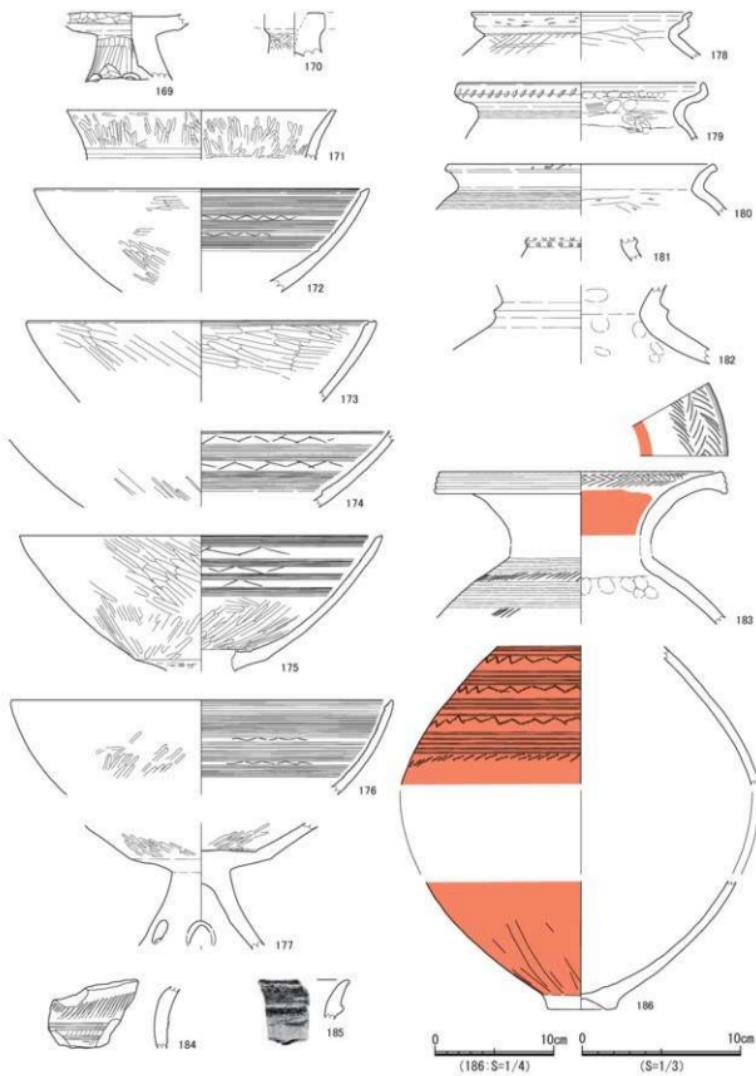


図57 SB103遺物実測図（5）

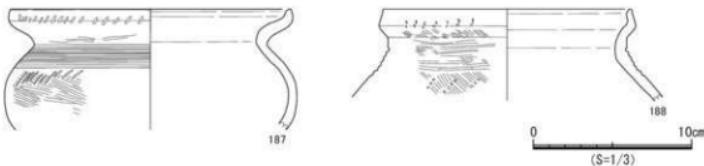


図58 SB103遺物実測図（6）

資料は明らかな混入資料と考えられ、V期相当の資料も遺存状況から混入資料と判断可能である。残る資料の多くはP6付近出土資料と西南隅付近出土資料とに大別できる。P6付近出土資料は内面加飾のない高壺の一群が主体で、S字甕を含まない資料と想定することが可能である。その一方で西南隅付近出土資料は内面加飾のある高壺の一群、さらにS字甕A類を含む資料とみることができ、P6付近出土資料・西南隅付近出土資料の時間的推移が考えられる。P6付近資料はドットの分布状況から一括性が高いと考えられ、本住居跡の時期決定資料とみることができる。一方、西南隅出土資料も床面付近からの出土レベルを示し、遺存状況からみて時期決定となりうる資料であるが、出土状況から判断してP6出土資料及びP2出土資料187を時期決定資料と考えられる。時期はVI-3期に相当する。なお、西南隅付近出土資料はVII-1期に相当し、埋土出土資料を多くも同じ内容をもつため、本住居跡出土資料には時期決定資料のVI-3期とその後、埋没過程で新たに堆積したVII-1期の資料が認められると考えられる。VII-1期資料は遺構出土とはできないが、まとまりある資料として評価できる資料である。

SB104（遺構：図59、遺物：図60）

検出状況 西部北東側やや南の住居跡密集域に位置する。V層上面で検出した。周囲の堅穴住居跡との重複関係はSB103>SB104でSB103より先行する。南壁の一部をSB103によって削平されている。

形状 平面形は東西幅6.00m、南北幅5.30mで、やや東西方向に長い長方形を呈する。壁高は0.1m程度が残り、直立する。

埋土 5層に分層した。最下層の5層は掘形を埋めて床面を形成した土層である。ほぼ水平の堆積で自然堆積である。

床面 床面上からは小穴を5基検出した。そのうちP1～P4は柱痕跡を確認した。平面的な位置からみて主柱穴にあたる。中央部分は先行するSK01677によって削平されている。壁溝は一部をSB103で削平されるが、残る部分は全周する。幅は0.18m・深さは0.1m程度である。なお、炉跡は確認できなかつた。P3とP4の間で粘土がわずかに散布していた。

遺物出土状況 土器片の出土は散漫で、平面的にはP2周囲から主に出土した（190）。P2周囲の土器片の垂直分布は床面から1層にまで及ぶ。また、P4(195)・壁溝埋土（194）から出土した資料も認められる。多くがVI～VII期の資料である。

出土遺物 7点を図示する。高壺189は高壺C類脚部。裾部が強く内湾し、被然した痕跡が認められる。190は外面に赤彩のある壺A5類。内面に羽状文を施文する。191は壺H2b類口縁部片で多重沈線と刺突文によって加飾する。192の刺突文は対向するよう施文される。外面に赤彩がある。おそらく器台B4

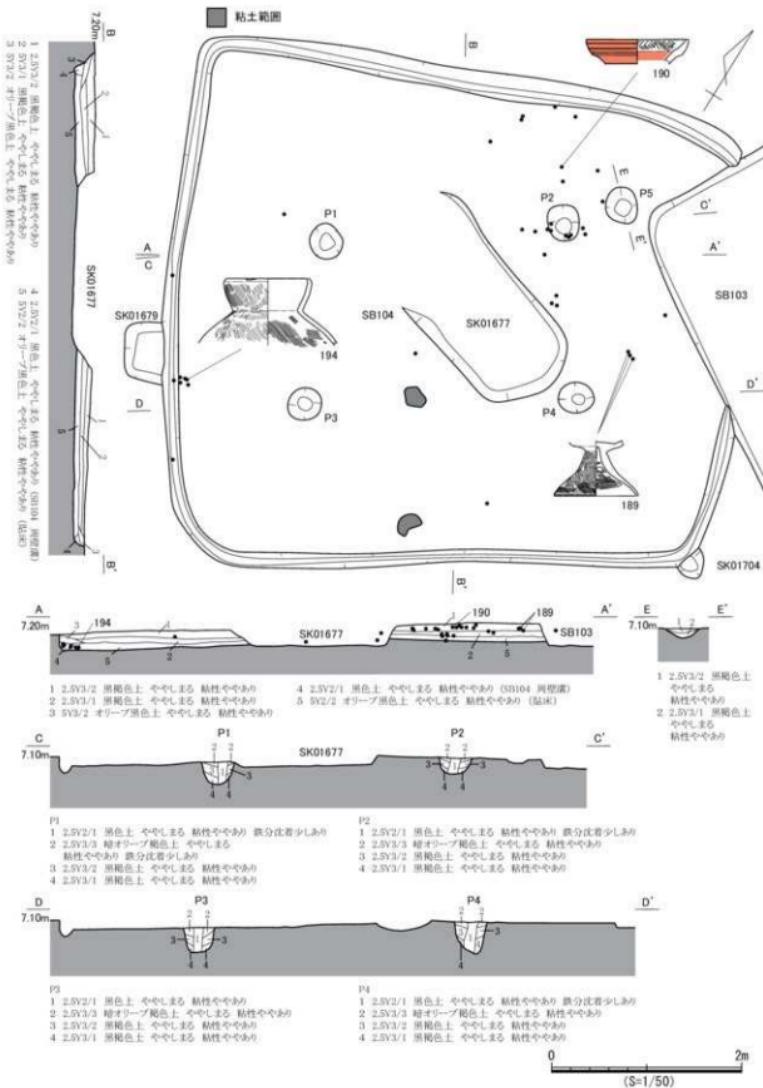


図59 SB104遺構図

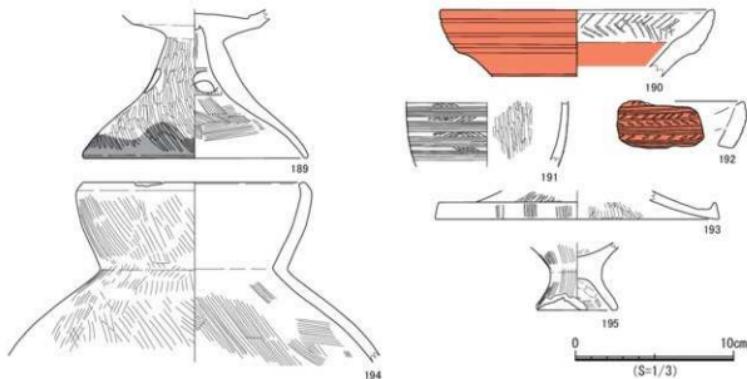


図60 SB104遺物実測図

類であろう。194は口頭部外面にもハケ目を残すやや粗雑な壺C類。193は高杯の脚部と考えられるが、端部に縦位の沈線文様がある。例外的な資料でV期であろうか。P4出土195は小型の壺の脚部。打ち欠きが認められる。V期と考えられる193、VII期の190・192を除くとVI期後半～VII期前半の資料である。

時期 時期決定資料は壺194と壺195があげられる。いずれも時期の特定が難しい。重複関係においてVI-3期としたSB103より先行することは判明しているため、時期が近接するものの時期決定資料と矛盾しないVI期後半と考える。

SB105（遺構：図61、遺物：図62）

検出状況 西部東側ほぼ中央の住居跡密集域に位置する。V層上面で検出し、他の住居跡との重複がなく単独で位置するため、掘形の全形を確認した。

形状 掘形は東西幅・南北幅とともに5.00mでほぼ方形を呈するが、北壁が外へ膨らむ分、やや不整形である。その他の壁面は直線的である。

埋土 5層に分層した。壁面から自然堆積が進行したと考えられる。5層は掘形を埋めて床面を形成した土層である。

床面 床面は平坦だが、南西へ向かってわずかに下がる。小穴計7基を確認した。P1～P4は柱痕跡を伴い、平面的位置からも主柱穴であろう。P5・P6はそれぞれP1・P2に隣接し、主柱を補助する支柱穴の可能性がある。残るP3・4については対応するような小穴が確認できなかった。炉跡は確認できなかつた。壁溝は幅0.15m、深さ0.06mで壁面沿いを全周する。

遺物出土状況 土器片の出土は少量にとどまり、床面中央付近と壁溝埋土（201）から出土した土器片が認められる。多くがVI～VII期の土器片であった。196・197はほぼ中央で出土し、197はほぼ床面直上で出土した。

出土遺物 196は壺A2類で口縁端部部が強く屈曲し、凹面を呈すような顕著な平坦面をもつ。S2003出土資料と接合関係がある。197は壺B4類。口縁部まで内外面にハケ目が顕著に残る。壁溝出土の壺201

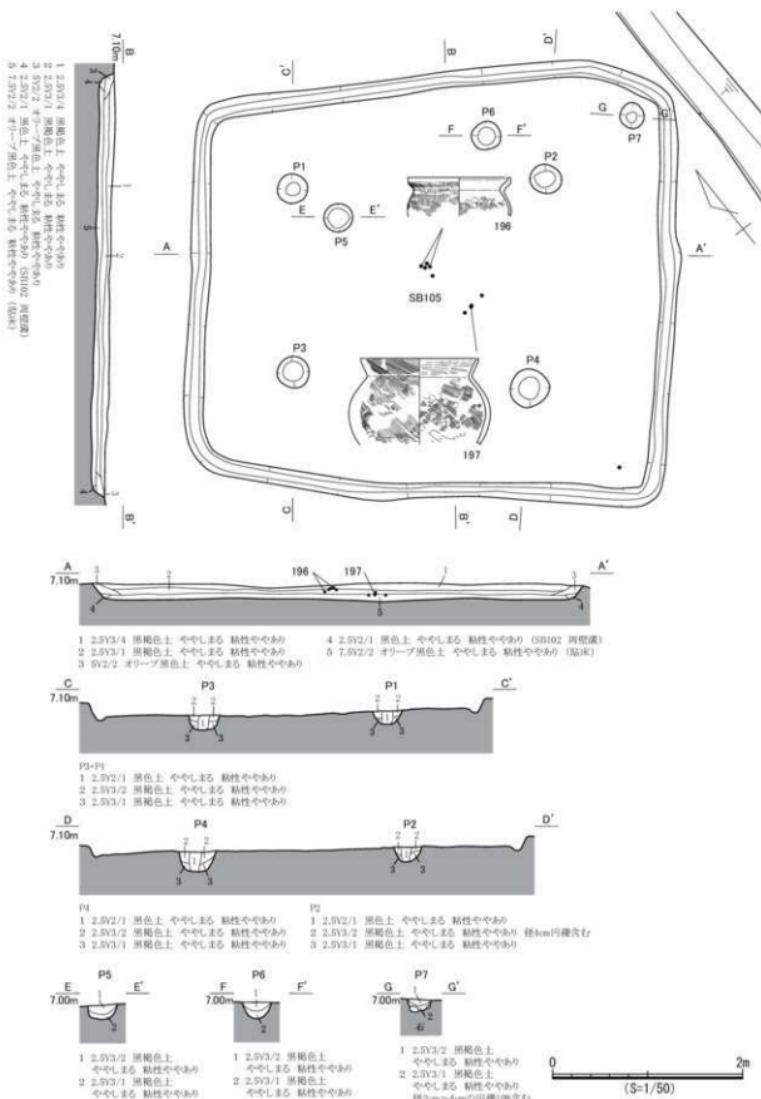


図61 SB105遺構図

は、直線文と振幅の短い山形文がみられる。文様帶以下に赤彩がある。200はV期～VI-1期の高杯。他の資料に比べるとやや時期が遡る。床下から出土した。掘形掘削時に混入した資料であろう。

時期 明瞭な時期決定資料が認められないが、中央から出土した196・197・201から判断するとVI-3期前後が考えられる。

SB106（遺構：図63、遺物：図64）

検出状況 西部東側ほぼ中央の住居跡密集域に位置する。V層上面で検出し、その重複関係はSB106>SB108>SB107である。重複する住居跡なかで、最も先行する住居跡である。南壁はSB107・SB108によって削平されている。

形状 掘形のうち南西隅1/4程度をSB108によって失われているが、長方形を呈す。残存範囲では南北幅6.00mをはかる。残る壁高は0.1mにも満たず、遺存状況はよくない。

埋土 4層に分層した。

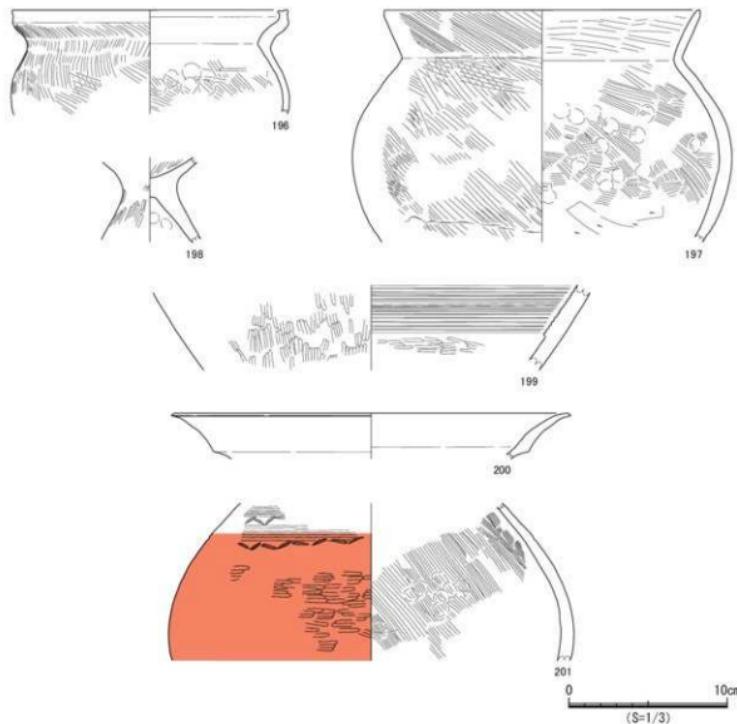


図62 SB105遺物実測図

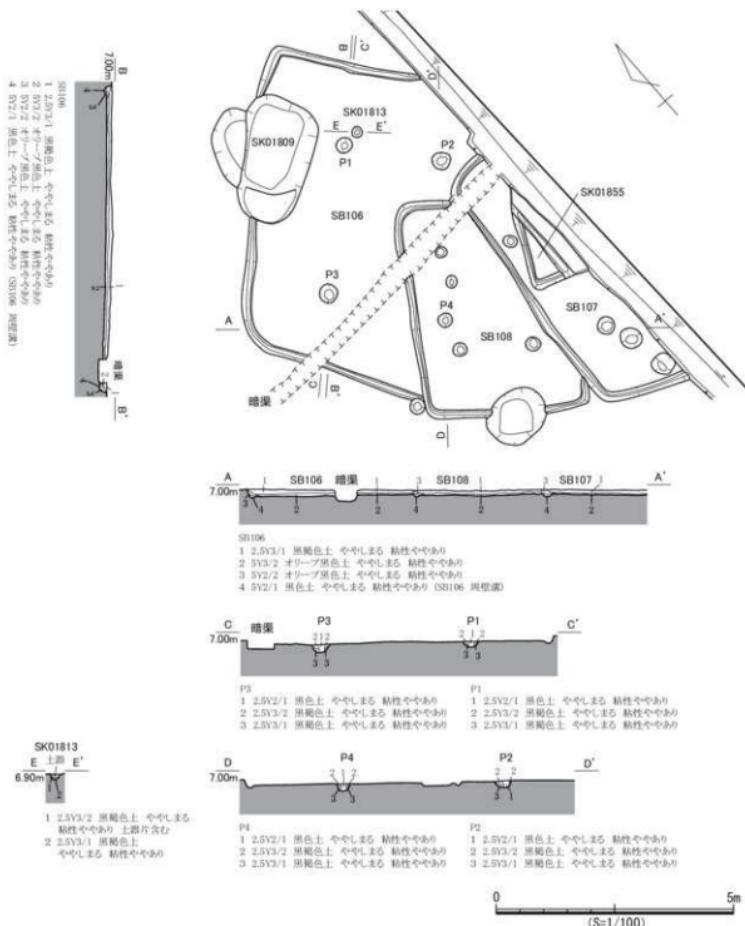


図63 SB106遺構図

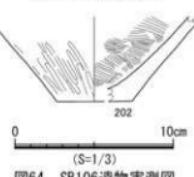


図64 SB106遺物実測図

床面 床面は平坦で、P1～P4の小穴を確認した。柱痕跡を伴い、平面的な位置から主柱穴に相当する。P4は隣接するSB108床面上で検出した。SK01855の底面はSB106と同一レベルのため壁面はSK01855によって失われたが、P4はSB108床面に残存したと判断した。P4は他のP1～P3との位置関係も問題ないと考えられる。炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 わずかな土器小片が出土するのみで、図示可能な資料は202の壺底部のみであった。

出土遺物 202は小片ながら底径の小さい壺B1類の底部であろう。時期はV-3期～VI期前半と考えられる。

時期 時期は重複する住居跡との関係及びわずかな出土土器（202）を手がかりにするとV-3期～VI期前半の可能性が高い。

SB107（遺構：図65、遺物：図66）

検出状況 西部東側ほぼ中央の住居跡密集域に位置する。V層上面で検出し、その重複関係はSB106>SB108>SB107である。掘形のうち西半分を確認したのみで、残る東半分については調査区域外にある。

形状 掘形の1/2程度は調査区域外にあるが、南北に長い長方形を呈すと考えられる。確認範囲での南北幅は4.6mである。南壁が南側へ膨らむ。

埋土 5層に分層した。壁面から埋没が進行したと考えられ、とくに西側から堆積が目立つ。

床面 床面はほぼ平坦で、P1～P3基の計3基の小穴を確認した。そのうちP1は柱痕跡を確認し、平面的な位置からみて主柱穴と考えられる。また、幅0.2m・深さ0.05mの壁溝が確認した壁面を連続してめぐる。炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土からわずかに土器片が出土したのみである。高環B3b類（203）、壺A2類（204）を図示した。いずれもSB108出土資料と接合関係があるが、本住居の方がSB108より先行することから本住居跡の資料として報告する。

出土遺物 203は口縁部の外反が強く、端部はやや丸い。204は口縁端部の強い平坦面と口縁部内面の強いナデ痕跡が認められる。頸部直下には直線文と刺突文がみられる。

時期 時期決定資料は認められないでの、重複関係や203・204から判断するとV-3期の可能性が高い。

SB108（遺構：図67、遺物：図68）

検出状況 西部東側ほぼ中央の住居跡密集域に位置する。V層上面で検出し、その重複関係はSB106>SB108>SB107である。掘形のうち北東隅1/4程度をSB107によって失われている。

形状 北壁・西壁をSB107によって失われているが、南北に長い長方形を呈す。確認した壁面は0.1mで、遺存状況はよくない。各壁面とも直線的である。

埋土 5層に分層した。水平堆積で、5層が床面を形成したと考えられる。

床面 床面上からP1～P5の計5基の小穴を確認した。位置関係、柱痕跡の有無からP1～P4が主柱穴であろう。P2はSB107床面上に位置する。前述したように北東隅の平面形はSB107によって損壊されているが、P2はSB107床面に残されたと考えられる。炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況 繩文～VI期の土器の小片がわずかに出土した。

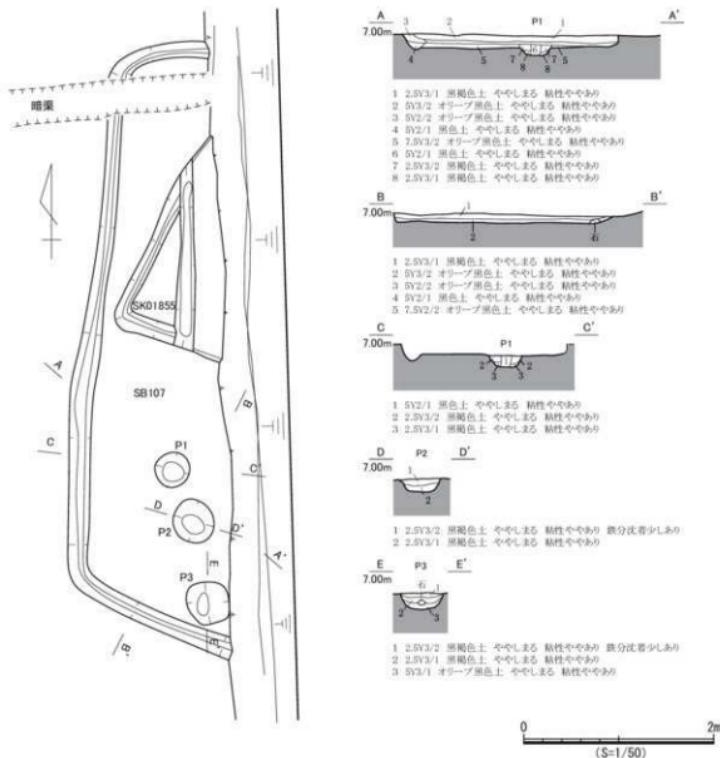


図65 SB107遺構図

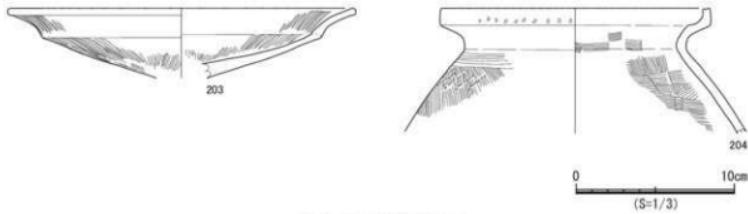


図66 SB107遺物実測図

出土遺物 205は高壺B2a類で口縁部に波状文を施すほかに、拡張した口縁端部及び底部との屈曲部に沈線を加える。SB106-P2から出土した資料と接合したが、先後関係から本住居跡出土資料とした。206も高壺B3a類で、口縁部の外反が強い。207はIV期甕B類、208は縄文時代晩期の資料で混入資

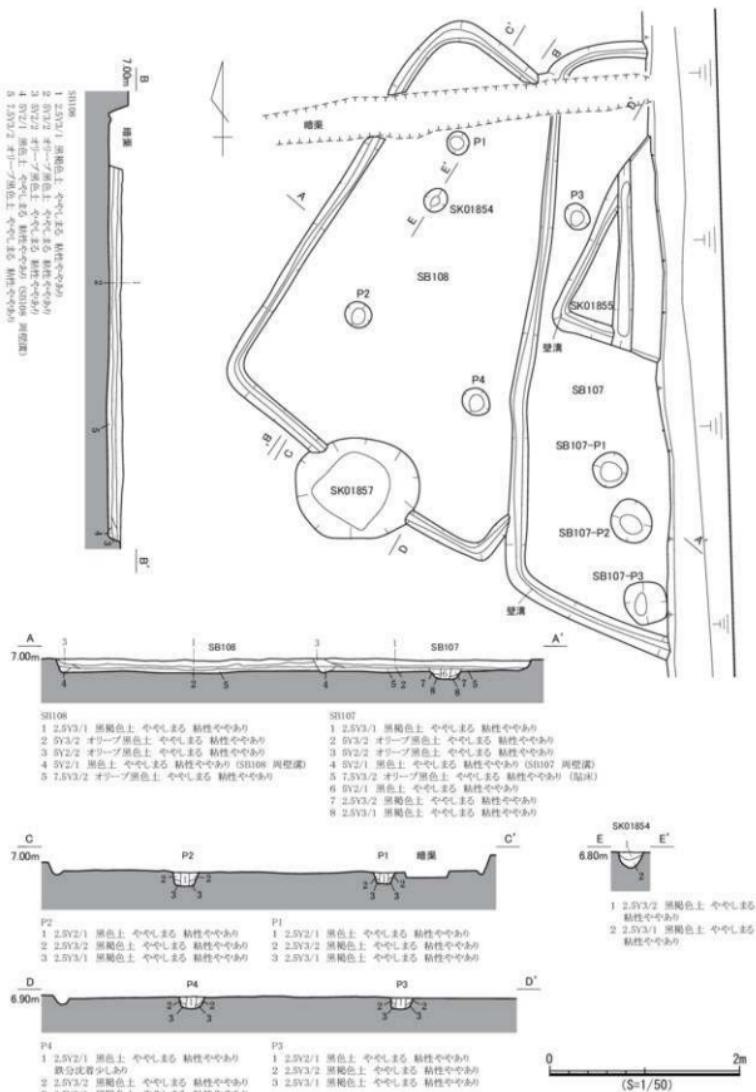


図67 SB108遺構図

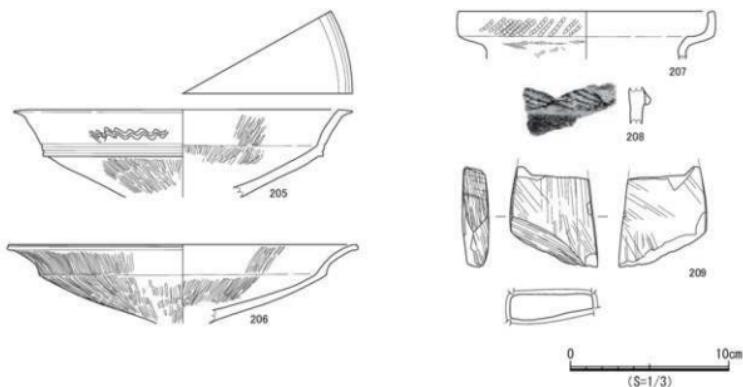


図68 SB108遺物実測図

料と考えられる。209は凝灰質泥岩製の方形の手持ち砥石である。

時期 時期決定資料はえられなかった。出土土器は断片的で205はV-2期、206はV-3期に相当する。SB107と近接した時期ではあるが、出土土器から時期はV期後半と考えられる。

SB109（遺構：図69・70、遺物：図71）

検出状況 西部東側のほぼ中央のV層上面で検出した。周囲の堅穴住居跡との重複関係がなく、掘形の大半が残る。

形状 東西幅4.90m・南北幅5.20mで南北がやや長い、方形を呈す。壁面はいずれも直線的だが、南壁がやや弧状となる。完全埋没後からSK01865、SK01867の掘削が認められ、SB109完全埋没の時期を知る上で重要な資料である。

埋土 5層に分層し、水平堆積である。5層は掘形を埋めて床面を形成した土層である。

床面 床面上からP1～P4の小穴4基検出した。いずれも柱痕跡が認められ、平面的な位置を含めて主柱穴であると考えられる。また、床面上では炉跡の掘形は認められなかったが、焼土の散布を確認した。SK01883は床面除去後に検出した。掘形掘削以前の遺構である。

遺物出土状況 土器片は南壁付近から多く出土した。小片ではあるが床面付近からの出土である。

出土遺物 210は外面に多条沈線のある高環G3類。212は手捏ね土器。口縁部を意図的に打ち欠いた可能性がある。213は縄文時代晚期の資料、211はIV期壺A類で周囲から混入した可能性がある。214は柱状の凝灰岩製の手持ち砥石である。

時期 時期決定資料は認められないが、210を判断材料とするとVI期後半～VII期前半が考えられる。

SB110（遺構：図72、遺物：図73）

検出状況 西部東側の中央からやや南側のV層上面で検出した。周囲の堅穴住居跡との重複関係がないが、確認したのは掘形のうち西半分程度で、残る部分は調査区域外にある。

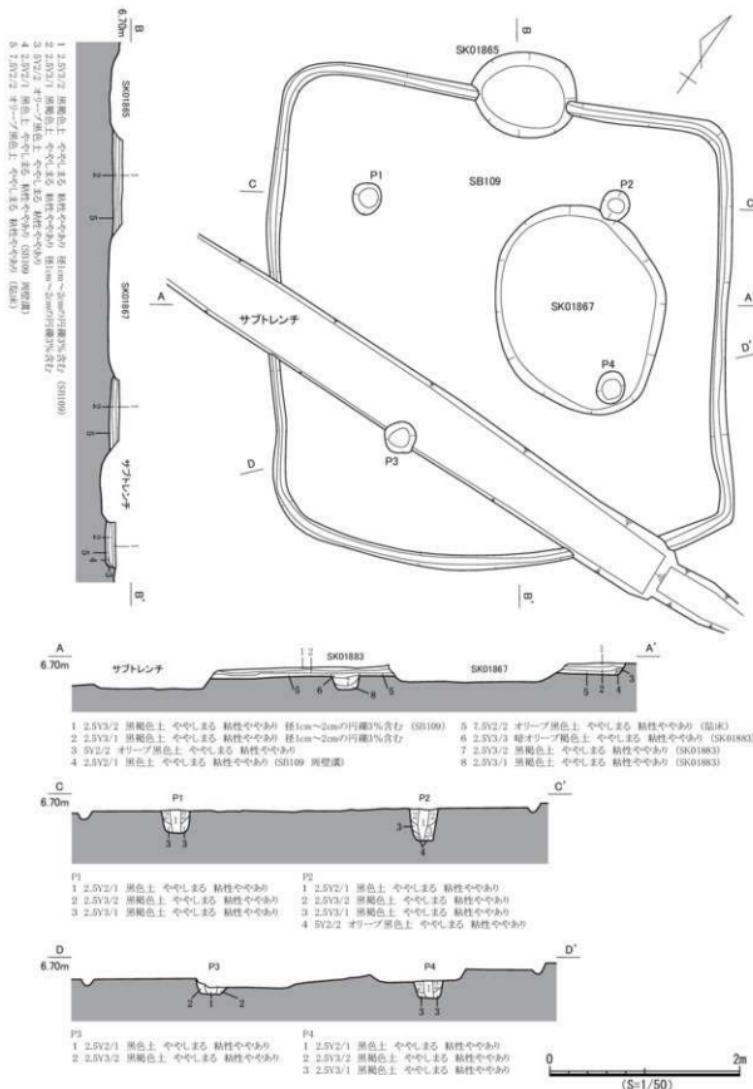


図69 SB109構造図（1）

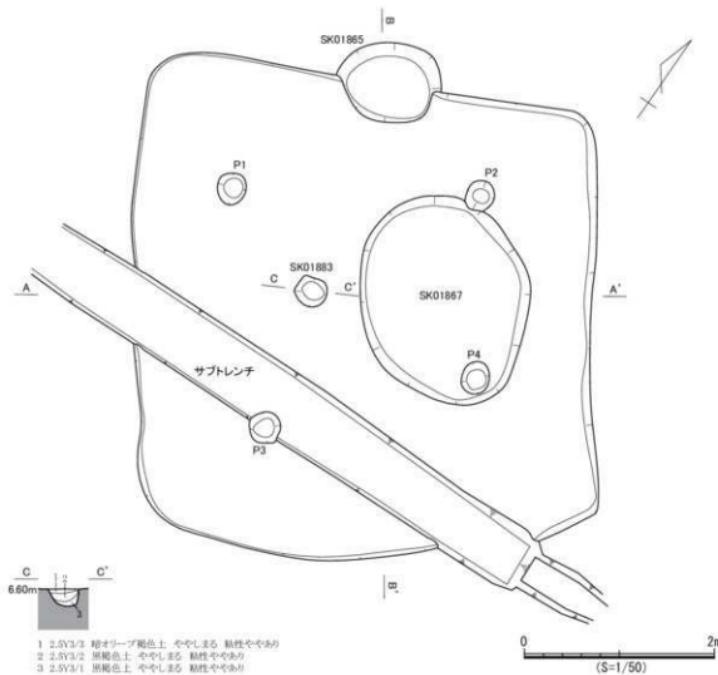


図70 SB109遺構図（2）

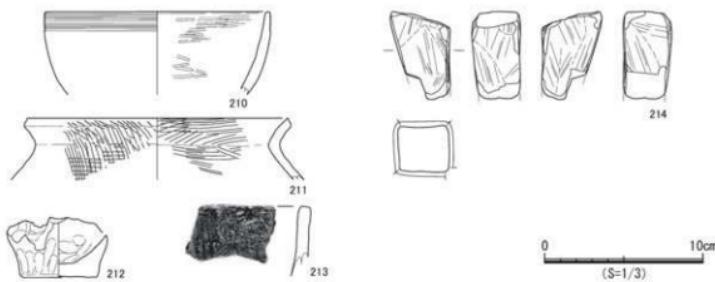


図71 SB109遺物実測図

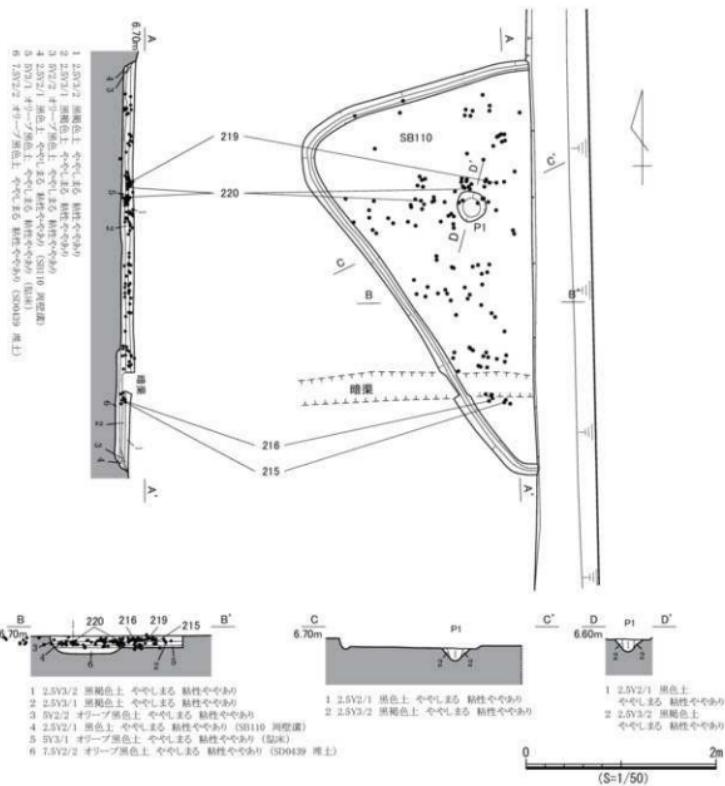


図72 SB110遺構図

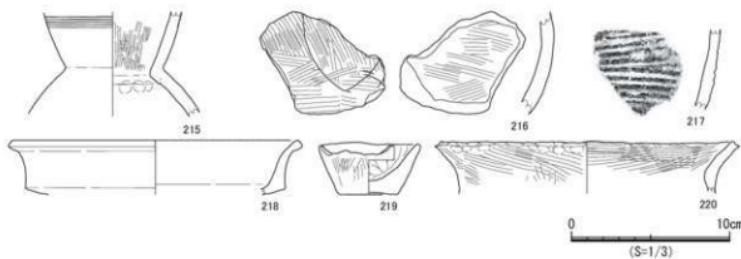


図73 SB110遺物実測図

形状 確認範囲での南北幅は5.0m。方形を呈すと考えられる。残存する壁高は0.1m弱で壁面は緩やかに立ち上がる。

埋土 5層に分層した。最下層の5層は掘形を埋めて床面を形成した土層である。水平堆積が認められる。

床面 床面はほぼ平坦で幅0.2m・深さ0.08m程度の壁溝が壁面沿いをめぐる。P1は柱痕跡を確認した。平面的位置からみて主柱穴であろう。床面下にはSD0439が認められる。

遺物出土状況 出土土器は埋土上層～床面付近まで縄文～VII期までの土器片が散発的に認められ、安定的ではない。

出土遺物 215は多条沈線のある壺H2b類。高坏にはB1類218がある。甕は220でB3類。口縁端部に連続する押圧を加える。216はIV期壺の胴部片。線刻状の文様が認められる。217は縄文時代晚期の資料。216・217とともに周囲から混入した可能性がある。216・217を除くとVI期末～VII期前半が主と考えられるが、P1から出土した218がV-2期にあたる。

時期 断片的ではあるが、P1出土218から時期はV-2期と考えられる。

表8 積穴住居跡一覧表

遺構番号	現場遺構番号	調査区画	検出層位	埋土	平面形状	主軸方位	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	覆き	新>●>旧	時期	出土遺物	補足		
SB098	08_B0096	ES2～ET3	V上	5層	B	正方形	N67°W	(3.10)	(1.30)	(2.90)	(1.10)	0.18	>SB100, S2050, S2051, S0421, SB101, SK01604	VII-2期	H	39	5
SB099	08_B0094	ET2～IA3	V上	5層	B	正方形	N22°E	4.80	4.45	4.70	4.35	0.14	>SB100, S2050, S2051, S101	VII-3期	H, S, W	41	5
SB100	08_B0095	ET2～IA3	V上	4層	B	正方形	N18°E	(4.50)	(4.40)	(4.40)	(4.30)	0.14	SB099, SP0070> >S2050, S2051, SB101	VII-1・2期	H, S, W	43	5
SB101	08_B0319	ET3	V上	5層	B	正方形	N12°W	4.90	(4.55)	4.50	(4.30)	0.12	SB099, SB106, SB096, SB102, SK01614, SK01616;>S0421, S2050, SB01608	VII期?	H, S, W	46	5 6
SB102	08_B0097	IA3	V上	6層	B	正方形	N16°E	(5.10)	5.00	(4.90)	4.90	0.30	20> >S2050, S2051	VII-3期	H, P, T	47	6 48
SB103	08_B0098	IC3	V上	6層	B	正方形	N32°E	(5.80)	(5.70)	(5.70)	(5.60)	0.30	S00420, SD0430> >SB104, S2051, S2052	VII-3期	H, J, L	51	6 52
SB104	08_B0327	IC1	V上	5層	B	正方形	N25°W	(6.00)	5.30	(5.70)	4.90	0.20	95> >S2052	VII期後半	H, L, S, T	59	7
SB105	08_B0266	IE3	V上	5層	B	正方形	N41°E	5.00	5.00	4.60	4.20	0.18	SD0430, SK01768;>S2052, SK01706	VII-3期前後	H, L	61	8
SB106	08_B0180	IH3	V上	5層	B	不明	N49°E	(6.00)	(3.00)	(5.80)	(2.80)	0.16	SK01810, SB108;>S2054, SK01809	V-3～VI期前半	H	63	8
SB107	08_B0178	IH4～II4	V上	5層	B	不明	N3°E	(6.00)	(1.50)	(5.80)	(1.20)	0.15	>SB10852054	V-3期	H, T	65	8
SB108	08_B0179	II3～II4	V上	5層	B	不明	N34°E	(4.60)	(2.70)	(4.40)	(2.50)	0.15	5> >SB106, S2054	V期後半	H, J, P, S	67	9
SB109	08_B0321	IL3	V上	5層	B	正方形	N35°W	5.20	4.90	4.85	4.65	0.18	SK01867, SK01865;>SK01866	VII期後半～VIII期前半	H, J, K, S	69	9 70
SB110	08_B0385	IN4	V上	5層	B	不明	N32°W	(5.00)	(3.00)	(4.50)	(2.50)	0.10	>SD0439	V-2期	H, J, P	72	9

表9 壓穴住跡内小穴一覧表

遺構番号	現場遺構番号	調査区画	検出層位	埋土	平面形状	断面形状	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	新>●>旧	出土遺物	備考
SB098-P1	08_00200	ES3	V上	3層 G	円形	A1a1	0.35	0.35	0.28	0.26	0.12		H	
SB099-P1	08_00196	ET2	V上	3層 G	円形	A1a1	0.30	0.30	0.24	0.24	0.15		H	
SB099-P2	08_00197	ET2	V上	3層 G	円形	A1a1	0.30	0.30	0.24	0.22	0.18		H	
SB099-P3	08_00198	ET2	V上	3層 G	円形	A1a1	0.35	0.30	0.26	0.22	0.20		H	
SB099-P4	08_00199	ET2	V上	3層 G	円形	A1a1	0.30	0.30	0.26	0.26	0.20		H	
SB100-P1	08_00212	ET2	V上	3層 G	長楕円形	A1a1	0.35	0.30	0.26	0.20	0.15		H	
SB100-P2	08_00213	ET2	V上	3層 G	楕円形	A1a1	0.35	0.35	0.28	0.26	0.12		H	
SB100-P3	08_00214	ET2	V上	3層 G	楕円形	A1a1	0.35	0.35	0.28	0.26	0.14		H	
SB100-P4	08_00215	ET2	V上	3層 G	楕円形	A1a1	0.35	0.35	0.28	0.24	0.16		H	
SB101-P1	08_00345	ET3	V上	3層 G	円形	B2a1	0.35	0.30	0.25	0.20	0.18			
SB101-P2	08_00347	ET3	V上	3層 G	円形	B2a1	0.38	0.36	0.28	0.26	0.16	>SD0421	H	
SB101-P3	08_00346	ET3	V上	3層 G	円形	A2a1	0.38	0.34	0.20	0.20	0.16		H	
SB101-P4	08_00348	ET3	V上	3層 G	円形	B3a1	0.20	0.20	0.16	0.10	0.15		H	
SB102-P1	08_00220	IA3	V上	3層 G	円形	A2a1	0.30	0.28	0.20	0.15	0.18		H	
SB102-P2	08_00221	IA3	V上	3層 G	円形	A2a1	0.36	0.32	0.30	0.28	0.20		H	
SB102-P3	08_00222	IA3	V上	3層 G	円形	A2a1	0.30	0.30	0.29	0.20	0.20		H	
SB102-P4	08_00223	IA3	V上	3層 G	円形	A2a1	0.32	0.30	0.26	0.24	0.16		H	
SB102-P5	08_00224	IA3	V上	2層 B	円形	A1a1	0.30	0.25	0.20	0.20	0.16		H	
SB102-P6	08_00225	IA4	V上	3層 B	円形	A1a1	0.42	0.40	0.30	0.26	0.16		H	
SB103-P1	08_00263	IC3	V上	3層 G	楕円形	K3a1	0.34	0.34	0.22	0.20	0.24		H	
SB103-P2	08_00265	IC3	V上	3層 G	楕円形	B2a1	0.32	0.30	0.22	0.20	0.20		H	
SB103-P3	08_00264	IC3	V上	3層 G	楕円形	B2a1	0.70	0.65	0.52	0.50	0.22	>SZ052	H	
SB103-P4	08_00266	IC3	V上	3層 G	楕円形	B2a1	0.32	0.30	0.22	0.20	0.20		H	
SB103-P5	08_00262	IC3	V上	3層 B	円形	A3a1	0.35	0.30	0.20	0.16	0.26		H	
SB104-P1	08_00352	ID02	V上	4層 G	楕円形	A2a1	0.40	0.34	0.20	0.16	0.22		H	
SB104-P2	08_00353	ID02	V上	4層 G	楕円形	A2a1	0.40	0.35	0.20	0.18	0.15		H	
SB104-P3	08_00354	ID02	V上	4層 G	楕円形	A2a1	0.32	0.30	0.16	0.16	0.25	>SK01682	H	
SB104-P4	08_00355	ID02	V上	4層 G	楕円形	A3c1	0.32	0.30	0.12	0.10	0.30		H	
SB104-P5	08_00356	ID02	V上	2層 B	円形	A1a1	0.32	0.30	0.18	0.18	0.10		H	
SB105-P1	08_00294	ID3	V上	3層 G	楕円形	A2a1	0.35	0.32	0.22	0.20	0.18		H	
SB105-P2	08_00296	IE3	V上	3層 G	楕円形	A2a1	0.35	0.30	0.28	0.24	0.15		H	
SB105-P3	08_00295	IE3	V上	3層 G	楕円形	A2a1	0.30	0.30	0.22	0.22	0.18		H	
SB105-P4	08_00297	IE3	V上	3層 G	楕円形	B2a1	0.42	0.40	0.25	0.20	0.20		H	
SB105-P5	08_00298	ID3	V上	2層 B	円形	A1a1	0.30	0.30	0.22	0.22	0.15		H	
SB105-P6	08_00299	ID4	V上	2層 B	円形	A1a1	0.32	0.30	0.20	0.20	0.20		H	
SB105-P7	08_00300	IE4	V上	2層 B	円形	A1a1	0.25	0.25	0.10	0.10	0.10		H	
SB106-P1	08_00302	IB3	V上	3層 G	円形	A1a1	0.35	0.50	0.16	0.16	0.12		H	
SB106-P2	08_00304	IB3	V上	3層 G	円形	A2a1	0.40	0.35	0.30	0.28	0.15	>SZ054		
SB106-P3	08_00303	IB3	V上	3層 G	円形	A2a1	0.40	0.40	0.20	0.20	0.15		H	
SB106-P4	08_00305	IB3	V上	3層 G	円形	A2a1	0.35	0.35	0.30	0.28	0.15		H	
SB107-P1	08_00226	II4	V上	3層 G	楕円形	A1a1	3.40	3.29	0.20	0.20	0.12		H	
SB107-P2	08_00227	II4	V上	2層 B	楕円形	A1a1	0.45	0.40	0.22	0.18	0.14		H	
SB107-P3	08_00228	II4	V上	3層 G	円形	A2a1	0.45	0.45	0.25	0.12	0.20		H	
SB108-P1	08_00269	II3	V上	3層 G	円形	B2a1	0.22	0.22	0.14	0.14	0.10		H	
SB108-P2	08_00270	II3	V上	3層 G	円形	B2a1	0.30	0.28	0.16	0.16	0.14		H	
SB108-P3	08_00271	II3	V上	3層 G	円形	B2a1	0.30	0.25	0.16	0.16	0.12		H	
SB108-P4	08_00272	II3	V上	3層 G	円形	B2a1	0.30	0.30	0.16	0.16	0.12		H	
SB109-P1	08_00394	IM3	V上	3層 G	円形	A3a1	0.32	0.30	0.20	0.20	0.24	>SK01866		
SB109-P2	08_00395	IM3	V上	4層 G	円形	A3a1	(0.30)	0.30	0.14	0.14	0.32	SK01868	H	
SB109-P3	08_00396	IM3	V上	2層 G	円形	A1a1	0.35	0.20	0.20	0.20	0.10		H	
SB109-P4	08_00397	IM3	V上	3層 G	円形	A2a1	0.35	0.30	0.20	0.20	0.18		H	
SB110-P1	08_00410	IN4	V上	2層 G	円形	A2a1	0.30	0.30	0.12	0.12	0.12	SK01862	H	

3 挖立柱建物跡・柵

一定の規格のもとに柱を伴った施設が復元できる可能性がある遺構について取り扱う。B地区西部で検出した掘立柱建物跡は、弥生時代後期から古墳時代前期と思われる2棟がある。

また、確認できた柵跡は、弥生時代後期から古墳時代前期と思われる1条である。確認した柵跡は、列状に並んだ柱穴しか確認できなかつたため柵跡と判断したもの、掘立柱建物跡であった可能性も考えられる。

表10 挖立柱建物跡一覧表

遺構番号	調査区分	検出層位	柱間(径×高)	長軸長	短軸長	主軸方位	新>●>旧	時期	備考	種別	図版
SH004	HQ17～Q18	V上	1×1	3.20	2.75	N33°W		VII期		74	—
SH005	HF20～G20	V上	1×1	3.83	3.25	N14°W		VII期		75・26	9・10

表11 挖立柱建物跡柱穴一覧表

遺構番号	現場遺構番号	調査区分	検出層位	埋土形狀	平面形狀	断面形状	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	新>●>旧	出土遺物	備考
SH004-P1	08_B0361	HQ17	V上	1層 A	円形	A1a1	0.42	0.42	0.26	0.24	0.05			H
SH004-P2	08_B0362	HP18	V上	2層 B	円形	A1a1	0.45	0.40	0.25	0.25	0.10			W
SH004-P3	08_B0363	HQ17	V上	1層 A	長椭円形	A1a1	0.40	0.35	0.20	0.12	0.10			
SH004-P4	08_B0364	HQ18	V上	1層 A	円形	A1a1	0.48	0.46	0.26	0.22	0.05			
SH005-P1	08_B0469	HP20	V上	4層 G	円形	A1a1	0.30	0.25	0.24	0.20	0.25			H, W
SH005-P2	08_B0458	HF1	V上	1層 A	円形	A1a1	0.60	0.55	0.42	0.40	0.10			
SH005-P3	08_B0512	HC20	V上	4層 G	円形	B1a1	0.40	0.35	0.20	0.20	0.40			H, W
SH005-P4	08_B0459	HF1	V上	2層 B	橢円形	A1a1	1.00	0.70	0.60	0.50	0.20			H

SH004（遺構：図74）

検出状況 西部西側の低地部、旧河道にはさまれた遺構の分布が希薄な地域に位置する。V層上面でP1～P4計4個の小穴がほぼ等間隔に並ぶ状況を検出したので掘立柱建物跡と判断した。

形状 確認した小穴はいずれも径0.4m程度の円形で、深さは0.05m～0.1mと浅い。柱状痕の痕跡を示す堆積は確認できなかつたため柱を伴うかは不明瞭だが、周囲には遺構が認められず、南北方向3.0m、東西方向2.8mの規模で軸線がそろうことから、何らかの施設と考えられる。

埋土 P2を除いて単層であった。

遺物出土状況 P1からV～VII期に相当する図示不可能な土器片が数片出土した。P2の上層には小さな木片が認められた。

時期 出土遺物から判断するのは困難である。北側に位置するSK01871と関連する施設の可能性が高い。低地部を利用したVI～VII期の木製品の生産に関わると推測している。また、低地部ではVI期後半以降の土器を多く含む土層がV層上面を覆っていたこともあり、VII期以降と考えられる。

SH005（遺構：図75・76、遺物：図78）

検出状況 西部中央や東側、微高地から低地部への境界付近にあり、SZ053の西側に位置する。V層上面で検出した。柱痕跡を伴う小穴P1・P3確認したので、何らかの施設の一部であると考え、周囲に展開する小穴から対応関係を検討した。対応する小穴としてP4・P5が相当すると考え、掘立柱建物跡と判断した。また、周辺に小さな土坑、規格が復元できない単独の柱穴の広がりが認められるので、合わせて図示した。

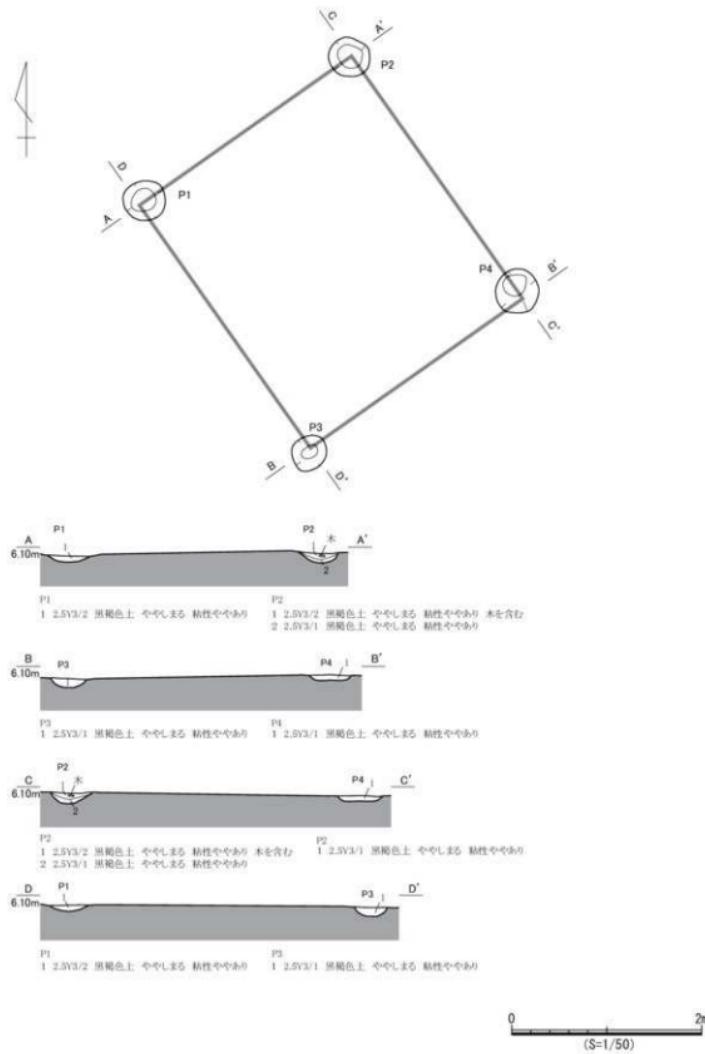


図74 SH004遺構図

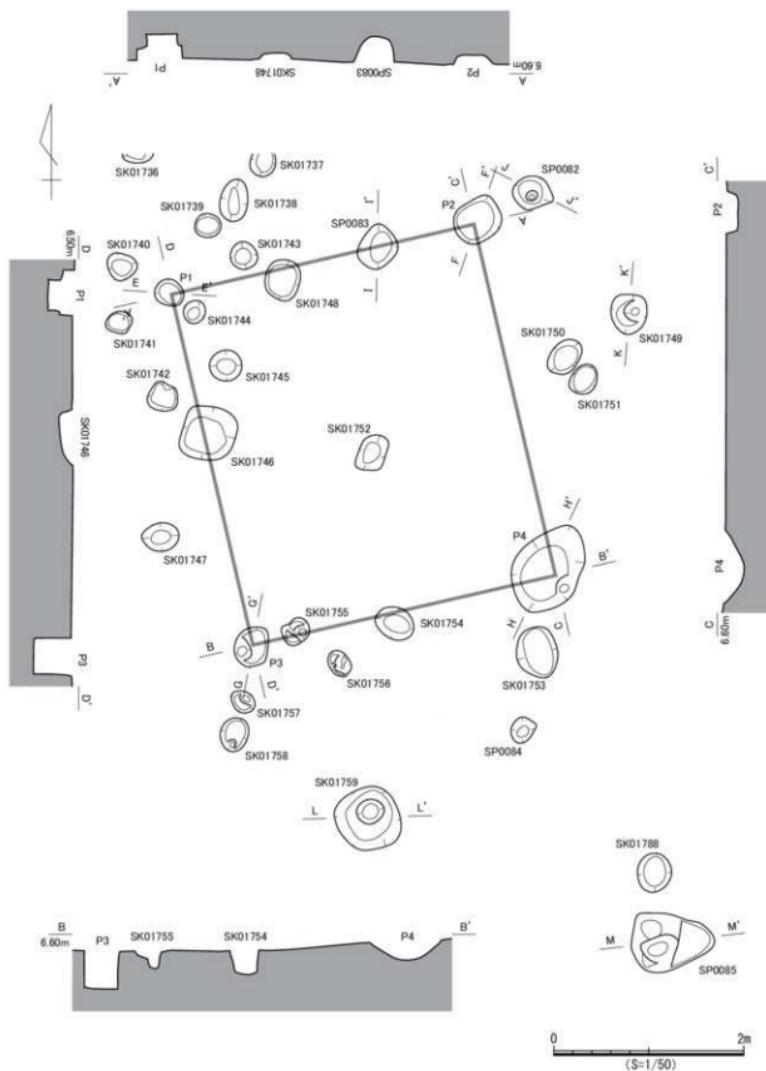


図75 SH005遺構図(1)

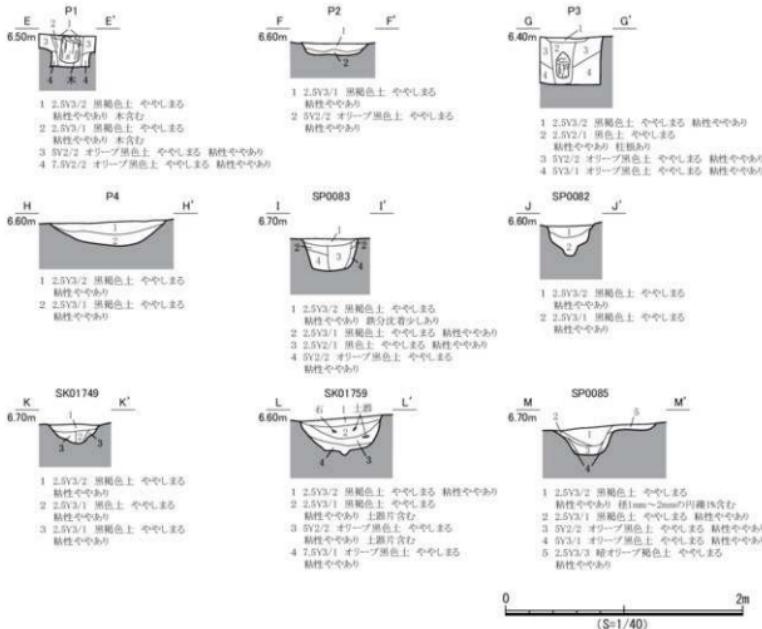


図76 SH005遺構図（2）

柱穴 東西方向3.8m・南北方向3.2mに復元できるが、P2・P4はいずれも柱痕跡がなく、深度が浅い。埋土はP1・2ともに4層あり、柱痕を埋める土層が認められた。P2・4は2層に分層した。

出土遺物 227は柱根である。227は芯持ちの分割材を形成して柱の太さを描える。表面に縦方向の加工痕を残す。上端部は欠損し、下端部には伐採痕を残す。

時期 P4からV～VII期相当の図示不可能な土器片が少量出土した。VII期以降が考えられる。

SA003（遺構：図77、遺物：図78）

検出 西部低地部中央や北側、SD0423に隣接し、V層上面で検出した。柱痕跡が確認できたP4の周囲を検討したところ、明確な柱痕跡が認められないが、柱状の断面形を示す小穴P1、P3～P5に認められた。P1～P2～P3～P4～P5のコの字形となる施設があると判断し、柵跡とした。

形状 それぞれの小穴間の間隔は東西幅約1m、南北約2mのほぼ等間隔に位置する。P2は他の小穴比べて深度が浅いので検討の余地が残る。P4の西側に隣接するSP0076は他に組み合う柱穴は認められないが、P4の柱が抜き取られた埋土の状況を示しているため、P4からSP0076へ柱が移された可能性もある。現状では他と軸線が揃うような柱穴が確認できないので、単独の柱穴として示した。

埋土 単層のP2を除いて、3層から6層の堆積が認められた。

遺物出土状況 P4より土器片が1層から中層までの間で出土した。多くがV期とIV期の資料で、なかでもIV期の資料が多い。IV期の資料は1層より下位の土層から出土し、223が底面付近から出土した。

出土遺物 図示した土器はIV期の資料。223は蓋で波状文と直線文がみられる。221・222・224・225は甕A類。221の底部には穿孔がある。226は柱根である。226は芯持材で、表面に縱方向の加工痕を残す。上端部は欠損し、下端部には伐採痕を残す。

時期 P1からV～VII期相当の土器片が出土した。また、P4からIV期の土器が出土したが、V期の資料も含むので、VII期以降と考えられる。

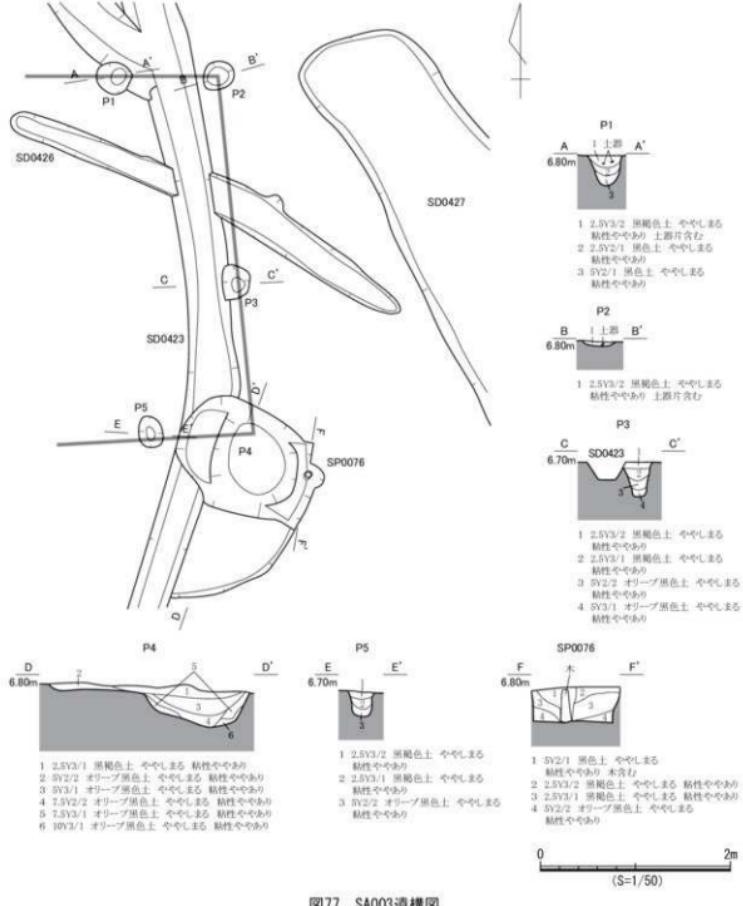


図77 SA003遺構図

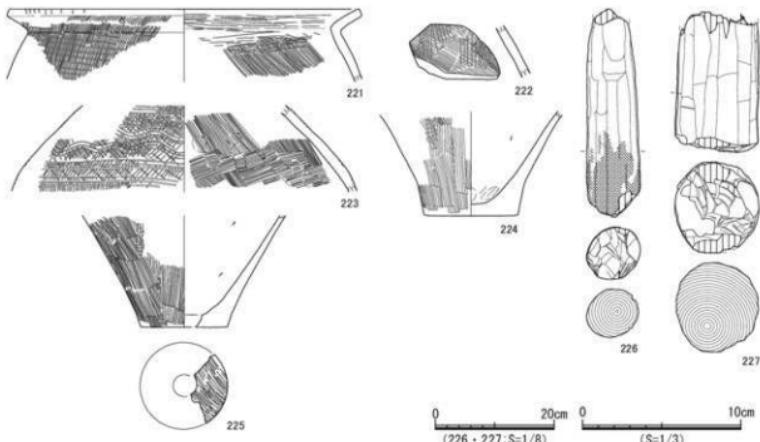


図78 SH005・SA003遺物実測図

表12 横跡一覧表

遺構番号	調査区画	検出層位	長さ(m)	主軸方位	新>●>旧	時期	備考	博図	図版
SA003	HC20	V上	5.30	N3° E	SD0423> >SD0424, SP0076	VII期		77	10

表13 横跡柱穴一覧表

遺構番号	現場遺構番号	調査区画	検出層位	埋土	平面形状	断面形状	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	新>●>旧	出土遺物	備考
SA003-P1	08_B0291	HC20	V上	3層 B	円形	A3a1	0.40	0.40	0.16	0.16	0.30	H		
SA003-P2	08_B0292	HC20	V上	1層 A	円形	A1a1	0.35	0.32	0.16	0.15	0.05	>SD0424		
SA003-P3	08_B0425	HC20	V上	4層 B	円形	A4a2	0.35	(0.25)	0.15	(0.15)	0.35	SD0423>		
SA003-P4	08_B0424	HD20	V上	6層 B	椭円形	A1a1	2.10	1.50	0.60	0.50	0.40	SD0423> >SP0076		H
SA003-P5	08_B0426	HC20	V上	3層 B	円形	A2a1	0.35	0.30	0.15	0.15	0.25			

4 溝状遺構 (SD)

確認した溝状遺構には方形を呈する溝、集落域を区画すると考えられる溝、堅穴住居跡の周囲に位置する溝、性格不明の溝がある。下記にこの順に述べる。

SD0421 (遺構: 図80、遺物: 81)

検出状況 西部北東部のV層上面で検出した。SB098～SB101の床面で方形にめぐると考えられる溝1/2程度を確認した。残り1/2は調査区域外にある。S2050とは西溝で隣接するが、重複関係は認められなかった。周囲に展開する堅穴住居跡と規模、主軸方向さらにはA地区でも確認した堅穴住居跡の掘形掘削時における床下構造と類似することから、堅穴住居跡の可能性も指摘しうるが、内部に柱穴

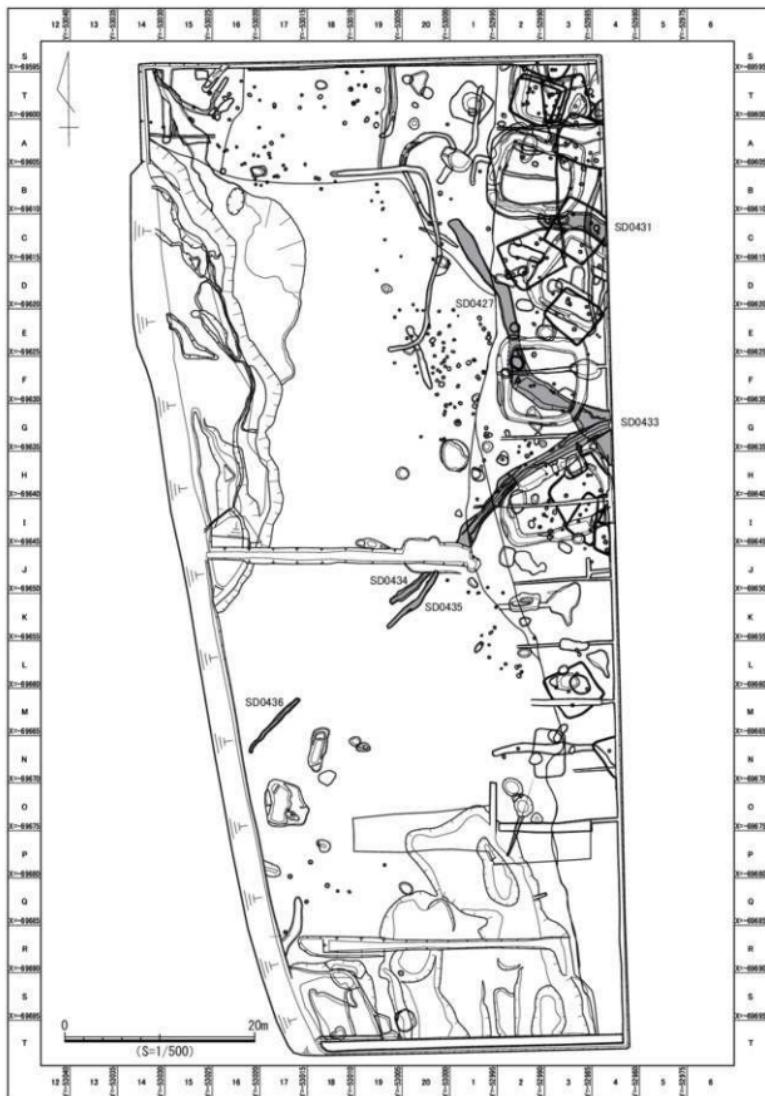


図79 B地区西部主な溝跡位置図

がないため、SDとする。なお、SZの可能性もあるが、SZ050の内部にあることや、溝の断面形から異なることからSZではないと判断した。周溝状の遺構以外の掘形は検出できなかった。

形状 幅1.2m、深さ0.2m程度の溝がコの字状にめぐる。壁面は緩やかで、底面はやや平坦である。東西幅は5.40m、確認範囲での南北幅は3.00mをはかる。確認できた溝のうち西溝はやや幅広で1.6mをはかる。

埋土 残りのよい西溝で4層に分層した。壁面から徐々に自然堆積したと考えられる。

遺物出土状況 土器片いずれも小片で西溝に比較的集中して分布し、レベル的にはやや床面より離れ2層と3層の境界付近から出土した。多くがV期後半～VII期にあたるが、IV期の壺231も混在して出土した。混入資料であろう。

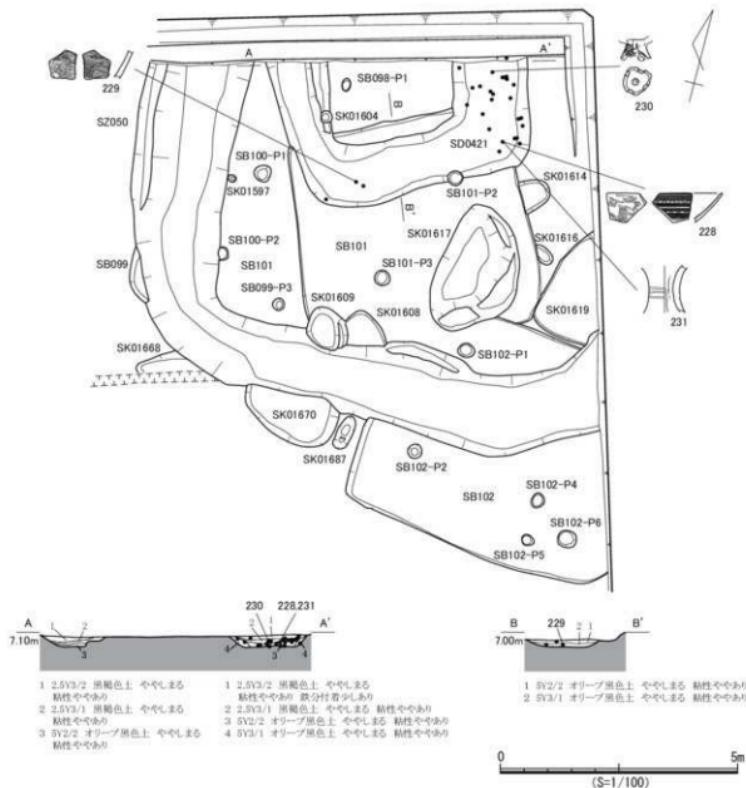


図80 SD0421遺構図

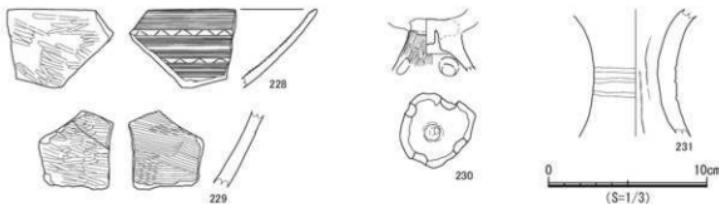


図81 SD0421遺物実測図

出土遺物 5点を図示した。228は内面加飾の高環C4類。多条沈線と山形文がみられる。口縁端部はわずかに内傾面があり、多条沈線を施す。230は高環脚部。C4類もしくはD類と思われる。内外面ともに煤痕が付着し、被熱を受けている。脚部据部の破損は人為的と考えられる。いずれもVI期の資料であろう。229は壺胴部の小片。外面に線刻が認められる。VI期ぐらいであろう。231はIV期壺頭部。おそらく壺AI類で、SZ001からの混入の可能性がある。

時期 出土した土器から時期決定を判断するのは難しい。重複関係からSB098～SB101より先行するので時期はVI期であろうか。

SD0433（遺構：図82～86・91・92・98～101・108～110、遺物：図87～90・102～107・111～113）

検出状況 西部中央東側から低地部を横断して西壁へ向かって伸びる溝。SZ054北溝と重複し、SD0433の方が新しい。V層上面で検出した。西端はサブトレニチ内で不明瞭となるが、SD0434・0435に分流する。SD0434・SD0435は数m西へ伸びて途切れると、その延長上にSD0436が位置することから、SD0433からSD0434・SD0435へ、SD0434・SD0435からSD0436へつながる一連の溝の可能性がある。一方で、延長部分にあたるSD0434・SD0435・SD0436は深度も浅く、SD0433と堆積状況が異なる。土器の出土も少量にとどまり、SD0433との類似した状況は認められなかった。さらにSD0434・SD0435は並列して同時併存するのか、先後関係があるのかについては、平面形の重複関係が認められなかつたので、明らかにはできない。以上のように一連の溝とするには問題点があるので、別の遺構として番号を付けた。また、東端の延長部分は09_4地点に続くことが判明している。集落内を東西に横断し、溝内埋土からV～VI期相当の土器が大量に出土したことから、集落の区画溝と考えられる。時期は後述する出土土器からVI～I期と考えられる。

形状 幅は最も幅広のところで約0.7m・最深部の深さは約0.3m程度である。SZ054の北溝と重複する箇所がある。北溝が埋没後に、再掘削して利用した可能性がある。断面形はV字形を呈し、西側のA断面が最も残りがよい。C断面ではA断面より浅くなり、壁面も緩やかになる。

埋土 A～C断面では6～7層の土層が確認できる。壁面付近の土層は土器の出土が底面からやや浮き気味であったことから、溝機能時の周囲からの流入土であろう。それより上位の土層として5層程度があり、水平堆積が認められる。

土器集中区 溝内には多く土器が廃棄されていた。その平面分布には粗密があり、その出土位置から土器が集中して分布した範囲を土器集中区1～5に分けて示した。多くの土器が潰れて、折り重なつ

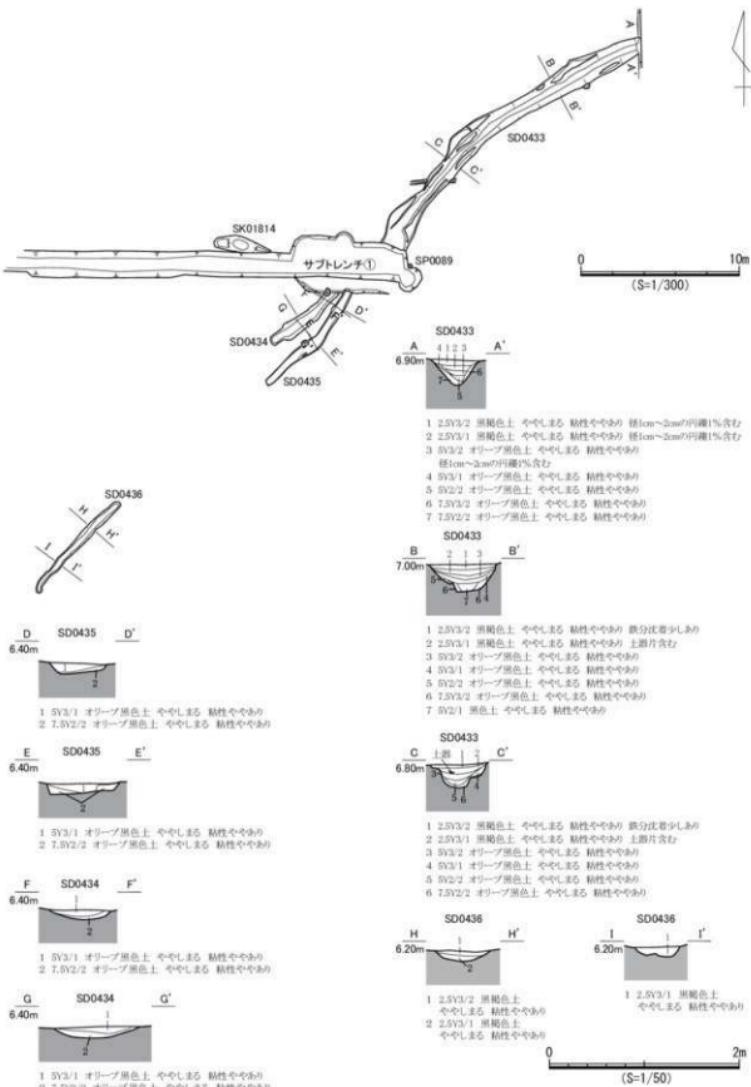


図82 SD0433～SD0436構造図

ていたので、土器が上下で著しく重複している集中区は検出順に図示した。また、大量に土器が出土したので、それぞれの集中区及び集中区の間に分けて、出土状況・出土遺物について以下に示す。また、その時期はとくに説明のない限り、VI-1期である。

土器集中区1 検出範囲のSD0433の東端にあり、その範囲は現状で長軸約1.5mの範囲に密集するので、この範囲を土器集中区1とした。土器片の広がりはさらに東側に及ぶ可能性がある。土器の一部(245・248・250・257・259)は検出時から確認できた(①-1)。これらを取り上げた後、2・3層から大量の土器(232~238・241・242・244・246・247・251・252・254~256・258・260)を確認した(①-2)。さらにこれらの土器を取り上げた直下にも土器(236・239・240・247・256・258)を確認した(①-3)。これが底面の付近の土器に相当し、そのうちの一部は直上から出土した土器の一部である(236・247・258)。土器が累重して堆積しており、まとまりをもって溝埋没直前に廃棄した可能性が高い。

出土遺物 232・233は鉢A1類の好例。口縁部内面に強いナデ痕跡が認められ、端部が内傾する。頭部がやや直立気味で、頭部から胴部にかけて直線文が2帯施文される。234~236は鉢A2類。口縁部が強く屈曲し、端部内外面の強いナデが顕著である。外面には頭部直下の直線文ではなく、刺突文のみを加飾する。底部は小さな突出気味の平底でケズリ調整によって形成される。250は台付鉢で鉢D類。胴部下半に煤が付着する。高坏はB3類がみられる(238・239・247・248)。238・239は形骸化するものの坏底部の屈曲部をもち、口縁端部は丸みをもつがわずかな平坦面が残る。247・248は坏底部の屈曲は

痕跡的で、口縁端部は尖り気味である。脚部は円錐形で、248は裾部で強く開く。いずれも口縁部に打ち欠きがある。259は高坏I類の好例。坏部底部外面に強い煤痕が付着する。器台はB1類が多く認められる(240・243・245・246・252)。241はB2類かもしれない。245・246はほぼ完存する資料。口縁部が直線的な形状を保持して大きく開く。脚部は高坏同様、円錐状で透孔付近から強く開く。252は裾部が打ち欠きによる欠損が認められる。口縁端部にも打ち欠きがあり、透孔方向に沿うように3カ所認められる(A地区SK0699出土2166が類似する)。壺はH類249・251、II類255が認められる。251の口縁部に沈線が認められる。壺には253・256・258がある。口縁部形状により、それぞれA3類(253)・B3類(256)・B4類(258)にあたる。いずれも胴部形状は倒卵形を呈す。

土器集中区2 土器集中区1西側に隣接する。土器集中区1と連続するようにもみえるが、土器片を一部取り上げた後の溝底面付近の土器(262~265・267・268)分布に両者の間に空白域が認められたので(①-3)、ここでは一応分離した提示した。また、それより直上の土器分布(261・265~267)にも径0.5m程度

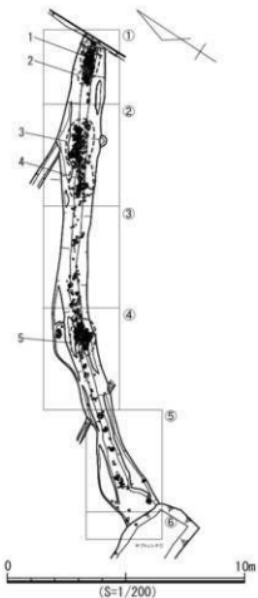


図83 SD0433遺構図(1)

の範囲に集中する(①-2)。2・3層から出土し、垂直分布は土器集中区1とほぼ同じである。

出土遺物 260は鉢A3a類。頭部直下に直線文と刺突文がある。261は甕A3類。262は底部に穿孔があり、鉢B2類であろう。265は高杯B3a類。口縁端部に強い平坦面をもつ。甕は262～264・267・268。263は平底で甕A類の底部であろう。264は甕E1類。内面にケズりが認められる。

土器集中区2・3の間 土器集中区2より西側～0.3mほど離れて、2個体分の土器が出土した(294・295)。出土したレベルは2・3層付近で土器集中区2(①-2)と変わりがない。

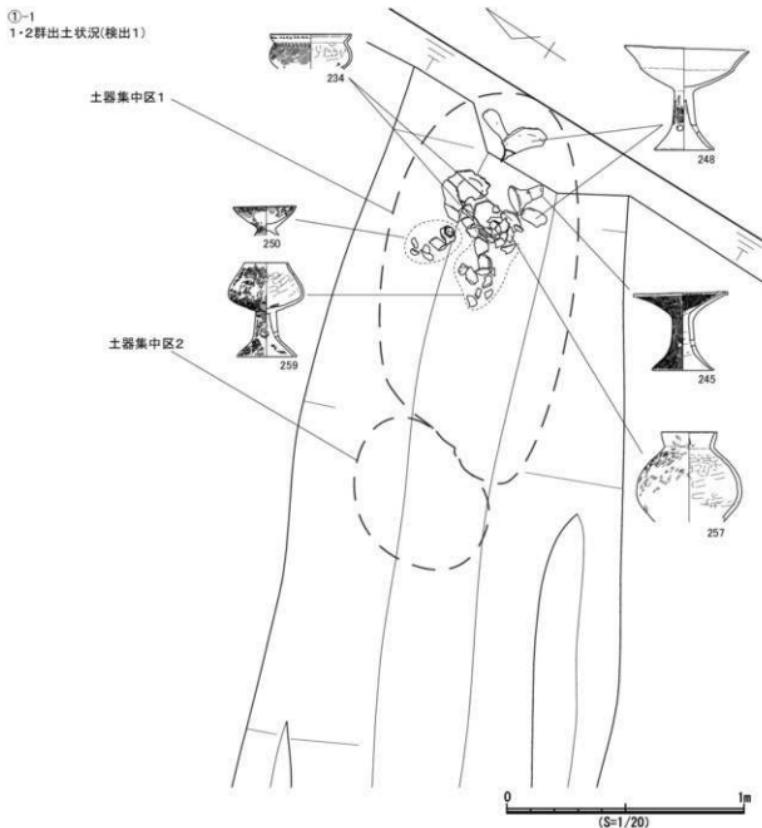


図84 SD0433遺構図(2)

出土遺物 294・295とも甕。294は甕A3類。295は脚部。294は口縁端部がわずかに直立して、平坦面をもつ。胴部はあまり膨らまない。

時期 出土土器の時期は、VI期前半と考えられる。

土器集中区3 SD0427との分岐点ちかくに位置する。とくに甕291・壺293から高杯273にかけて直線的に約1.8m程度密集するので、この周囲を土器集中区(270~276・278~280・284・286・288~293)とした(②-1)。273の一部は南側へ破片が転落しており、同様の状況が280にも認められた。これらの土器直下の底面付近からも10個体分の土器(270・271・273・275・282・283・285・287・291・293)を確認した(②-2)。そのうち、上部から出土した土器と重複しない土器は275・282・283・

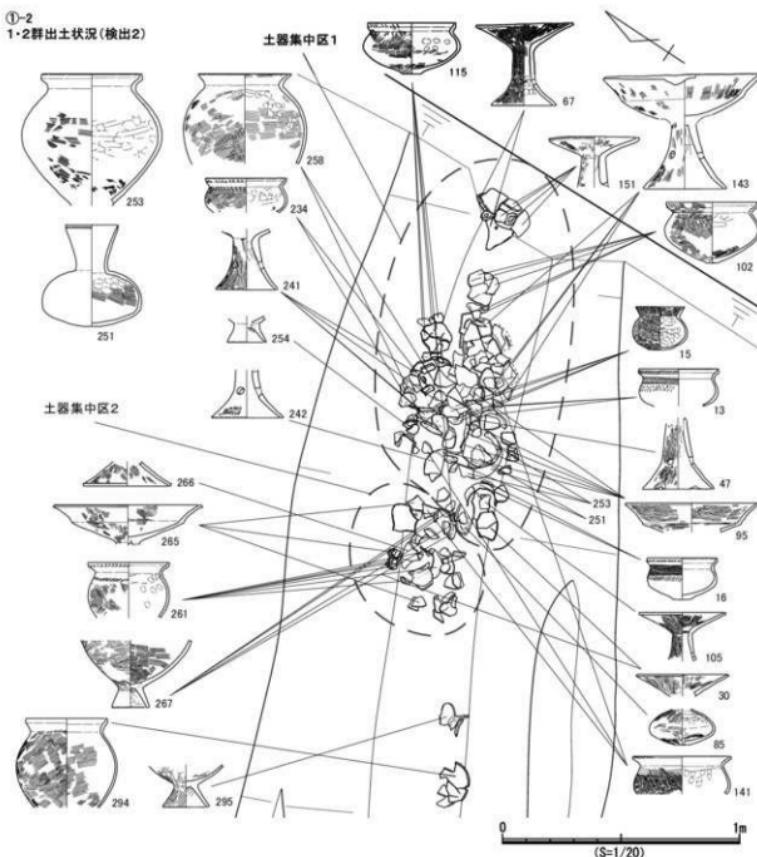


図85 SD0433造構図(3)

285・287である。283はIV期の壺で、SD0427の掘削後の比較的早い時期に周囲から混入した資料である。土器が累重している状況があり、まとまりをもって廃棄された可能性がある。土器は2・3層から出土し、土器集中区2・3との差は認められなかった。

出土遺物 269は鉢A2類。270は鉢B1類のほぼ完形品。胴部が内湾しながら立ち上がり、内外面にハケ目をもつ。271～273は高環B3b類。口縁部が強く外反して端部は丸みを帯びる。275は高環F類のほぼ完存する資料。精緻なミガキを有し、脚部はやや短い。内外面に煤痕が付着する。274は高環B4類。278は大型の高環H1類。器台は土器集中区1同様、B1類が多くみられる(276・279・280)。277はB2類の脚部であろう。壺はB1類(293)、H類(287)、F1類(290)がある。293は頸部に指頭圧痕、胴部はハケ目をそのまま残し、肩部が強く張る。外面には煤痕が付着する。287は狭小な底部と偏平な胴部に打

①-3
1-2群出土状況(検出3)

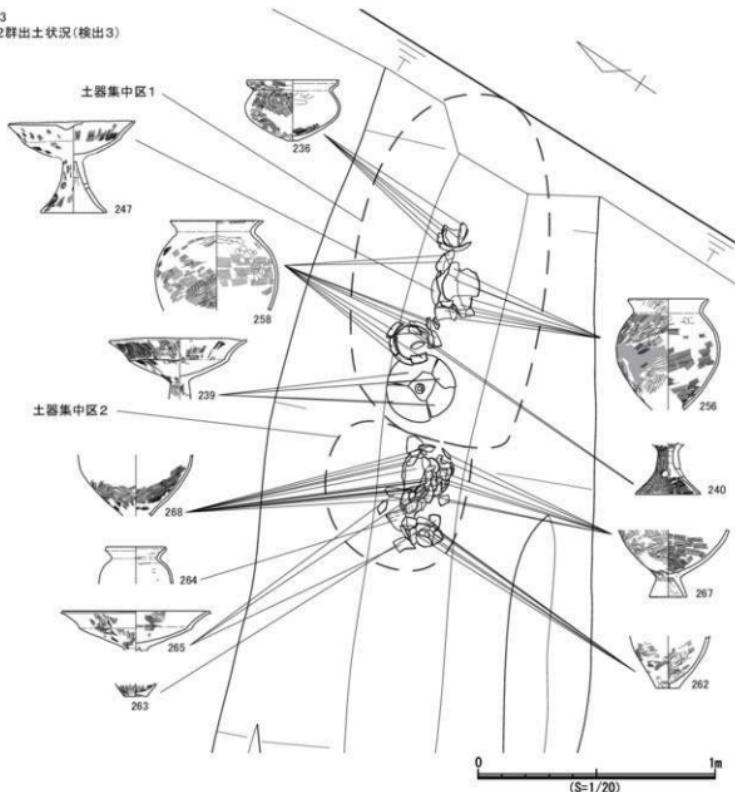
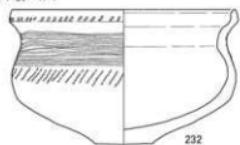
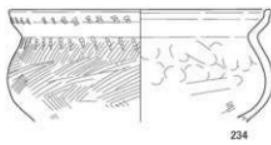


図86 SD0433遺構図(4)

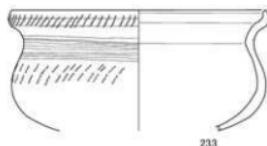
土器集中区1群 1/4



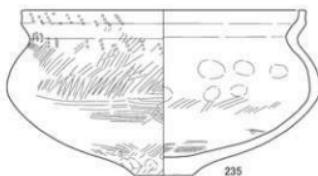
232



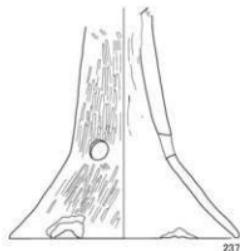
234



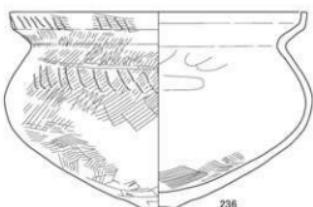
233



235



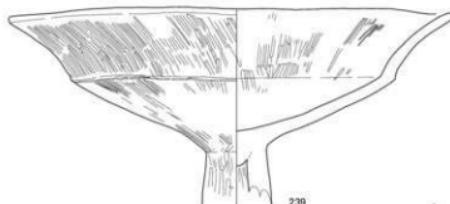
237



236



238



239

0
10cm
(S=1/3)

図87 SD0433遺物実測図（1）

土器集中区1群 2/4

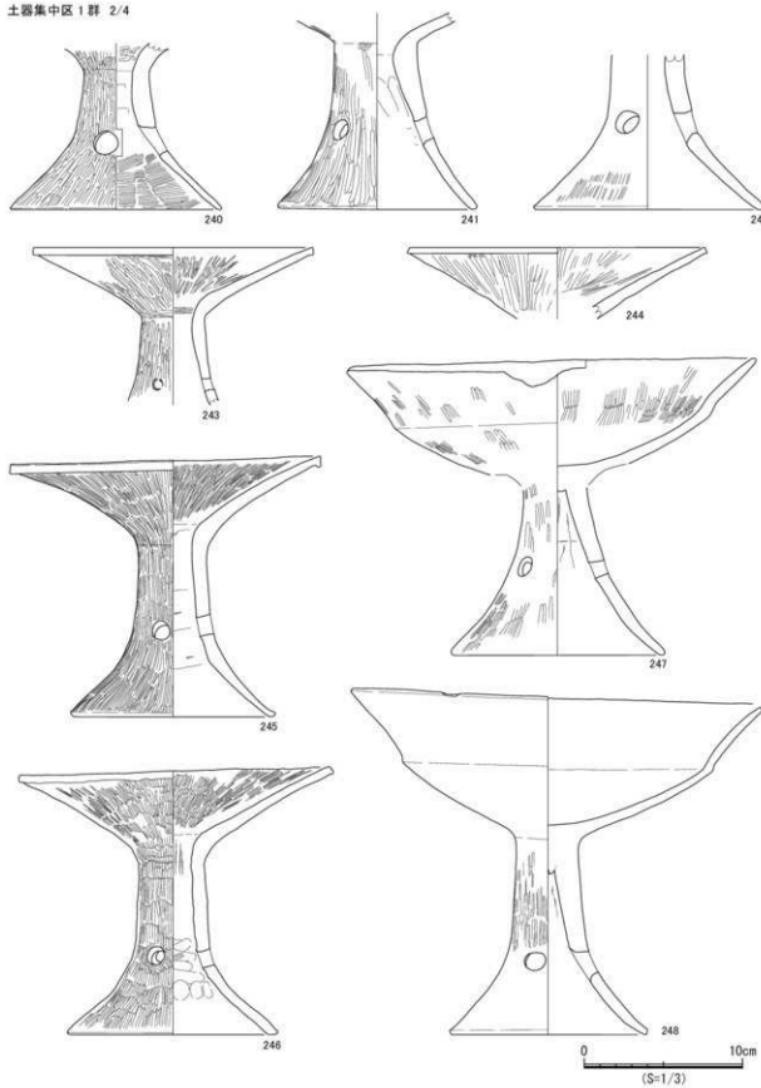


図88 SD0433遺物実測図（2）

土器集中区1群 3/4

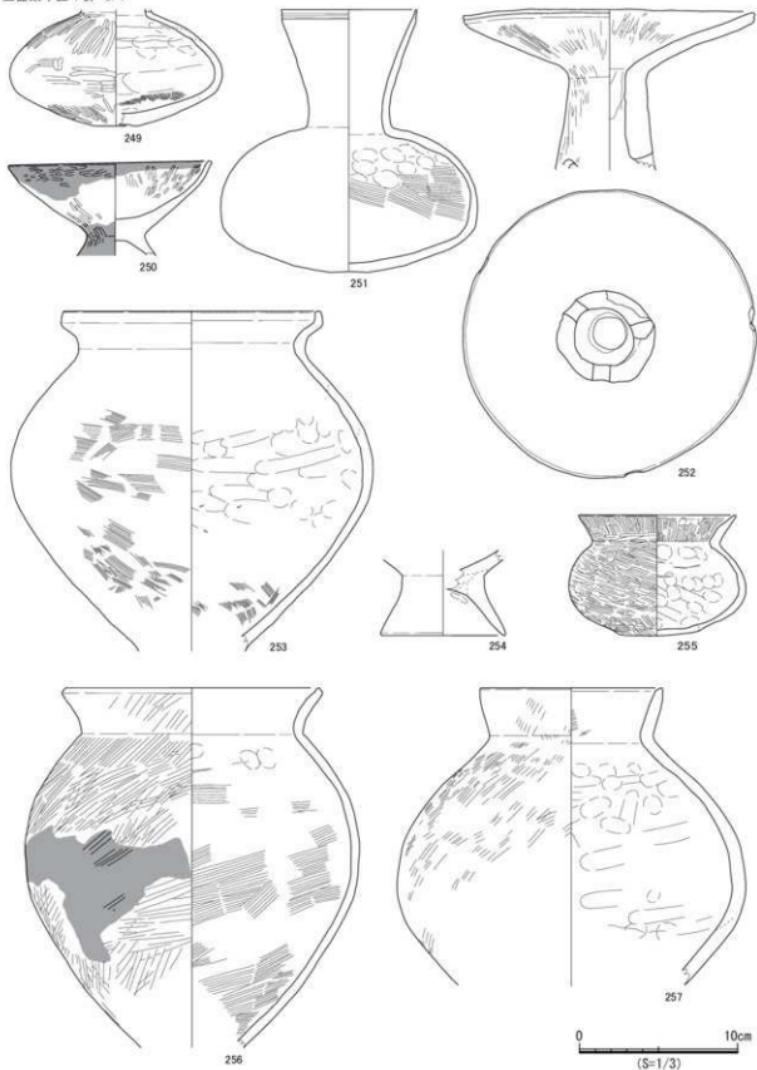
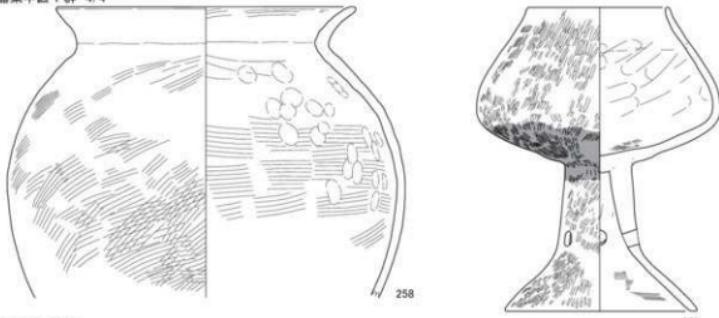
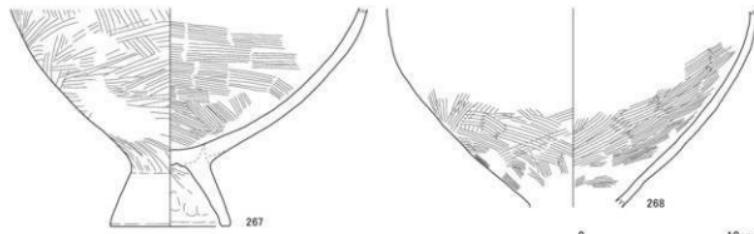
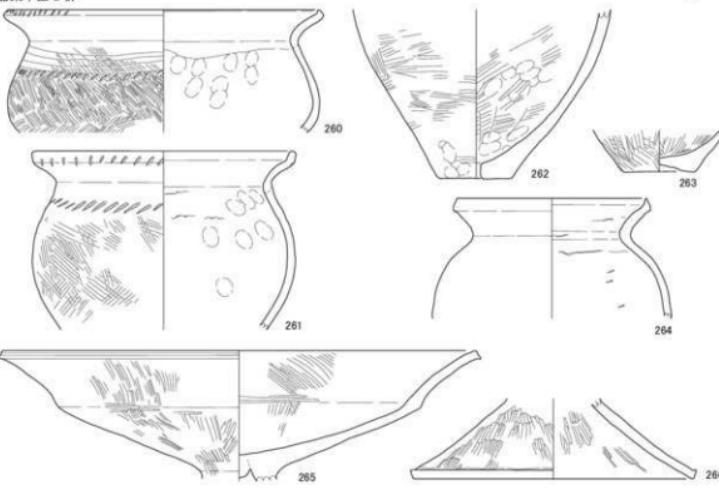


図89 SD0433遺物実測図（3）

土器集中区1群 4/4



土器集中区2群



0
10cm
(S=1/3)

図90 SD0433遺物実測図（4）

ち欠きがある。甕はA2b類（284）・B類（285・286・291・292）・E類（288・289）があり、B類とE類が豊富である。289は胴部下半が剥離し判断が難しいが、平底の可能性が高い。291は口縁端部に強いナデがあり、平坦面をもつ。下端には刻みがある。

時期 出土土器の時期はVI-1期であろう。甕283はIV期甕B類で混入資料である。

土器集中区4 土器集中区3の西側に隣接する。器台304から甕307まで約1.3mの範囲で直線的に土器（296～301・303～308）が密集し、土器集中区にみられる方向とはややその方向が違うので、その周囲を土器集中区4とした（②-1）。高壙300の破片が一部、土器集中区3にも認められるが、大部分は土器集中区4にある。垂直分布は2・3層に集中し、隣接する土器集中区3と同じである。まとまりをもって廃棄された可能性がある。

出土遺物 鉢はA2・A3類がみられる。296・298はA2類。いわゆる頭部から2周程度の直線文を施文する。299は鉢A3a類。胴部下半や屈曲をもって底部にいたる。300は高壙B4類。304は器台B1a類で口縁端部・脚裾端部とともに打ち欠きがあり、外面に煤が付着する。甕はA4類が頭著に認められた（305～307）。いわゆる口縁端部上端を尖り気味におさめ、頭部直下に直線文と刺突文をもつ。308は甕B3類で胴部は倒卵形である。口縁端部には不連続な強いナデの押圧が認められる。

土器集中区4・5の間 土器集中区4と土器集中区5との間は、約4m程度、土器の出土が散漫で集中的な出土は認められなかった（③-1）。出土レベルは土器集中区3と比べると0.1m弱低いレベルで出土した。これらの土器取り上げた後の直下からの土器片の出土はわずかであった。（③-2）。

出土遺物 鉢にはA3a類（310・312）・F類（311）がある。311はほぼ完存する資料で、丁寧なミガキがあり、胴部に打ち欠きがある。313は高壙C1類。SD0433出土例としては少数例である。器台はB1a類（316～318）がみられる。318の外面には連続する打ち欠きによると考えられる痕跡が認められる。316の脚裾部にも打ち欠きがある。甕にはA4類（323）、S字甕A類にあたるD1類（324）がある。S字甕A類はSD0433出土例としては少数例である。

土器集中区5 土器集中区4より西へ約4m強離れた地点で、土器が約1.3mの範囲で密集（342・330・344・346・334・341・352・350・328・326・325・349・340・339・332・331・335・333・345・347・329・327・343・336・337）していたので、この範囲を土器集中区5とした（④-1）。2・3層から出土した。これらの土器の取り上げ後、その直下からも土器（342・330・339・336・350・347・327・337・351・352・326）を確認した（④-2）が、いわゆる上部（④-1）で取り上げた土器の一部である。土器集中区1・3・4とは異なり、直線的に連なるのではなく円形に土器が密集する。出土状況からみて甕351・352・350が土器集中区5のなかでもっとも下位に位置していたと考えられる（④-2）。他の土器集中区と同様、まとまりをもって廃棄された可能性がある。

出土遺物 鉢はA2類（328）、A3a類（325・326・327）があり、A3a類の出土が目立つ。328は頭部がやや直立気味で、口縁部内面の強いナデが頭著である。325・326・327はやや上げ底気味で狭小な底部をもち、胴部最大径が胴部中央より上位に位置し腰高の形状をもつ。高壙はB3類（336・333・338）・B4類（348）・F類（331・332）・I2類（330）がみられる。336は精緻なミガキがあり、口縁端部は頭著な平坦面を形成する。331・332は形状が酷似する。ともに口縁部と坏底部屈曲部に沈線をもつ。脚部は円錐状に開き2穿孔をもつ。332は内面に煤痕がみられ、打ち欠きらしき痕跡も両者に認められる。330は口縁部がわずかに直立する。丁寧なミガキがあるが坏底部に強い被熱が認められる。脚裾

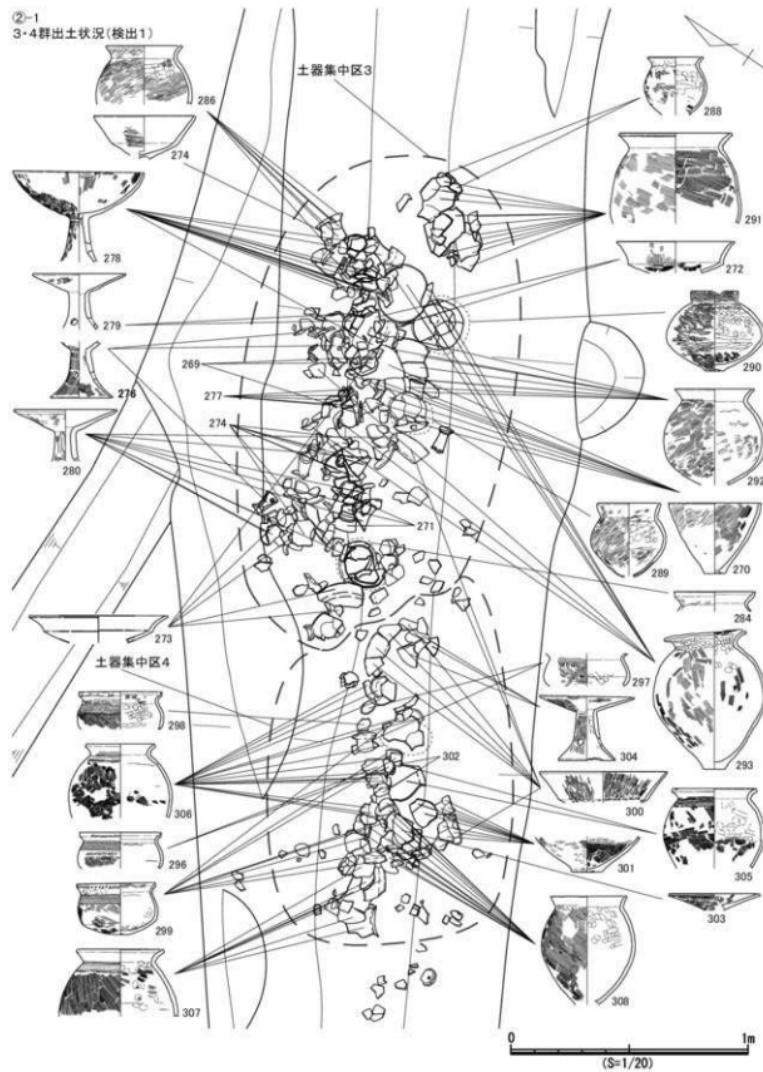


図91 SD0433遺構図（5）

②-2
3・4群出土状況(検出2)

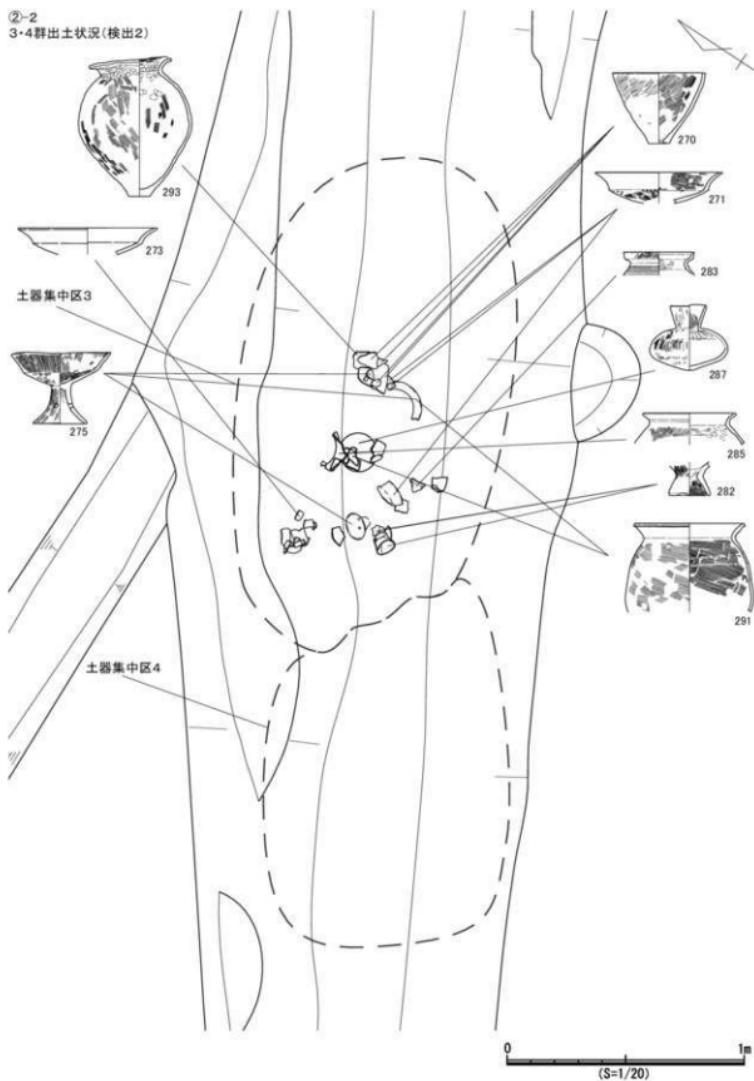


図92 SD0433遺構図 (6)

土器集中区3群 1/3

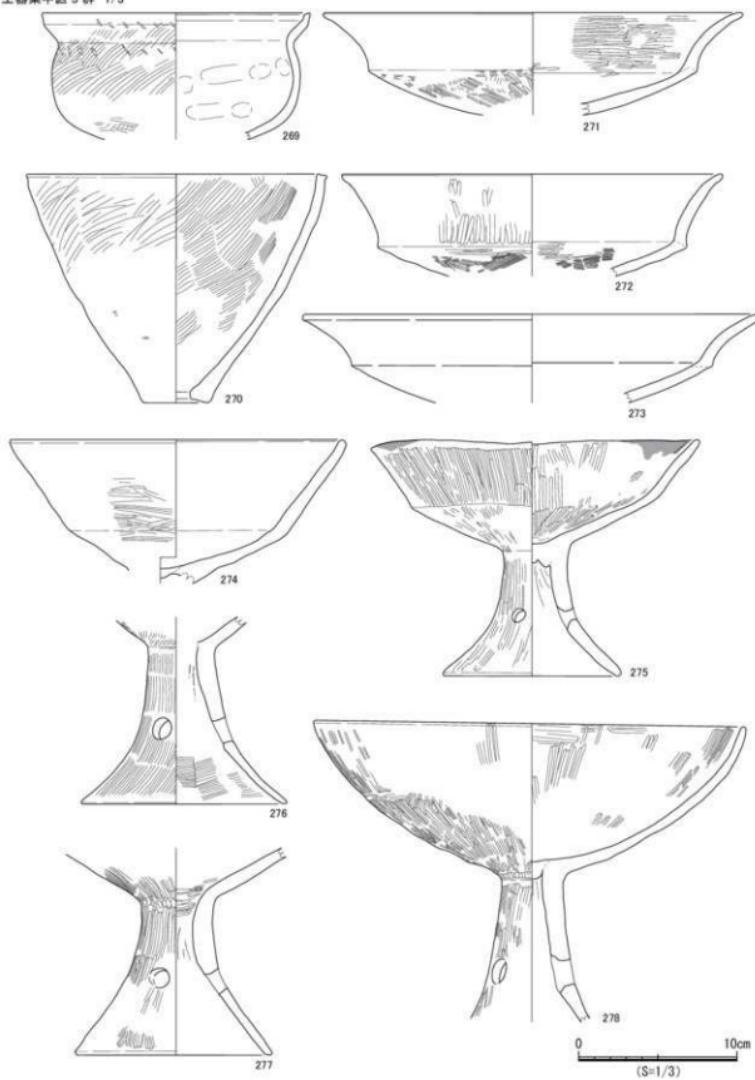


図93 SD0433遺物実測図（5）

土器集中区3群 2/3

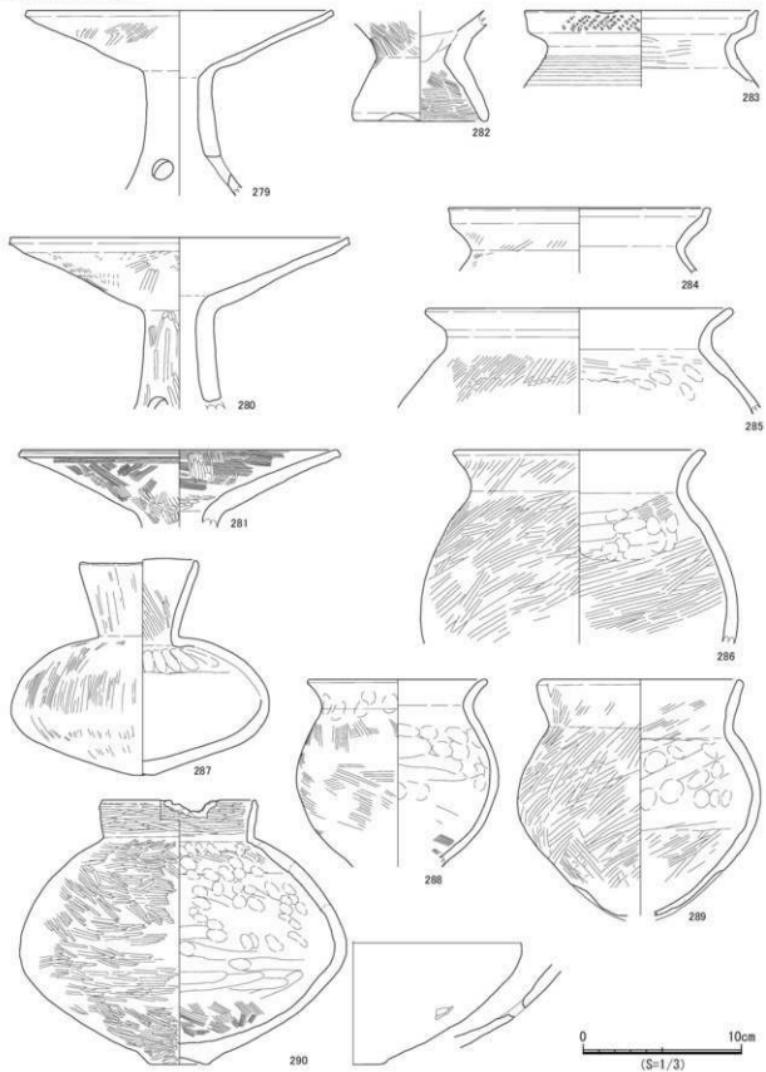
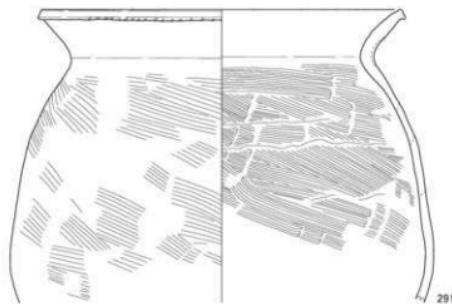
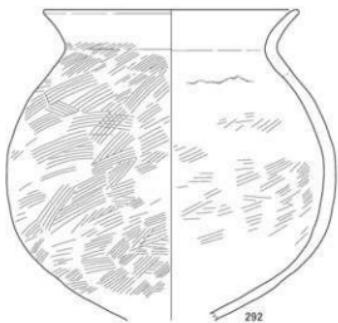


図94 SD0433遺物実測図（6）

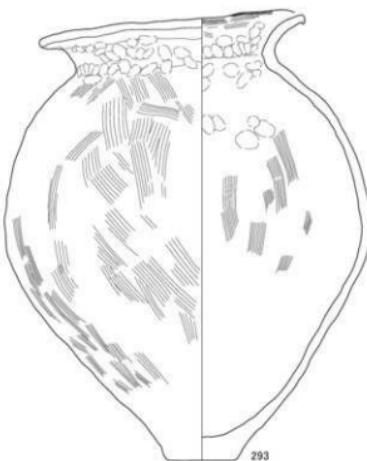
土器集中区3群 3/3



291

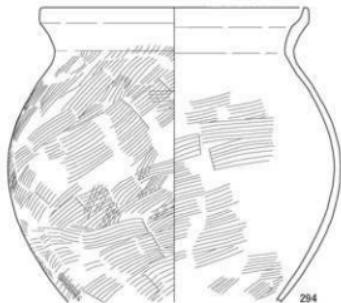


292

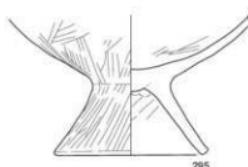


293

土器集中区2群・3群の間



294



295



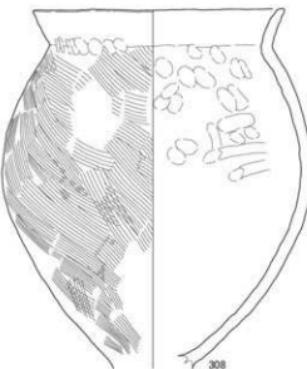
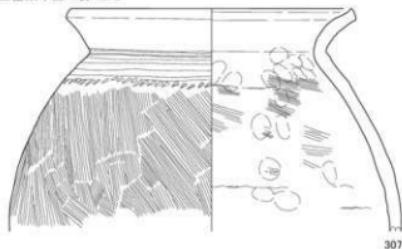
図95 SD0433遺物実測図（7）

土器集中区4群 1/2

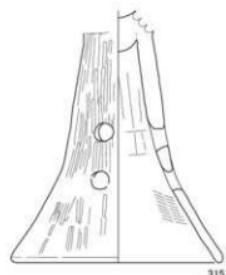
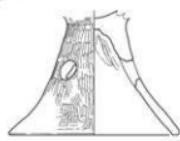
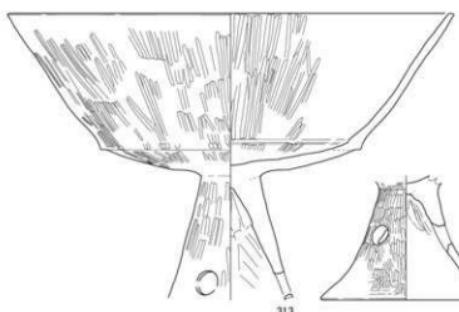
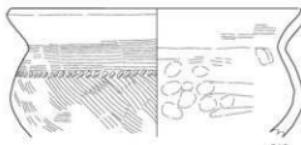
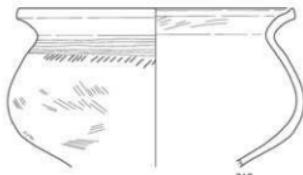
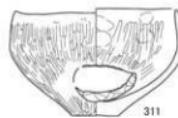
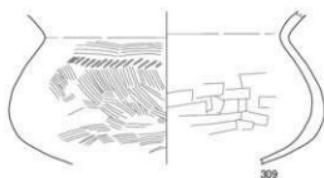


図96 SD0433遺物実測図（8）

土器集中区4群 2/2



土器集中区4群・5群の間 1/2



0 10cm
(S=1/3)

図97 SD0433遺物実測図（9）

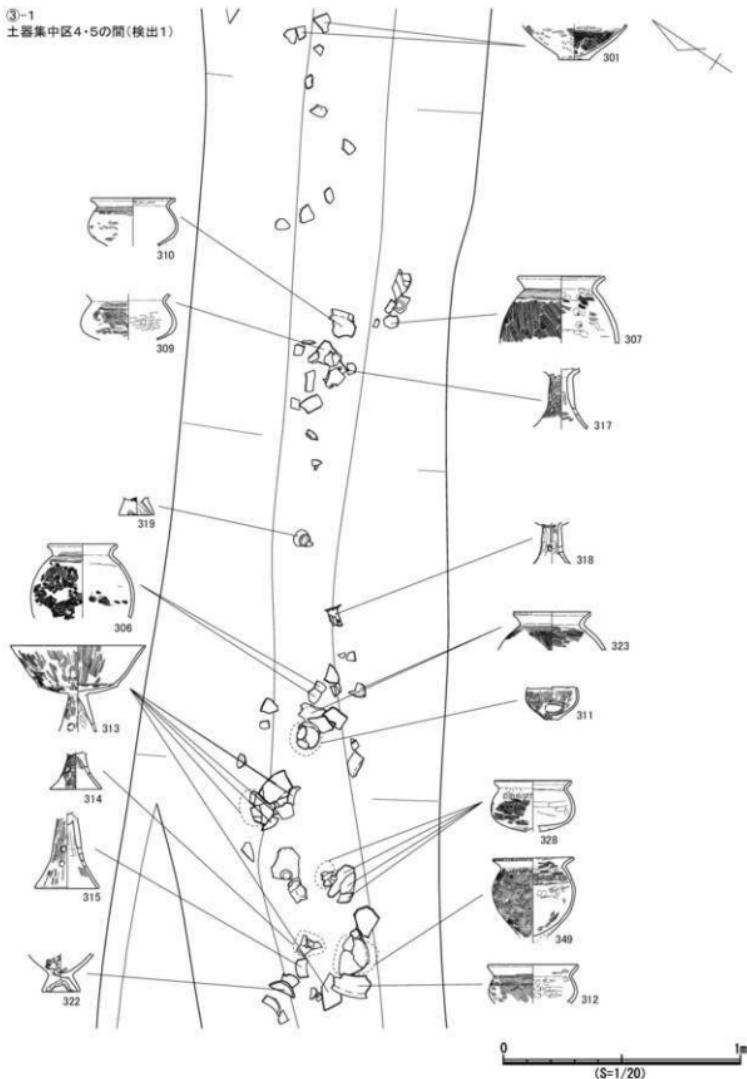


図98 SD0433遺構図（7）

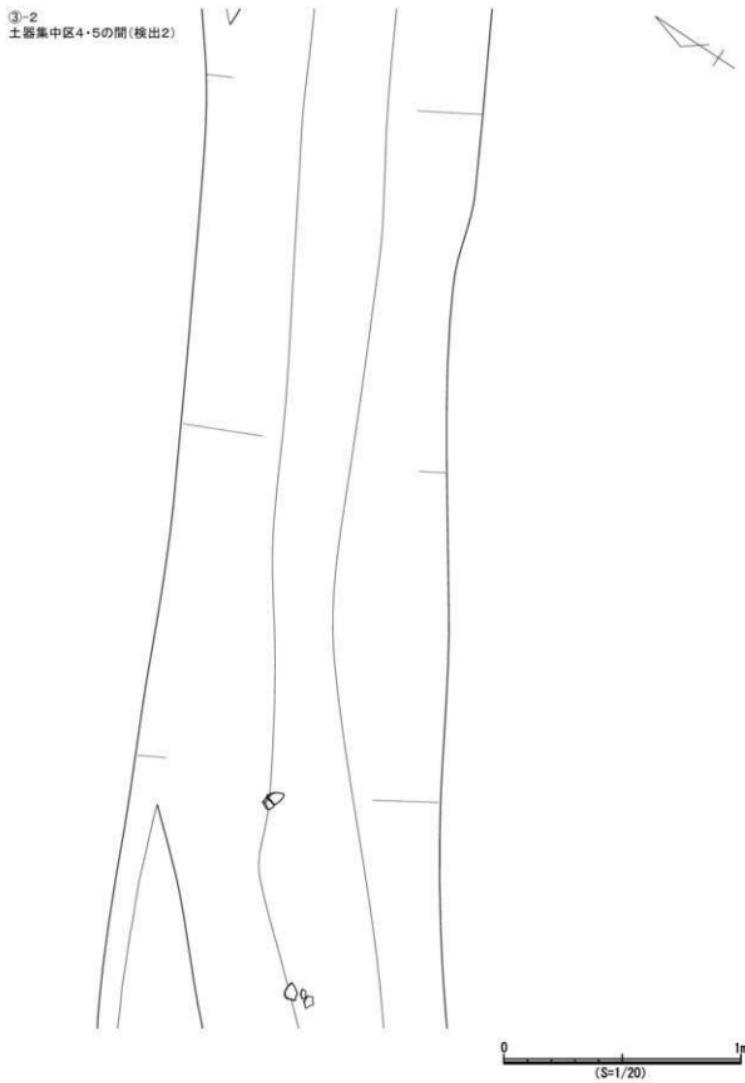


図99 SD0433遺構図 (8)

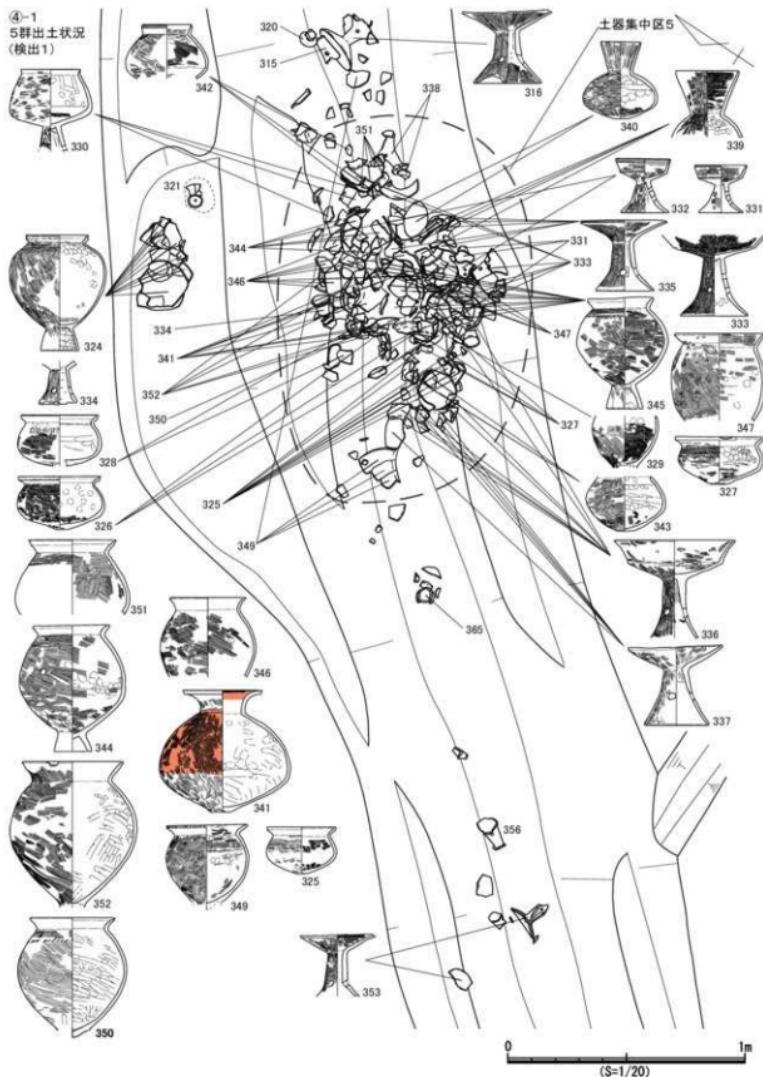


図100 SD0433遺構図（9）

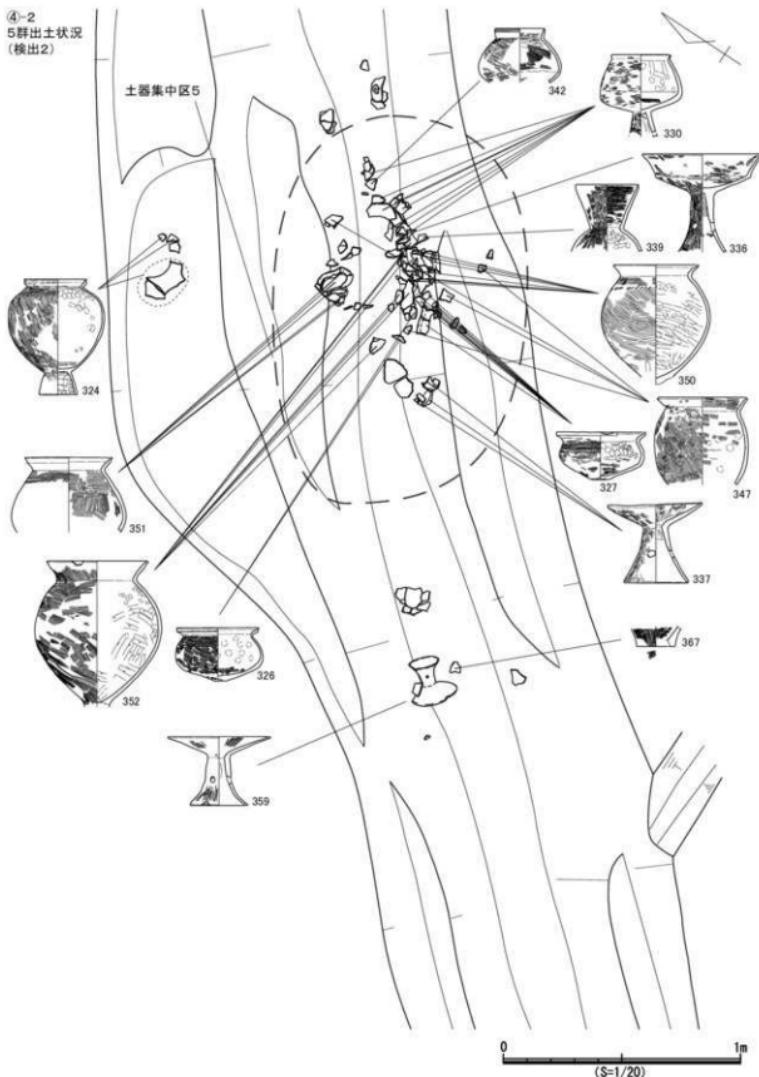


図101 SD0433遺構図(10)

部を欠損するが、人為的な破損の可能性があり、破断面には二次的な焼成痕を認めることができる。333・338は脚部のみが残るが、B3類の脚部であろう。器台はB1a類（335）と器台B2a類（337）がみられる。337は脚部付根から円錐状に開き、SD0433出土例では少数例である。334はB1a類脚部と考えられ、裾部には人為的な打ち欠きが認められ、煤痕も付着する。壺はA類（341）・H類（339・340）・F類（342・343）

土器集中区4群・5群の間 2/2

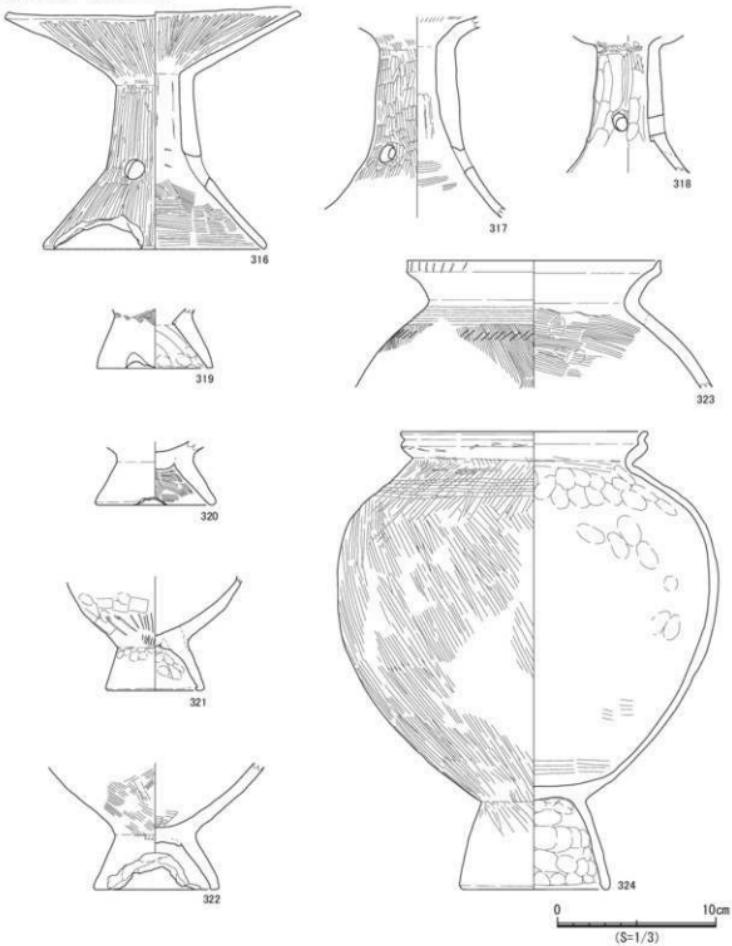


図102 SD0433遺物実測図（10）

土器集中区5群 1/4



図103 SD0433遺物実測図 (11)

土器集中区 5群 2/4

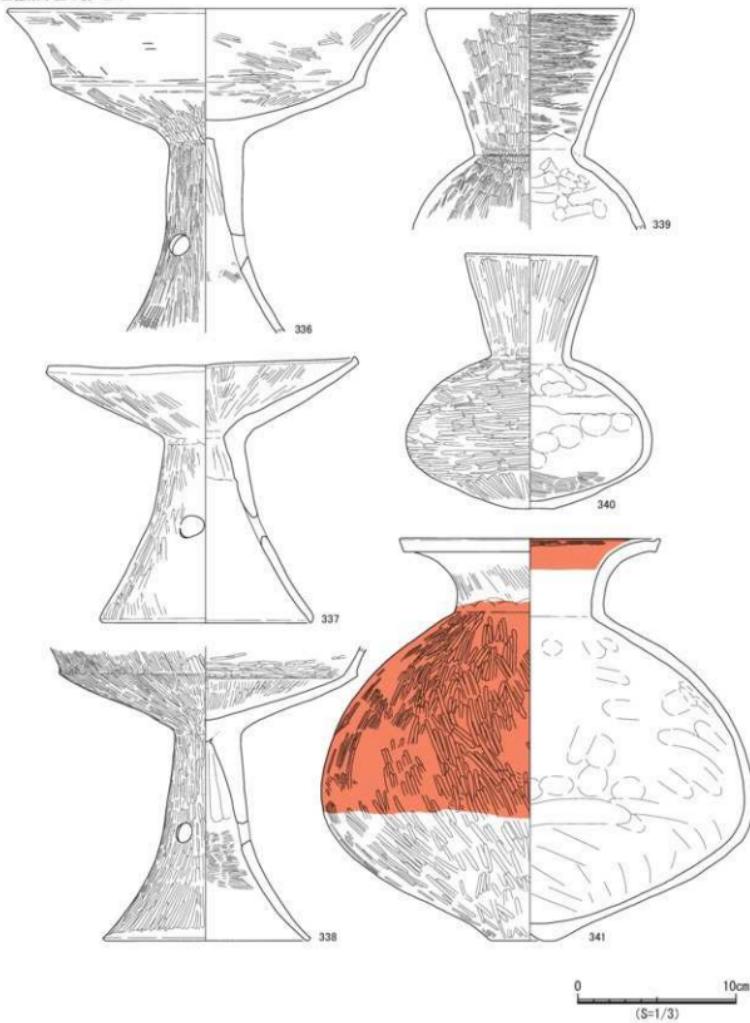


図104 SD0433遺物実測図 (12)

がある。339・340は直線的に開く口頭部をもつ。342は口縁部に沈線がある。341は器形の復元できた好例。口縁部は頭部から強く外反して、端部は顕著な平坦面をもつ。胴部はやや扁平で最大径は胴部中央よりやや下がった位置にある。内外面に赤彩が認められる。甕は器形が判明する良好な資料が多く出土し、A3類(351)・A4類(344・345・349・350)・B2類(346・347)・B3類(352)がある。344・345は大小差があるものの形状・文様構成とも類似し、胴部の張りの強い資料。344には胴部中央付近

土器集中区5群3/4

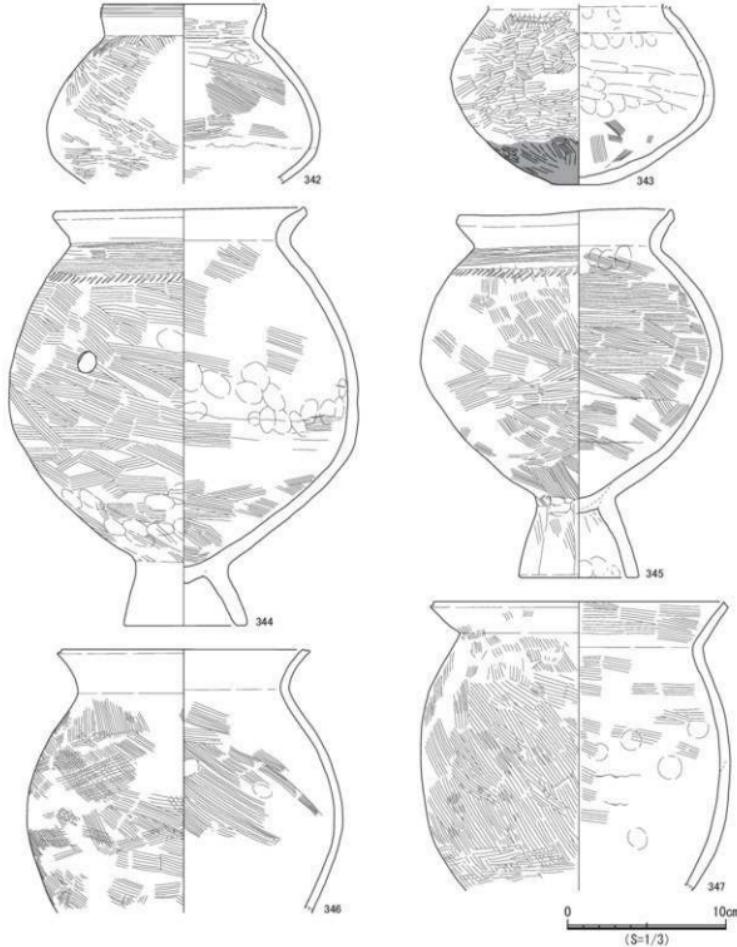


図105 SD0433遺物実測図 (13)

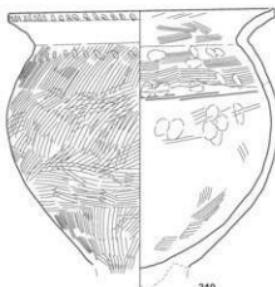
土器集中区5群 4/4



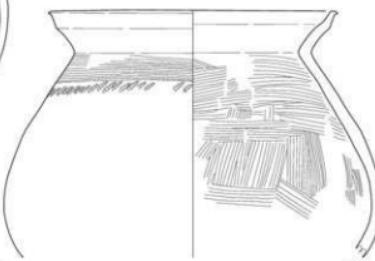
348



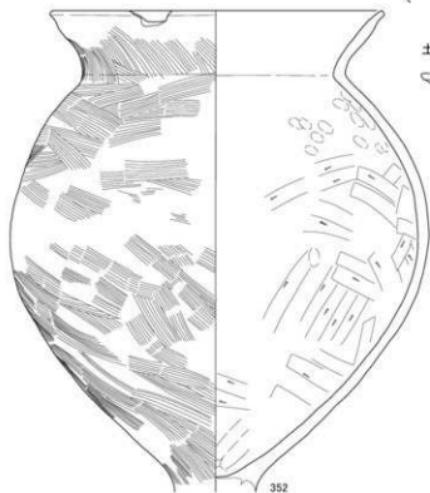
350



349

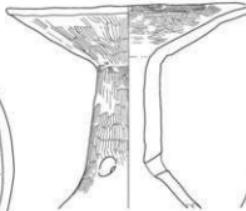


351



352

土器集中区5の南 1/3



353



354



355



356

0
(S=1/3)
10cm

図106 SD0433遺物実測図 (14)

に円形の穿孔があげられる。346・347・352は粗いハケ目が内外面に残る。352は長い口縁部をもつ例外的な資料で、打ち欠きがある。350は口縁部が弱く屈折して、胸部は倒卵形を呈す。

土器集中区5の南 土器集中区5より南側では、密集した出土状況は認められなかつたが、なかには器形を残したままで土器が出土した（361・368・369）（⑤-1）。甕369の出土レベルはそれまでの土器集中区5と差がないが、甕361・368は0.1m程度の出土レベルが低い。368はIV期の甕であり、摩耗が著しい。他の土器より、わずかながら出土レベルが0.1m程度低い。周囲の周溝墓より混入したと考えられる。367の甕底部も同様である。これらの土器取りあげた後、その直下から2個体分の土器（355・362）が出土した（⑤-2）。

出土遺物 353・356・359は器台B1a類、355は器台B2a類脚部。357・358・362は壺H類で、358胸部下半には煤痕が強く付着する。369は頸部の屈折が弱く、口縁部がゆるかに外反する。頸部の指頭圧痕が顕著である。363は高杯C3・4類の脚部で混入資料であろう。VI期後半～VII期前半の資料である。368はIV期甕A類。器形が復元できた良好な資料だが、SZ054北溝の掘削に伴い二次的に移動した資料の可能性がある。

時期 出土土器の時期は363・368を除いてVI-1期と考えられる。

その他 出土状況図に示されている資料以外にある程度、器形が復元できた資料を中心図示した。

出土状況 大半がVI-1期に相当する資料が出土した。IV期の資料が一部にみられ（371～374）、SZ054北溝から混入した可能性がある。他の土器より0.1m程度とわずかに出土レベルが低い。また、VII期の資料もみられる（379）。多くの土器の出土層位は先に述べた土器集中区と変わりがない。

出土遺物 371・372はIV期高杯、373はIV期甕A類底部。374はIV期壺H類で古井式の口頭部。頸部に

土器集中区5の南 2/3

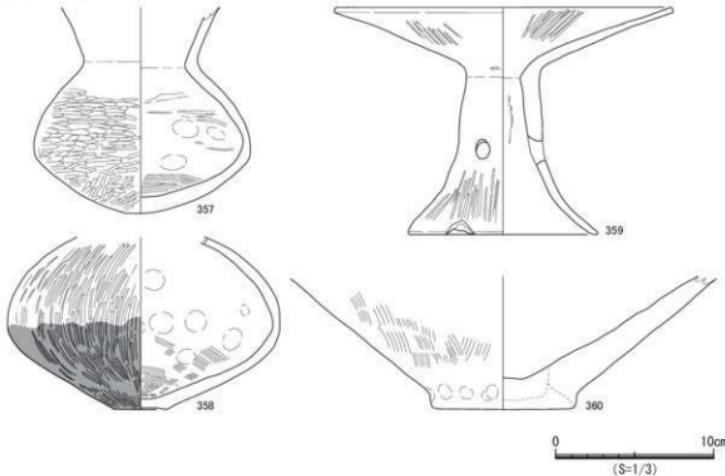


図107 SD0433遺物実測図（15）

⑤-1 土器集中区5の南(検出1)

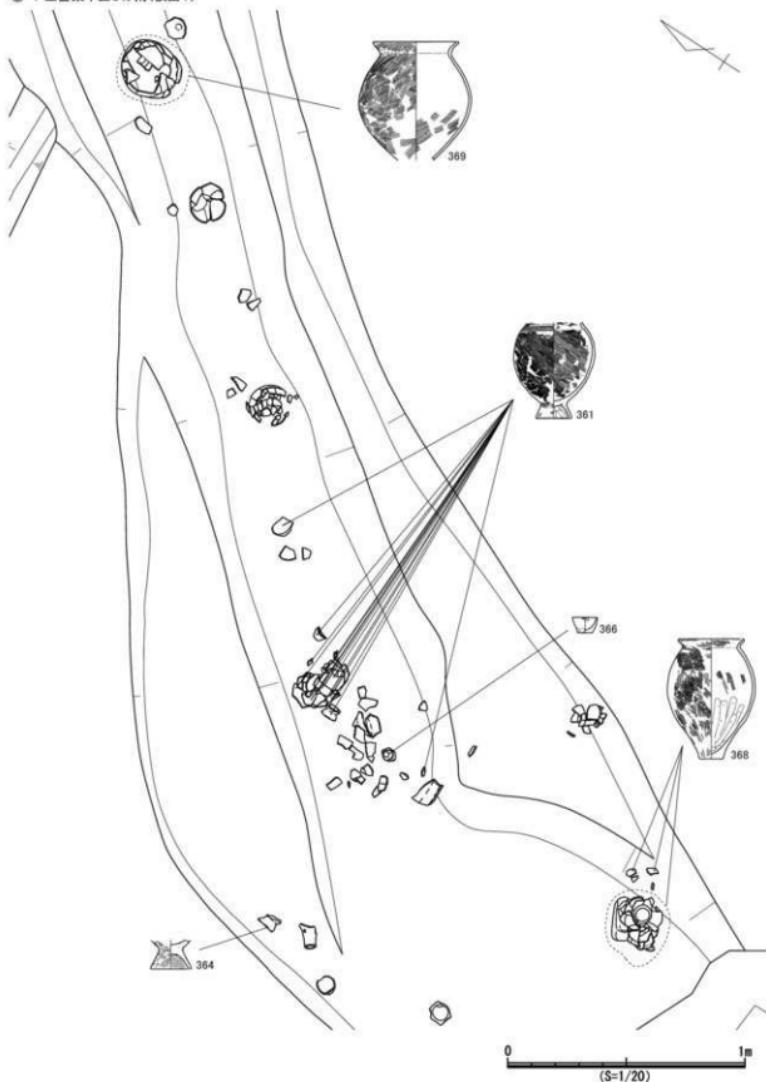


図108 SD0433遺構図 (11)

⑤-2 土器集中区5の南(検出2)

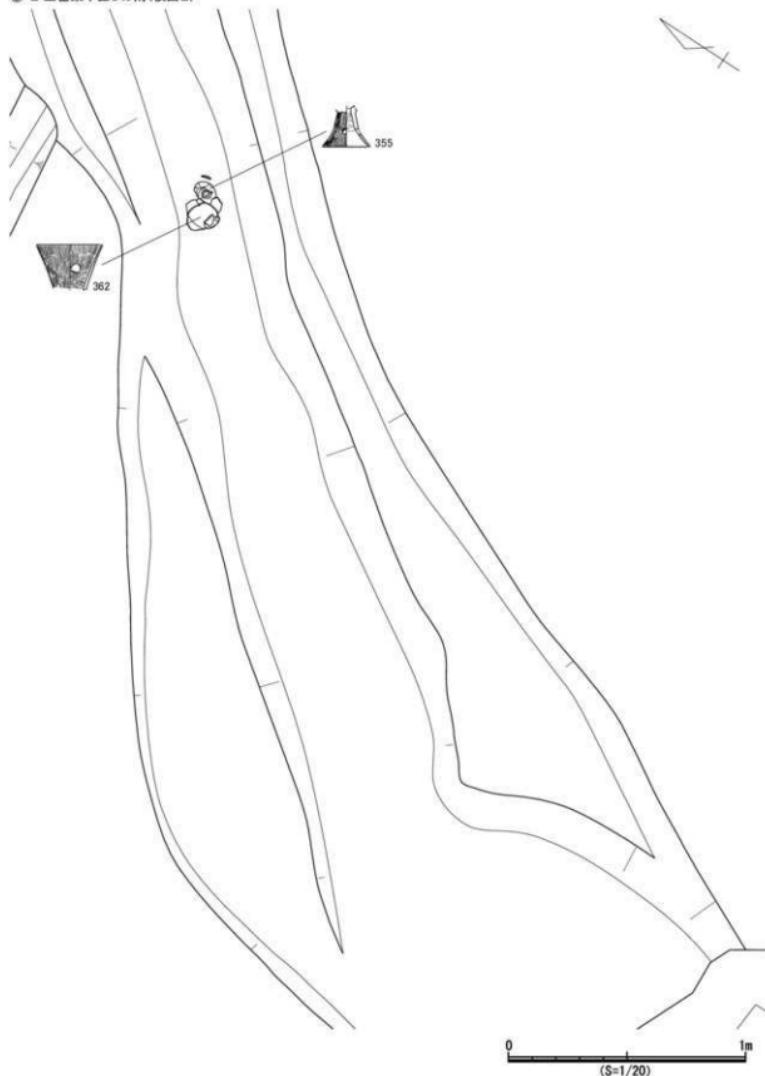


図109 SD0433遺構図 (12)

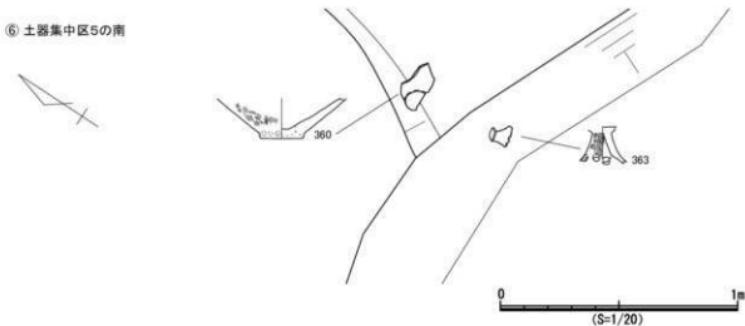


図110 SD0433遺構図（13）

直線文、胸部に斜格子文がみられる。375は坪部をほぼ完存する高坪B3b類。376は円形浮文上の刺文をもつ、器台A類。379はVII期壺A5類の口縁部片。羽状の刺突文をもつ。382はV～VII期と考えられるが、本遺跡出土例では類例のない形状を示す資料。弱く立ち上がる口縁部をもつ。中小型の甕にしてはやや脚部が長い。381は甕B4類で、口縁端部に刺突をもつ。376は器台A1類で口縁端部に円形浮文がみられる。370は砂岩製の叩石類で全面に煤が付着する。

土器集中区1～5のそれぞれの資料中には高坪B2・B3類、器台B1a類、鉢A2・A3a類、甕A5類・D1類、C類が顕著に存在し、互いに時間差のない資料であることを示すと考えられる。一部に高坪B3類・C1類、器台B2a類が認められるが主体的ではない。これらの内容からV-3期～VI-1期の時期と考えられる。先に述べたB3類・C1類、器台B2a類からVI-1期が同時性の高い資料であろう。一方で、從来知られていた資料より鉢A2類を多く含み、検討の余地がある。

時期 出土土器からVI-1期と考えられる。

SD0434（遺構：図82、遺物：図113）

検出状況 西部ほぼ中央、SD0434の西端にあるサブトレンチから約5m程度南西方向に伸びる溝。V層上面で検出した。SD0433と一連の溝となる可能性が高いが、サブトレンチによって寸断したので確定できない。

形状 幅0.7m～0.9m程度で壁面は緩やかである。

埋土 2層に分層した。自然堆積である。

遺物出土状況 VI～VII期の土器小片がわずかに上層から出土した。特徴的なものは認められなかった。図示した385はII期の資料であろう。

出土遺物 385は条痕地に連弧文のある資料。

時期 出土遺物から判断するのは困難である。SD0433関連からVI期以降か。

SD0435（遺構：図82）

検出状況 西部のほぼ中央、SD0434の南側に平行する溝。V層上面で検出した。SD0433から分岐した

土器集中区5の南 3/3

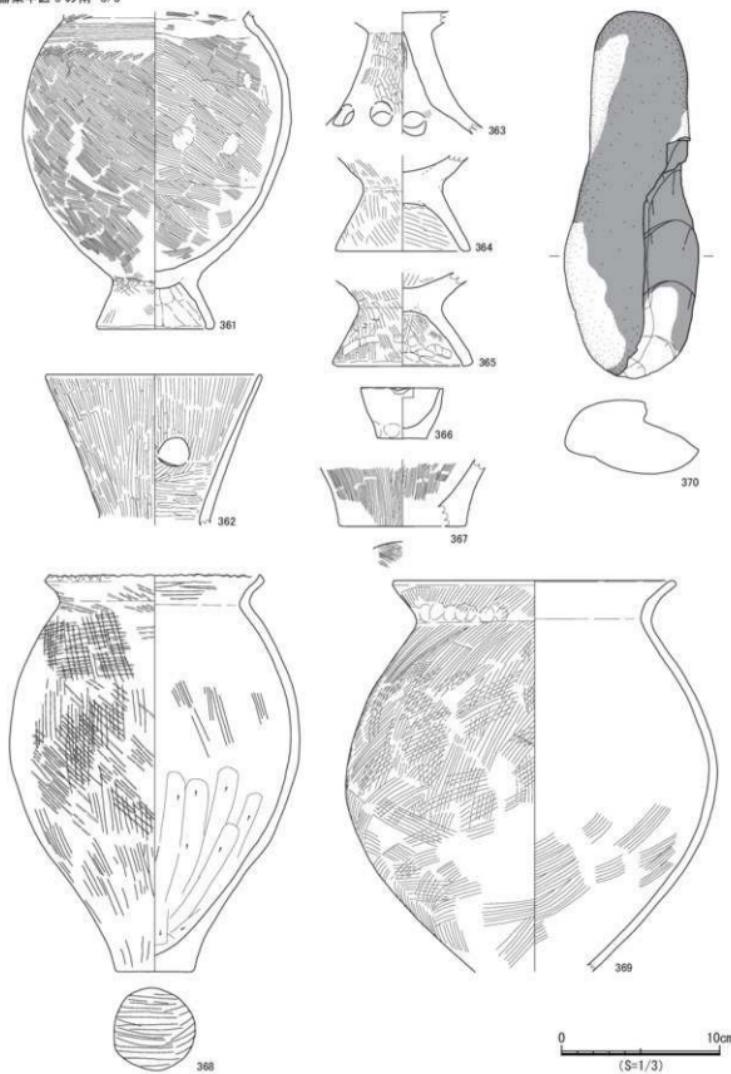


図111 SD0433遺物実測図 (16)

その他 1/2

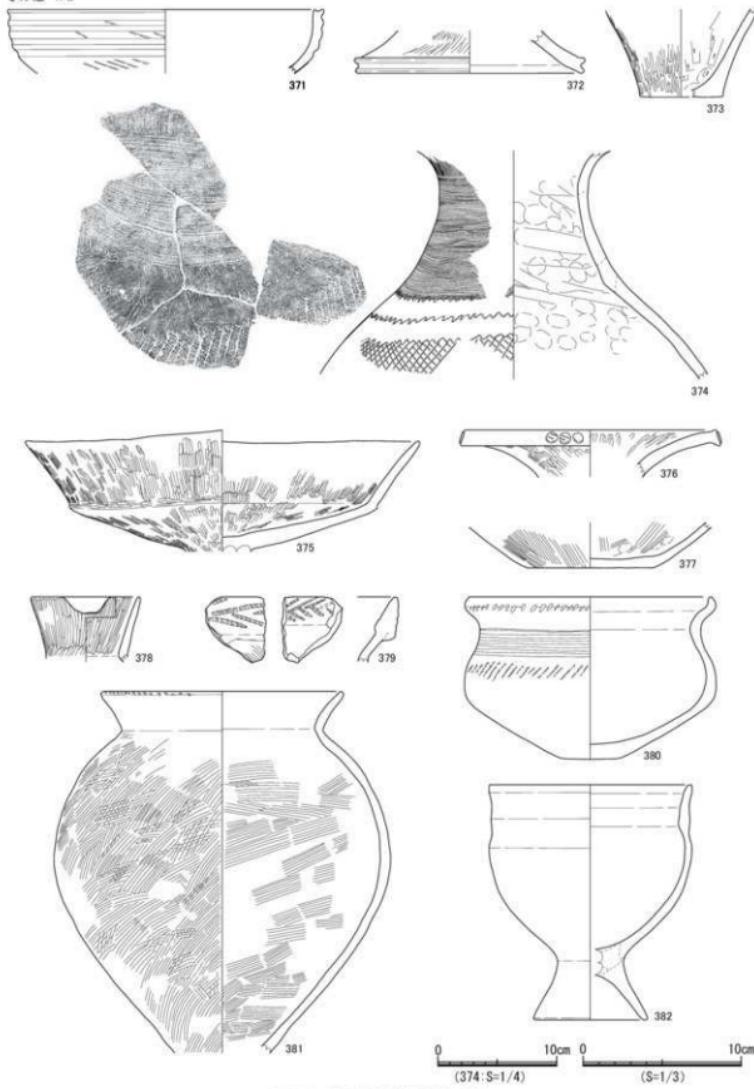


図112 SD0433遺物実測図 (17)

その他 2/2

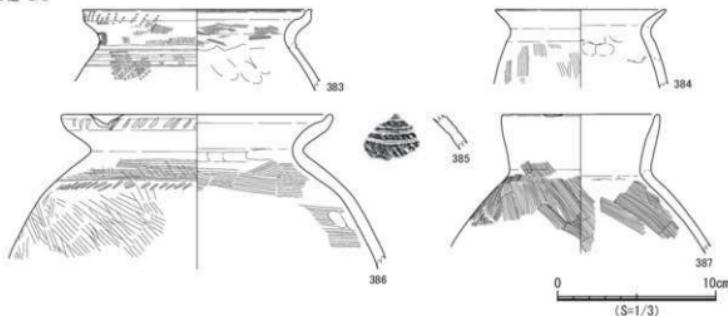


図113 SD0433・SD0434・SD0436遺物実測図（18）

とも考えられるが、サブトレンチによって寸断したので明確にできなかった。

形状 幅は0.8m～0.9m程度で比較的底面が平坦である。

埋土 2層に分層した。自然堆積である。

遺物出土状況 土器小片が上層から50点あまり出土したが、特徴的な資料は認められなかった。

時期 出土遺物から判断するのは困難である。SD0433関連からVI期以降か。

SD0436（遺構：図82、遺物：図113）

検出状況 西部ほぼ中央でSD0435の延長にある溝。V層上面で検出した。SD0435とは約11m程度離れているが軸線が揃うので、一連の溝の可能性が高い。

形状 幅は0.5m程度で壁面は緩やかである。

埋土 A断面では2層に分層した。B断面は単層であった。

遺物出土状況 50点あまり土器小片が出土した。特徴的な状況・遺物は認められなかった。

出土遺物 387は壺C類で、口縁端部に打ち欠きがあり、外面には炭化物が付着する。VI～VII期の資料であろう。

時期 出土遺物から判断するのは困難である。SD0433関連からVI期以降か。

SD0427（遺構：図114、遺物：図115）

検出状況 西部東端ほぼ中央から北西方向に伸びる溝をV層上面で検出した。SZ053の北西隅と重複する。その後関係はSD0427<SZ053である。また、東端ではSD0433との重複関係があり、SD0427の方が新しい。確認範囲での長さはおよそ30mで、東端は調査区域外にあり不明である。SB105の南側をめぐるため、SB105の区画溝の可能性がある。

形状 幅は1m～2.5m程度の幅があり、まちまちである。平面形は蛇行し、C断面付近が一段深くなり、土坑状となる。深さはA断面で0.18m、それに比べてC断面が0.6mと深い。C断面の断面形は逆台形である。

埋土 A断面は4層、B断面は3層に分層した。C断面は7層に分層した。壁面から徐々に堆積が進

行したと考えられる。

遺物出土状況 出土土器は縄文時代晩期後半～VII期までの資料が認められる。いずれも上層から出土した。特徴的な状況は認められなかつた。

出土遺物 11点を図示した。縄文時代晩期後半の資料(395・396・397)、II期～IV期の資料(388・392)、V～VII期の資料(389～391・393)が出土した。395は砲弾形の深鉢でI期の可能性もある。388はSD0434出土の385と同一個体の可能性ある。条痕地に連弧文がある。392はIV期の壺。389は壺B2c類。口縁部は強いナデによって形成し、胴部以下には粗いハケ目が残る。口縁部内面には円形刺突文がある。SK01705出土破片と接合関係がある。393は胴部上半に刺突文と直線文がみられ、V期の壺D類であろう。390はVI～VII期の壺H3類。398は斜位の条痕地に半截竹管による短沈線を施す。本遺跡出土例として初見の資料である。三重県長者屋敷遺跡などで類例があり、I期の資料の可能性がある。394は時期の判断が迷う口縁部片の資料。おそらく器形は深鉢形と考えられ、巻貝による沈線が施文される。端部及び内面には巻貝による刺突文がみられる。内面の刺突文は連弧状となる。時期は縄文時代晩期前半と弥生時代中期が考えられる。巻貝の使用は縄文時代晩期前半によく用いられ、愛

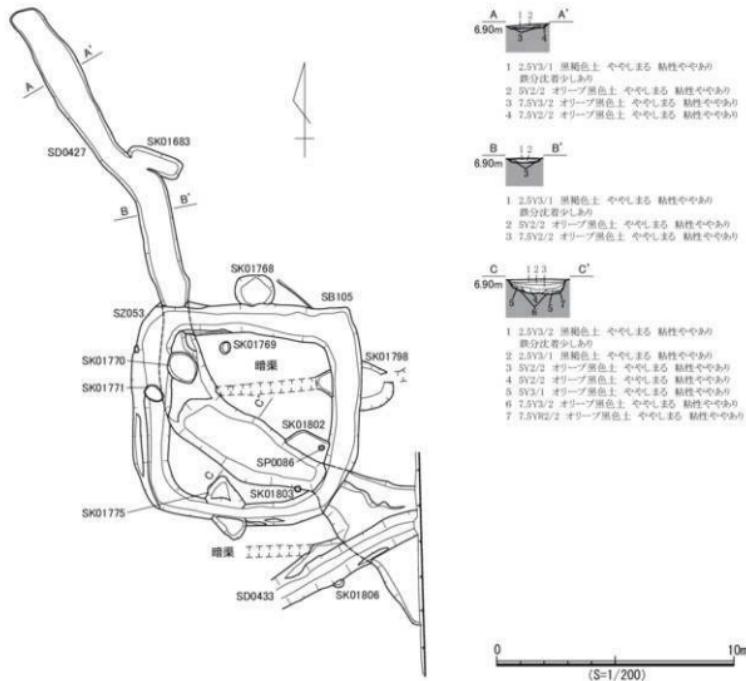


図114 SD0427遺構図

知県牛牧遺跡の資料にも類似する¹⁾、その一方で沈線文系土器の破片の可能性もある。394について検討の余地が残る資料のため、今後の資料の増加を待ちたい。

時期 出土土器から判断することは困難である。SD0433との重複関係から、VI期後半以降と考えられる。先に述べたSB103・SB104がVI期後半のため、同時期の可能性が高い。

SD0431（遺構：図116、遺物：図117）

検出状況 西部北東部、SZ051・SZ052の南東隅と北西隅の間に位置する。SZ051・SZ052掘削後に検出したが、出土土器の検討より、その重複関係はSD0431>SZ051・SZ052。また、SB103の中央部とも重複関係があり、その先後関係はSB103>SD0431である。西端は調査区域外にあるため、全形は不明である。北東部住居跡密集域の区画する溝の可能性がある。

形状 深さは0.3m程度が認められ、SZ052の底面より高い。平面形はやや弧状である。

埋土 5層に分層した。水平堆積が認められる。

遺物出土状況 出土土器は主にVI～VII期が認められ、わずかにI期の資料を含んでいた。SD0427と類似性がある。中層から上層にかけて土器片が出土し、特徴的な状況は認められなかった。

出土遺物 402は直線文の下に山形文と刺突文のある壺A類。399は口縁部内外面にハケ目が残り、端部の強いナデがある壺B3類。400はS字壺A類である。403はI期の遠賀川系土器の壺胴部片である。

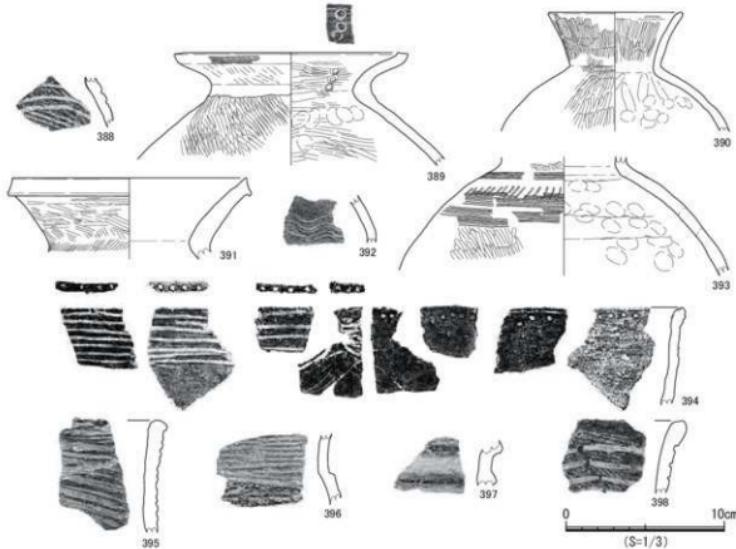


図115 SD0427遺物実測図

1) 石黒氏のご教示

時期 SB103との先後関係、出土遺物よりVI期前半以降と考えられる。

SD0420（遺構：図118）

検出状況 西部北東部住居跡密集域を細長く伸びる溝。V層層上面で検出した。SB100・SB103の東側に位置し、SB101の中央付近と重複する。また、南端ではSB104と重複する。先後関係はSD0420>SB101～SB104である。SB099・SB100に関連するSDの可能性がある。

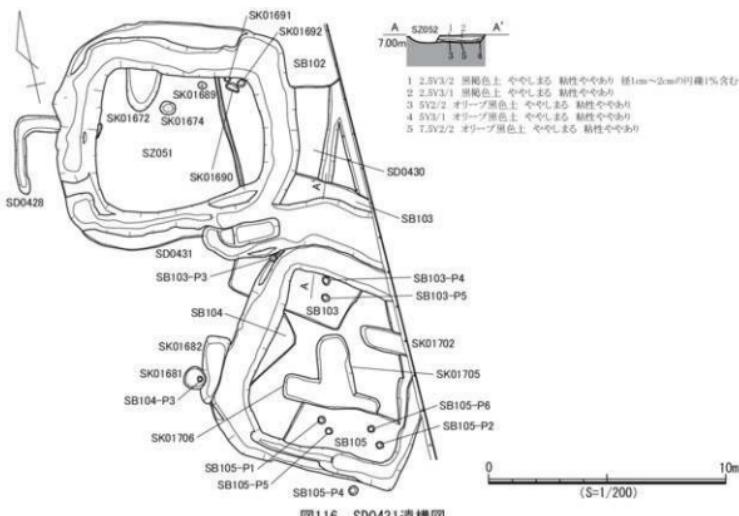


図116 SD0431遺構

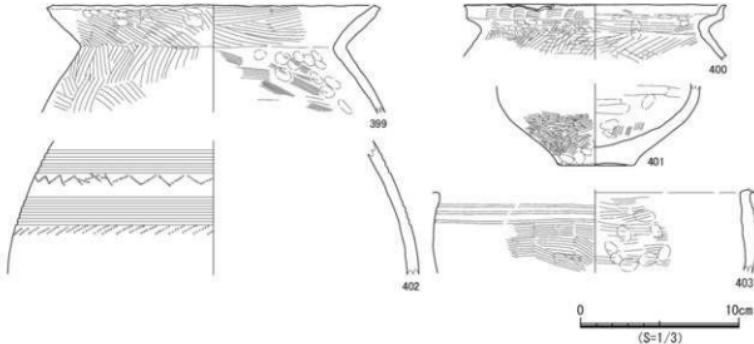


図117 SD0431遺物実測図

形状 幅は0.2m程度、深さは0.1mにも満たない。底面は緩やかで、20m弱の長さが認められる。

埋土 単層である。

遺物出土状況 VI～VII期の土器小片が出土した。小片ばかりで特徴的な状況は認められなかった。

時期 VI期後半としたSB101～SB104より新しいことから、VII期以降と考えられる。SB099・SB100の西壁と平行する位置にあることから、VII期としたSB099・SB100との関係があるかもしれない。

SD0430（遺構：図118、遺物：図119）

検出状況 西部北東部の住居跡密集域において南北に伸びる溝。V層上面で検出した。SD0420と一部平行する。長さ15mを確認し、SB102・SB103・SB105と重複する。その先後関係はSD0430>SB102・SB103・SB105である。

形状 幅は0.4～0.6m程度、深さは0.1～0.2m程度である。断面形はU字形で、D断面の壁面は急傾斜である。

埋土 D断面では5層に分層した。自然堆積である。

遺物出土状況 600点あまりVI期～VII期の土器小片が上層から出土した。404はX期の宇田型甕。X期に相当する資料はこの1点のみであった。

出土遺物 405はVII期の高壺D4類。振幅の大きい山形文がある。406はVI期～VII期のS字甕A類で甕D1a類。404はX期の宇田型甕でSZ052出土破片と接合関係がある。

時期 404は上層出土で1点のみ出土のため、埋没段階を示す資料と考えられる。その他の土器片がVI～VII期、重複する住居跡SB102・SB103・SB105がVI期後半であることからVII期以降と考えられる。

SD0423（遺構：図120、遺物：図121）

検出状況 西部低地部ほぼ中央でコの字の平面形を呈すSDをV層上面で検出した。何らかの施設と関連するSDの可能性があるが、コの字の内部から何らかの施設を示す遺構は確認できなかった。周囲の遺構の重複が著しく、SD0432>SD0423>SD0417・SD0426・SD0424・SK01715・SA003-P3+SA003-P4の先後関係がある。

形状 幅は0.6～0.7mで、深さは0.5m程度である。断面形は残りの良いA断面でみると逆台形状である。東西の両辺は比較的直線的である。南北には19m程度であるが、東側やや膨らむ箇所がある。

埋土 埋土が5層程度あり、壁面から徐々に埋没し、ある一定の時間が経過したことがうかがえる。

遺物出土状況 埋土から上層から比較的多くの土器片が出土した。出土したのはIV期～VII期の土器片で、大半は摩耗が著しく混入した資料と考えられるが、そのうち、V期末～VI期相当の土器片は比較的大型の破片が多く、他の土器片に比べて摩耗がみられなかった。

出土遺物 407は高壺B3a類。口縁部の外反が強いが、端部の平坦面が顕著である。408は高壺C類の脚部であろう。壺はH類の409・412、F類の410がある。412には口縁部に打ち欠きがあり、410の胴部下半には強い被熱痕が認められる。411は鉢A3a類。頸部直下に刺突文と直線文がある。甕はA類がみられ（413・414）、やや胴部下半が膨らむ。2点とも刺突文・直線文をもつ。以上の資料はV期胴部下半には強い被熱痕が認められる。411は鉢A3a類。頸部直下に刺突文と直線文がある。甕はA類がみられ（413・414）、やや胴部下半が膨らむ。2点とも刺突文・直線文をもつ。以上の資料はV期末

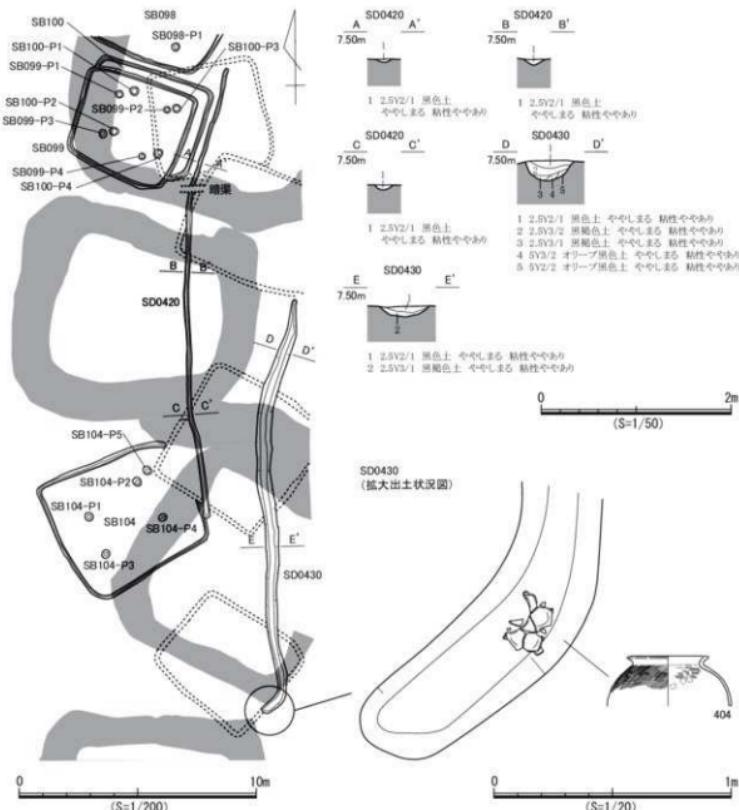


図118 SD0420・SD0430遺構図

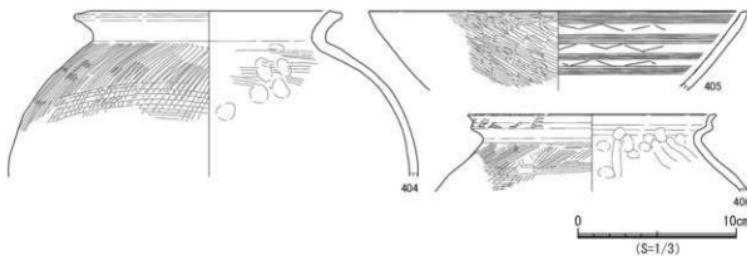


図119 SD0430遺物実測図

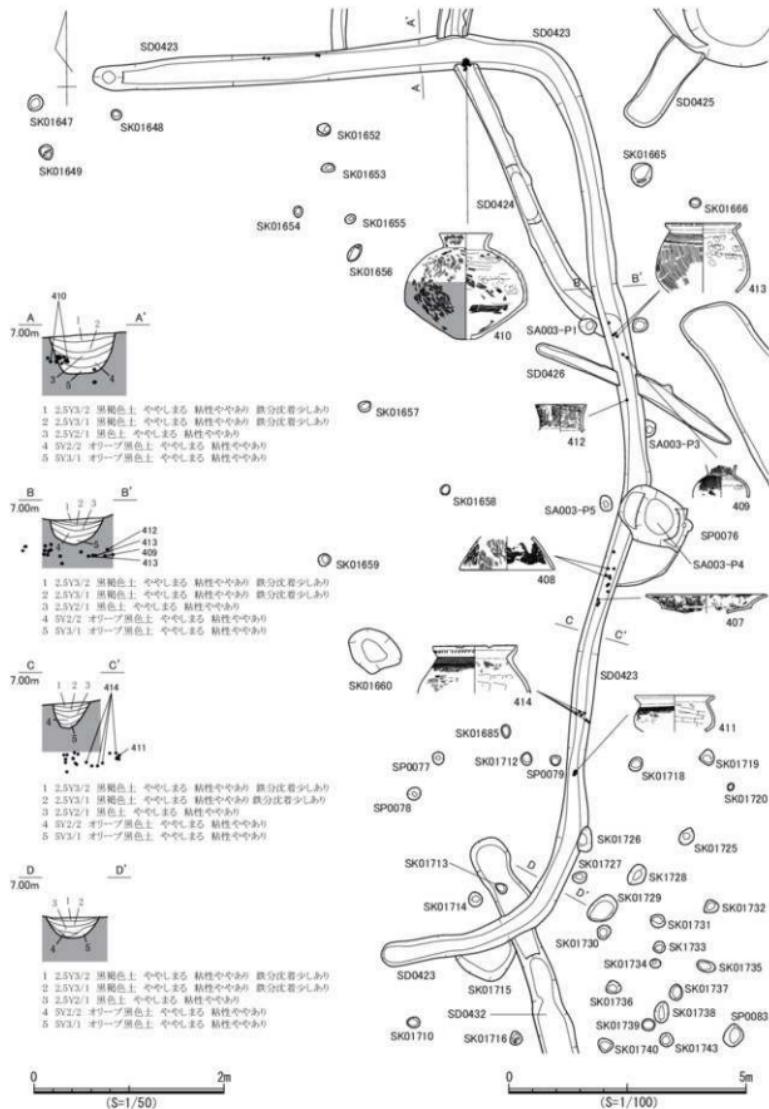


図120 SD0423遺構図

～VI期前半の資料で407を除くとVI期前半のまとまりある資料である。415・416はIV期壺A類で混入品であろう。

時期 VI期前半のまとまりある資料から、VI期前半と考えられる。

SD0440（遺構：図122、遺物：図123）

検出状況 西部低地部の南西部に位置する。V層上面で検出し、北端から南側へ直線的に伸びるが、屈曲して西端は調査区域外に続く。SD0440・SK01784との位置関係から周溝墓の可能性もあるが、溝の断面形や土器の出土状況から周溝墓ではないと判断した。内部の何らかの施設をめぐるSDの可能性

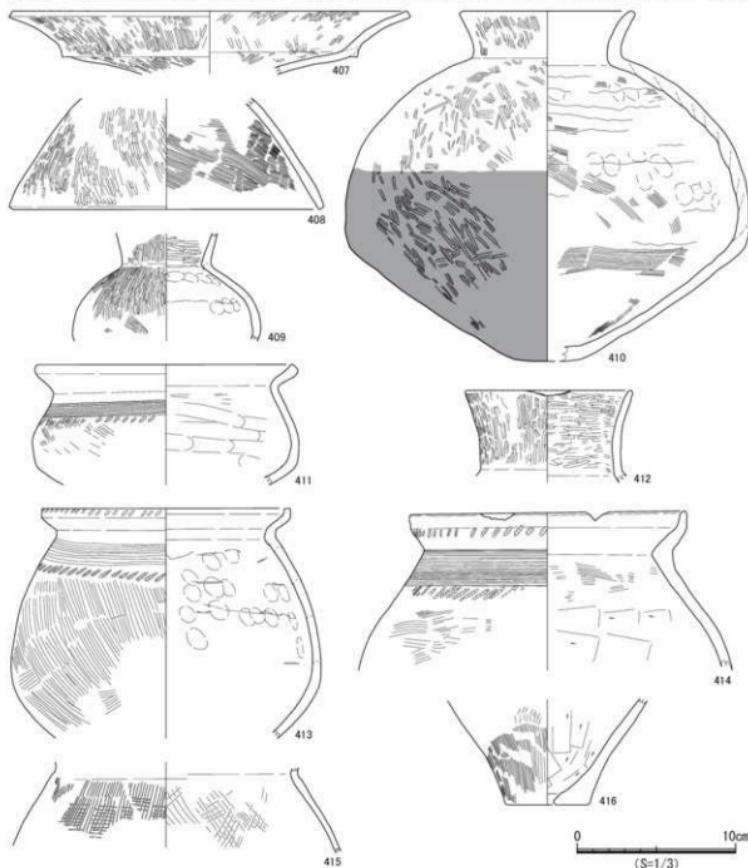


図121 SD0423遺物実測図

もあるが、その根柢となる痕跡は確認できなかった。

形状 幅は0.6m程度、断面形は皿形で深さ0.08mと浅い。

埋土 単層である。

遺物出土状況 50点あまりの土器片が出土した。その時期は縄文・V～VII期であるが、特徴的な状況は認められなかつた。

出土遺物 417は縄文時代晩期後半の資料。突带上に横長の押引きが認められる。

時期 出土遺物から時期を判断するのは難しいが、低地部の埋没時期がVII期であり、出土遺物の多くがV～VII期であるので、時期はVII期以降であろう。

SD0419（遺構：図124、遺物：図125）

検出状況 西部北側、SK002の西側に位置する溝。SK01591を縱断し、SK01663につながる。V層上面で検出した。周辺遺構との先後関係はSK01592・SK01663>SD0419>SK01591である。SK01663から南へ伸びるSD0425と一連の溝の可能性が高い。

形状 幅は0.6m程度で深さは0.1mである。南北に直線的に伸びるが途中でSD0425へ連続するよう西侧へ方向を変える。

埋土 3層に分層した。自然堆積である。

遺物出土状況 上層からわずかに土器片が出土した。特徴的な状況はみられなかつた。

出土遺物 419はVII期高壙D類の壙底部。内面の段差が認められる。418はVI～VII期器台B類の口縁部

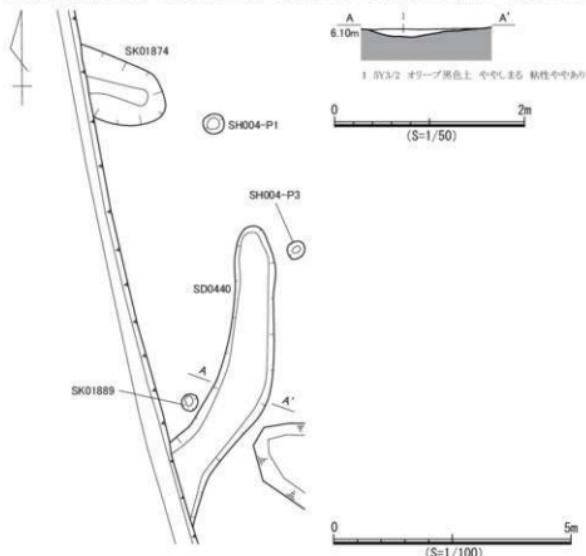


図122 SD0440遺構図

で内面に煤痕がみられる。421は内溝する口縁部をもつVI～VII期壺H類。内面には赤色顔料が付着し、外面には煤痕がみられる。

時期 出土土器からVI～VII期と考えられる。

SD0425（遺構：図124、遺物：図125）

検出状況 西部北側、SZ051の西側に位置する溝。V層上面で検出した。SK01663から南に伸びる溝で、SD0419と一連の溝の可能性がある。SK01663との先後関係はSK01663>SD0425である。

形状 幅は0.6m程度、深さは0.15m程度が認められる。

埋土 4層に分層した。自然堆積である。

遺物出土状況 上層から10点あまりのVI～VII期の土器片が出土した。

出土遺物 S字甕B類2点を図示した（434・437）。

時期 出土遺物からVI～VII期と考えられる。

SD0424（遺構：図124、遺物：図125）

検出状況 西部北側、SZ051の西側に位置し、楕円形に伸びる溝。V層上面で検出した。SD0423・SK01663と重複し、SD0423・SK01663>SD0424の先後関係がある。南端はSD0423に削平されて不明である。楕円形にめぐることから、内部に何らかの施設があるのか検討したが、対応する遺構は認められなかった。

形状 幅は広いところで0.8m、狭いところで0.4mと一定してないが、深さは0.2m程度で安定している。底面は平坦で断面形は逆台形である。

埋土 3層から4層の堆積が認められる。西側より徐々に埋没したと考えられる。

遺物出土状況 比較的大きなV～VI期の土器片が上層から出土した。

出土遺物 420・423は高环B類。420は精緻なミガキがあり、口縁端部はやや鈍化するものの平坦面が認められる。423は2穿孔のある資料。422は高环I類の脚部。426は口縁部を欠損する壺とした。摩耗が進んでいるため、文様は不明だが、II～III期の壺と考えられる。424・425はともに器台A類で、425は3個1組の円形浮文がある。427・428は壺H類で、428は扁平な胸部をもつ。いずれも打ち欠きが認められる。429は鉢A3類で、底部から胸部下半が直線的に立ち上がる。432は鉢B2類。430は鉢F類で、内外面にハケ目を残す。口縁部に打ち欠きが認められる。433はやや腰高の手捏ねC類。甕にはA2類431、A3類436がある。いずれも口縁端部と頸部直下に文様が認められる。

時期 SD0424出土資料はV期の器台424・425、高环422を除くと高环・甕・鉢の特徴からV期末～VI期初頭の資料としてまとめると考えられる。これまでの溝内に廃棄された資料の多くがVI～VII期であり、それらの資料と類似することから、VI～VII期と考えられる。

SD0413（遺構：図126、遺物：図127）

検出状況 西部北西隅のV層上面で検出した溝。V層上面で検出した。北東端から南へ伸びて、西へ屈曲するL字形である。西端は調査区域外に存するため全形が不明だが、全体として方形基調の可能

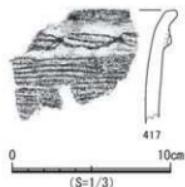


図123 SD0440遺物実測図

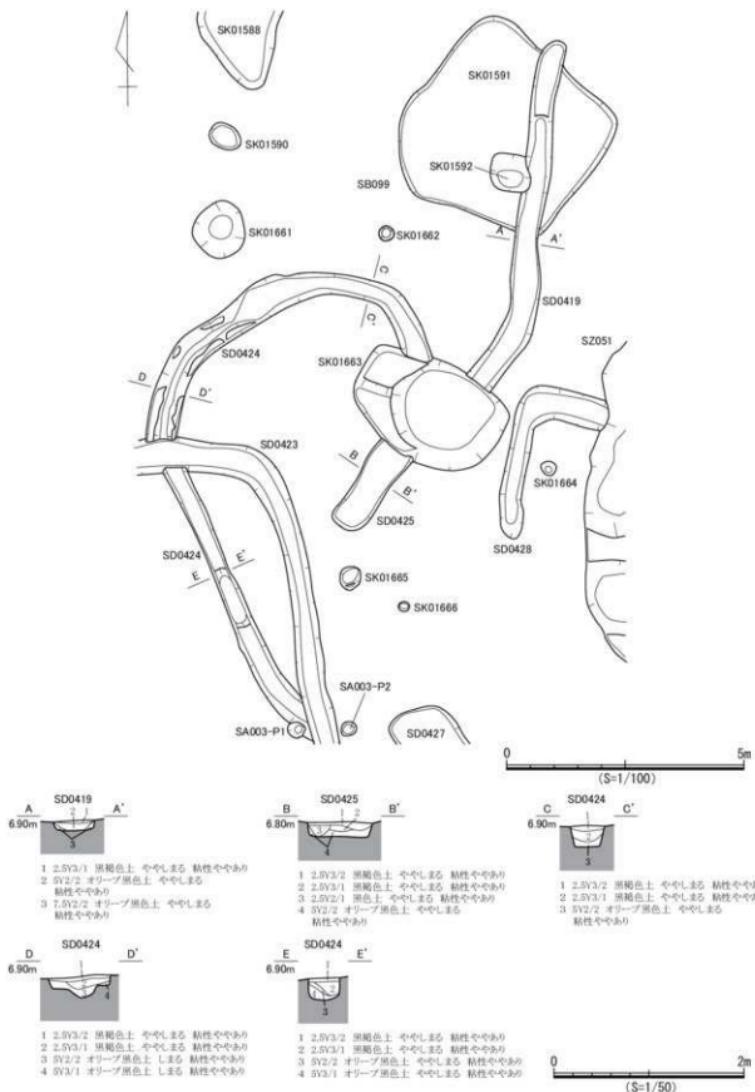


図124 SD0419・SD0424・SD0425構造図

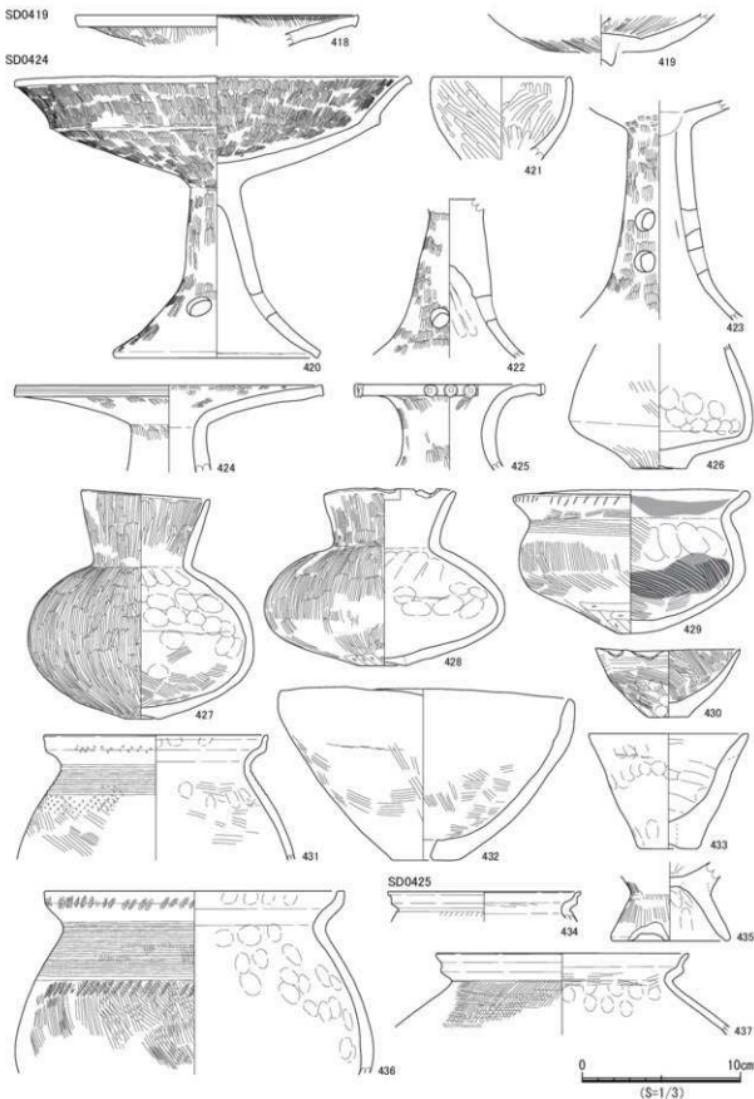


図125 SD0419・SD0424・SD0425遺物実測図

性がある。方形基調の平面形から周溝墓の一部の可能性もあるが、溝の形状及び土器の出土状況から、周溝墓ではないと判断した。また、内部に何らかの施設があつて、それをめぐる構の可能性があると考え検討したが、対応する遺構は認められなかった。周囲の遺構との重複関係はSD0413>SD0416である。

形状 幅は0.5m、深さは0.2m程度で断面形は皿形である。

埋土 2層から3層の堆積が認められる。自然堆積である。

遺物出土状況 VI～VII期の土器片が上層から出土した。特に特徴的な状況は認められなかった。

出土遺物 3点を図示した。VI～VII期に相当する。438は高环C1類。440は口頸部から胴部上半を欠損するものの、残る部分はほぼ完存する資料。おそらく壺B類の胴部と考えられ、内外面ともハケ目が顕著に残る。内外面ともに炭化物が付着し、断面にも煤痕が残る。口頸部から胴部上半の欠損が人為的な可能性がある。

時期 出土土器からVI期以降と考えられる。

SD0416（遺構：図126、遺物：図127）

検出状況 西部北西部、SD0413の屈曲部につながる溝。V層上面で検出した。SD0413・SK01565に削平され、全形は不明である。

形状 幅は0.9m程度、深さは0.1m強認められる。

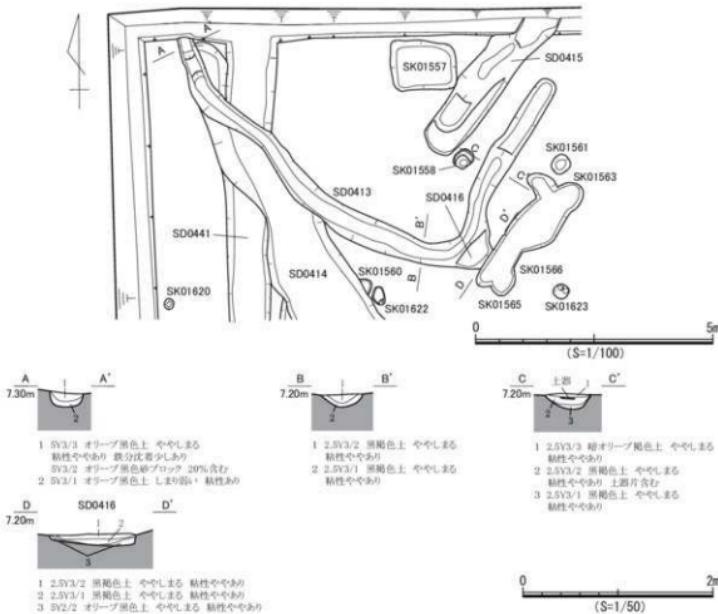


図126 SD0413・SD0416遺構図

埋土 3層に分層した。自然堆積である。

遺物出土状況 V～VII期の土器片が上層から出土した。特徴的な状況は認められなかった。

出土遺物 441は甕E4類。VI～VII期であろう。

時期 重複するSD0413よりも後出するのでVII期以降であろうか。

SD0428（遺構：図128、遺物：図129）

検出状況 西部北東部SZ051西溝を横断して東西に伸びる一連の溝。V層上面で検出した。

形状 幅は0.4m程度で、東西に伸びる溝が西端で屈曲し、南へ向く。平面形としてはL字形となる。

深さはA断面0.2m、B断面0.1m弱とA断面の方が深い。

埋土 A断面は3層に分層した。B断面は単層であった。

遺物出土状況 上層からVI～VII期の土器片が出土した。特に特徴的な状況は認められなかった。

出土遺物 442・444は高杯D類。443は鉢G類。外面にはケズリ痕を残す。いずれもVII期の資料である。

時期 出土土器のうち図示した資料も含めて、大きな破片がVII期であることから、VII期と考えられる。

SD0415（遺構：図130、遺物：図131）

検出状況 西部南西の集落域から離れて低地部に単独で位置する溝。V層上面で検出した。SH004の南側に隣接する。北端は調査区域外に伸びる。周溝墓の一部となる可能性がある。

形状 深さ0.42m程度が残り、幅は0.9m程度と広い。溝の上端は両側とも直線的である。断面形はV字形である。

埋土 5層に分層した。自然堆積が認められ、壁面から底面にかけて壁面の崩落土もしく地山からの流入土が認められる。

遺物出土状況 上層からV～VII期の土器片が出土した。特徴的な状況は認められなかったが、V～VII

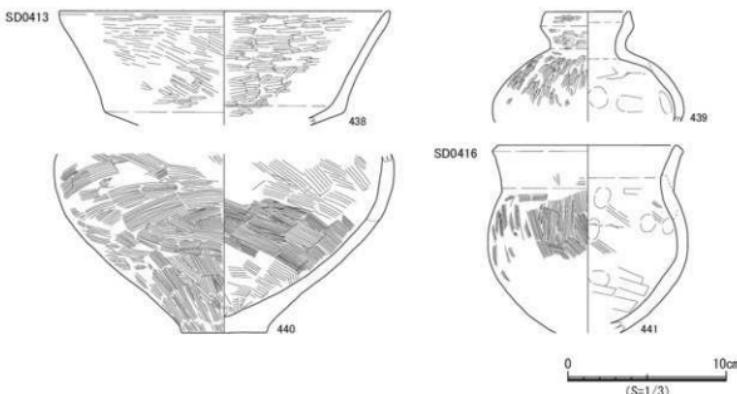


図127 SD0413・SD0416遺物実測図

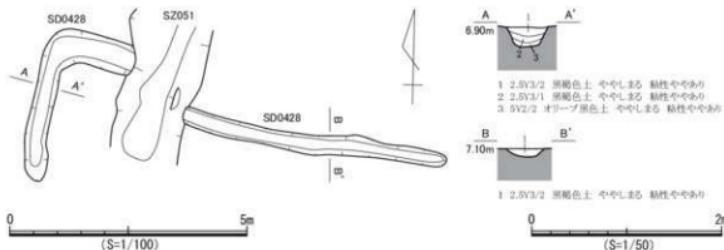


図128 SD0428遺構図

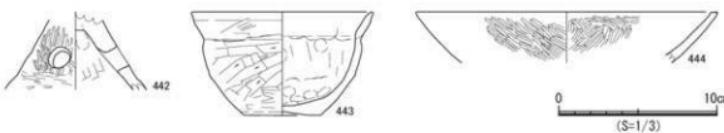


図129 SD0428遺物実測図

期の土器片に混じって、II期の壺底部（445）が出土した。

出土遺物 445はII期の壺で口縁部～胴部上半を欠損するが、底部は完存する。

時期 周溝墓の一部であればII期の可能性があるが、現状では判断材料を欠くので多く出土した土器からV～VII期と考える。

SD0414（遺構：図132、遺物：図133・134）

検出状況 西部の北西部隅から南西方向に伸び、NR001につながる溝。V層上面で検出した。

形状 北半では幅2.0m程度であるが、南半のNR001との接続部分では東壁面が東側へ大きく広がり弧状となり、その幅は7.0mをこえる。深さは0.1m～0.2m程度と浅く、壁面も緩やかである。

埋土 A断面では5層、B断面では2層に分層した。自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 VI期前後の土器小片が主に上層から多く出土した。なかでもVI期後半のものが顕著であった。特に特徴的な状況は認められなかった。

出土遺物 446・447・453は高杯C類。いずれも口縁部がわざかに内湾しながら立ち上がり、端部に内傾面をもつ。脚部はやや短脚で中位にある透孔から強く内湾する。透孔は2穿孔1組4方向である。

447は脚裾部内外面に強い被然が認められ、煤痕が付着する。打ち欠きが認められる。隣接グリッド出土のSD0422と接合関係をもつ。448は摩耗の著しいS字甌A類、449・450は手捏ね土器である。452

は縄文時代晩期後半の深鉢の口縁部片である。454は祭祀・儀礼関連具の竿。板目の削りだし棒材を利用する。上部に凹みがあり、上端部は丸く加工している。表面は平坦で側面は面取りしており、断面形は三角形となる。456は凝灰岩製の手持ち砥石。457は下呂石製の楔形石器で上下端に階段状の剥離や潰れがみられる。458は片麻岩製の石製品で縁辺を剥離成形する。石棒の未製品の可能性がある。

時期 残りの良い高杯446・447によりVI期以降と考えられる。

SD0050 (遺構: 図135・136、遺物: 図137~139)

検出状況 西部北壁から南側約10mの範囲で、低地部を形成した自然流路と住居跡が位置する微高地の間において、その埋没過程で生じた認められた窪地状の堆積。その堆積はIV層除去後に確認した。IV層～V層間の堆積で、低地部のみに認められた。V層上面を掘削した掘形は確認できなかった。A地区SD050と一連のものと考えられる。

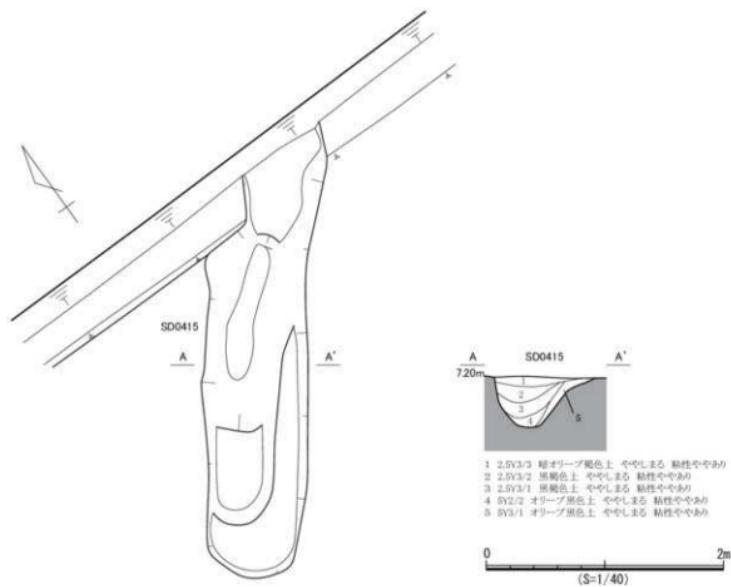


図130 SD0415遺構図

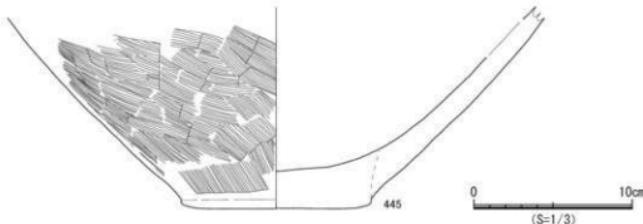


図131 SD0415遺物実測図

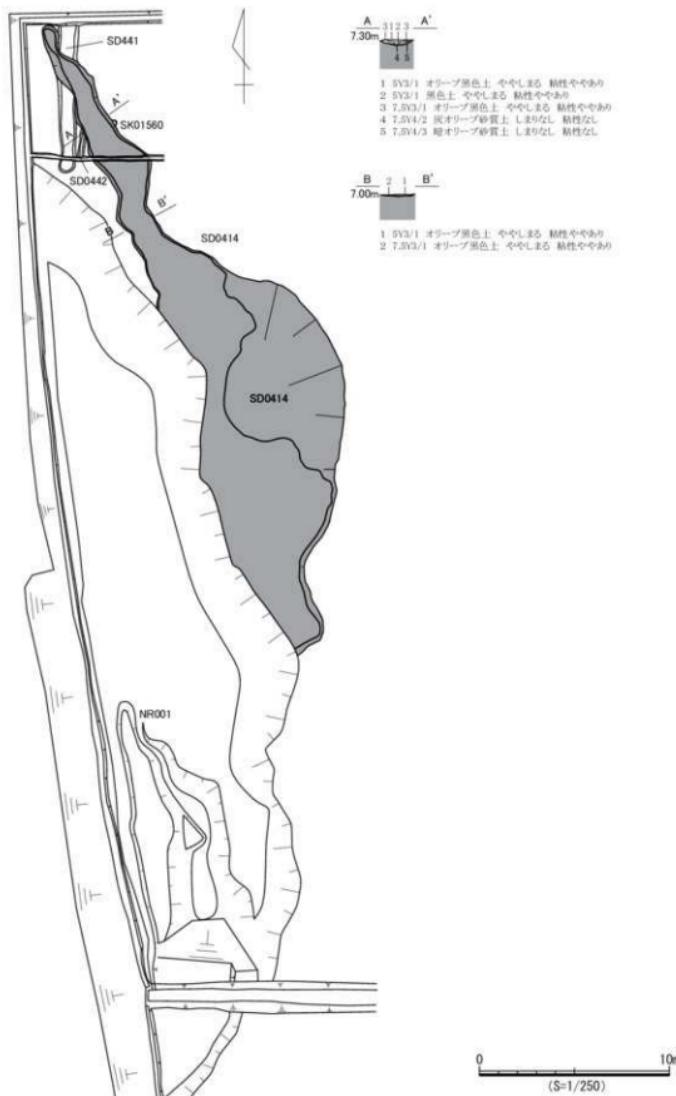


図132 SD0414造構図

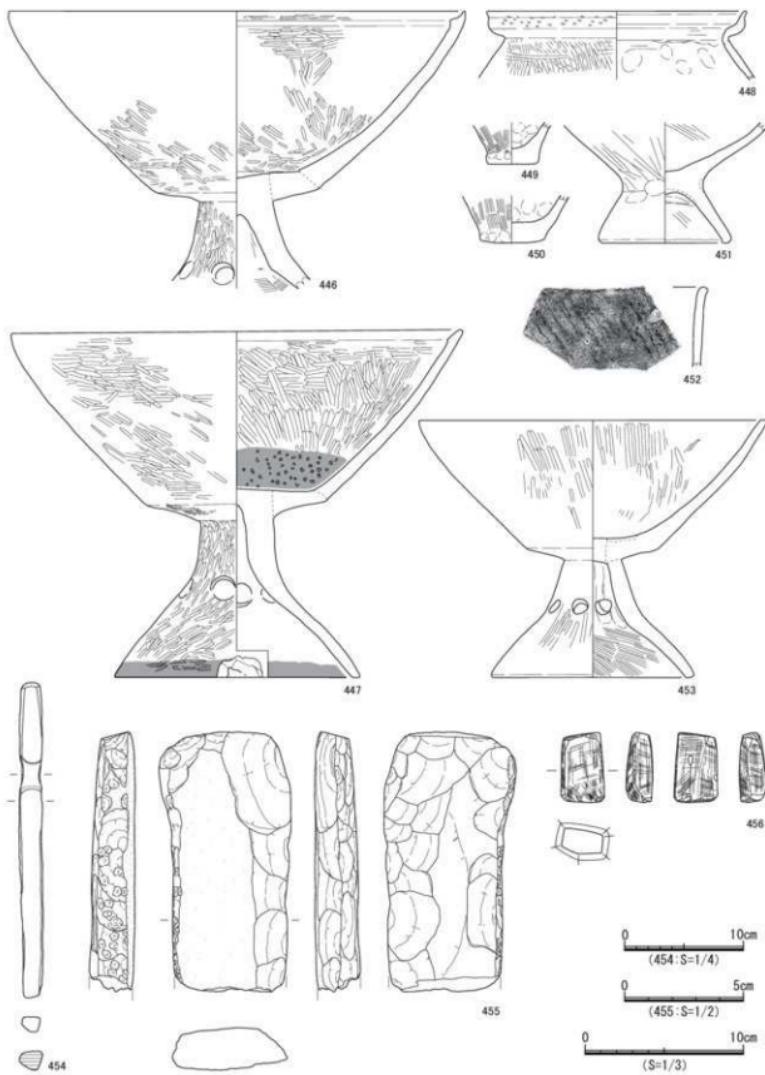


図133 SD0414遺物実測図（1）

埋土 埋土は約0.2m程度の堆積がみられ、13層と14層の2層に分層した。14層には灰色土の堆積が認められる。

遺物出土状況 出土土器は比較的大きな破片が目立ち、V～VII期の資料が大半を占める。その点数は1万点をこえるが、後述する窯地

2のように廃棄されたかのようにまとまりのある資料は顕著ではなかった。一部にI期やVII期以降の資料が認められた。

出土遺物 461はIV期壺の頸部片。摩耗が著しい。458は高杯B類で、丁寧なミガキがある。V期後半と考えられる。459・460・462・463は高杯C類。459・460は口縁端部にシャープな内傾面がある。VI期後半の資料である。462・463は内面に多条沈線と山形文を施文する。462には赤色顔料の付着が認められる。471はVII期高杯D類。内面に極細の多重沈線のみを施文する。文様帶の区分段差はないが、杯底部の段は認められる。467・470・472はVII期でもその末葉にもしくはVII期に位置する高杯E類。明確な遺構から伴出したわけではないが、半完存品として類似資料3個体分をえられたため、ある程度時期的にまとまりのある資料と考えられる。いずれも、口縁部が大きく開き、脚部が付根から外反する。内面には多条沈線と連弧文を有し、杯外部には羽状ミガキが認められる。杯部底径はVI・VII期の他の資料に比べて縮小化するが、杯底部の段差は残る。470は端部に内傾面を有し、脚裾部がわずかに内湾する。464・468は高杯G類。464には外面に多条沈線・山形文の組み合わせが認められる。473は器台B類で、VI後半～VII期前半。476は壺A類。口縁部が大きく開き、頭部で強い屈曲をもつ。477は壺H類で外面に多条沈線と刺突文・山形文による施文がある。478～480・482は中型壺。478は口縁端部に打ち欠きがある。474は口縁部が受口状となる壺D類。屈曲部は鈍化するが、胸部は扁平である。胸部上半に打ち欠きがある。483・484ともに鉢A2類。出土資料の多くは、加飾の顕著な資料でVI期に相当する。487は泥岩製の有孔磨製石鐵。側辺は湾曲し、基部は凹状の僅かな抉りをもつ。孔の部分は両側から穿孔する。486は砂岩製の叩石類で下端に敲打痕を残す。

時期 V～VII期の資料が多く認められる。VII期以降の土器資料がわずか十数点認められるが、いずれも小片で摩耗も著しいので、IV層及び1面との関連が高いと考えられるので、埋没時期はVII期と考えられる。

SD0422（遺構：図135・140～147・162・163、遺物：図148～161・164～205）

検出状況 西部の中央南北90m程度、東西30m程度の範囲に広がる窯地状の堆積。その範囲は南側・西側にさらに広がって調査区域外に及び、いずれも詳細は不明である。東端は集落域の西縁辺部、微高地と低地部との境界とに対応する。NR001・NR002を覆う堆積とした確認した。後述する出土した土器資料において、NR001・NR002の埋没時期を示す上層出土資料とそれほど大きな時期差が認められないもので、NR001・NR002の埋没直後から形成されたと考えられる。IV層除去後に確認した。V層上面を掘削した掘形は確認できなかつたが、大量のVI～VII期を中心とする土器資料が出土し、そのうちには

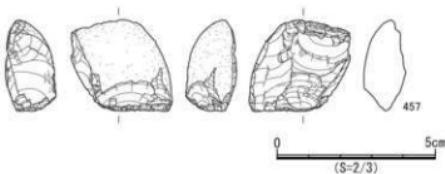


図134 SD0414遺物実測図（2）

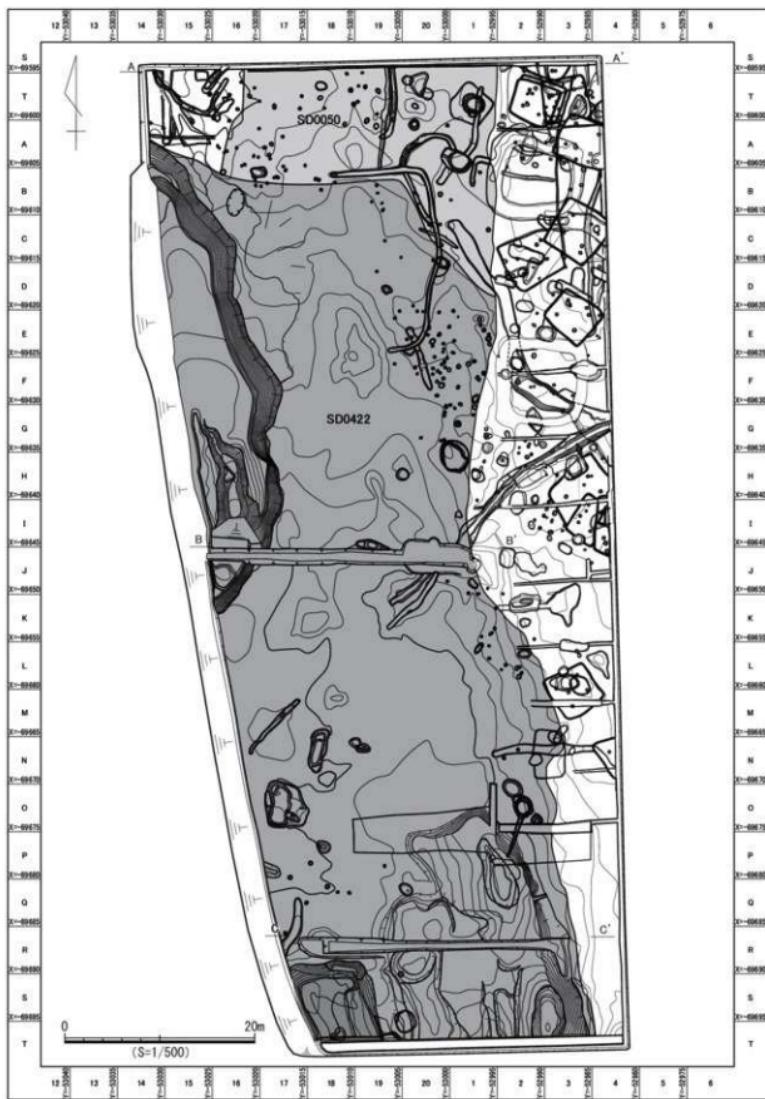
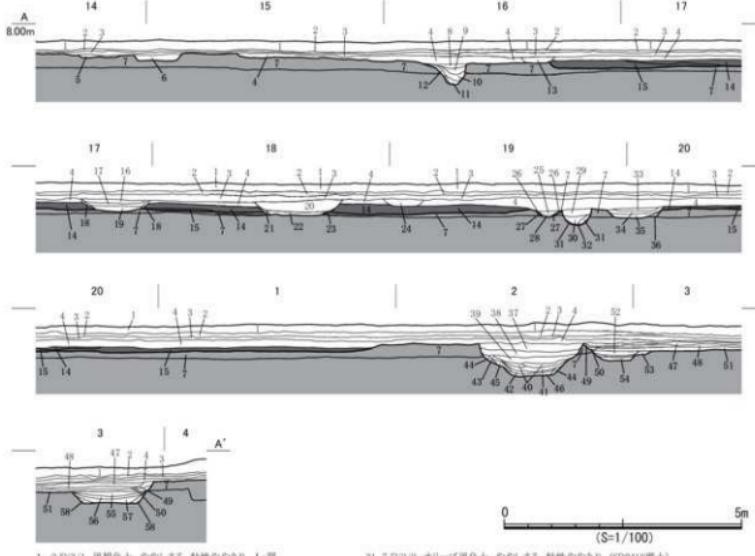


図135 SD0050・SD0422構造図

廃棄された可能性のある資料がある。これらの資料は微高地に位置する一部の住居跡と同時期の資料が含まれるので、微高地に位置する集落域と何らかの関係がある可能性があり、人為的な掘削を伴うものではないが、ある一定のまとまりをもつ可能性がある。SD0461は一連の窪地の可能性があるが、調査段階で土色の違いにより2カ所の窪地として判断したので、これを別のものとして判断した。出土した土器片は14万8000点あまりで、その分布をみると3カ所に密集する傾向が認められることから、



1. 2SV3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややかろ Ia層
 2. 2SV3/3 埋オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ Ia層
 3. 2SV3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややかろ Ia層
 4. 2SV3/2 オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ IV層
 5. SV3/2 オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0413埋土)
 6. SV3/1 オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0413埋土)
 7. 7SV4/2 底オーブル色土 ややしまる 粘性ややかろ V層
 8. 2SV3/2 埋オーブル色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0415埋土)
 9. 2SV3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0415埋土)
 10. 2SV3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0415埋土)
 11. 2SV3/1 オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0415埋土)
 12. 2SV3/1 オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0415埋土)
 13. 2SV3/1 オーブル黒色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0415埋土)
 14. 2SV3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0505埋土)
 15. 7SV4/1 黑色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0505埋土)
 16. 2SV3/3 埋オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ
 17. 2SV3/2 埋褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0414埋土)
 18. 2SV3/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0414埋土)
 19. 2SV3/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0414埋土)
 20. 2SV3/3 埋オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ
 粘分比重少しづめ (SD0444埋土)
 21. 10YH3/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0444埋土)
 22. 7SV3/1 埋褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0444埋土)
 23. 2SV3/1 オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0444埋土)
 24. 2SV3/2 埋褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0405埋土)
 25. 2SV3/2 オーブル黒色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0417埋土)
 26. 2SV3/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0417埋土)
 27. 2SV3/2 オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0417埋土)
 28. 2SV3/1 オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0417埋土)
 29. 2SV3/1 埋褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0418埋土)
 30. 2SV3/2 オーブル黒色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0418埋土)
31. 7SV2/2 オーブル黒色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0418埋土)
 32. 7SV3/1 オーブル黒色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0418埋土)
 33. 7SV2/1 埋褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0418埋土)
 34. 2SV2/1 埋褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0418埋土)
 35. 2SV3/2 オーブル黒色土 ややしまる 粘性ややかろ (SK01587埋土)
 36. 2SV3/1 オーブル黒色土 ややしまる 粘性ややかろ (SK01587埋土)
 37. 2SV3/2 埋オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ
 粘分比重少しづめ (SD0505埋土)
 38. 2SV3/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややかろ
 粘分比重少しづめ (SD0505埋土)
 39. 2SV3/1 埋褐色土 ややしまる 粘性ややかろ
 粘分比重少しづめ (SD0505埋土)
 40. 2SV3/2 オーブル黒色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0505埋土)
 41. 2SV2/2 オーブル黑色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0505埋土)
 42. 2SV3/1 オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0505埋土)
 43. 7SV3/2 オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0505埋土)
 44. 2SV3/2 オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0505埋土)
 45. 7SV3/1 オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0505埋土)
 46. 7SV4/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0505埋土)
 47. 2SV3/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0509埋土)
 48. 2SV3/1 オーブル黑色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0509埋土)
 49. 2SV2/2 オーブル黑色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0509埋土)
 50. 7SV3/1 オーブル褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0509埋土)
 51. 2SV3/2 埋褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0421埋土)
 52. 2SV3/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0421埋土)
 53. 2SV3/2 オーブル黑色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0421埋土)
 54. 2SV2/2 埋褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0421埋土)
 粘分比重少しづめ (SD0421埋土)
 56. 2SV3/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0421埋土)
 57. 2SV2/2 オーブル黑色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0421埋土)
 58. 2SV3/2 オーブル黑色土 ややしまる 粘性ややかろ (SD0421埋土)

図136 SD0050遺構図

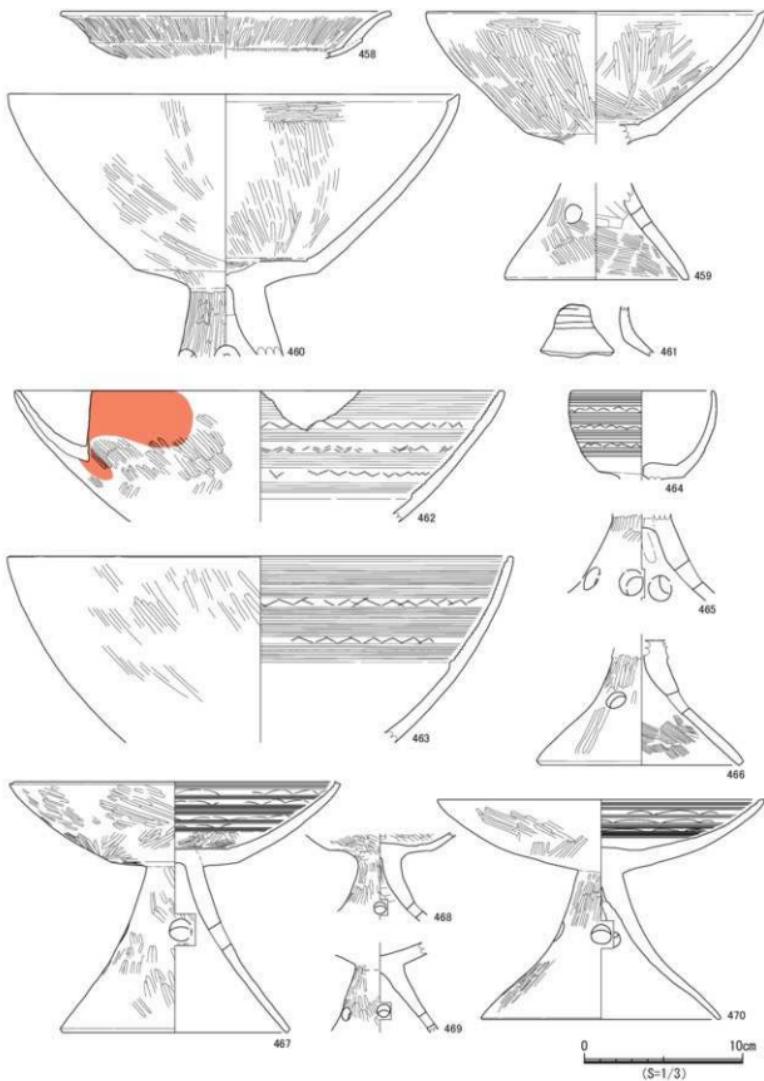


図137 SD0050遺物実測図（1）

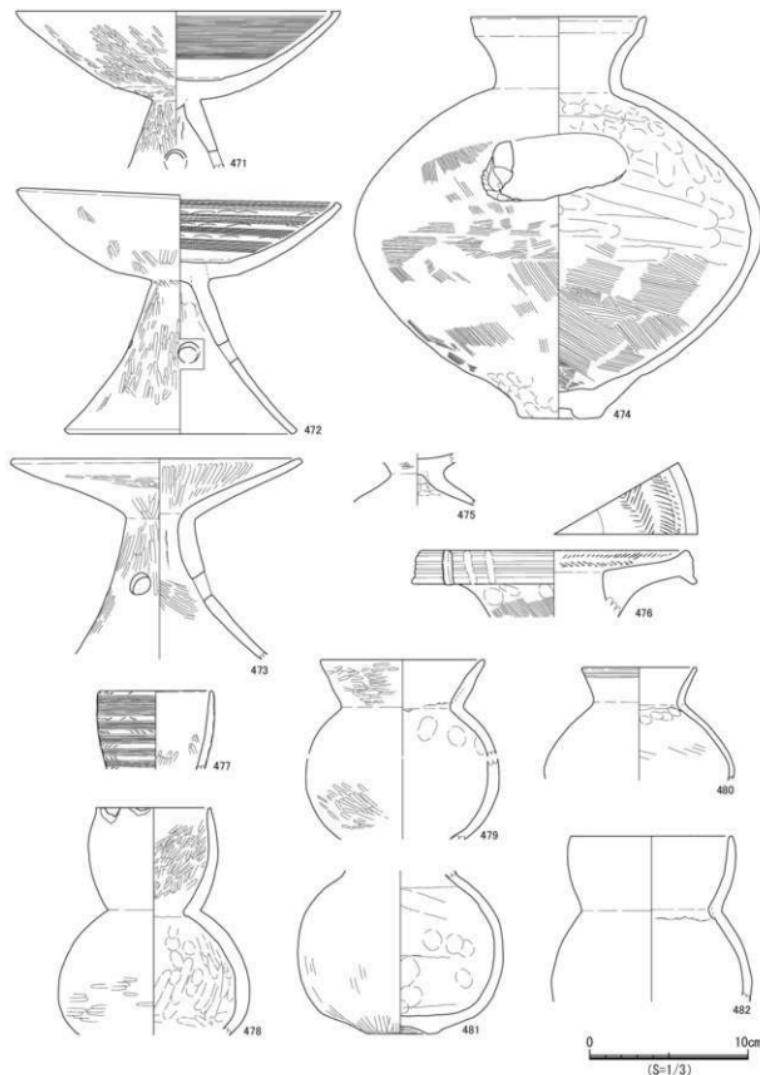


図138 SD0050遺物実測図（2）

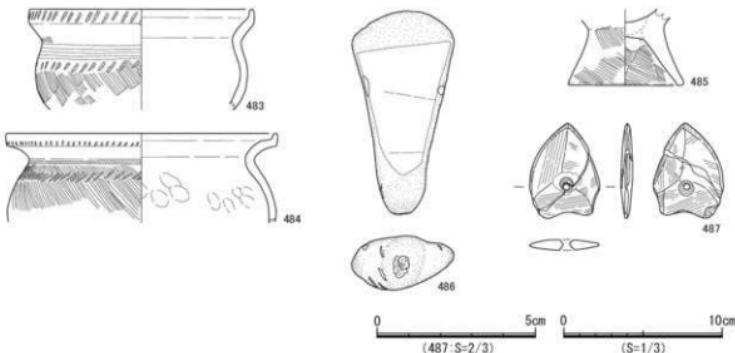


図139 SD0050遺物実測図（3）

この3カ所がさらに窪地状として窪んでいた可能性がある。その上で、この窪地を利用して、この3カ所に土器片が集積もしくは廃棄された可能性がある。

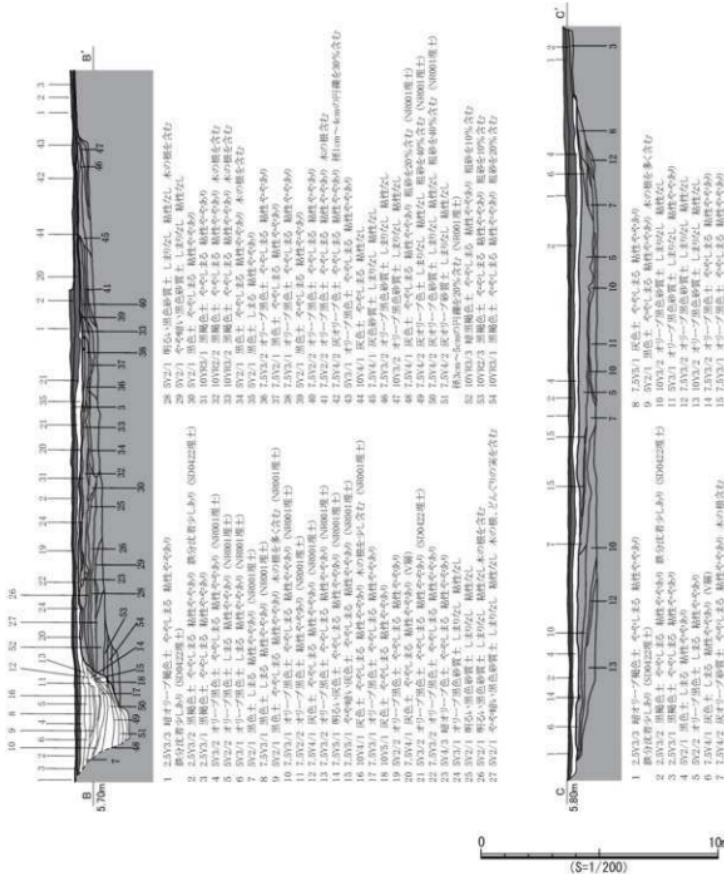
埋土 2層の堆積が認められ、約0.2mの堆積が認められる。

遺物出土状況 埋土からはコンテナ約250箱の大量の土器片が出土した。そのうち、古代以降の土器片は800点あまりで、圧倒的多数をV～VII期の土器資料が占める。前述したようにHD20～IF01区、HL17区、IL02・IM02・IN02・IN03区の3カ所からの出土が顕著であった。とくにIL02・IM02・IN02・IN03区から出土した資料は摩耗がほとんどなく、接合状況がきわめて良好で完存品にちかい資料を多く含むことから、原位置性の高い資料と判断した。出土状況を検討すると高杯が土圧によって潰れて花弁状となって出土したと考えられる資料や、甕が倒れた状況の資料などが確認できる。こうした原位置性の高い資料がすべて一括廃棄されたと解釈するよりも、短期間ではあるが何回かの行為によって廃棄され、それらが集積した状況を検出した可能性がある。なかには、円形もしくは梢円形の広がりをもつ土器片の散布状況と広がり・密集する状況が認められる。また、SD0422出土の土器取り上げ及びV層上面検出後、その底面を検出した結果、いくつかの土坑の掘形(SK01830・SK01832・SK01881・SK01886)の平面形内に土器片の散布が密集し、さらに、これらの土坑出土の土器片とSD0422出土土器片との間に多くの接合関係が認められた。SD0422出土土器片のうち原位置性の高い資料の一部はSK01830・SK01832・SK01881・SK01886と同じく土坑に伴う可能性がある(図141遺物出土状況図にV層上面で検出した構造も合わせて示した)。そのため出土状況を検討して仮定ではあるが、その単位を大きく土器集中区1～17に分類した(図142)。これらのIL02・IM02・IN02・IN03区以外から出土した土器片は摩耗も著しく、須恵器・常滑などの出土があり、同じSD0422であっても箇所によっては埋没状況が異なると考えられる。また、平面分布の検討から、SD0423・SK01881の掘形と合致する資料が認められるので、これについては抽出して資料を提示した(図164・165・図166)。土器集中区1～17、SD0423・SK01881関連資料以外の出土資料は、HD20～IF01区、HL17区、IL02・IM02・IN02・IN03区の3カ所を中心とし示した。時期はとくに記述がない場合はVI～VII期にあたる土器資料が出土した。

時期 土器集中区出土として提示した資料はVI-3期と考えられ、一部に流入した可能性のあるVI-3期前後の資料が認められる。その他の資料はVI-VII期の資料が多く、VI期の資料が目立った。

土器集中区1（図143）

遺物出土状況 土器集中区1として分類した範囲のうち、長軸長1.3m程度・短軸長0.8mの橢円形の範囲に集中する区域を1a群とし、それに続く可能性のある北東側1m程度の半円形に広がる範囲を1b群とした。



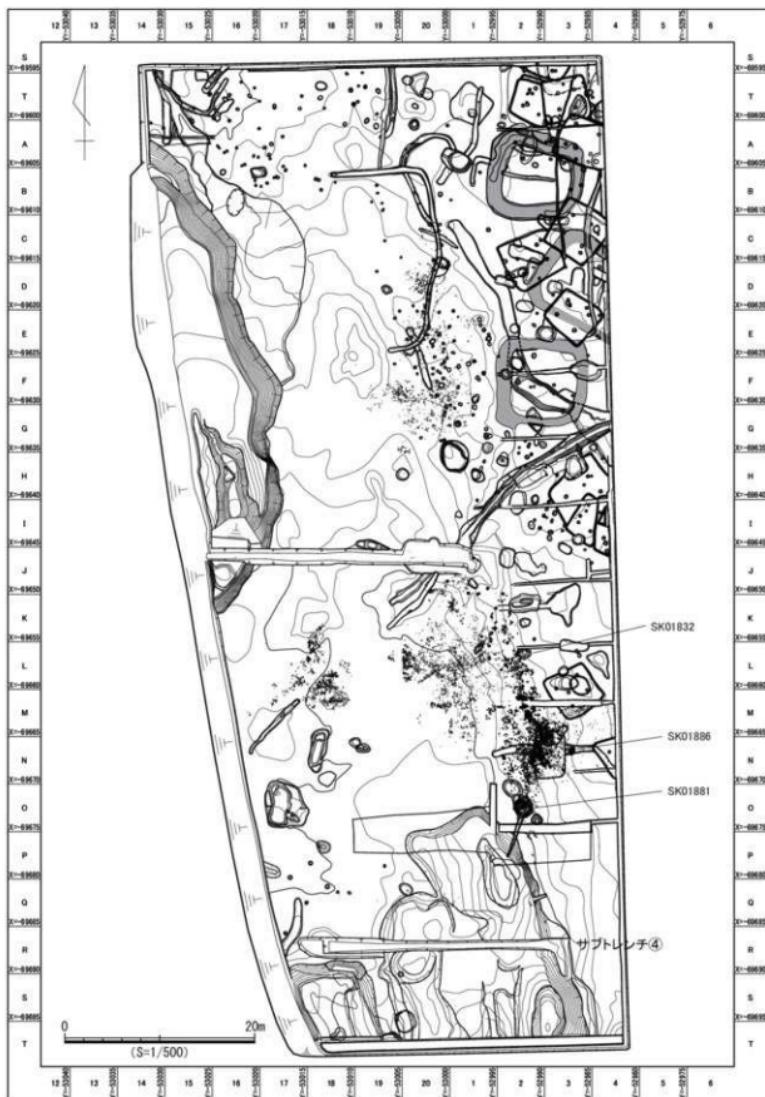


図141 SD0422遺物出土状況図

出土遺物 1a群からは高環G類488・I類脚部489、甕A2類493、S字甕A類のD1b類490・B3類491・492が横転したような状況で出土した。488は脚部まで復元できた数少ない資料で口縁部に多条沈線が認められる。脚部は透孔付近から強く屈折して開脚する。坏部内面は段をもって口縁部から底部に移行する。490は胴部を欠損するが、周辺には同一個体の破片が数多く残されていた。小片化が著しいために復元できなかった。491・492はともにくの字状の口縁部があり、外面にもハケ目を残す資料。端部には強い平坦面が認められる。493は頭部から胴部上半にかけて直線文を3帯施し、最下段に刺突文を加える。甕(491～493)は胴部最大径がほぼ胴部中央にあり、外面のハケ目も単斜状である。時期はVI～3期であろう。1b群は1a群の周囲でやや散漫な出土状況を示す。494はV期の高環B類で直線文が3帯認められる。坏部及び脚裾部は欠損し、周囲に同一個体は確認できなかった。497もV期の可能性が高い甕の胴部。赤彩が残るが摩耗が進行し、遺存状況が悪い。胴部1/2程度が残存するが周囲に同一個体は認められなかった。499はIV期甕の胴部下半部。底部を完存するものの摩耗が顕著で周囲より流入した資料と考えられる。496は壺G類。口縁部に多条沈線があり、外面に煤痕が確認できる。498は甕C類。1a群はIV期・V期の資料を含み不安定な状況を示すが、496・498がVI～3期前後の資料のため、1b群と関連する可能性がある。

時期 IV・V期の資料を除くとVI～3期と考えられる。

土器集中区2（図143）

遺物出土状況 1a群の南に隣接し、東西約1.3mの範囲に高環C類(500～502)が密集する。その他に甕B3類(503)・S字甕A類のD1b類(504)・甕脚部(505)が出土した。504・505の遺存状況・復元状況から判断すると、504・505は周囲より流入したかもしれない。

出土遺物 500は脚部まで完存する資料で、501とともに口縁端部に内傾面をもつ。ミガキを内外面とともに精緻で、口縁部は水平方向に施す。脚部は中位にある透孔付近から強く内湾する。502は坏部がほぼ完存するが、脚裾部を欠損する。内面には煤痕が認められ、ミガキは羽状である。503は胴部が接合できなかったが、1a群出土492にちかい胴部形状を示すと考えられる。口縁部は頭部から強く屈折する。端部は平坦面を形成するものの、内外に強いナデ痕跡があり、そのせいか、器壁の厚さが減っている。504の口縁部には打ち欠きが認められる。

時期 VI～3期と考えられる。

土器集中区3（図143・144）

遺物出土状況 2群の南に隣接し、径1.7m程度の範囲で土器片が散布する範囲。そのうち、長軸長1.5m程度・短軸長0.8m程度の楕円形に広がる密集地帯を3a群、その東側0.8mの範囲に3群からの延長とも考えられる分布を示す地域を3b群とした。3a群から高環C類(508)、高環G3類(506・507)、器台A類(511)、器台B類(509・510)、甕A類(517)、甕B類(512)、甕E類(514)、甕脚部(513・516)、壺G2類(518～521)、壺(522・523)、鉢(524)が出土した。3b群の出土状況は散漫で、高環I類(525)、器台B類(526)、甕B類(529)、甕C類(530)、甕脚部(528・531)が出土した。

出土遺物 506はほぼ完存する高環G3a類で坏部には精緻なミガキがあり、底部の径がやや大きく口縁部が直立気味に立ち上がる。脚部は透孔付近から強く屈折する。高環G3c類507は口縁部と脚部に多条沈線・刺突文・山形文による精緻な加飾がある。内面は羽状ミガキが認められ、坏底部の径はやや小さく、外縁にはわずかな段が残る。508は高環C3類の脚部。510は脚裾部がやや内湾するものの、受部

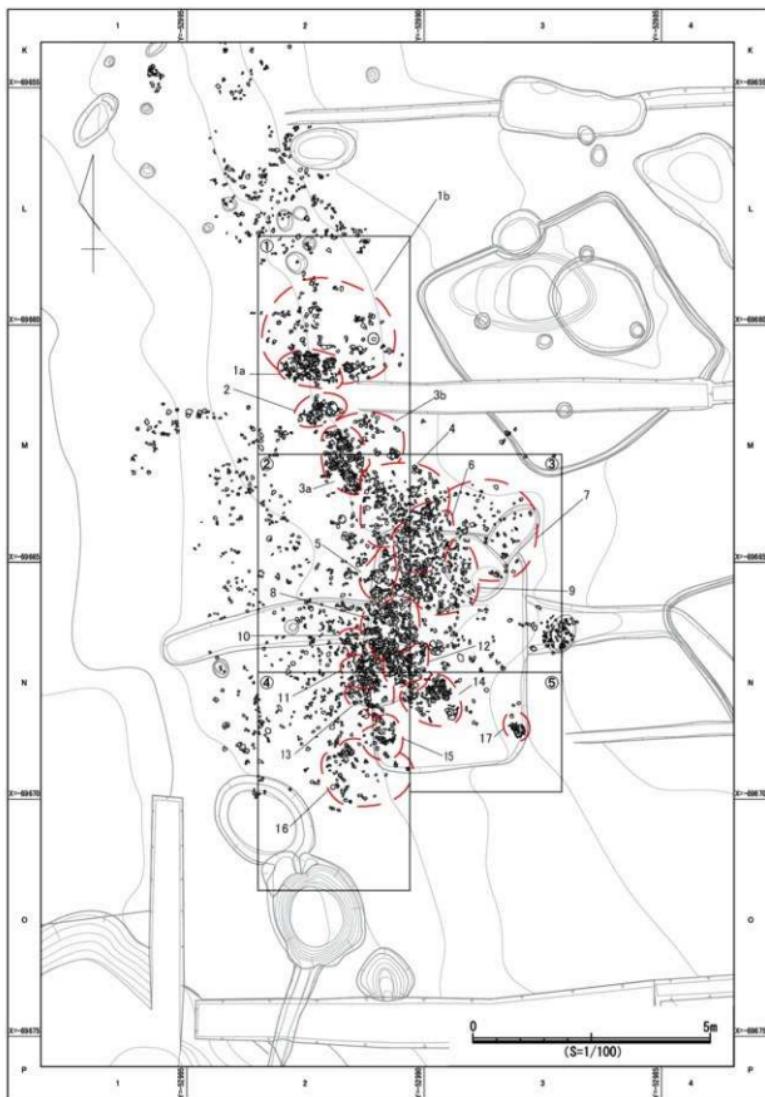


図142 SD0422土器集中区出土状況図（1）

は直線的な形状で器台B3類である。器台509は受部を欠損し、脚裾部が強く内湾して外面に煤痕がある。510より脚裾部が内湾するのでB3類であろう。512は口縁部がくの字に屈折し、口縁端部と頸部に強いナデが認められる甕B3類。514は口縁部が内湾する甕E5類。端部には凹面を形成するほど強いナデの痕跡が認められる。ほぼ完存する良好な資料である。胴部最大径は胴部中央よりやや上位に位置し、胴部内外面に粗いハケ目と輪積み痕を残す。破断面に二次的な被熱痕が認められる。壺G2a類は4点出土した(518～521)。形状・調整ともに酷似する。いずれも精緻なミガキを外面と口縁部内面に施す。518・520・521は底部外面にもミガキを施す。外面には顯著な煤痕を残し、炭化物の付着も認められる。522は口頭部を欠損し、内外面及び破断面に煤・炭化物の付着がある。524は半球状の形状で、やや突出気味の底部をもつ。外面にはケズリ痕・輪積み痕をそのまま残す。3a群出土土器はVI～3期に相当すると考えられる。511・517がV期の資料で出土状況及び復元状況から混入資料の可能性が高い。525はV期の高杯I類脚部で内外面にハケ目を残す。低脚の例外的な資料である。526はVI～VII期の器台B1・2類の脚部であろう。甕529・530は外面に粗いハケ目、口縁端部に平坦面が認められる。530が甕C2類、529が甕B3類である。528・531は甕の脚部。528は内湾して裾部に打ち欠きが認められる。531は裾部が直線的に聞く資料である。

時期 3a群は混入資料の511・517を除いてVI～3期、3b群はのうち526がVII期でも前半の可能性が高く、残る甕528～531は脚部(528・531)の判断は難しいが、VI～3期前後と考えられる。

土器集中区4(図144・145)

遺物出土状況 土器集中区3と土器集中区4の間において土器片が集中する区域。接合状況が悪い。図示可能な資料が少なく、4点の図示にとどまった。

出土遺物 532は壺胴部片。胎土中に角閃石を含むので生駒西麓産であろう。533は甕脚部。破断面に煤が付着する。534・535とともに手捏ね形土器で口縁部に打ち欠きがある。

時期 532はV～VI期、533～535はVI期と考えられる。

土器集中区5(図144)

検出・遺物出土状況 土器集中区9の西側に隣接して、高杯G1類(537)が逆位、甕A3類(540)が横位、鉢B3類(538)、壺(539)がかたまって出土した範囲とした。

出土遺物 536は壺A1類。口縁部が外反し、端部及び頸部直下に沈線がめぐる。内面には赤彩が認められる。537は高杯G1類のほぼ完存する資料。杯部は側面形が台形状で、口縁端部にはわずかな内傾面が認められる。杯底部の段差も認められる。脚裾部にも打ち欠きがある。538は鉢B3類の完形品。口縁部が内湾しながら立ち上がる。内外ともハケ・ケズリを主とする調整が認められる。539は口頭部を欠損する壺。おそらく壺A類の胴部と考えられ、胴部上半には直線文・波状文・刺突文がある。波状文は振幅の長く、他の例と比べると少數例である。540は甕A3類のほぼ完存する良好な資料。口縁端部外面は直立するが、内面は傾斜して、刺突文をもつ。頸部から胴部上半にも直線文と刺突文があり、胴部は倒卵形を呈す。

時期 高杯537及び甕540の形状から、VI～2～3期と考えられる。

土器集中区6(図144・145)

検出状況 土器集中区5の東側、土器集中区4の南側で、長軸長1.5m・短軸長1m程度の楕円形の範囲に分布する。

遺物出土状況 高坏G1類（541）、壺A類（547）、甕B4類（578）・S字甕A類のD1b類（542・543）・甕A類（549）・甕脚部（545・546）が出土した。

出土遺物 高坏541は、ほぼ完存する資料で脚部が透孔付近でやや屈曲するものの円錐状に開く。壺547は底部が完存するが、口頸部は欠損する。胴部上半に直線文と刺突文があり、赤彩が認められる。煤の付着も認められる。549は粗いハケ目と刺突文が胴部外面で認められ、口頸部を欠損する。甕A類の可能性がある。甕548は口頸部に強いナデを施し、その凹凸が著しい資料。

時期 6群出土資料は5群出土537と類似する高坏541を含むことから、6群出土資料もVI-2～3期と考えられ、S字甕A類が共存する可能性のある資料であろう。

土器集中区7（図145）

検出・遺物出土状況 土器集中区6の西側、1.5m程度の範囲とした。土器片の出土が散漫で図示可能な資料も断片的な提示にとどまった。

出土遺物 550は精緻なミガキのある壺G3類。他の例に比べやや口縁部が短く、端部に内傾面がある。551は内面加飾のある高坏C4d類。多条沈線間に山形文と対向山形文を施文する。外面は羽状ミガキの可能性がある。554は高坏I類の脚部。552はS字甕脚部。553は小型品の台付甕の脚部であろう。

時期 本群出土資料も周囲の資料と同様、VI-3期の可能性が高いが、554はVI期でも前半期、551はVII-1期前後の資料と考えられるので、やや時期幅が認められる。また、残存状況もそれほどよくないことから、二次的移動を含んだ資料群の可能性がある。

土器集中区8（図144・145）

検出状況 土器集中区5の南側に隣接して長軸長1.2m・短軸長1.0m程度の範囲を土器片の広がりをその範囲とした。

遺物出土状況 高坏C3類（556・559）・G類（555・557）、器台B3類（558）、壺A4類（561）・壺I類（560）、鉢B2類（562）、甕A2b類（566）・B2類（563～565）・甕B4類（567）・甕脚部（568・569）が出土した。

出土遺物 555は低脚で強く開脚し、脚部径より口径が上回る。556・559は肥厚した口縁部内面に多条沈線のある高坏C3類。556の内面は羽状ミガキが認められた。器台559は円錐状の脚部をもつ。器台558はほぼ完存品で、内湾する脚部をもつ。透孔はその位置が中位より上にある。壺560は短くくの字に外反する口縁部をもち、精緻なミガキを施す。561は壺A4類の好例。短く直立する頸部から口縁部が屈曲して水平に伸び、端部下方を拡張する。胴部上半には直線文間に羽状文を加飾する少数例である。甕563・565は口縁部が強く外反し、端部に強い平坦面をもつ。甕564は脚部破断面に二次的な被熱が認められる。甕566は脚部を欠損する。口縁部はわずかに直立する。甕はいざれも胴部最大径が胴部中央やや下がった位置にある。甕567はほぼ完存する好例。口縁部が強く外反する。胴部最大径が中央より下がった位置にあり、胴部下半は底部まで直線的な形状となる。

時期 VI-3期と考えられる。

土器集中区9（図144・145）

検出状況 土器集中区6南側に連接し、長軸長1.2m程度の範囲に土器片が集中する。

遺物出土状況 壺（576）が横転した状況、口頸部は欠損する壺（573）が立位の状況で出土した。高坏脚部（579）は土圧で潰れていた。高坏（572・577・579）、壺（573・574・576）、鉢（571・575・578）、甕（580～582）が出土した。

出土遺物 572は高環B3・B4類もしくはC1類の脚部。透孔は2穿孔あり、上下で位置が千鳥状となる。573は突出した底部に下膨れの胴部をもつ中型の壺。胴部上半に連弧的な山形文と沈線文を施すが、やや粗雑である。また、摩耗が進行して観察困難のため、沈線が直線文の可能性がある。576は完形品の壺H2b類。口縁部に精緻な文様が認められる。多条沈線の間に山形文・対向する斜位の刺突文を施す。多条沈線は最上段のみ多条化しているが、その他は3～4本で少条化している。574は口縁部に打ち欠きのある壺I類。内画面ともに精緻なミガキを施す。579は高環G3b類の完存品。脚部径より口径が大きく上回る資料。口縁部・脚裾部に多条沈線を施す。脚据部は透孔付近で強く屈折して直線的に開く。580はS字甕A類。高環577はB3a類でV期後半の資料である。破片資料であり、混入資料と考えられる。

時期 577を除いて、VI～3期前後と考えられる。

土器集中区10（図144）

検出・遺物出土状況 土器集中区8の南に隣接し、高環C2類(583)、壺H2類(584)、鉢胴部(585)が出土した。

出土遺物 583は脚部を欠損し、口縁部外面に顕著な煤痕が認められ、端部は内傾する。584は口縁部に多条沈線を加えて刺突文・山形文・菱形文を施す少數例である。585は刺突文と直線文が認められる。

時期 583はVI～2期前後、584はVII～1期前後、585はV～VI期と考えられ、時期幅がある。

土器集中区11（図144・146）

検出・遺物出土状況 土器集中区10の南側に隣接して土器片の集中が認められるが、図示可能な資料は鉢586、甕587のみであった。

出土遺物 586は鉢A類の胴部下半の資料。口頭部～胴部上半を欠損するが、それ以外は完存する。587は甕B2類。頭部で強く屈折して口縁部が立ち上がり、端部は顕著な平坦面を形成する。内外面にハケ目が残る。

時期 586、587ともVI期の資料と考えられる。

土器集中区12（図144～146）

検出状況 土器集中区8南側に隣接して、径1mの範囲に密集する区域を区分した。

遺物出土状況 器台B3類(588)、壺C類(591)、鉢A2類(589)、甕B2類(594・595)・B3類(593)、手捏ねC類(592)、甕脚部(590)が出土した。

出土遺物 588はほぼ完存する器台。脚部が低脚でB3類としたが、脚裾部が透孔付近からやや屈折して円錐状に開き、内湾するB3類では少數例である。591は胴部に比べると頭部径の小さい直立する口頭部をもつ。その分胴部が偏平にみえる。589は口縁端部が直立気味となる鉢A2類。内面の強いナデが顕著だが、端部先端は尖り気味である。頭部直下には直線文とヘラによる刺突文がみられる。594・595とともに口縁部が強く外反し、端部は平坦面を形成する。また、頭部が強いナデによって直立気味である。593は594・595と類似して頭部に強いナデが認められるが、口縁部がやや長く端部がわずかに内傾気味となる。

時期 VI～3期と考えられる。

土器集中区13（図146）

検出・遺物出土状況 土器集中区11の南側に隣接し、高坏（596）、甕（600）がまとまって出土した。他に高坏（597・598）、甕（599）、鉢（601）が出土した。

出土遺物 596は高坏C3b類の大型品。口縁部が直線的に大きく開き、肥厚した端部に多条沈線を施文する。坏底部の段差はわずかに残る。脚部は据部がわずかに内湾する。597は精緻な加飾のある高坏G3c類。直線文と山形文を交互に施文する。直線文は3~4条の少条である。598は同一個体の脚部と考えられるが、接合部がないので別図とした。口縁部と同様の文様が据部に施文する。599・600ともに甕C2類で口縁部がわずかに内湾し、端部に平坦面をもつ。600には口縁部・胴部に打ち欠きが認められる。601は鉢A2類で、頭部から2帯の直線文とヘラによる刺突文が認められる。

時期 VI-3期と考えられる。597・598は多段化した加飾と沈線が少条であることから、VI-3期に後続するVII-1・2期であろう。

土器集中区14（図146・147）

検出状況 土器集中区12の南側に0.6mほど離れて、径1m程度の範囲に土器片が分布する。

遺物出土状況 高坏C2類(604)・D3類(602)・G3a類(603)、壺C類(605)、甕B2類(606)が出土した。

出土遺物 602は高坏D3類とした。坏底部が狭く、脚部が円錐形に広がる。口縁部を肥厚し、内面に多条沈線を加える。また、内面のミガキは羽状である。603は器壁を薄く仕上られ、坏部の深い資料。脚部は屈折が弱いものの、内湾しながら強く開き、口径の方が大きい。604は口縁部を欠損し、外面上には煤痕が付着する。脚部は透孔付近から内湾する。605は胴部に打ち欠きらしき痕跡が認められる。

時期 602はVII-2期、残る資料はVI-3期と考えられる。

土器集中区15（図146）

検出・遺物出土状況 土器集中区13の南側に隣接し、甕(613)が横位で出土した。613周辺に密集していた土器片の範囲とした。

出土遺物 607は器台B1c類で、口縁端部下端を拡張して多条沈線を加える。609も器台B類の脚部であろう。613は出土例の少ない甕E6類の好例。口縁部がわずかに屈折して立ち上がる。端部は丸くおさめられる。608は甕B2類。口縁部がくの字状屈折して立ち上がり、端部に顕著な平坦面を形成する。

時期 VI-3期前後と考えられる。

土器集中区16（図146）

検出・遺物出土状況 土器集中区15の南西側に位置する。甕(610)がまとめて出土したので、その周囲を範囲とした。610のほかに壺(612)、鉢(614)、甕脚部(615)が出土した。

出土遺物 610は甕E3類の資料。胴部外面の粗いハケ目が特徴的で、口縁端部には強いナデを加えるため、下端がやや拡張気味となる。また、口縁部には歪みの可能性もあるが、片口状となる箇所が認められる。612は直線文と刺突文のある壺。無頭壺のようにもみえるが、口頭部を欠損している可能性もあり、判断できない。614は鉢D類の数少ない例。脚台はやや低脚気味である。口縁部に打ち欠きがある。615は打ち欠き及び破断面に二次的な被熱痕のある甕脚部である。

時期 VI-3期前後と考えられる。

土器集中区17（図147）

検出・遺物出土状況 土器集中区16から南東方向に1m程度離れた位置で、壺(616)・甕(617)が集

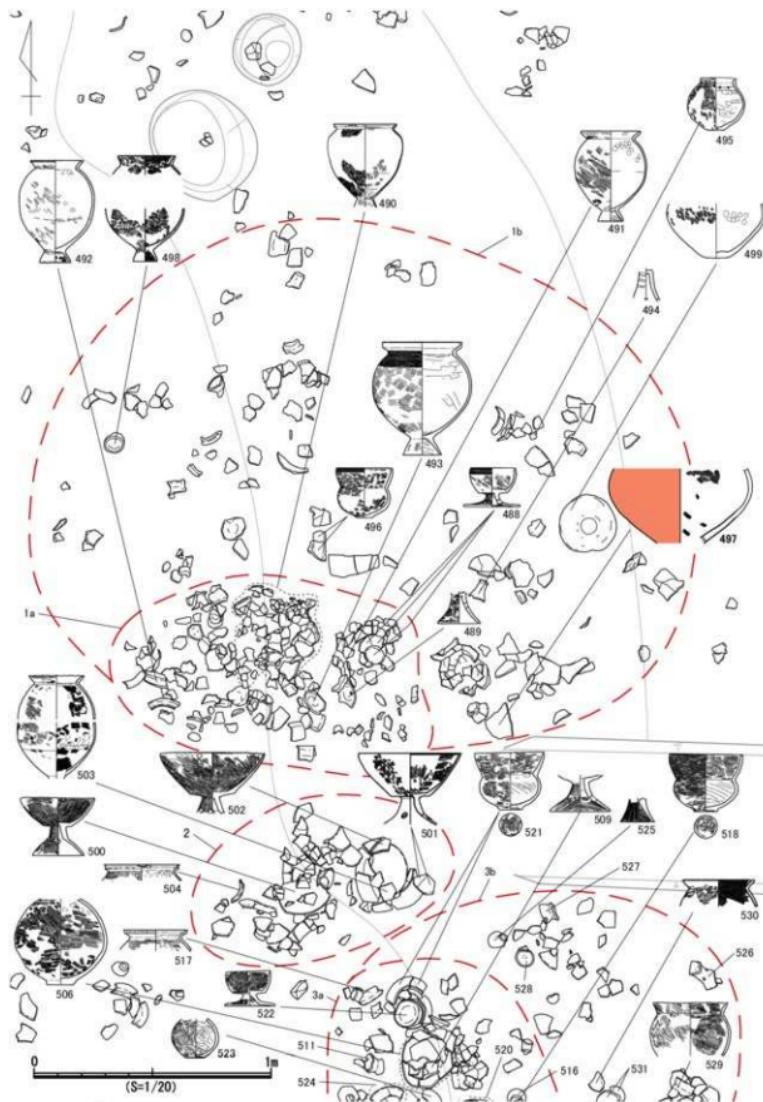


図143 SD0422土器集中区出土状況図（2）

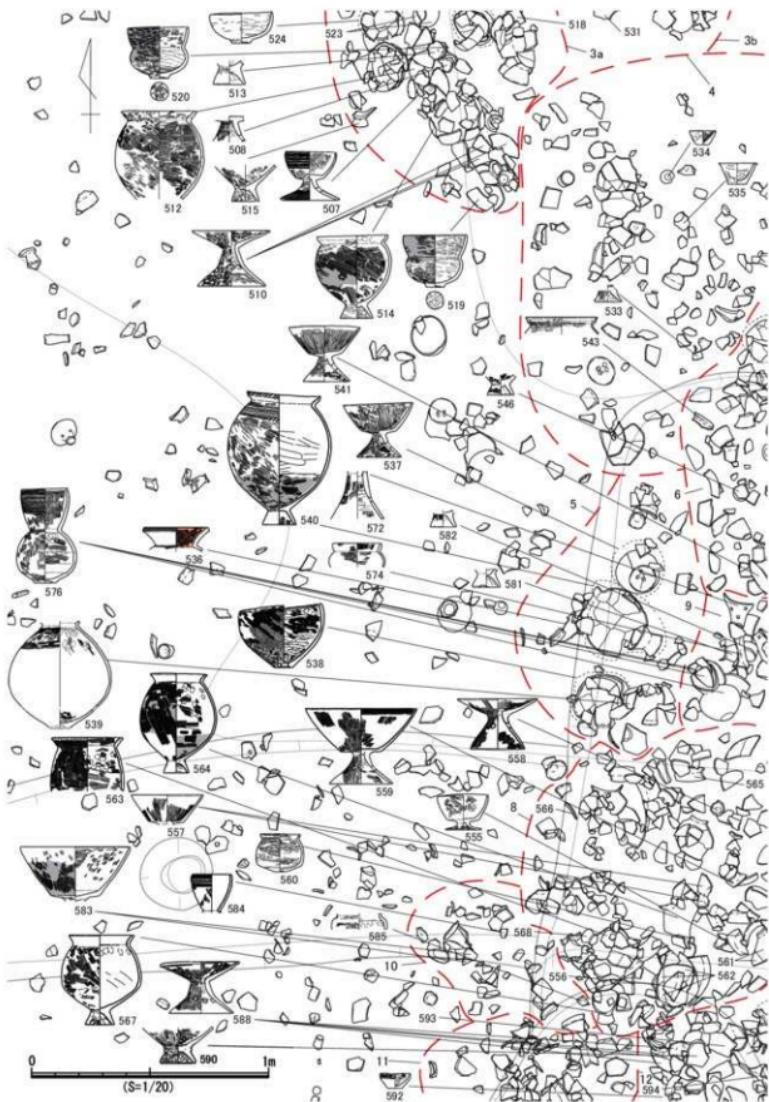


図144 SD0422土器集中区出土状況図（3）

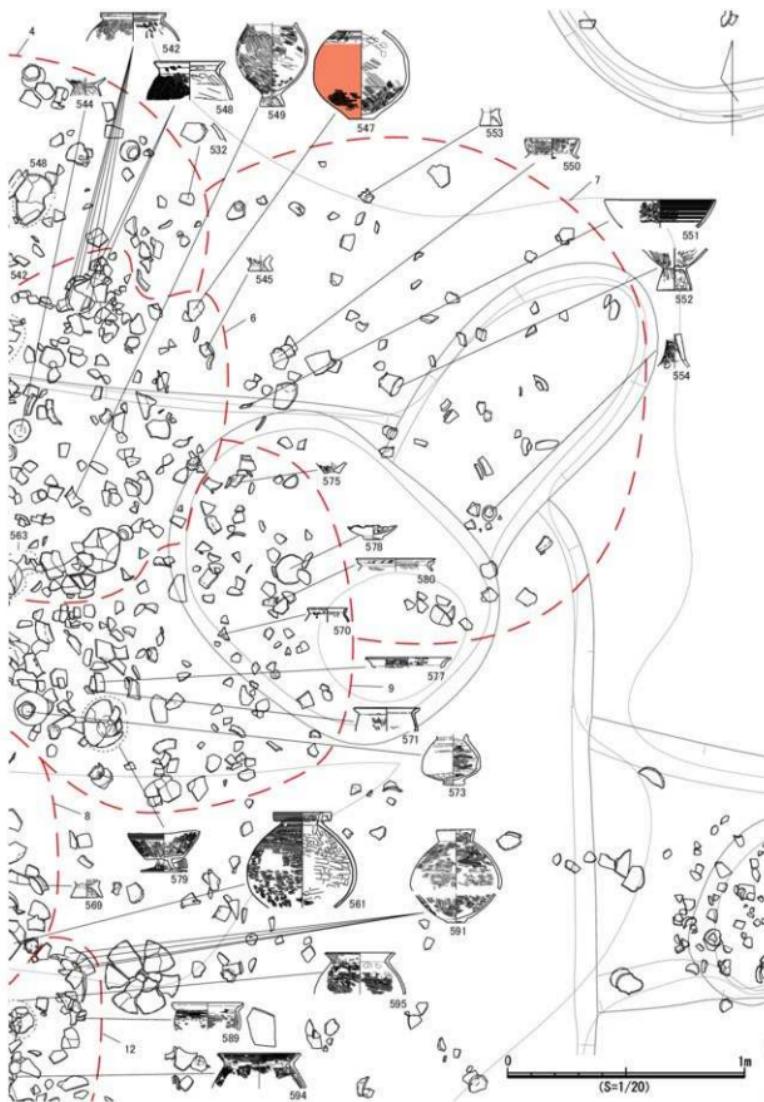


図145 SD0422土器集中区出土状況図（4）

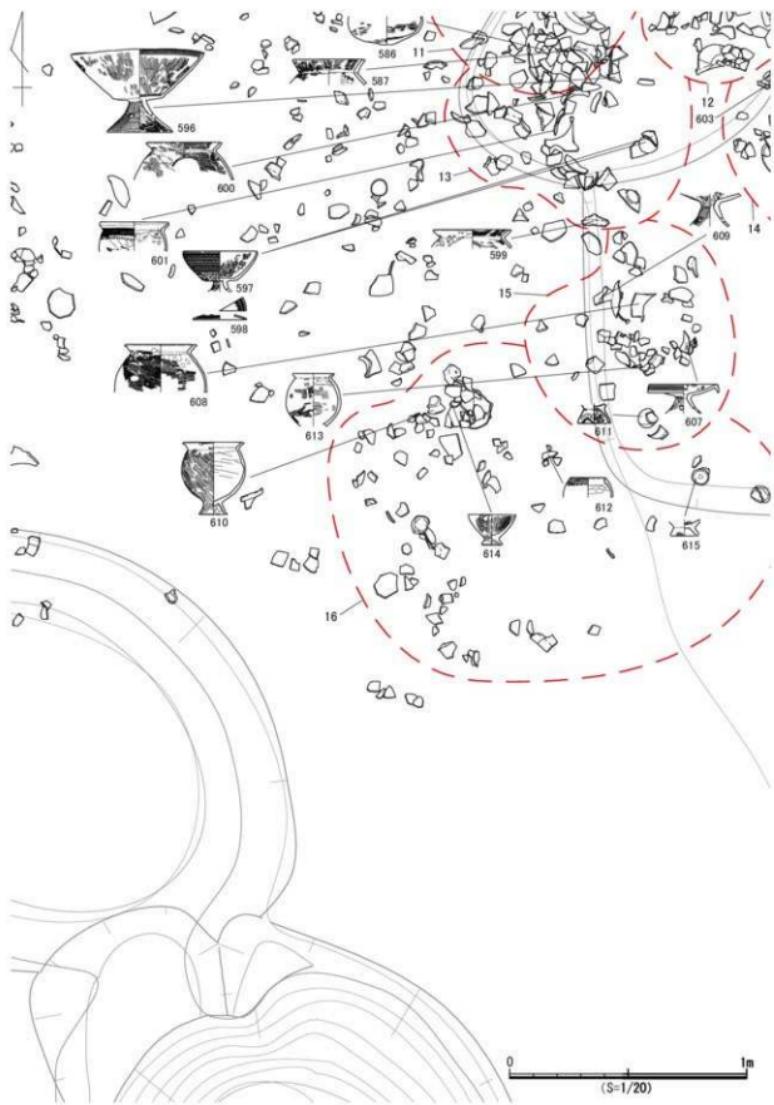


図146 SD0422土器集中区出土状況図（5）

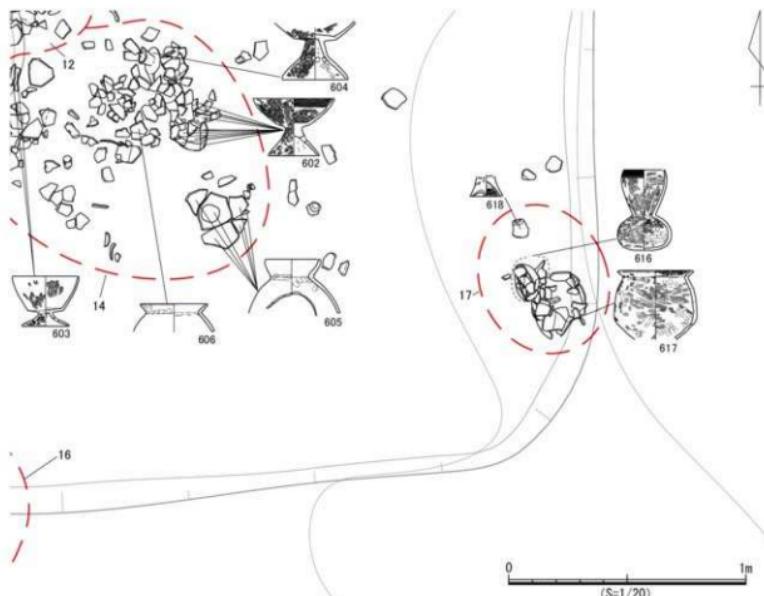


図147 SD0422土器集中区出土状況図（6）

積された状況だったので、これを17群とした。周囲から出土した甕脚部（618）も含めたが、集積されたどうかは不明である。

出土遺物 616は壺H2b類のほぼ完存する良好な資料である。口縁部が長く内湾しながら立ち上がり、多条沈線をもつ。胸部は扁平気味である。壺H2b類としては大型品である。617は甕B3類。口縁端部に強い押圧状のナデ痕跡が認められる。胸部は粗いハケ目があり、胸部下半が強く屈曲する。

時期 VI—3期前後と考えられる。

土器集中区以外の出土遺物 SD0422で出土した大量の土器片のうち、土器集中区以外の図示資料を以下に述べる。先に述べたように、いくつかの出土区ごとに資料を提示し、さらに座標取り上げした土器片を図示したもの（図162・163）をそのなかで先に掲載するようにした。また、前述した通りSD0423・SK01881の掘形に合致する（図162・163）資料も別に提示した。

SD0423に関連する資料は619～633（図164・165）である。619は高環F類、620・622は高环B類の脚部であろう。619は破断面に煤や被熱痕が認められる。623は高環C類の脚部で外面に顕著な煤痕が残る。625・626は基部が直立気味のため、器台A1b類としたが、B1a類との中間的形状である。627・

土器集中区1a

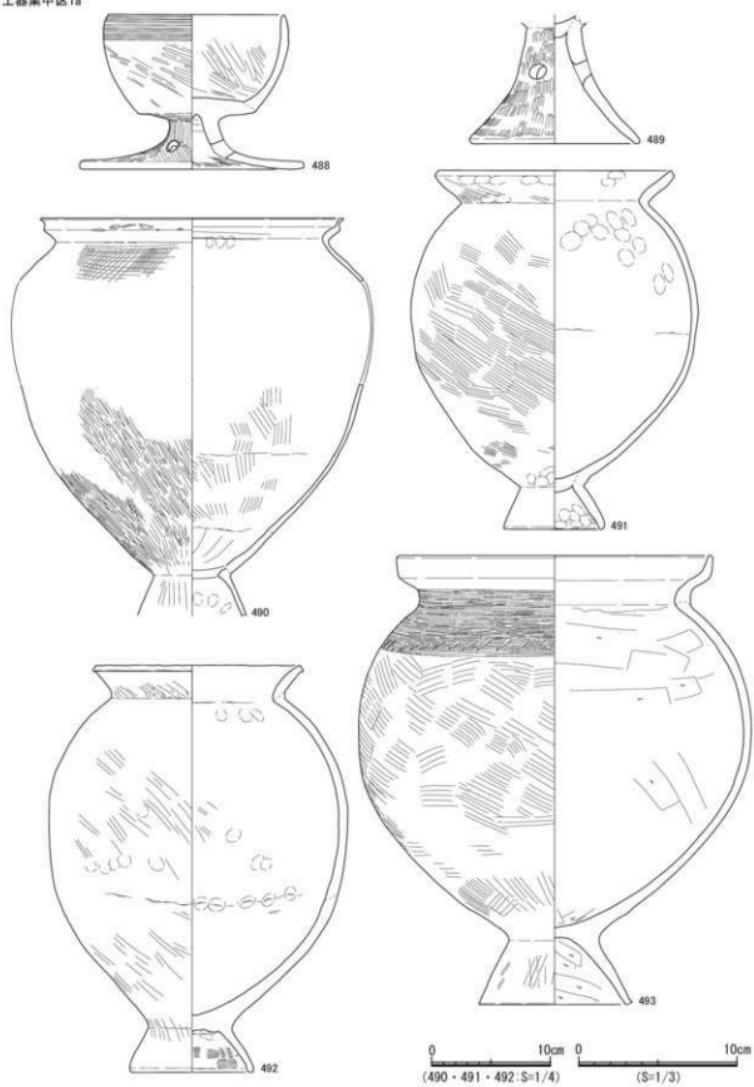


図148 SD0422遺物実測図（1）

土器集中区1b

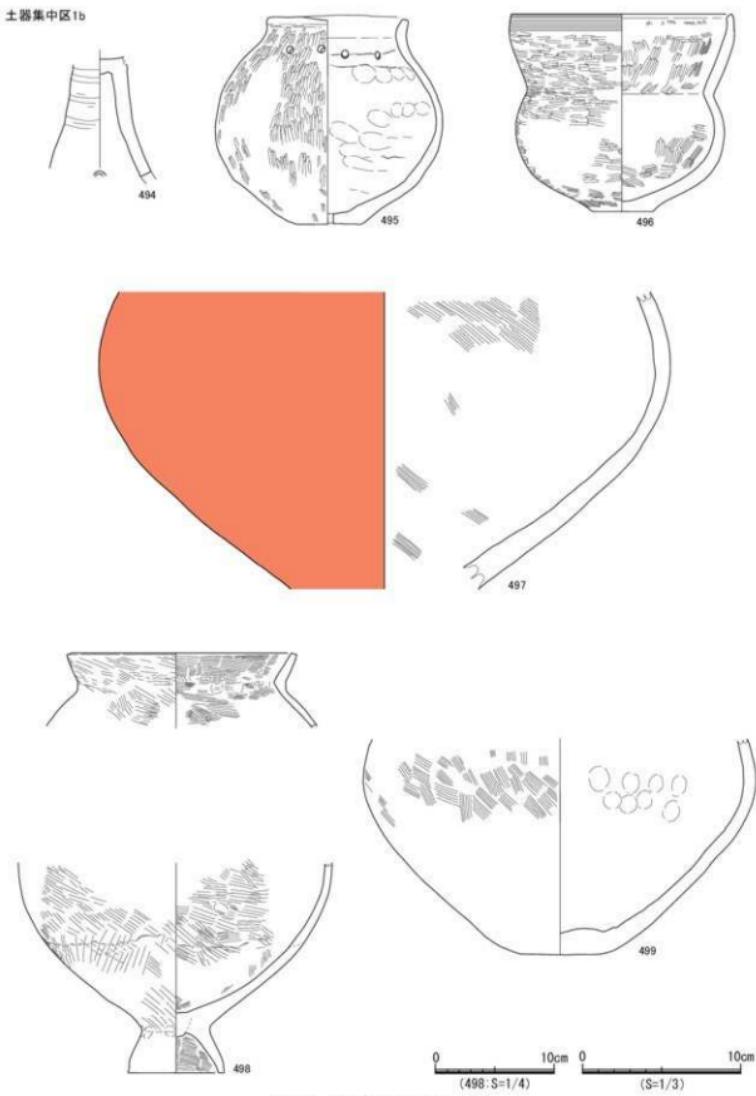


図149 SD0422遺物実測図（2）

628は器台B1a類。621は器台B2類の脚部であろう。624は鉢A3類で使用による摩耗が顕著で、口縁端部の刺突文・頸部以下の文様が観察できないため、その有無は判断できない。630・631は甕A2類。630は口縁部の屈曲が著しく、端部及び内面の強いナデが認められる。629は口縁部が長く外反する甕B4類。端部と頸部に刺突が認められる。632は甕B2類。胴部はやや下膨れである。630・631は甕A類。630の口縁端部には顕著な平坦面が認められる。633は壺A4類。口縁部が屈曲して水平に伸び、下端を大きく拡張する。口縁部には外面に擬回線と円形刺突文、内面に貝による羽状文を2帯とその間に円形刺

土器集中区2

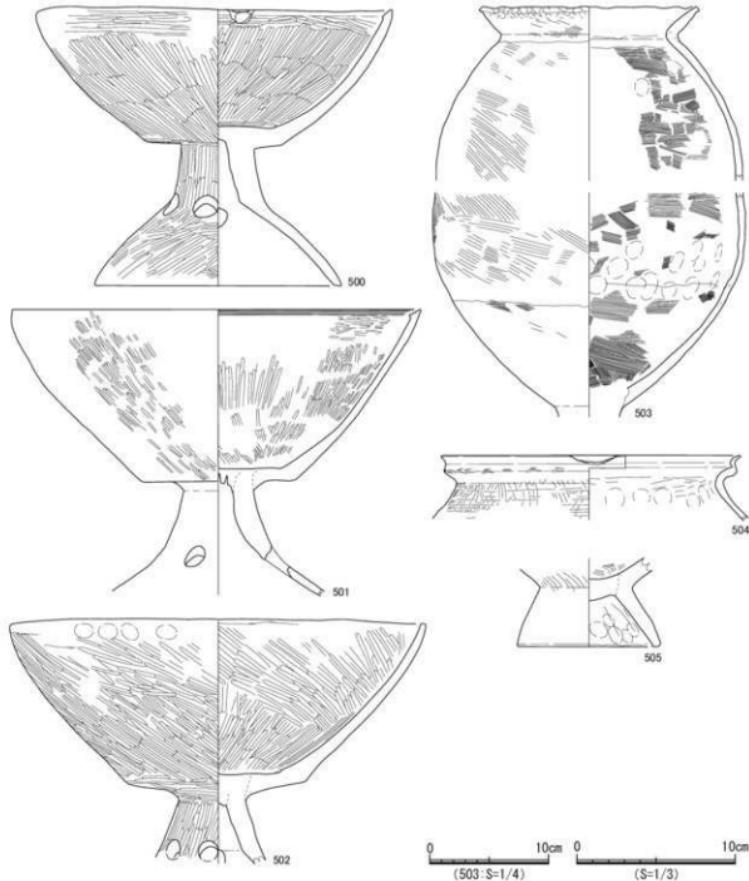


図150 SD0422遺物実測図（3）

土器集中区3a 1/2

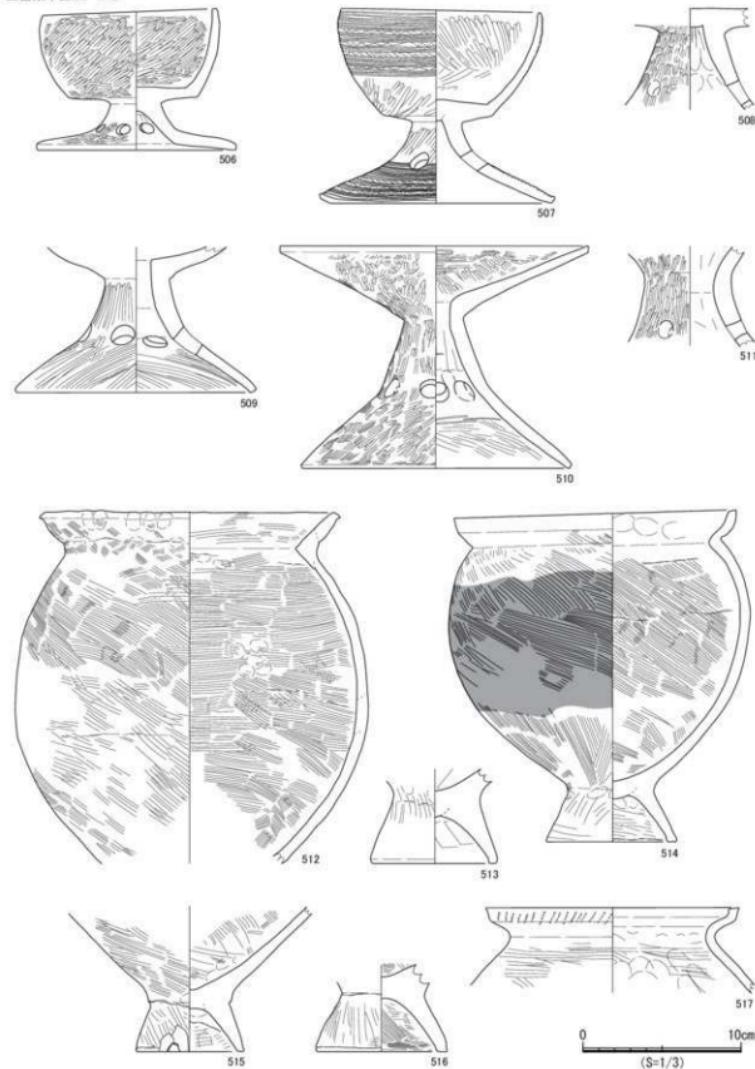
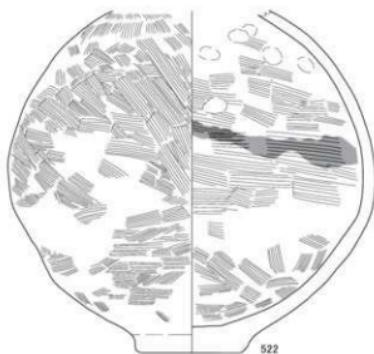
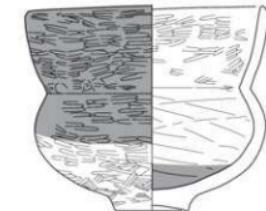
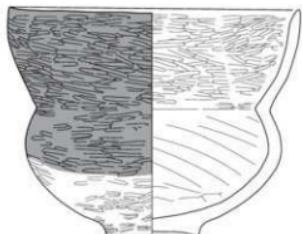
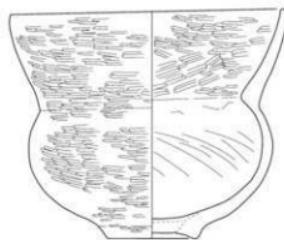
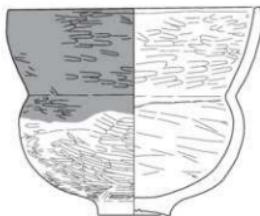


図151 SD0422遺物実測図(4)

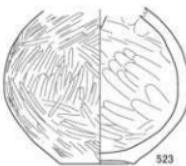
土器集中区3a 2/2



522



521



523



524

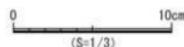
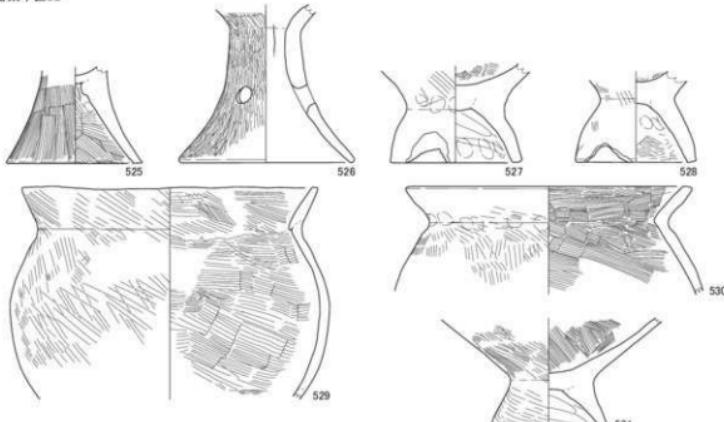


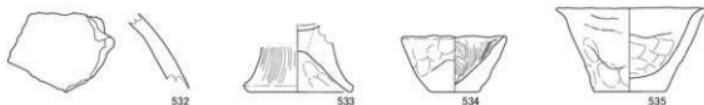
図152 SD0422遺物実測図（5）

突文する。頸部には現状で2条の沈線が認められ、内外面には赤彩がある。これらの資料の時期はおよそ2時期の可能性がある。器台(625~628)からすると主体はV-3~VI-1期と考えられる。もう一方の時期は高坏C類623がVI-3期に類似するので、VI-3期が想定できる。同様の時期の資料として甕(629・632)・壺(633)があげられる。先に述べたV-3~VI-1期の資料はVI-3期を除

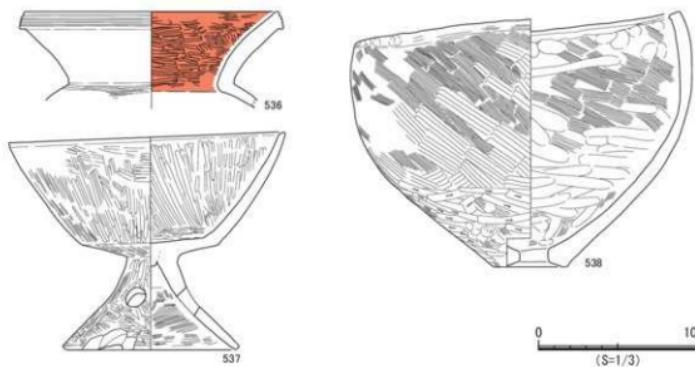
土器集中区3b



土器集中区4



土器集中区5 1/2



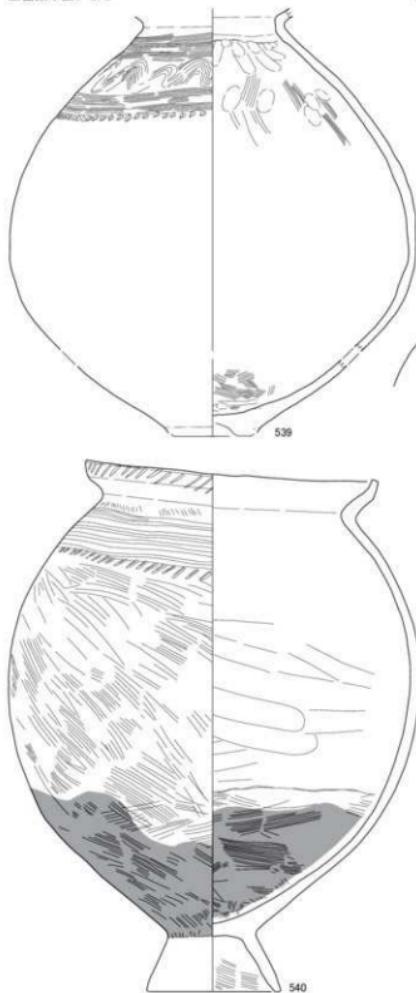
0
(5-1/3) 10cm

図153 SD0422遺物実測図 (6)

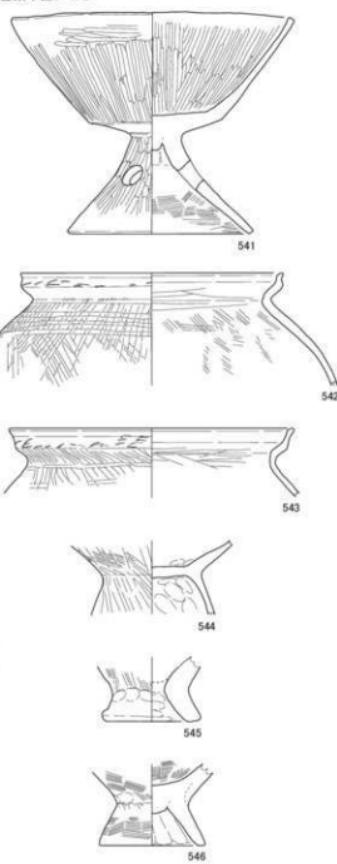
いた資料が相当する。

SK01881に関連する資料は634～640(図166)である。これらの資料は復元率がSK01881に類似し高く、その時期もSK01881出土資料と同一時期のVI-3期である。高坏はC類が多く復元可能な資料が多い。

土器集中区5 2/2



土器集中区6 1/2

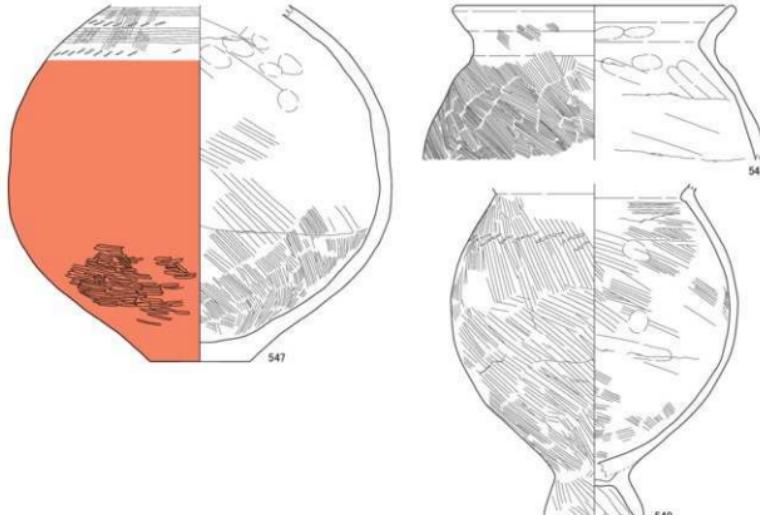


0 10cm 0 10cm
(540: S=1/4) (S=1/3)

図154 SD0422遺物実測図 (7)

634は脚部のみ残存だが、内外面に煤が付着する。635・637は口縁端部に内傾面が認められ、口縁部がやや開くので高环C3b類としたが、脚部の形状は高环C2b類にも類似する。640は口縁端部に打ち欠きがあり、その形状は635に酷似するが、口縁端部に内傾面がないのでC3a類とした。638は坏部が深く、やや低脚の脚部をもつ高环G3a類。639は器台B3類の脚部であろう。641は壺A1類。胴部下半を欠損する。内面には羽状文、外面には直線文と波状文を施す。642は壺C類で胴部に打ち欠きによる円窓が

土器集中区6 2/2



土器集中区7

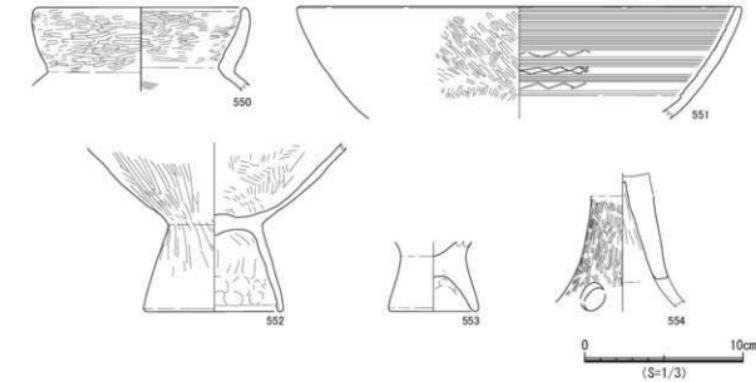


図155 SD0422遺物実測図（8）

土器集中区8 1/2

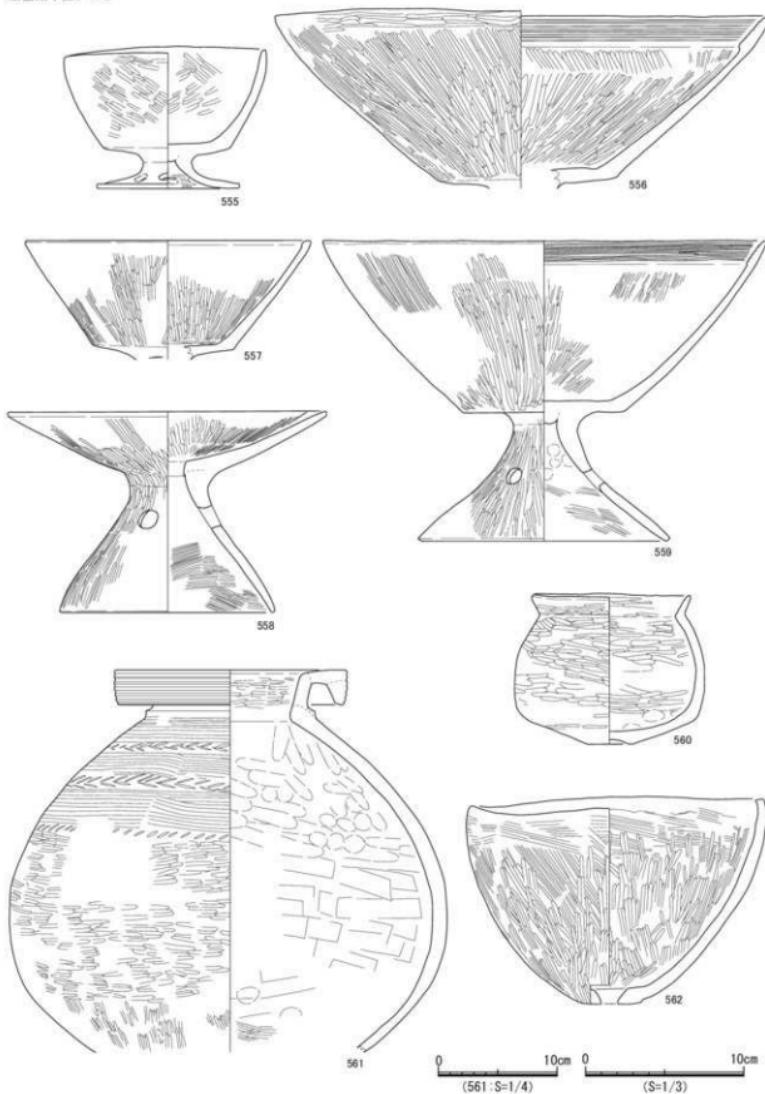


図156 SD0422遺物実測図（9）

土器集中区8 2/2

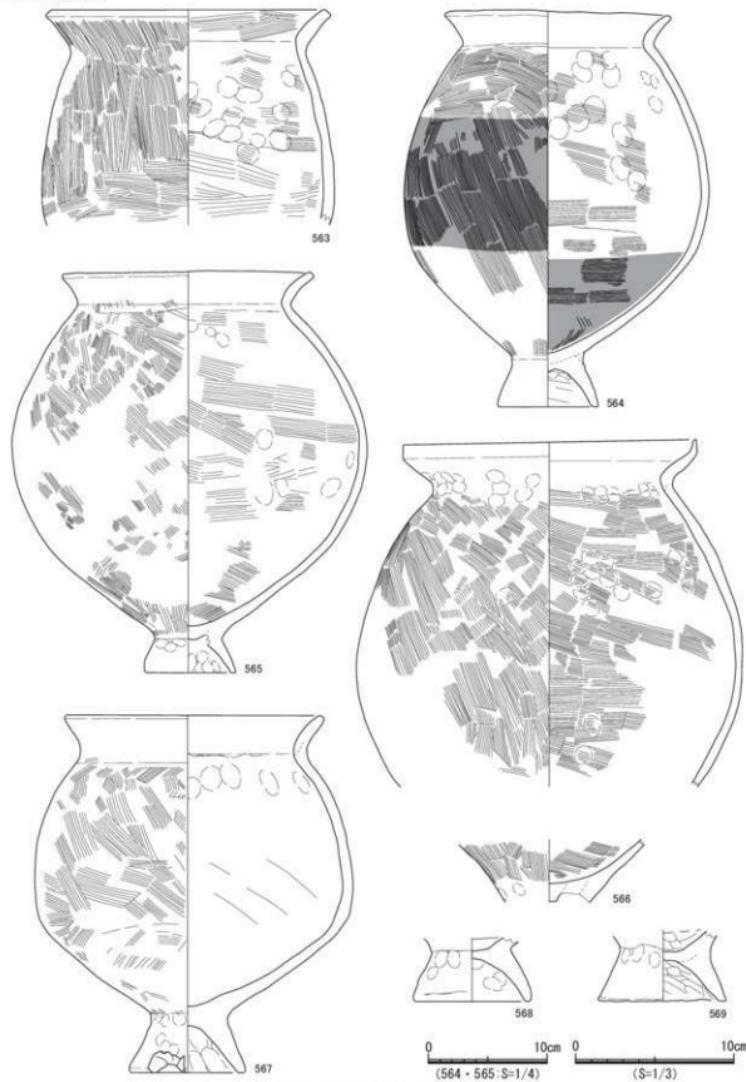
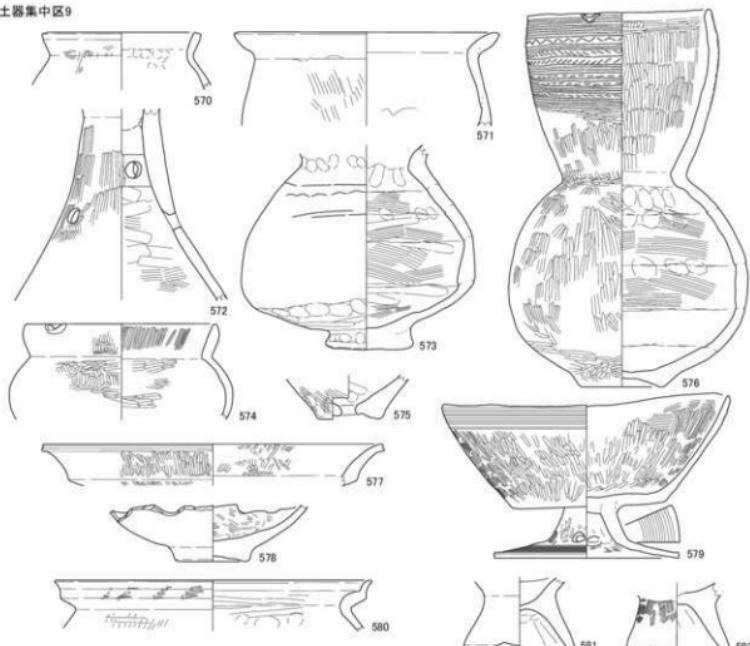
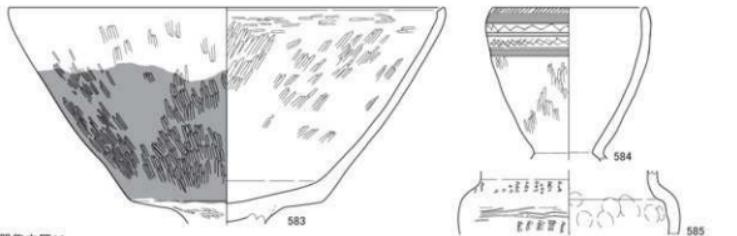


図157 SD0422遺物実測図(10)

土器集中区9



土器集中区10



土器集中区11

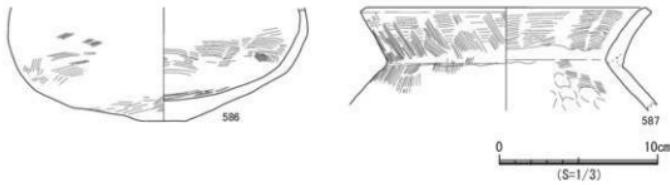


図158 SD0422遺物実測図(11)

あけられる。645は壺B1類。精緻なミガキが認められる。643は口頭部を欠損する壺H類。644は口頭部を欠損する鉢A類。胴部に刺突文が認められる。646は鉢A2類。口縁部の屈曲はやや鈍化し、文様も認められない。壺はA3類（652）・A4類（647）・B2類（649）・B3類（651・655）・B4類（650・653）・S字甕A類のD1b類（648）・E3類（654）・甕脚部（656）がある。甕B類には頭部に粘土の貼付と強いナデ痕跡のある649・650、口縁端部に押圧状の強いナデ痕跡のある651・655が特徴的である。後者は口

土器集中区12

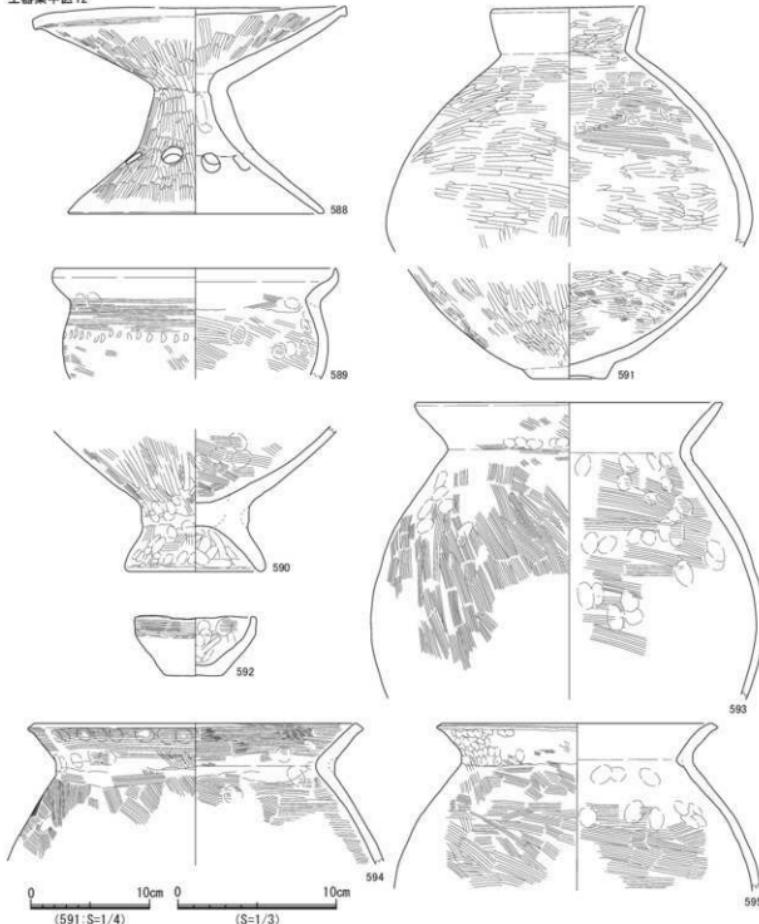
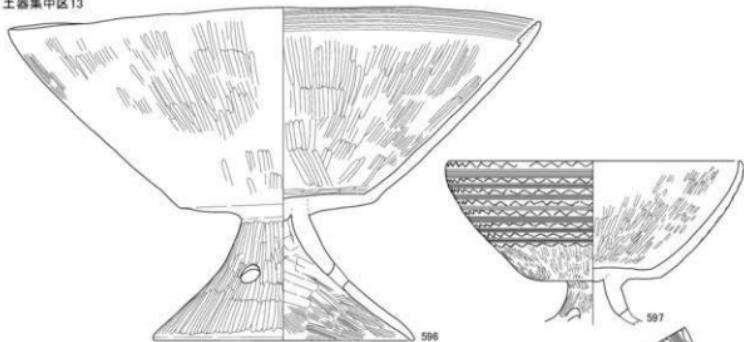


図159 SD0422遺物実測図 (12)

土器集中区13



土器集中区14 1/2

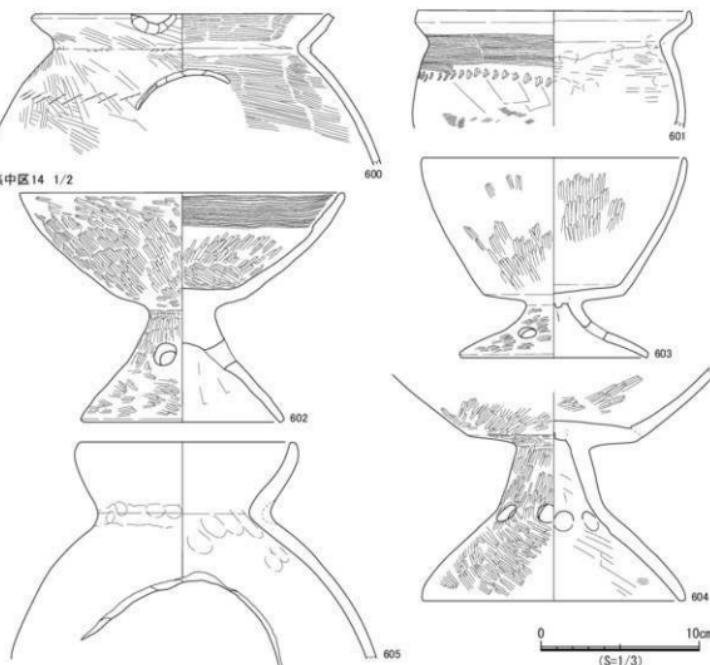
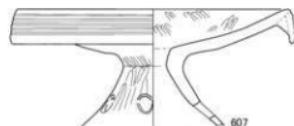
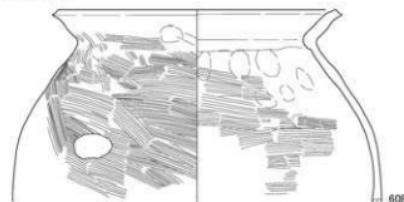


図160 SD0422遺物実測図 (13)

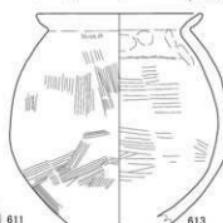
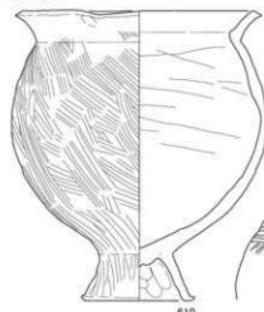
土器集中区14 2/2



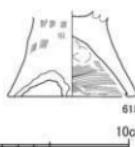
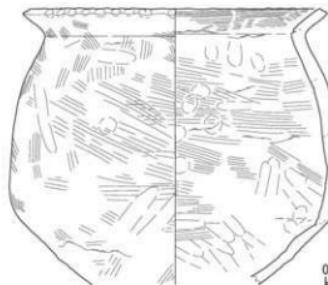
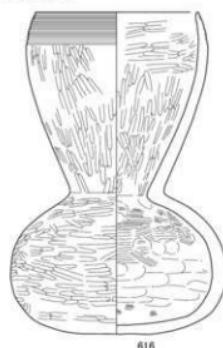
土器集中区15



土器集中区16



土器集中区17



0
(5-1/3)
10cm

図161 SD0422遺物実測図 (14)

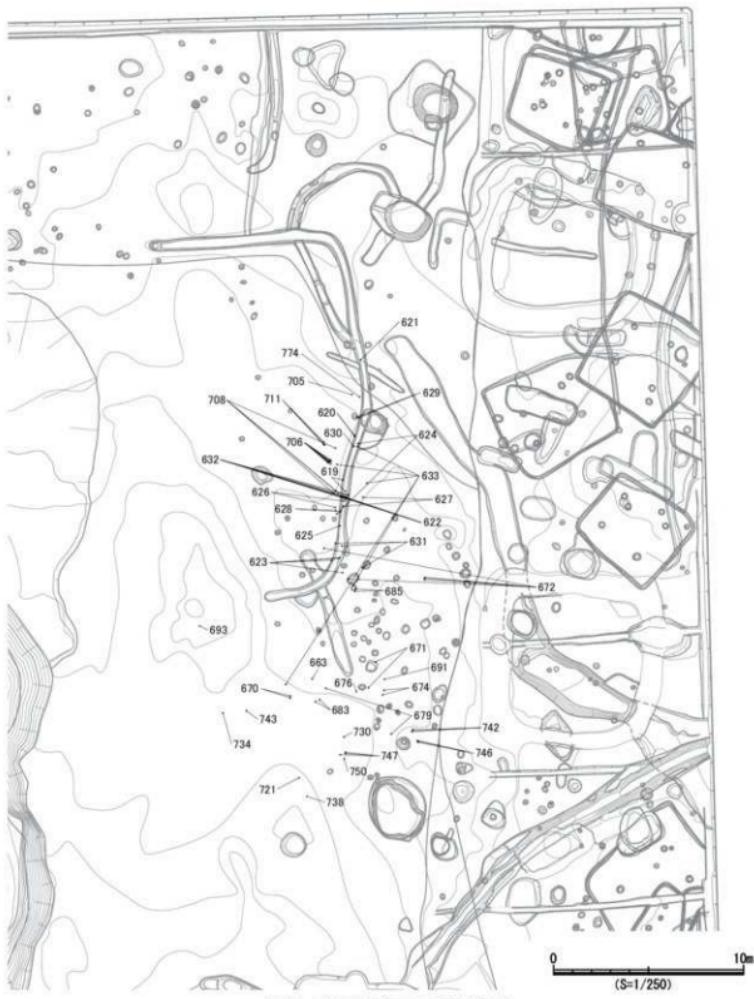


図162 SD0422遺物出土位置図（1）

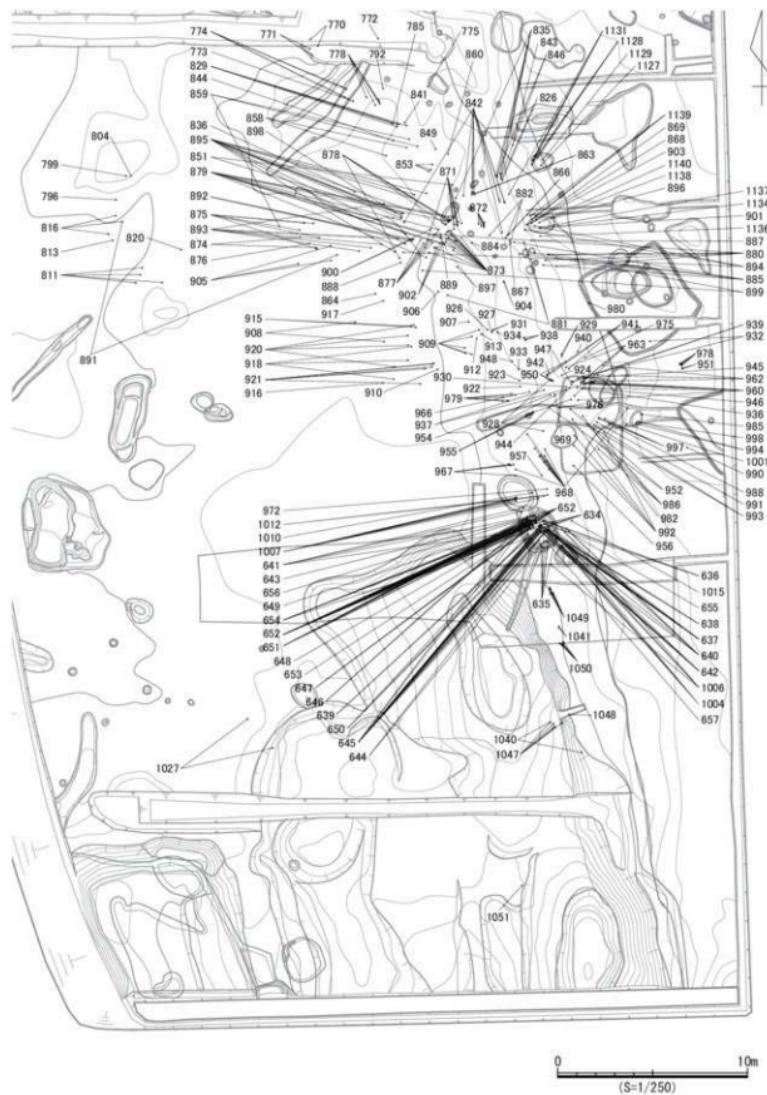


図163 SD0422遺物出土位置図（2）

縁部がやや厚みがあり内面にハケ目が残る。652は器高34.6cmの大型品。口縁部の屈曲はやや鈍化するが、端部にわずかな凹面が残る。657は口縁部を欠損する鉢HもしくはF類で、底部に線刻状の痕跡がある。時期はSK01881と同様、VI—3期である。

HB18～HB20区、HE20区、HC16・HC18・HC19区、HF19・HF20区、IB01区、IE01区（図169～171）出土資料の主体はV期～VII期で一部に縄文時代晩期後半、古代以降の須恵器が認められる。先に述べた土器集中区の北側に土器片の分布が比較的集中する範囲に相当する。

659は高壺C類の脚部。外面に顕著な煤の付着が認められる。658・660は高壺D類で、658は内面に

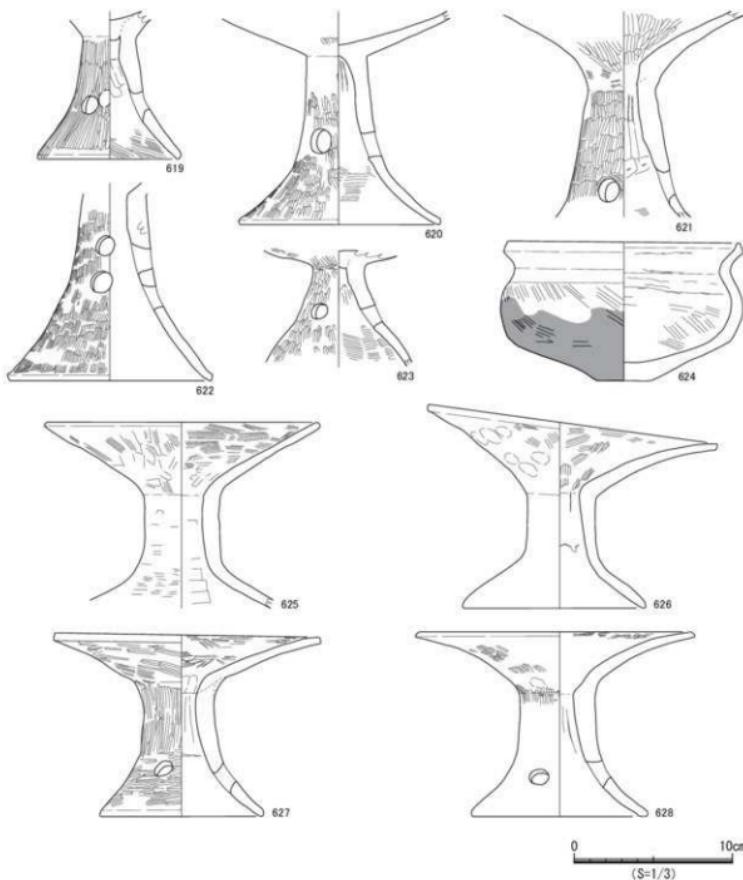


図164 SD0422遺物実測図（15）

多条沈線と連弧文がみられる。VII期の資料であろう。一部、山形となる箇所も認められる。661は高坏G3c類の脚部。多条沈線と山形文による精緻な文様が加飾する。662は器台B類の脚部で、内外面に煤痕があり、破断面には二次的な被熱痕が認められる。壺にはC類(671)、D類(664)、G2類(666)、K類(668)がみられる。664は縦位に配置された3個1組の円形刺突文を内面に施文する少数例である。665は線刻のある壺脚部片。668は脚部に横位の突帶を配置し、縦位の4本1組の棒状浮文が認められる。669は口縁部の屈曲が明瞭な鉢A1類。壺はA類(675・677・682・684)、B1類(672)、B2類(681・685)、B4類(683)、S字堀A類のD1b類(678・679)、E類(667・670・673・674・676・686・690)がみられる。672はほぼ器形が判明する資料。口縁端部に刺突文のほかに打ち欠きが認められる。V期の資料である。670は口縁部が短くやや厚みのある資料で、少数例である。685は脚部下半を欠損するが、大型品の資料。686はE3類のほぼ完存する資料。粗いハケ目が特徴的で、690とハケ目が類似する。688は口縁端部が外反する手捏ね土器。691・692は繩文時代晩期後半の資料。いずれもやや短く外反する口縁部の直下に横長の押し引きのある突帶がある。689は8世紀代の須恵器長頸瓶の脚部であろう。693は高台が口縁部立ち上がりちかくに位置する8世紀代の須恵器有台坏身。高台はやや外側に広がる。端部は凹面を呈す。底部の高台付近及び口縁部に煤が付着し、端部には打ち欠きが認められる。

HC20区、HD17・19・20区、IC01区(図172・173)出土資料の主体はVI～VII期の資料で、少数の繩文時代晩期後半、IV期、V期、古代以降の須恵器が認められる。先に述べたHB18～HB20区などの比較的

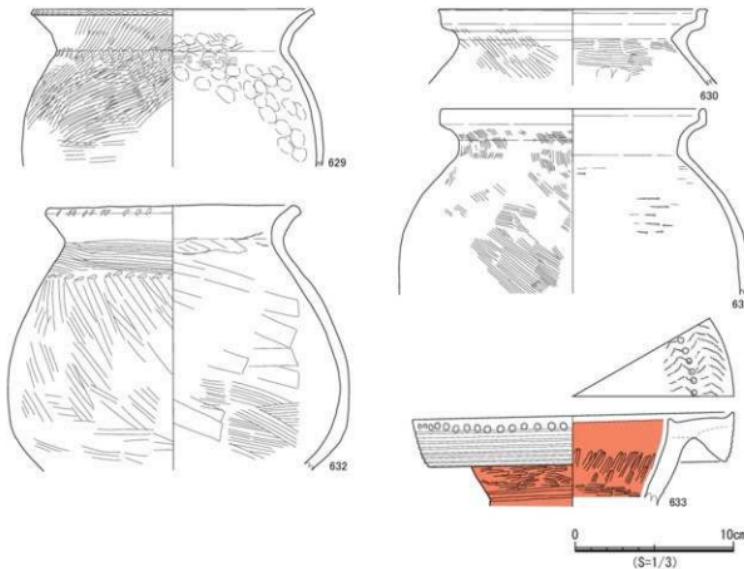


図165 SD0422遺物実測図(16)

多くの土器片が出土した範囲の周縁部出土資料を図示した。

694は高壺B3b類。V期後半～VI期前半の資料であろう。695は壺B2c類だが、口縁部の屈曲は痕跡的となり、内面に3個1組の円形刺突文をもつ。類似する資料として664・702がある。702は口縁部の屈曲がなく、水平方向へ拡張している。内面に線刻が確認できる。壺A類には696～700がある。A4類の696は内面を羽状文と円形刺突文で加飾する。同様の文様は700でも認められる。羽状文は698・699でも認められるが、それぞれA1a類・A3類に相当する。697はA1類で内面に刺突文と沈線で施文する。

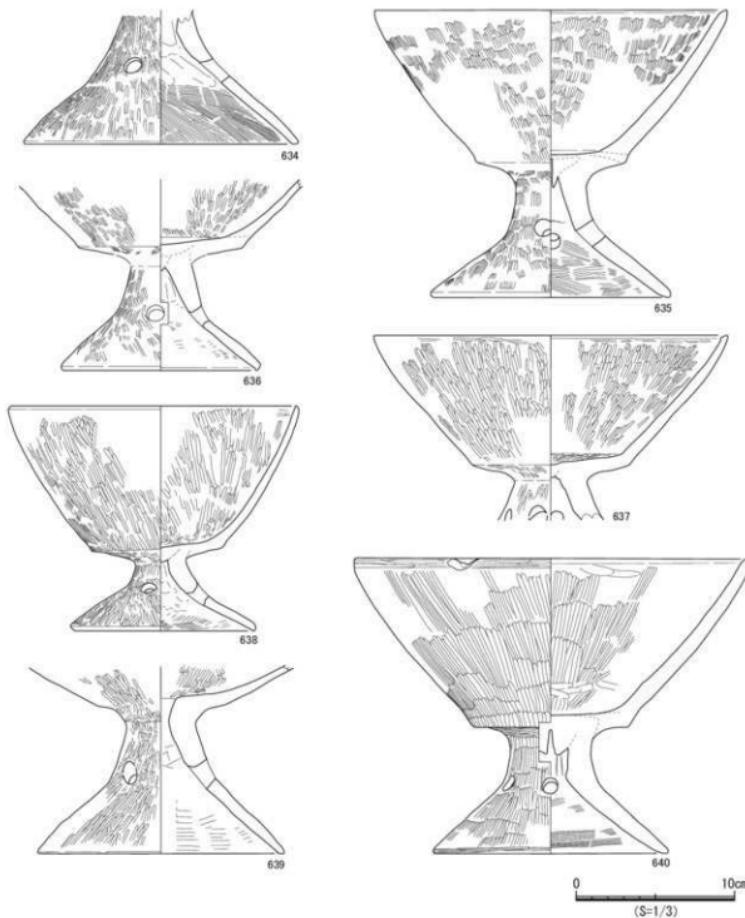


図166 SD0422遺物実測図（17）

703は口頭部のみが遺存する壺C類。705はほぼ完存する壺H3類。底部付近の指頭圧痕が顕著である。堯はA1類(711)、A2類(706)、B2類(632)、S字堀C類のD3類(710)、E6類(712)がみられる。他にIV期堀B類(709)がある。709は棒状浮文が貼付される例で、本遺跡出土例としては少数例である。715は底部を欠損するが、形状は鉢G類に類似する。粗いハケ目が特徴的で、これまでハケ目を残す鉢G類を確認していないので、類別に困難な資料である。714は素文突帯のある縄文時代晩期後半の資料。

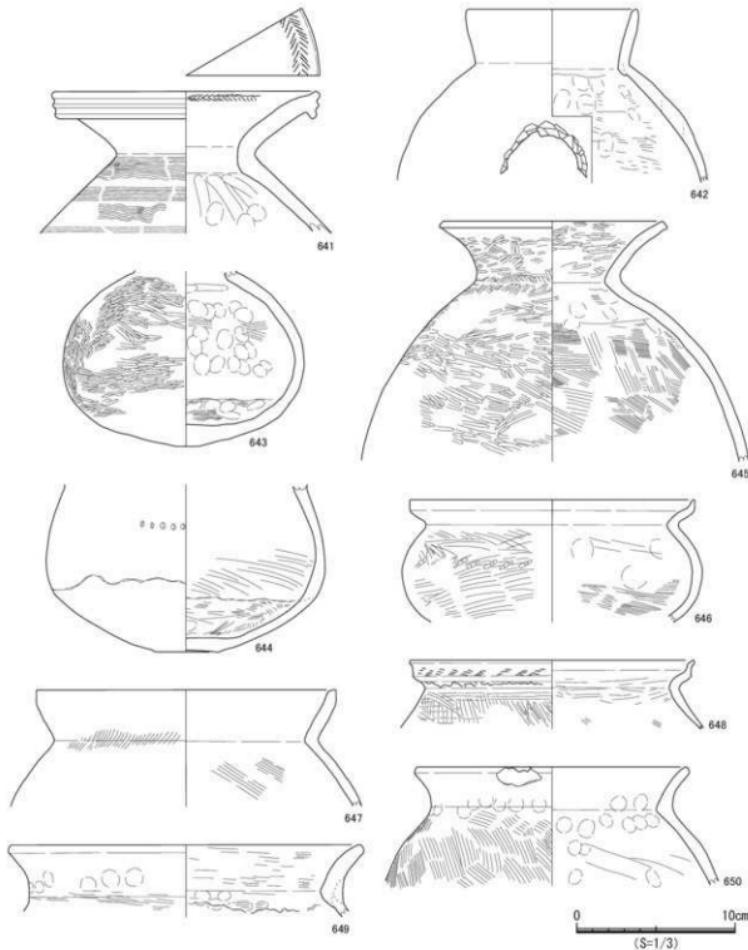


図167 SD0422遺物実測図 (18)

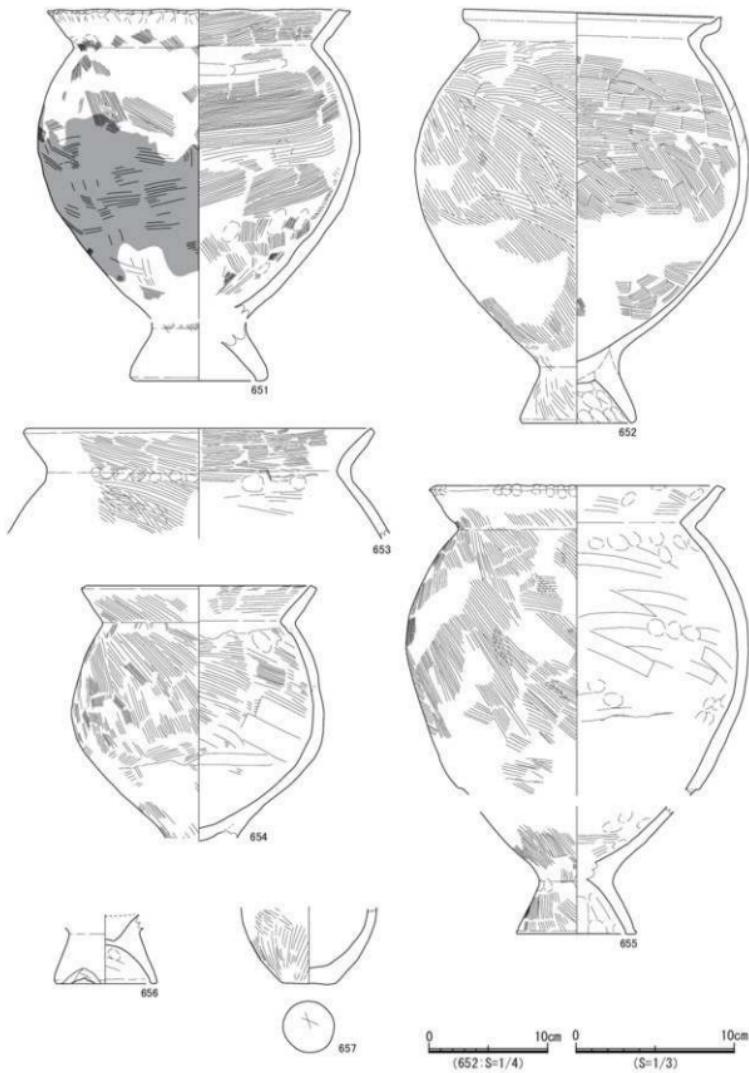


図168 SD0422遺物実測図 (19)

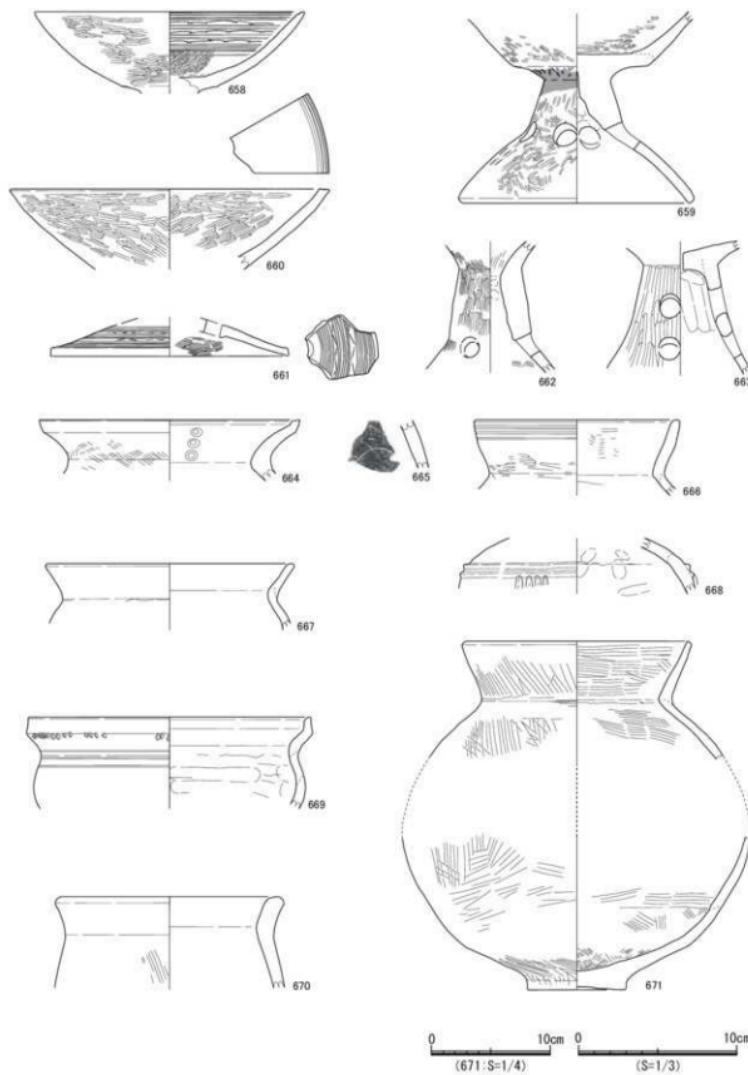


図169 SD0422遺物実測図 (20)

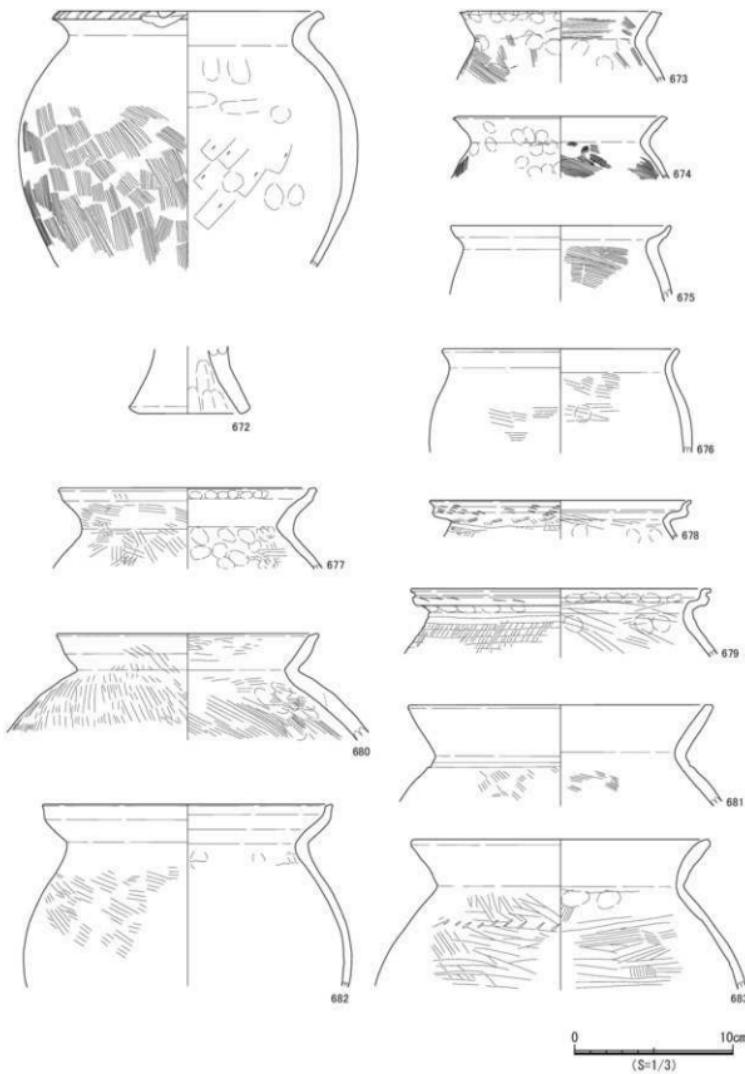


図170 SD0422遺物実測図 (21)

変容壺の頸部片であろう。713は須恵器の把手であろう。

HE17～HE19区、HG17・HG19・HG20区、HF16・HF17、IG01区（図174～177）出土資料は先に述べたHB18～HB20区の比較的多く土器片が出土した範囲の周縁部出土資料を図示した。なかでも、IG01区からの出土が多い。V～VII期の資料が多く占めるが、I期、IV期及び中世以降の資料が少數認められた。なかでも716は高環B1類。口縁部が直立して円錐状に脚部が開き、脚裾部が強く外反する。V期前半の資料である。717は口縁部が短く外反する高環B3b類。V期後半～VI期前半の資料であろう。

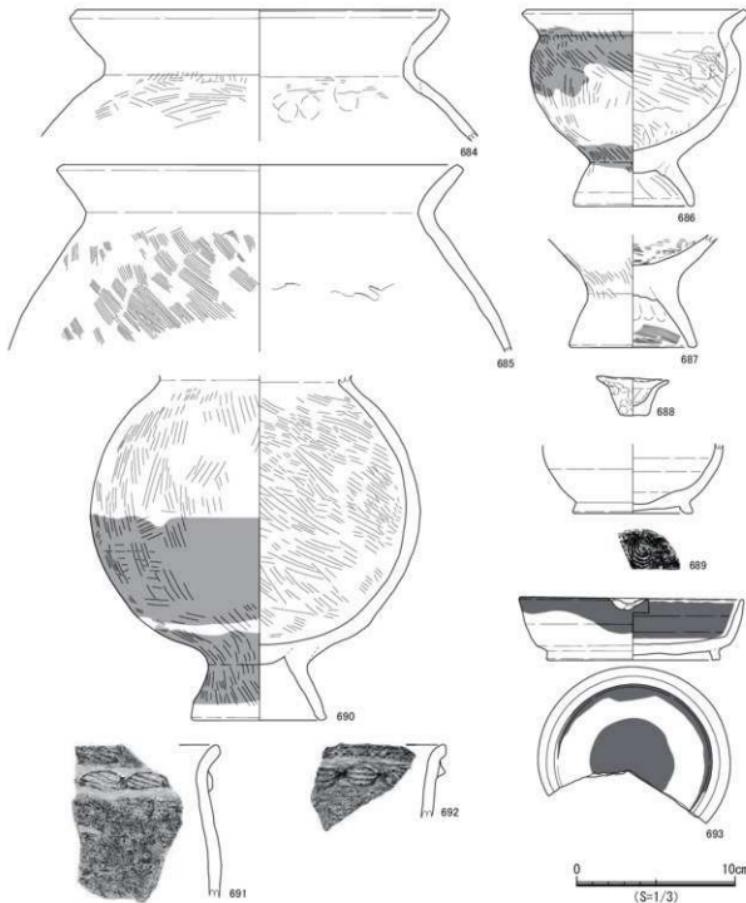


図171 SD0422遺物実測図 (22)

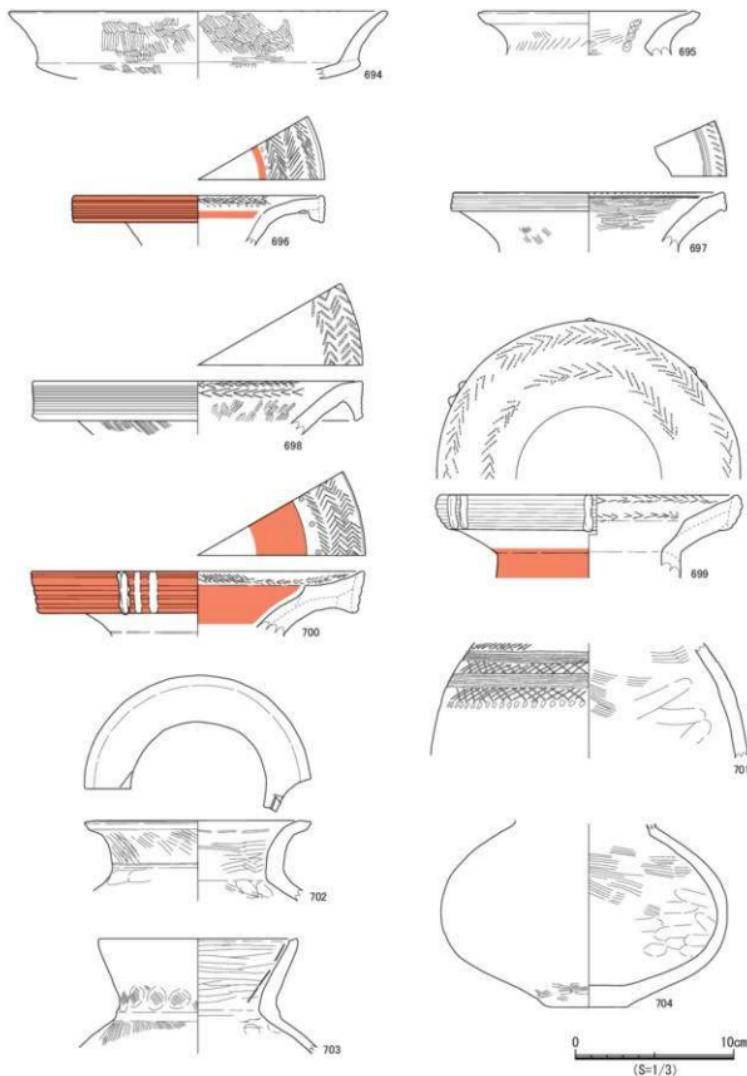


図172 SD0422遺物実測図 (23)

718～721は高環C類で、718・720は内面に多条沈線がみられる。VI期後半～VII期前半の資料であろう。722・724・725はVII期高環G3e類で外面を多条沈線と山形文などで加飾する。722は刺突文が対向し、羽状文的である。723・726は高環D類で内面に文様が認められる。723は多条沈線間に羽状文と対向山形文で加飾する。726の山形文は弧状化しており、連弧文を模倣した資料であろう。いずれもVII期後半の資料である。727は壺G2b類の口頭部。VI期後半～VII期前半の資料であろう。728・729は線

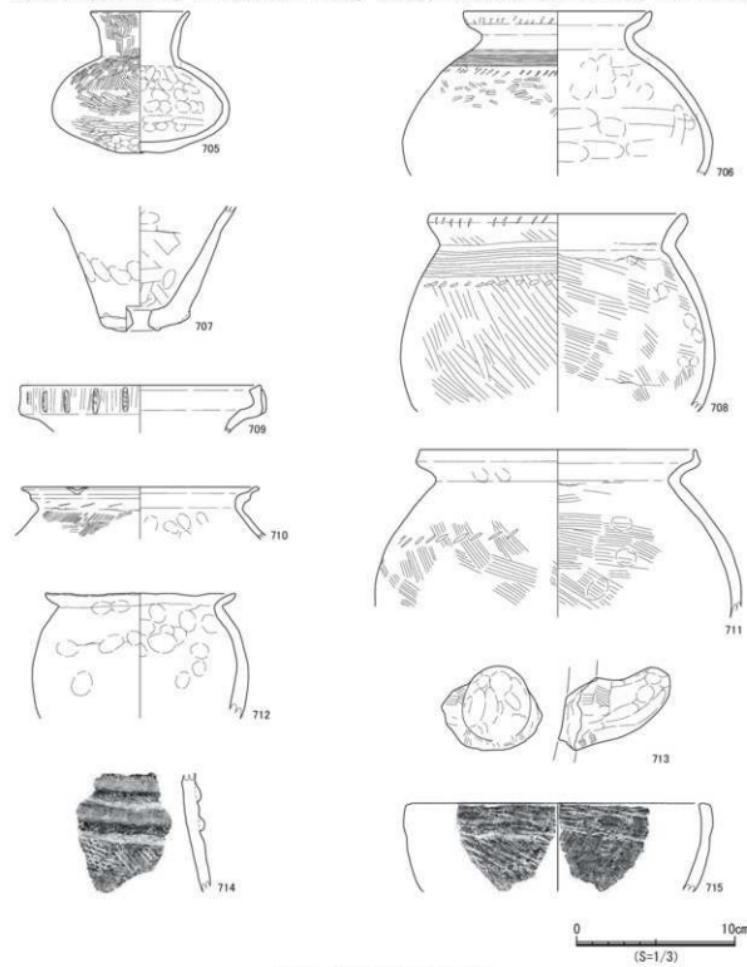


図173 SD0422遺物実測図 (24)

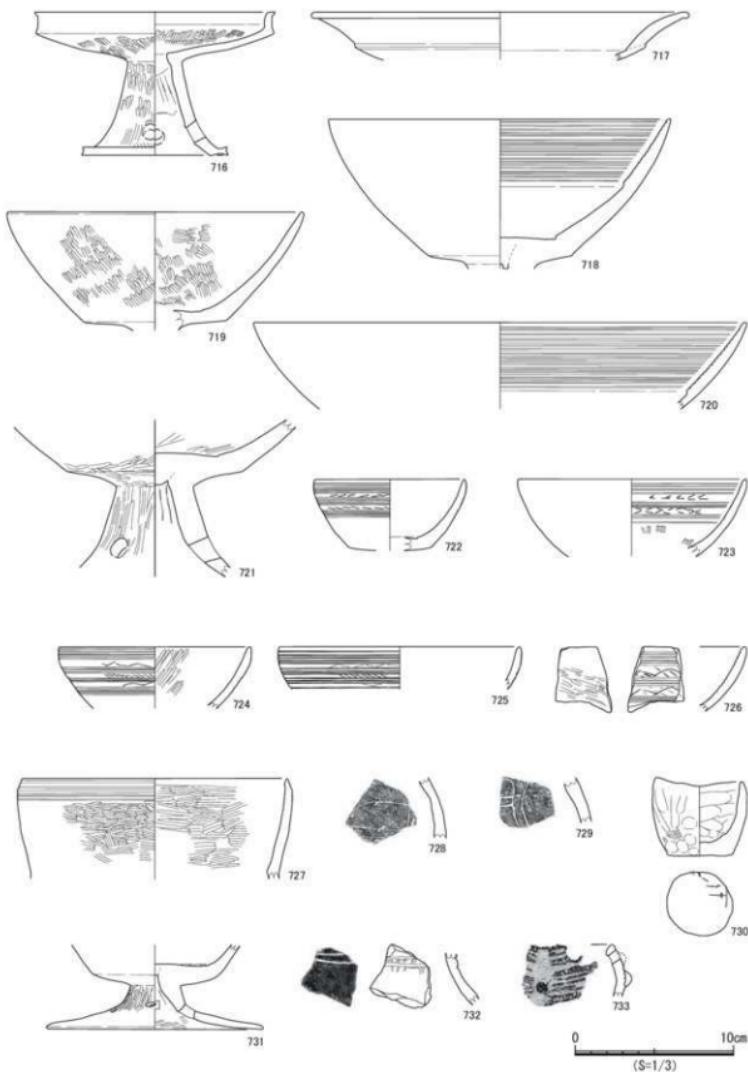


図174 SD0422遺物実測図 (25)

刻のある壺胴部片。732はI期の壺頭部、733はI期の沈線文系土器。733は現状で認められる円形浮文のほかに、その上部にも円形浮文があったが剥落によって失われている。734は壺F2類の好例。口縁部が短く直立し、壺H類に類似する扁平な胴部をもつ。735～739・741・743は壺A類でVI～VII期の資料。737は壺A1類で胴部に直線文3帯を施文し、その間に幅の短い刺突文を施す。幅の短い刺突文は壺の施文としては少数例で、743の刺突文と類似する。735はA4類、736・738はA3類。735は口縁部が強く屈曲し、内面に羽状文がみられる。739は胴部上半に直線文・波状文・直線文を施文し、その下部に円形浮文を貼付する。685は直線文の上部に山形文がわずかに認められ、直線文以下は赤彩される。また、底部付近には強い被熱痕が認められる。743は下膨れの胴部をもち、上半に直線文のほかに羽状文・山形文・円形刺突文を加え多様な文様がみとめられる例である。740は二重口縁壺で壺E類。口縁部外面の屈曲部に2個1組の円形浮文、内面には羽状文がみられ、赤彩が認められる。鉢は744・745ともA2類である。745は加飾がなく、口縁部がやや長頸化する。甕はA1類(746)・A2類(747)・A3類(751)、B3類(749)・B4類(757)、C1類(753)、S字甕A類のD1a類(748)など多様である。V期の746を除いてVI～VII期の資料であろう。750はIV期甕A類、752はIV期甕B類で口縁部が直立し、沈線のある資料。これまでの資料では類例のない資料である。758は常滑の甕に類似するが、口縁端部上方の拡張傾向や胎土が常滑産とは異なる。時期は中世と考えられる。

HII19・HII20区、HII19区、HI01区、II01区(図178)出土資料は、先に述べたHB18～HB20区などの比較的多く土器片が出土した範囲の主に南側にあたる範囲から出土した資料を示した。

759・761は高坪C類。759の内面は多条沈線間を山形文で充填する例で、出土数は少ない。762・763・768は壺A類。762は口縁端部に円形刺突文、内面に羽状文・円形突文をもつ。768は口縁部が大きく開き、胴部上半に直線文と波状文を交互に施文する。口縁部と胴部下半に赤彩が認められる。760は壺G2類。764は底部に穿孔のある鉢B類。765～767は手捏ね土器である。769は中世の青磁碗C2類。768はV期後半、769が中世の資料である以外はVI～VII期前半の資料であろう。

HJ20区、IJ01区(図179～182)出土資料は先に述べたHB18～HB20区などの比較的多く土器片が出土した範囲の南側にあたり、SD0423及びその延長にあるSD0434・SD0435と重複する出土区であるが、VI～I期としたSD0433とは時期差がある。

線刻のある手焙り形土器が2点出土した(770・771)。770は中央を除いた覆部の大半と胴部の一部が遺存する。覆部の周辺部及び胴部は多条沈線と山形文・連弧文を施文する。覆部は前面を3帯の多条沈線を施文し、その間を山形文で充填する。3帯目下段には連弧文を施文する。背面の多条沈線1帯目は屈曲部の下部、2帯目は屈曲部の上部に施文し、その間の屈曲部に刺突文を充填する。2帯目と3帯目の多条沈線間には連弧文、3帯目の上部には山形文を施文する。文様の先後関係から山形文・連弧文施文の後に多条沈線を施文したと考えられる。覆部中央にはバチ形文様に類似する文様がみられるが、肝心の中央部を欠損しているため詳細は不明である。後述する771と同様の文様に類似する文様の可能性もある。胴部は最大径付近に突起があり、その上部に多条沈線と山形文がみられる。771は覆部のみが遺存する資料。前面に多条沈線と連弧文を施文する。中央には文様バチ形・鍵形・山形の各種を施文するが、一部書き損じもしくは3種の文様を描画する以前に描画した可能性のある弱々しい線が観察できる。内面には煤痕が認められる。その他の資料には壺が多くみられる。772は壺D3類。774は壺A1類の大型品。口縁端部には羽状文がみられるが、その他の部位には加飾が認

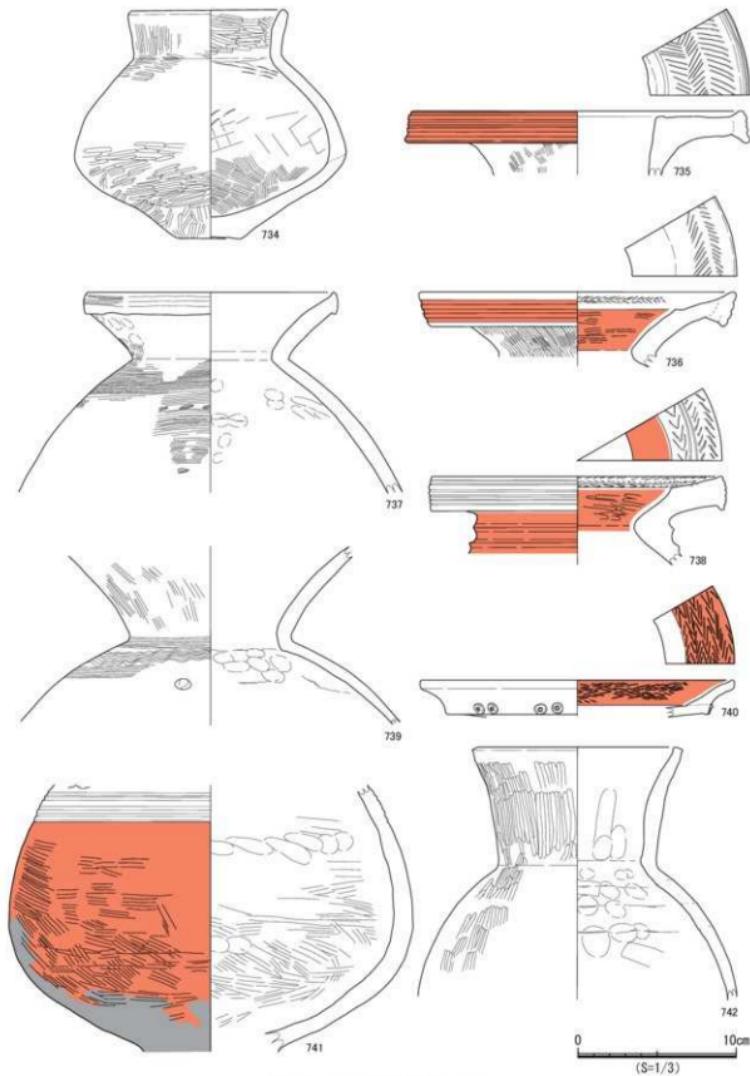


図175 SD0422遺物実測図 (26)

められない。776は高壺G3類の脚部で、脚裾部の屈曲がやや弱い資料である。777は高壺C2類の脚部で、裾部に打ち欠きがある。779は器台B3類でやや脚裾部の内湾が弱い。778は甕B1類の好例。V期の資料である。口縁部がやや長く外反する。端部は丸みをおび、刺突文をもつ。786はⅧ～IX期柳ヶ坪型壺。787は加飾の著しい壺A4類。口縁部内面には羽状文と円形刺突文を施し、口縁他端部には3個1組の棒状浮文を加える。胴部上半には直線文と羽状文を交互に、最下段には円形刺突文を施す

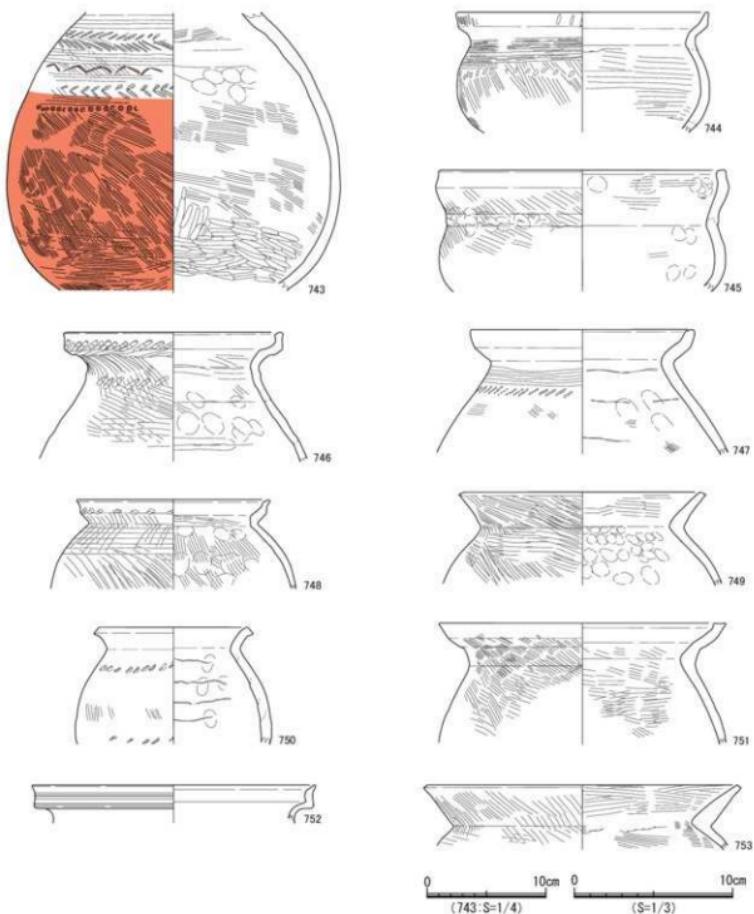


図176 SD0422遺物実測図 (27)

る。788は口縁部を欠損するが、胴部上半の文様構成が787と類似する。下段には円形刺突文がみられるが、787よりも単位・間隔とも大きい。さらにその下にも羽状文を加えている。795はVII期壺A5類。胴部に山形文と直線文があり、最大径付近に突帯が位置する。789は甕A2類、790はS字甕A類、791はS字甕B類。775はIV期甕A類。IV期にあたる資料の出土は一部にとどまる。また、V期の資料(778)、VIII～IX期の資料(786)もIV期資料と同様に出土例はわずかである。主体となる時期はVI期後半～VII期前半でと考えられ、線刻のある手縁り形土器770・771も同列の時期と考えられる。

HJ17・HJ19区、HK18、HL17・HL18区、HM18区(図183)出土資料は、先に述べたHB18～HB20区などの比較的多く土器片が出土した範囲の南西側から縄文時代晚期後半～I期の土器片が比較的多く出土したNR001の東側にあたり、縄文時代晚期後半～I期の資料が比較的多く出土した。

796は縄文時代晚期後半の資料で変容壺の肩部にあたる。低い突帯上にやや横長の貝による押し引きが認められる。797～802はI期壺の頸部片。削り出し沈線が數本認められる。804もI期壺頸部片で、細片のため判断が難しいが、その沈線は半截竹管による可能性が高い。803はI期の甕。やや肥厚した口縁部をもち、半截竹管による沈線が認められる。805～807は線刻のある壺頸部片。807はIV期壺の胎土に類似するので、IV期の可能性が高い。その場合、線刻ではなく何かの文様の一部かもしれない。810・813は高坪G3c類。813は口縁部全面に精緻な加飾がある。

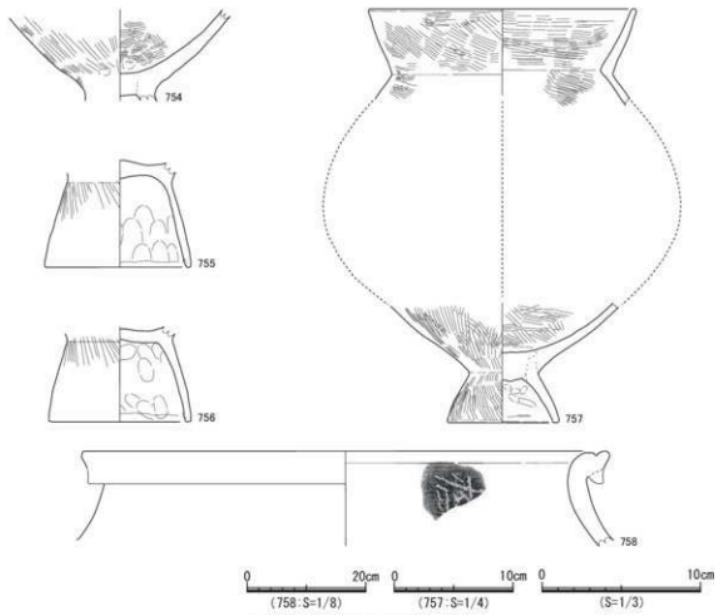


図177 SD0422遺物実測図 (28)

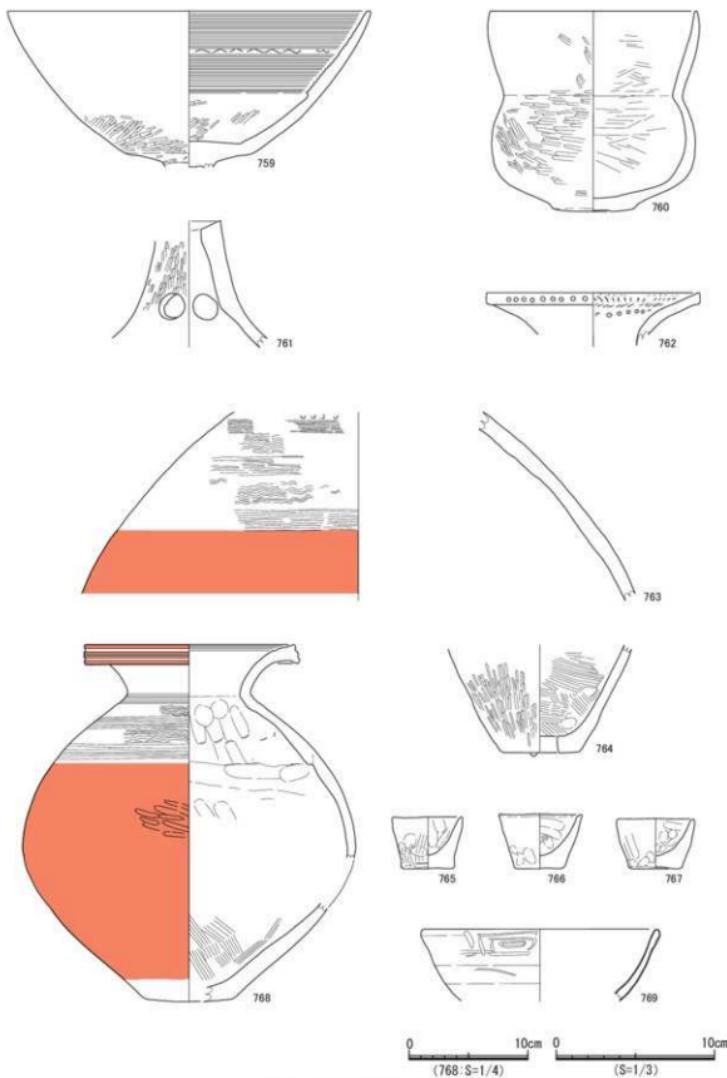


図178 SD0422遺物実測図 (29)

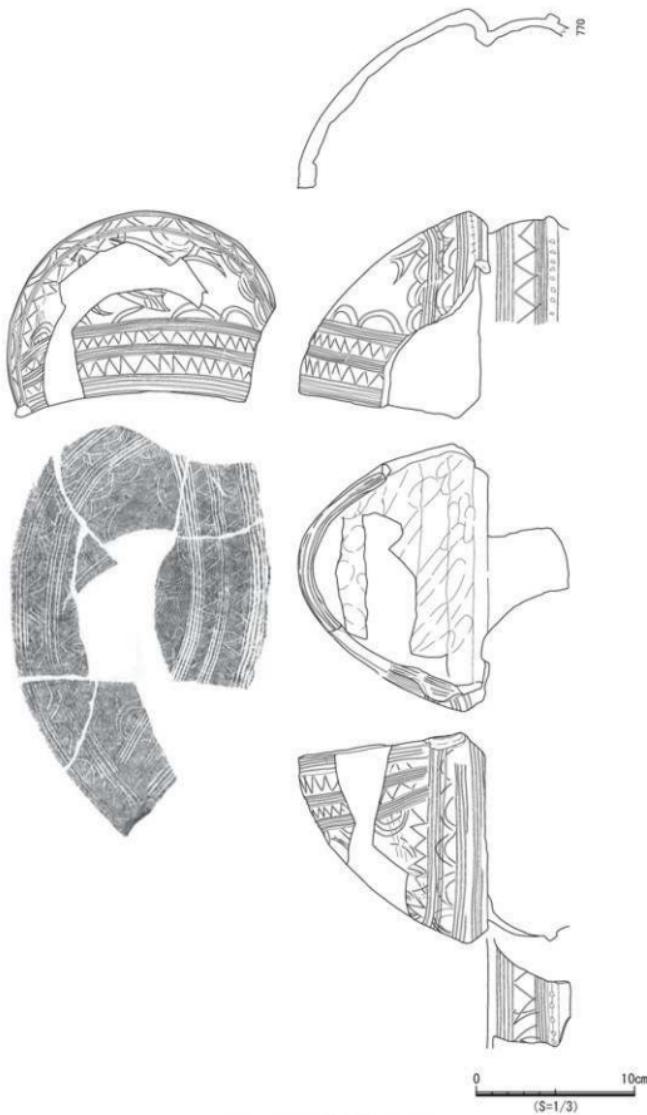


図179 SD0422遺物実測図 (30)

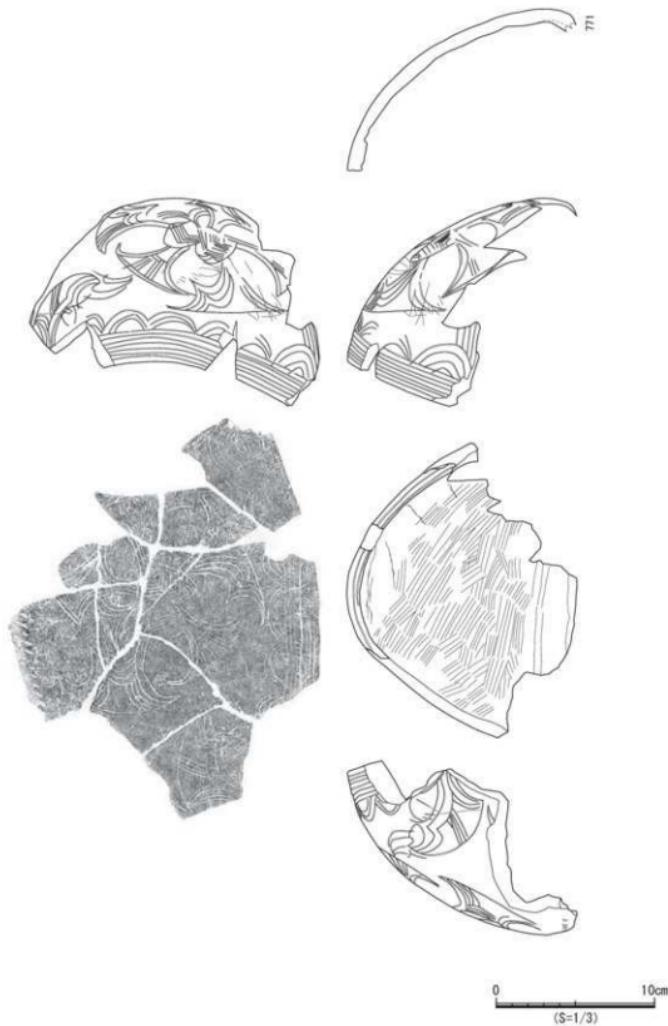


図180 SD0422遺物実測図 (31)



图181 SD0422遗物实测图 (32)

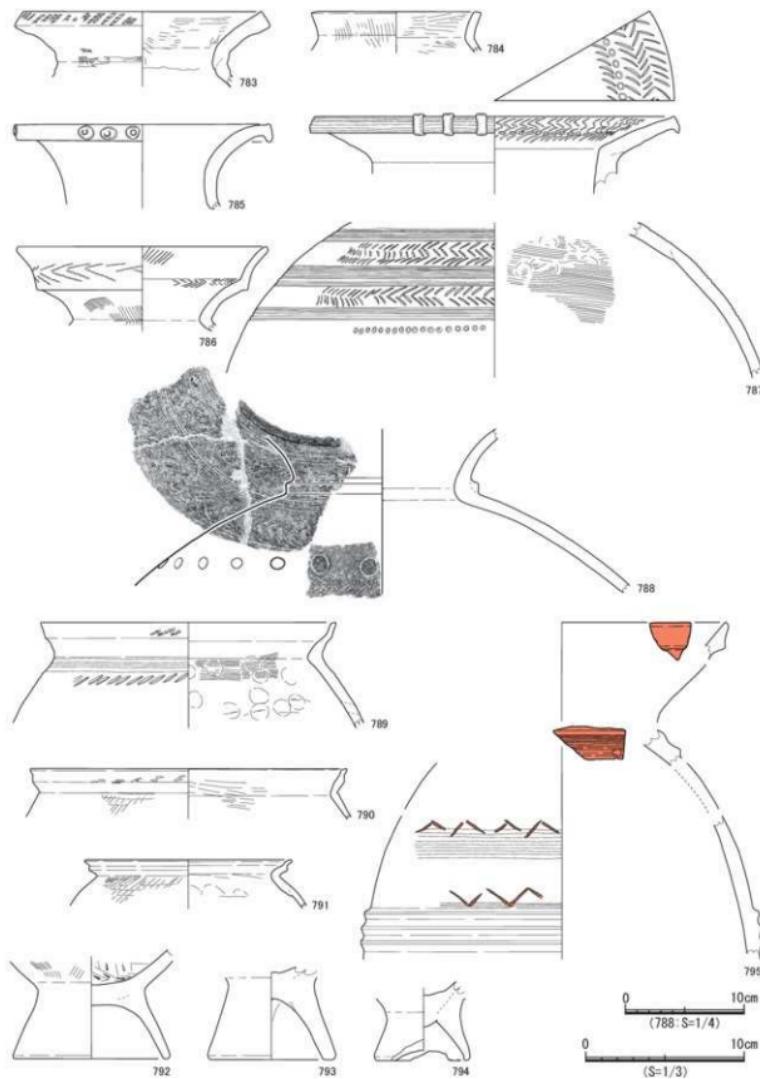


図182 SD0422遺物実測図 (33)

多条沈線間を刺突文で充填することを基調とし、3段目と5段目に山形文を横位に二重施文して、羽状文表現をとっている。これまでの出土例としては、はじめての確認例である（愛知県一宮市門間沼、滋賀県長浜市鶴田遺跡で類似例あり）。814は壺A類で、口縁部外面の羽状文に加えて、内面に山形文をもつめずらしい例である。817・820はともに壺G3類。891の口縁端部内傾面は痕跡となり、820は肥厚して多条沈線を加える。823は壺A類の胴部片。頸部に突帯をもち、胴部上半には直線文と刺突文をもつ。形状及び胎土からV期の可能性が高い。胎土からすると811が類似し、同一個体の可能性がある。821は山陰系の甕に類似するが、やや口縁部の立ち上がりが短い。VII期～IX期の資料であろう。縄文時代晚期後半～I期、IV～V期、VII～IX期を除く資料はVI期後半～VII期前半と考えられる。

HK20区、IK01・IK02区（図184～187）出土資料は、SD0433の南側に重複する出土区である。HJ20区、IJ01区同様に時期幅があり、VI～I期としたSD0433の時期とは重複しない。824・827・841はIV期の資料。824は古井式の胴部片。827は甕B類。841は高坏。825・826・828～835はV期の資料と考えられる。825は脚部に直線文がみられ、高坏I類の脚部であろう。826は器台A類の脚部で大型品である。直線文が4帯認められる。甕はA2類が多くを占める（828・829・833）。口縁部が強く屈曲して、端部に凹面を形成する。833は全形がほぼ判明する好例。底部は平底で、口縁部はやや短く端部下端が拡張されている。端部は丸みをもつ。834は脚部付根の径が大きく、甕B1類の脚部であろう。832は口縁部を欠損するが、833と器形や文様構成が酷似する資料である。残る資料の多くがVI期～VII期にあたる。840・842は内面加飾のある高坏C類。840は山形文が2帯認められる。836～839は高坏G3類。839は精緻な文様をもつ資料で、直線文の他に刺突文・山形文・斜格子文をもつ。843は2穿孔のある高坏脚部で、高坏B3・4類であろう。大型甕にはA類（835・845・847）・B類（848～850・853・859）があり、比較的B類が多く粗いハケ目を残す資料の頻度が高い。胴部まで残存してほぼ器形が判明する資料（848・853・859）では、胴部最大径が胴部中央より下がった位置あり、胴部下半が膨らむ形状を示す。848は胴部下半が直線的に底部にいたる。853は外面に煤痕の付着がみられ、胴部には打ち欠きがある。849は口縁部内面に並列した円形刺突文が施文される。844は壺H類のほぼ完存する資料。口縁部には多条沈線がある。855は壺C類。頸部に強いナデ痕跡が残る。846は器台A類の口縁部片としたが、壺口縁部片の可能性がある。端部に円形刺突文と棒状浮文、内面に円形浮文と刺突文を加飾する。856・857は鉢A2類。854は口縁部がない鉢としたが、口縁部が剥落した鉢A類の可能性がある。858・860は口縁部が強く屈曲する甕A2類で、860は文様が認められない。862は甕A3類。861は口縁部が強いナデによって直立する例外的な甕B4類、863は甕B3類である。

HL20区、IL01・IL02区、I002区（図188～190）出土資料は土器集中区とした北側にあたり、一部、1群として取り上げた範囲と重複する箇所である。864は縄文時代晚期後半の資料。865は摩耗が進行しているが、I期相当の条痕文系土器であろう。866・869はともに高坏B類。869は口縁部内外面に沈線をもつ。867・870は壺。867は脚部のみが残存する。870は口縁部が大きく開き、端部下端を拡張するAla類。頸部に突帯がみられる。872は壺F1類で穿孔がみられる。摩耗が進行しているが、外面には赤彩が認められる。胴部下半については摩耗が著しく赤彩は認められないが、外面は全面にわたって赤彩されていた可能性が高い。873は高坏B4類。871は高坏F類。いずれもほぼ完存にちかい。866～872は資料ごとに時期幅はあるがおよそVI期に下る可能性が低く、V期相当の資料と考えられる。

ただし、871はVI～I期の可能性もある。880・881は高坏C2類。880は脚据部を欠損するが、881と

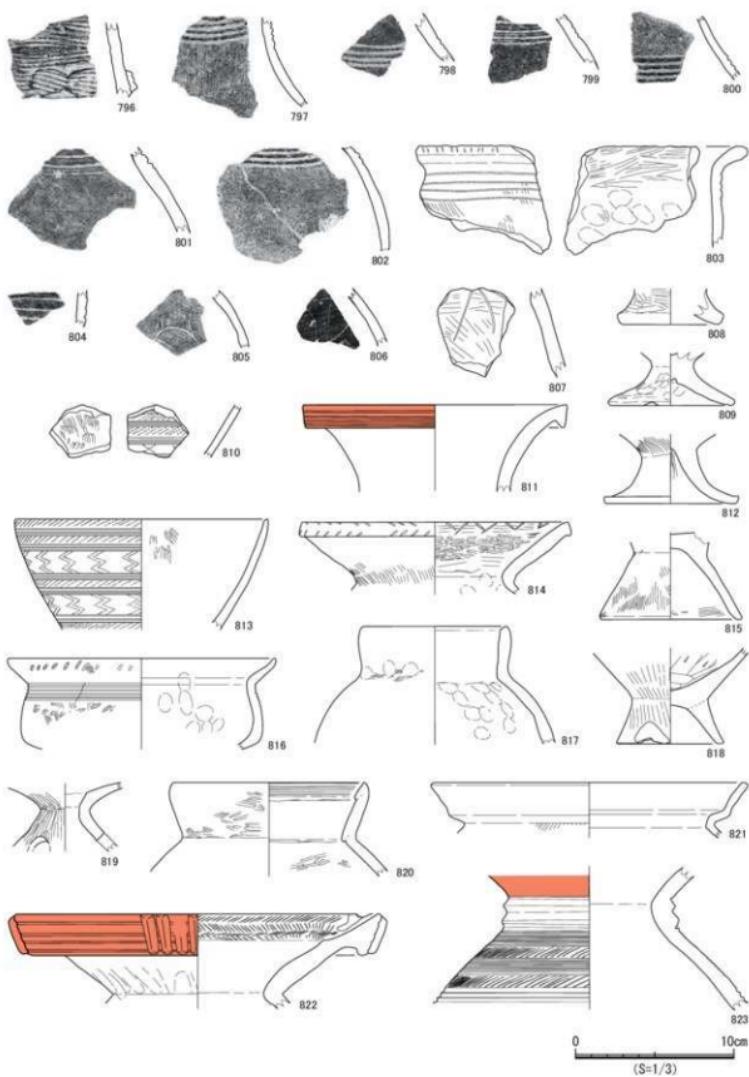


図183 SD0422遺物実測図 (34)

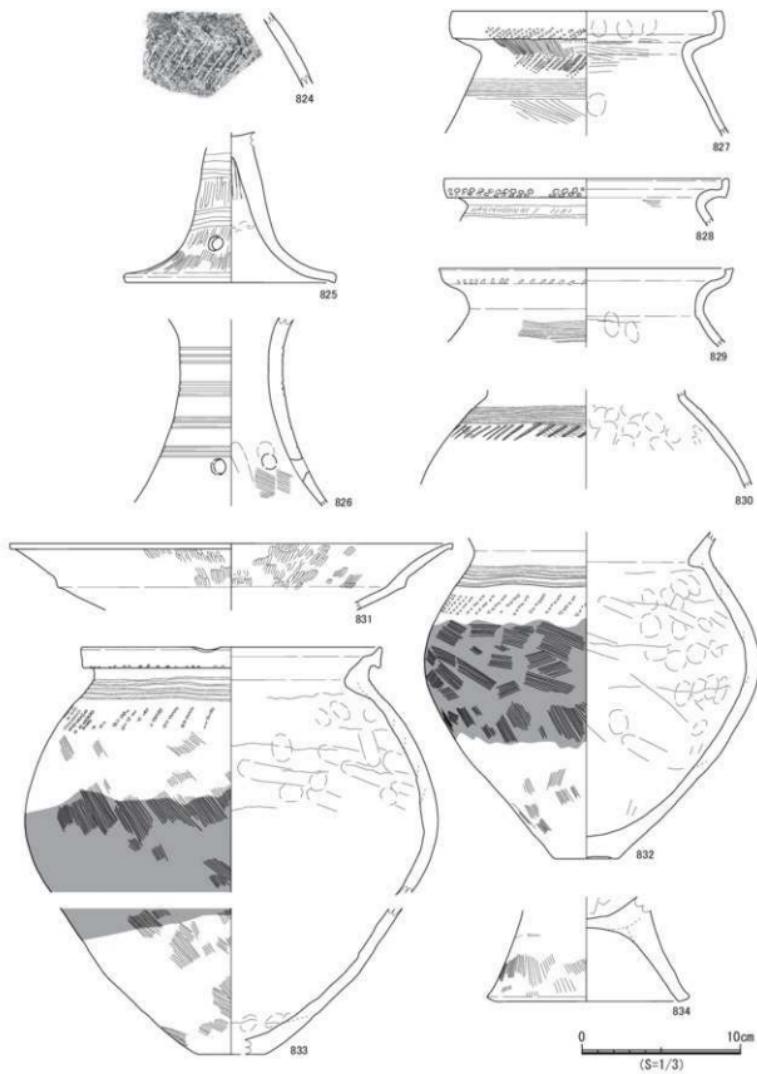


図184 SD0422遺物実測図 (35)

類似する脚部をもつ資料であろう。口縁端部には内傾面をもつ。885は多段化した内面文様をもつ高坏C4類。877は高坏G3c類で、多条沈線のほかに刺突文や対向山形文がみられる精緻な資料。874～876は高坏G3類。874は外面に多重沈線が認められる。878・879は高坏I2類。器台には882・889がある。

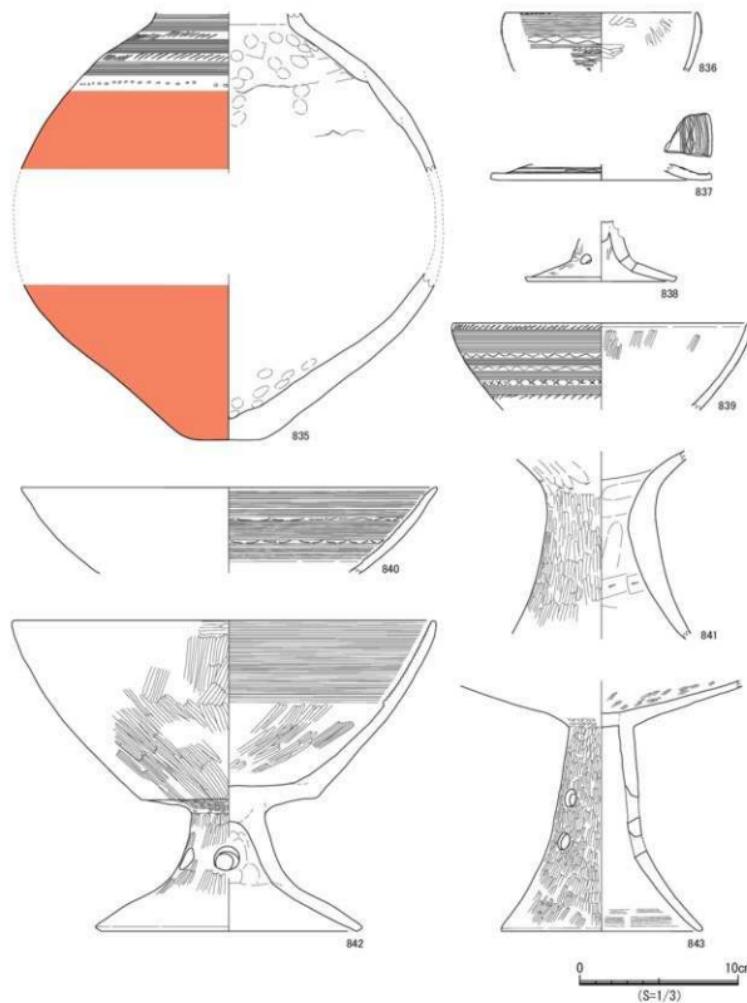


図185 SD0422遺物実測図 (36)

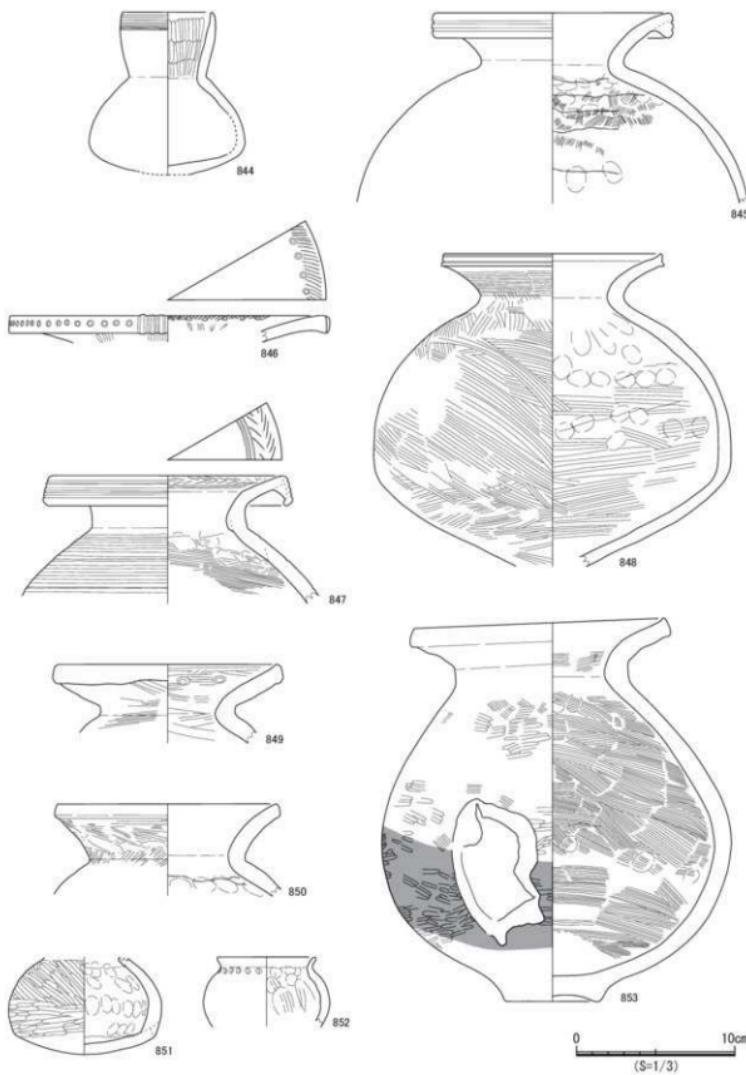


図186 SD0422遺物実測図 (37)

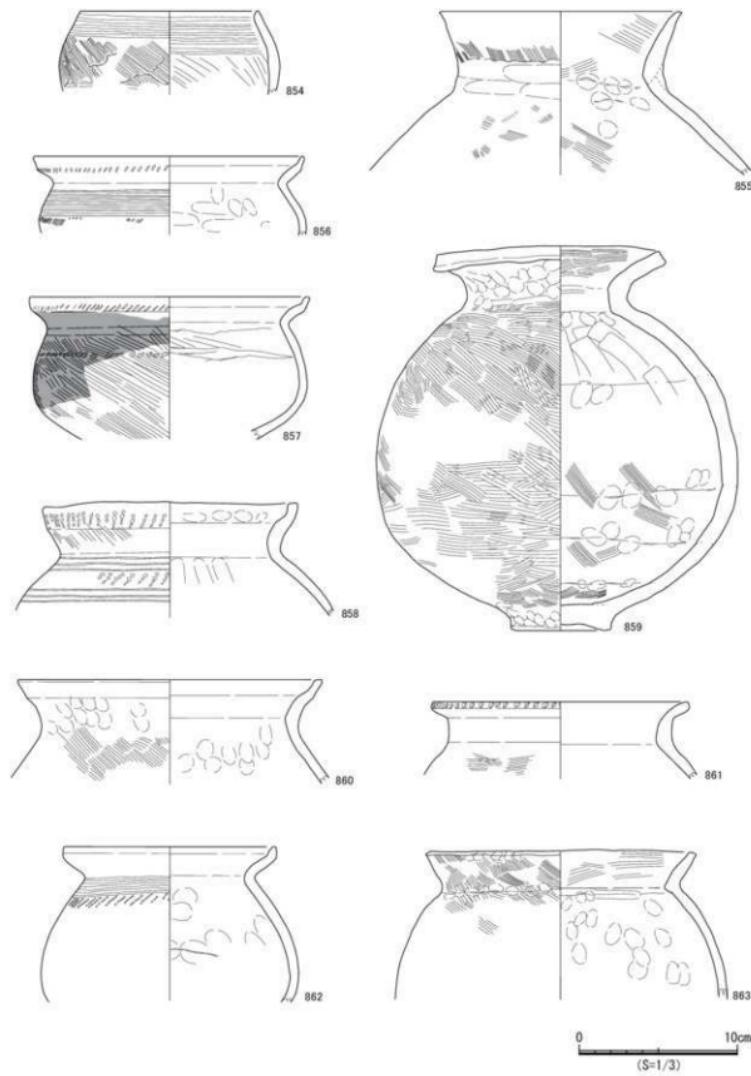


図187 SD0422遺物実測図 (38)

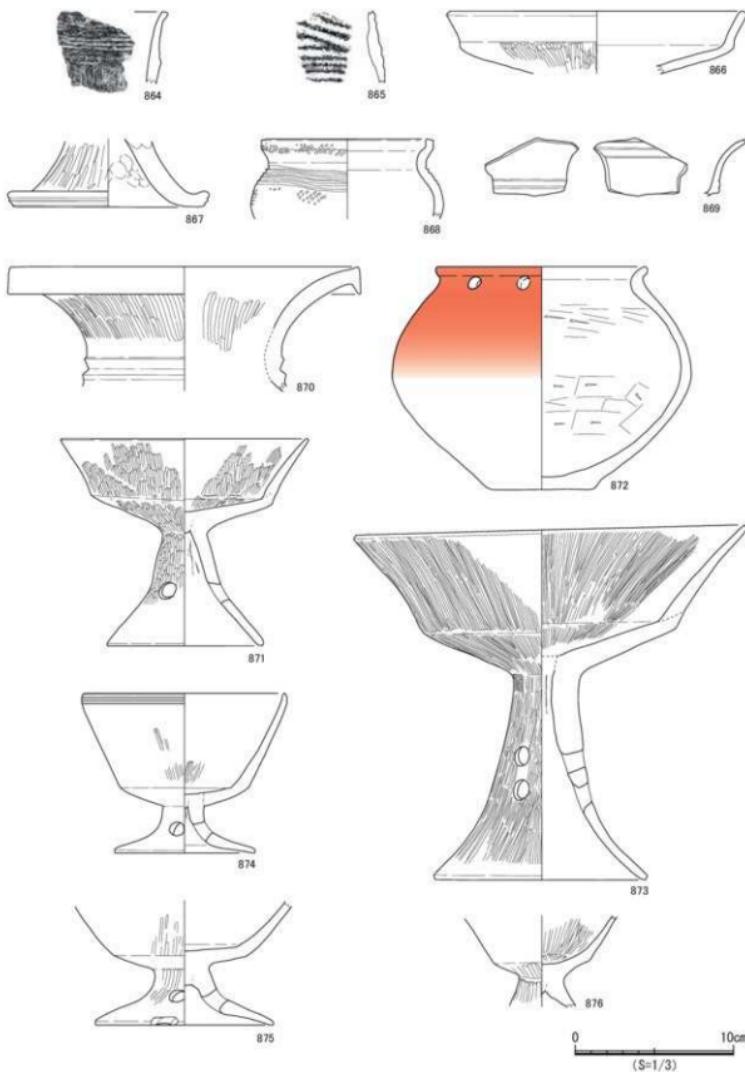


図188 SD0422遺物実測図 (39)

882は器台C類で、端部に打ち欠きがある。889は器台B類の脚部であろう。888は中央にやや小さな透孔が脚部中央にみられる例外的な高坏である。壺894・896はA1類。894は内面に意匠は不明だが線刻らしき表現が確認できる。896は口縁端部に羽状文と棒状浮文がある少數例である。壺893・895はB類。893は粗いハケ目が内外面全体に及び、端部が上方に拡張されていることから、A5類にちかい。895も線刻表現のある資料。胴部上半にバチ形文様らしき線刻が確認できるが、摩耗が著しく、欠損部位もあり全形は不明である。892は口頭部を欠損する小型の壺。直線文と刺突文が胴部上半にあり、刺突文内及び文様帯以下を赤彩する。891は壺A類の胴部片と考えられるが、連弧文を施す少數例である。899は加飾のない鉢A2類。887は低脚ではあるが、鉢D類の可能性が高い。甕はA2類(900)、A4類(902・903)、B3類(901・904)、B4類(905)、S字甕C類(906)がある。884は土製品。2個1組の孔が1対に認められる円盤状の土製品。先に述べた縄文時代晚期後半、V期の資料、IX期の906を除くとその他の資料はVI期～VII期に相当する。

HM20区、IM01区、IL01区(図191)出土資料は土器集中区とした西側に隣接する出土区から出土した。907は高坏C類。908は基部に直立傾向があるが、受部を欠損するが器台B1類の脚部であろう。909・913はともに器台B3類で、909は外面に煤痕が残る。912は口頭部の加飾が顕著な壺I2類。多重沈線と山形文で加飾する。914は壺I1類。915は壺HもしくはI類の胴部であろう。917は小型丸底壺でおそらくIX期の資料であろう。920は鉢A1類で口縁部の屈曲が著しく、端部の凹面がある資料。端部下端に刺突文を施す。921は甕A3類、口縁端部の凹面が顕著で、沈線化している。918は甕C類。916は円盤状の土製品。径5.1cm程度、厚さ0.8cm程度の円盤に粘土紐が加わり、紐のように見える。蓋にもみえるが鏡状の土製品の可能性が高い。紐まで含めた高さは2.0cmである。910は手培り形土器の覆部の破片。911は線刻が認められる資料。ハケがあるので甕の破片資料であろう。917はII期の甕で、内面に波状文が認められる。II期及びIX期の資料を除いて、VI～VII期の資料である。

IM02区(図192・193)出土資料は土器集中区1～6・7として取り上げた範囲と重複する出土区である。一部の資料を除いて、VI～3期～VII～1期の復元率の高い資料が多く出土した。922は高坏B3a類。923～928は高坏C類。高坏C類では、いずれも透孔が2穿孔1組2方向に配置され、透孔付近から脚裾部が強く内湾し、高坏脚部に関して大きな時間差を示さないと考えられる。925の口縁端部は内傾面を形成する。928は内面加飾のあるほぼ完存する資料で、文様区分及び坏底部の段は明確である。文様は多条沈線と山形文・対向山形文で構成される。931は高坏G3a類。脚裾部は屈折して大きく開き、口縁部には打ち欠きがある。坏部底部内面の段差は明瞭である。929は壺G3b類で、口縁端部に内傾面に沈線がある。930は壺D類。口縁端部の屈曲が明瞭で、端部に強い凹面を形成する。頭部直下には直線文をもつ。932は壺胴部。直線文と刺突文があり、その上に刺突を伴う紐状の突帯が貼付される。突帯は継位だけではなく、剥落が著しいものの頭部付近及び胴部下半に横走する突帯が確認できた。その形状から口頭部を欠損するが、被籠状の壺と考えられる。継位の突帯は復元すると20条前後である。936は壺G2b類で口縁部に多条沈線をもち、外面には煤が付着する。938は壺A3類。口縁部端部・内面に刺突文をもつ。939・941は鉢A2類。942は鉢F類で、内外面にハケ目が顕著に残り、半球形の胴部をもつ。甕はA類が多い。944・948は甕A2b類。950は口縁部内面の屈曲が弱く甕A3類にあたる。

946は口縁部内面の屈曲を失ったA4類である。外面には面をもち、頭部直下には直線文と刺突文がみられる。945も口縁端部の屈曲が痕跡的なA4類。947は口縁部がわずかに内湾する甕C2類。949は甕



図189 SD0422遺物実測図（40）

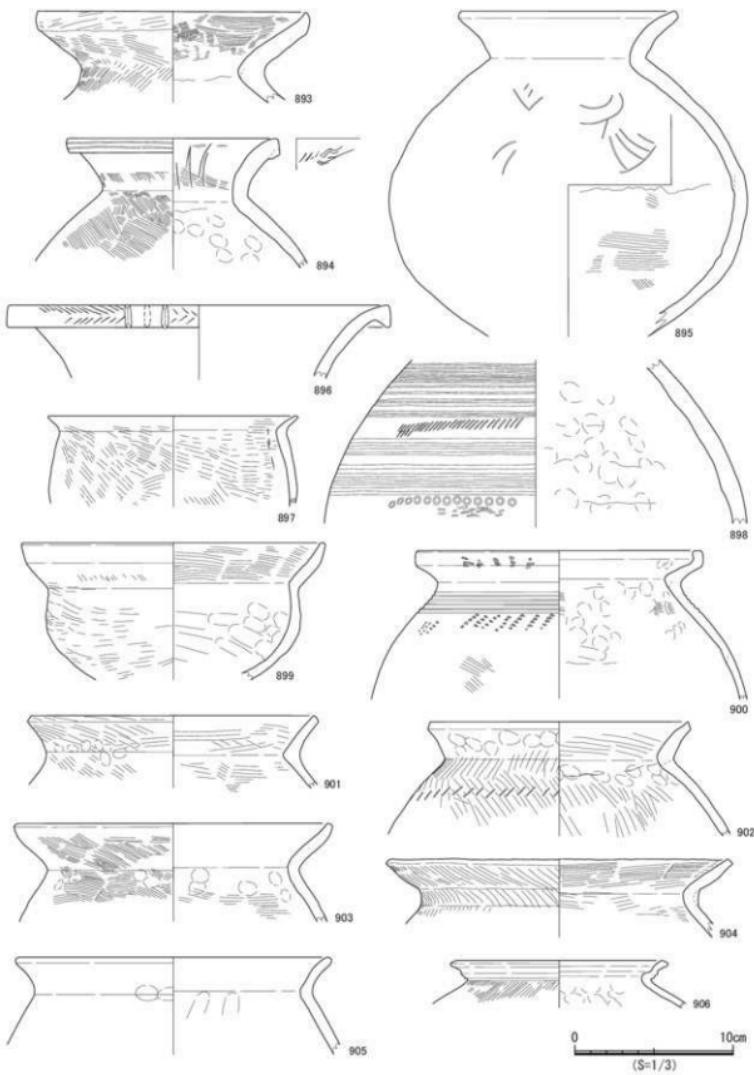


図190 SD0422遺物実測図 (41)

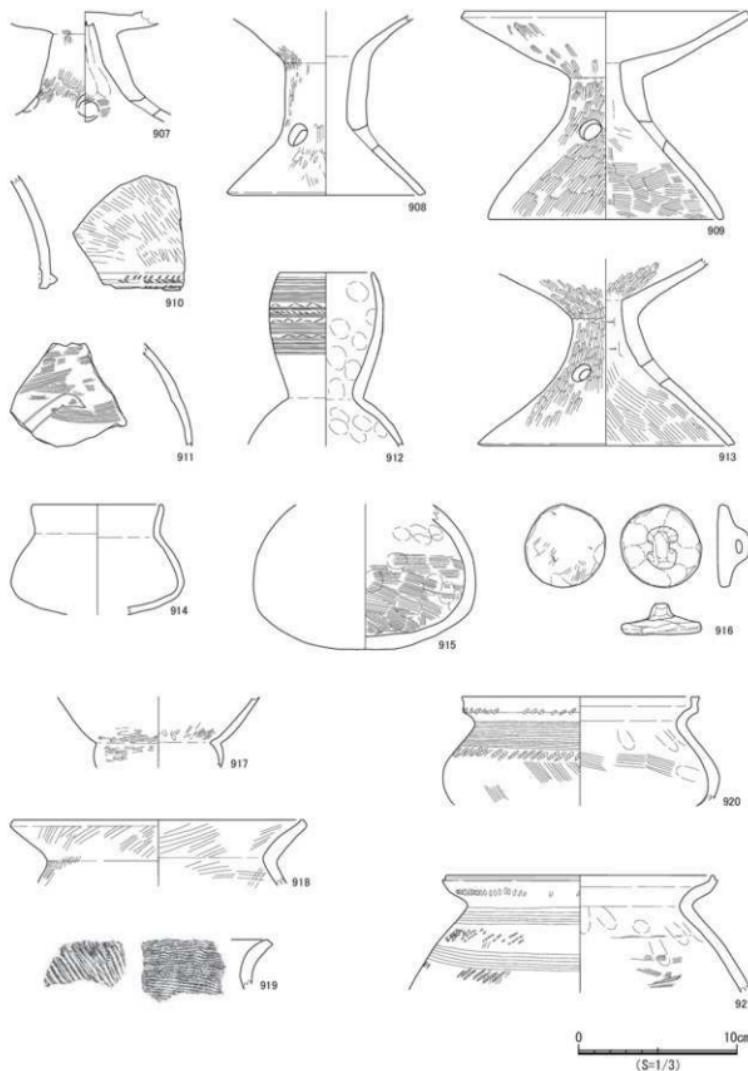


図191 SD0422遺物実測図（42）

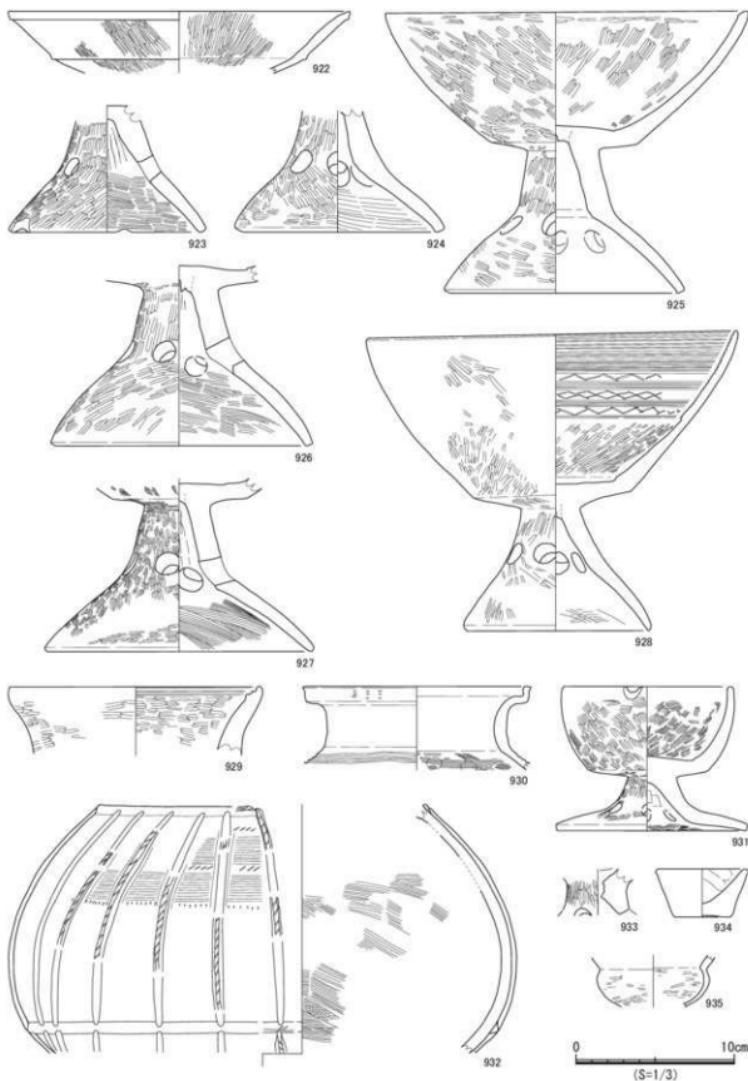


図192 SD0422遺物実測図 (43)

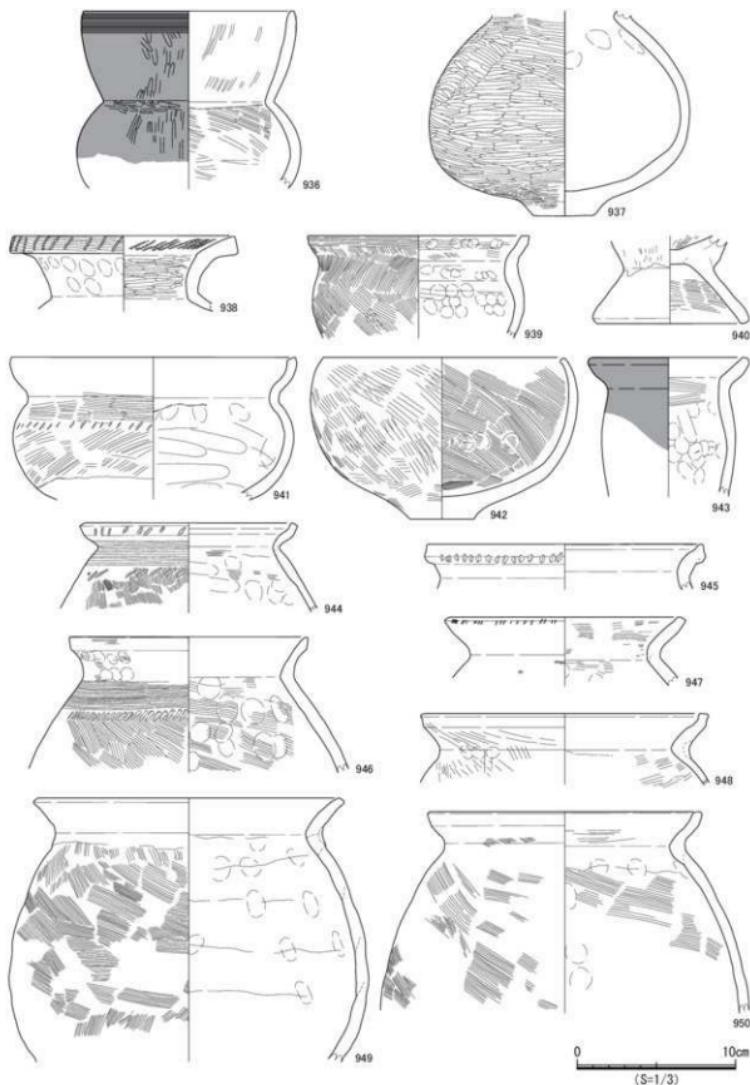


図193 SD0422遺物実測図 (44)

B3類で胸部最大径がやや下位の位置にある。935はⅧ～Ⅸ期の小型丸底壺。

IM03・IM04区、IN01・IN02区（図194～196）出土資料は、土器集中区4～5の範囲と重複する出土区である。縄文時代晩期後半（980・981）、V期（951・954・974）、Ⅷ期（977）、X期（979）と考えられる資料を除く大半の資料がVI期～Ⅶ期前半にあたる。951は口縁部の外反が弱い高坏B2c類。底部内面の屈曲が弱く、透孔の位置がやや上方に位置するが、やや低脚である。952・953はともに器台B1類。953は口縁端部下端をやや拡張する。955は高坏H類。956も高坏H類の脚部であろう。954・957～960・963は壺A類。954は中型品で胸部が強く張り、中央がくぼむ小さな底部をもつ。胸部上半は直線文・刺突文で2帯、円形刺突文を最下段に加飾する。円形刺突文は竹管状の工具によって施文されるが、円周1/2單位で分割して施文しているので、施文具は半截竹管である。口頸部内面、胸部文様帶以下を赤彩する。935は口縁端部及び胸部の直線文の上下に刺突文を施文する資料。直線文間に波状文が施文される。957・958は壺A3類。957は口縁部内面に羽状文のほかに円形浮文がみられる。端部には棒状浮文の剥落した痕跡が認められる。958は口縁端部に羽状文を施文する少數例。内面には精緻なヨコミガキのみで、施文は認められない。959は壺A5類で内外面に羽状文をもつ。968は加飾がなく、粗いハケ目が胸部にとどまらず、口頸部の内外面にまで残る壺B2a類。961はやや口縁部が直立気味だが壺I1類であろう。962は壺G2類で、外面に煤が付着する。964・965は線刻がある資料。小片のため全形は不明である。964は壺胸部、965は手焙り形土器の覆部と考えられる。966は鉢A1類、967は鉢A3a類、971は鉢G類である。966は文様がなく、口縁端部の強いナデが認められる。967は口頸部がやや長く、頸部以下は直線文がなく刺突文のみの施文である。壺はA2a類（974）、A3類（978）、S字壺C類（977）がみられる。974は中小型で胎土が赤褐色を呈す。壺A類中では少數例である。979はX期の宇田壺に類似する資料。胸部外面は太い竹管状の工具で羽状のハケ目のようにみせている。980は摩耗が顕著だが、変容壺の頸部から胸部にかけての資料で、981は口頸部の資料である。

IN03・IN04区出土資料（図197）は、土器集中区8・9の分布範囲と一部重複し、SK01878とも重複する出土区である。一部のIV期、Ⅷ～Ⅸ期の資料を除いて、VI期後半～Ⅶ期の資料が認められる。

982はIV期壺B類。外面に顕著な煤が付着する986は高坏C4b類。脚部は付根から円錐形に開く。脚部の形状はC1類にも類似するが低脚化しており、坏部底径が狭く口縁部の内湾が強いでC4類とした例外的な資料である。坏部外面は通例とは異なり、ミガキでなくナデ調整である。985・992は内面加飾のある高坏C類。985は口縁端部に内傾面があり、内面には直線文と山形文の加飾がある。984は高坏G類の脚部であろう。991は算盤玉状の断面形を呈す土製品。上面に小さな穿孔があり下方に貫通する。下面には別の穿孔があるが、貫通せず途中で収束している。土製品にもみえるが、高坏の坏部と脚部の接合に用いる充填用の粘土と考えられる。実際の高坏では上面が潰されて断面三角形の状態でしか確認できない。なお、2つ穿孔のある方が脚部側にある例があるので、1穿孔側が上面、2穿孔側が下面で使用されたのである。坏部と脚部の接合を検討する資料の1つになりうると考えられる。988は打ち欠きのある壺H類の口頸部。996は口頸部がやや短い壺D3類。口縁端部に多条沈線があり、下端に刺突文をもつ。997は鉢A1類。胸部が強く張り、口縁端部に強い凹面がある。987は鉢E類の底部の可能性が高い。底部に線刻らしき痕跡が認められる。995・1000は壺C2類。口縁部が痕跡的に内湾しながら、端部に平坦面がある。993は壺A4類。口縁端部がわずかに屈曲する部位が認められる。994・999・998はⅧ期のS字壺C類。

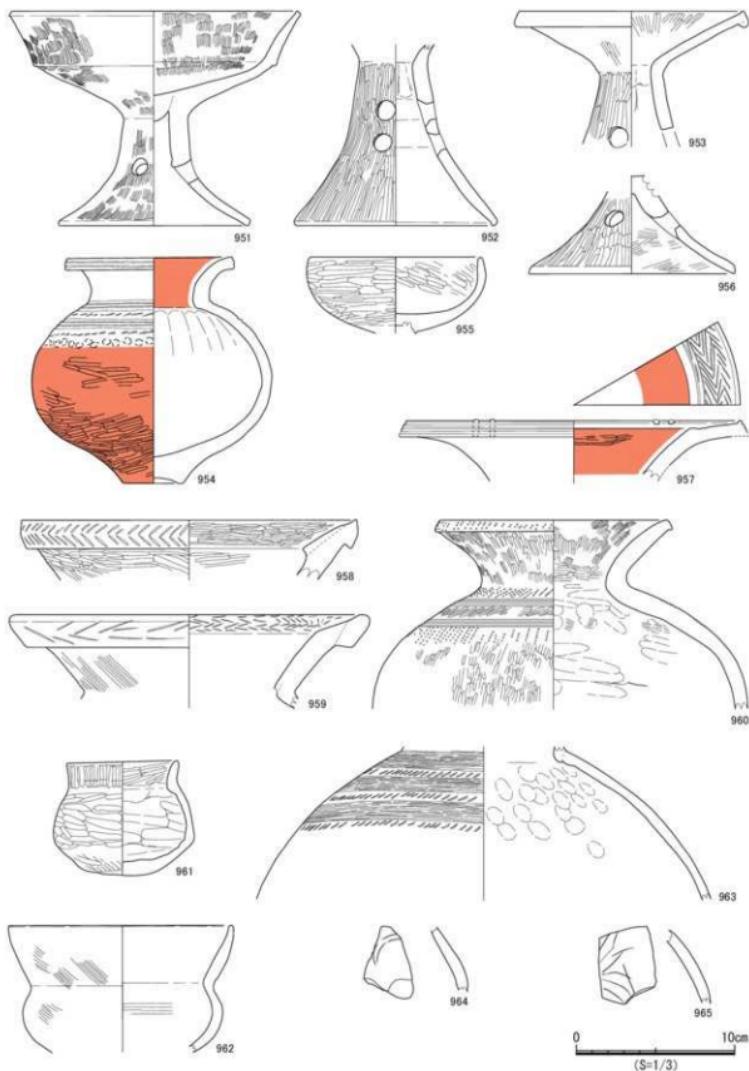


図194 SD0422遺物実測図 (45)

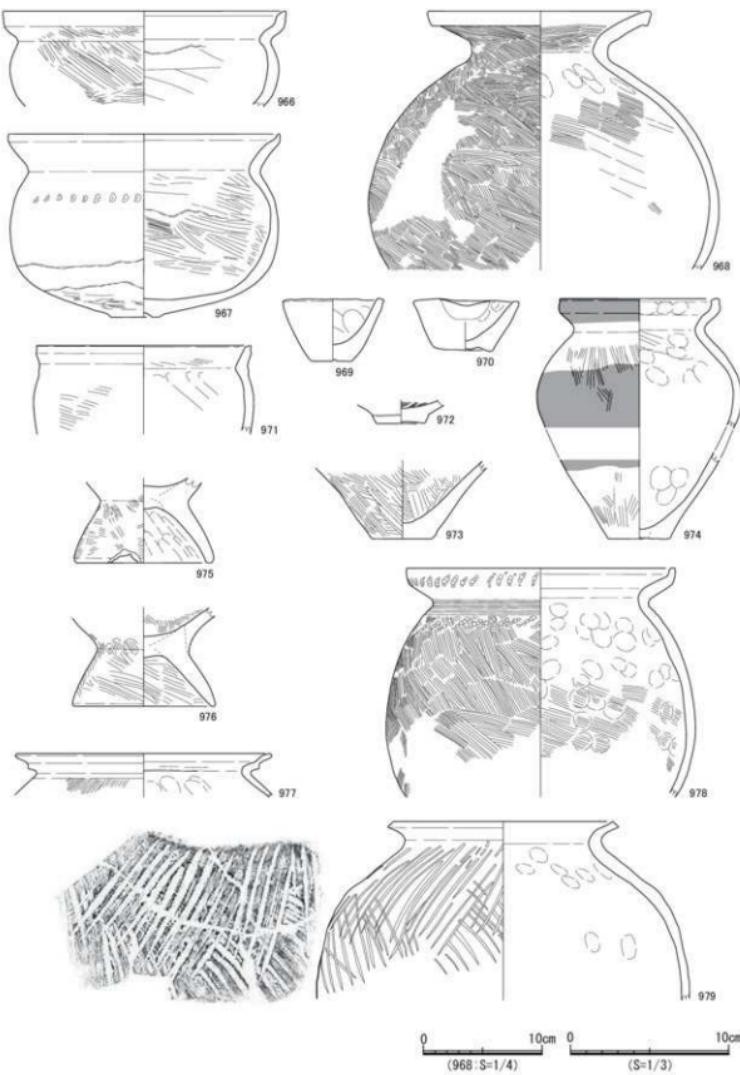


図195 SD0422遺物実測図 (46)

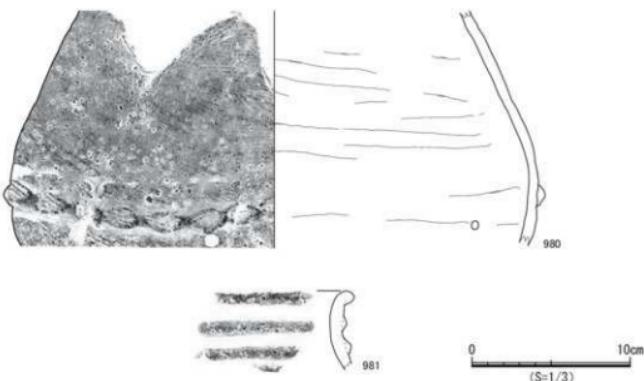


図196 SD0422遺物実測図(47)

I001・I002区出土資料（図198）はSK01881と重複する出土区にあたる。

1002・1003は高環G3c類。1004は器台A類。摩耗が著しい。1005は円形浮文と円形刺突文のある器台A類。1006は壺K類。長頭化が著しく、例外的な資料。1008は生駒西麓産の壺胴部片。1007は鉢A1類。胴部最大径は胴部上半にあり、下半がややくびれながら底部に向かって伸びるので脚台がつく可能性がある。1009は甕A4類。口縁部をわずかに屈曲する。1011・1012は中型品で甕E類。1011は内外面にハケ目があり、胴部下半に輪積み痕が顕著に残る。脚部には1対の穿孔がある。1010は口縁端部に強い凹面のある甕A2類。1013～1015は縄文時代晩期後半の資料。1013は深鉢。1014は素文突帯が1条認められる。

HM19区、H018・H020区、HR18区、HJ17区、HQ17・18区、HS19区、IQ01区出土資料（図199）は土器集中区の西側で、縄文時代晩期後半の資料が多く出土した（1016～1025）。1016は横長の貝による押し引きがある口縁部片。同様の押し引き突帯は肩部片の1020でも認められる。1017は口縁端部直下に素文突帯がある。1018・1019は摩耗が顕著だが、条痕が残る深鉢。1021はユビの押圧による突帯のある肩部片。1022はケズリのある鉢。1023は口縁端部がかるく外反し、低い突帯に左下がりの貝による押し引きが認められる。突帯以下にも貝殻条痕が認められる。1024は眼鏡状の文様がある浮線文系の浅鉢。1025は口縁部が外反し、端部からやや離れて素文突帯がつく。おそらく変容壺の口縁部片であろう。1026はⅧ期のS字甕C類。1027はN字状口縁の常滑甕。中野分類9型式にあたる。

HP20区、IP01～IP03区・IR01・IR02区、HS20区、IQ01・IQ02区、IS01～IS03区出土資料（図200・201）は土器集中区の南側にあたり、SK01894を覆う位置にあたる。

1028～1035は縄文時代晩期後半の資料。1028・1029は突帯上を強く押圧する。1029はとくに押圧が顕著で、突帯が痕跡的である。1030～1032は口縁端部がやや肥厚気味となり、

その下に低い突帯を貼付する。突帯上は貝殻による押し引きが加えられ、1030は弧状、1031・1032は右下がりとなる。1033は貝殻条痕のある深鉢。口縁端部が強い押圧によって沈線状となる。1034は摩

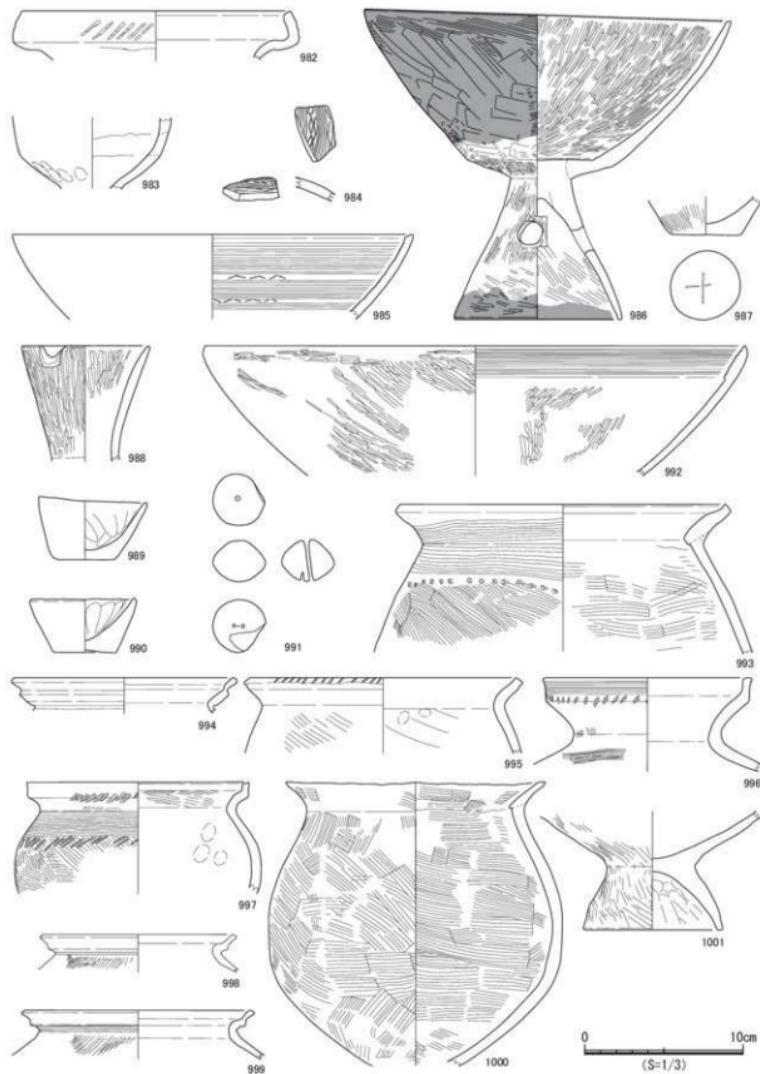


図197 SD0422遺物実測図 (48)



図198 SD0422遺物実測図 (49)

耗が顕著で条痕の有無は不明だが、内外とも煤が付着する。1035は浮線文系土器。口縁部を欠損し、文様全体は不明である。外面とも丁寧なミガキがあり、内面にはわずかに赤色顔料が付着する。搬入品と考えられる。1036は摩耗の進行が顕著だが、I期の壺。頭部突帯は削り出しか貼付かは不明である。1038は脚裾端部に折り返しがある高环脚部。透孔がみられるが、全体としての何組になるかは不明である。1037は口縁端部を平坦にして刺突文を加えるV期壺B1類。胴部には打ち欠きがある。1039は脚部に沈線のある資料。高环I類の脚部であろう。1037～1039はV期前半の資料と考えられる。1040は高环G3b類。G3b類のなかでは全形が判明する良好な資料。口縁部に多条沈線があり、脚部が大

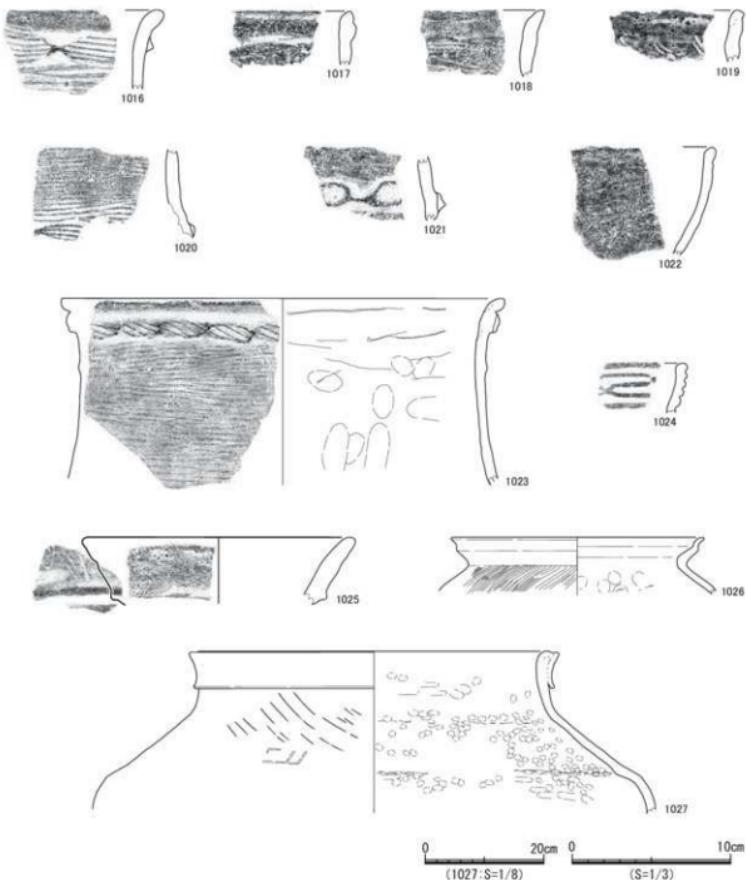


図199 SD0422遺物実測図(50)

きく広がり、口径を大きく上回る。1042も口縁部片のみだが加飾のある高坏G3c類。1041は高坏D2類。口縁端部内傾面に多条沈線を加え、坏部底部の段差が確認できる。VII期の資料である。1043は壺B2b類で頸部が直立気味である。1048は壺B3類で胴部のふくらみが著しい。1045は壺A1類。1046は壺A類胴部で直線文の他に連弧文が認められる。1049・1050も壺胴部。1050は加飾がなくB類の可能性が高い。打ち欠きが認められる。1049は壺A類で直線文と山形文で加飾し、文様帶以下及び頸部内面を赤彩する。1051は摩耗が顕著だが、古代瓦。1052・1053ともに美濃産登窯第10・11小期の行平鍋。縄文時代晚期後半及びV期、古代以降の資料を除くとVI～VII期の資料である。

1054は曲げ物の蓋。円形と思われるが、右半分は欠損している。左側面に釘穴、左側縁の一部が炭化している。蓋の持ち手を付ける一対の穴がある。1058は縦拘子の柄のグリップ部分で円形をしている。下縁部に付くと思われる柄を欠損している。側面を細かく加工し、断面は長方形となる。1055は用途不明製品。表裏面に加工痕があり、薄く加工している。丸穴が開くが、下端部を欠損している。

1056は斎串か人形。下端部は尖らせており、側面に細かい加工がある。1057は栓の横木の先端部で側縁部を面取りする。左側に穿孔が2ヶ所ある。表裏の広い範囲が炭化する。1059は横鉢の泥除けで右端部を欠損している。器厚が薄く、側縁部は面取りしている。左側に方形の穿孔、中央部に円形の穿孔がある。同一取り上げの樹皮止め（1059）も同一製品と思われる。1064は大型槽の脚部。平面形はほぼ円形で、断面は右側が薄くなる。1060・1061は栓。上部は断面平面とも長方形で、面取りがある。1061には栓を抜くときに利用する紐を通す穴がある。1063の下部は一段細くなり、下端部に楔痕が2本入る。1063は用途不明製品で上下両端部を欠損する。中央に表面からの穿孔が1箇所ある。側縁部には面取り加工がある。穿孔より上部は斜めに加工され細くなる。1085は片岩製の有頭石棒。1079は砂岩製の砥石。1067はハイアロクラスタイル製の叩石類。1070は砂岩製の叩石類。1066はハイアロクラスタイル製の太型始刃石斧。1076～1078は砂岩製の砥石。1069は凝灰質砂岩製の叩石類。1073・1077・1080・1083は砂岩製の砥石。1068は砂岩製の叩石類。1081・1082・1084は凝灰岩製の手持ち砥石。1074は砂岩製の砥石。1071は砂岩製の叩石類。1072は砂岩製の砥石。1065はホルンフェルス製の石製品。1062は雁首鏡。

表14 溝状遺構一覧表

遺構番号	現場遺構番号	調査区画	検出層位	理土	断面形状	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	新>●>旧	時期	出土遺物	辨認	固版
SD0050_08_B0086	DT17～A20	IV基	2層 B	A1a1	(25.00)	10.00	(25.00)	10.00	0.20			VII期以降	H, L, P, S, T	135・136	—
SD0413_08_B0050	DT15	V上	3層 B	A2a1	(11.00)	0.50	(10.80)	0.46	0.20		S0414>S0416	VII期以降	H	126	15
SD0414_08_B0083	DT14～H515	V上	5層 H	B5e2	35.00	34.00	5.00	4.20	2.50		S0441, S0442>S0413, SK01621	VII期以降	H, J, P, S, T, *	132	15
SD0415_08_B00486	DT16	V上	5層 B	A2a1	(3.50)	0.80	(3.20)	0.70	0.42			V～VII期	H	130	15
SD0416_08_B0051	DT15	V上	3層 B	A1a1	1.00	(0.50)	0.80	(0.45)	0.12		S0413, SK01565>	VII期以降	H	126	—
SD0417_08_B0025	DT19	V上	3層 B	A2a1	(11.00)	0.50	(10.75)	0.14	0.16		S0423>S0418	弥生～古墳	H, W	—	—
SD0418_08_B00419	DT19	V上	4層 B	A2a1	(8.00)	0.60	(7.80)	0.45	0.20		SK01586, S00417>	弥生～古墳	H	—	—
SD0419_08_B00422	IA1	V上	3層 B	A1a1	(7.60)	0.50	(7.50)	0.40	0.12		SK01592, SK01663>SK01591	VII～VIII期	H	124	—
SD0420_08_B0092	EA3～C3	V上	1層 A	A2a1	18.50	0.25	18.00	0.20	0.15		SB102, SB103, S2050, S2051, S2052	VII期以降	H	118	—
SD0421_08_B00370	ET3	V上	4層 B	A1a1	5.40	(3.00)	3.20	(2.80)	0.20		SB098, SB101, SK01604, SB101>	VII期	H	80	12・13
SD0422_08_B0085	DB14～K20	IV基	2層 B	A1a1	90.00	30.00	90.00	30.00	0.20			H, J, L, K, P, S, T, W, C	135・140	16～18	
SD0423_08_B00301	HC20	V上	5層 B	A2a1	40.00	39.50	0.40	0.30	0.15		S0432>S0417, SK01715, SD0426, SD0424, SA0093, SK01726	VII期前半	H, S	120	13・14
SD0424_08_B00423	DT29	V上	4層 B	A4A1	(14.50)	0.20	(14.00)	0.15	0.25		SA0093, SD0423, SK01663>	VII-1期	H	124	14・15
SD0425_08_B00428	HB20	V上	4層 D	A1a1	(2.00)	1.20	(1.90)	1.10	0.14		SK01663>	VII～VIII期	H	124	—
SD0426_08_B00392	HC20	V上	2層 B	A1a2	4.50	0.40	4.20	0.30	0.15		S0423>	弥生～古墳	H	—	—
SD0427_08_B00418	IC02	V上	7層 B	A2a1	(14.00)	1.20	(13.80)	1.00	0.38		SK01683, SK01771>S0433, S2053, SK01804	VII期後半	H, J, T	114	13
SD0428_08_B00563	IA1	V上	3層 B	A2a1	10.00	0.40	9.60	0.30	0.20		SZ051	VII期以降	H	128	15
SD0429_08_B00570	IA2	V上	1層 A	A1a1	(3.20)	0.50	(3.20)	0.30	0.10			弥生～古墳	H	—	—
SD0430_08_B00993	IB3～E4	V上	5層 B	A1a1	15.00	0.40	14.50	0.30	0.20		SB103, S2052	VII期以降	H	118	13
SD0431_08_B00429	IC3	V上	5層 B	A1a1	(7.60)	2.00	(6.80)	1.80	0.30		S2103, S2052, S2051>S2052	VII期前半	H	116	—
SD0432_08_B00286	HF20	V上	3層 B	A1a1	7.00	6.60	6.60	0.40	0.20		SK01713, SD0423, SK01715	弥生～古墳	H	—	—
SD0433_08_B0210	IIH3	V上	7層 B	A2a1	20.00	1.05	20.80	0.30	0.60		SK01794, SD0427>S2054, SD0427	VII-1期	H, P, S, T	82～86・91・92・98～101・108～110	
SD0434_08_B00404	IJ20	V上	2層 B	A1a1	(7.80)	0.80	(7.60)	0.40	0.10			VII期以降	H	82	—
SD0435_08_B00403	IK20	V上	2層 B	A1a1	(5.10)	0.98	(5.00)	0.50	0.16			VII期以降	H	82	—
SD0436_08_B00380	HM17	V上	2層 B	A1a1	8.00	7.80	0.60	0.30	0.10			VII期以降	H, T	82	—
SD0437_08_B00402	IN2	V上	2層 B	A2a1	6.00	0.32	5.80	0.40	0.20		SK01878>SK01877	弥生～古墳	H	—	—
SD0438_08_B00506	IO1	V上	2層 B	A1a1	(4.35)	0.40	(4.30)	0.20	0.10		SK01881>	弥生～古墳	H	—	—
SD0439_08_B00401	ID3	V上	3層 B	A2a1	(7.00)	0.40	6.80	0.40	0.20		SB110, SK01878, SK01886	弥生～古墳	H	—	—
SD0440_08_B00379	HR17	V上	1層 A	A1a1	6.00	1.20	5.90	1.00	0.08			VII期以降	H, J	122	—

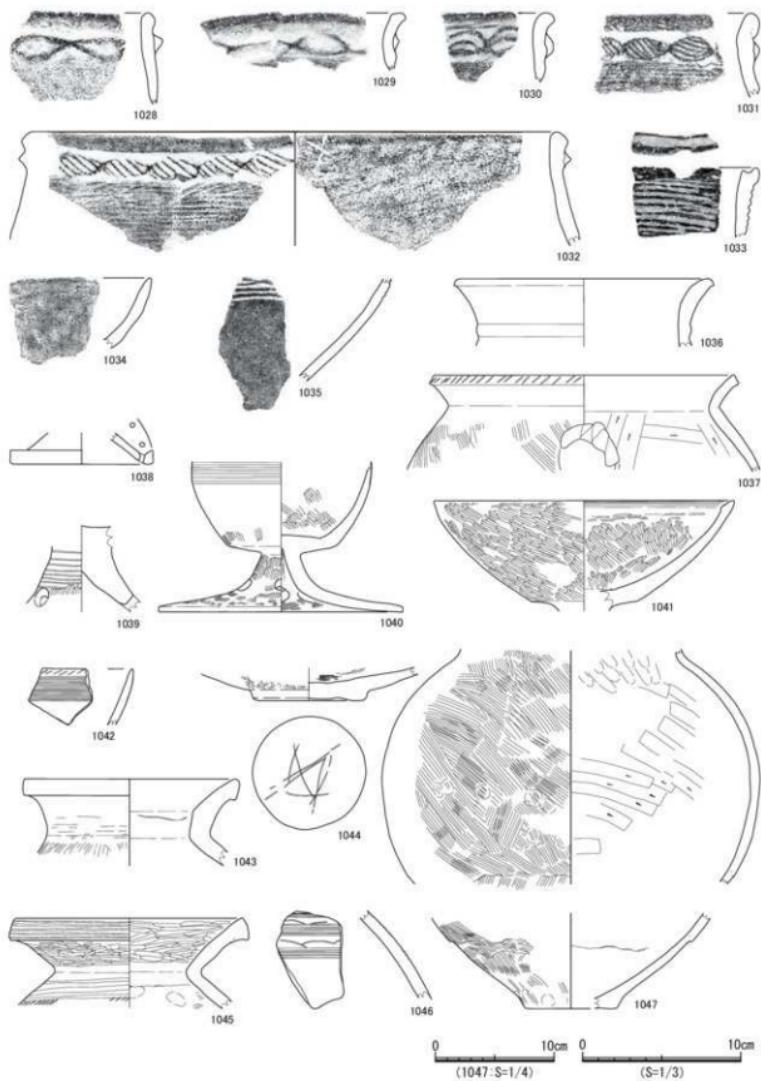


图200 SD0422遺物実測図 (51)

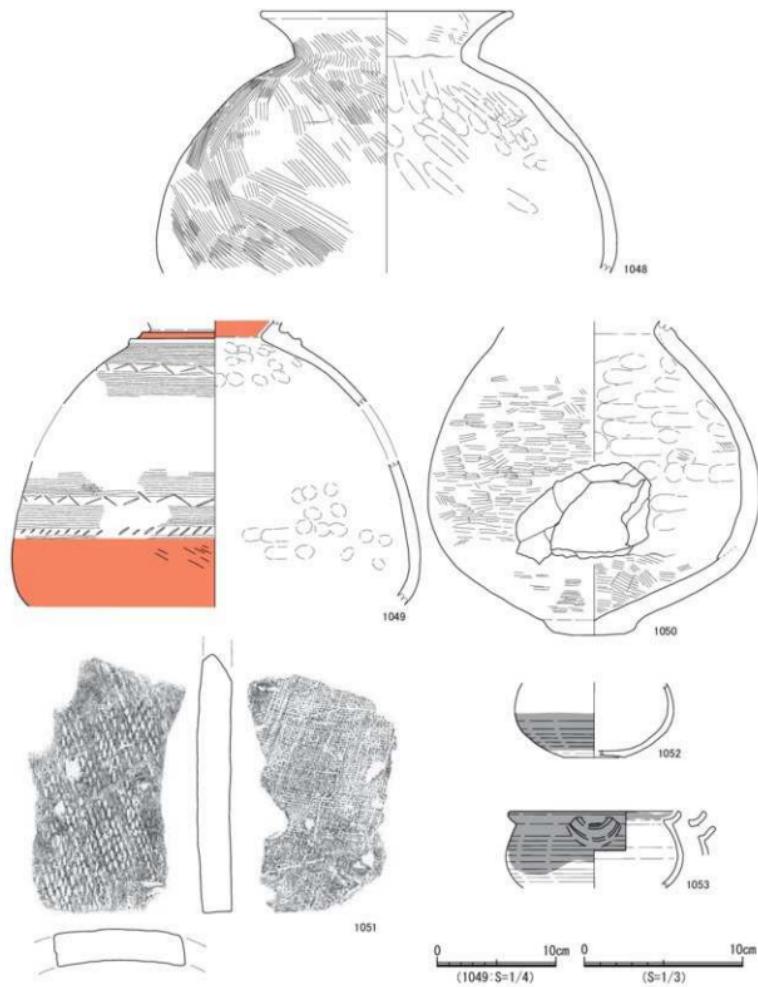


図201 SD0422遺物実測図 (52)

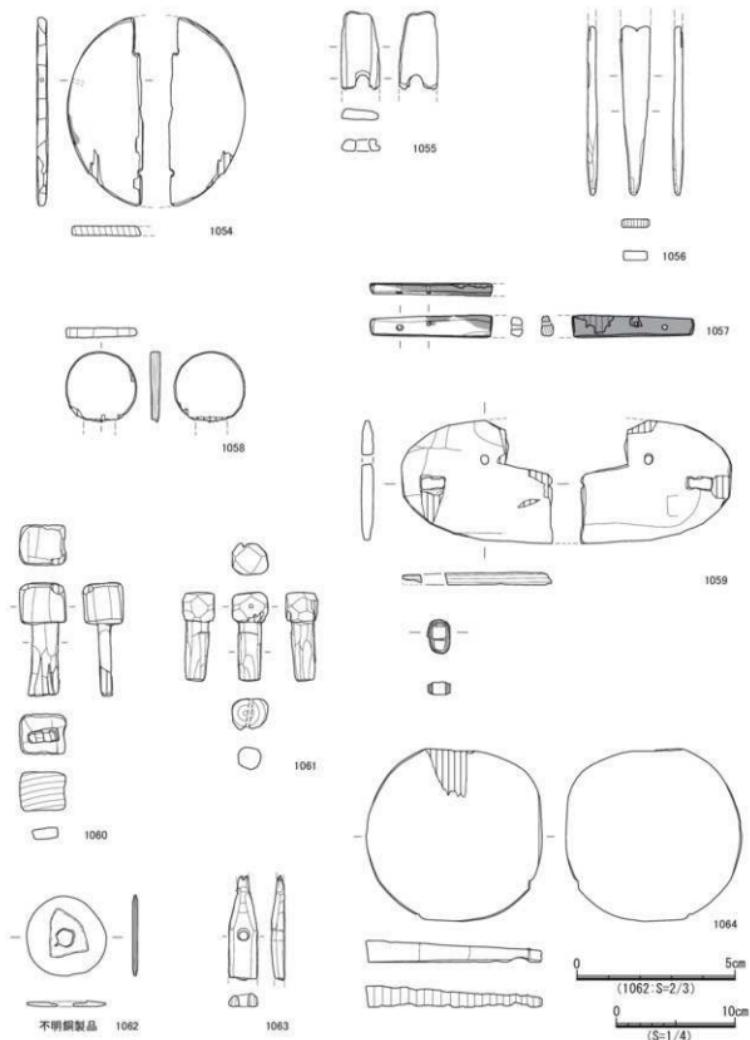


図202 SD0422遺物実測図 (53)

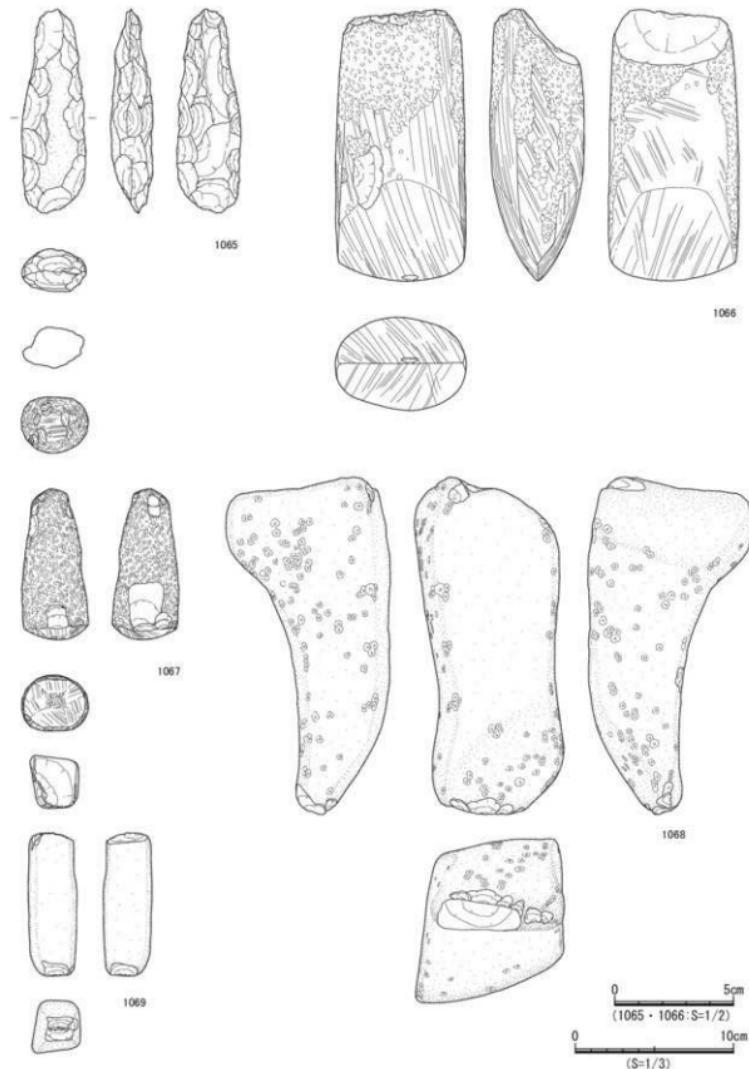


図203 SD0422遺物実測図 (54)

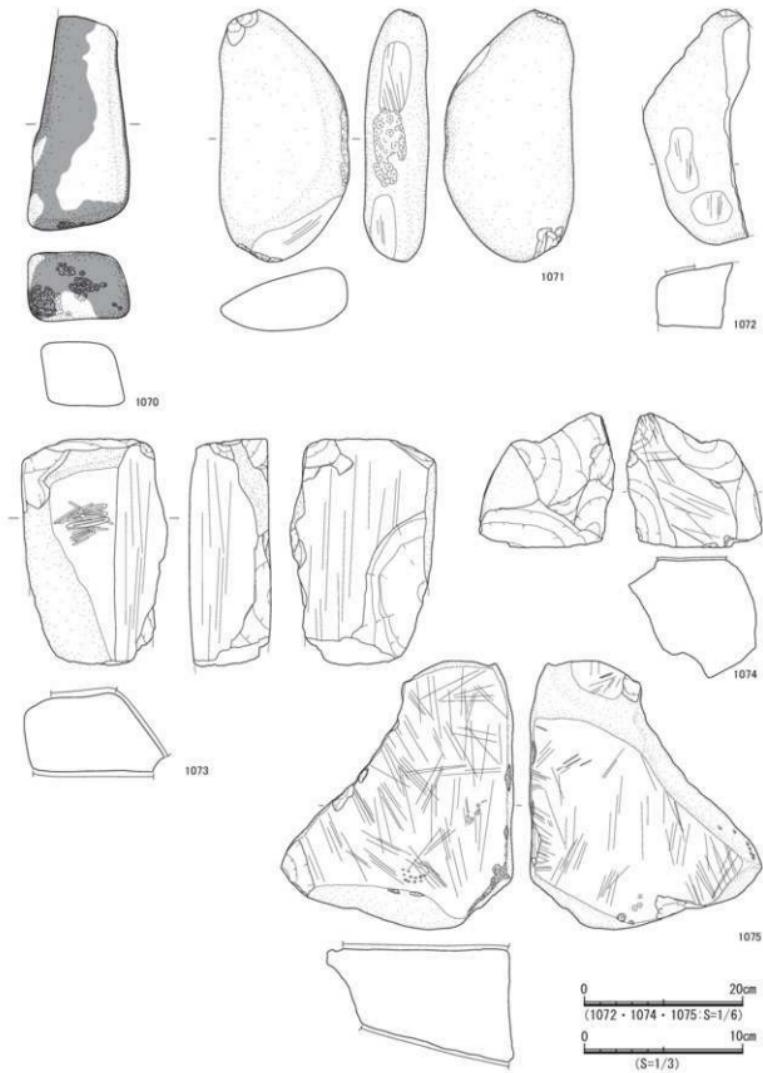


図204 SD0422遺物実測図 (55)

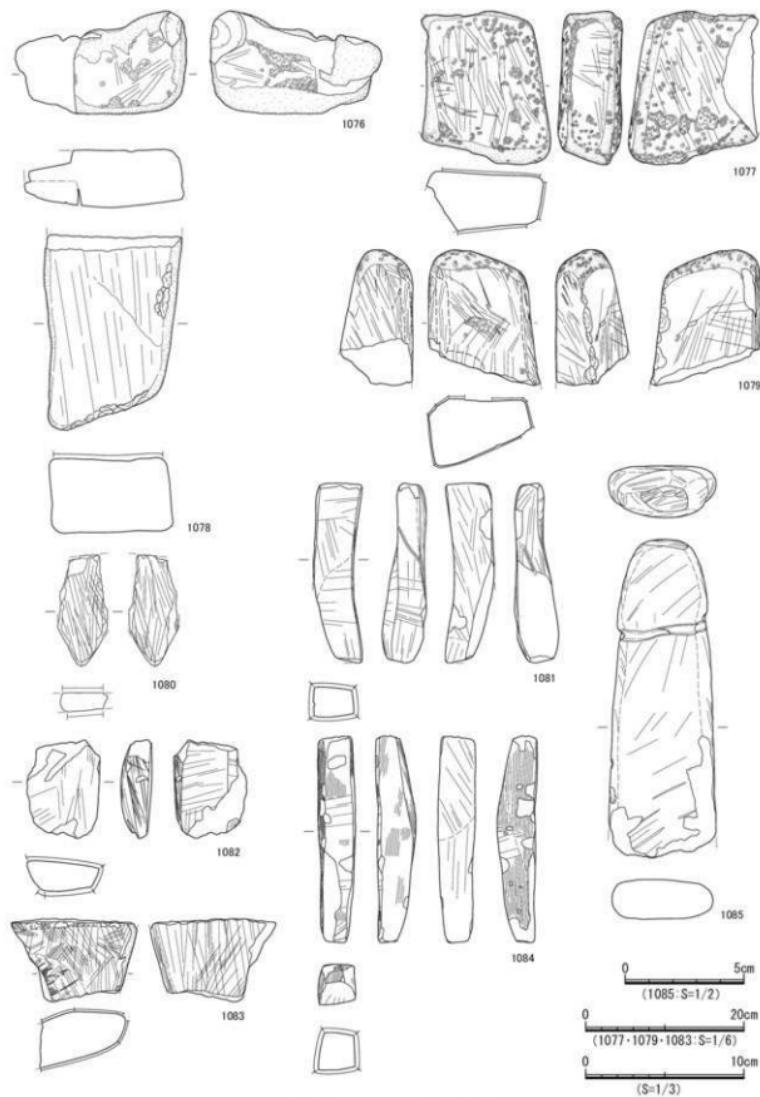


図205 SD0422遺物実測図 (56)

5 土坑・柱穴

竪穴住居跡が密集する地域に分布するものと竪穴住居跡の密集域から離れて位置するものが分布する。竪穴住居跡に密集する地域に位置する土坑から順に述べる。

土坑群（遺構：図207・208）

検出状況 西部北側V層上面において径5～6m程度の円形に分布する土坑群を検出した。A地区では縄文時代晩期の住居跡SB001を確認しており、立地も低地部に位置することから同時期の住居跡とも考えられるが、中央の土坑及び柱痕跡のある柱穴が明瞭ではないので、土坑群とした。

形状 SK01634が内部の土坑となるが、中央には位置しない。柱痕跡にある柱穴はSK01641、SK01624、SK01627、SK01636、SK01643、SP0072、SP0074で、SK01627、SK01643は深さが0.1m程度の深い小穴である。内部にも複数の小穴が認められる。なかには柱痕跡のある小穴もあり、SK01632、SK01636、SK01638、SK01640を結んだ方形に小穴が分布するようみえる。円形を基本とする柱配置と方形を基本とする柱配置の分布が重複している可能性があり、判断が困難である。

埋土 SK01634及び柱痕跡のあるSK01632、SK01636、SK01638、SK01640は単層及び複数の土層が認められたが、その他は単層であった。

遺物出土状況・出土遺物・時期 これらの遺構に伴う遺物の出土が皆無のため、時期の特定が困難である。検出経過からSD0050埋没以前の遺構であることは確実で、SD0050がVII期にほぼ埋没したことからVII期より下る遺構と考えられない。さらに、西側にあるNR001に縄文時代晩期～弥生時代中期の土器が比較的多く出土したことから、縄文時代晩期～弥生時代中期に遡る可能性がある。

SK01617（遺構：図209、遺物：図210）

検出状況 西部北東側の住居跡密集域にあるSB099・SB101の床面の除去後に検出した。

形状 平面形は不整な楕円形である。深さは0.48mあり、比較的深い。

埋土 4層に分層した。壁面から堆積が進行したと考えられる。

遺物出土状況 1層から縄文時代晩期後半の土器1086、VI～VII期の土器小片が数点出土した。

出土遺物 1086は低い突堤上に貝による押引きが認められる。

時期 VI期SB099・VII～III期SB101より先行するので、VI～VII期以前であろうか。

SK01668（遺構：図211、遺物：図212）

検出状況 西部北東側、SZ051の北溝上面で確認した。

形状 平面形は楕円形である。中央付近を現代構によって滅失している。

埋土 3層に分層した。壁面から自然堆積したと考えられる。

遺物出土状況 上層からVI～VII期の土器片がわずかに出土した。

出土遺物 1088はVII期高環D5類。多条沈線と連弧文が施文される。口縁端部が外傾し、極細の多条沈線が認められる。

時期 わずかながら出土した土器よりVII期以降と考えられる。

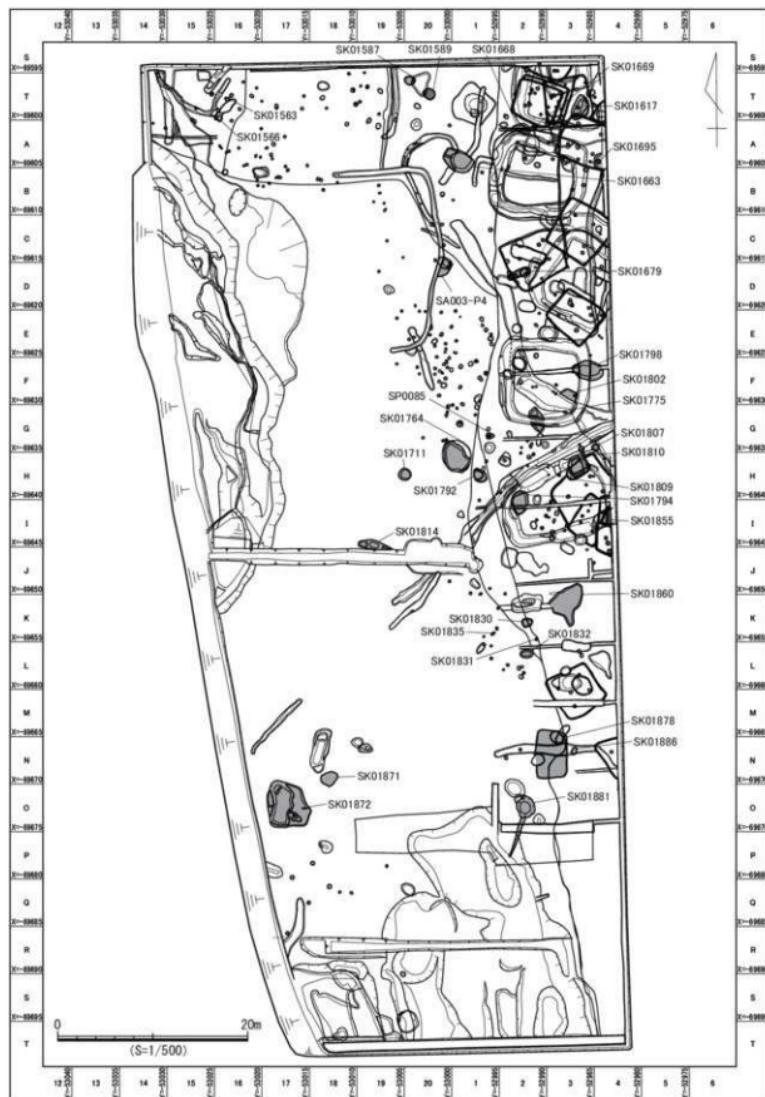


図206 土坑位置図

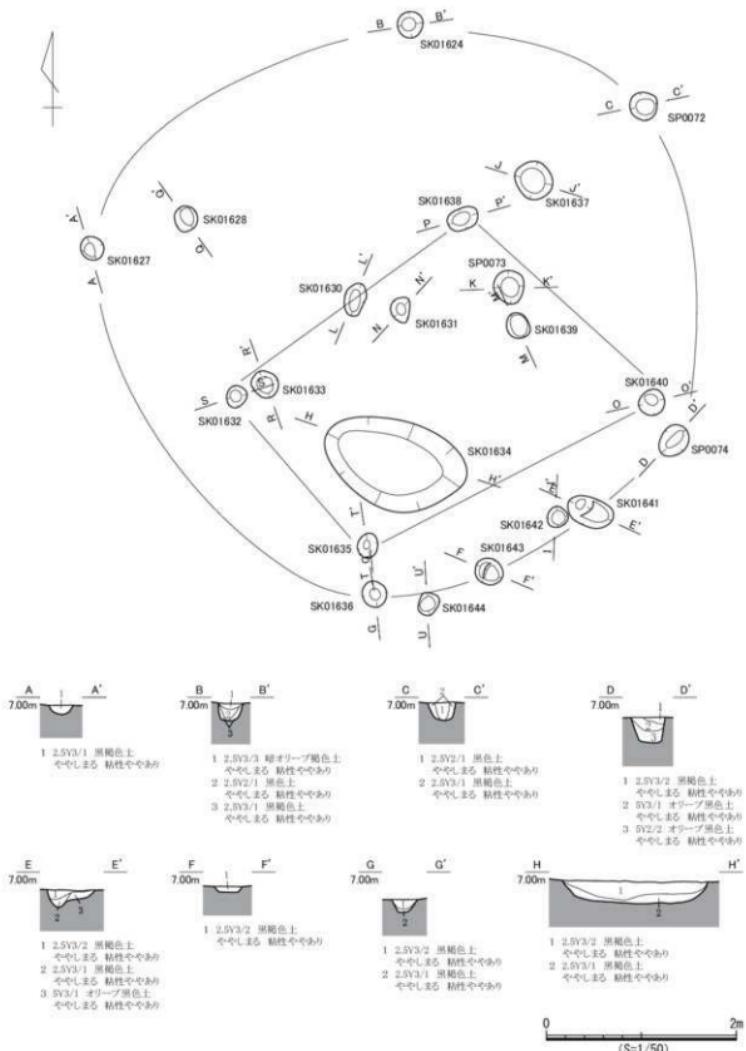


図207 土坑群遺構図（1）

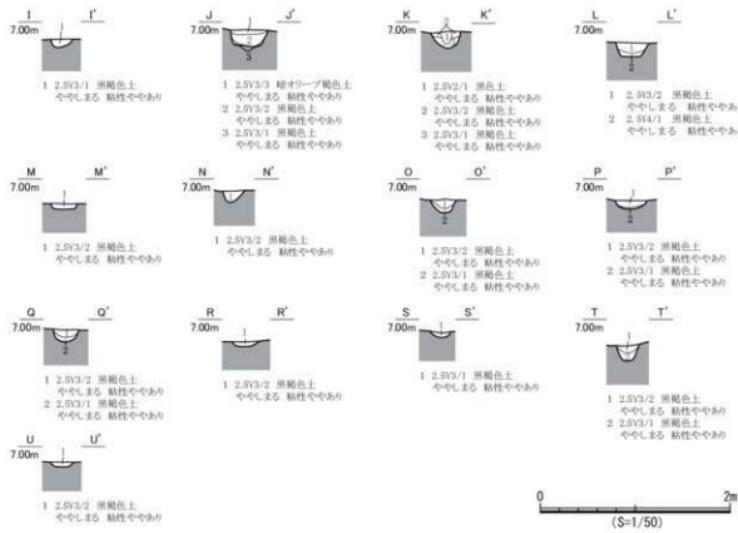


図208 土坑群遺構図(2)

SK01669 (遺構: 図211、遺物: 図212)

検出状況 SK01668に隣接する土坑。SZ051北溝上面で検出した。平面形の大半を現代溝によって滅失している。

形状 1/2程度を滅失しているが、確認範囲から梢円形を呈すると考えられる。

埋土 2層に分層した。自然堆積である。

遺物出土状況 上層からVI～VII期の土器片がわずかに出土した。

出土遺物 1089は高坪D5類。多条沈線・連弧文が3帯施文される。

時期 わずかながら出土した土器よりVI期以降と考えられる。

SK01679 (遺構: 図209、遺物: 図210)

検出状況 西部北東側の住居跡密集域にあるSB104の上面で検出した。SB104より後出し、SB104とは関係のない遺構と考えられる。

形状 平面形は長方形である。深さは0.12mと浅い。

埋土 2層に分層した。中央がレンズ状の堆積を示し、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 100点あまりのVI～VII期の土器小片が出土した。

出土遺物 1087のS字甕B類のみが図示可能な資料であった。

時期 VI～3期のSB104よりも後出し、出土したV～VII期の土器小片からVII期以降と考えられる。

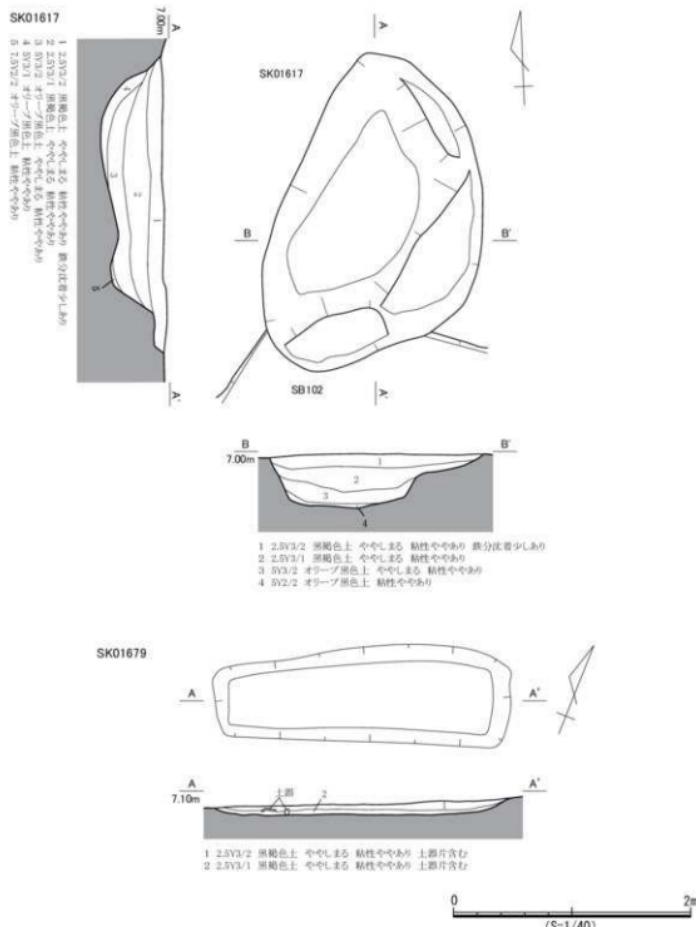


図209 SK01617・SK01679遺構図



図210 SK01617・SK01679遺物実測図

SK01695（遺構：図211、遺物：図212）

検出状況 西部北東側の住居跡密集域において、SB102埋土を掘削して形成された土坑。09_4地点に連続する遺構が確認できなかったので、東端は調査区以外にあると考えられる。埋土を人為的に埋めた可能性があるので、土坑墓の可能性がある。

形状 確認した平面形は不整な円形もしくは楕円形を呈すると考えられる。底面が平坦で、壁面は緩やかである。

埋土 5層に分層した。埋土はブロック状の土層がみられ、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 上層・下層の区別なく、VI～VII期の土器片が出土した。1092はVII期壺の柳ヶ坪型壺で口縁部がほぼ完存する。正面で出土し、器面に強い被熱痕が認められる。出土状況・被熱痕から1092は胴部を人為的に欠損させた上で設置して、被熱を受けた可能性があるが、周囲には焼土は認められなかった。また、接合はできなかったが、S字甕1093の同一個体が図示した以外にも出土した。

出土遺物 4点を図示した。1092は口縁部内外ともに羽状文があり、打ち欠きも認められる。1090は口縁部が大きく開き、坏部の浅いVII期高坏D2類。1091は甕A類。1093はS字甕の胴部片。ヨコハケがないのでS字甕D類であろう。1092からみてVII期に相当する。1091はV期の資料である。小片のため混入の可能性が高い。

時期 1091のように混入資料も認められるが、壺1092・甕1093が遺存状況及び出土状況からみて時期決定資料と考えられるので、VII期であろう。高坏1090はこれまでVII-3期に位置する資料だが、VII期まで下る可能性がある。現状では壺1092・甕1093とともに共伴するとしてVII期と考える。今後、資料によって再検討したい。

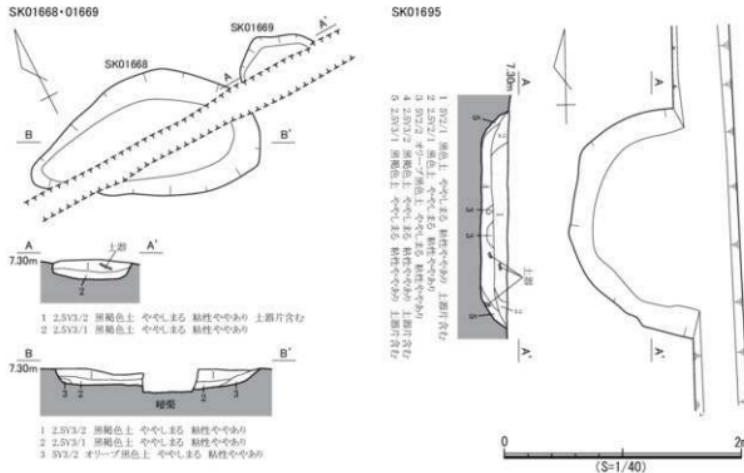


図211 SK01668・SK01669・SK01695遺構図

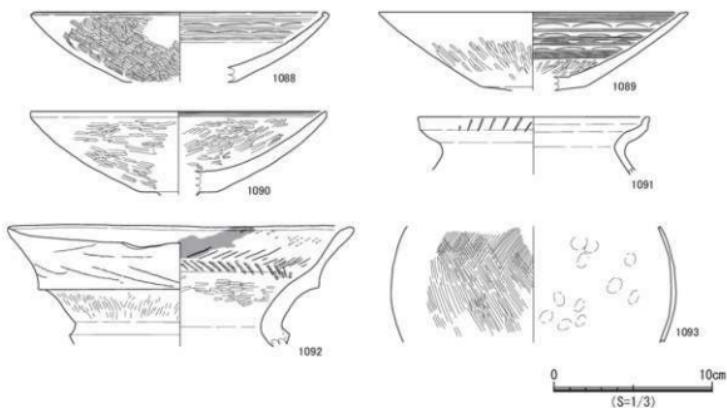


図212 SK01668・SK01669・SK01695遺物実測図

SK01775（遺構：図213、遺物：図214）

検出状況 西部東端中央付近、住居跡密集域の北側に位置する。V層上面で検出した。SZ053南溝上で検出した。先後関係はSK01775>SZ053。図213で先後関係は逆のようにみえるが、SZ053南溝掘削中に先後関係を確認したことによる。

形状 南北に長軸のある不整な楕円形を呈す。長軸は2.8m程度で深さは最深部で0.4m程度と深い。断面形は皿形で、壁面は緩やかである。

埋土 5層に分層した。壁面から埋没したと考えられる。

遺物出土状況 土器片は1094・1095が破片となって1層から出土した。

出土遺物 いずれも高坏D類で、端部内傾面をもつ。1094は内傾面のみに多重沈線を施文するが、1095は内傾面以下にも多重沈線に加えて連弧文を施文する。VII-3期の資料である。

時期 出土土器からVII-3期と考えられる。

SK01794（遺構：図215、遺物：図216）

検出状況 西部東端中央付近、住居跡密集域の西側に位置する。V層上面で検出した。SZ054周溝北西隅で検出した。SZ054周溝より後出す。

形状 平面形は楕円形である。深さは0.1mをやや越える程度で浅い。南側の一部を現代溝によって削平される。

埋土 2層に分層した。自然堆積である。

遺物出土状況 上層からV-VII期の土器片がわずかに出土した。いずれも小片であった。

出土遺物 1096は壺FもしくはG類の口縁部。1097は高坏D2類。口縁端部に細かな多条沈線がある。744は高坏G3類。

時期 わずかに出土した土器からVII期の可能性が高い。

SK01798（遺構：図217、遺物：図218）

検出状況 西部北東側住居跡密集域の南側、V層上面で検出した。SZ053の西溝を掘削しており、その先後関係はSK01798>SZ053である。長軸方向は現代溝による削平を受けている。

形状 減失している部分はあるが、平面形は橢円形を呈する。長軸3.0m・短軸2.1m。壁面は緩やかな傾斜でそのまま底面に移行する。

埋土 4層の堆積が認められ、壁面から徐々に埋没が進行したと考えられる。底面からは調査中、湧水が認められた。

遺物出土状況 上層から100点あまりのVI～VII期の土器小片が出土した。そのうち、1点を図示した。

出土遺物 1099はVII期高環H2類の脚部で多条沈線と山形文がみられる。山形文は連弧文的な施文である。

時期 出土した土器からVII期と思われる。

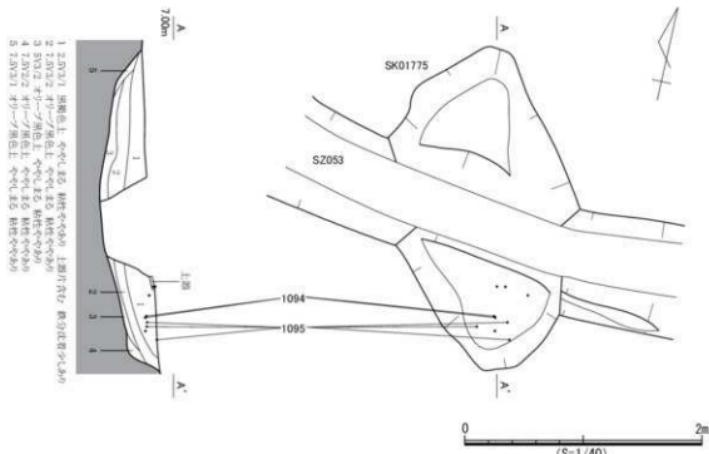


図213 SK01775遺構図

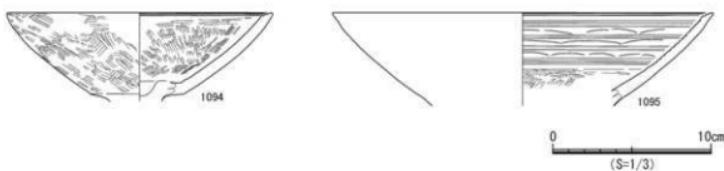


図214 SK01775遺物実測図

SK01802 (遺構: 図219、遺物: 図220)

検出状況 西部北東側の住居跡密集域に位置し、SZ053の方舟部南東部に隣接する。SZ053掘削後にその壁面において検出したため、本来の平面形は不明である。先後関係はSK01802>SZ053である。SD0427とも重複関係が認められ、整理するとSK01802>SD0427>SZ053である。小穴のSK01803、単独柱穴SP0086と関連させると住居跡の一部となる可能性があるが、SK01803に柱痕跡が確認できなかったこと、本来の平面形が不明で壁溝も認められないことから、SKと判断した。

形状 確認できた南辺・東辺からすると方形を呈する可能性がある。深さ0.16mと浅い。

埋土 2層の水平堆積が認められる。自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土からVI期の土器がわずかに出土した。なかでも1100は底部が完存する遺存状況の

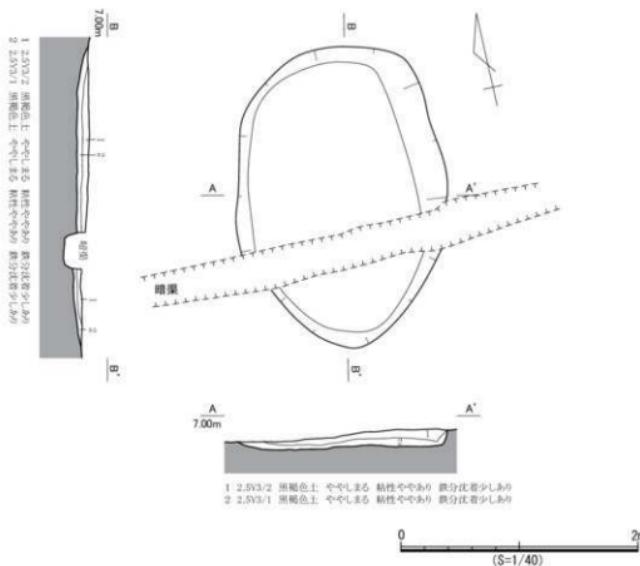


図215 SK01794遺構図



図216 SK01794遺物実測図

よい資料である。

出土遺物 1100は壺H2a類でやや内湾した口縁部をもつ。H2類としては頸部の径が大きく、口縁端部の形成も壺G類と類似する。VI期の資料である。

時期 出土土器からVI期と考えられる。

SK01807 (遺構: 図219、遺物: 図220)

検出状況 西部東側中央付近の住居跡密集域に北側に位置し、SZ054北溝と重複する。その先後関係は、SK01807>SZ054である。V層上面で検出した。

形状 平面形は径0.8m前後の不整円形である。深度は0.05mとかなり浅い。

埋土 埋土は単層であった。

遺物出土状況 中央から胴部下半を欠損するIV期甕1101が立位で出土した。

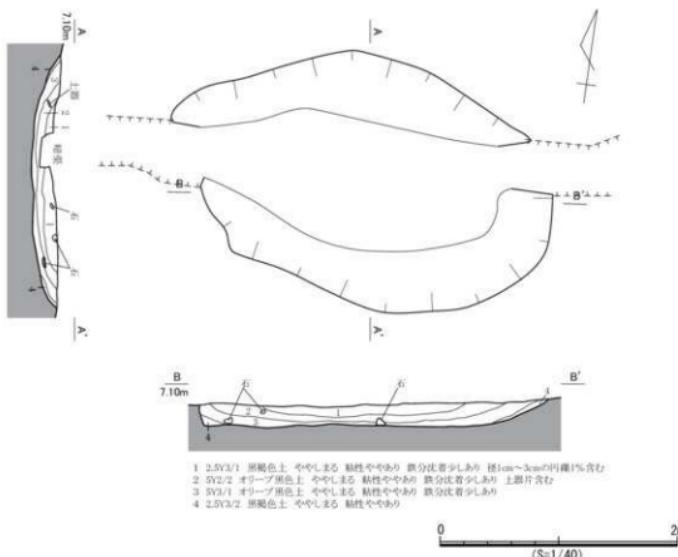
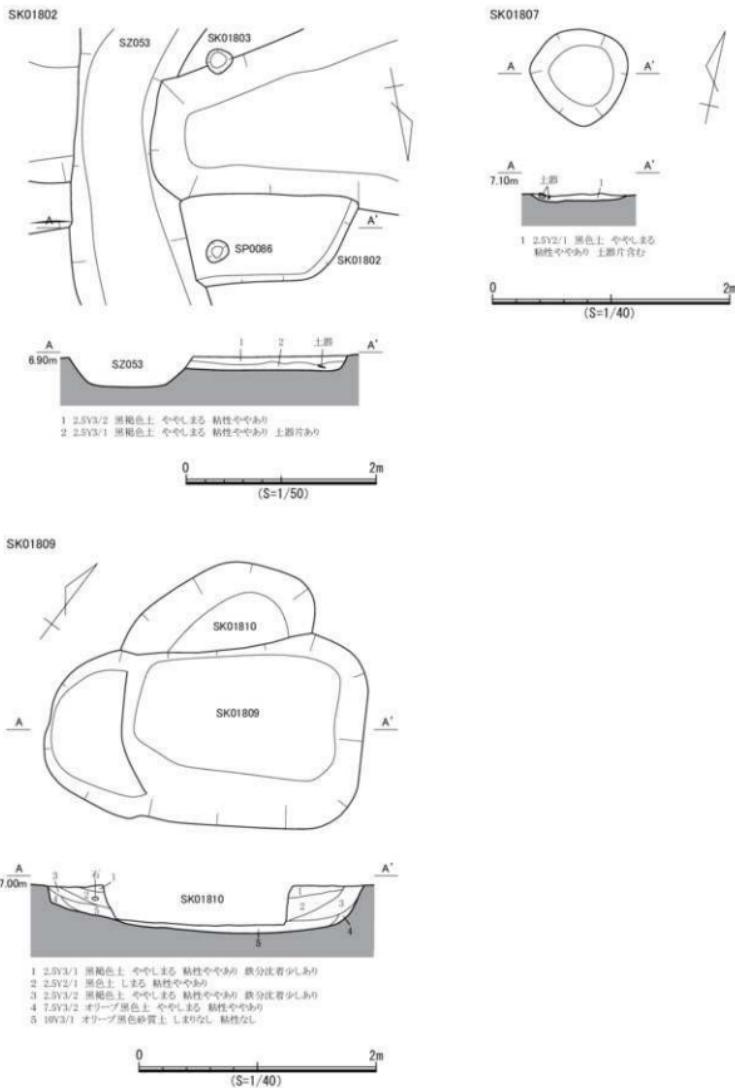


図217 SK01798遺構図



図218 SK01798遺物実測図



出土遺物 1101は口縁部が受口状に屈曲して立ち上がり、胴部にわざかなタタキの痕跡が認められるので、IV期甕A3類と考えられる。

時期 出土土器からIV期と考えられる。

SK01809 (遺構: 図219、遺物: 図220)

検出状況 西部東端中央付近、住居跡密集域のV層上面で検出した。SK01810>SK01809>SB106の重複関係が認められる。そのため、SK01810によって平面形の大半は失われている。

形状 底面はやや平坦で、残る壁面はかなり急角度で立ち上がる。深さは0.3mあり、SK01810の掘削は底面まで及んでいない。

埋土 5層に分層した。壁面から埋没したと考えられる。

遺物出土状況 V～VII期の土器片が上層～中層で出土した。比較的多くの土器片が出土したが、いずれも小片であった。

出土遺物 図示資料は2点。1102は高坏C4類。1103は高坏G3c類脚部である。いずれもVII期前半の資料であろう。

時期 出土土器及びSK01810に先行することから、VII期前半と考えられる。

SK01810 (遺構: 図221、遺物: 図222)

検出状況 西部東端中央付近、住居跡密集域のV層上面で検出した。SZ054の北溝・SB106と重複し、その先後関係はSK01810>SB106>SZ054の先後関係がある。

形状 平面形は楕円形を呈す。断面形は皿形で、深さは最深部で0.32mをはかる。壁面は緩やかで、そのまま底面へ移行する。

埋土 4層の堆積が安定して認められた。壁面から徐々に埋没したと考えられる。

遺物出土状況 埋土から多くの土器片が出土した。その多くはVII期の資料である。上層出土も認められるが、3・4層出土が大半を占める。

出土遺物 出土土器は高坏D2類(1104・1106)・D3類(1108)・D4類(1112)・D5(1109・1110)・H2類(1105・1107)、壺J2類(1111)・E類(1119)、鉢H類(1117)、S字甕B類の甕D2類(1120・1124)・甕C2類(1121)と多岐にわたるが、高坏の形状及び文様構成に類似点が多い。高坏は口縁部が開くが坏底部には段差が残る。口縁端部に内傾面をもつ資料が多く、狭い範囲に極細の多条沈線を施文する場合と、多重沈線と連弧文を多段化して施文する場合がある。多重沈線と連弧文の組み合わせは1111や1117にもみられる。1112は多条沈線間に山形文と対向する斜線文を施文する。脚部まで器形復元できた例がないが、出土した脚部には形状差がない。上述の高坏と組み合う可能性がある。いずれも短脚で掘部が強く内湾する。1117の鉢はこれまで出土例がない。胴部に精緻なミガキのある資料で、口縁部が頸部で強く屈折してそれから弱く外反しながら立ち上がる。1119は加飾の著しい壺で内面に羽状文、屈折部に円形浮文をもつ。1123は手捏ね土器。これらの出土資料は高坏の形式とそれ以外の器種にみられる文様構成の類似点から同時性の強い資料である。また、S字甕B類と伴出したことをから一定の時間の定点を与えることが可能と考えられる。高坏の特徴及びS字甕B類の存在から、本出土資料はVII-3期に位置づけられる。1118は高坏C類でVII期前半の資料で、混入であろう。

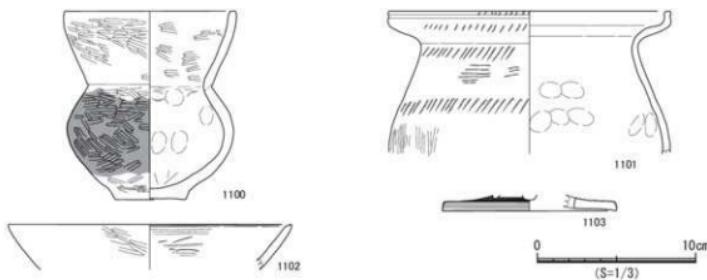
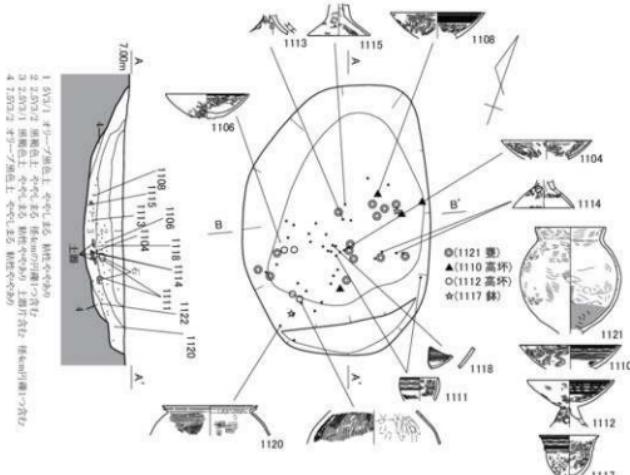


図220 SK01802・SK01807・SK01809遺物実測図



1 5Y3/1 オリーブ黒色土 上やしまる 粘性ややあり
2 2.5Y3/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 土源片含む
3 2.5Y3/1 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 土源片含む
4 7.5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり

図221 SK01810遺構図

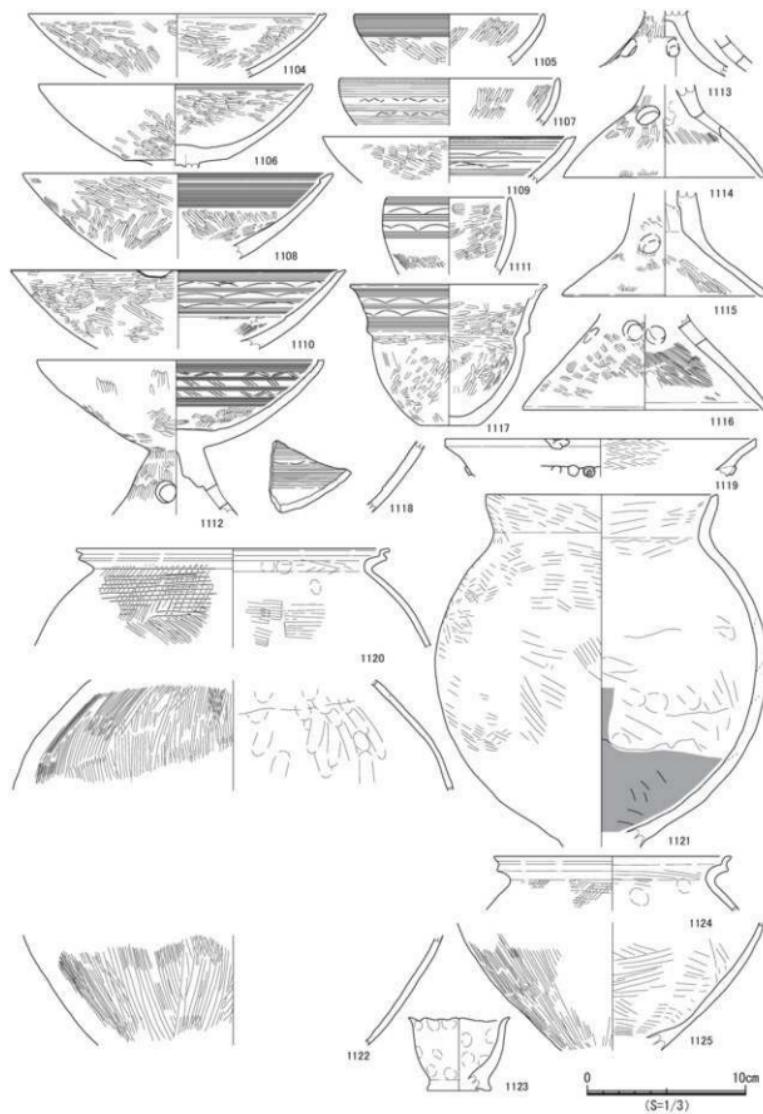


図222 SK01810遺物実測図

時期 出土土器からVII～III期と考えられる。

SK01830（遺構：図223、遺物：図224）

検出状況 西部東端ほぼ中央、SB109の北側で検出した。

形状 平面形は橢円形を呈す。断面形は皿形で、深さは0.1m強と浅い。

埋土 2層に分層した。自然堆積である。

遺物出土状況 上層からVI～VII期の土器片がわずかに出土した。高坪（1127・1129）、器台（1128）、鉢（1131）、甕脚部（1130）が出土した。

出土遺物 1127は内面に多条沈線と山形文の加飾のあるVII期高坪C類。1129はV～VI期高坪B類脚部であろう。1128は器台B3類の受部で精緻なミガキが認められる。1131は底部を欠損するが、底部に穿孔のある鉢B2類。胸部に輪積み痕をそのまま残し、やや粗雑なつくりである。ともにVI期前半の資料であろう。

時期 わずかに出土した土器からVII期以降の可能性が高い。

SK01831（遺構：図223、遺物：図224）

検出状況 西部東側ほぼ中央SB109の北側に位置する。V層上面で検出した。

形状 平面形は円形を呈す。深さは0.15m程度で、壁面は緩やかである。

埋土 2層に分層した。自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 V期高坪1133・器台1132のみが上層から出土した。

出土遺物 1133は高坪B類で坪部屈曲部に沈線があり、円形の赤彩がある。内面にも赤彩がみられる。1132はA1類。いずれもV期の資料である。

時期 出土土器よりV期と考えられる。

SK01832（遺構：図225、遺物：図226）

検出状況 西部東端ほぼ中央、SB109の北側で検出した。

形状 平面形は橢円形を呈す。深さは0.07mと浅く、壁面は緩やかである。

埋土 3層に分層した。壁面から埋没したと考えられる。

遺物出土状況 上層からV～IX期の比較的大きな土器片が20点あまり出土した。

出土遺物 1134はV期器台A類で、口縁端部に棒状浮文がある。1135はV期後半～VI期前半の高坪B類脚部、1136はVII期の高坪D類脚部であろう。1137はVII期の甕B3類で口縁部が頸部で屈折する。1138・1140はVI～VII期甕脚部。1139はVII～IX期の柳ヶ坪型の壺で、内外面に羽状文がある。

時期 複数時期の資料が出土しているが、1139が最も残りのよい大型の土器片であることから、VII～IX期と考えられる。

SK01835（遺構：図223、遺物：図224）

検出状況 西部東側ほぼ中央SB109の北側に位置する。V層上面で検出した。

形状 平面形は橢円形を呈する。

埋土 埋土は黒褐色土の單層であった。

遺物出土状況 V期の甕1126が出土した。

出土遺物 1126は口縁部が屈曲するが外面の屈曲はやや弱い。内面は強いナデがあり、外面に比べると屈曲が強い。端部は凹面を形成するほど強いナデがみられる。V期後半の甕A2b類であろう。

時期 出土土器よりV期後半と考えられる。

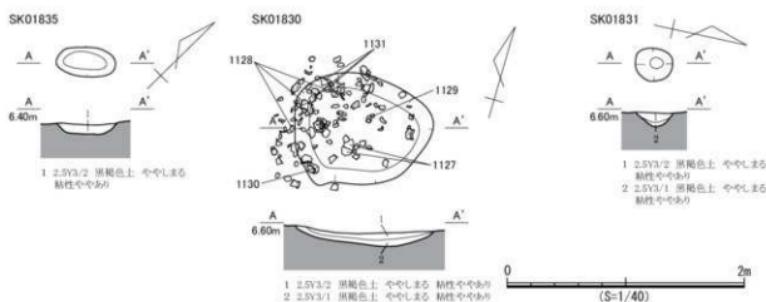


図223 SK01830・SK01831・SK01835遺構図

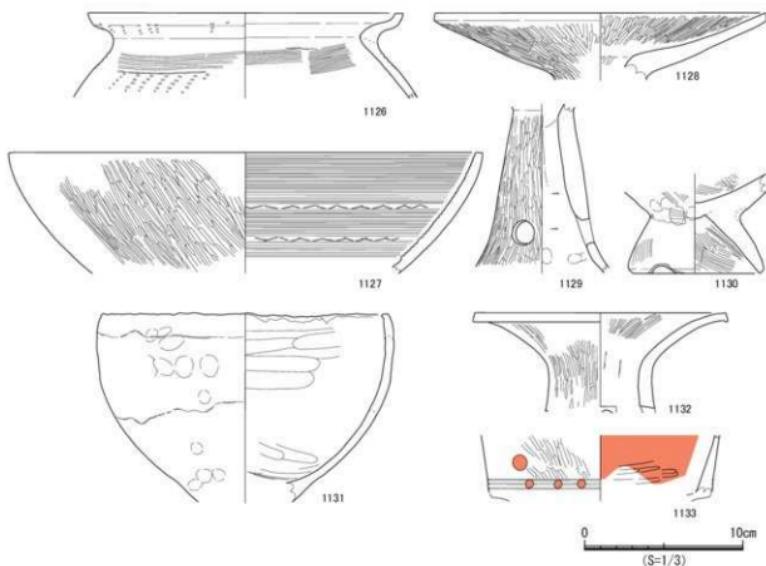


図224 SK01830・SK01831・SK01835遺物実測図

SK01855（遺構：図227、遺物：図228）

検出状況 西部東端ほぼ中央の住居跡密集域に位置する土坑。V層上面で確認し、SB107>SK01855の重複関係がある。確認した平面形は北西隅のみで、大半は調査区域外にある。

形状 挖形の2/3程度が調査区域外にあるが、おそらく方形を呈する大型の土坑。深さ0.5m程度で、壁面が緩やかである。

埋土 5層に分層した。壁面から埋没が進行したと考えられる。

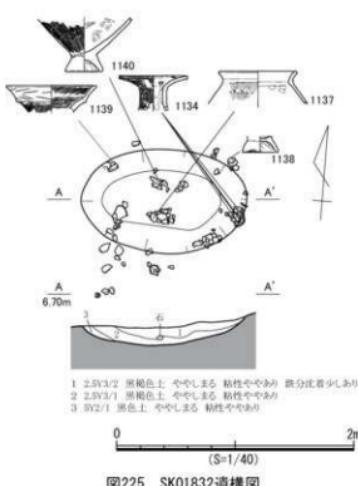


図225 SK01832遺構図

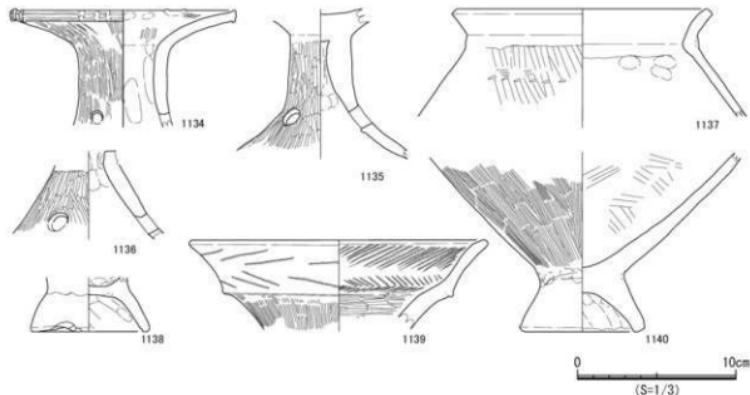


図226 SK01832遺物実測図

遺物出土状況 土器片は中層より上位の土層から小片が出土した。縄文時代～VI期までの資料が認められる。

出土遺物 5点を図示した。1145は縄文時代晩期の土器片で条痕が認められる。1141は高杯B2類。脚部を欠損するが杯部はほぼ残存する。1144は甕B1類で、口縁端部に刺突文がある。1141・1144はともにV期である。1143はVI期の壺C類。

時期 明らかな混入資料である1145を除くと、本土坑出土資料はV期の1141・1144とVI期1142・1143が出土している。出土レベルを検討すると、1142・1144は検出面、1145は床面上付近、1141・1143はほぼ底面直上で安定した出土状況とは考えられず、判断が難しい。1143はSB106及びSB106

南側に位置するSK01849と接合関係をもつことから、1143が本遺構の時期を示す可能性が高いと考えられる。VI期後半～VII期前半の可能性が高い。

SK01860（遺構：図229、遺物：図231）

検出状況 西部東端中央付近、SB109の北に位置する不定形な形状の土坑。V層上面で検出した。

形状 B断面では長さが4mちかくある大型の土坑。平面形は長軸が北東方向にある梢円形のようにみえるが、北側に一部突出する箇所が認められる。深さは0.2m前後あり、底面は平坦である。

埋土 5層に分層した。壁面から埋没したと考えられる。

遺物出土状況 土器片が1層中央付近から多く出土した。出土土器はV期後半のものが多くを占める。わずかにI期及びVII期の土器片も出土した。

出土遺物 器台A1類（1152～1155）、高環H1類（1156）、甕A類（1149・1150）、甕B類（1147）、S字甕（1148）などが出土した。器台は受部を欠損するものの、V～3期に相当する資料である。その他資料はV期後半の資料である。1149・1150は口縁部が明瞭に屈曲して、刺突文と直線文をもつ。1149は胴部及び底部までの器形が判明する資料。平底で胴部がやや膨らむ。1156は出土例の少ない椀状高環

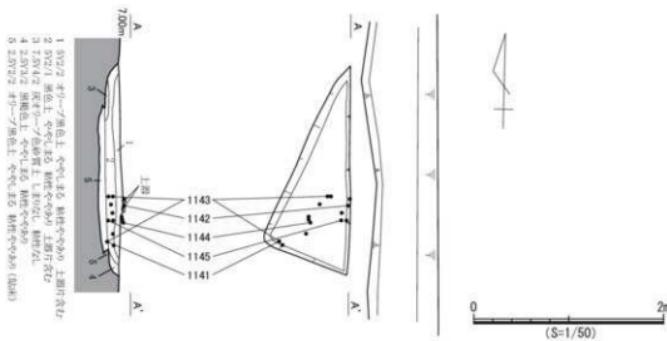


図227 SK01855遺構図

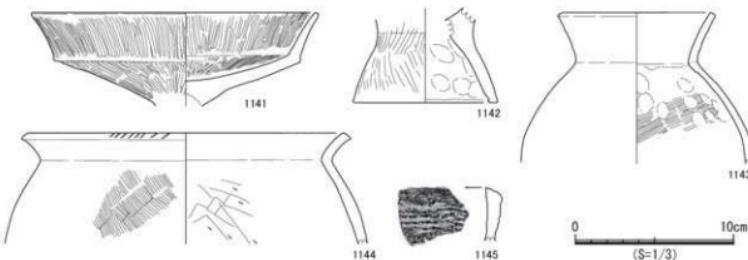


図228 SK01855遺物実測図

でH1類。脚部は低脚で付根から円錐状に開き、裾部が強く外反する。1148はS字甕D類でVII期の資料であろう。また、1157はI期遠賀川系土器の小壺。口縁部を欠損し、胴部には沈線がめぐる。1154・1156はSB109と接合関係がある。

時期 I期・VII期の資料が認められるが、いざれも埋没時に混入した資料と判断し、出土状況及び出土土器からV-3期の可能性ある。

SK01878（遺構：図229、遺物：図230）

検出状況 西部南東側のV層上面で検出した。底面にはSD0437・SD0439があり、SK01879・SK01885・SK01878・SD0437・SD0439・SK01884・SK01878の先後関係がある。

形状 平面形は方形を呈し、その規模は堅穴住居跡に類似するが柱穴など床面上の施設が確認できなかつたので、土坑として報告する。深さは0.1mと浅い。

埋土 3層に分層した。自然堆積である。

遺物出土状況 VI～VII期の土器片がわずかに出土したのみであった。1146は土製紡錘車で床面から出土した。

出土遺物 1146は長軸7.6cm・短軸7.4cmのほぼ円形で、厚さ3cmは認められる。孔の径0.9cmをはかる大型品である。胎土・焼成はVI～VII期と類似する。

時期 わずかに出土した土器からVI～VII期の可能性が高い。

SK01886（遺構：図232、遺物：図233）

検出状況 西部東側ほぼ中央、SB110の西側に位置する。V層上面で検出した。SD0439を掘削して形成されている。

形状 平面形は楕円形である。底面は比較的平坦である。

埋土 3層に分層した。自然堆積である。

遺物出土状況 土器片がわずかに上層から出土した。

出土遺物 1159は裾部に打ち欠きのある甕脚部である。VI～VII期の資料である。

時期 出土土器からVI～VII期と考えられる。

SK01563（遺構：図232、遺物：図233）

検出状況 西部北西側のV層上面で検出した。

形状 平面形は不整な楕円形を呈し、深さは0.2m弱である。

埋土 2層に分層した。自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 1層からVI期後半の土器片が出土した。

出土遺物 鉢2点（1160・1163）・甕2点（1161・1162）を図示した。1163は口縁部を欠損する。SD0050と接合関係がある。1160は加飾のない鉢A類。1162は甕A4類で口縁端部が痕跡的に屈曲する。

時期 出土土器からVI期後半と考えられる。

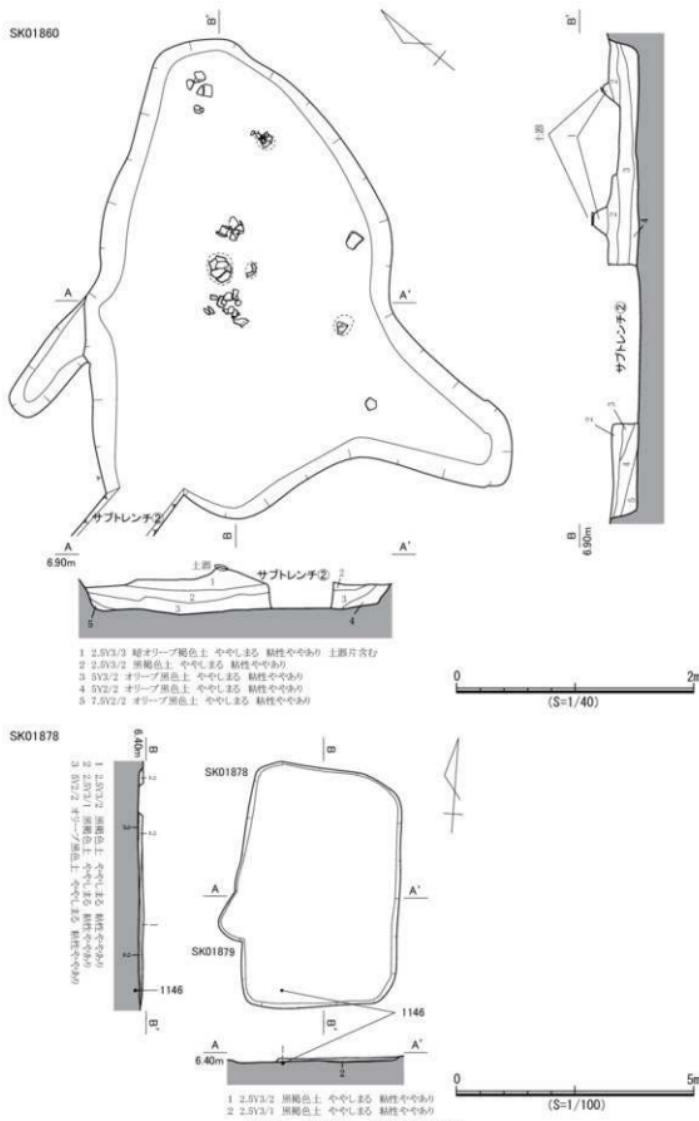


図229 SK01860・SK01878遺構図

SK01566 (遺構: 図232、遺物: 図233)

検出状況 西部北西側V層上面で検出した。

形状 平面形は橢円形を呈する。深さは0.1m程度である。

埋土 2層に分層した。自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 上層からVII期窯の比較的大きな土器片が出土した。口縁部から胴部の破片と脚部が認められたが、同一個体ではなかった。

出土遺物 上層出土の甕2点を図示した。1164はVI～VII期の甕脚部。1165は甕B3類。口縁端部の強いナデが顕著である。VII期の資料である。

時期 出土土器から、VII期と考えられる。

SK01587 (遺構: 図234、遺物: 図235)

検出状況 西部北側、SD0417の東側に位置する。V層上面で検出した。

形状 径1.1m前後の円形を呈す。深さは0.2mで、底面は比較的平坦である。

埋土 4層に分層した。壁面から徐々に埋没したと考えられる。

遺物出土状況 1層からV～VI期の土器片が100点あまり出土した。

出土遺物 1166は高壺B3類で精緻なミガキがあり、口縁端部の平坦面が顕著。1167はS字甕A類でD1b類。1168は据部を欠損するが器台B1a類であろう。いずれもVI～I期の資料である。

時期 出土土器からVI～I期と考えられる。

SK01589 (遺構: 図234、遺物: 図235)

検出状況 西部北側、SD0417の東側のV層上面で検出した。

形状 円形の土坑で直径は1.30m程度である。深さは0.2m程度で、壁面は直立する。

埋土 2層に分層した。水平堆積である。埋土中から多くの土器片が出土した。

遺物出土状況 土器片は1・2層から出土したが、1層の出土が圧倒的に多くを占める。

出土遺物 高壺B類が多くみられる(1169～1172)。いずれも口縁部が強く外反する。1171はやや低脚の脚部で据部が強く外反する。735は壺底部の屈曲が明瞭で、脚部は円錐状で据部が開く。器台はA類がみられる(1173～1175)。壺には1176～1178があるが、1176・1177は口頭部を欠損し器形は不明である。1178は壺B類。鉢はA類1180・

1181、B類1179・1183がある。1180の口縁部は強く屈曲して、頸部直下に刺突文と直線文をもつ。1182・1184がある。1182は口縁部がやや屈曲し、内面のみにハケが残る。1184は甕A類。口縁部は形骸化した受口状口縁をもち、頸部に直線文をもつ。高壺B類にまとまりがあるので、多くは同時期の可能性の高い資料といえる。その時期はV～3期と考えられる。

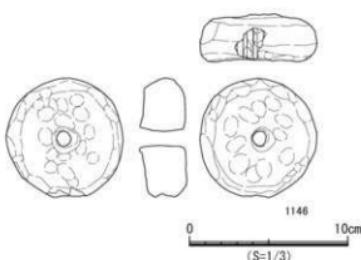


図230 SK01878遺物実測図 (1)

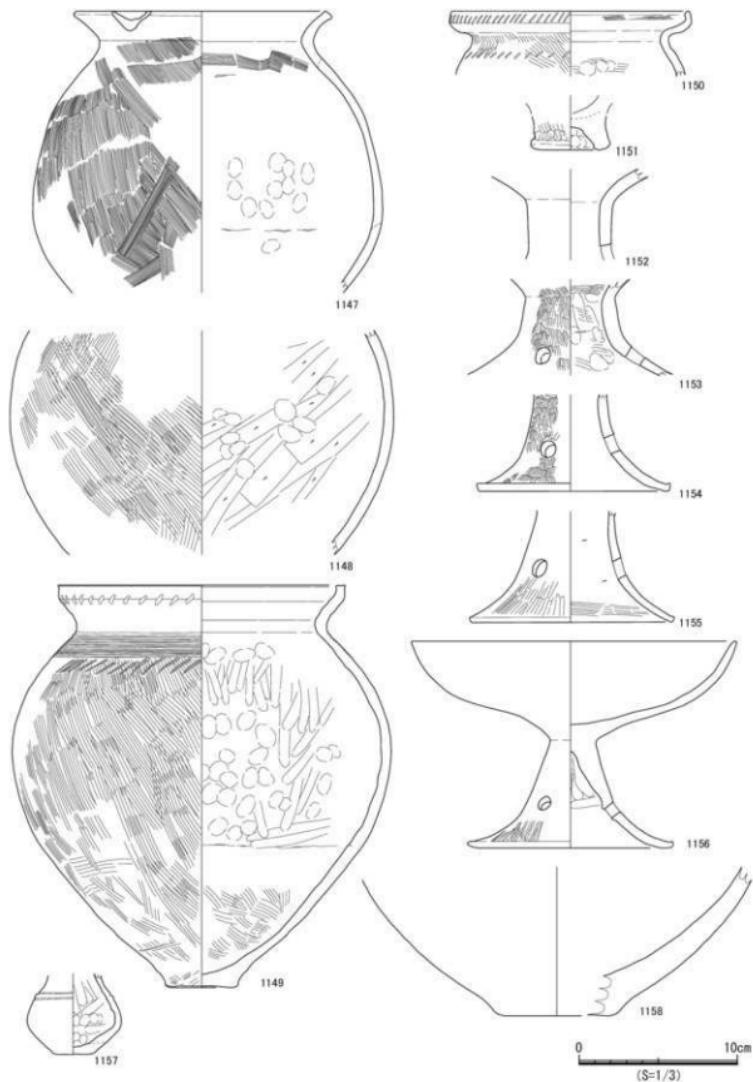


図231 SK01860遺物実測図（2）

時期 出土土器からV-3期と考えられる。

SK01663 (遺構: 図238、遺物: 図239)

検出状況 西部北側、SZ051西溝西側で検出した大型土坑である。

形状 深さは0.7mが残る。平面形は橢円形である。また、西側にはテラス状となる箇所が認められる。

埋土 7層に及ぶ水平堆積が認められ、自然堆積したと考えられる。

遺物出土状況 出土土器は縄文時代晚期後半(1187~1190・1193~1195・1197)、I期(1191・1192)、V期後半~VI期(1185・1186)のおよそ3時期の資料が認められた。その総数は200点をこえる。

出土遺物 1194は断面三角形の素文突帯が貼付される。1193・1197はやや肥厚した口縁端部の下に低い突帯を貼付し、貝による押引きが認められる。1197はその方向が斜位となる。1196は変容壺の胸部

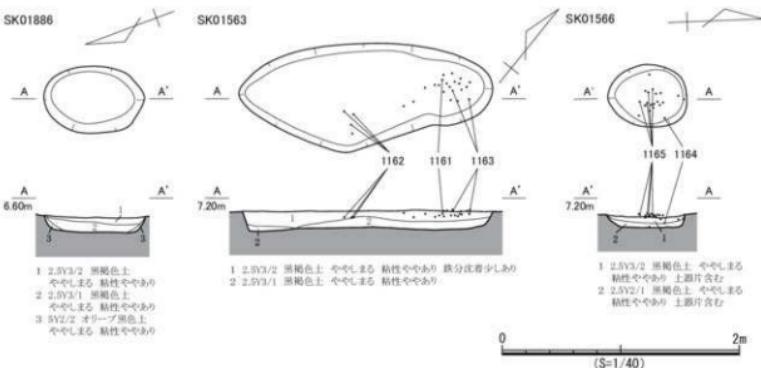


図232 SK01886・SK01563・SK01566構造図

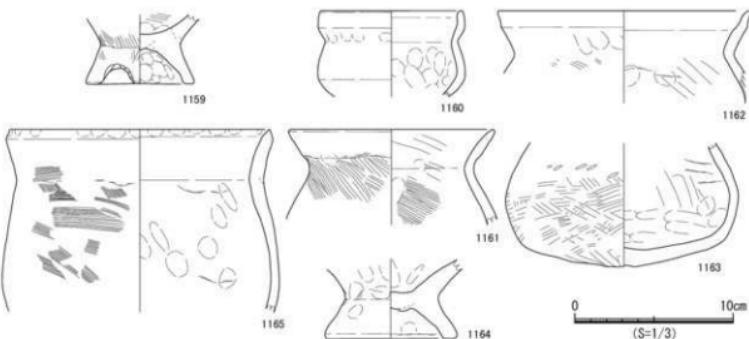
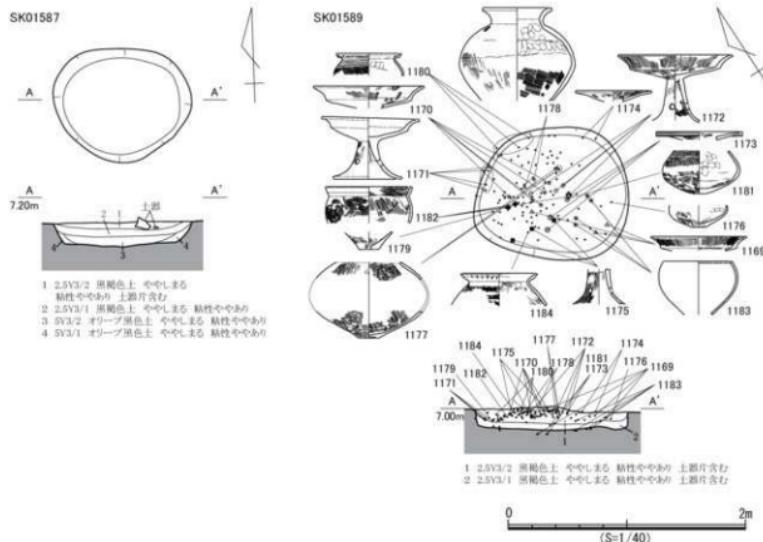


図233 SK01886・SK01563・SK01566遺物実測図

資料。1187は口縁端部に平坦面のある砲弾形の深鉢。1195は口縁部が内傾するのでⅠ期もしくはⅡ期に下る資料かもしれない。1191は小型の壺で、口縁端部を水平方向に拡張する。頸部と胴部に削り出し沈線をもち、底部には打ち欠きによる穿孔が認められる。胎土は赤褐色を呈し、金剛板式に類似する。1192は甕の頸部片。4本のヘラ沈線が認められる。1185・1186は甕A類で口縁端部・頸部に刺突文・直線文があり、V期後半～VI期と考えられる。

時期 本土坑からは縄文時代晩期後半の資料が比較的多く出土し、Ⅰ期の資料にも半完成品が出土した(1191)。縄文時代晩期後半及びⅠ期の資料は下層の5層から比較的多く認められた。これらの資料は下層資料ではあるが、小片も多く、縄文時代晩期後半の資料とⅠ期の資料が共存することは考え



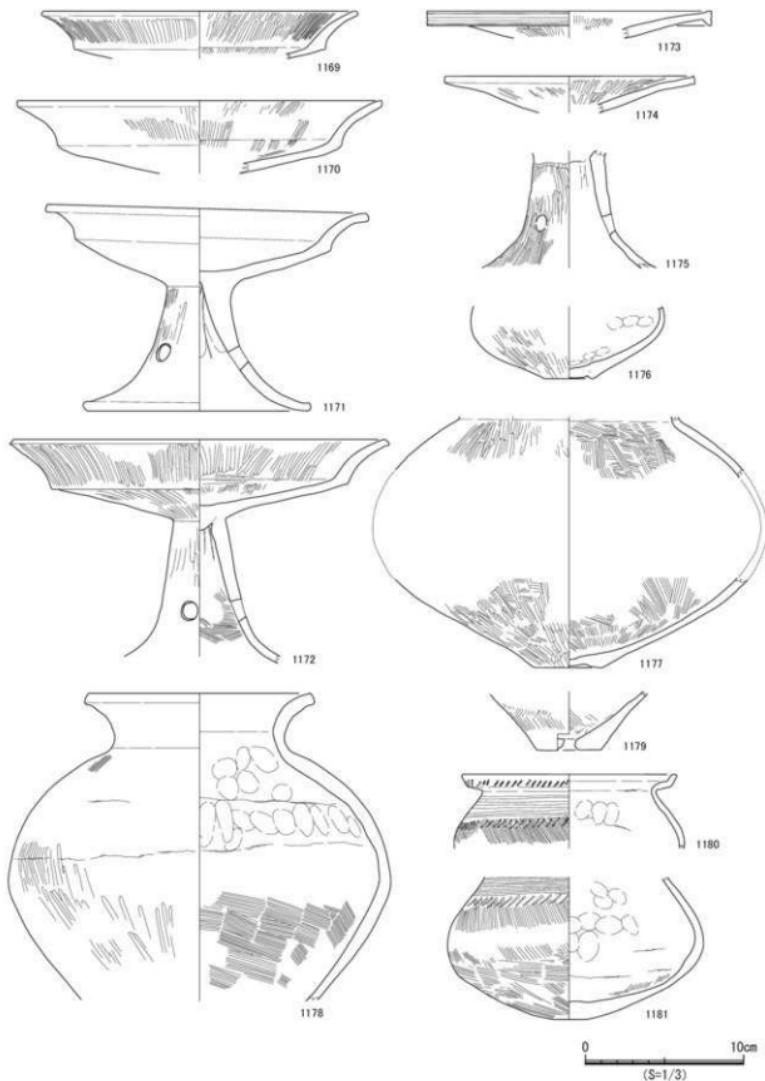


図236 SK01589遺物実測図（2）

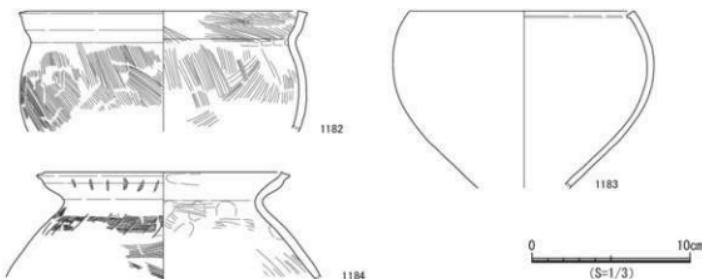


図237 SK01589遺物実測図（3）

られないので、これらの資料は本土坑掘削時期を示す資料ではなく、掘削直後に堆積した土層に混入した資料と考えられる。5層から一部V期後半～VI期以降の土器小片も認めることができ、また、重複する遺構SD0424・SD0425よりも後出すことから判断して、本土坑の掘削時期はV期後半以降であり、その後、周囲に展開していた縄文時代晩期後半及びI期の資料が本土坑内へ再堆積した可能性が高い。

SK01711（遺構：図240、遺物：図241）

検出状況 西部ほぼ中央の低地部、V層上面で検出した。

形状 円形の土坑である。深さ0.2m程度である。

埋土 3層に分層した。自然堆積であると考えられる。

遺物出土状況 出土土器は壺（1198）、高杯（1199）で、上層から出土した。

出土遺物 1199は高杯I類脚部で直線文が3帯認められる。裾部は完存する。V期でも前半の資料であろう。1198は壺の底部。

時期 出土土器からV期前半と考えられる。

SK01764（遺構：図240、遺物：図241）

検出状況 西部ほぼ中央SZ054の西側、V層上面で検出した。

形状 確認面で南北幅3.5m・東西幅3mの大型土坑で、深さ0.8mと深い。

埋土 6層に分層した。水平堆積でゆっくりと埋没が進行したと考えられる。

遺物出土状況 縄文時代晩期後半の資料が比較的多く認められた。中層から上層にかけてVI～VII期の土器小片と混在して出土した。図示可能な資料は1200の1点のみであった。

出土遺物 1200はやや口縁部がわずかに外反する深鉢。端部が比較的平坦である。

時期 出土したVI～VII期の土器小片からVII期以降と考えられる。

SK01792（遺構：図242、遺物：図243）

検出状況 西部ほぼ中央SZ054の西側、SK01764の東側、V層上面で検出した。

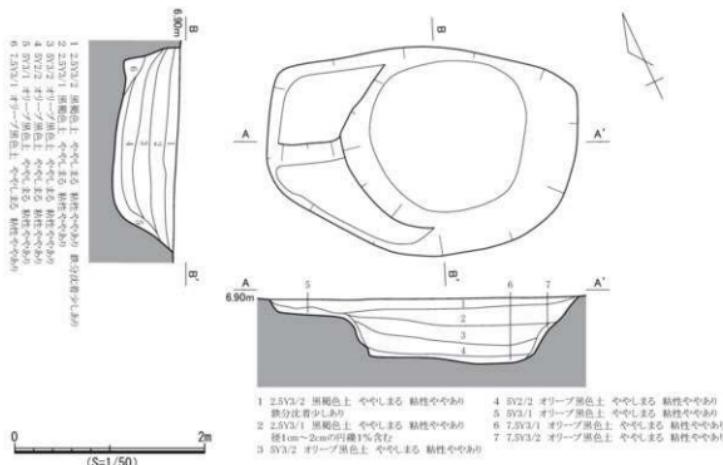


図238 SK01663構造図

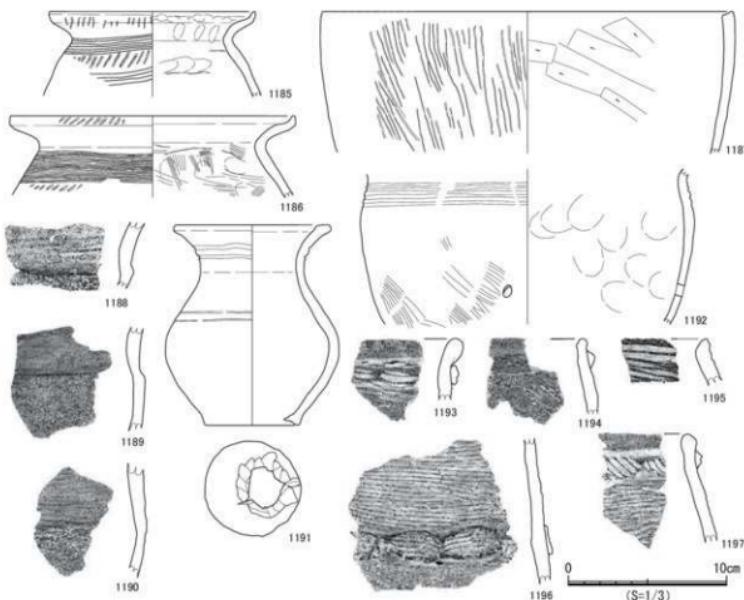


図239 SK01663遺物実測図

形状 平面形は橢円形を呈す。深さは0.6mと深く、断面形は逆台形である。

埋土 6層に分層した。水平な堆積状況である。

遺物出土状況 中層から上層にかけてV～VII期の土器片が出土した。図示できた資料は1201のみであった。

出土遺物 1201は高杯I類の脚部で、V期の可能性がある。

時期 出土したV～VII期の土器小片からVII期以降と考えられる。

SK01814（遺構：図242、遺物：図243）

検出状況 西部ほぼ中央、低地部に位置し、V層上面で検出した。

形状 平面形は橢円形である。深さは0.3m程度である。

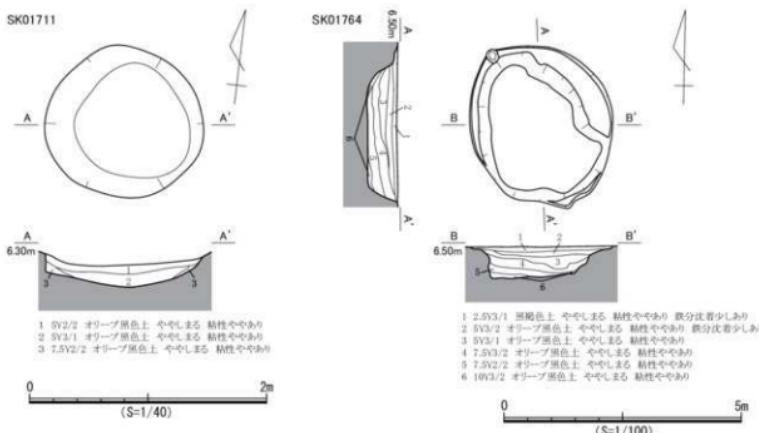


図240 SK01771・SK01764遺構図

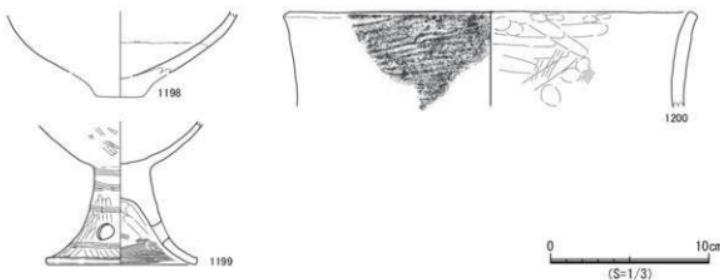


図241 SK01771・SK01764遺物実測図

埋土 4層に分層した。レンズ状の堆積があり、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 上層からVI～VII期の土器小片が100点弱出土した。I期の壺1202がV～VI期の資料に混在して出土した。1202はSK01872出土破片と接合関係をもつことから、二次的移動のある混入資料である。

出土遺物 1202は短く外反する口縁部をもち、頸部に貼付突帯をもつ。胴部には2帯にわたって半截竹管による沈線を施す。

時期 出土したVI～VII期の土器小片からVII期以降と考えられる。

SK01871 (遺構: 図242、遺物: 図243)

検出状況 西部南西側の低地部、SH001の北側に位置する。V層上面で正面拳大～0.3m程度の河原石が集積された状態を検出した。

形状 挖削中及び集石を確認した段階で、河原石が集積された周囲に顕著な掘り込みの有無は確認できなかった。河原石の集積は長軸1.1m・短軸0.6m程度の範囲であった。わずかな土色の違いにより平面形を想定したが、掘り込みがない状態で河原石が集積されたことも考えられる。

埋土 単層であったが、上述のようにやや不明瞭であった。

遺物出土状況 集積された石に人為的な加工や使用した痕跡は認められなかつたが、一部に被熱のある石が認められた。積極的に石器と認定できる材料を欠いたことから、遺物として持ち帰らなかつた。しかし、自然流路の近くにあって、何らかの利用をするために、一定の規格のもとに河原石を集積した可能性がある。

時期 時期決定資料は認められない。SH001に近いことから、SH001に関連する可能性が考えられるため、SH001と同様、VII期以降と考えられる。

SK01872 (遺構: 図244、遺物: 図245)

検出状況 西部南西側の低地部、SH001の北側に位置する。V層上面で検出した。

形状 確認した平面形は不整形で、上端は南北幅4.8m・東西幅4.3mの大きな規模をもつ。深さは0.6m。中央部の底面は平坦で、それぞれの壁面はやや階段状となる部位が認められる。底面の一部はVI層に及びその隣層が露出し、湧水が認められた。

埋土 南北断面で7層に分層した。壁面から徐々に堆積したと考えられる。

遺物出土状況 1層からは銅鑼(1203)が出土した。また、底面では自然木を確認した。土器資料は上層から出土した。銅鑼とともに原位置出土ではなく、再堆積による移動の結果によるものであろう。

出土遺物 土器資料は3点図示した。いずれも繩文時代晩期後半の資料である。1204・1206は突帯のある資料で、1206の内面には沈線がある。1205は浅鉢であろう。1203は逆刺の有茎銅鑼である。平面形状は三角形鑼に近い。鋳造時のバリが茎部に残り、茎下端部は平坦な切断面をもつ。裏面の基部は中央付近で薄くなる。

時期 時期を明確に示す遺物は認められないが、図示した以外の土器小片がVI～VII期と考えられるので、VII期以降の可能性が高い。

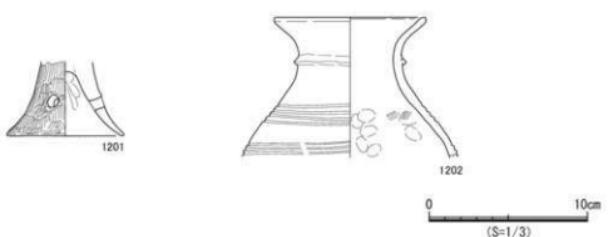
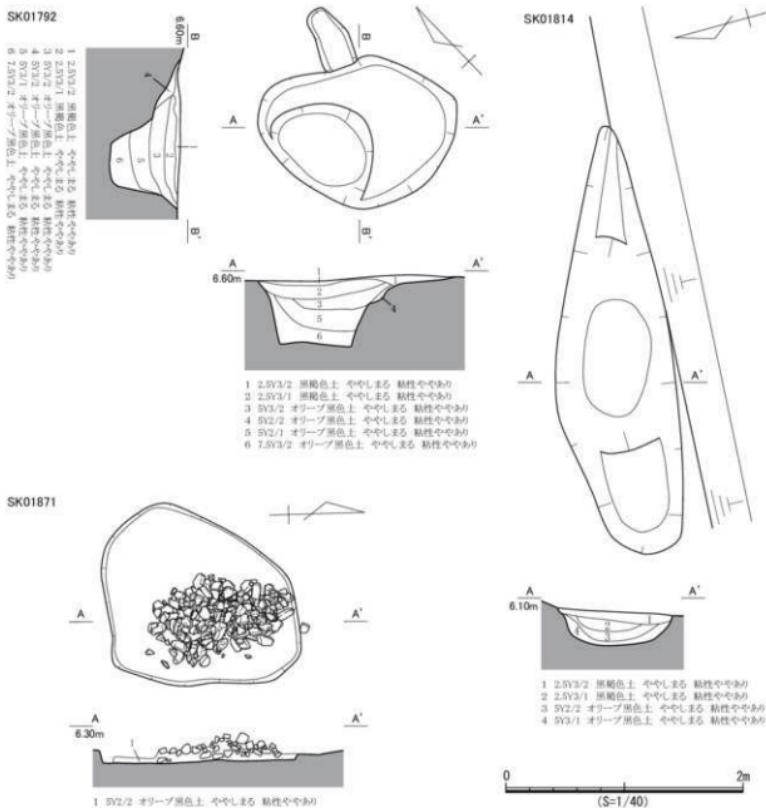


図243 SK01792・SK01814・SK01871遺物実測図

SK01881 (遺構: 図246~252、遺物: 図253~261)

検出状況 西部中央やや南側の低地部に位置する。V層上面で検出した。

形状 長軸2.50m・短軸1.90mの楕円形を呈し、深さは0.76mと深い。断面形は逆台形で、壁面は急傾斜である。

埋土 埋土は7層の堆積が認められ、ゆっくりと埋没が進行したと考えられる。

遺物出土状況 検出段階及び1層から多量の土器片が出土した。多くが完形品にちかい資料であり、それらが破損した検出状況を示すことから、原位置を保持した資料と考えられる。人為的に廃棄もしくは設置した可能性がある。これらの土器資料はVI-3段階に相当し、本土坑が完全埋没する直前に

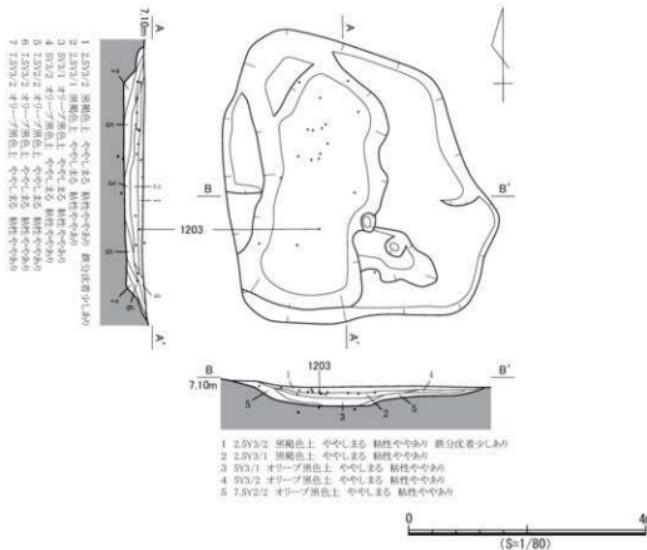


図244 SK01872遺構図

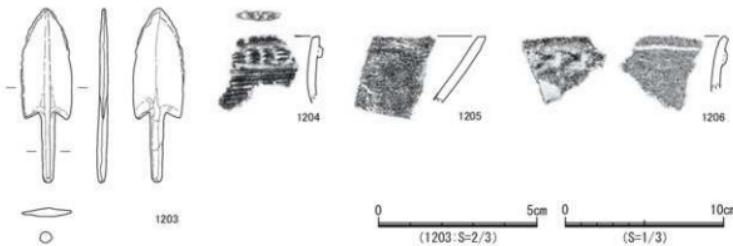


図245 SK01872遺物実測図

土器資料が残されたことから、本土坑の掘削はVI-3期以前と考えられる。また、中層で木製品が2点（1263・1264）出土した。一部にIV期の甕が出土した（1258・1259）。1258は検出面で出土したが、1259はV-3期の土器資料が出土したよりも下層の2層で出土した。また、破片資料ではあるがIV期甕（1261）が中層から出土した。

出土遺物 前述したIV期の資料及び混入資料を除くとVI-3期の一括資料と考えられる。全部で56点を図示した。高環の大半はC3類に相当し、脚部がやや低脚で脚部中位に位置する透孔からやや内溝する裾部をもつ。透孔は2穿孔1組2方向（1218・1220）と1穿孔1組3方向（1215～1217）の2形態がみられる。前者は口縁端部内面に多条沈線がみられ、後者と比較すると低脚化が進んでいる。本土坑出土資料においては口縁端部内面多条沈線の有無と透孔・脚部の形態が一致するかのように見える。今後の検討課題である。環部は大きく開き、环底部の段は形骸化しつつも認められる。口縁端部の内傾面は1215にある。1207は屈曲が著しく形骸化した高環B3b類で、波状文が認められる。小片で摩耗が著しい。1211は長脚の脚部で中位より下にある透孔から脚部が円錐形に開く。1207・1211はV-3～VI-1期の資料であり、混入資料の可能性が高い。1208・1209・1219は小型の高環で、1209は外面

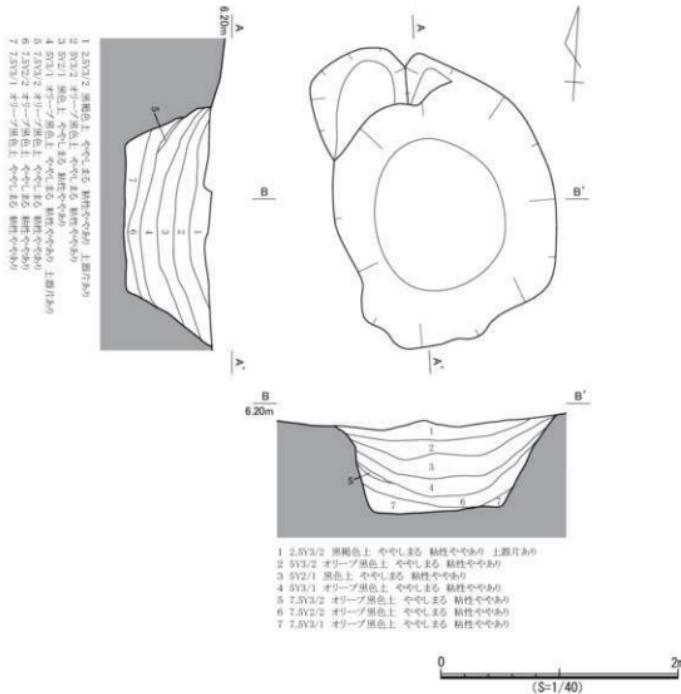
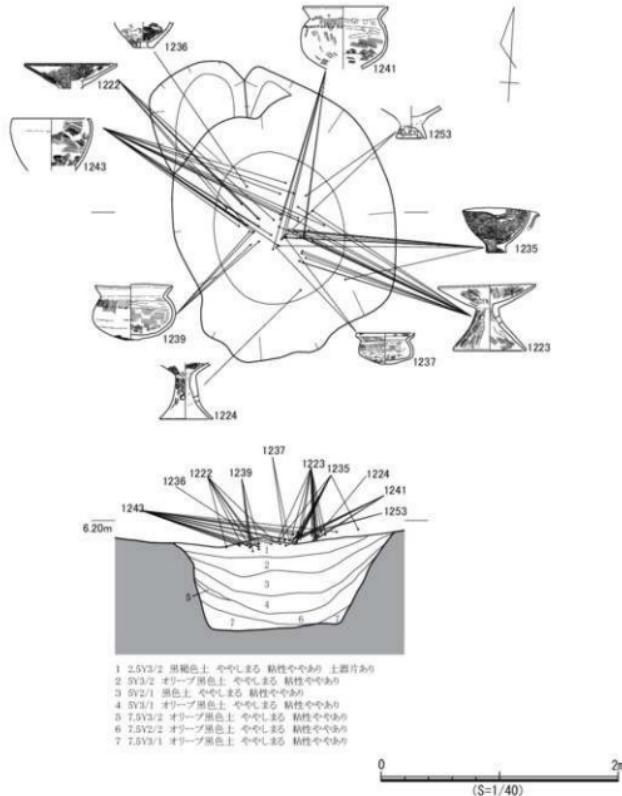


図246 SK01881遺構図（1）

に多条沈線をもつ。1219はほぼ完存する資料で、高坏C類に酷似する形状である。1221は高坏I2類。口縁部がわざかに直立し、脚裾部が強く外反し端部に平坦面をもつ。器台は高坏に比べると出土数が少なく、3点を図示したのみである（1222～1224）。器形が判明する資料は1223のみで器台B3類である。壺は中型壺G類の良好な資料がえられた（1226・1228・1229・1234）。1228・1229は形状が酷似し、丁寧なミガキのある精製品。口縁部に多条沈線をもち、器面に強い被熱の痕跡が残る。SD0422で出土例があり、同様に被熱痕がある。何か別の使用例が考えられる。1229には口縁部に打ち欠きが認められる。1234は脚台のつく例外的な資料。下膨れの胴部をもち、口縁部・脚部ともに多重沈線を施文する。1230～1232は壺H類。1232は口頭部を欠損する。1230・1231は口縁部に多重沈線をもち、1231の口縁部形状は1228・1229に類似する。1233・1238は大型壺で器形復元できた数少ない資料。1233がA1類、1238はA4類。1233は口縁端部に円形浮文があり、胴部上半の狭い範囲に直線文と波状文を施文す



る。胴部は卵形にちかい。1238は胴部がやや扁平で口縁部内面・胴部に羽状文を施文する。胴部は直線文と羽状文が2帯、最下段に円形刺突文がみられる。鉢はA2類（1237）、A3類（1239・1241）、B類（1236・1243）、D類（1235）がある。鉢A類はいざれも頸部直下の直線文が認められないが、刺突文が残る。1237は口縁部の屈曲が明瞭だが、1239・1241は痕跡的となり胴部がやや丸くなる。1235は丁寧なミガキのある精製品で片口がつく。突出気味の底部から口縁部が半球状に立ち上がる。甕はA1類

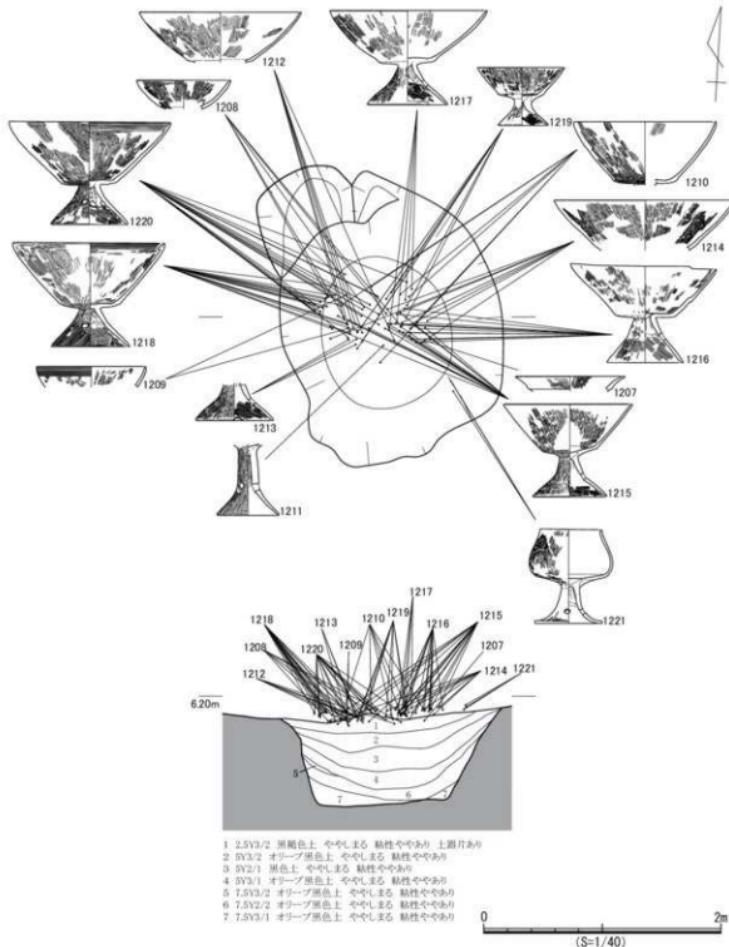


図248 SK01881遺構図（3）

(1241・1257)、2類(1245)、3類(1246)、4類(1249)、B2類(1244・1247)、B3類(1242)、C2類(1240・1250)、S字甕A類のD1b類(1248・1256)の各種が認められる。A1類は口縁部内面の強いナデが特徴的で胴部に粗いハケと刺突文がみられる。A1類は倒卵形の胴部をもち、低い脚台をもつ(1257)。いずれも大型品である。1256は大型品で胴部中央に打ち欠きが認められる。1258・1259・1261・1262はIV期の資料。1258はIV期甕B類で口縁部及び底部を打ち欠いた可能性がある。1259は甕A類でやはり胴部を打ち欠いた可能性がある。1261もIV期甕A類。1262はIV期壺。以上4点はIV期の資料である。1260は壺口縁部で羽状文がある。VII期資料の混入であろう。1263・1264は農具素材の分割材。1263は

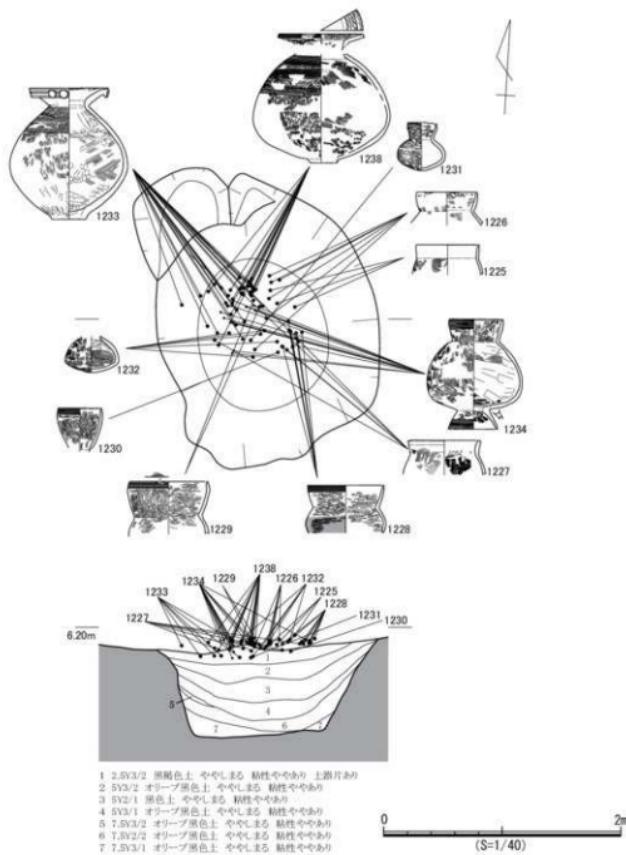


図249 SKO1881構造図(4)

右側の側面は直線的だが、左側縁は欠損によるものか凹凸が激しい。1264はミカン割り分割材で厚み調整加工前の農具素材。右側縁は真っすぐに加工されているのに対し、左側縁は斜めに加工されている。上端部は切断痕、下端部は左側を斜めに加工する。

時期 VI-3期の一括資料は自然堆積の最上層の出土資料であり、埋没時期を示す資料と考えられる。中層からIV期1261が出土したこと及び遺存状況のよい1259がVI-3期資料より下位で出土したが、底面から出土したこと及び出土状況にも一括性がないことからみて、埋没時期のVI-3期以前と高いと考えられる。

SK01894（遺構：図262～265、遺物：図266～274）

検出状況 調査区南東隅に位置し、大型の土坑。08-3地点に統くと考えられる。V層上面で検出し、北端の立ち上がりを調査区南壁から18m程度離れている箇所で確認した。

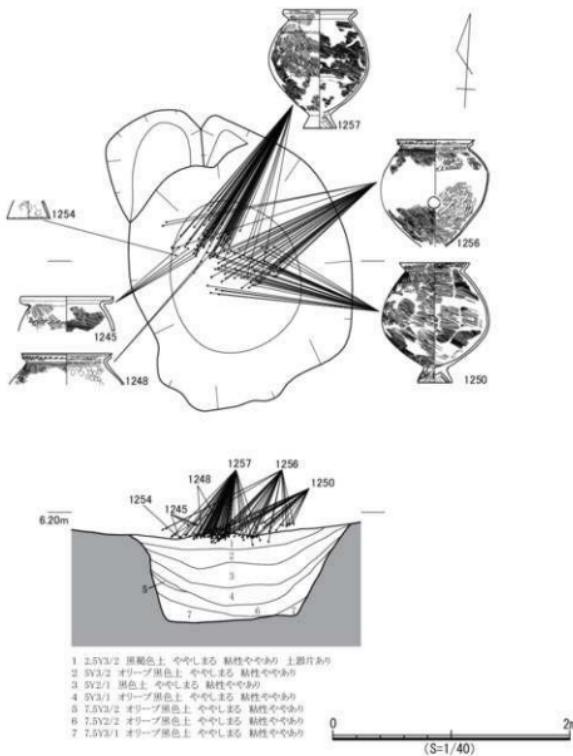
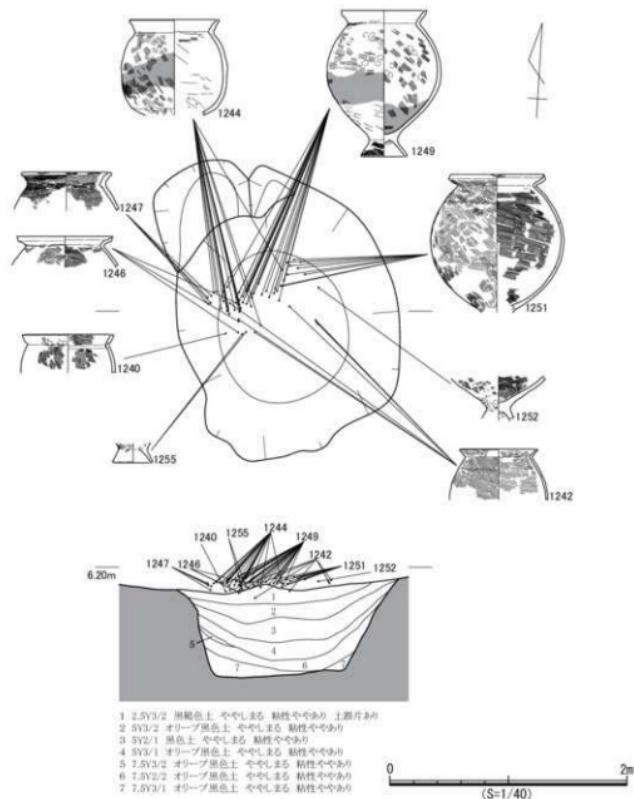


図250 SK01894遺構図（5）

形状 不整な長楕円形になると考えられる。調査区南壁では幅約15m・深さ1.2m程度である。

埋土 A断面では上層にSD0422の堆積が認められる。SK01894に相当する土層は12層の堆積が認められる。6層より下位に堆積する土層（下層）には灰色土及び砂質土系の堆積が認められ、3～5層（上層）とは堆積環境が異なる。B断面では15層の堆積が認められ、いずれも自然堆積である。8・9層（下層）は砂質土の堆積が認められ、A断面と同様、8・9層より上位の堆積する土層と堆積環境が異なる。A断面では7層から縄文時代晚期の遺物の出土が顕著である。その下位層にあたる土層は無遺物層と考えられる。B断面の8・9層も遺物の出土がなく、A断面と類似する砂質土が堆積するので、無遺物層で、その堆積は縄文時代晚期以前に遡る可能性が高い。

遺物出土状況 出土土器を検討すると、縄文時代晚期～Ⅶ期までの土器資料が認められる。多少の混



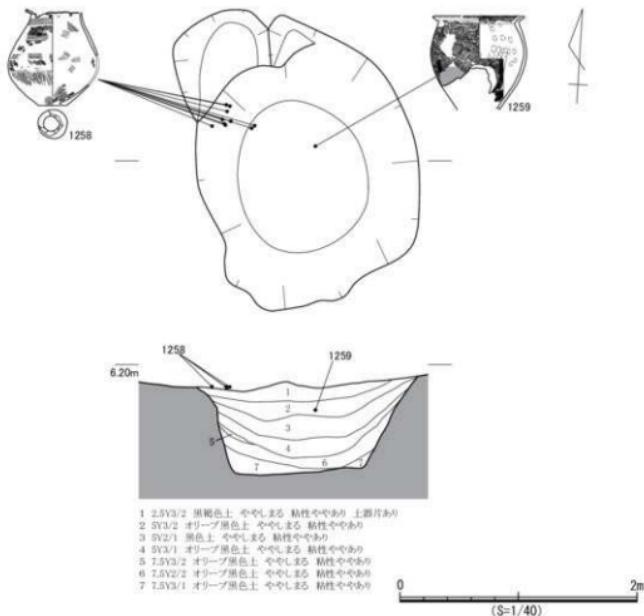


図252 SK01881遺構図(7)

じりはあるが、最上層付近からV～VII期の資料、7層付近から縄文時代晩期の資料が出土した。

出土遺物 縄文時代晩期の資料は晩期中葉に近い時期の資料から確認できる。その資料に1339・1341・1344があげられる。1344は口縁端部に押引きがある。1341は外面にケズリ痕跡のある資料で、口縁部がわずかに内湾する。1355は突带上にヘラによる押引きのある資料。1343にはユビによる押圧が認められる。1337・1342・1347は低突带上に貝殻条痕のある資料。口縁端部がかるく外反し、突帶以下の形状は内傾する。1345・1350・1352は低い素文突帯をもつ口縁部片。1338・1346の胴部片とともに変容壺の可能性もある。浮線文系土器を3点図示した(1268・1351・1360)。1268は半完存品の大型浅鉢で良好な資料である。口縁部が短く内傾し、肩部には眼鏡状の文様帯がある。肩部以下には胴部中位まで2帯の文様帯を施す。沈線による三角形の区画を2帯配置し、区画内は疑似縄文で充填する。また、文様帯間に刺突文がある。胴部下半の無文帯は精緻なミガキを施し、胎土も精緻であり、精製品の資料である。胎土も在地のものと異なり、搬入品であろう。北陸地方の下野式と類似する。1351は口縁部が強く屈曲する浅鉢。肩部に眼鏡状文様帯が配置され、その下には摩耗が著しいが羊歯状の文様が認められる。1360は底部。精緻なミガキがあり、底部の平面形がやや楕円形を呈す。1356はI期遠賀川系土器の壺胴部片。無軸木葉文が施される。1358はクシ状の条痕を確認できるので、弥生時代中期のII期資料の可能性が高い。1357も弥生時代中期の壺頭部片である。以上の資料が主に6～7層から出土した。なかには1層から出土した資料も含まれるが、後述するV～VII期相

当の資料が6～7層から出土していないので、6～7層（A断面）は縄文時代晩期～弥生時代中期にかけて堆積したとの想定が可能である。

その他、図示した資料の多くが、V～VII期である。比較的遺存状況がよく、器形が復元できた資料が目立つ。V期に相当する資料として高坏（1266・1270）、器台（1282～1286）、壺（1289・1291）、鉢（1308）、甕（1315・1317・1320・1322・1324・1326・1366）があげられる。1270は高坏B類で精緻なミガキのある資料。口縁部が坏底部から強く屈折して立ち上がる。器台はA類で、基部径が大きく受部が大きく開く。1285は端部に沈線がめぐる。甕は口縁部の屈曲が明瞭で、頭部以下に文様をもつ資料が顕著である。1315・1317は波状文を施し、1320は直線文が2帯認められる。V期相当の資料は後半段階の資料はそれほど多くないと考えられる。残る資料がVI～VII期の資料と考えられ、その多くがVI期であろう。1271は高坏B類、1269は高坏C類でVI期の前半に相当する。1290は壺半完存品の良好な資料。

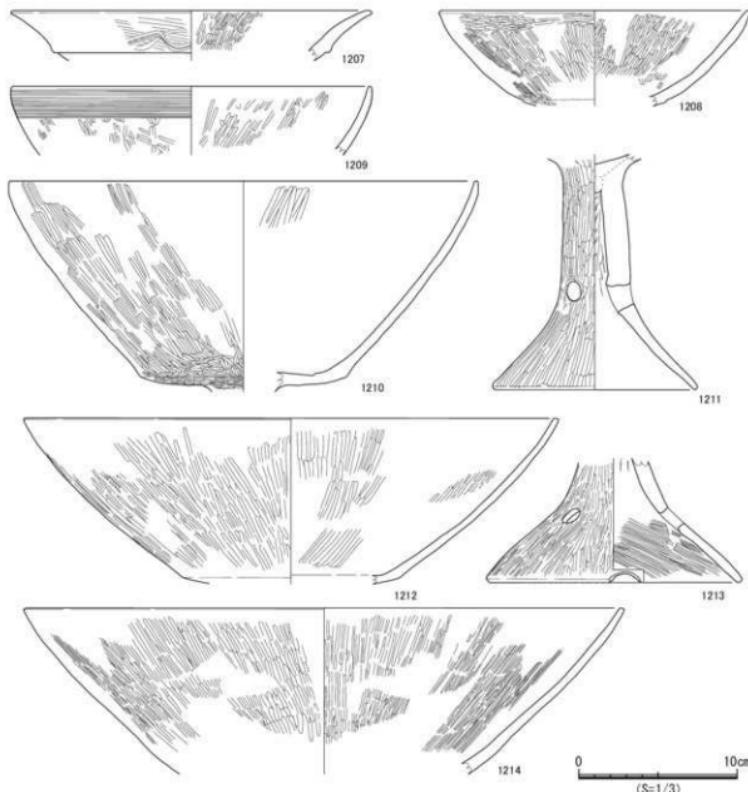


図253 SK01881遺物実測図（1）

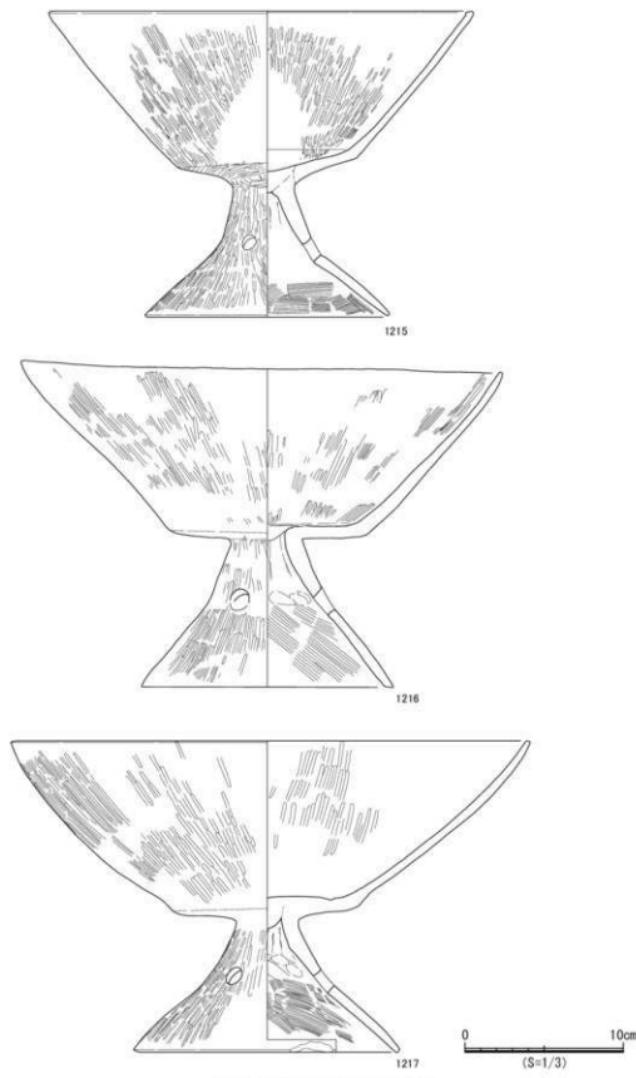


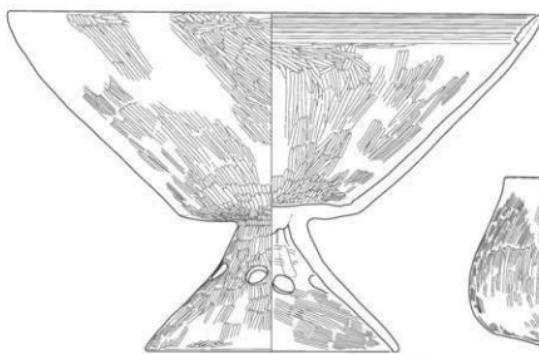
図254 SK01881遺物実測図（2）



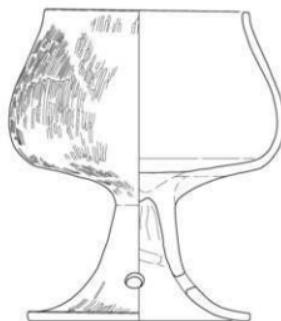
1218



1219



1220



1221



図255 SK01881遺物実測図 (3)

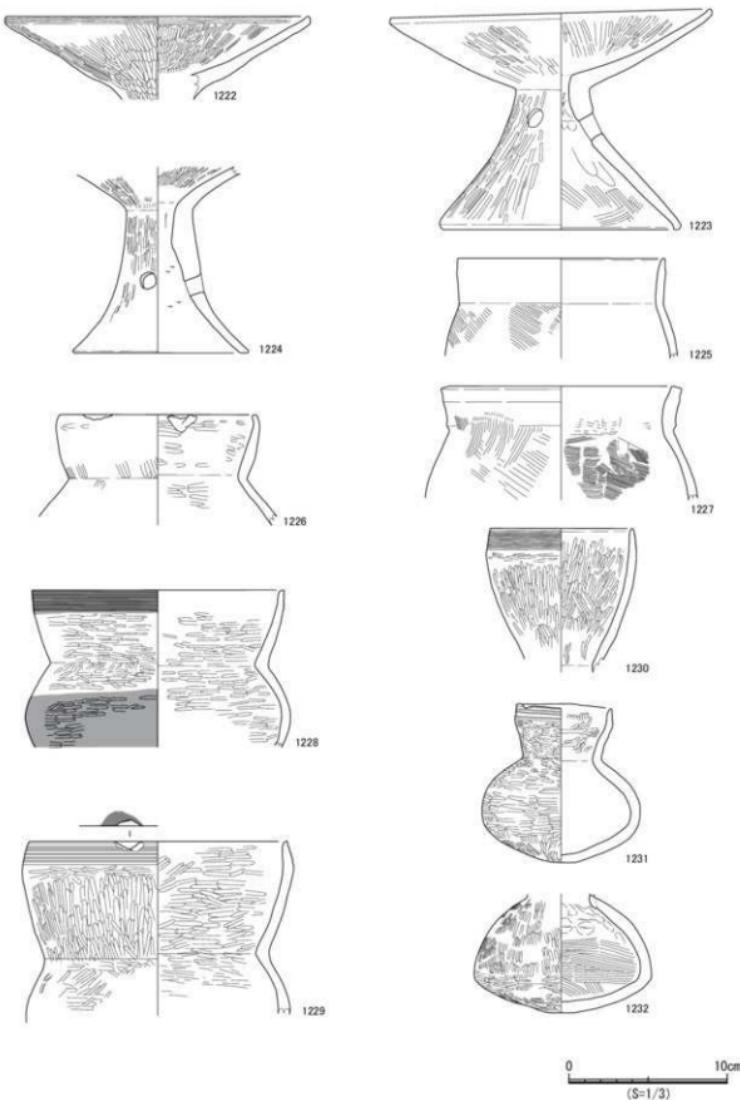


図256 SK01881遺物実測図（4）

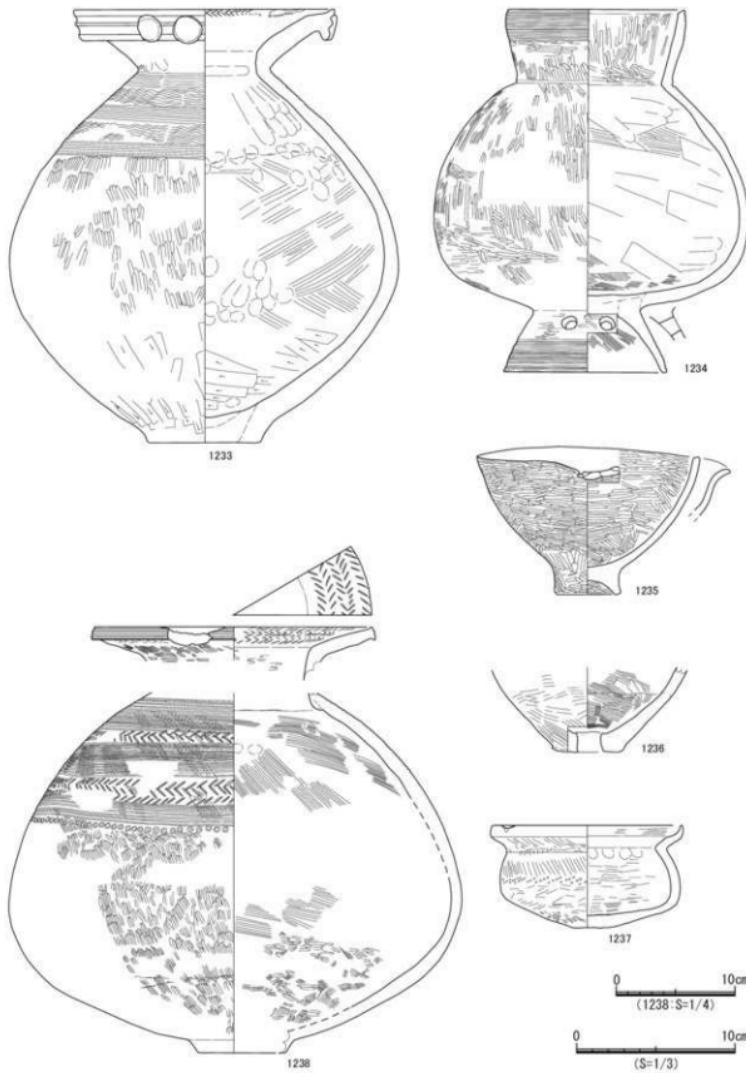


図257 SK01881遺物実測図（5）

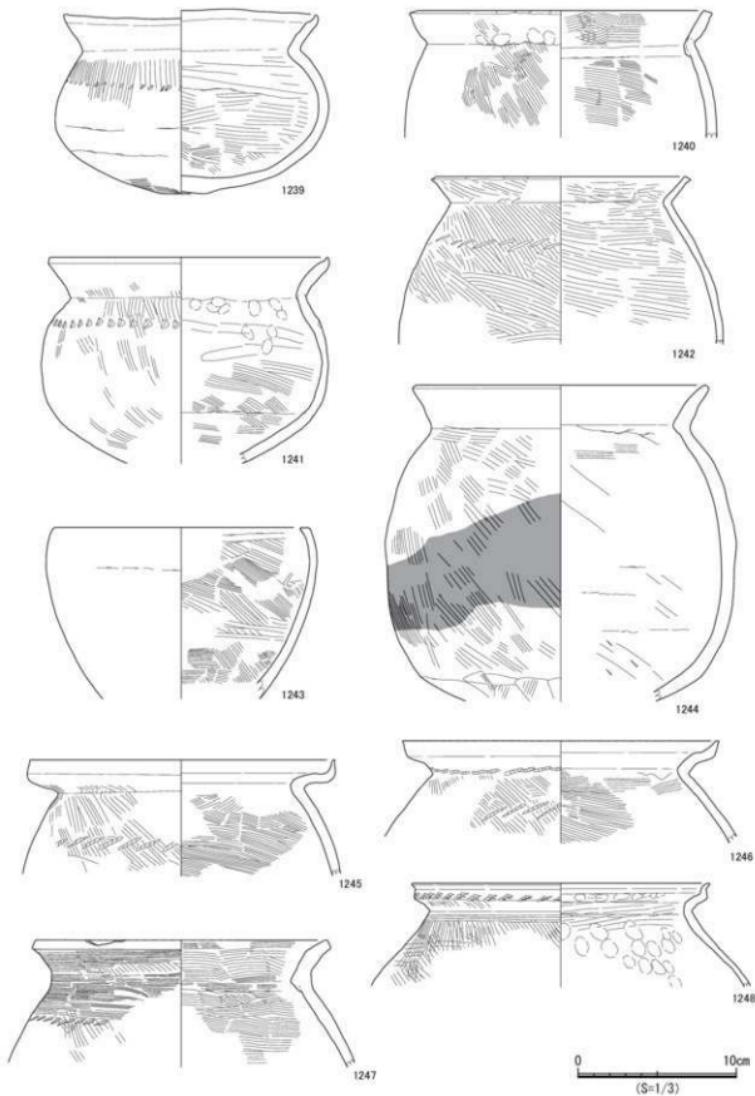


図258 SK01881遺物実測図（6）

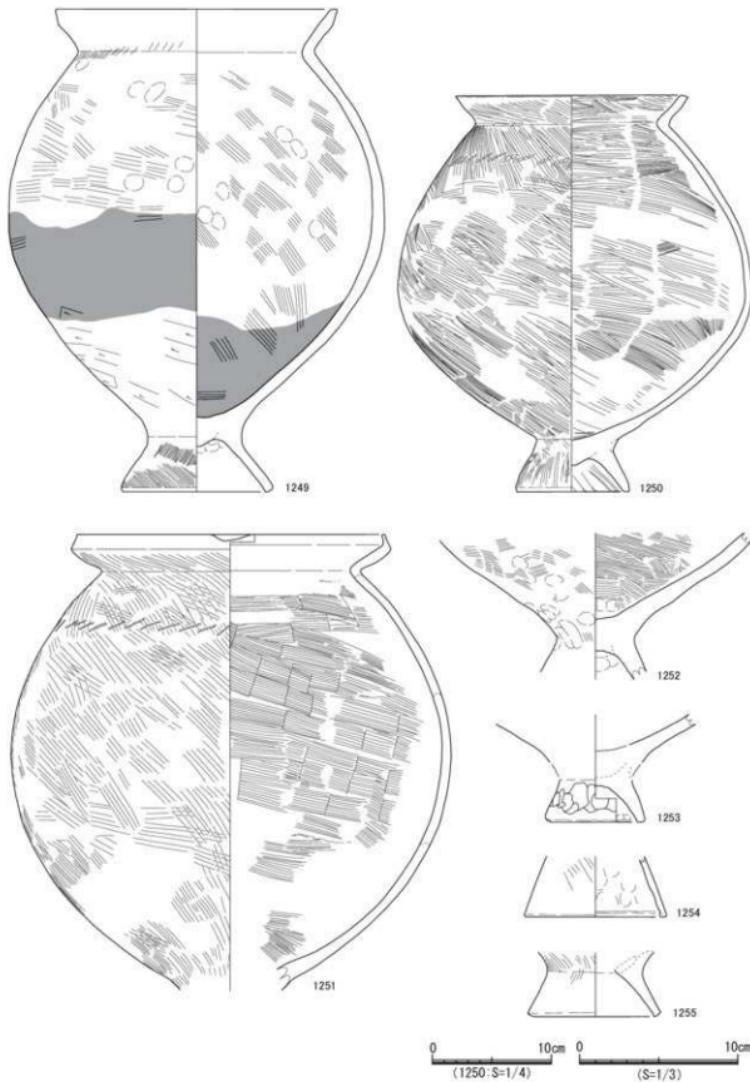


図259 SK01881遺物実測図（7）

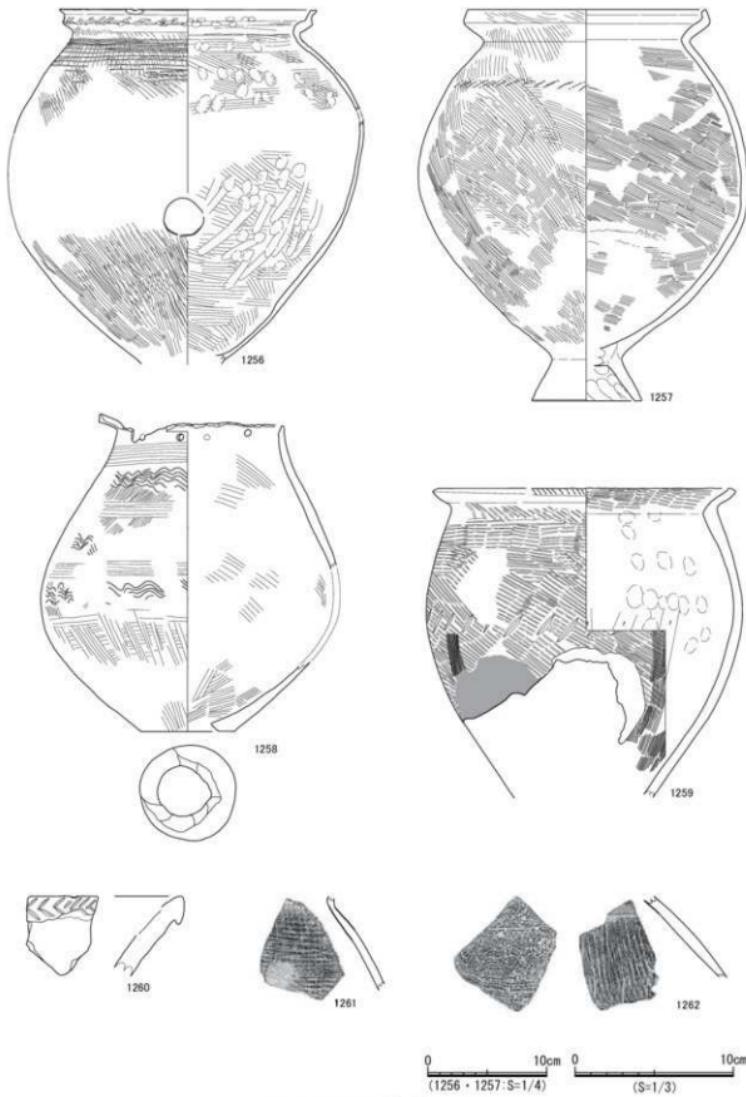


図260 SK01881遺物実測図（8）

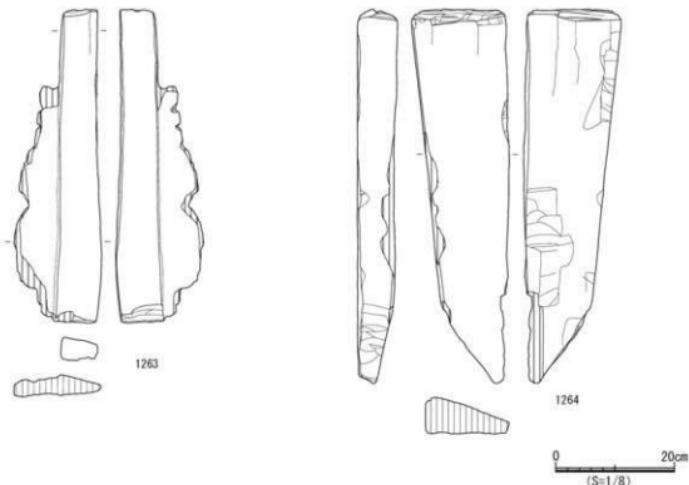


図261 SK01881遺物実測図（9）

短い口縁部にやや扁平な胴部をもつ。胴部上半に直線文・波状文・刺突文を施文する。1287は壺A5類。口縁部内外に羽状文があり、1293は壺A類の胴部。直線文のほかに山形文と刺突文を加える。いずれもVII期の資料であろう。1292は二重口縁の壺でVII期に相当する。1297は壺胴部片で刺突文をもつが、「↑」にみえる。山形文に縱位の刺突が加わって、「↑」のようになったと考えられる。全体が復元できないので明確にはできない。1301は中型壺の口縁部に線刻のある資料。G3類であろう。1302は口縁部の短い壺でF1類。精緻なミガキが認められる。SK01881出土例に類例がある。鉢（1307・1310）はV期の系譜を強く受けた資料が目立つ。やや形骸化した受口状口縁部をもち、頸部以下に直線文と刺突文が認められる。1319はVI期後半の壺の好例。著しく形骸化した受口状口縁をもち、胴部が下膨れである。頸部には狭い文様帯ながら施文が残る。1320は口縁端部内面の強いナデがみられる壺A2類。1322も壺A2類で頸部がやや直立気味だが、やや端部の立ち上がりが1320と比べると短い。いずれもV期の資料であろう。1364・1367はS字壺A類の口縁部片。わずかだが出土が認められる。1374は垂木材の転用品で全面に細かい縱方向の加工を残す。上下両端を加工し尖らす。1373は丸太杭。上端の太さをひとまわり小さくなるように加工する。1371はミカン削材。1372は1/6分割材を利用した杭。1370は片岩製の両頭石棒。縁辺を剥離成形する。頭部下は若干窄まるように成形し、頭部と胴部の境界に線刻をする。

時期 V～VII期の土器資料はA断面の5層及びB断面3層より上位の土層からやまとまって出土している。これらの土層は繩文時代晩期～I期の土器資料が出土した7層より上位にあたり、弥生時代後期以降に堆積したことは明瞭である。そのため、遺構の形成は弥生時代後期以前であることは明らかで、I期となる可能性がある。その一方で、V～VII期の資料が認められたので、埋没を完了したのがVII期と考えられるので、V期以降に再掘削した可能性がある。

SK01894上層

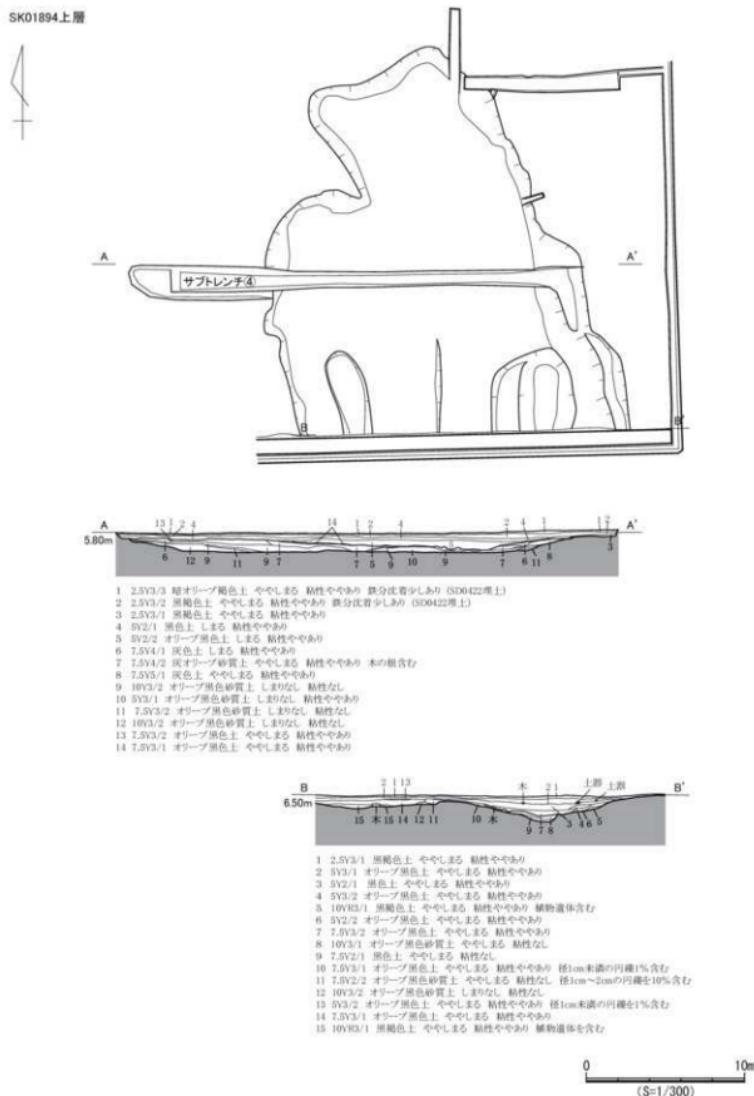
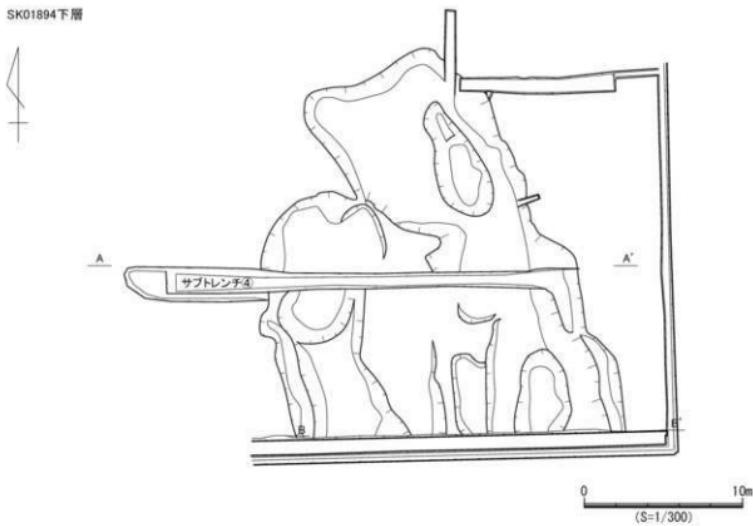


図262 SK01894造構図（1）

SK01894下層



SK01894

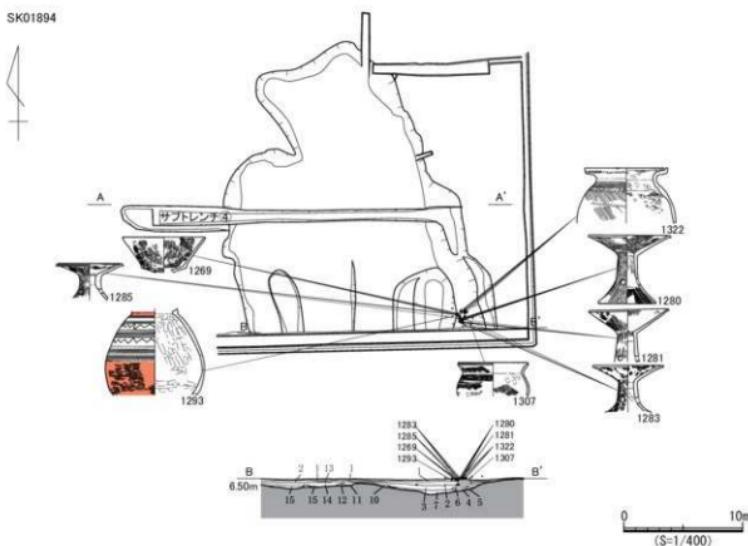


図263 SK01894遺構図（2）

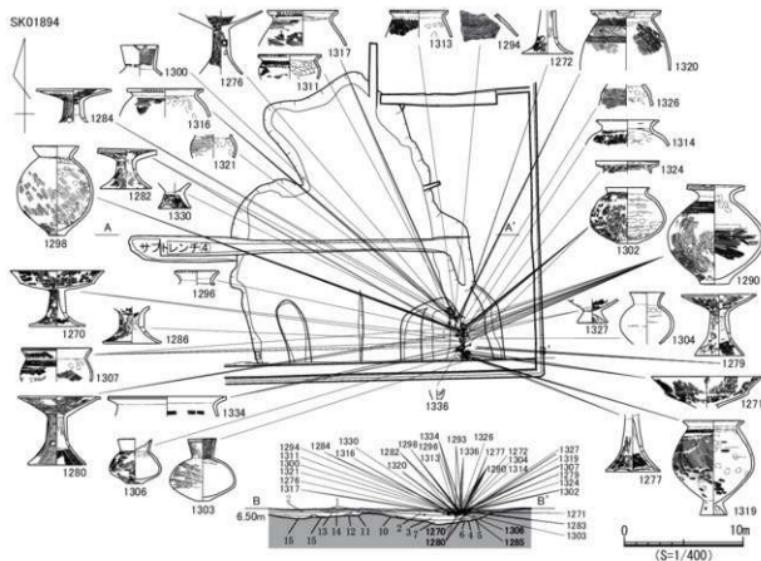


図264 SK01894遺構図（3）

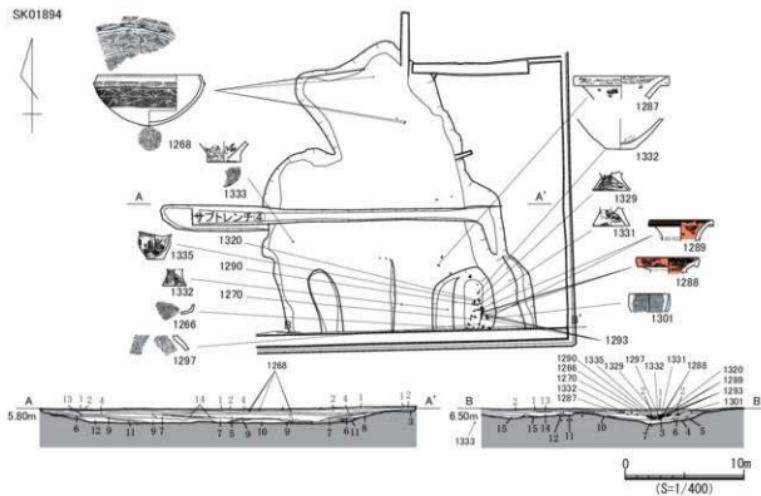


図265 SK01894遺構図（4）



図266 SK01894遺物実測図（1）

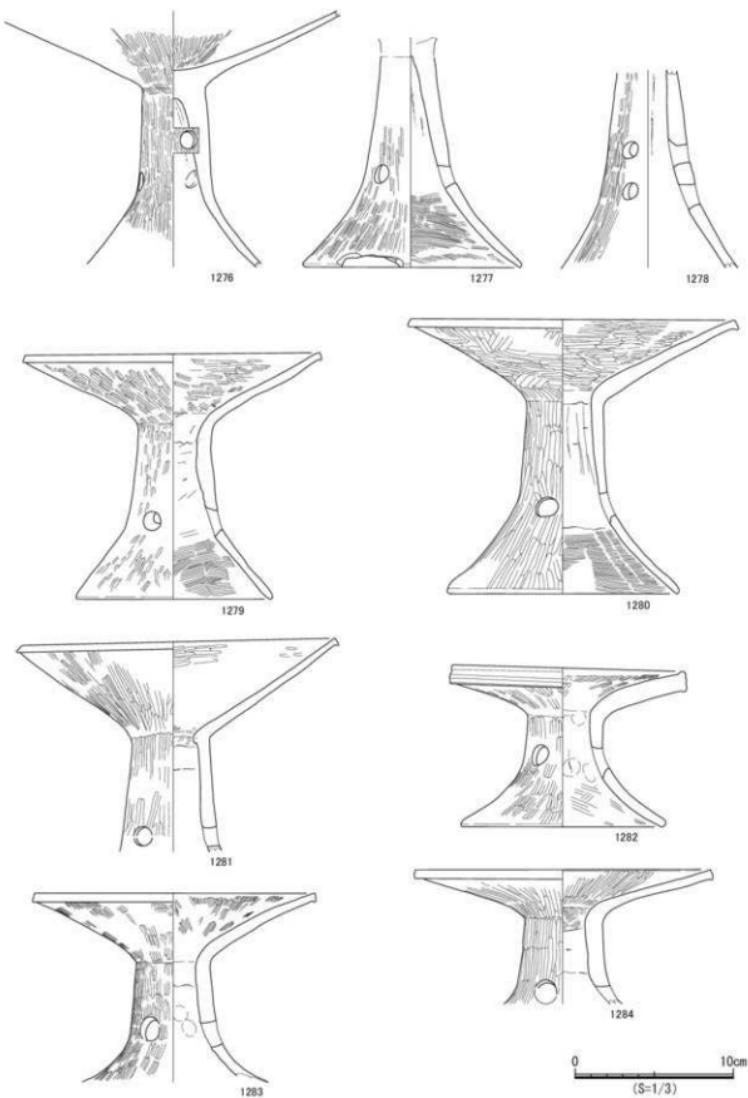


図267 SK01894遺物実測図（2）

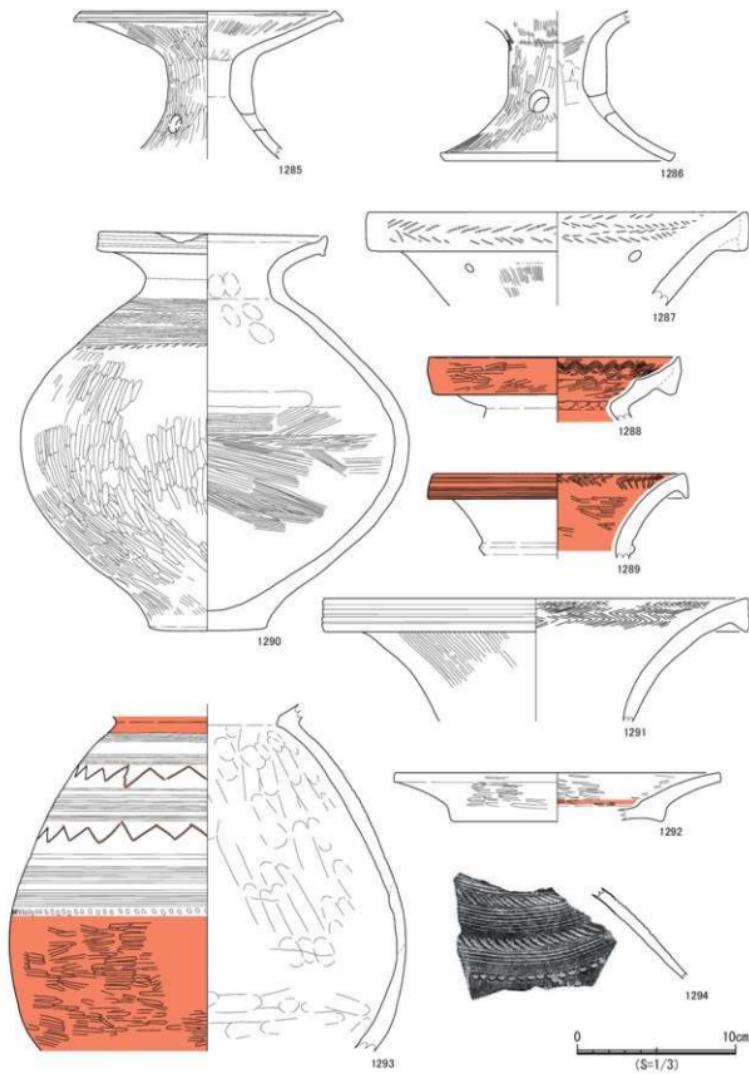


図268 SK01894遺物実測図（3）



図269 SK01894遺物実測図(4)

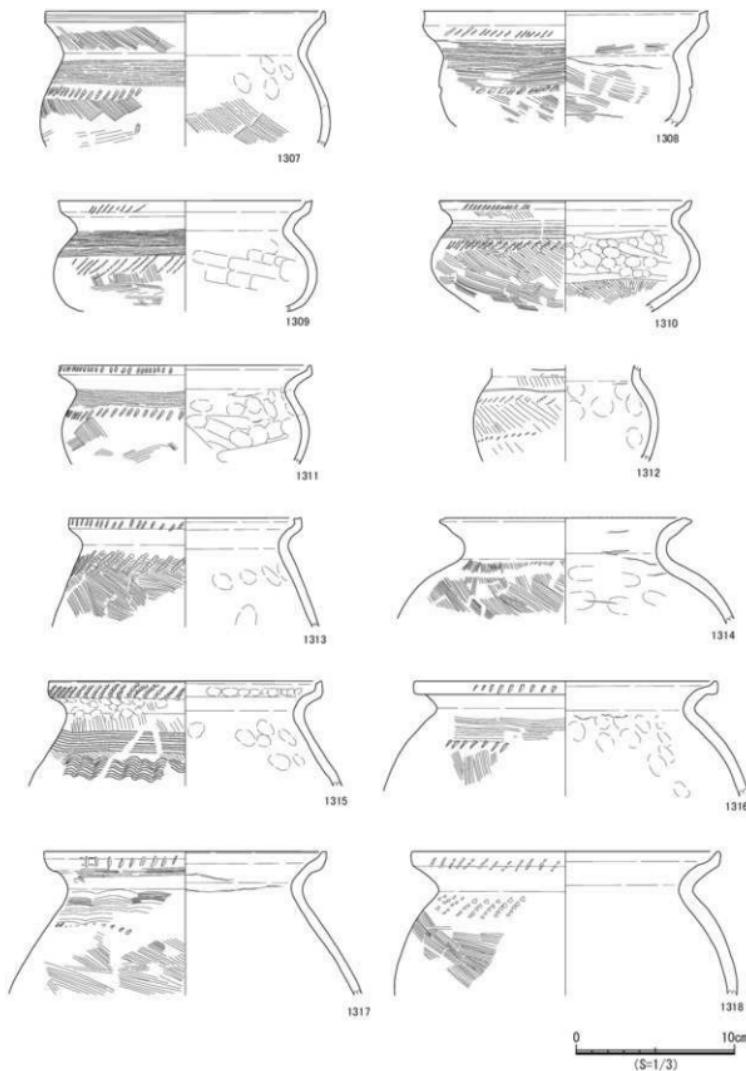


図270 SK01894遺物実測図（5）

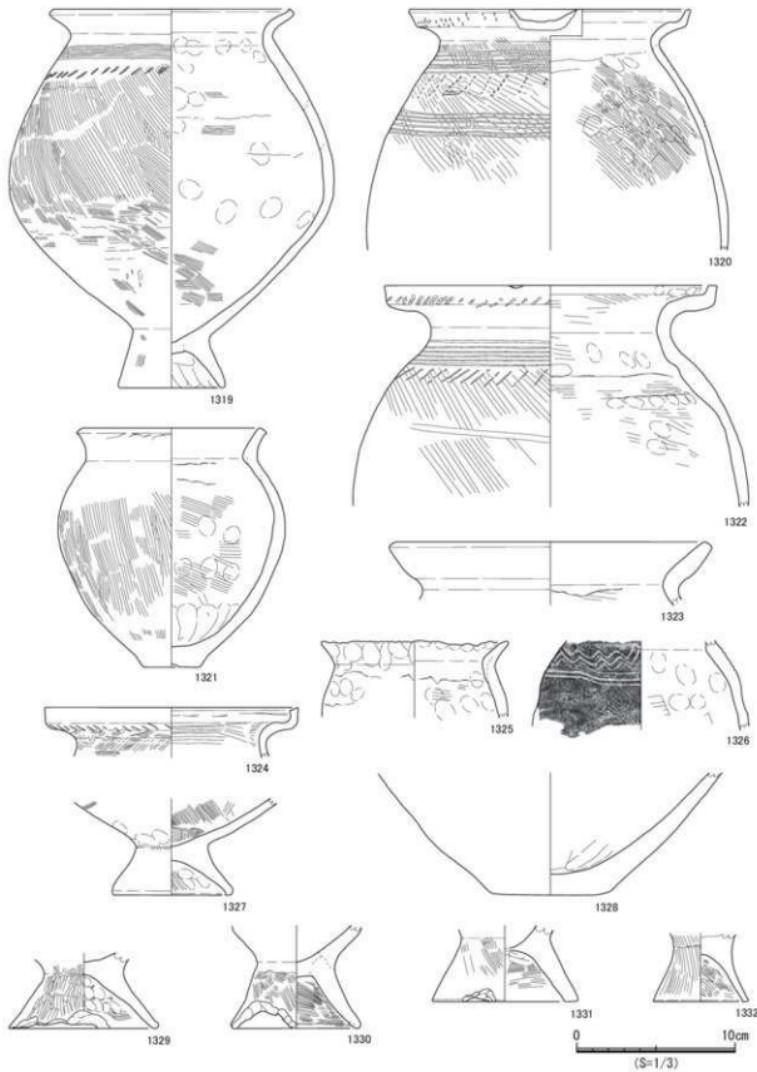


図271 SK01894遺物実測図（6）

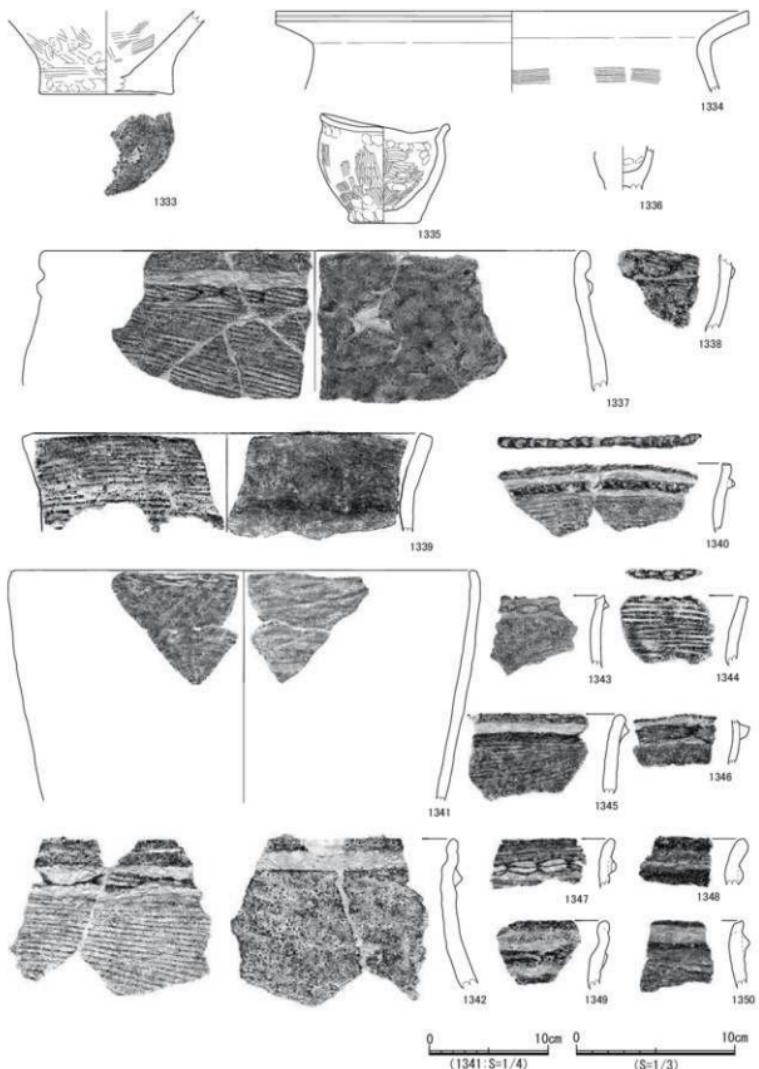


図272 SK01894遺物実測図（7）

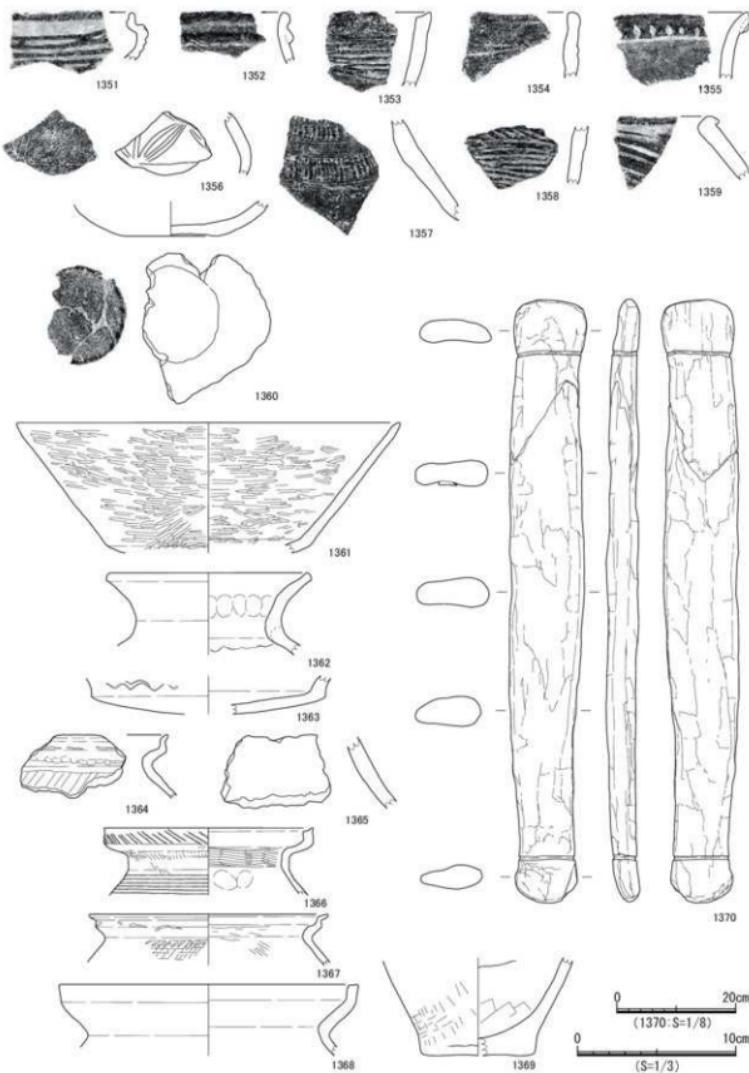


図273 SK01894遺物実測図（8）

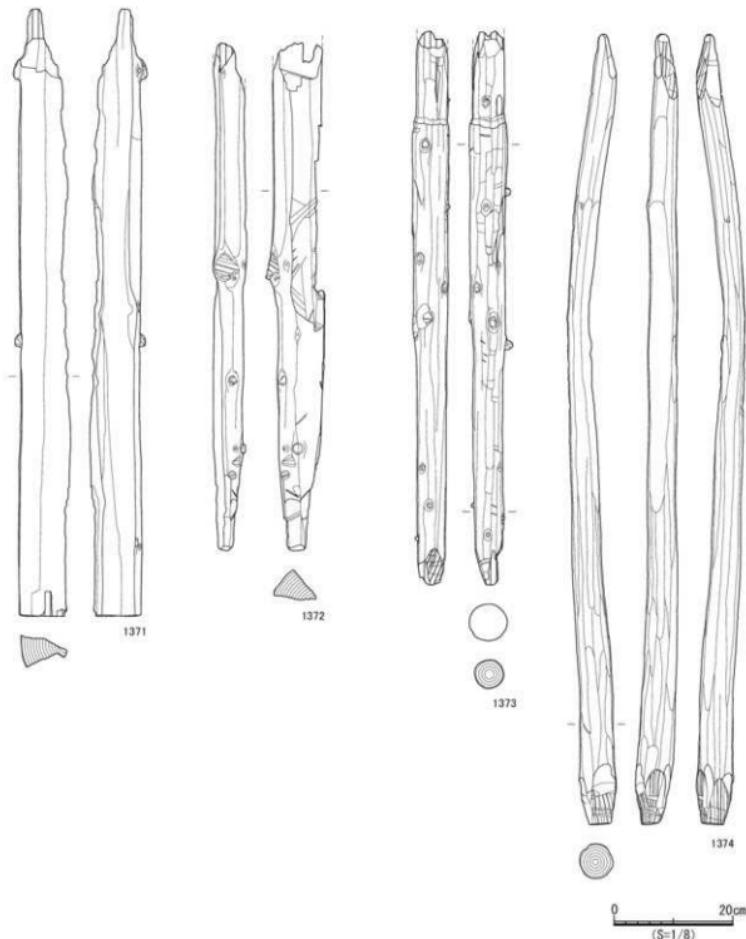


図274 SK01894遺物実測図（9）

表15 土坑一覧表(1)

横構番号	現場遺構番号	調査区画	検出層位	埋土	平面形状	断面形状	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	新>●>旧	時期	出土遺物	種別	図版
SK01557	08_B00771	DT15	V上・1層A	円形	C2a1	1.40	1.10	1.00	0.80	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01558	08_B0479	DT15	V上・3層B	円形	A2a1	0.40	0.40	0.15	0.20	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01559	08_B0078	DT15	V上・1層A	円形	A1a1	0.40	0.35	0.35	0.36	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01560	08_B0079	DT15	V上・1層A	楕円形	A1a1	0.40	0.35	0.30	0.25	0.08			弥生～古墳	H	—	
SK01561	08_B0476	DT16	V上・1層B	長楕円形	R2a1	0.40	0.40	0.30	0.20	0.18			弥生～古墳	H	—	
SK01562	08_B0537	HA16	V上・3層B	楕円形	A1a1 (0.60)	0.50	(0.40)	0.30	0.10	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01563	08_B0245	DT16	V上・2層B	長楕円形	H1a1	2.00	0.90	1.80	0.74	0.15			VI期	H	232	
SK01564	08_B0092	DT16	V上・1層A	円形	A1a1	0.35	0.35	0.22	0.20	0.05	SD0443*		弥生～古墳	H	—	
SK01565	08_B0474	DT16	V上・2層B	円形	A2a2	0.30	0.30	0.20	0.20	0.15	SK01565		弥生～古墳	H	—	
SK01566	08_B0246	DT16	V上・2層B	楕円形	B1a1	0.60	0.50	0.55	0.42	0.10	SK01565		弥生～古墳	H	—	
SK01567	08_B0381	DT16	V上・3層C	円形	A2a1	0.28	0.25	0.10	0.10	0.15	SD0443*		弥生～古墳	H	—	
SK01568	08_B0248	DT16	V上・2層B	円形	A1a1	0.24	0.24	0.18	0.16	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01569	08_B0249	DT16	V上・2層B	楕円形	A1a1	0.52	0.32	0.24	0.20	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01570	08_B0250	DT16	V上・2層B	円形	B1a1	0.22	0.20	0.10	0.10	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01571	08_B0507	DT17	V上・2層B	楕円形	A1a1	0.45	0.40	0.25	0.20	0.10	SK01571		弥生～古墳	H	—	
SK01572	08_B0508	DT17	V上・2層B	長楕円形	A2a1	0.30	(0.15)	0.20	0.10	0.10	SK01570		弥生～古墳	H	—	
SK01573	08_B0253	DT18	V上・1層A	楕円形	B1a1	1.15	0.90	0.96	0.68	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01574	08_B0254	DT18	V上・2層B	円形	A1a1	0.50	0.40	0.40	0.32	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01575	08_B0252	DT17	V上・2層B	円形	B1a1	0.35	0.32	0.24	0.29	0.06			弥生～古墳	H	—	
SK01576	08_B0255	DT18	V上・1層A	円形	A1a1	0.28	0.25	0.16	0.14	0.06			弥生～古墳	H	—	
SK01577	08_B0504	DT18	V上・4層B	円形	A2a1	0.35	0.30	0.18	0.18	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01578	08_B0499	DT19	V上・2層B	円形	B2a1	0.30	0.26	0.10	0.10	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01579	08_B0501	DT18	V上・3層C	円形	A1b1	0.50	0.50	0.30	0.30	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01580	08_B0236	DT19	V上・1層A	円形	A1a1	0.36	0.34	0.18	0.16	0.05			弥生～古墳	H	—	
SK01581	08_B0237	DT19	V上・2層B	楕円形	A2b1	0.55	0.35	0.25	0.20	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01582	08_B0240	DT19	V上・3層B	楕円形	A2a1	0.55	0.44	0.44	0.30	0.18			弥生～古墳	H	—	
SK01583	08_B0243	DT19	V上・2層B	円形	A2a1	0.30	0.30	0.22	0.22	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01584	08_B0498	DT19	V上・4層B	円形	A2a1	0.25	0.25	0.20	0.18	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01585	08_B0241	DT19	V上・1層A	長楕円形	A2a1	0.58	0.42	0.40	0.22	0.08			弥生～古墳	H	—	
SK01586	08_B0233	DT19	V上・2層B	楕円形	A1a1	0.50	0.35	0.42	0.30	0.20	SD0418		弥生～古墳	H	—	
SK01587	08_B0228	DT20	V上・4層B	楕円形	B1a1	1.16	1.00	1.00	0.80	0.20			VI-1期	H	234	
SK01588	08_B0502	DT20	V上・2層B	長楕円形	A1a1	2.40	1.70	2.00	1.30	0.14			弥生～古墳	H	—	
SK01589	08_B0232	DT20	V上・2層B	円形	A1a1	1.30	1.15	1.20	1.05	0.18			V-3期	H	234	
SK01590	08_B0239	DT20	V上・3層B	楕円形	A1a1	0.65	0.50	0.52	0.40	0.22			弥生～古墳	H	—	
SK01591	08_B0539	ET1	V上・4層B	円形	A1a1	4.00	3.90	1.50	1.40	0.80	SK01592, SD0419*		弥生～古墳	H	—	
SK01592	08_B0231	ET1	V上・4層B	楕円形	A2a1	0.90	0.80	0.40	0.36	0.40	SD0419, SK01591		弥生～古墳	H	—	
SK01593	08_B0091	ES2	V上・4層E	不明	A1a1	1.30	(0.70)	0.75	(0.50)	0.18	SZ050		弥生～古墳	H	—	
SK01594	08_B0103	ES2	V上・2層B	円形	A1a1	0.55	0.45	0.30	0.20	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01595	08_B0113	ES2	V上・2層G	円形	A1a1	0.32	0.30	0.20	0.15	0.16			弥生～古墳	H	—	
SK01596	08_B0104	ET2	V上・2層B	円形	A1a1	0.24	0.20	0.12	0.10	0.08			弥生～古墳	H	—	
SK01597	08_B0105	ET2	V上・1層A	円形	A1a1	0.18	0.15	(0.22)	0.12	0.05			弥生～古墳	H	—	
SK01598	08_B0106	ET2	V上・1層A	円形	A1a1	0.30	0.26	0.20	0.20	0.08			弥生～古墳	H	—	
SK01599	08_B0107	ET2	V上・2層B	円形	A2a1	0.30	0.26	0.20	0.20	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01600	08_B0112	ET2	V上・1層A	円形	A1a1	0.30	0.30	0.50	0.50	0.06			弥生～古墳	H	—	
SK01601	08_B0109	ET2	V上・1層A	円形	A1a1	0.24	0.24	0.20	0.20	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01602	08_B0087	I41	V上・2層C	楕円形	A1a1	0.55	0.45	0.25	0.20	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01603	08_B0114	ES3	V上・5層G	円形	A2a1	0.30	0.30	0.24	0.22	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01604	08_B0312	ET3	V上・2層B	円形	A1a1 (3.00)	3.00	0.15	0.15	0.12	SD0421, SK01677		弥生～古墳	H	—		
SK01605	08_B0116	ET3	V上・2層B	円形	A1a1	0.25	0.25	0.20	0.20	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01606	08_B0108	ET3	V上・1層A	円形	A1a1	0.30	0.30	0.24	0.22	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01607	08_B0111	ET3	V上・1層A	円形	A1a1	0.25	0.25	0.10	0.10	0.06			弥生～古墳	H	—	
SK01608	08_B0373	ET3	V上・4層B	楕円形	A2a1	1.20	0.95	1.15	0.85	0.20	SB101, SK01609, SZ050		弥生～古墳	H	—	
SK01609	08_B0374	ET3	V上・5層B	楕円形	A2a1	1.25	1.00	0.70	0.55	0.25	SB101, SK01608, SZ050		弥生～古墳	H	—	
SK01610	08_B0118	ES3	V上・2層B	円形	A2a1	0.20	0.20	0.10	0.10	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01611	08_B0115	ET3	V上・1層A	円形	A1a1	0.40	0.35	0.20	0.20	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01612	08_B0117	ET3	V上・2層C	円形	A2a1	0.25	0.20	0.10	0.10	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01613	08_B0194	ET3~H	V上・4層B	不明	A2a2 (3.30)	(2.50)	(1.00)	(0.80)	0.30	1767	SK01619, SK01615~SK0		弥生～古墳	H	—	
SK01614	08_B0317	ET3	V上・1層A	長楕円形	B1a1	0.90	0.60	0.75	0.50	0.10	SB101		弥生～古墳	H	—	
SK01615	08_B0120	ET4	V上・2層B	円形	A2a1	0.30	0.30	0.20	0.18	0.14	SK01613		弥生～古墳	H	—	
SK01616	08_B0318	ET3	V上・1層A	長楕円形	A1a1	0.55	0.30	0.40	0.15	0.05	SB101		弥生～古墳	H	—	
SK01617	08_B0378	I43	V上・1層A	長楕円形	A1b1	2.50	1.80	1.30	0.80	0.48	SB102, SB101*		VI~VII期以降	H, J	209	
SK01618	08_B0121	ET3	V上・2層C	円形	A2a1	0.22	0.20	0.10	0.10	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01619	08_B0136	ET4	V上・5層B	不明	B1a2 (1.70)	(1.70)	(1.50)	(0.60)	0.25	SB102, SK01613		弥生～古墳	H	—		
SK01620	08_B0350	BA14	V上・1層A	円形	A2a1	0.20	0.20	0.10	0.10	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01621	08_B0551	BA14	V上・2層B	円形	A1b1	0.30	0.30	0.26	0.26	0.15	SD0414*		弥生～古墳	H	—	
SK01622	08_B0288	DT15	V上・1層A	長楕円形	A1a1	0.40	0.28	0.30	0.20	0.05			弥生～古墳	H	—	
SK01623	08_B0475	HA16	V上・3層B	円形	A2a1	0.35	0.30	0.10	0.10	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01624	08_B0275	HA17	V上・3層B	円形	B3a1	0.26	0.25	0.16	0.15	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01625	08_B0536	HA16	V上・2層B	円形	A1a1	0.30	0.30	0.20	0.20	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01626	08_B0533	HA16	V上・2層B	円形	A3a1	0.25	0.20	0.10	0.10	0.15			弥生～古墳	H	—	

表16 土坑一覧表（2）

遺構番号	現場遺構番号	調査区画	検出部位	埋土	平面形状	断面形状	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	新○●○旧	時期	出土遺物	種類
SK01627	08_B0532	HA16	V上 1層 A	円形	A2a1	0.25	0.25	0.20	0.18	0.10	0.10	新	発生～古墳	日	—
SK01628	08_B0477	HA16	V上 2層 B	円形	A2a1	0.25	0.25	0.18	0.15	0.16	—	新	発生～古墳	日	—
SK01629	08_B0274	HB16	V上 1層 A	円形	A1a1	0.66	0.66	0.50	0.40	0.10	—	新	発生～古墳	日	—
SK01630	08_B0481	HA16	V上 2層 B	長楕円形	B2a2	0.35	0.26	0.20	0.10	0.15	—	新	発生～古墳	日	—
SK01631	08_B0493	HA16	V上 1層 A	円形	A3a1	0.25	0.20	0.18	0.16	0.14	—	新	発生～古墳	日	—
SK01632	08_B0478	HA16	V上 1層 A	円形	B1a1	0.22	0.21	0.17	0.15	0.05	—	新	発生～古墳	日	—
SK01633	08_B0480	HB16	V上 1層 A	円形	A1a1	0.30	0.30	0.22	0.20	0.05	—	新	発生～古墳	日	—
SK01634	08_B0278	HB16	V上 2層 B	長楕円形	B3a1	0.35	0.30	1.10	0.55	0.22	—	新	発生～古墳	日	—
SK01635	08_B0484	HB16	V上 2層 B	円形	A2a1	0.28	0.25	0.16	0.10	0.15	—	新	発生～古墳	日	—
SK01636	08_B0485	HB16	V上 1層 A	円形	A2a1	0.40	0.40	0.15	0.20	0.15	—	新	発生～古墳	日	—
SK01637	08_B0272	HA17	V上 2層 B	円形	B2a1	0.40	0.40	0.26	0.24	0.16	—	新	発生～古墳	日	—
SK01638	08_B0485	HA17	V上 2層 B	楕円形	A2a1	0.28	0.22	0.18	0.14	0.10	—	新	発生～古墳	日	—
SK01639	08_B0483	HA17	V上 2層 B	楕円形	A1a1	0.30	0.25	0.25	0.20	0.06	—	新	発生～古墳	日	—
SK01640	08_B0492	HA17	V上 2層 B	円形	A2a1	0.30	0.30	0.15	0.15	0.15	—	新	発生～古墳	日	—
SK01641	08_B0490	HB17	V上 2層 B	楕円形	A2b1	0.50	0.30	0.20	0.14	0.20	—	新	発生～古墳	日	—
SK01642	08_B0489	HB17	V上 2層 B	円形	A2a1	0.22	0.22	0.16	0.14	0.10	—	新	発生～古墳	日	—
SK01643	08_B0488	HB17	V上 1層 A	円形	A1a1	0.30	0.28	0.20	0.18	0.06	—	新	発生～古墳	日	—
SK01644	08_B0487	HB17	V上 1層 A	円形	B1a1	0.22	0.21	0.17	0.15	0.05	—	新	発生～古墳	日	—
SK01645	08_B0506	HA17	V上 1層 A	円形	A2a1	0.30	0.25	0.20	0.18	0.10	—	新	発生～古墳	日	—
SK01646	08_B0494	HB18	V上 1層 G	円形	A2a1	0.40	0.30	0.20	0.20	0.15	—	新	発生～古墳	日	—
SK01647	08_B0495	HB18	V上 1層 A	円形	B1a1	0.35	0.30	0.20	0.15	0.06	—	新	発生～古墳	日	—
SK01648	08_B0497	HB18	V上 1層 A	円形	A2a1	0.20	0.20	0.10	0.10	0.10	—	新	発生～古墳	日	—
SK01649	08_B0496	HB18	V上 2層 D	円形	A2a2	0.30	0.30	0.18	0.18	0.12	—	新	発生～古墳	日	—
SK01650	08_B0242	DT19	V上 2層 B	楕円形	B2a1	0.40	0.40	0.30	0.28	0.10	—	新	発生～古墳	日	—
SK01651	08_B0234	HA19	V上 1層 A	円形	A1a1	0.60	0.50	0.52	0.46	0.05	—	新	発生～古墳	日	—
SK01652	08_B0504	HB19	V上 2層 B	円形	A2a1	0.30	0.30	0.10	0.10	0.20	—	新	発生～古墳	日	—
SK01653	08_B0505	HB19	V上 2層 B	長楕円形	A3a1	0.30	0.20	0.20	0.10	0.15	—	新	発生～古墳	日	—
SK01654	08_B0517	HB19	V上 1層 A	楕円形	A1a1	0.32	0.30	0.20	0.15	0.05	—	新	発生～古墳	日	—
SK01655	08_B0510	HB19	V上 2層 B	円形	A3a1	0.22	0.20	0.16	0.10	0.15	—	新	発生～古墳	日	—
SK01656	08_B0511	HB19	V上 2層 B	長楕円形	A2a1	0.40	0.20	0.25	0.15	0.12	—	新	発生～古墳	日	—
SK01657	08_B0518	HC19	V上 2層 C	円形	A2a1	0.20	0.20	0.14	0.14	0.10	—	新	発生～古墳	日	—
SK01658	08_B0520	HC19	V上 2層 B	円形	A2a1	0.20	0.20	0.18	0.18	0.10	—	新	発生～古墳	日	—
SK01659	08_B0519	HB19	V上 2層 C	円形	A2a1	0.20	0.20	0.14	0.14	0.10	—	新	発生～古墳	日	—
SK01660	08_B0432	HD19	V上 2層 B	長楕円形	A2a1	1.10	0.90	0.65	0.40	0.30	—	新	発生～古墳	日	—
SK01661	08_B0420	HA20	V上 2層 B	円形	A2a1	1.10	1.10	0.50	0.45	0.50	—	新	発生～古墳	日	—
SK01662	08_B0084	HA20	V上 1層 A	円形	A2a1	0.30	0.30	0.20	0.20	0.15	S00446	新	発生～古墳	日	—
SK01663	08_B0421	IA1	V上 7層 B	円形	A2b3	3.20	2.20	1.60	1.60	0.70	25	新	SD0442, SD0419, SD04	V期後半以降	H, J 238 21
SK01664	08_B0561	IB1	V上 4層 B	円形	A3a1	0.30	0.30	0.15	0.15	0.20	—	新	発生～古墳	日	—
SK01665	08_B0399	HB20	V上 2層 B	円形	A2a1	0.50	0.45	0.35	0.30	0.16	—	新	発生～古墳	日	—
SK01666	08_B0433	IB1	V上 1層 A	円形	A2a1	0.25	0.22	0.18	0.16	0.14	—	新	発生～古墳	日	—
SK01667	08_B0088	IA2	V上 4層 E	楕円形	A1a1	0.85	0.60	0.60	0.35	0.15	—	新	発生～古墳	日	—
SK01668	08_B0089	IA2	V上 4層 E	長楕円形	A1a1	1.75	1.10	1.40	0.70	0.20	—	V期以降	SD051, T211	SD051, T211	
SK01669	08_B0125	IA2	V上 2層 B	長楕円形	A1a1	0.65	(0.30)	0.55	(0.20)	0.20	—	V期以降	SD051	SD051	
SK01670	08_B0375	ET3	V上 4層 B	不明	A1a2	1.65	(1.60)	1.40	(1.40)	0.50	S0250, S2051	新	発生～古墳	日	—
SK01671	08_B0122	IA2	V上 2層 B	円形	A2a1	0.35	0.30	0.20	0.18	0.15	—	新	発生～古墳	日	—
SK01672	08_B0090	IA2	V上 7層 B	長楕円形	A2a1	3.05	1.52	2.70	1.15	0.25	S2051	新	発生～古墳	日	—
SK01673	08_B0569	IA2	V上 1層 A	円形	A1a1	0.40	0.40	0.15	0.15	0.10	SZ051	新	発生～古墳	日	—
SK01674	08_B0099	IA2	V上 2層 B	円形	A1a1	0.65	0.55	0.40	0.30	0.12	—	新	発生～古墳	日	—
SK01675	08_B0564	IC3	V上 2層 B	円形	A1a2	0.42	0.40	0.20	0.20	0.15	—	新	発生～古墳	日	—
SK01676	08_B0414	IC2	V上 1層 A	楕円形	A1a1	1.00	0.70	0.95	0.65	0.08	—	新	発生～古墳	日	—
SK01677	08_B0311	IC2	V上 2層 B	長楕円形	A1a1	3.84	1.50	3.65	1.25	0.20	S01682, SH0104	新	発生～古墳	日	—
SK01678	08_B0412	IB02	V上 1層 A	円形	A2a1	0.50	0.40	0.25	0.25	0.25	S00427	新	発生～古墳	日	—
SK01679	08_B0257	IB2	V上 2層 B	楕円形	B1a1	2.50	2.22	0.80	0.52	0.12	SH104	新	期後半以降	H	209
SK01680	08_B0415	IB02	V上 2層 B	円形	B2a2	0.60	0.50	0.50	0.45	0.22	—	新	発生～古墳	日	—
SK01681	08_B0417	IB02	V上 2層 B	楕円形	A1a2	0.90	0.90	0.90	0.70	0.16	SK01682	新	発生～古墳	日	—
SK01682	08_B0409	IB02	V上 4層 B	長楕円形	B1a1	2.86	1.00	2.20	0.70	0.25	SK01677, SB104-PD3>S2052, SK01681	新	発生～古墳	日	—
SK01683	08_B0411	IB02	V上 1層 A	円形	A2a1	2.30	0.90	0.18	0.20	0.25	—	新	発生～古墳	日	—
SK01684	08_B0259	IB2	V上 1層 A	長楕円形	A1a1	1.90	1.20	1.72	1.00	0.10	—	新	発生～古墳	日	—
SK01685	08_B0435	HB20	V上 1層 A	楕円形	A2a1	0.28	0.20	0.20	0.14	0.10	—	新	発生～古墳	日	—
SK01686	08_B0101	IA3	V上 1層 A	円形	A2a1	0.35	0.30	0.10	0.10	0.16	—	新	発生～古墳	日	—
SK01687	08_B0100	IA3	V上 2層 B	長楕円形	A2a1	0.75	0.36	0.50	0.20	0.12	—	新	発生～古墳	日	—
SK01688	08_B0123	IA3	V上 2層 B	円形	A2a1	0.50	0.45	0.22	0.18	0.20	—	新	発生～古墳	日	—
SK01689	08_B0102	IA3	V上 2層 B	楕円形	A1a1	0.40	0.32	0.23	0.18	0.08	—	新	発生～古墳	日	—
SK01690	08_B0129	IA3	V上 2層 B	長楕円形	A1a1	0.60	0.30	0.50	0.20	0.10	—	新	発生～古墳	日	—
SK01691	08_B0128	IA3	V上 1層 A	円形	A1a1	0.30	0.30	0.22	0.20	0.08	—	新	発生～古墳	日	—
SK01692	08_B0130	IA3	V上 2層 E	円形	A1a1	0.30	0.28	0.26	0.20	0.36	—	新	発生～古墳	日	—
SK01693	08_B0571	IA3	V上 2層 B	円形	A1a1	(1.50)	(1.30)	(1.30)	(1.10)	0.15	S2051	新	発生～古墳	日	—
SK01694	08_B0124	IA3	V上 3層 B	円形	A1a1	0.35	0.30	0.28	0.24	0.10	—	新	発生～古墳	日	—
SK01695	08_B0126	IA3	V上 5層 E	不定形	B1a1	1.90	(0.95)	1.45	(0.90)	0.22	SH102	新	期後半以降	H	211 18

表17 土坑一覧表(3)

横構番号	現場遺構番号	調査区画	検出層位	埋土形状	平面形状	断面形状	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	新>●>旧	時期	出土遺物	種別	版
SK01696	08_B0131	IA3	V 上 3層	B	円形	Atal	0.50	0.50	0.25	0.25	0.10		弥生～古墳	H	—	
SK01697	08_B0132	IA3	V 上 1層 A	円形	Atal	0.42	0.30	0.30	0.22	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01698	08_B0133	IA3	V 上 2層 B	円形	Atal	0.40	0.30	0.26	0.26	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01699	08_B0267	IC3	V 上 3層 B	円形	Atal	0.76	0.66	0.55	0.50	0.20			弥生～古墳	H,S	—	
SK01700	08_B0268	IC3	V 上 2層 B	円形	Atal	0.22	0.20	0.18	0.18	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01701	08_B0129	ID4	V 上 3層 B	円形	Atal	0.40	0.35	0.30	0.28	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01702	08_B0559	ID4	V 上 3層 B	長楕円形	Atal	1.02 (2.00)	1.00 (1.80)	0.75	0.20	>SK01705			弥生～古墳	H	—	
SK01703	08_B0137	ID4	V 上 2層 C	長楕円形	Atal	0.85	0.70	0.60	0.40	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01704	08_B0127	ID3	V 上 2層 B	円形	Atal	0.35	0.30	0.25	0.20	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01705	08_B0558	IV3	V 上 4層 A	長楕円形	Atal	2.00 (2.00)	1.30 (1.80)	1.20	0.20	SK01706			弥生～古墳	H	—	
SK01706	08_B0557	IV3	V 上 2層 B	長楕円形	Atal	4.10	1.20	4.00	0.70	0.20	SB105>SK01705			弥生～古墳	H	—
SK01707	08_B0195	IV3	V 上 2層 B	円形	Atal	1.60	1.30	(2.20)	1.30	0.12	SK01613			弥生～古墳	H	—
SK01708	08_B0134	IV3	V 上 2層 E	円形	Atal	0.35	0.20	0.30	0.14	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01709	08_B0135	IV3	V 上 2層 E	円形	Atal	0.75	0.55	0.50	0.50	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01710	08_B0525	HF19	V 上 2層 B	円形	Atal	0.25	0.25	0.20	0.20	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01711	08_B0566	HF20	V 上 3層 B	円形	Atal	1.30	1.30	1.00	1.00	0.20			V期前半	H	—	
SK01712	08_B0427	HF20	V 上 1層 A	円形	Atal	0.30	0.28	0.22	0.20	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01713	08_B0289	HF20	V 上 1層 A	長楕円形	Atal	0.25	0.18	0.20	0.12	0.05	SD0432		弥生～古墳	H	—	
SK01714	08_B0288	HF20	V 上 3層 B	円形	Atal	0.30	0.26	0.15	0.14	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01715	08_B0383	HF20	V 上 2層 B	長方形	Atal	1.00 (0.70)	0.80 (0.50)	0.50	0.25	SD0423, SD0432			弥生～古墳	H	—	
SK01716	08_B0284	HF20	V 上 2層 B	円形	Atal	0.28	0.22	0.16	0.14	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01717	08_B0515	HF20	V 上 1層 A	円形	Atal	0.24	0.24	0.14	0.14	0.08			弥生～古墳	H	—	
SK01718	08_B0448	HF20	V 上 2層 B	円形	B3n1	0.28	0.28	0.20	0.20	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01719	08_B0449	IE1	V 上 3層 B	円形	B3n1	0.30	0.30	0.24	0.27	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01720	08_B0450	IE1	V 上 2層 F	円形	B3n1	0.15	0.15	0.10	0.10	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01721	08_B0451	IE1	V 上 4層 G	楕円形	B2n1	0.50	0.40	0.35	0.25	0.25			弥生～古墳	H	—	
SK01722	08_B0453	IE1	V 上 3層 B	円形	Atal	0.40	0.40	0.20	0.20	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01723	08_B0455	IE1	V 上 4層 B	円形	B2n1	0.50	0.50	0.30	0.30	0.35			弥生～古墳	H	—	
SK01724	08_B0456	IE1	V 上 3層 B	長楕円形	B2n1	0.40	0.32	0.30	0.20	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01725	08_B0447	IE1	V 上 3層 B	円形	Atal	0.40	0.30	0.15	0.15	0.24			弥生～古墳	H	—	
SK01726	08_B0437	HF29	V 上 2層 B	精円形	Atal	0.50 (0.30)	0.20 (0.15)	0.15	0.15	SD0423			弥生～古墳	H	—	
SK01727	08_B0438	HF29	V 上 2層 B	円形	Atal	0.30	0.25	0.15	0.15	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01728	08_B0446	HF29	V 上 2層 B	長楕円形	Atal	0.45	0.35	0.25	0.15	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01729	08_B0439	HF29	V 上 2層 B	精円形	Atal	0.55	0.45	0.40	0.35	0.18			弥生～古墳	H	—	
SK01730	08_B0440	HF29	V 上 1層 C	円形	Atal	0.30	0.30	0.20	0.20	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01731	08_B0441	HF29	V 上 3層 B	円形	B3n1	0.30	0.28	0.20	0.20	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01732	08_B0445	HF29	V 上 3層 B	円形	Atal	0.35	0.30	0.20	0.20	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01733	08_B0442	HF29	V 上 3層 B	長楕円形	Atal	0.25	0.24	0.10	0.10	0.22			弥生～古墳	H	—	
SK01734	08_B0443	HF29	V 上 2層 B	円形	Atal	0.25	0.25	0.10	0.10	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01735	08_B0444	HF29	V 上 2層 B	長楕円形	Atal	0.40	0.25	0.30	0.15	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01736	08_B0282	HF29	V 上 2層 B	円形	Atal	0.28	0.28	0.15	0.14	0.16			弥生～古墳	H	—	
SK01737	08_B0473	HF29	V 上 1層 B	精円形	Atal	0.35	0.30	0.25	0.20	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01738	08_B0282	HF29	V 上 3層 B	円形	B1n1	0.40	0.30	0.25	0.12	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01739	08_B0472	HF29	V 上 3層 B	円形	Atal	0.25	0.25	0.20	0.20	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01740	08_B0471	HF29	V 上 2層 B	円形	Atal	0.30	0.30	0.20	0.20	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01741	08_B0470	HF29	V 上 1層 A	円形	Atal	0.20	0.20	0.16	0.14	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01742	08_B0467	HF29	V 上 3層 B	円形	Atal	0.30	0.30	0.24	0.22	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01743	08_B0281	HF29	V 上 2層 B	円形	Atal	0.25	0.25	0.15	0.14	0.16			弥生～古墳	H	—	
SK01744	08_B0468	HF29	V 上 2層 B	円形	Atal	0.22	0.22	0.08	0.08	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01745	08_B0280	HF29	V 上 2層 B	精円形	Atal	0.30	0.30	0.20	0.14	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01746	08_B0465	HF29	V 上 2層 C	精円形	Atal	0.70	0.60	0.40	0.30	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01747	08_B0279	HF29	V 上 1層 A	精円形	Atal	0.35	0.30	0.20	0.14	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01748	08_B0464	HF29	V 上 2層 B	円形	Atal	0.40	0.40	0.36	0.36	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01749	08_B0461	IF1	V 上 3層 B	円形	Atal	0.45	0.40	0.30	0.26	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01750	08_B0463	IF1	V 上 1層 A	円形	Atal	0.40	0.30	0.30	0.20	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01751	08_B0462	IF1	V 上 1層 A	長方形	Atal	0.35	0.30	0.25	0.15	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01752	08_B0466	IF1	V 上 2層 B	長楕円形	Atal	0.35	0.30	0.25	0.15	0.15			弥生～古墳	H	—	
SK01753	08_B0524	IF1	V 上 1層 A	精楕円形	Atal	0.52	0.45	0.48	0.20	0.14			弥生～古墳	H	—	
SK01754	08_B0513	IF1	V 上 3層 G	円形	Atal	0.40	0.30	0.22	0.20	0.30			弥生～古墳	H	—	
SK01755	08_B0527	IF1	V 上 2層 C	円形	Atal	0.30	0.25	0.15	0.15	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01756	08_B0521	IF1	V 上 1層 A	長楕円形	Atal	0.30	0.20	0.20	0.10	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01757	08_B0522	HF29	V 上 2層 B	円形	Atal	0.20	0.20	0.18	0.18	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01758	08_B0523	HF29	V 上 2層 B	精円形	Atal	0.34	0.32	0.25	0.20	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01759	08_B0290	HF1	V 上 4層 B	円形	C2n1	0.70	0.65	0.28	0.26	0.30			弥生～古墳	H	—	
SK01760	08_B00538	HF29	V 上 1層 A	円形	Atal	0.25	0.25	0.20	0.20	0.05			弥生～古墳	H	—	
SK01761	08_B0534	HF29	V 上 2層 B	円形	Atal	0.25	0.25	0.20	0.18	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01762	08_B00549	HF29	V 上 2層 B	円形	Atal	0.25	0.25	0.20	0.20	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01763	08_B0540	HF29	V 上 4層 B	精円形	Atal	0.30	0.30	0.20	0.20	0.12	>SK01765		弥生～古墳	H	—	
SK01764	08_B0541	IH1	V 上 4層 B	円形	Atal	3.10	3.00	2.20	2.00	0.70	>SK01764		VII期後	H,J	240 21	
SK01765	08_B0140	IE2	V 上 2層 B	円形	Atal	0.25	0.25	0.20	0.20	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01766	08_B0141	IE2	V 上 3層 C	楕円形	Atal	0.50	0.30	0.20	0.16	0.25			弥生～古墳	H	—	

表18 土坑一覧表（4）

遺構番号	現場遺構番号	調査区画	検出部位	埋土	平面形状	断面形状	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	新>●>旧	時期	出土遺物	種類
SK01767_08_B0258	IE2	V_上	2層	B	円形	A1a1	1.00	1.00	0.90	0.80	0.16		弥生～古墳	H	-
SK01768_08_B0134	IE2	V_上	1層	A	不整円形	A1a1	2.50	2.00	1.70	1.15	0.30	>SB105, S2053	弥生～古墳	H	-
SK01769_08_B0235	IE2	V_上	4層	B	精円形	A2a1	0.50	0.45	0.38	0.32	0.16	>S053	弥生～古墳	H	-
SK01770_08_B0229	IE2	V_上	1層	A	円形	A2a1	1.60	1.34	1.15	1.10	0.46	>S053, S00427	弥生～古墳	H	-
SK01771_08_B0211	IE2	V_上	6層	A	長精円形	A2a1	0.96	0.94	0.75	0.55	0.50	>S053	弥生～古墳	H	240
SK01772_08_B0167	IE2	V_上	2層	B	円形	A1a1	0.45	0.42	0.20	0.20	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01773_08_B0145	IE2	V_上	1層	A	円形	A2a1	0.20	0.20	0.16	0.12	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01774_08_B0146	IE2	V_上	1層	A	円形	A2a1	0.20	0.20	0.15	0.12	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01775_08_B0407	IE2	V_上	1層	A	長精円形	A2a1	2.80	1.56	2.20	1.20	0.40	>S053	弥生～古墳	H	213
SK01776_08_B0209	IE2	V_上	2層	A	不整長精	A1a1	1.35	0.55	1.28	0.45	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01777_08_B0147	IE2	~V	3層	G	円形	A1a1	0.70	0.70	0.40	0.30	0.15		弥生～古墳	H	-
SK01778_08_B0148	IE2	V_上	2層	C	円形	A1a1	0.25	0.22	0.15	0.15	0.18		弥生～古墳	H	-
SK01779_08_B0149	IE2	V_上	2層	C	円形	A2a1	0.30	0.30	0.25	0.25	0.20		弥生～古墳	H	-
SK01780_08_B0150	IE2	V_上	3層	B	円形	A2a1	0.35	0.25	0.25	0.15	0.15		弥生～古墳	H	-
SK01781_08_B0155	IE2	V_上	2層	B	円形	A1a1	0.20	0.20	0.10	0.10	0.15		弥生～古墳	H	-
SK01782_08_B0156	IE2	V_上	2層	B	円形	A2a1	0.25	0.25	0.20	0.20	0.12		弥生～古墳	H	-
SK01783_08_B0151	IE2	V_上	2層	B	円形	A1a1	0.40	0.30	0.26	0.22	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01784_08_B0152	IE2	V_上	2層	B	円形	A1a1	0.45	0.45	0.40	0.36	0.15		弥生～古墳	H	-
SK01785_08_B0153	IE2	V_上	2層	A	円形	A1a1	0.20	0.20	0.14	0.12	0.05		弥生～古墳	H	-
SK01786_08_B0546	IE2	V_上	4層	D	円形	A1a1	1.40	1.10	0.80	0.70	0.20		弥生～古墳	H	-
SK01787_08_B0203	IE2	V_上	7層	B	長精円形	A2a1	0.75	0.75	0.45	0.40	0.15		弥生～古墳	H	-
SK01788_08_B0526	IF1	V_上	1層	A	長精円形	A1a1	0.40	0.40	0.35	0.20	0.15		弥生～古墳	H	-
SK01789_08_B0544	IF1	V_上	1層	A	円形	A1a1	1.15	1.10	0.65	0.65	0.12		弥生～古墳	H	-
SK01790_08_B0548	IF1	V_上	2層	B	長精円形	A1a1	0.35	0.30	0.20	0.10	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01791_08_B0543	IF1	V_上	1層	A	長精円形	A1a1	0.70	0.30	0.60	0.20	0.05	>SK01793	弥生～古墳	H	-
SK01792_08_B0542	IF1	V_上	6層	B	精円形	A2a1	1.70	1.25	1.40	1.00	0.60	>SK01792	弥生期以降	H, L	242
SK01793_08_B0247	IF2	V_上	2層	B	精円形	A1a1	0.30	0.30	0.24	0.10	0.14	>S0433	弥生～古墳	H	-
SK01794_08_B0244	IF2	V_上	2層	B	長精円形	B1a1	2.55	1.75	2.26	1.40	0.14	>S054	弥生～古墳	H	215
SK01795_08_B0166	IF2	V_上	6層	B	精円形	A2a1	0.95	0.70	0.60	0.55	0.40		弥生～古墳	H	-
SK01796_08_B0142	IF3	V_上	3層	B	円形	A2a1	0.20	0.20	0.12	0.12	0.18		弥生～古墳	H	-
SK01797_08_B0191	IF3	V_上	2層	B	円形	A2a1	0.20	0.20	0.10	0.10	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01798_08_B0143	IF3	V_上	4層	B	精円形	A2a1	3.00	2.10	2.80	2.00	0.20	>S053	弥生期	H, L	217
SK01799_08_B0144	IF3	V_上	1層	A	円形	A2b1	0.30	0.30	0.15	0.15	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01800_08_B0163	IF3	V_上	1層	A	円形	A2a1	0.20	0.16	0.12	0.10	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01801_08_B0162	IF3	V_上	1層	A	円形	A2a1	0.25	0.25	0.20	0.20	0.12		弥生～古墳	H	-
SK01802_08_B0560	IF3	V_上	4層	B	長精円形	A1a1	(1.70)	(1.00)	(1.60)	(0.90)	0.16	>S06427>>SP0085, SZ05	弥生期	H	219
SK01803_08_B0308	IG3	V_上	1層	A	円形	B1a1	0.25	0.25	0.16	0.15	0.07	>S053	弥生～古墳	H	-
SK01804_08_B0157	IG3	V_上	1層	A	円形	A1a1	0.20	0.20	0.14	0.16	0.05		弥生～古墳	H	-
SK01805_08_B0158	IG3	V_上	2層	B	円形	A1a1	0.60	0.65	0.40	0.35	0.12		弥生～古墳	H	-
SK01806_08_B0159	IG3	V_上	3層	C	円形	A1a1	0.40	0.30	0.22	0.20	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01807_08_B0160	IG3	V_上	4層	A	円形	A2a1	0.80	0.80	0.50	0.50	0.05		VI期	H	219 ^{18*}
SK01808_08_B0168	IG4	V_上	2層	G	円形	A1a1	0.30	0.25	0.20	0.20	0.08		弥生～古墳	H	-
SK01809_08_B0202	IG4	V_上	2層	B	円形	A2a1	2.70	1.50	1.70	1.00	0.30	>SK01810, SB106	弥生期前半	H, L	219
SK01810_08_B0164	IG5	V_上	4層	B	精円形	A1a1	2.25	1.60	1.60	1.20	0.32	>S0106, SK01809, SZ05	弥生期	H	221 ¹⁹
SK01811_08_B0154	IG5	V_上	1層	A	円形	A1a1	0.20	0.20	0.16	0.14	0.05		弥生～古墳	H	-
SK01812_08_B0172	IG5	V_上	3層	E	円形	A2a1	0.20	0.20	0.14	0.14	0.08		弥生～古墳	H	-
SK01813_08_B0306	IG5	V_上	2層	B	円形	A2a1	0.22	0.20	0.10	0.10	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01814_08_B0430	IG5	V_上	1層	A	長精円形	A2a1	3.60	1.00	1.00	0.60	0.30		弥生期以降	H	242
SK01815_08_B0545	IG5	V_上	1層	A	円形	A1a1	0.72	0.70	0.60	0.60	0.05		弥生～古墳	H	-
SK01816_08_B0547	IG5	V_上	1層	A	長精円形	A1a1	0.30	0.25	0.18	0.10	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01817_08_B0216	ET2	V_上	3層	B	精円形	A1a1	0.35	0.35	0.28	0.26	0.22		弥生～古墳	H	-
SK01818_08_B0218	ET2	V_上	2層	D	円形	A1a1	0.26	0.26	0.22	0.20	0.16		弥生～古墳	H	-
SK01819_08_B0181	II2	V_上	1層	A	長精円形	B1a1	0.80	0.60	0.65	0.45	0.05		弥生～古墳	H	-
SK01820_08_B0217	II2	V_上	3層	B	精円形	A1a1	0.35	0.35	0.28	0.26	0.20		弥生～古墳	H	-
SK01821_08_B0505	II2	V_上	3層	B	精円形	A1a1	2.00	1.60	1.90	1.50	0.10	>SK01822	弥生～古墳	H	-
SK01822_08_B0316	II2	V_上	1層	A	不定形	B1a1	3.65	1.05	3.60	1.00	0.05	>SK01821	弥生～古墳	H	-
SK01823_08_B03097	H20	V_上	3層	B	円形	A2a1	0.35	0.25	0.12	0.12	0.16		弥生～古墳	H	-
SK01824_08_B0341	IJ1	V_上	2層	B	長精円形	B1b1	1.05	0.70	0.90	0.40	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01825_08_B0335	IJ1	V_上	2層	B	円形	A1a1	0.20	0.28	0.12	0.12	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01826_08_B0324	IK1	V_上	2層	B	長精円形	A2a1	0.35	0.25	0.20	0.10	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01827_08_B0315	IK2	V_上	3層	B	円形	A1a1	0.25	0.25	0.10	0.10	0.10		弥生～古墳	H	-
SK01828_08_B0313	IK2	V_上	3層	B	円形	A1a1	0.25	0.25	0.10	0.10	0.15		弥生～古墳	H	-
SK01829_08_B0409	IK2	V_上	5層	B	円形	A1a1	3.20	2.00	2.00	0.52	0.40		弥生～古墳	H	-
SK01830_08_B0323	IK2	V_上	2層	B	円形	A2a1	1.15	0.95	0.90	0.70	0.10		弥生期以降	H	223
SK01831_08_B03022	IK2	V_上	2層	B	円形	A2a1	0.30	0.30	0.12	0.10	0.10		V期	H	223 ¹⁹
SK01832_08_B0309	IL2	V_上	2層	B	長精円形	A1a1	1.40	0.90	1.00	0.50	0.16		弥生～古墳	H	225
SK01833_08_B0314	IK2	V_上	2層	B	円形	A1a1	0.25	0.22	0.14	0.10	0.15		弥生～古墳	H	-
SK01834_08_B0343	IK1	V_上	2層	B	長精円形	A1a1	0.35	0.30	0.20	0.10	0.12		弥生～古墳	H	-
SK01835_08_B0333	IK1	V_上	1層	A	長精円形	A2a1	0.48	0.42	0.35	0.16	0.08		V期	H	223
SK01836_08_B0334	IK1	V_上	1層	A	長精円形	A3a1	0.20	0.20	0.15	0.10	0.15		弥生～古墳	H	-

表19 土坑一覧表(5)

横構番号	現場遺構番号	調査区画	検出層位	埋土	平面形状	断面形状	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	新・○・旧	時期	出土遺物	種別	図版
SK01837	08_B0331	II1	V上・層B	長楕円形	Atal	1.20	0.60	0.80	0.35	0.16			弥生～古墳	H	—	
SK01838	08_B0328	II1	V上・3層G	楕円形	Atal	0.30	0.22	0.24	0.18	0.16			弥生～古墳	H	—	
SK01839	08_B0329	II2	V上・1層A	円形	Atal	0.29	0.20	0.14	0.14	0.05			弥生～古墳	H	—	
SK01840	08_B0330	II2	V上・3層G	長楕円形	Atal	0.30	0.30	(1.75)	0.20	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01841	08_B0339	II2	V上・1層A	円形	Atal	0.25	0.20	0.15	0.15	0.05			弥生～古墳	H	—	
SK01842	08_B0338	II2	V上・1層A	円形	Atal	0.35	0.33	0.23	0.20	0.04			弥生～古墳	H	—	
SK01843	08_B0357	II2	V上・1層A	円形	Atal	0.30	0.30	0.10	0.10	0.08			弥生～古墳	H	—	
SK01844	08_B0326	II2	V上・1層A	円形	Atal	0.45	0.45	0.30	0.30	0.05			弥生～古墳	H	—	
SK01845	08_B0173	II3	V上・1層G	円形	A2al	0.30	0.25	0.26	0.20	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01846	08_B0169	II2	V上・1層A	円形	Atal	0.25	(0.15)	0.20	(0.10)	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01847	08_B0175	II3	V上・1層A	円形	A2al	0.20	0.20	0.15	0.15	0.08			弥生～古墳	H	—	
SK01848	08_B0176	II3	V上・3層B	円形	A2al	0.56	0.40	0.26	0.22	0.25			弥生～古墳	H	—	
SK01849	08_B0174	II3	V上・1層A	円形	Atal	0.35	0.30	0.30	0.28	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01850	08_B0182	II3	V上・2層B	長楕円形	A2al	0.45	0.25	0.25	0.10	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01851	08_B0183	II3	V上・1層A	円形	Atal	0.50	0.45	0.30	0.20	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01852	08_B0184	II3	V上・6層B	円形	A2al	0.60	0.55	0.40	0.20	0.30			弥生～古墳	H	—	
SK01853	08_B0219	II3	V上・3層B	円形	A2al	0.30	0.30	0.20	0.18	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01854	08_B0273	II3	V上・2層B	円形	A2al	0.32	0.30	0.22	0.20	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01855	08_B0186	II4	V上・6層B	不明	Blal	2.10	(0.60)	(1.50)	(0.50)	0.10	SB107, SZ054, SK01856		V1層後半～V2層前半	H, J	227 19	
SK01856	08_B0386	II4	V上・4層B	不明	Atal	2.20	1.50	(2.00)	1.40	0.30	SZ054		弥生～古墳	H	—	
SK01857	08_B0169	II3	V上・4層B	円形	Atal	1.40	1.10	0.80	0.80	0.30	SB108, SZ054		弥生～古墳	H	—	
SK01858	08_B0170	II3～II3	V上・1層B	長楕円形	Atal	1.60	0.85	1.30	0.80	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01859	08_B0188	II3～II4	V上・1層A	円形	Atal	0.30	0.30	0.15	0.15	0.08			弥生～古墳	H	—	
SK01860	08_B0344	IK3	V上・4層B	不定形	Blcl	0.00	2.40	3.90	2.30	0.30			V-3期	H	229	
SK01861	08_B0413	IL3	V上・2層B	楕円形	Atal	3.10	2.90	1.15	0.90	0.10	SK01862		弥生～古墳	H	—	
SK01862	08_B0206	IL3	V上・2層B	楕円形	A2al	0.40	0.30	0.36	0.26	0.10	SB110-P1		弥生～古墳	H	—	
SK01863	08_B0207	IL3	V上・2層B	円形	Atal	0.40	0.36	0.36	0.32	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01864	08_B0376	II4	V上・2層B	長楕円形	Atal	3.00	1.80	2.80	1.30	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01865	08_B0310	IL3	V上・2層B	長楕円形	Atal	1.10	0.90	0.84	0.62	0.14	SB109		弥生～古墳	H	—	
SK01866	08_B0555	IL3	V上・5層B	長楕円形	Atal	3.10	1.90	1.80	1.20	0.50	SB1067, SB109, SB109		V1～V2期	H	—	
SK01867	08_B0203	IL3	V上・4層B	円形	A2al	2.30	1.90	2.05	1.60	0.20	SB109-P2, SK01866		弥生～古墳	H	—	
SK01868	08_B0369	HN18	V上・4層B	長楕円形	Atal	4.60	1.70	1.50	1.70	0.30			弥生～古墳	H	—	
SK01869	08_B0567	HN19	V上・2層B	楕円形	Atal	0.95	0.80	0.65	0.50	0.10	SK01870		弥生～古墳	H	—	
SK01870	08_B0568	HN19	V上・2層B	楕円形	Atal	1.50	1.00	0.60	0.50	0.15	SK01869		弥生～古墳	H	—	
SK01871	08_B0326	HN18	V上・2層G	楕円形	B2e2	1.60	1.45	1.50	1.35	0.10			V3期以降	H, S	242 21	
													H, J, I.P., S.T., W.	22 22		
SK01872	08_B0357	HO17	V上・7層B	不整方形	Atbl	4.80	4.30	3.20	3.00	0.60						
													H, J, I.P., S.T., W.	244 22		
SK01873	08_B0358	HP18	V上・4層B	楕円形	Atal	1.50	1.20	0.60	0.30	0.25						
SK01874	08_B0368	HP17	V上・3層B	不明	Atal	(1.70)	1.20	(1.30)	0.30	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01875	08_B0366	HP19	V上・2層C	円形	Atal	0.32	0.25	0.10	0.10	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01876	08_B0393	IN2	V上・3層D	円形	Atal	0.45	0.44	0.22	0.20	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01877	08_B0408	IN2	V上・2層B	円形	Atal	0.30	0.30	0.20	0.20	0.20	SD0437		弥生～古墳	H	—	
SK01878	08_B0466	IN3	V上・2層B	長方形	Blal	5.00	3.50	4.80	3.30	0.10	SK01885, SK01879+SK01879-P1		V1～V2期	H	229 19	
SK01879	08_B0390	IN3	V上・1層A	円形	Atal	1.30	1.20	1.24	1.12	0.10	SK01878		弥生～古墳	H	—	
SK01880	08_B0552	IO1	V上・3層B	円形	Atal	2.20	1.80	1.50	1.30	0.20	SK01881		弥生～古墳	H	—	
													H, W ～ 232	246 22		
SK01881	08_B0351	IO1	V上・7層B	円形	A2al	2.50	1.90	1.30	1.10	0.76	SD0438, SK01880					
													H, W ～ 232	232		
SK01882	08_B0572	IO1	V上・5層B	長楕円形	A2al	(1.20)	1.20	(0.65)	0.30	0.65						
SK01883	08_B0398	IM3	V上・3層B	円形	A2al	0.30	0.30	0.20	0.20	0.20			弥生～古墳	H	—	
SK01884	08_B0405	IM3	V上・2層B	円形	Blal	2.10	0.60	0.18	0.16	0.10	SK01885, SK01878		弥生～古墳	H	—	
SK01885	08_B0389	IN3	V上・2層B	楕円形	Atal	1.50	1.10	1.35	0.96	0.10	SK01884, SK01878		弥生～古墳	H	—	
SK01886	08_B0388	IN3	V上・3層B	長楕円形	Atal	0.85	0.55	0.70	0.45	0.12	SD0439		弥生～古墳	H	232	
SK01887	08_B0365	IQ18	V上・1層A	円形	Atal	0.30	0.25	0.14	0.16	0.06			弥生～古墳	H	—	
SK01888	08_B0371	IQ18	V上・1層A	円形	Atal	0.30	0.30	0.20	0.20	0.05			弥生～古墳	H	—	
SK01889	08_B0372	IQ17	V上・2層B	楕円形	A2al	0.35	0.35	0.20	0.15	0.12			弥生～古墳	H	—	
SK01890	08_B0381	HS29	V上・1層A	円形	Atal	0.60	0.50	0.30	0.30	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01891	08_B0382	HT29	V上・1層A	円形	A2al	2.35	2.25	2.10	1.75	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01892	08_B0565	HT19	V上・2層B	不整長楕円形	Atal2	(2.00)	(0.90)	(1.80)	(0.50)	0.30	SK0002		弥生～古墳	H	—	
SK01893	08_B0367	HQ20	V上・2層B	長楕円形	Atal	1.50	1.10	1.30	0.85	0.10			弥生～古墳	H	—	
SK01894	08_B0342	HP1～IS1	V上・15層B	不明	Atal	(25.00)	(20.00)	(22.00)	(18.00)	1.40	SK01891		I期?	H, P, I.P., S.T., ~ W.C.	265 23	

SP0085（遺構：図275、遺物：図276）

検出状況 西部東側ほぼ中央、住居跡密集域のV層上面で検出した。

形状 深さは0.25m程度である。東側はテラス状となる箇所が認められる。

埋土 5層に分層した。壁面から徐々に堆積したと考えられる。

遺物出土状況 VI～VII期壺脚部（1375）のみが出土した。

出土遺物 1375は脚部が完存する壺脚部。指頭圧痕が顕著に残る。

時期 出土土器からVI～VII期と考えられる。

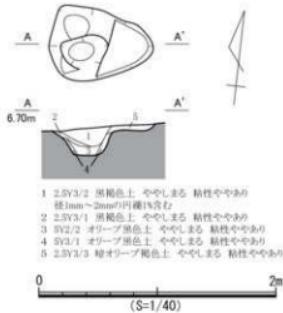


図275 SP0085遺構図



図276 SP0085遺物実測図

表20 柱穴状小穴一覧表

遺構番号	現地遺構番号	調査区分	検出部位	埋土	平面形状	断面形状	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	新>●>旧	時期	出土遺物	種別	図版
SP0067	08_B0251	DT17	V上	3層 B	円形	B1al	0.30	0.28	0.10	0.10	0.20		弥生～古墳	—	—	
SP0068	08_B0503	DT18	V上	4層 B	円形	A2al	0.45	0.45	0.15	0.15	0.30		弥生～古墳	—	—	
SP0069	08_B0110	ET3	V上	2層 G	円形	A1al	0.25	0.20	0.10	0.15	0.18		弥生～古墳	H	—	
SP0070	08_B0119	ET3	V上	2層 G	円形	A2al	0.20	0.15	0.10	0.10	0.18	>SB100	弥生～古墳	H	—	
SP0071	08_B0535	HA16	V上	3層 B	円形	A3al	0.20	0.20	0.12	0.10	0.20		弥生～古墳	H	—	
SP0072	08_B0504	HA17	V上	2層 G	円形	A2al	0.30	0.30	0.20	0.18	0.20		弥生～古墳	—	—	
SP0073	08_B0277	HA17	V上	3層 B	梢円形	A3al	0.35	0.30	0.20	0.14	0.20		弥生～古墳	—	—	
SP0074	08_B0491	HB17	V上	3層 B	長楕円形	B3al	0.35	0.30	0.25	0.10	0.25		弥生～古墳	—	—	
SP0075	08_B0416	ID02	V上	3層 B	円形	ID2al	0.40	0.40	0.28	0.26	0.20		弥生～古墳	H	—	
SP0076	08_B0573	IC1	V上	4層 G	梢円形	A2al	0.40	0.35	0.30	0.30	0.40	SA003-P4	弥生～古墳	H, W	—	
SP0077	08_B0433	HE19	V上	3層 B	円形	A1al	0.25	0.25	0.10	0.10	0.25		弥生～古墳	H	—	
SP0078	08_B0434	HE19	V上	3層 B	円形	A3al	0.30	0.28	0.12	0.12	0.25		弥生～古墳	—	—	
SP0079	08_B0436	HE20	V上	4層 B	円形	B3al	0.20	0.20	0.14	0.14	0.15		弥生～古墳	H	—	
SP0080	08_B0452	IE1	V上	4層 G	円形	B2al	0.35	0.30	0.20	0.20	0.18		弥生～古墳	H	—	
SP0081	08_B0454	IE1	V上	4層 G	円形	B3al	0.35	0.35	0.15	0.15	0.30		弥生～古墳	H	—	
SP0082	08_B0457	IF1	V上	2層 C	円形	C3al	0.50	0.35	0.15	0.15	0.25		弥生～古墳	—	—	
SP0083	08_B0460	IF1	V上	4層 G	円形	A2al	0.50	0.45	0.40	0.38	0.30		弥生～古墳	H, W	—	
SP0084	08_B0529	IF1	V上	3層 B	円形	A2al	0.30	0.30	0.20	0.20	0.20		弥生～古墳	H	—	
SP0085	08_B0528	IF1	V上	5層 B	円形	A2al	0.75	0.65	0.20	0.20	0.25		VI～VII期	H	275	
SP0086	08_B0562	IF3	V上	4層 B	円形	A3al	0.25	0.25	0.20	0.20	0.20	SK01802?	弥生～古墳	—	—	
SP0087	08_B0171	IH	V上	3層 B	長楕円形	A1al	0.30	0.30	0.24	0.22	0.30		弥生～古墳	—	—	
SP0088	08_B0177	IH3	V上	4層 G	円形	A2al	0.30	0.25	0.20	0.15	0.18		弥生～古墳	H	—	
SP0089	08_B0553	IJ1	V上	3層 B	円形	A5al	0.30	0.30	0.18	0.18	0.38		弥生～古墳	H	—	
SP0090	08_B0554	IL1	V上	3層 B	円形	A5al	0.25	0.25	0.20	0.20	0.30		弥生～古墳	—	—	
SP0091	08_B0185	II3	V上	3層 B	円形	A2al	0.30	0.30	0.20	0.20	0.20		弥生～古墳	H	—	
SP0092	08_B0187	IJ3	V上	2層 B	円形	A2al	0.25	0.25	0.10	0.10	0.15		弥生～古墳	H	—	

7 自然流路（NR）

NR001 (遺構: 図277・278、遺物: 図279~284)

検出状況 西部西端北東部～ほぼ中央付近のV層上面で検出した。東側壁面の立ち上がりが確認でき、平面形はゆるかな弧状を呈す。調査区西壁面の北側及び中央付近でそれぞれの立ち上がりを確認したので、蛇行する自然流路の一部と考えられる。西側の壁面の立ち上がりは調査区域外に伸びているので全形は不明である。10層は粒度分析を実施した。その結果、營力の強い河川堆積であったことが判明している。

形状 深さは最深部で2mを越える。確認した東壁面は急傾斜であり、底面はやや平坦である。確認した範囲では幅11m程度が認められる。

埋土 19層に分層した。自然堆積である。その堆積環境が上層と下層で異なる。上層は4～18層までで一部灰色土が混じるが、黒褐色土～黒褐色土のやや粘性のある土層が堆積し、下層の19～21層は灰色土の砂質土が堆積していた。上層の方がゆっくりと埋没したと考えられる。下層はほぼ無遺物層と考えられる。上層の上位層がわずかに古墳時代後期以降の土器資料を含むが、大半が弥生時代中期～古墳時代前期の土器資料で占められ、およそ古墳時代前期にはほぼ埋没したと考えられる。下位層には弥生時代前期～縄文時代晚期後半以の土器資料が認められるので、下位層は弥生時代前期～中期にかけての堆積と考えられ、出土遺物はこの堆積に伴って二次堆積したものであろう。10・17層からの出土が顕著である。弥生中期後葉のIV期1376は東壁ほぼ中央の上端、壁面には密着するようにして出土した。その出土位置からすると、弥生時代中期後葉までそれほど堆積がなく、完全埋没には至っていない可能性がある。同様のレベルでアカガシ亜属のミカン割り材(1417)、伐採痕のある倒木(1418)、アカガシ亜属の倒木が出土した。図示した根の倒木であろう。北西方向に倒れているので、冬季の季節風によって倒れたのかもしれない。倒木の存在からNR001の肩部周辺にアカガシ亜属の植生があつて、これを当時の人々が利用した可能性が高い。19～21層の下層は無遺物層と考えられ、縄文時代晚期以前の堆積と考えられる。

遺物出土状況 倒木痕の際からは1376のIV期古井式の壺胴部片が出土した。縄文時代晚期後半～末葉の資料として1377・1390・1392～1395・1397・1398・1404が出土した。I期の遠賀川系土器は1400・1402・1403が出土した。II期の資料は1406、III期の資料は1399・1401が出土した。IV期の資料は1407～1410が出土した。V～VII期の資料はそれほど大量の出土はみられず、摩耗が進行している。

出土遺物 1376は口頸部及び底部を欠損するが胴部1/2程度が遺存する。黒褐色の緻密で堅く焼け締まった胎土で、在地のものとは全く異なる。搬入品の可能性が高い。また、A地区既報告分の口縁部片348と胎土や調整が近似する。頭部はクシ状工具による直線文と波状文で施文し、二又状のクシ状工具で頭部文様帶を縁取りし、縁位も区画する。縁位の区画文は懸垂文Bに接する。頭部より下には胴部上半においておそらく6単位の懸垂文Aと懸垂文Bを施文する。懸垂文Aはクシ状工具による縁位直線文を施文し、その後、二又状のクシ状工具により横位の単線文を7単位施文する。さらに4段目以下にハの字の文様を加える。懸垂文Bはクシ状工具を6回前後振幅の短い縁位の波状文として重ね、その周囲を二又状のクシ状工具で縁取り、両端に7本前後のハの字状の短線文を施文する。胴部下半は無文となるが、精緻なミガキで仕上げられ、調整痕の観察が不明瞭となるほどである。別個体

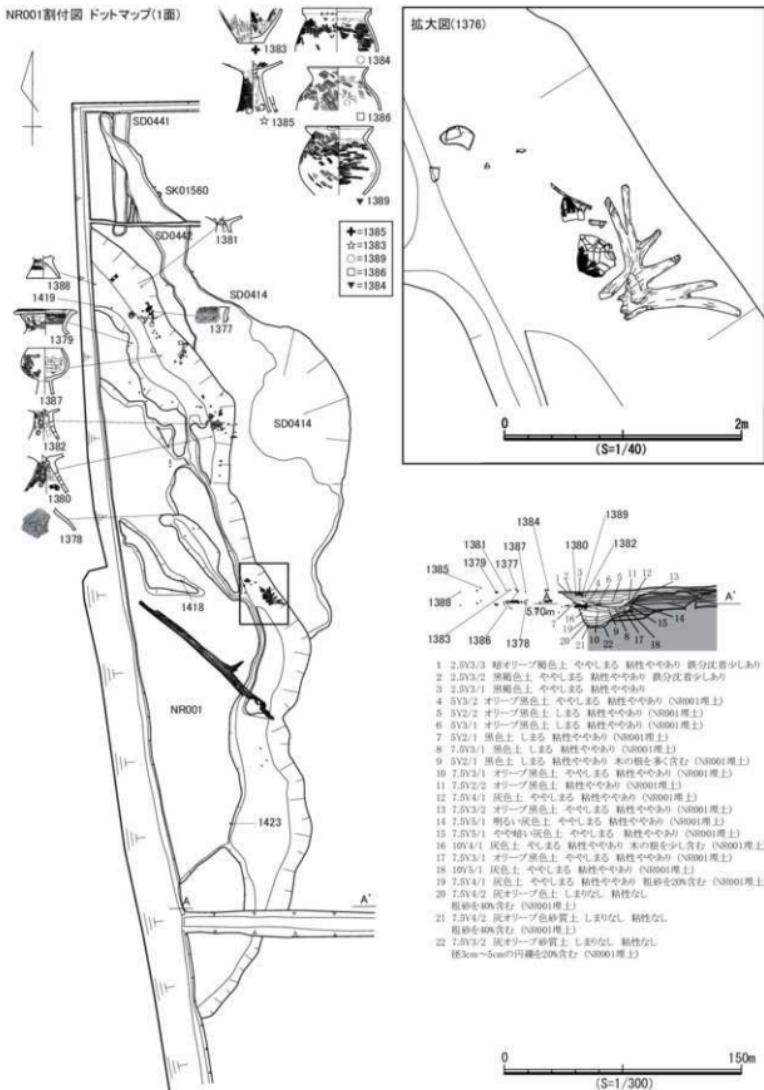


図277 NR001遺構図（1）

だが同類の資料として1378がある。縄文時代晚期後半～末葉の資料（1377・1390～1395・1397・1398・1404）の多くは末葉頃の資料（1377・1396～1398）である。1392・1394は後半でも前半に位置する資料である。1392は口縁端部に押引きがあり、頸部の段も明瞭である。1394は外面にケズリ調整があり、口縁部がわずかに内湾する。胎土に金雲母が目立つ。1390は突帯の押引きの単位が短い資料で滋賀里式に類似する。1391は突帯上をユビで強く押圧する資料で縄文時代晩期末葉～弥生時代前期の資料。1393も同様の時期と考えられる。I期の1400・1402は壺で、1403は甌であろう。1406はII期の甌で、内面に波状文がみられる。1399・1401はIII期の甌で櫛描の文様帶が認められる。IV期の資料のうち1409・1410・1412は壺、1407は甌B類、1408は甌A類にあたる。1410の口縁部には縦位の沈線が認められる。1379は口縁端部に強いナデをおこない端部が外方に拡張されるV～VI期甌A類の資料である。1384はV～VI期前半甌A2類。口縁部の屈曲は顕著だが、頸部文様は刺突文のみである。1389は口縁部には打ち欠きがみられるVI～VII期の甌A4類。1386は甌B3類。頸部の屈曲が弱く、口縁部が長く立ち上がる。VI期後半～VII期の甌B3類である。1415は須恵器の長頸瓶。8世紀頃であろう。1405は時期が認定し難い資料。胎土は縄文時代晚期に類似するが、V～VII期に相当するのであろう。しかし、その形状は類似する例がない。胸部下半外面には煤が付着する。1426は砂岩製の叩石類。1421はたも網の棒か。枝を払い、全体に細かい加工があるが、弓としては加工が甘いため、たも棒とした。下端部を丸く加工する。1425は輪かんじき田下駄の横木で左右両端を欠損する。1424は弓。全体に細かい加工を残す。弓弭部分は欠損する。1422はくぎ

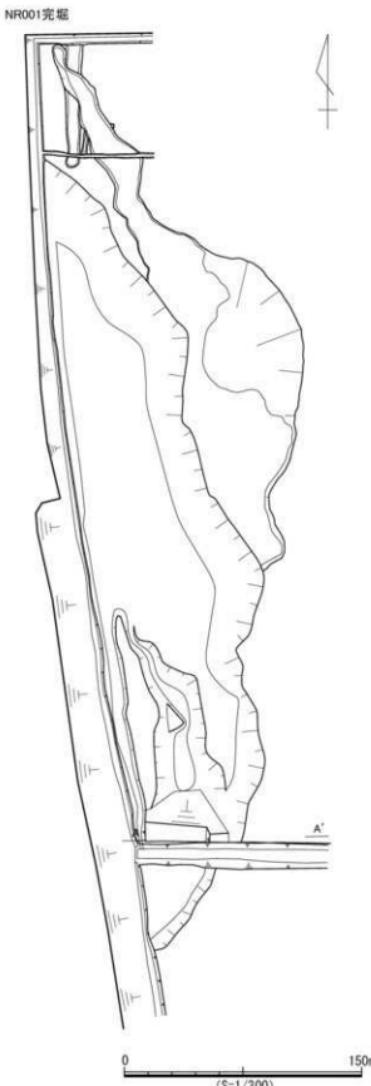


図278 NR001遺構図（2）

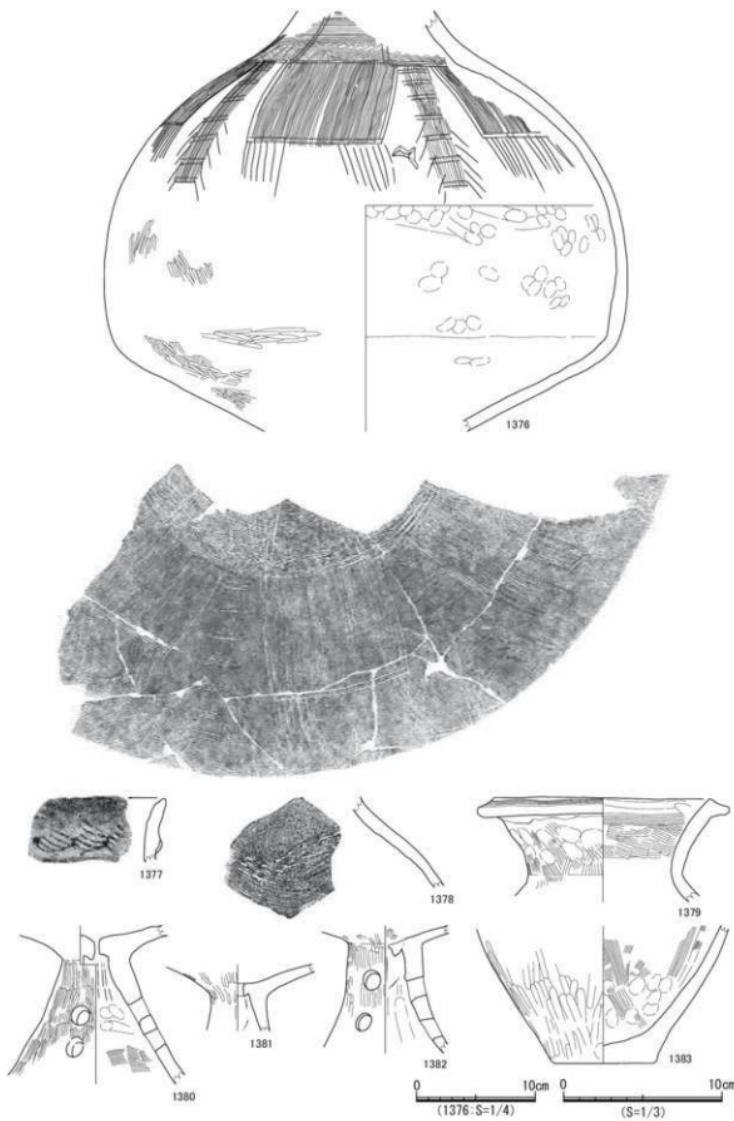


図279 NR001遺物実測図（1）

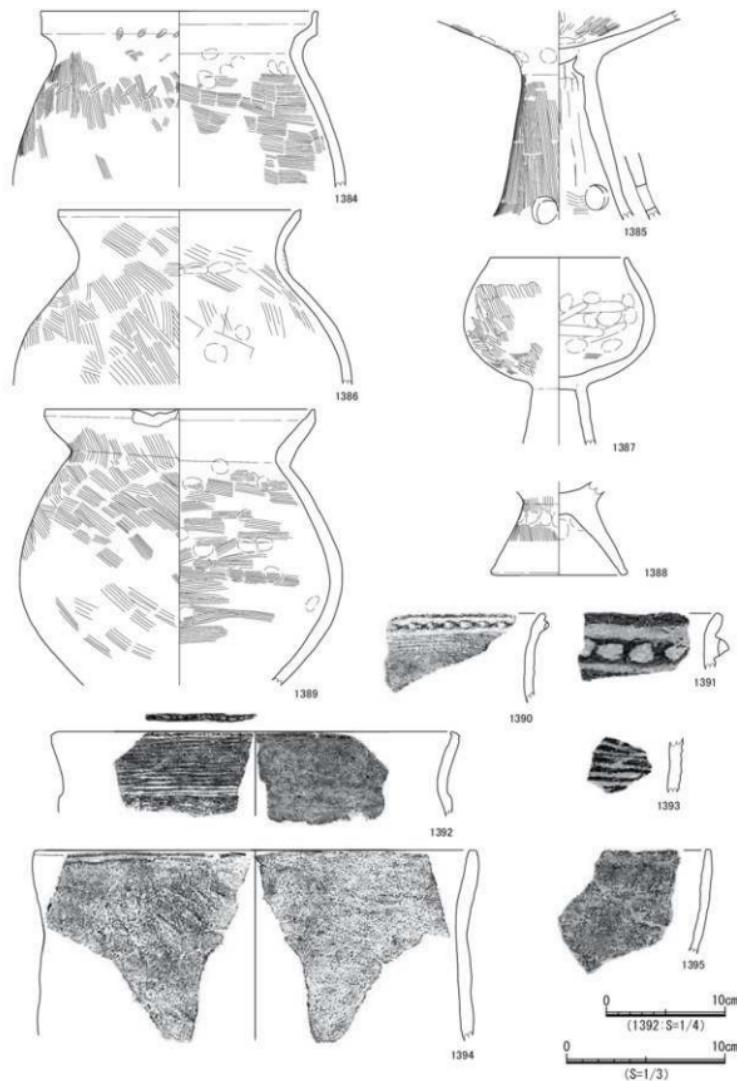


図280 NR001遺物実測図（2）

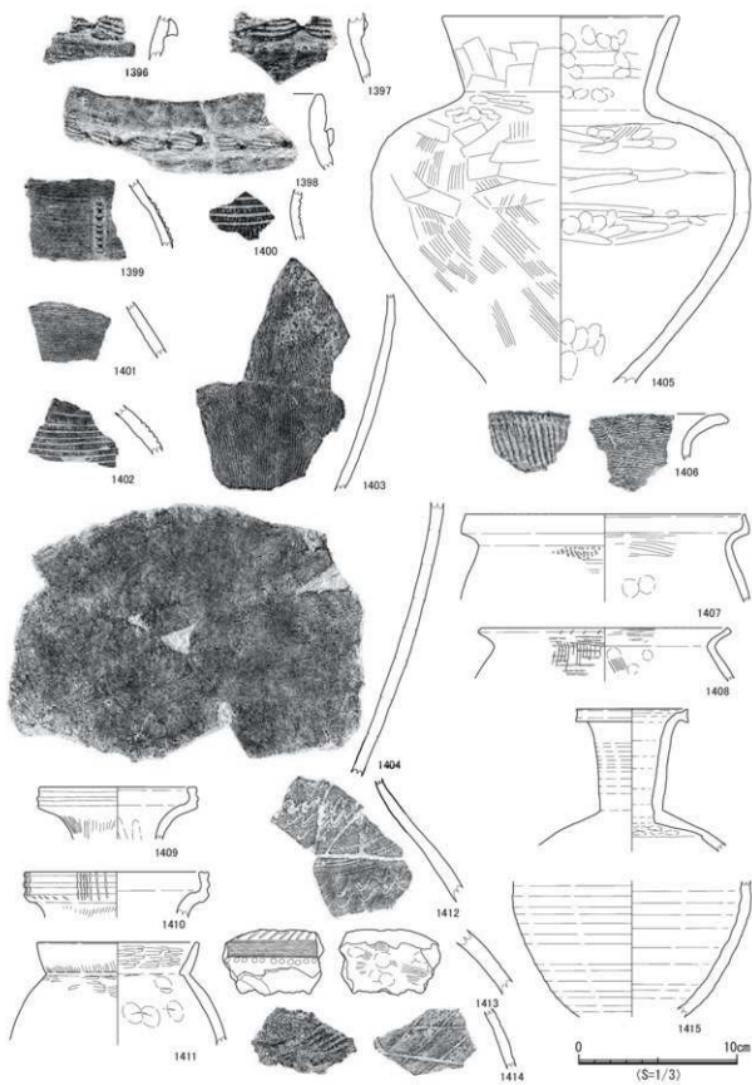


図281 NR001遺物実測図（3）

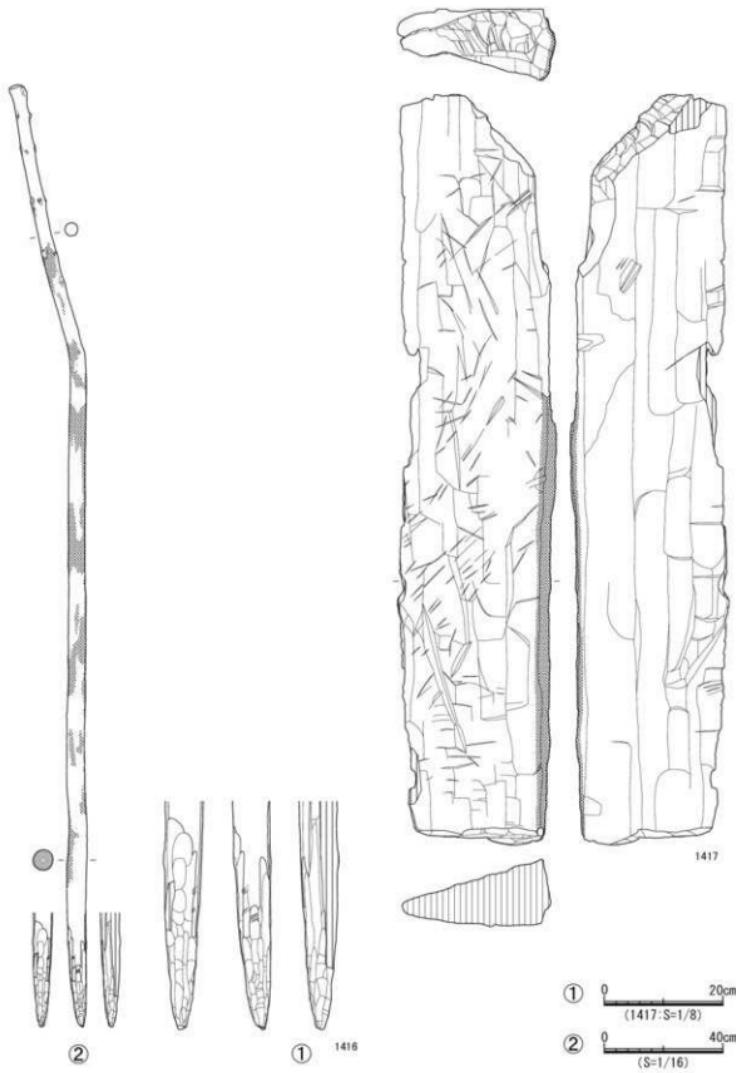


図282 NR001遺物実測図（4）

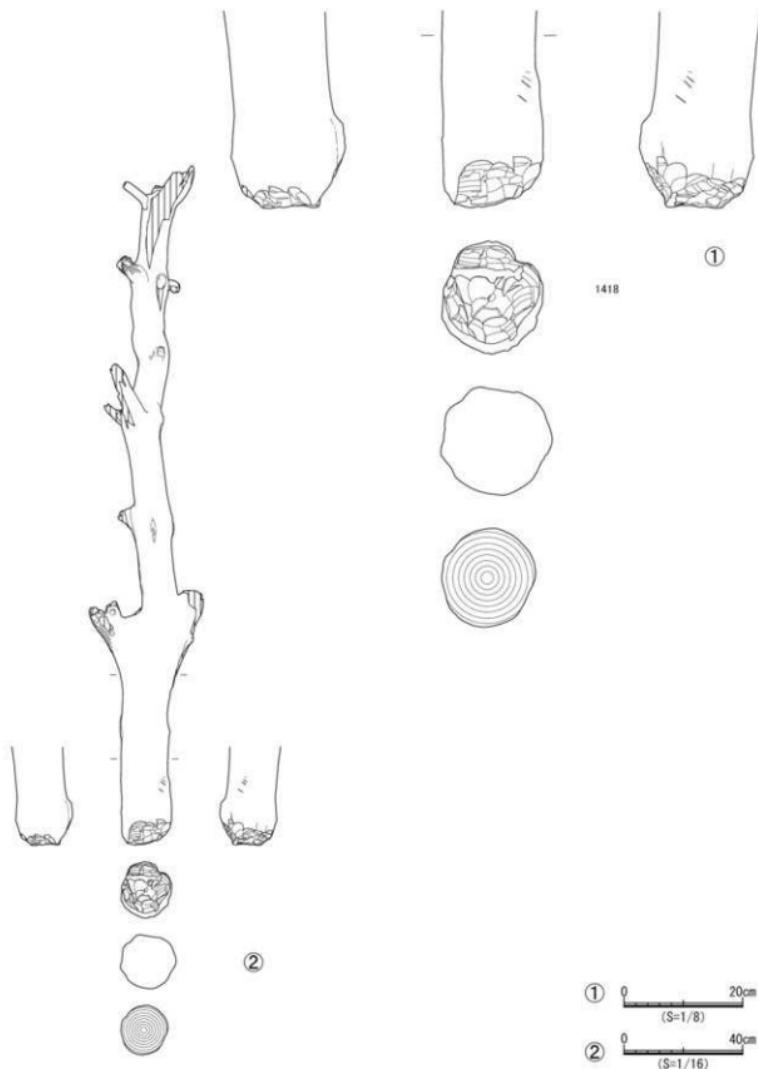


図283 NR001遺物実測図（5）

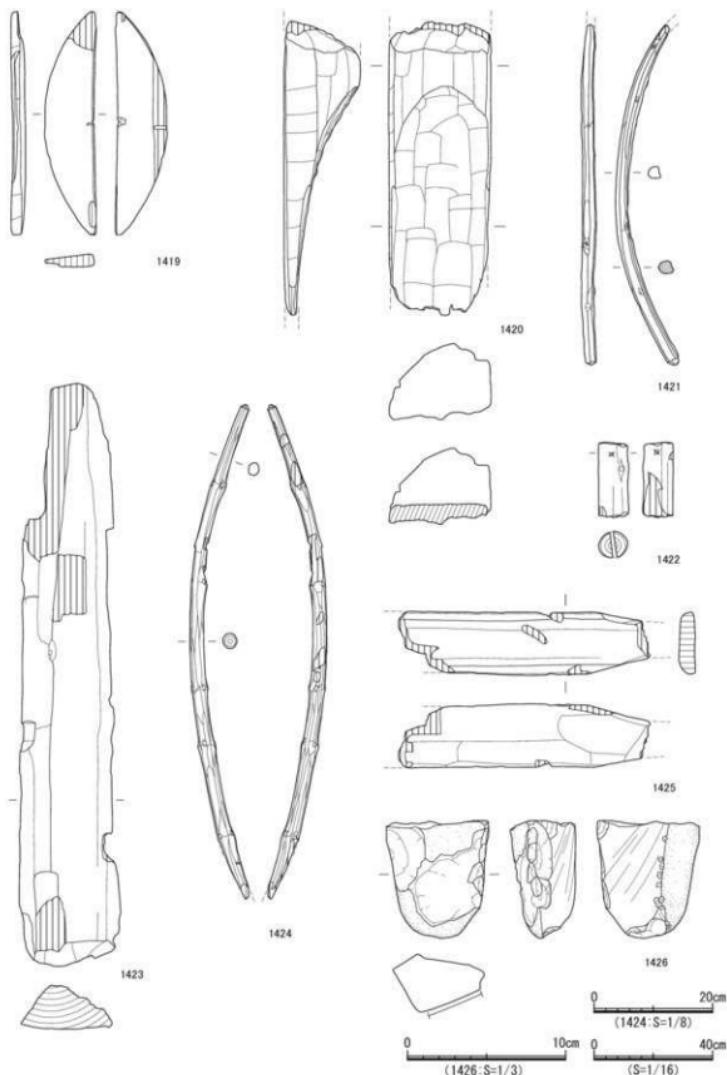


図284 NR001遺物実測図（6）

穴の有る用途不明の棒材。上下両端部は欠損している。1419は曲物の底板で側面に釘跡がある。1420は梯子で正面と側面にチョウナ痕が残る。上下端部は欠損し、1段のみ残す。1418は伐採木で3方向からの伐採痕が明瞭に残す。1423は農具素材。芯去のミカン割材で下端部に切断痕がある。上部は欠損している。1416は杭で下端部を尖るように細かい加工を施す。全体に樹皮が付着している。1417は農具素材となる分割製材板で上下両端部に切断痕を残す。樹皮を残す右側縁からの楔痕と表裏面に粗めの加工痕がある。

時期 繩文時代晚期後半以前から自然流路として位置していたが、弥生時代前期以降、堆積が進行し、古墳時代前期にほぼ埋没したと考えられる。

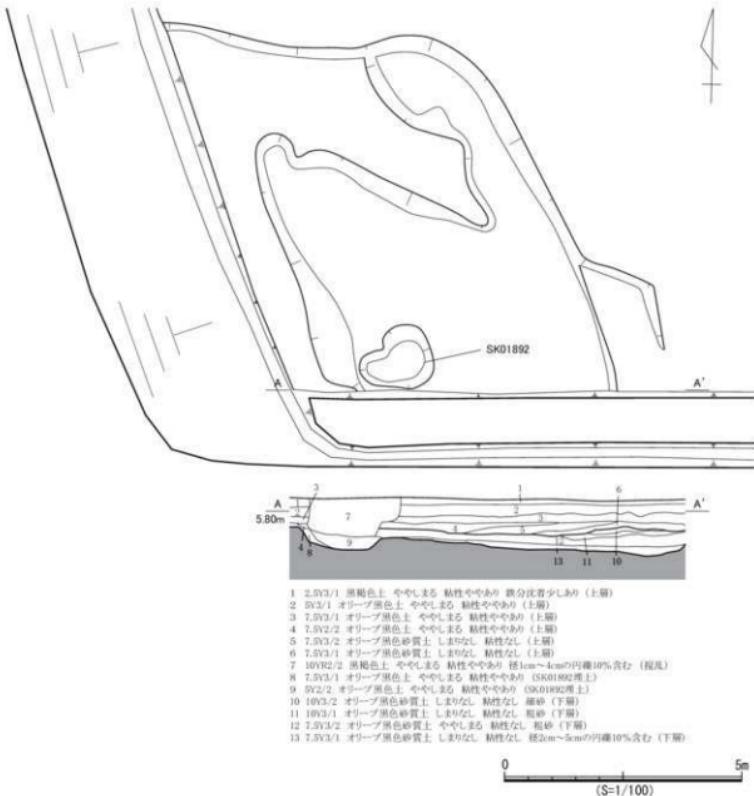


図285 NR002遺構図

NR002 (遺構: 図285、遺物: 図286)

検出状況 西部南西隅V層上面で検出した。08_3地点で検出した自然流路の一部である。西部では東壁面の立ち上がりが確認できたのみである。蛇行する自然流路の一部と考えられる。

形状 深さは約0.8m程度で、確認範囲での幅は7mを越える。

埋土 埋土は10層に分層した。そのうち1~7層と10~13層の上層・下層に分類可能で、主に下層には砂質土の堆積が顕著であり、NR001と堆積状況が類似する。上層は弥生時代中期~古墳時代、下層は縄文時代晚期~弥生時代前期に対応する。

遺物出土状況 30数点の縄文時代晚期後半~古墳時代前期の土器の小片が出土した。上層の上位層と下位層から出土しており、出土量が少ないがNR001と類似する状況である。

出土遺物 1点のみ図示できた。581は砲弾形の深鉢で、縄文時代晩期末頃~弥生時代前期前半の資料であろう。

時期 NR001と同様、縄文時代晚期後半以前から自然流路として位置していたが、弥生時代前期以降、堆積が進行し、古墳時代前期にほぼ埋没したと考えられる。

表21 自然流路一覧表

遺構番号	現場遺構番号	調査区画	検出層位	埋土	断面形状	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	新●○旧	時期	出土遺物	備考	挿図	図版	
NR001	08_B0332	HA14~J14	V上	51層	B	A5a1	(58.00)	(48.00)	(1.00)	(6.00)	4.40		縄文~古墳	H,J,K,P,S,T,W	277+278	27+28	
NR002	08_B0387	HS18	V上	13層	B	A1a1	(7.00)	(7.00)	0.25	(6.50)	0.50	SK01892>	縄文~古墳	H,J		285	-

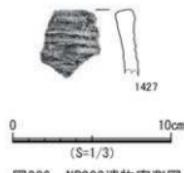


図286 NR002遺物実測図

8 IV層上面の遺構

検出状況・遺物出土状況 I b層を取り除いた後、IV層上面で検出した遺構が相当する。水田跡の他、溝状遺構、土坑を確認した。A地区の平成16年度~18年度の発掘調査では遺存状況はそれほど良好ではないが、中世~近世と推定される水田面を確認した。西部で確認した遺構の分布が希薄な上、A地区中最も隣接する07_14~15地点との水田面との連続性を見出すことが困難である。IV層上面の遺構出土及びI層から出土した古代以降の土器を表4に示した。総数は389点で、いずれも小片で図示可能な資料はわずかであった。一方、V~VII期の土器が6000点以上にのぼった。耕作によって、古代以降の土器とIV層及びV層上面のV~VII期の土器が搅拌された結果であろう。地形の傾斜は北西から南東に向かって傾斜している。確認できた溝の多くは、地形の傾斜とは異なり比較的南北方向に軸を整えているようにみえるが、断片的な確認にとどまった。隣接区の経過からみると検出面の削平が予想以上に進行していた可能性が高い。以上の状況から、IV層上面の遺構については断片的な資料提示しか報告することができない。

水田面の可能性があるものにST057・ST058があるが遺存状況が悪い。確認した遺構の大半が溝で

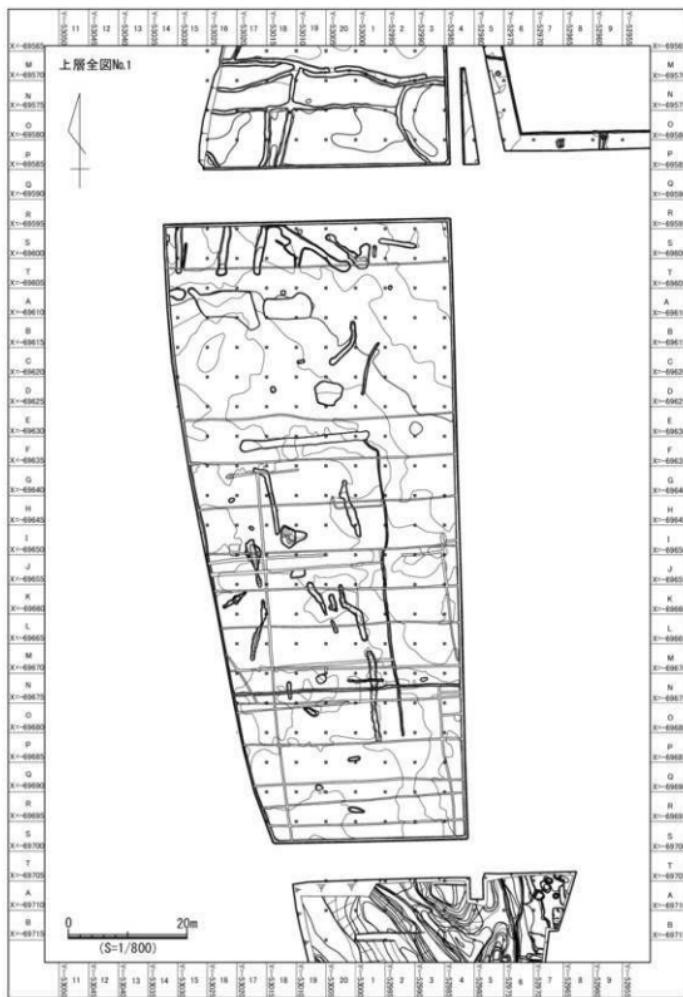


図287 IV層上面（第1面）造構図（1）

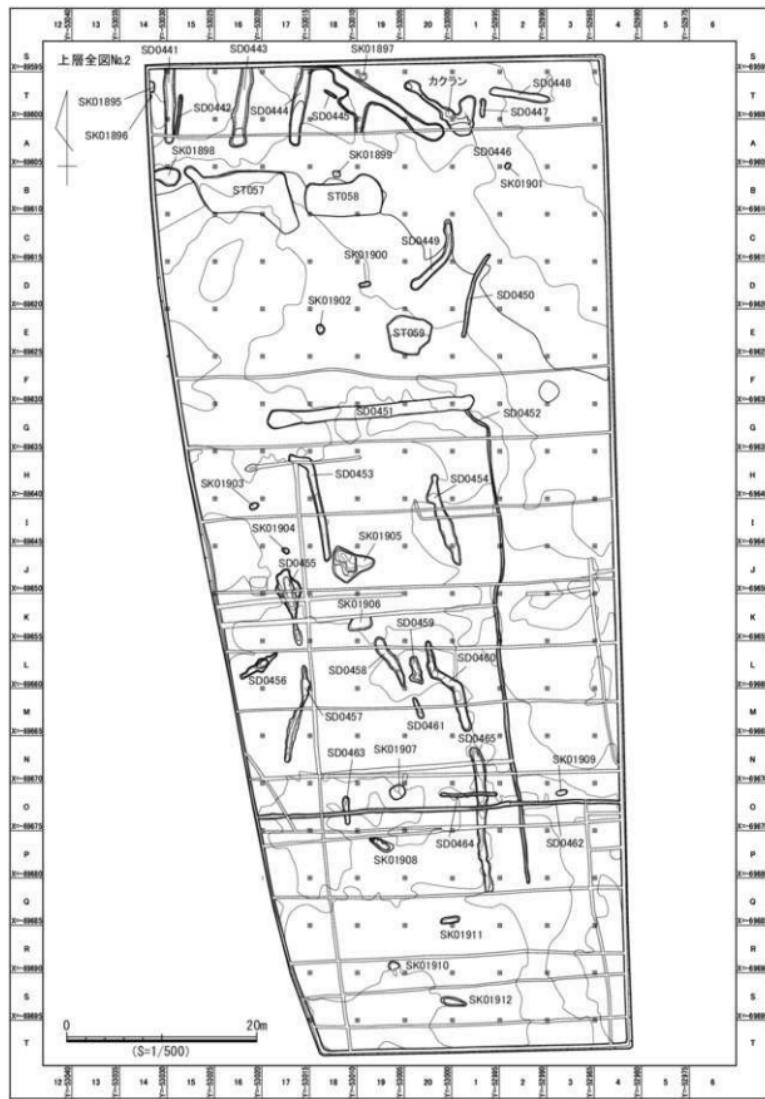


図288 IV層上面（第1面）造構図（2）

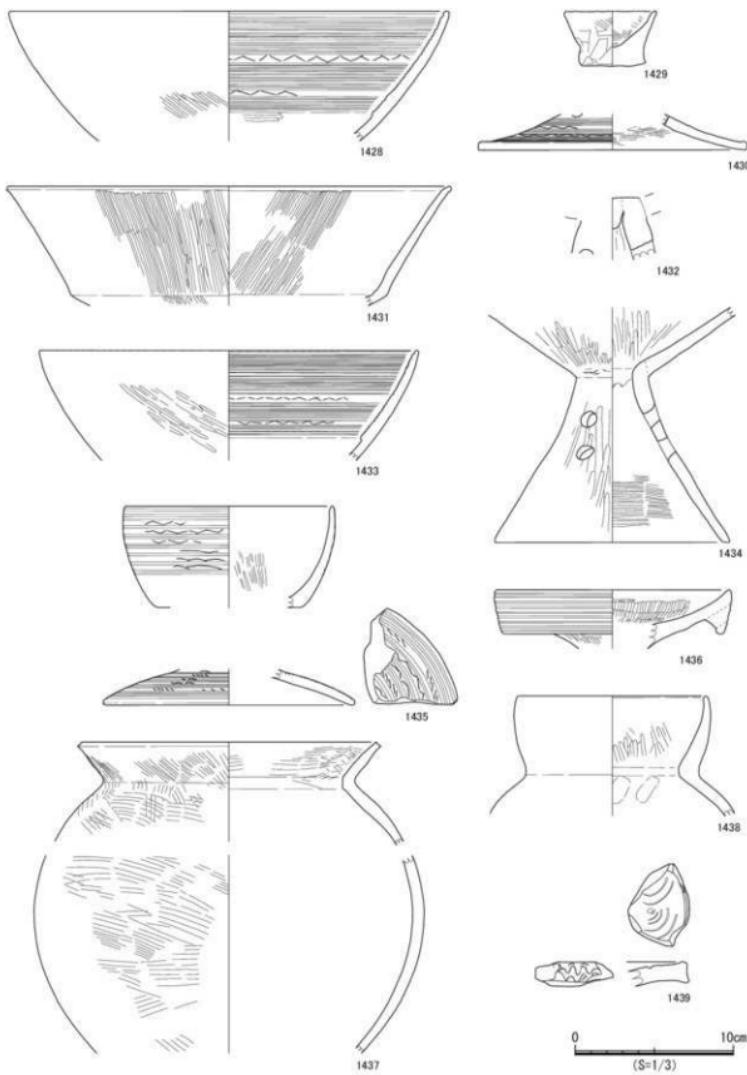


図289 IV層上面（第1面）遺構遺物実測図（1）

南北方向に伸びるものが多く、これらの溝（SD0441～SD0443・SD0453・SD0455・SD0457・SD0460・SD0465）はこれまで確認したA地区の構状遺構と類似する形状であるが、これらはV層上面で検出した遺構で整合するかは不明である。南北方向の溝（SD0448・SD0451・SD0464）が認められるが、密度が低く性格不明である。また、土坑（SK01901～SK01904・SK01910～SK01912）も性格不明で、なかには表土中から掘削された土坑を含む可能性がある。SK01898はST057西側に隣接し、杭が打ち込まれている。ST057・ST058に連関のある施設かもしれない。

出土遺物 古代以降の土器資料の図示資料はわずかにとどまったので、V～VII期の資料である程度、器形の判明する土器や縄文時代晩期の土器片も合わせて図示した。1431は高環B4類でVI期前半の資料であろう。1428・1433は高環C4d類で内面に多条沈線と山形文を施す。1430・1435は高環G3c類。1436は器台B4類。口縁端部下端を拡張して、多条沈線を施す。1439は壺口縁部片。内面に扇形文、端部に波状文がある。1441は内傾する口縁部に素文突帯のある資料で縄文時代晩期後半の資料。1442は須恵器の蓋。8世紀後半～9世紀初。1444は灰釉陶器の碗。9世紀代であろう。1445はII期の甕。1446・1447は擂鉢。ともに古瀬戸後IV期古にあたる。1448は板材。1449・1451・1454は芯持ち材を利用した杭で枝払い痕がある。1450は建築部材（杭か）で上端部を欠損している。芯持ち丸木材であるが、先端をほぞ状に加工している。全体に樹皮が残る。加工痕に刃こぼれがあり、鉄のチョウナで加工している。

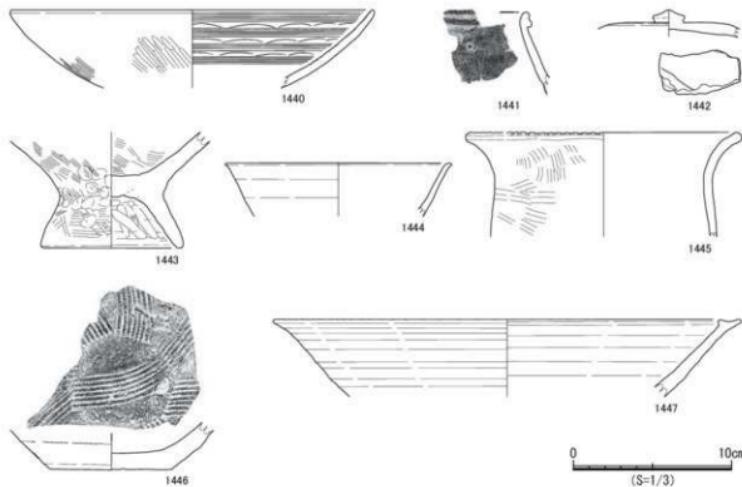


図290 IV層上面（第1面）遺構遺物実測図（2）

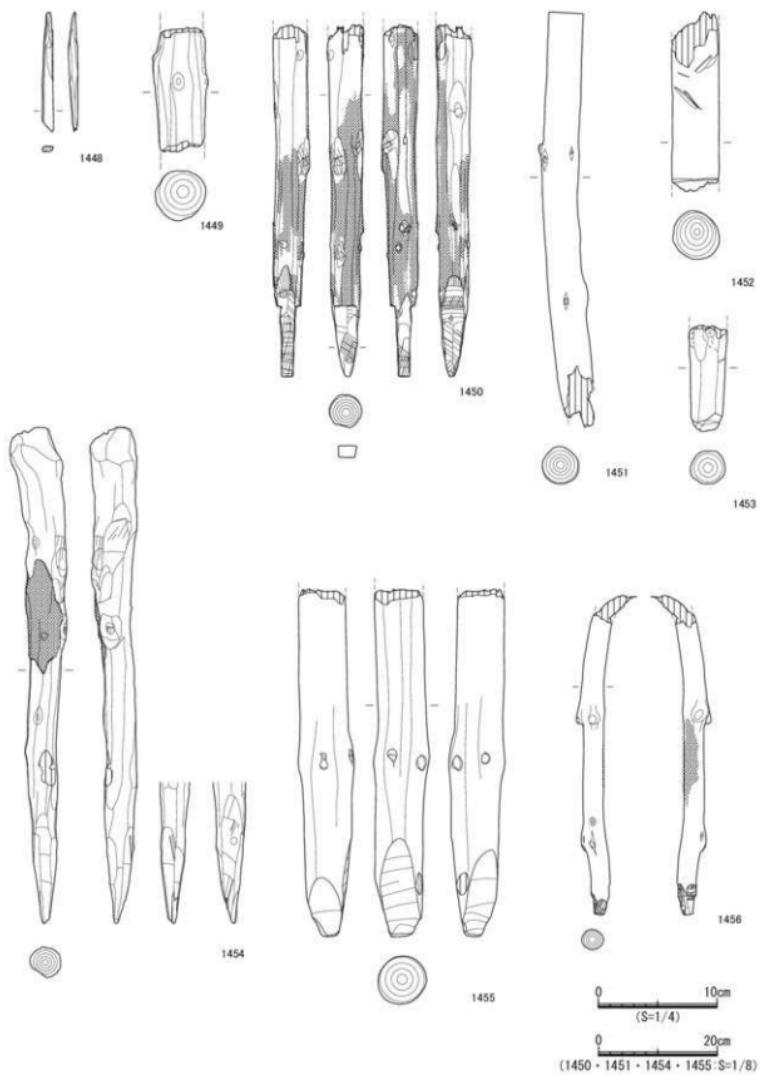


図291 SK01898遺物実測図

9 包含層出土資料

包含層(IV層)出土資料として、遺構出土の資料では出土量の少ない資料、または器形の判明する資料を中心に掲載した。

縄文時代 1457～1460は縄文時代晚期後半の資料。1457は口縁端部からやや離れた突带上にD字状の押引きを加える。1458は幅の狭い突帶上の間隔をおいた押引きが認められる。1460は低い素文突帶が2条認められる。

I期～IV期(弥生時代前期～中期) 1461は口縁部が短く外反するI期遠賀川系土器の壺。穿孔を有する。1462はI期の条痕文系土器である。口縁部が弱く外反し、端部に押引きがある。1463は底部の

SD050(上部)

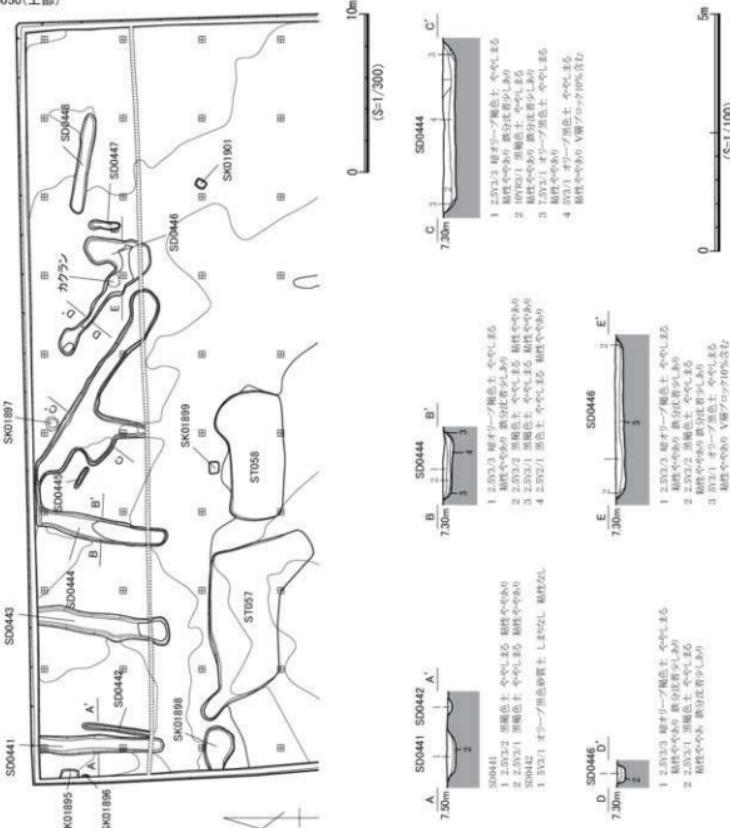


図292 SD0441・SD0442・SD0444・SD0446構造図

みが完存する資料だが、調整・胎土などからⅡ期に相当する壺の可能性が高い。底部に穿孔がある。1464は櫛描の流水文状の文様のある資料。Ⅱ～Ⅲ期と考えられる。1466はⅢ～Ⅳ期の壺であろう。外面に流水的な意匠がある。1465はⅣ期壺B類としたが、胴部上半の文様帯が減少して胴部中央の波状文と間隔があく資料。波状文を失えばⅤ期の壺A1類とも類似する。1467はⅣ期壺B類の胴部下半の破片。突带上に刻みがあり、本遺跡出土例としては唯一の例である。

V～Ⅶ期（弥生時代後期～古墳時代前期） 1468～1470・1473はV期の資料。1469は器形が不明の資料。低い脚台で、裾部に波状文がある。1472は把手。高坏の把手であろうか。1470は内面に扇形文と刺突文がある。1473は高坏A1類。口縁端部が凹面状となる。1483～1489までがVI～VII期の資料。1483は高坏C4d類の好例。脚部は透孔付近から強く内湾する。外面には打ち欠き底や二次的な焼成痕が認められる。1474・1475・1477・1478・1486は加飾のある高坏脚部。1474は内湾する脚部に直線文と山形文を施す。脚部に直線文・山形文を施す例として本遺跡出土例としてははじめての確認例。1477は直線文・山形文のほかに相対山形文・連続溝文のある例。連続溝文は相対山形文の間に充填される。A地区SZ002出土93で確認されたスタンプ文とは原本が異なる。1478は直線文のほかに刺突文・連弧文・山形文と多段化して多様な文様が認められる。1486は多重沈線と連弧文が4帯みられる。1485は壺B類の好例。口縁端部に強いナデ痕跡が残り、胴部は倒卵形である。1493はS字壺A類。1490は鉢E類の良好な資料。片口がつき、口縁端部に打ち欠きがある。1497は胴部下半の破片で壺とした資料。線刻が認められる。1482も壺脚部にやや斜格子状にもみえる線刻が認められる。

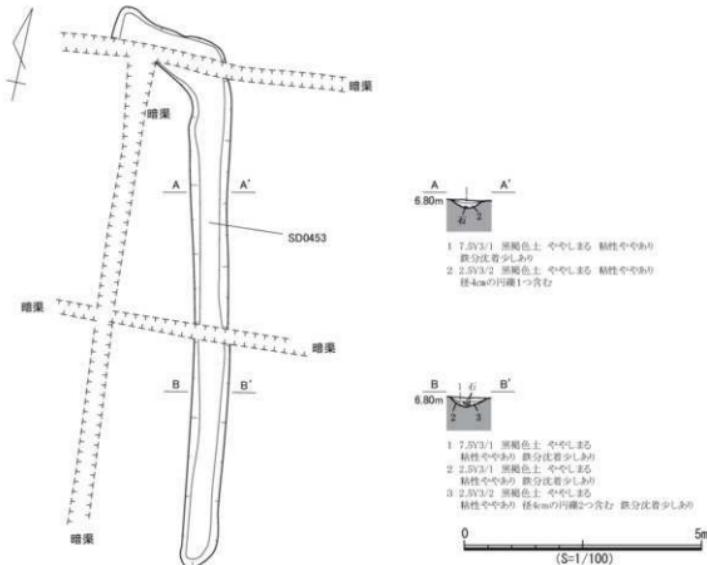


図293 SD0453遺構図

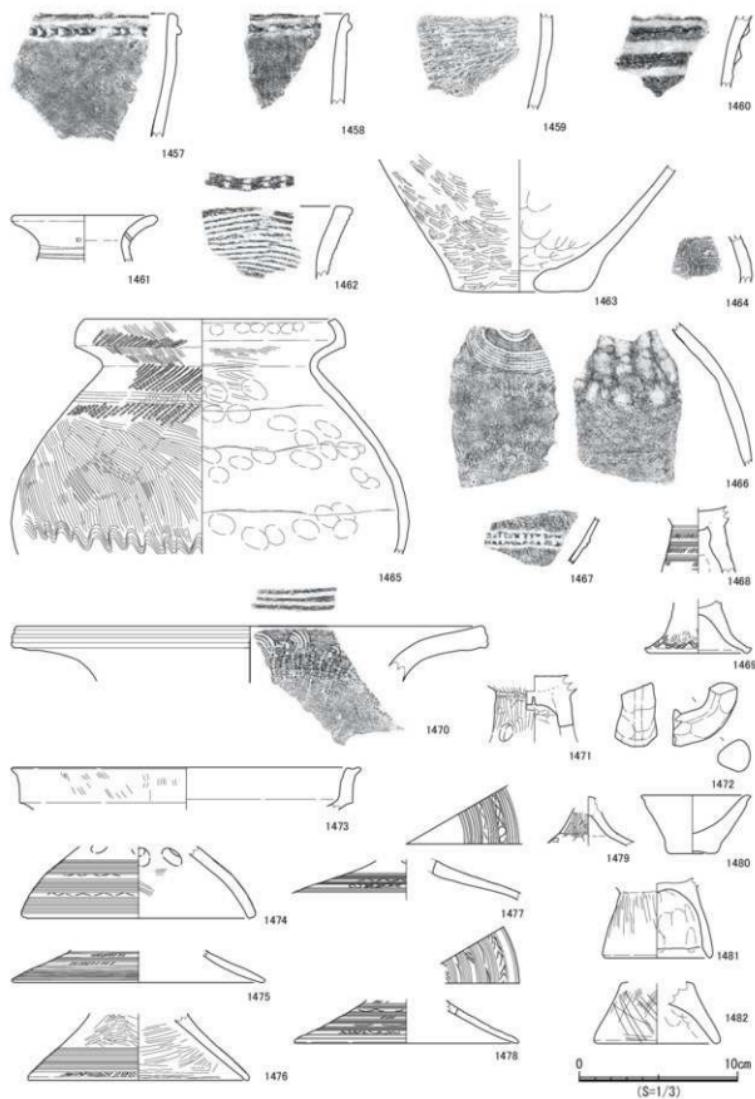


図294 包含層出土遺物実測図（1）

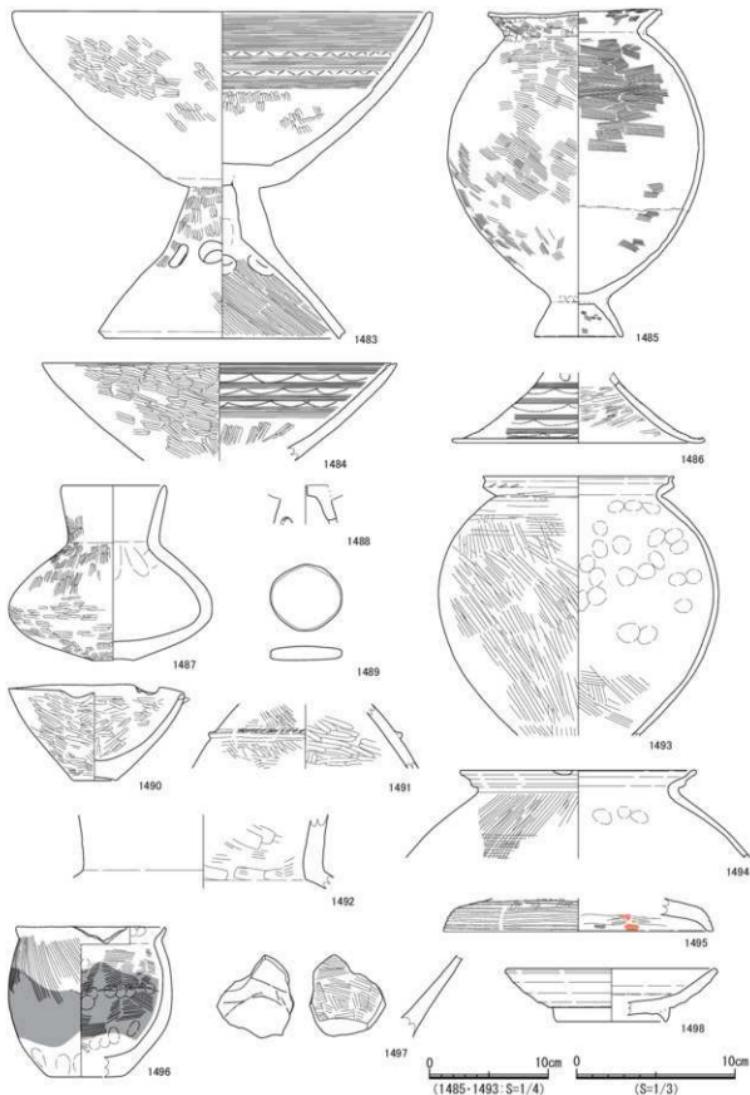


図295 包含層出土遺物実測図（2）

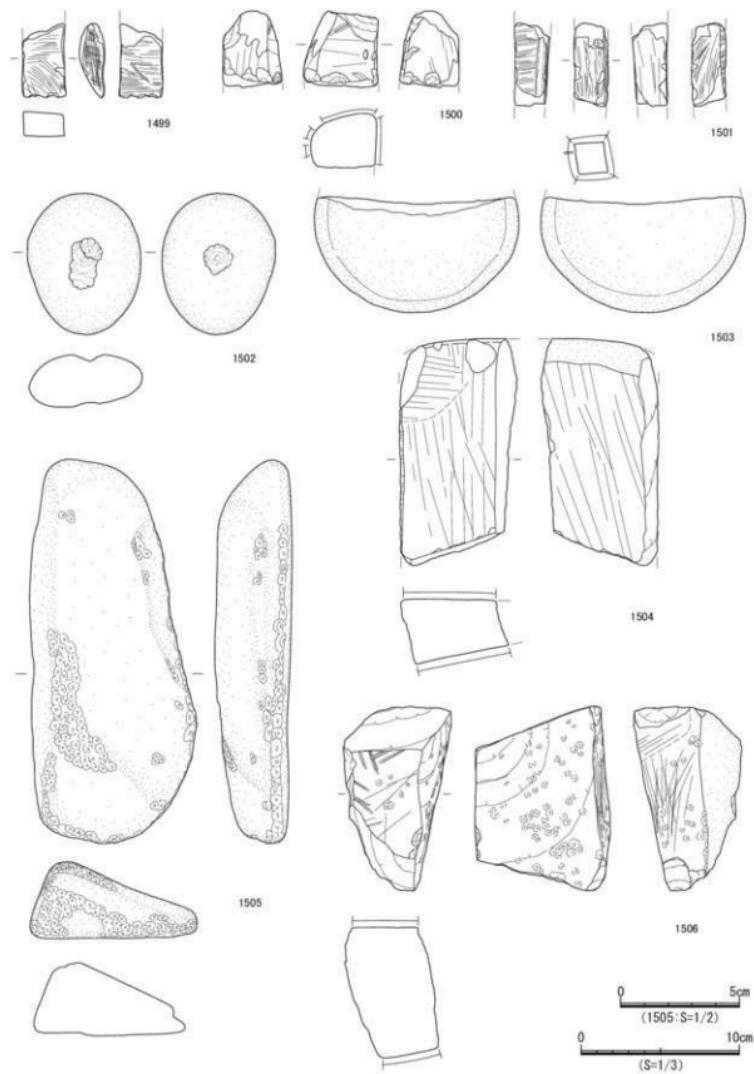


図296 包含層出土遺物実測図（3）

1494はS字甕C類。1489は土製の円盤。土器片を再加工したものではない。透孔は認められないが、蓋の可能性がある。胎土はVI～VII期の土器に類似する。

近世 1498は美濃窯丸皿で登窯第5小期。

石器 1499は凝灰岩製の砥石。1505は砂岩製の叩石類。1500は凝灰質砂岩製の砥石。1501は凝灰岩製の砥石。1502は砂岩製の圓石。1504・1506は砂岩製の砥石。1503は砂岩製の磨石。

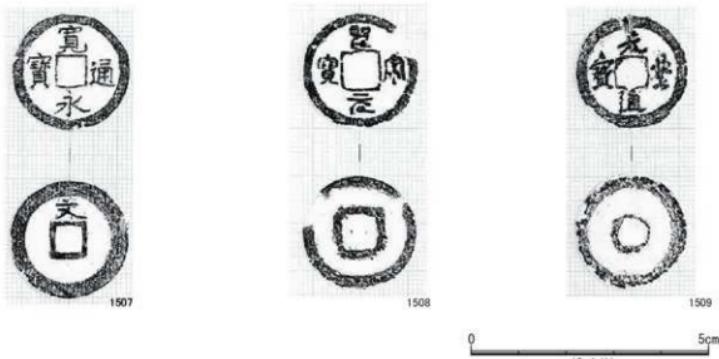


図297 包含層出土遺物実測図（4）

表22 I b 基底面検出溝状遺構一覧表

遺構番号	現地遺構番号	検査区画番号	検出層位	埋土	断面形状	上端 長軸	下端 長軸	深さ	新>●>旧	時期	出土遺物	種別	
SD0441	08_B0002	DT15	I b基 2層 B	A2n1	(7.70)	0.84	(7.50)	0.72	0.20	>SD0444	中近世	H,K,P,T	292
SD0442	08_B0004	DT15	I b基 2層 B	B2n1	4.30	0.30	4.10	0.10	0.10	>SD0444	中近世	H	292
SD0443	08_B0005	DT16	I b基 3層 E	A1n1	(8.40)	1.40	(8.20)	0.80	0.20	>SD01567, SK01562	中近世	H,P,S,T	—
SD0444	08_B0006	DT18～T22	I b基 3層 B	A1n1	(21.50)	1.50	(21.00)	1.10	0.20		中近世	H	292
SD0445	08_B0011	DT18	I b基 1層 A	A2n1	1.55	0.35	0.75	0.15	0.20		中近世	H	—
SD0446	08_B0067	DT20～ET1	I b基 2層 B	A1n1	13.00	0.60	12.50	0.30	0.20	>SK01661	中近世	H,P,T	292
SD0447	08_B0068	ET1	I b基 2層 B	A1n1	2.00	0.45	1.70	0.35	0.15		中近世	H,T	—
SD0448	08_B0009	ET1～T3	I b基 1層 A	A1n1	6.40	0.80	6.10	0.45	0.10		中近世	H,T	—
SD0449	08_B0018	HC20～D29	I b基 1層 A	A1n1	9.00	0.80	8.80	0.50	0.15		中近世	H,T	—
SD0450	08_B0019	ID1～F1	I b基 3層 B	A2n1	9.50	0.50	8.90	0.30	0.30		中近世	H	—
SD0451	08_B0024	HG17～G29	I b基 3層 E	B1n1	22.00	1.20	21.50	1.10	0.25	>SD0452	中近世	H,J,P,T	—
SD0452	08_B0033	HI～G2	I b基 2層 B	A2n1	55.00	0.30	54.50	0.20	0.20	SD0451, SD0462	中近世	H,K,P,T	—
SD0453	08_B0036	HH17～J18	I b基 3層 B	A1n1	12.00	0.90	11.50	0.50	0.20		中近世	H,K,P,T	293
SD0454	08_B0032	HR20～IK1	I b基 3層 B	A1n1	9.80	1.50	9.60	1.20	0.30		中近世	H,K,P,T	—
SD0455	08_B0045	HJ17～M17	I b基 1層 B	A1n1	8.20	1.00	0.70	0.13	0.30		中近世	H,K,P,T	—
SD0456	08_B0048	HL16～L17	I b基 1層 A	A1n1	4.60	1.10	4.30	0.70	0.25		中近世	H,P,T	—
SD0457	08_B0049	HL17～N17	I b基 5層 B	A2n2	10.00	1.00	9.50	0.85	0.20		中近世	H,P,T	—
SD0458	08_B0047	HL19～M19	I b基 2層 B	A1n1	5.60	1.00	0.40	0.60	0.15		中近世	H,P,T	—
SD0459	08_B0043	HL20	I b基 2層 B	A1n1	3.00	1.00	2.30	0.55	0.25		中近世	H,P,T	—
SD0460	08_B0042	HN1～L20	I b基 6層 B	A2n2	10.00	1.20	9.60	0.70	0.40		中近世	H,K,P,T	—
SD0461	08_B0050	HM2	I b基 1層 A	A1n1	2.30	0.55	2.10	0.35	0.20		中近世	H	—
SD0462	08_B0068	H018～T04	I b基 3層 B	A2n1	40.00	0.50	39.00	0.40	0.20	SD0465, SD0452	中近世	H,K,P,S,T	—
SD0463	08_B0053	H018	I b基 2層 B	A1n1	3.00	0.60	2.75	0.45	0.15		中近世	H,K,P,T	—
SD0464	08_B0056	H011～O29	I b基 2層 B	A2n1	5.00	0.30	4.80	0.24	0.20	>SD0465	中近世	H,T	—
SD0465	08_B0066	HN1～Q1	I b基 4層 B	A1n1	(15.20)	1.00	(15.00)	0.80	0.15	SD0464, SD0462	中近世	H,K,P,S,T	—

表23 I b基底面検出土坑一覧表

遺構番号	現場遺構番号	調査区画	検出層位	理土	平面形状	断面形状	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	新>●>旧	時期	出土遺物	辨認	図版
SK01895	08_B0001	DT15	I b基	1層 A	円形	A2a1	(1, 20)	(0, 40)	(0, 95)	(0, 40)	0, 10		中近世	H	—	
SK01896	08_B0003	DT15	I b基	1層 A	梢円形	A2a2	0, 50	(0, 50)	0, 35	(0, 20)	0, 15		中近世		—	
SK01897	08_B0012	DT19	I b基	1層 A	円形	A1a1	0, 60	0, 60	0, 80	0, 60	0, 20		中近世	H	—	
SK01898	08_B0015	IJ14~B15	I b基	2層 E	長梢円形	A1a1	(2, 75)	1, 75	(2, 50)	1, 50	0, 10		中近世	H, P, T, W	—	
SK01899	08_B0013	HB18	I b基	1層 A	円形	B2a2	0, 75	0, 60	0, 65	0, 55	0, 10		中近世	H	—	
SK01900	08_B0020	HB19	I b基	1層 A	梢円形	A1a1	1, 25	0, 50	1, 00	0, 35	0, 10		中近世	H, P, T	—	
SK01901	08_B0014	IB2	I b基	1層 A	円形	A1a1	0, 70	0, 55	0, 52	0, 40	0, 10		中近世	H, T	—	
SK01902	08_B0021	HE18	I b基	1層 A	梢円形	A1a1	1, 10	0, 90	0, 90	0, 65	0, 10		中近世	H	—	
SK01903	08_B0028	HI16	I b基	1層 A	円形	A1a1	1, 00	0, 70	0, 80	0, 50	0, 10		中近世	H	—	
SK01904	08_B0041	IJ17	I b基	2層 B	長梢円形	A1a1	0, 90	0, 60	0, 60	0, 40	0, 10		中近世	H	—	
SK01905	08_B0040	IJ18~J19	I b基	5層 B	不整長梢円形	B2b2	4, 30	2, 20	3, 50	2, 00	0, 30		中近世	H, P	—	
SK01906	08_B0046	IJ18~K19	I b基	2層 B	長梢円形	A1a1	2, 40	(1, 30)	2, 00	(1, 00)	0, 10		中近世	H	—	
SK01907	08_B0055	HO19	I b基	3層 B	長梢円形	A2a2	3, 20	2, 80	3, 00	2, 60	0, 40		中近世	H, K, P, T, W	—	
SK01908	08_B0059	HP19	I b基	3層 B	長梢円形	A1a2	(2, 50)	1, 00	(2, 45)	0, 90	0, 30		中近世	H, K, P	—	
SK01909	08_B0057	I03	I b基	1層 A	円形	A1a1	1, 15	0, 60	1, 05	0, 50	0, 15		中近世	H	—	
SK01910	08_B0067	HB19	I b基	2層 B	梢円形	A1a1	1, 05	0, 85	1, 00	0, 80	0, 15		中近世	H	—	
SK01911	08_B0061	HB20	I b基	2層 B	梢円形	A1a1	1, 15	0, 90	1, 10	0, 85	0, 15		中近世	H, P, T	—	
SK01912	08_B0069	HS1~IS1	I b基	4層 B	長梢円形	A1a1	2, 80	0, 75	2, 00	0, 50	0, 22		中近世	H	—	

表24 水田区画一覧表

遺構番号	現場遺構番号	調査区画	検出層位	平面形状	下端長軸	下端短軸	中央部高(m)	新>●>旧	出土遺物	辨認	図版
ST057	08_B0016	HB15~B17	I b基	不整長方形	9, 20	4, 20	6, 87		H, K, P, T	—	—
ST058	08_B0017	HB18~B19	I b基	不整長方形	3, 50	3, 40	6, 92		H, P, T	—	—
ST059	08_B0022	HB19~E20	I b基	不整長方形	8, 60	8, 00	6, 80		H, K, P, T	—	—

報告書抄録

ふりがな	あらおみなみいせきびーちく					
書名	荒尾南遺跡B地区Ⅰ					
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書					
シリーズ番号	第121集					
編著者名	林直樹、藤田英博、宗宮隆司、三島誠					
編集機関	岐阜県文化財保護センター					
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 Tel058-237-8550					
発行年月日	西暦2012年2月29日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間 調査面積	調査原因
荒尾南遺跡	岐阜県 大垣市 荒尾町 桧町	21202	08568	35° 37' 02"	136° 58' 40"	20060508~20070122 20070423~20071214 20080507~20081212 20090428~20100129 15,396m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
荒尾南遺跡	集落跡 その他の墓	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世	堅穴住居跡 24軒 方形周溝墓 36基 掘立柱建物跡 7棟 溝状遺構 275条 土坑 1080基 など	縄文土器、弥生土器・土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶器類、石器・石製品、金属製品など	弥生時代中期の方形周溝墓群、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡を確認	
要約	荒尾南遺跡B地区は、主に縄文時代晚期から古墳時代前期の遺構を確認した遺跡である。弥生時代中期の方形周溝墓群は、A地区からB地区にかけて、おおよそ南北方向に幾筋かの列をしており、当地域における一大墓域を形成している。また、弥生時代後期頃に始まる集落の形成は、弥生時代末から古墳時代初頭において最盛期を迎える、大規模な集落となる。美濃地方西部の弥生時代から古墳時代前期における、中心的な集落のひとつであったと思われる。					

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第121集

荒尾南遺跡B地区 I

(第1分冊)

2012年2月29日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 新日本法規出版株式会社